

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集

上八木田 I 遺跡発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

分 冊 2

(住居跡以外の遺構・遺構外出土遺物・まとめ)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集

上八木田 I 遺跡発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

分 冊 2

(住居跡以外の遺構・遺構外出土遺物・まとめ)

〈分冊 2〉

本文目次

2	土坑	1
3	陥し穴	66
4	土器埋設遺構	73
5	炉跡	74
6	焼土遺構	75
7	遺構外出土遺物	86
	(1) 土器・土製品	86
	(2) 石器・石製品	146
	(3) 鉄器	175
V	まとめ	235
1	遺構	235
	(1) 竪穴住居跡	235
	(2) 土坑	255
	(3) 陥し穴	259
	(4) 土器埋設遺構	261
	(5) 焼土遺構	262
2	上八木田 I 遺跡の集落の変遷	262
3	遺物	264
	(1) 土器	264
	(2) 石器	287
4	上八木田遺跡群について	291

〈分冊 1 掲載内容〉

I	調査に至る経過
II	野外調査方法と室内整理
III	遺跡の位置と環境
IV	検出された遺構と遺物
1	竪穴住居跡
	(1) 縄文時代の竪穴住居跡
	(2) 平安時代の竪穴住居跡

〈分冊 3 掲載内容〉

写真図版
遺跡全景・遺構
遺物

付篇 1	上八木田 I 遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析	297
2	上八木田 I 遺跡の縄文時代中期末葉の住居跡の炉の構築土と土器胎土の蛍光 X 線分析	299
3	上八木田 I 遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分析	301
4	上八木田 I 遺跡出土種子同定報告	310
5	上八木田 I 遺跡出土鉄器の金属学的解析	313
6	上八木田 I 遺跡 X I C 6 b 住居跡出土繊維について	318

図 版 目 次

<p>第 290 ~ 311 図 土坑 (1) ~ (22) 2</p> <p>第 312 ~ 321 図 土坑内出土遺物 (1) ~ (10) 56</p> <p>第 322 ~ 324 図 陥し穴 (1) ~ (3) 67</p> <p>第 325 図 陥し穴出土遺物 72</p> <p>第 326 図 VII C h 土器埋設遺構・埋設土器 73</p> <p>第 327 図 炉跡・出土遺物 74</p> <p>第 328 ~ 332 図 焼土遺構 (1) ~ (5) 77</p> <p>第 333 図 焼土遺構出土遺物 85</p> <p>第 334 図 突起名称概念図 90</p> <p>第 335 図 遺構外出土遺物 土器(1) 第I群・第II群1~2類 98</p> <p>第 336 図 遺構外出土遺物 土器(2) 第II群3~5類 99</p> <p>第 337 ~ 350 図 遺構外出土遺物 土器(3)~(16) 第II群6類 100</p> <p>第 351・352 図 遺構外出土遺物 土器(17)~(18) 第II群7類 114</p> <p>第 353 図 遺構外出土遺物 土器(19) 第II群8類 116</p> <p>第 354 図 遺構外出土遺物 土器(20) 第II群9類・第III群 117</p> <p>第 355 図 遺構外出土遺物 土器(21) 第III群~第VI群 118</p> <p>第 356 図 遺構外出土遺物 土器(22) 第I群・第II群1類 119</p> <p>第 357 図 遺構外出土遺物 土器(23) 第II群1類 120</p> <p>第 358 図 遺構外出土遺物 土器(24) 第II群1~2類 121</p> <p>第 359 図 遺構外出土遺物 土器(25) 第II群2~3類 122</p> <p>第 360 図 遺構外出土遺物 土器(26) 第II群3類 123</p> <p>第 361 図 遺構外出土遺物 土器(27) 第II群4~6類 124</p> <p>第 362 ~ 369 図 遺構外出土遺物 土器(28)~(35) 第II群6類 125</p> <p>第 370・371 図 遺構外出土遺物 土器(36)・(37) 第II群7類 133</p> <p>第 372 図 遺構外出土遺物 土器(38) 第II群7~8類 135</p> <p>第 373 図 遺構外出土遺物 土器(39) 第II群8類 136</p> <p>第 374 図 遺構外出土遺物 土器(40) 第II群9類 137</p> <p>第 375 図 遺構外出土遺物 土器(41) 第III群1類 138</p> <p>第 376 図 遺構外出土遺物 土器(42) 第III群1~2類 139</p> <p>第 377 図 遺構外出土遺物 土器(43) 第III群3類~第V群1類 140</p> <p>第 378 図 遺構外出土遺物 土器(44) 第V群2類~第VII群 138</p>	<p>第 379・380 図 遺構外出土遺物 土器(45)・(46) 底部資料(1)・(2) 142</p> <p>第 381・382 図 遺構外出土遺物 小型土器・土製品(1)・(2) 144</p> <p>第 383 図 器種別石器出土割合 146</p> <p>第 384 図 石鏃分類概念図 147</p> <p>第 385 図 石鏃基部形状による分類別出土割合 149</p> <p>第 386 図 石鏃側辺形状による分類別出土割合 149</p> <p>第 387 図 石鏃石材別割合 149</p> <p>第 388 図 石鏃重量分布 150</p> <p>第 389 図 尖頭器様石器長幅相関図 151</p> <p>第 390 図 尖頭器様石器重量分布 151</p> <p>第 391 図 尖頭器様石器と石鏃の先端角の対比 151</p> <p>第 392 図 石匙分類概念図 152</p> <p>第 393 図 石匙分類別割合 153</p> <p>第 394 図 石匙石材別割合 153</p> <p>第 395 図 石筥・打製石斧長幅相関図 155</p> <p>第 396 図 石筥重量分布 155</p> <p>第 397 図 ビエス・エスキーユ長幅相関図 155</p> <p>第 398 図 ビエス・エスキーユ重量分布 155</p> <p>第 399 図 不定形石器 I 類重量分布 157</p> <p>第 400 図 不定形石器 I 類分類概念図 157</p> <p>第 401 図 不定形石器 I 類分類別割合 157</p> <p>第 402 図 不定形石器 I 類石材別割合 157</p> <p>第 403 図 磨製石斧石材別割合 159</p> <p>第 404 図 石錘分類別割合 160</p> <p>第 405 図 石錘石材別割合 160</p> <p>第 406 図 石錘重量分布 160</p> <p>第 407 図 敲磨器類 A 群分類基準概念図 162</p> <p>第 408 図 敲磨器類 A 群分類別割合 165</p> <p>第 409 ~ 411 図 敲磨器類 A 群重量分布 (I 類) ~ (III 類) 165</p> <p>第 412 図 敲磨器類 A 群石材別割合 167</p> <p>第 413 図 敲磨器類 A 群磨面幅の分布 168</p>
--	--

第 414	図	敲磨器類B群長幅相関図	170
第 415	図	敲磨器類B群重量分布	170
第 416	図	敲磨器類B群石材別分布	171
第 417	図	半円状花崗岩質岩計測値分布	172
第 418	図	耳飾り幅分布	173
第 419 ~ 421	図	遺構外出土遺物 石鏃(1)~(3)	176
第 422	図	遺構外出土遺物 石鏃(4)・尖頭器(1)	179
第 423	図	遺構外出土遺物 尖頭器(2)・尖頭器様石器・石鏃(1)	180
第 424	図	遺構外出土遺物 石鏃(2)・石匙(1)	181
第 425 ~ 429	図	遺構外出土遺物 石匙(2)~(6)	182
第 430	図	遺構外出土遺物 石鏃(1)	187
第 431	図	遺構外出土遺物 石鏃(2)・ピエス・エスキュー	188
第 432 ~ 439	図	遺構外出土遺物 不定形石器I類(1)~(8)	189
第 440	図	遺構外出土遺物 不定形石器II~III類(9)	197
第 441	図	遺構外出土遺物 不定形石器IV類(1)	198
第 442	図	遺構外出土遺物 不定形石器IV類(2)・V類	199
第 443	図	遺構外出土遺物 不定形石器VI~VII類・磨製石斧(1)	200
第 444	図	遺構外出土遺物 磨製石斧(2)	201
第 445	図	遺構外出土遺物 磨製石斧(3)・打製石斧	202
第 446 ~ 450	図	遺構外出土遺物 石鏟(1)~(5)	203
第 451	図	遺構外出土遺物 石鏟(6)・敲磨器類A群(1)	208
第 452 ~ 466	図	遺構外出土遺物 敲磨器類A群(2)~(16)	209
第 467 ~ 472	図	遺構外出土遺物 敲磨器類B群(1)~(6)	224
第 473	図	遺構外出土遺物 石皿・台石類(1)	230
第 474	図	遺構外出土遺物 石皿・台石類(2)・砥石	231

第 475	図	遺構外出土遺物 礫器・石核・石製品(1)	232
第 476	図	遺構外出土遺物 石製品(2)	233
第 477	図	遺構外出土遺物 石製品(3)・鉄器	234
第 478	図	住居跡平面形名称概念図	236
第 479	図	A区南西斜面とB区西尾根地区の遺構分布	237
第 480	図	B区東尾根地区の遺構分布	238
第 481	図	縄文時代前期から中期初頭の住居跡集成図	239
第 482	図	縄文時代前期から中期初頭の住居跡柱穴数と床面積の関係	248
第 483	図	縄文時代前期後葉から中期初頭の住居跡計測値分布	249
第 484	図	縄文時代中期末葉の住居跡群	252
第 485	図	土坑開口部計測値分布	256
第 486	図	土坑深さ計測値分布	256
第 487	図	形状別土坑分布図	257
第 488	図	底面に施設を有する土坑	260
第 489	図	第II群3類土器に類似する資料	266
第 490	図	第II群6類土器器形タイプとその割合	267
第 491	図	第II群6類土器の計測値	268
第 492	図	第II群6・7類土器の地文と他遺跡との比較	269
第 493	図	第II群6類土器相互の関係	270
第 494 ~ 496	図	遺構共伴土器(1)~(3)	276
第 497 ~ 501	図	縄文時代前期の土器集成(1)~(5)	279
第 402・503	図	土器出土状況(1)・(2)	285
第 504	図	石錘重量分布割合	287
第 505	図	石器の器種構成割合	290

表 目 次

第 6 ~ 10 表	焼土遺構観察表(1)~(5)	76
第 11 表	グリッド別石器出土量	86
第 12 表	石器出土点数	146
第 13 表	石鏃基部形状による分類別出土点数	149
第 14 表	石鏃側辺形状による分類別出土点数	149

第 15 表	石匙分類別出土点数	153
第 16 表	不定形石器I類分類別出土点数	157
第 17 表	石鏟分類別出土点数	160
第 18 表	敲磨器類A群分類別出土点数	165
第 19 表	敲磨器類B群分類別出土点数	169

第 20 表	時期別住居跡検出数	236
第 21 表	縄文時代前期から中期初頭の住居跡の傾向	247
第 22 表	偏平な自然礫を伴う住居跡	248
第 23 表	大形・中形住居跡	250
第 24 表	大形の土坑	258

第 25 表	陥し穴分類表	261
第26～28表	竪穴住居跡一覧表(1)～(3)	320
第29・30表	土坑一覧表(1)・(2)	323
第31～55表	不登載石器一覧表	325

2. 土 坑

ⅣD 8 c 土坑 (遺構番号201)

遺構 (第290図、写真図版106)

A区南斜面に位置する。第Ⅲ層暗褐色土層上面で検出した。平面形は小判形で、長軸方向はN-36°-Eである。規模は開口部径120×140cm、底部径70×115cm、深さ65cmである。壁土は第Ⅲ層暗褐色土～第Ⅴ層暗褐色土で、ほぼ直立する。埋土は4層に分けられ、人為堆積の様相を示す。底面は平坦で、ほぼ水平である。遺物は出土していない。

時期 検出面から縄文時代に属するものと推定される。

ⅣD 0 c 土坑 (遺構番号202)

遺構 (第290図、写真図版106)

A区南斜面に位置する。ⅣD 0 c 住居跡の埋土を切って構築される。平面的な検出ができず、同住居の精査時に土層断面で確認できた。平面形は円形で、壁は直立気味に立ち上がった後大きく外反する。規模は開口部径100×102cm、底部径80×86cm、深さ72cmである。埋土は4層に分けられ、ⅣD 0 c 住居跡の炉の焼土が縞状に流れ込んで堆積している。自然堆積と考えられる。底面は平坦で、ほぼ水平である。遺物は、重複する住居跡の遺物として取り上げた可能性はあるが、本遺構に属するものはない。

時期 検出面・重複関係・埋土から、縄文時代に属するものと推定される。

ⅤD 1 d 土坑 (遺構番号203)

遺構 (第290図、写真図版106)

A区南斜面に位置する。暗褐色土層上面で、黒褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形で、断面形は開口部で外反するフラスコ状である。壁土は上位は崩れやすい暗褐色土、下位は基盤層である黄褐色土である。規模は、開口部径115cm、底部径115cm、頸部径105cm、深さ60cmである。上位は黒褐色土、中位は黒色土が堆積し、下位と壁際は崩落土を混入する。自然堆積の様相を示す。底面は大きくうねるような凹凸があり、最大比高20cmである。

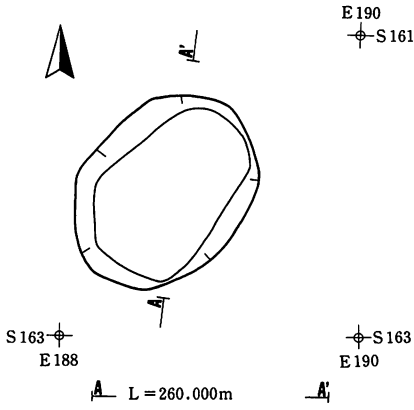
遺物 埋土上位から、LR単節斜縄文と無文の縄文土器片2点出土している。図示は割愛した。

時期 検出面・形状・出土遺物から縄文時代に属するものと推定される。

ⅥD 6 d 土坑 (遺構番号204)

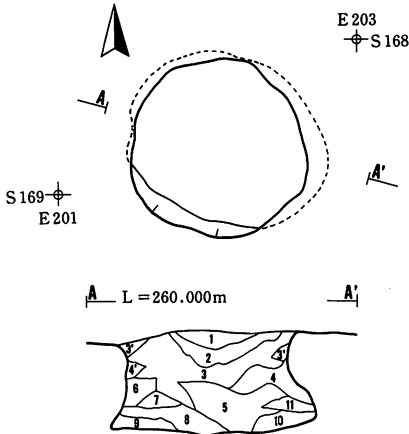
遺構 (第290図、写真図版107)

西尾根南西麓の平坦部に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は歪な円形で、壁は



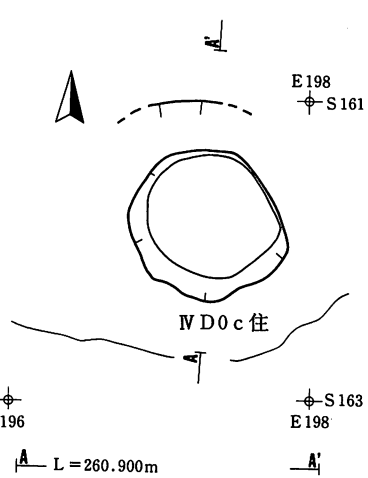
1. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりなし。黄褐色土を粒状に含む。
2. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりあり。灰黄褐色土、黄褐色土を含む。
2'は、2層よりやや明るい。
3. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりなし。黄橙色土、黒色土を含む。
4. 10Y R % 褐色土 しまりあり。にぶい黄褐色土をブロック状に含む。
5. 10Y R % 褐色土 しまりあり。黒褐色土をブロック状に含む。
6. 10Y R % 黄褐色土 しまりあり。黒褐色土をブロック状に含む。

IV D 8 c 土坑



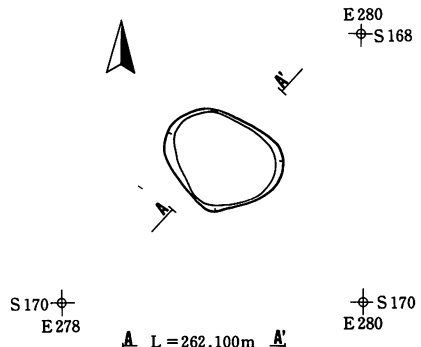
1. 7.5Y R% 黒褐色土 粘土質土。しまりあり。
2. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりあり。
3. 7.5Y R% 黒色土 しまりなし。褐色土をブロック状に含む。
3'は、褐色土を含まない。
4. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。褐色土を粉末状に含む。
4'は、4層より褐色土が多い。
5. 7.5Y R% 黒色土 しまりなし。下位に褐色土を含む。
6. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。褐色土を粉末状に含む。
7. 7.5Y R% 黒色土 しまりなし。褐色土を粉末状に多く含む。
8. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。褐色土を粉末状に多く含む。
9. 7.5Y R% 橙色土 しまりなし。褐色土を粉末状に多く含む。
10. 7.5Y R% 明褐色土 中央部に黒色土を含む。
11. 7.5Y R% 黒褐色土

IV D 1 d 土坑



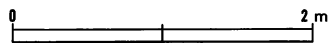
1. 7.5Y R% 黒色土 しまりなし。
2. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。炭化物、褐色土、暗褐色土を含む。
3. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。炭化物、暗褐色土を含む。
4. 7.5Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。下位に褐色土を少量含む。
5. 7.5Y R% 暗褐色土 固さ不均一。褐色土を含む。
6. 7.5Y R% 褐色土

IV D 0 c 土坑



1. 7.5Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。黄褐色土を含む。
2. 10Y R % 黒褐色土 しまりあり。褐色土をブロック状に含む。
3. 10Y R % 褐色土 ややしまりあり。

IV D 6 d 土坑



第290図 土坑 (1)

ほぼ直立する。規模は、開口部径60×80cm、底部径57×70cm、深さ20cmである。埋土は、暗褐色土を主体とする。底面は、北東四半部にやや傾斜する。遺物は出土していない。

時期 検出面から縄文時代に属するものと推定される。

VI D 7 e 土坑 (遺構番号205)

遺構 (第291図、写真図版107)

西尾根南西麓の平坦部に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は歪な円形で、断面形はフラスコ状となる。規模は、開口部径110cm、底部径124×130cm、深さ70cmである。埋土は、黒色土を主体とする。底面は、南西方向にやや傾斜する。遺物は出土していない。

時期 検出面・形状から縄文時代に属するものと推定される。

VI D 7 i 土坑 (遺構番号206)

遺構 (第291図、写真図版107)

西尾根南西麓の平坦部に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は小判形で、長軸方向はN-40°-Wである。東壁はほぼ直立し、西壁は外傾する。規模は、開口部径65×117cm、底部径33×70cm、深さ26cmである。埋土は、5層に分けられるが、3、4、5層は崩落土を含む。底面は、凹凸があり、灰が付着している。

遺物 (第312図、写真図版220図)

1274は土器底面であるが木葉痕が観察される。主葉脈が深く残る。本遺跡では木葉痕は稀有である。他に縄文土器が2片出土している。

時期 検出面・出土土器から縄文時代に属するものと推定される。

VI D 8 a 土坑 (遺構番号207)

遺構 (第291図、写真図版107)

西尾根南西麓の平坦部に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径70cm、底部径55cm、深さ22cmである。埋土は、黒褐色土を主体に、崩落土を僅かに含む。底面は、ほぼ平坦である。

遺物 埋土から縄文前期の土器の底部破片が2点出土しているが、図示は割愛した。

時期 検出面・出土土器から縄文時代に属するものと推定される。

VID 8 a - 2 土坑 (遺構番号208)

遺構 (第291図、写真図版108)

西尾根南西麓の平坦部に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は円形で、壁はやや外傾する。規模は、開口部径80cm、底部径70cm、深さ14cmである。埋土は、黒褐色土を主体に、崩落土を僅かに含む。底面は、ほぼ平坦である。VID 8 a 土坑と埋土・形状が類似し、同時期で同性格のものかと考えられる。遺物は出土していない。

時期 検出面・埋土から縄文時代に属するものと推定される。

VID 8 e 土坑 (遺構番号209)

遺構 (第291図、写真図版108)

西尾根南麓の平坦部に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径75×85cm、底部径65×77cm、深さ16cmである。埋土は黒褐色土の単層である。底面は、基盤層である黄褐色土でやや東側に傾斜する。遺物は出土していない。

時期 検出面から縄文時代に属するものと推定される。

VID 8 h 土坑 (遺構番号210)

遺構 (第292図、写真図版108)

西尾根南西麓の平坦部に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は円形で、西壁はほぼ直立、東壁はやや内傾気味である。規模は、開口部径 107 × 115 cm、底部径90 × 100 cm、深さ38cmである。埋土は、黒褐色を主体に、崩落土を僅かに含む。底面は、中央部がやや窪む。

遺物 (第312図、写真図版220)

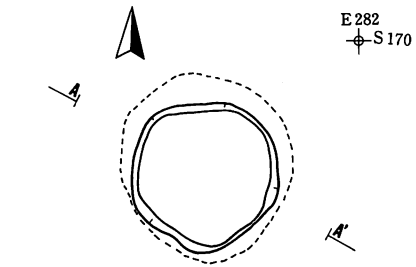
埋土から1275が³1点出土したのみである。

時期 検出面から縄文時代に属するものと推定される。

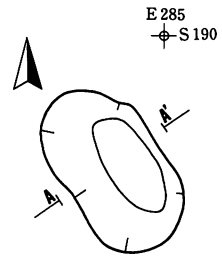
VID 9 e 土坑 (遺構番号211)

遺構 (第292図、写真図版108)

西尾根南西麓の平坦部に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は小判形で、長軸方向はN-60°-Wである。壁は、一部オーバーハング気味になる部分もあるが³、ほぼ直立する。規模は、開口部径 125 × 230 cm、底部径 115 × 220 cm、深さ33cmである。埋土は、黒褐色土を主体とするが³、全体に焼土粒を含み固く締まっていて、VID 8 e 住居跡の埋土に酷似する。底面は、ほぼ水平で平坦である。



E 282
⊕ S 170



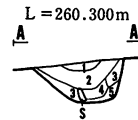
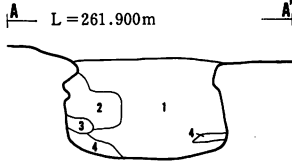
E 285
⊕ S 190

S 172 ⊕
E 280

⊕ S 172
E 282

S 191 ⊕
E 284

⊕ S 191
E 285

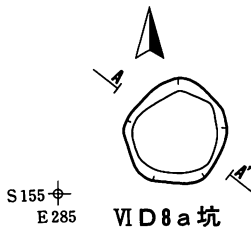


1. 7.5Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。小角礫を含む。
2. 10Y R% 黒褐色土 褐色土を含む。
3. 10Y R% 黒褐色土 固くしまっている。
4. 10Y R% 褐色土 ややしまる。黒色土を含む。

1. 10Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。草木根あり。
2. 10Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。黄褐色土を含む。
3. 10Y R% 暗褐色土
4. 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。褐色土、黄褐色土(崩落土)を含む。
5. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。黄褐色土を粒状に含む。

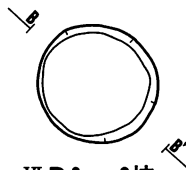
VID7e 土坑

VID7i 坑



S 155 ⊕
E 285

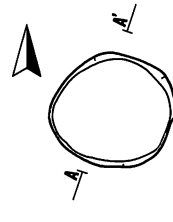
VID8a 坑



E 288
⊕ S 154

⊕ S 155
E 288

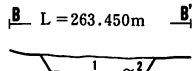
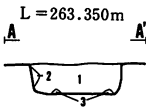
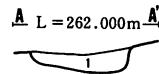
VID8a-2 坑



E 287
⊕ S 171

S 172 ⊕
E 285

⊕ S 172
E 287



1. 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。黄褐色土粒を含む。

VID8e 土坑

A...A'

1. 7.5Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。褐色土をブロック状に含む。
2. 10Y R% 褐色土 ややしまりあり。崩落土。
3. 10Y R% 褐色土 しまりなし。黒色土を含む。

B...B'

1. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりあり。黄褐色土(崩落土)を含む。
2. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。黄褐色土(崩落土)を含む。

VID8e 土坑・VID8a-2 土坑



遺物 (第312図、写真図版221)

1277は組縄縄文に類似する。図示した他に、埋土から木目状燃糸文、単節斜縄文など縄文時代前期の土器小片20点程(230g)が出土した。

時期 検出面・埋土から縄文時代前期に属するものと推定される。

VI D 0 b 土坑 (遺構番号212)

遺構 (第292図、写真図版109)

西尾根西斜面に位置する。暗褐色土層下位で検出した。平面形は楕円形で、長軸方向はN-4°-Wである。規模は開口部径102×150cm、底部径78×124cm、深さ24cmである。壁土は黄褐色土と暗褐色土の混土で、やや外傾する。埋土は3層に分けられるが、小角礫を混入する暗褐色土を主体とする。底面は、中央部がやや窪み、全体として斜面に沿って傾斜する。遺物は出土していない。

時期 検出面から縄文時代に属するものと推定される。

VI D 0 d 土坑 (遺構番号213)

遺構 (第292図、写真図版109)

西尾根南西斜面に位置する。暗褐色土層で検出した。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は開口部径105cm、底部径95cm、深さ50cmである。埋土は、締まりを欠く黒褐色土を主体とする。底面は、基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。

遺物 埋土から、LR単節斜縄文の縄文土器片が7点(105g)出土している。

時期 検出面から縄文時代に属するものと推定される。

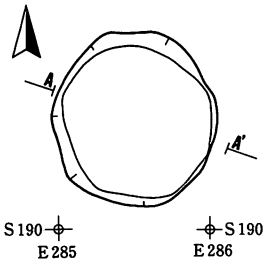
VI D 0 e 土坑 (遺構番号214)

遺構 (第293図、写真図版109)

西尾根南麓の斜面から平坦部への傾斜変換点に位置する。黄褐色土と黒褐色土の混土層上面で検出した。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径90cm、底部径85cm、深さ17cmである。埋土は黒褐色土の単層で、部分的に暗褐色土ブロックが混入する。底面は基盤層である黄褐色土で、固く締まっている。平坦で、ほぼ水平である。遺物は出土していない。

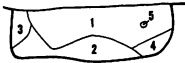
時期 検出面から縄文時代に属するものと推定される。

E 286
 ⊕ S 188



S 190 ⊕ E 285 ⊕ S 190 E 286

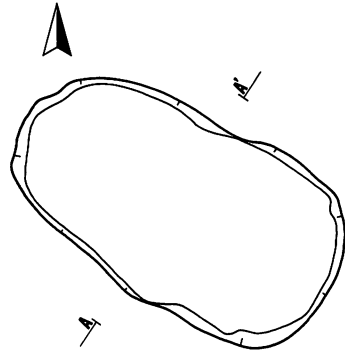
A L = 260.400m A'



1. 7.5Y R% 黒褐色土 ややしりあり。褐色土を含む。
2. 7.5Y R% 極暗褐色土 しりあり。黄褐色土を粒状に含む。
3. 7.5Y R% 褐色土 しりなし。
4. 7.5Y R% 黒色土 しりなし。褐色土を粒状に含む。
5. 7.5Y R% 褐色土 ややしりあり。

VII D 8 h 土坑

E 293
 ⊕ S 170



S 173 ⊕ E 291

⊕ S 173 E 293

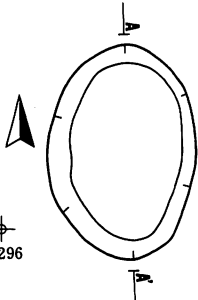
A L = 262.500m A'



1. 10Y R% 黒褐色土 しりあり。黄褐色土、焼土粒をまばらに含む。
2. 10Y R% 暗褐色土 ややしりあり。焼土ブロック。
3. 10Y R% 褐色土 しりあり。やや焼成を受けている。
4. 10Y R% 暗褐色土 しりあり。黄褐色土粒、焼土粒、炭化物をわずかに含む。
5. 10Y R% 黄褐色土 しりあり。
6. 10Y R% 黒褐色土 しりあり。炭化物を粒状に含む。
7. 10Y R% 褐色土 しりあり。

VII D 9 e 土坑

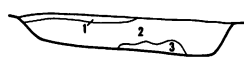
E 298
 ⊕ S 155



S 156 ⊕ E 296

⊕ S 156 E 298

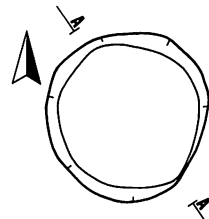
A L = 265.600m A'



1. 7.5Y R% 褐色土 しりなし。小角礫を含む。
2. 7.5Y R% 暗褐色土 しりあり。小角礫を含む。
3. 10Y R% 暗褐色土 固くしまっている。

VI D 0 b 土坑

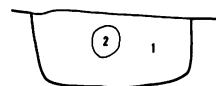
E 296
 ⊕ S 167



S 169 ⊕ E 295

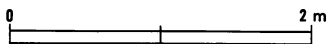
⊕ S 169 E 296

A L = 263.400m A'



1. 7.5Y R% 黒褐色土 しりなし。黒色土と褐色土との混土。
2. 7.5Y R% 極暗褐色土

VI D 0 d 土坑



第292図 土坑(3)

VID 0 g 土坑 (遺構番号215)

遺構 (第293図、写真図版109)

西尾根南麓に位置する。VID 0 g 住居跡の床下から検出した。本土坑の埋土上位が、同住居の炉の焼成をうけていることから、本土坑の方が同住居に先行すると考えられる。

平面形は、長軸が斜面に平行する楕円形で、その方向はほぼ東西方向と一致する。壁は西壁が緩やかに立ち上がるが、他はほぼ直立する。規模は開口部径 110 × 155 cm、底部径 90 × 130 cm、深さ 20 cm である。埋土は黒褐色土による単層で、微細な炭化物を少量含む。底面は基盤層である黄褐色土で、中央部がやや下がるほか、南側は凹凸がある。

遺物 埋土から縄文時代前期の土器片が出土している。

時期 重複関係・出土遺物から、縄文時代前期に属するものと推定される。

VID 0 g - 2 土坑 (遺構番号216)

遺構 (第293図、写真図版110)

西尾根南麓に位置する。VID 0 g 住居跡の床面に形成された焼土の下の面から検出された。検出状況から、本土坑の方が同住居に先行する。

平面形は、長軸が斜面に平行する不整な楕円形状で、その方向は N-82°-W である。壁は北壁と西壁は緩やかに立ち上がるが、他はほぼ直立する。規模は開口部径 90 × 170 cm、底部径 70 × 135 cm、深さ 15 cm である。埋土は締まりある黒褐色土による単層で、微細な炭化物と焼土粒を少量含む。底面は基盤層である黄褐色土で、凹凸がある。

遺物 埋土から縄文時代前期の土器片が出土している。

時期 重複関係・出土遺物から、縄文時代前期に属するものと考えられる。

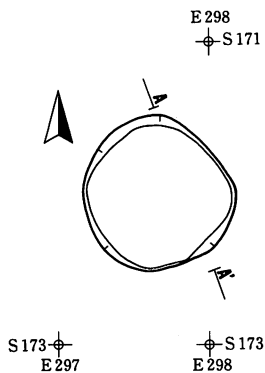
VID 0 i 土坑 (遺構番号217)

遺構 (第293図、写真図版110)

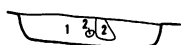
西尾根南麓の平坦部に位置する。VID 0 i 住居跡とごく一部で重複する。本土坑が同住居を切っていることが検出時に確認されており、本土坑の方が新しい。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径 135 cm、底部径 120 cm、深さ 24 cm である。上位から黒色土、黒褐色土、褐色土と変移する。これは VID 0 i 住居跡の埋土と酷似する。第 3 層には炭化物の細片を含む。自然堆積と考えられる。底面は、基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。

遺物 (第312図、写真図版220)

埋土から1279の他、縄文時代前期の網目状撚糸文の土器小片 4 点、縄文後～晩期の土器小片が 1 点出土している。

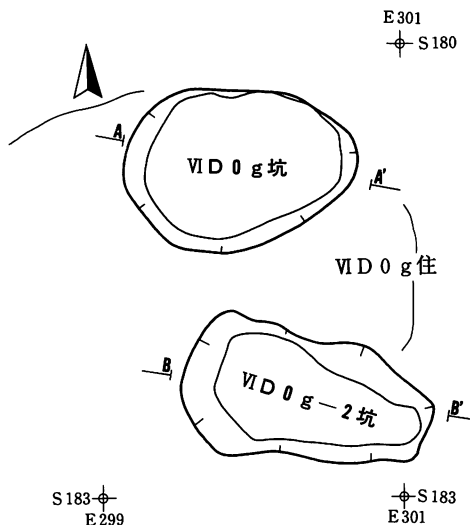


A L = 263.000m A'

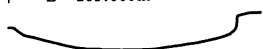


1. 7.5YR% 黒褐色土 ややしまりあり。砂をわずかに含む。
2. 10YR% 暗褐色土 しまりあり。

VID 0 e 土坑



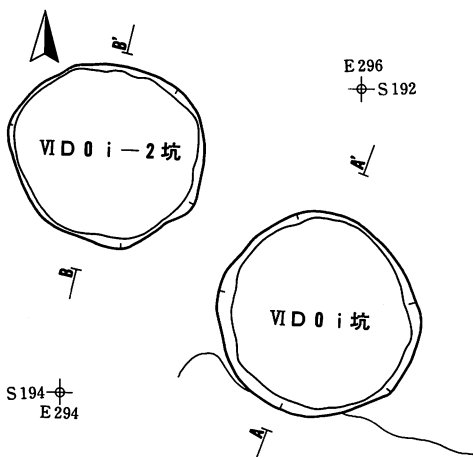
A L = 261.900m A'



B L = 261.900m B'

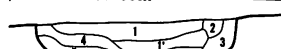


VID 0 g 土坑・VID 0 g-2土坑



VID 0 i 土坑・VID 0 i-2土坑

A L = 260.400m A'

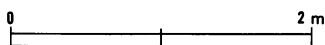


1. 10YR% 黒色土 ややしまりあり。黄褐色土粒を含む。1'は、1層に炭化物を含み黒色が強い。
2. 10YR% 暗褐色土 ややしまりあり。褐色土をブロック状に含む。
3. 10YR% 暗褐色土 しまりなし。黄褐色土との混土。
4. 10YR% 黒褐色土 ややしまりあり。黄褐色土を僅かに含む。
5. 10YR% 褐色土 しまりなし。黄褐色土を含む。

B L = 260.400m B'



1. 10YR% 黒色土 ややしまりあり。褐色土粒をわずかに含む。
2. 10YR% 黒色土 ややしまりあり。黄褐色土を小ブロックで含む。
3. 10YR% 黒褐色土 ややしまりあり。黄褐色土粒をわずかに含む。
4. 10YR% 暗褐色土 しまりなし。褐色土、黄褐色土を含む。
5. 10YR% 褐色土 しまりなし。崩落土。



第293図 土坑(4)

時期 検出面・出土遺物から縄文時代に属するものと推定される。

VID 0 i - 2 土坑 (遺構番号218)

遺構 (第293図、写真図版110)

西尾根南西麓の平坦部に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径 125 cm、底部径 120 cm、深さ30cmである。埋土は、黒色土、黒褐色土を主体とし、壁際に崩落土を含む。底面は、基盤層である黄褐色土でほぼ水平で、平坦である。

遺物 縄文時代前期の土器片が10数点出土している。

時期 VID 0 i 土坑と、形状・規模・埋土・位置が類似し、同じ性格を有するものと思われ、検出面・出土遺物から縄文時代に属するものと推定される。

VII C 6 g 土坑 (遺構番号219)

遺構 (第294図、写真図版110)

西尾根西斜面に位置する。VII C 6 g 住居跡の床面下から検出された。埋土と壁の大部分は、同住居によって切られ、遺存状況は悪い。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径 160 cm、底部径 150 cm、深さ17cmである。埋土は、褐色土と、細かい炭化物をブロック状に含む明黄褐色土による単層である。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。ほぼ中央部に粉炭がごくうすく、34×38cmの楕円形状に分布する。

遺物 床面から、縄文時代前期のRL単節斜縄文と縦位の綾絡文を有する土器小片、多軸絡条体を原体とする土器小片が出土している。

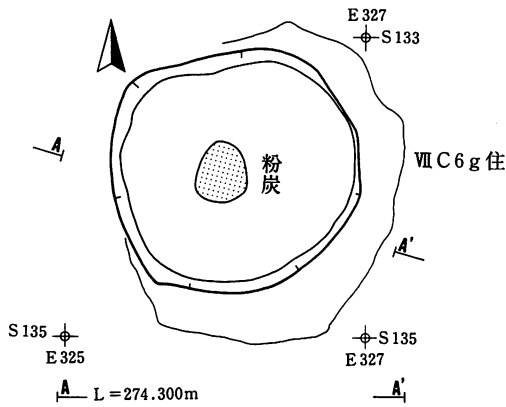
時期 重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属するものと推定される。

VII C 6 g - 2 土坑 (遺構番号220)

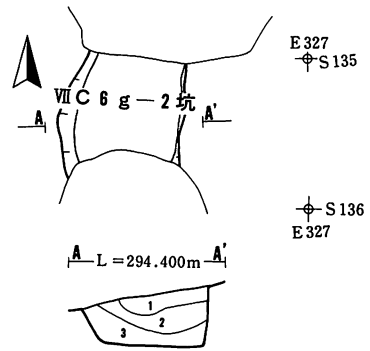
遺構 (第294図、写真図版110)

西尾根西斜面に位置する。本土坑の北側でVII C 6 g 住居跡によって切られ、南側は倒木痕による攪乱を受けており、東西壁のみ残存する。そのため平面形は不明である。規模は、東西方向は開口部84cm、底部70cm、南北方向は残存値で64cmである。深さは40cmである。埋土は3層に分かれる。上層には細かい炭化物を含む。第2層・第3層には小さい角礫を含む。いずれも締まりを欠く。底面は基盤層で、ほぼ水平である。遺物は出土していない。

時期 検出面・重複関係から縄文時代前期に属するものと推定される。

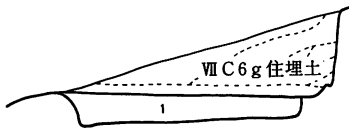


1. 10 Y R% 明褐色土 褐色土、炭化物を含む。
VII C 6 g 土坑

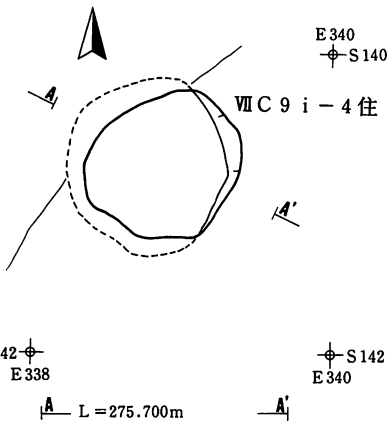


1. 10 Y R% 褐色土 しまりなし。炭化物、小角礫を少量含む。
 2. 10 Y R% 明黄褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
 3. 10 Y R% 暗褐色土 しまりなし。小角礫を多く含む。

VII C 6 g - 2 土坑

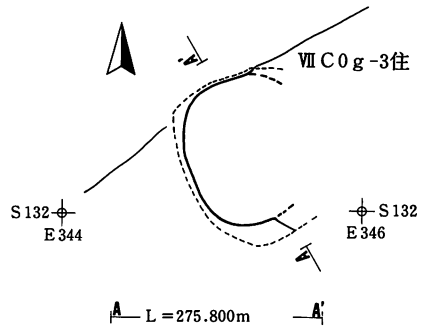


E 346
S 130



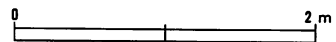
1. 10 Y R% 明黄褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
 2. 10 Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
 3. 10 Y R% 黄褐色土 しまりなし。
 4. 10 Y R% にぶい黄褐色土 しまりなし。

VII C 8 i 土坑



1. 10 Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
 2. 10 Y R% 明黄褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
 3. 10 Y R% にぶい黄褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
 4. 10 Y R% にぶい黄褐色土 しまりなし。小角礫を多く含む。
 5. 10 Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
 6. 10 Y R% 明黄褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
 7. 10 Y R% 褐色土 しまりなし。小角礫を多く含む。

VII C 9 g 土坑



第294図 土坑(5)

ⅦC 8 i 土坑 (遺構番号221)

遺構 (第294図、写真図版111)

西尾根頂部から東斜面への変換点に位置する。ⅦC 9 i - 4 住居跡の床面下と西壁から検出された。同住居に東側の埋土と壁の大半を壊され、遺存状況は悪い。平面形は円形で、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部径は推定で90cm、頸部径は推定で60cm、底部径 120cm、深さ92cmである。埋土は、残存部で4層確認できた。基盤層起源の黄褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す。底面は基盤層で、ほぼ水平で平坦である。

遺物 (第312図、写真図版220)

1280・1281の他、埋土から縄文時代前期の網目状撚糸文、木目状撚糸文の土器小片が出土している。

時期 検出状況・出土遺物から縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦC 9 g 土坑 (遺構番号222)

遺構 (第294図、写真図版111)

西尾根頂部から東斜面への変換点に位置する。ⅦC 0 g - 3 住居跡の床面下および西壁で検出された。本土坑の南東四半部は同住居によって壊されており、詳細は不明であるが、平面形は円形と推定され、断面形はフラスコ状である。規模は、残存部から開口部径 100 cm、底部径 120 cm、頸部径90cm前後と推定される。深さは60cmである。埋土は7層に分けられるが、いずれも小角礫を含み、締まりを欠く。自然堆積と思われる。底面はうねるような凹凸がある。

遺物 埋土から、縄文時代前期の網目状撚糸文、縦位の綾絡文、単節斜縄文の土器小片が出土している。

時期 重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦC 9 i 土坑 (遺構番号223)

遺構 (第295図、写真図版127)

<検出状況>ⅦC 9 i - 4 住居跡の床面精査で検出された。平面形は不整な楕円形状で、規模は開口部径 140 × 193 cm、底部径 115 × 180 cm、深さ14cmである。埋土は黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土からなり粉炭を含む。底面は基盤層で固く、やや凹凸がある。焼土が、北西壁寄りに位置する。50×73cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大8cmである。

遺物 焼土内から横位の綾絡文の土器片が出土しているが小片のため図示は割愛した。

時代 重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属するものと推定される。

VII C 9 j 土坑 (遺構番号224)

遺構 (第295図、写真図版111)

西尾根東斜面に位置する。VII C 9 j 住居跡、VII C 9 j - 2 住居跡と重複する。VII C 9 j 住居跡の精査時にその床面と北壁で検出した。断面図をとることができなかったが、本土坑が同住居に先行すると観察された。また、VII C 9 j - 2 住居跡との関係では、平面で本土坑の方が新しいことを確認している。平面形は歪な円形で、壁はやや外傾する。規模は、開口部径 104 × 110 cm、底部径85×94cm、深さ30cmである。埋土は、4層に分けられる。

遺物 (第312図、写真図版220)

土器は、埋土から木目状襷糸文、網目状襷糸文、横位羽状縄文 (第1種結束) の小破片が出土している。石器は1282の1点のみの出土である。

時期 重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属するものと推定される。

VII C 0 i 土坑 (遺構番号225)

遺構 (第295図、写真図版111)

西尾根東斜面の急傾斜部から緩斜面への変換点に位置する。検出面は表土直下で基盤層上面である。平面形は円形で、壁は斜面上方に当たる北側がややオーバーハングし、他はほぼ直立する。規模は開口部径 128 cm、底部径 125 cm、深さ24cmである。埋土は4層に分けられるが、第2層には粉炭を少量含み、第3層には焼土粒が混入する。底面中央部に、幅10~25cm、深さ5~14cmの溝が、斜面に沿って北西から南東方向に走る。東壁際には、20×34cmの楕円形状に焼土が検出された。底面は焼成を受けておらず、異地性のものと観察された。焼土は5YR5/8の明赤褐色で、褐色土と粉炭が混入している。

遺物 埋土から縄文時代前期の網目状襷糸文の土器小片が1点出土しているが図化は省略した。

時期 出土遺物から縄文時代前期に属するものと推定される。

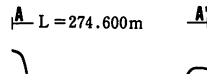
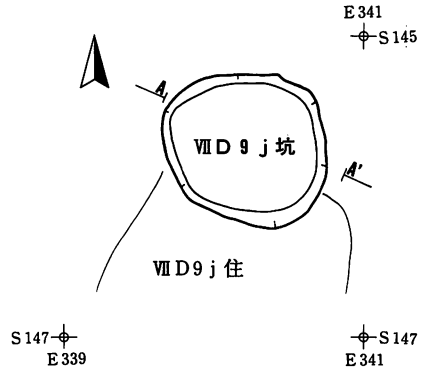
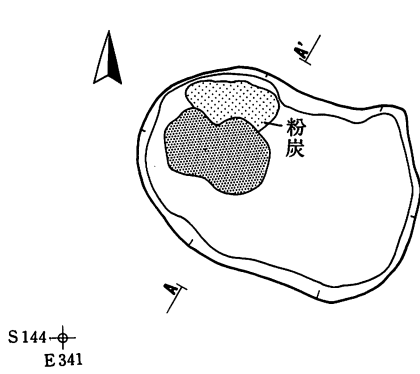
VII C 0 j 土坑 (遺構番号226)

遺構 (第295図、写真図版112)

西尾根東斜面に位置する。検出面は表土直下で、基盤層上面である。平面形は円形で、壁はやや外反気味にほぼ直立する。規模は、開口部径 175 cm、底部径 150 cm、深さ32cmである。埋土は5層に分けられる。第2層・第3層には粉炭を少量含む。第4層・第5層は崩落土を主体とする。底面はほぼ水平で平坦である。

遺物 (第312図、写真図版220)

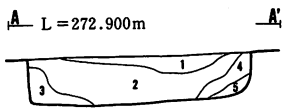
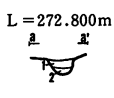
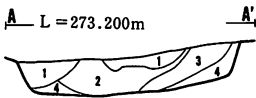
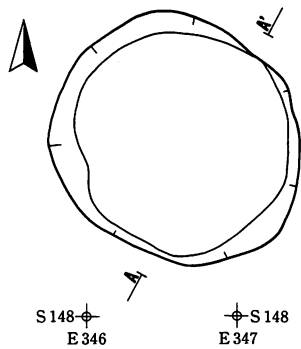
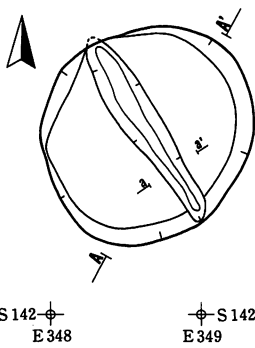
埋土上位より、縄文時代前期の綾絡文、木目状襷糸文の土器小片が出土している。石器は1



- | | | |
|------------|-------|---------------------------|
| 1. 10Y R % | 暗褐色土 | しまりなし。粉炭を含む。草木根多い。 |
| 2. 10Y R % | 黄褐色土 | しまりなし。小角礫、粉炭を少量含む。 |
| 3. 5Y R % | 明赤褐色土 | 焼土。 |
| 4. 10Y R % | 暗褐色土 | しまりなし。粉炭をわずかに含み、小角礫を多く含む。 |
| 5. 10Y R % | 黒褐色土 | しまりなし。粉炭をわずかに含み、小角礫を多く含む。 |

VII C 9 i 土坑

VII C 9 j 土坑



A...A'

- | | | |
|------------|------|------------------------|
| 1. 10Y R % | 暗褐色土 | しまりなし。 |
| 2. 10Y R % | 黄褐色土 | しまりなし。炭化物を少量、小角礫を多く含む。 |
| 3. 10Y R % | 暗褐色土 | しまりなし。焼土粒、小角礫を少量含む。 |
| 4. 10Y R % | 褐色土 | しまりなし。砂を含む。 |

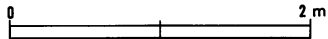
a...a'

- | | | |
|------------|-------|-----------------|
| 1. 10Y R % | 灰黄褐色土 | しまりなし。 |
| 2. 10Y R % | 灰黄褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 |

- | | | |
|-------------|---------|------------------------|
| 1. 10Y R % | にふい黄褐色土 | しまりなし。炭化物を少量含む。 |
| 2. 10Y R % | 暗褐色土 | しまりなし。炭化物、小角礫を含む。 |
| 3. 10Y R % | 褐色土 | しまりあり。炭化物を少量含む。 |
| 4. 10Y R % | 黄褐色土 | しまりなし。暗褐色土を縞状に、小角礫を含む。 |
| 5. 7.5Y R % | にふい黄橙色土 | しまりあり。小角礫を多く含む。 |

VII C 0 j 土坑

VII C 0 i 土坑



点のみの出土である。1284は側面観がやや鋸歯状を呈する。

時期 出土遺物から縄文時代前期に属するものと推定される。

VII D 1 e 土坑 (遺構番号227)

遺構 (第296図、写真図版112)

西尾根南斜面から平坦部への傾斜変換点に位置する。VII D 1 e 住居跡の床面で検出した。同住居の付属施設の可能性もあり得るが、同住居の埋土と異なること、非常に固く締まっていることから、独自の遺構と認定した。南側の壁は斜面のため流失している。平面形は隅丸方形で、壁はやや外傾する。規模は東西方向の開口部 155 cm、底部 144 cmである。南北方向は残存値で、130 cm程度である。深さは14cmである。埋土は5層に分けられるが、黒褐色土と暗褐色土を主体とし、いずれも固く締まっている。底面は、ほぼ平坦であるが、斜面に沿ってやや傾斜し、最大比高 4 cmである。底面に礫が2個あるが、使用痕・加工痕は観察されない。

遺物 (第313図、写真図版220)

埋土から、横位の羽状縄文、櫛歯状沈線、単節斜縄文の土器小片が出土しているが図化に耐えないものであり省略した。1285は磨面の両側面も平滑に調整されている。

時期 重複関係から縄文時代前期に属するものと推定される。

VII D 1 f 土坑 (遺構番号228)

遺構 (第296図、写真図版112)

西尾根南麓の平坦部に位置する。黒褐色土と黄褐色土の混土層で検出した。南側でVII D 1 g 住居跡と重複する。検出面および埋土観察から本土坑の方が新しいと考えられる。平面形は歪な円形で、断面形はややフラスコ状となる。規模は、開口部径105×115cm、底部径97×117cm、深さ67cmである。埋土は上位は黒色土、下位は黒褐色土で、中位に崩落土を混入する。底面は基盤層でやや中央部が窪む。

遺物 (第313図、写真図版220)

1286の1点のみ図示した。他に縄文時代前期の単節斜縄文土器小片が10数点出土している。

時期 検出面・出土遺物から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 1 g - 2 土坑 (遺構番号229)

遺構 (第296図、写真図版112)

西尾根南麓斜面に位置する。VII D 1 g - 2 住居跡の床面で、黒褐色土の長方形プランとして検出した。本土坑は同住居の地床炉の直下に位置し、同住居に先行することは明らかである。

平面形は、隅丸長方形で、壁はやや外傾する。規模は、開口部で106×172cm、底部で84×144cm、深さ26cmである。埋土は7層に分けられるが、第3層の暗褐色土を主体とする。全体に粉炭が混入する。上位の第1層・第4層はⅦD1g-2住居跡の炉からの熱をうけた痕跡がある。底面は基盤層で、ほぼ水平で凹凸は殆どない。

遺物 (第313図、写真図版221)

埋土中位から縄文時代前期の土器片と炭化物および不定形石器が検出された。土器は、撚糸文・LR単節・木目状撚糸文のそれぞれ地文のみの土器小片、および図示した底部で、計6点である。1287は、胴部は残存部が少なく文様(地文)は明らかではない。網目状撚糸文かと思われる。底部にはLRによる縄文と、その片結びによる綾絡文が施文されている。本遺跡では底部への施文は希である。

時期 重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦD2e土坑(遺構番号230)

遺構 (第296図、写真図版113)

西尾根南西斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。南側は斜面のため流失している。平面形は隅丸長方形で、長軸方向はN-30°-Eである。壁は全体にやや外傾する。規模は、短軸方向で開口部110cm、底部78cm、長軸方向は残存値で170cmである。深さは、北壁際で36cmである。埋土は3層に分けられる。斜面下方は基盤層起源の黄褐色土である。底面は斜面に沿って大きく傾斜し、斜度17°となる。北壁際と南側の最大比高46cmである。凹凸は少ない。副穴状の施設が北西隅よりに検出された。規模は15×25cm、深さ15cmである。性格は不明である。

遺物 (第313図、写真図版221)

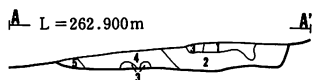
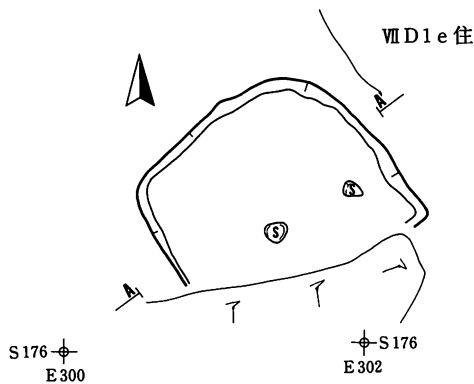
埋土から、1289の他、縄文時代前期に属する網目状撚糸文・撚糸文・櫛歯状沈線・羽状縄文・LR単節斜縄文の土器小片が出土している。

時期 出土遺物・検出面から縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦD2g土坑(遺構番号231)

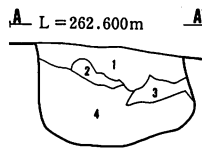
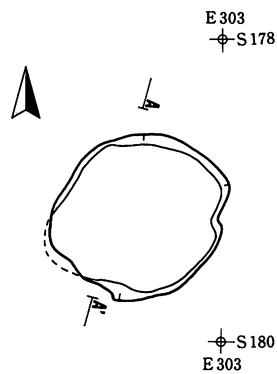
遺構 (第297図、写真図版113)

西尾根南麓の平坦部に位置する。ⅦD3g住居跡の床面で、基盤層を掘り込んだ黒褐色土の円形のプランとして検出された。ⅦD3g住居跡の焼土の下に位置することから、本土坑は同居に先行する。平面形はやや歪な円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径174×200cm、底部径156×170cmで、深さは40cmである。埋土は3層に分けられるが、第2層黒褐色土



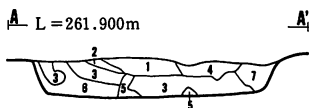
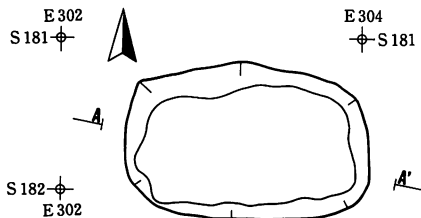
1. 10Y R% 暗褐色土 固くしまっている。
2. 10Y R% 黒褐色土 極めて固くしまっている。炭化物を含む。
3. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。
4. 10Y R% 暗褐色土 極めて固くしまっている。小角礫を含む。
5. 10Y R% 褐色土 しまりあり。

VII D1 e 土坑



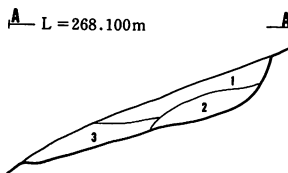
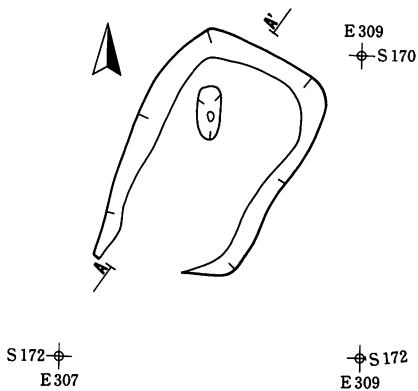
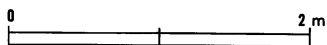
1. 10Y R% 黒色土 しまりあり。草木根を含む。
2. 10Y R% 暗褐色土 しまりあり。崩落土。
3. 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。崩落土。
4. 10Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。褐色土を含む。

VII D1 f 土坑



1. 10Y R% 暗褐色土
2. 10Y R% 黒褐色土
3. 10Y R% 暗褐色土
4. 7.5Y R% 褐色土 赤褐色土を含む。
5. 10Y R% 黄褐色土 粘土質土。
6. 10Y R% 褐色土
7. 7.5Y R% 暗褐色土

VII D1 g-2 土坑



1. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
2. 10Y R% 暗褐色土 しまりあり。
3. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。崩落土。

VII D2 e 土坑

を主体とする。底面はほぼ水平で平坦である。

遺物（第313図、写真図版221）

埋土から、1290・1291のほか組縄縄文（7点）、木目状撚糸文（1点）、横位の綾絡文（1点）の各土器小片が出土しているがいずれも凶化に耐えないので割愛した。

時期 重複関係から、縄文時代前期に属するものと考えられる。

VII D 2 h 土坑（遺構番号232）

遺構（第297図）

西尾根南麓の平坦部に位置する。VII D 2 h - 2 住居跡の床面で検出した。同住居は耕作により削割されており、埋土で新旧関係を把握することはできなかった。本土坑の埋土最上位には明黄褐色粘土が貼られていることから、同住居による貼り床ととらえ、本土坑は同住居に先行すると考えた。

平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径72×80cm、底部径58×66cm、深さ70cmである。埋土は5層に分けられるが、第1層・第4層は現在VII D 2 h - 2 住居跡周辺にはない粘土であり、堆積状況も人為的な埋め戻しの様相を示している。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。底面中央部に、副穴が位置する。遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

VII D 3 e 土坑（遺構番号233）

遺構（第297図、写真図版113図）

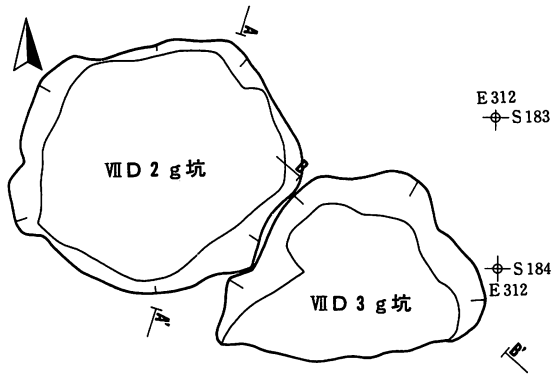
西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層で検出した。平面形は、長軸が斜面に直交する小判形で、その方向はN-34°-Eである。壁はやや外傾する。規模は、開口部径63×82cm、底部径32×57cm、深さ29cmである。埋土は3層に分けられる。全体に締まりを欠き、上位には微細な炭化物を含む。底面は基盤層である黄褐色土で、平坦だが斜面に沿ってやや傾斜し、比高最大値11cmである。遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

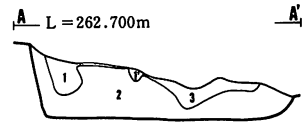
VII D 3 g 土坑（遺構番号234）

遺構（第297図、写真図版113）

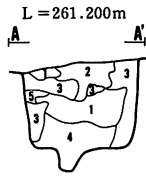
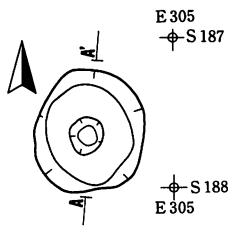
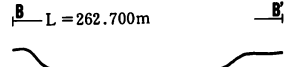
西尾根南麓の平坦部に位置する。VII D 3 g 住居跡の床面において、黒褐色土の半円形のプランとして、VII D 2 g 土坑と同時に検出した。南側は斜面下方のため流失している。平面形は不整形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は最大値で、開口部158cm、底部96cm、深さ36cmである。



VII D 2 g 土坑・VII D 3 g 土坑

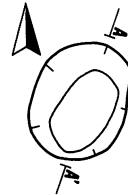


1. 7.5 Y R% 褐色土 しまりあり。黄色土を含む。
2. 7.5 Y R% 黒褐色土 しまりあり。炭化物小角礫を含む。
3. 7.5 Y R% 極暗褐色土 固くしまっている。小角礫を含む。

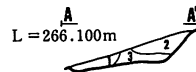


1. 7.5 Y R% 明褐色土 粘土。
2. 7.5 Y R% 黒色土
3. 7.5 Y R% 褐色土
4. 7.5 Y R% 明褐色土
5. 7.5 Y R% 暗褐色土

VII D 2 h 土坑

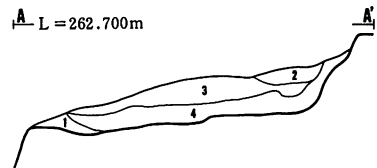
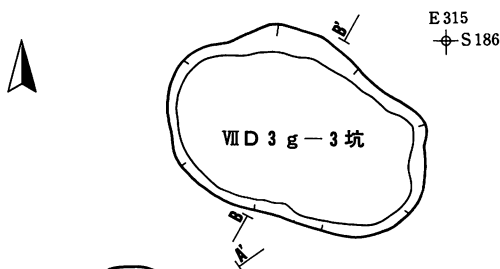


S 173
E 312 S 173
E 313

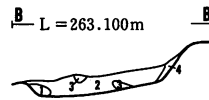
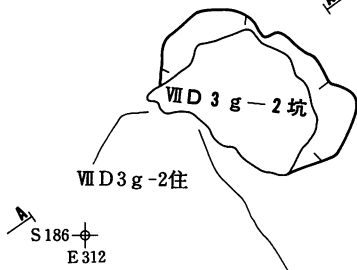


1. 10 Y R% 褐色土 しまりなし。炭化物を含む。
2. 10 Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。
3. 10 Y R% 褐色土 しまりなし。

VII D 3 e 土坑

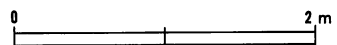


- A...A'
1. 7.5 Y R% 褐色土 しまりなし。黄褐色土を含む。
 2. 7.5 Y R% 黒褐色土 しまりあり。炭化物、小角礫を含む。
 3. 7.5 Y R% 黒褐色土 しまりあり。
 4. 7.5 Y R% 黒色土~極暗褐色土。



- B...B'
1. 7.5 Y R% 褐色土 粘土質土。
 2. 7.5 Y R% 黒褐色土
 3. 7.5 Y R% 褐色土
 4. 7.5 Y R% 暗褐色土 粘土質土。

VII D 3 g-2 土坑・VII D 3 g-3 土坑



第297図 土坑(8)

埋土は、ⅦD 2 g 土坑とおなじ7.5YR3/2黒褐色土で粉炭を含む。底面は基盤層でやや凹凸がある。遺物は出土していない。

時期 検出面・埋土から縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦD 3 g - 2 土坑 (遺構番号235)

遺構 (第297図)

西尾根南麓の平坦部に位置する。ⅦD 3 g - 4 住居跡の床面において検出した。検出時に平面プランは明瞭でなく、底面からの立上がりによって平面形をとらえた。南側は斜面のため流失していて、構築時の平面形は不明である。残存形は、歪な楕円形状で長軸方向はN-47°-Wである。壁は緩やかに立ち上がる。規模は、長軸方向の開口部140cm、底部100cmである。短軸方向は、残存値で80cmである。埋土は上位は黒褐色土、下位は黒色土を主体とし、固く締まっている。底面は、基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。

遺物 埋土からRL縦・多軸絡条体・重層する横位綾絡文の縄文時代前期の土器片が出土している。

時期 重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦD 3 g - 3 土坑 (遺構番号236)

遺構 (第297図、写真図版114)

西尾根南麓の平坦部に位置する。ⅦD 3 g - 3 住居跡の床面で検出した。同住居と埋土が異なること、同住居の北壁より外側までをその範囲とすることなどから、同住居に伴うものでなく、それに先行する遺構と考えられる。

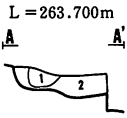
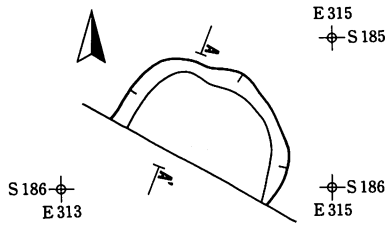
平面形は楕円形で、長軸方向はN-63°-Wである。壁は緩やかに立ち上がる。規模は、開口部径126×196cm、底部径100×180cm、深さ14cmである。埋土は粉炭を含む黒褐色土を主体とし、暗褐色土・褐色土ブロックが混入する。底面は基盤層である黄褐色土で、凹凸はなく平坦であるが、斜面に沿ってやや傾斜し、比高最大値12cmである。遺物は出土していない。

時期 重複関係から、縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦD 3 h 土坑 (遺構番号237)

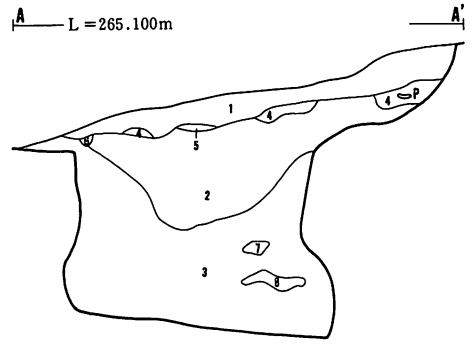
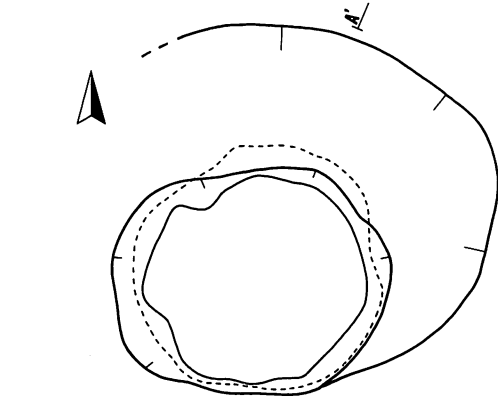
遺構 (第298図、写真図版113)

西尾根南斜面に位置する。道路により南側を削剝されている。小角礫を含む暗褐色土層中に極暗褐色の落ち込みとして検出した。南側が不明であるが、平面形は円形ないし小判形と推定される。規模は、東西方向は、開口部116cm、底部100cmで、南北方向は残存値で70cmである。



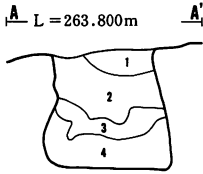
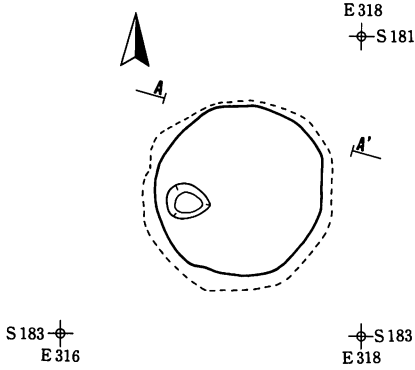
1. 7.5Y R% 極暗褐色土 固くしまっている。
2. 7.5Y R% 暗褐色土

VII D3 h 土坑



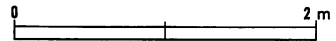
1. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。
2. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
3. 10Y R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
4. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。
5. 7.5Y R% 明褐色土 しまりなし。
6. 7.5Y R% 明褐色土 しまりなし。
7. 10Y R% 褐色土 しまりあり。
8. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。小角礫を含む。

VII D4 g 土坑



1. 7.5Y R% 褐色土
2. 7.5Y R% 暗褐色土
3. 10Y R% 黒褐色土
4. 7.5Y R% 暗褐色土

VII D4 g-2土坑



第298図 土坑(9)

深さは北壁と最深部で20cmである。埋土は2層に分けられるが、いずれも固く締まっていて、暗褐色土を主体とする。底面は暗褐色土層中にあり、凹凸があって、北壁側がやや高くなっている。

遺物 本遺構から出土した破片は、VII D 3 g - 3 住居跡で取り上げた514と接合した。他にr無節の撚糸文の破片が出土している。

時期 検出面から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 4 g 土坑 (遺構番号238)

遺構 (第298図、写真図版114)

西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層で検出した。平面形は東西方向にやや長い歪な円形で、断面形はフラスコ状であり、斜面上方は崩落している。規模は、開口部径145×185cm、底部径157×170cm、頸部径124×148cm、深さ154cmである。埋土は暗褐色土と褐色土の2つの層を主体とし、よく締まっている。底面は基盤層で固く、ほぼ水平で平坦である。

遺物 (第313図、写真図版221・222)

遺物は、埋土から5620gと多量の縄文の土器片が出土している。そのうち7点を図示した。縄文時代前期のものが主体をなすが、晩期の注口土器も混入している。

時期 出土遺物・検出面から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 4 g - 2 土坑 (遺構番号239)

遺構 (第313図、写真図版114)

西尾根南斜面に位置する。新期の道路によって壁の大半は削剝され基盤層上面で検出したが、北側は暗褐色土層を掘り込んでいることが断面から確認できた。

平面形は円形で、断面形はフラスコ状である。規模は基盤層上面で、開口部径120cm、底部径134cm、深さは、褐色土層から最深部まで98cmである。埋土は4層に分けられるが、暗褐色土が上位と下位に堆積し、径3mm程度の炭化物を含む黒褐色土が間層として入り込む。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平である。西壁寄りに副穴らしい小穴が1個検出された。径は15cm、深さは4cmである。この小穴の性格は不明である。

遺物 埋土から、縄文時代前期の土器片が出土している。

時期 形状・出土遺物から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 4 g - 3 土坑 (遺構番号240)

遺構 (第299図、写真図版114)

西尾根南斜面に位置する。基盤層への漸移層で検出した。平面形はやや歪な円形で、北壁はオーバーハングしてフラスコ状となり、他の壁はほぼ直立する。規模は、開口部径120×138cm、底部径105×115cm、深さ45cmである。埋土は4層に分けられるが、微細な炭化物を僅かに含む暗褐色土を主体とする。最下層には基盤層起源の黄褐色土が褐色土と混土して堆積する。底面は、ほぼ水平で凹凸は殆どない。

遺物 (第314図、写真図版222)

埋土から縄文時代前期・後晩期の土器片が出土した。1300は埋土上位のからの出土で遺構外出土の土器片と接合したものである。

時期 出土遺物・検出面・形状から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 4 h - 2 土坑 (遺構番号241)

遺構 (第299図、写真図版115)

西尾根南麓の平坦部に位置する。小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。平面形は円形で北壁がややオーバーハングしてフラスコ状となり、他の壁はほぼ直立する。規模は、開口部で103×106cm、底部で95×104cm、深さ23cmである。埋土は単層で、微細な炭化物を含む。底面は基盤層で、ややうねるような凹凸があるが、全体としては水平である。

遺物 埋土から、LR単節と組縄縄文の小破片が出土している。

時期 出土遺物・形状から縄文時代に属するものと推定される。

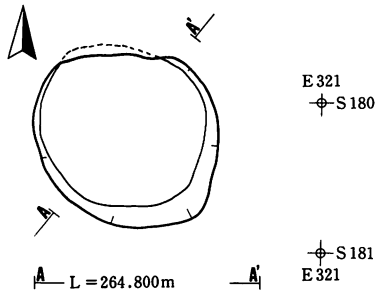
VII D 5 f 土坑 (遺構番号242)

遺構 (第299図、写真図版115)

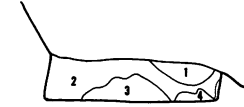
西尾根南斜面に位置する。基盤層への漸移層で検出した。平面形は開口部はほぼ円形であるのに対し、底部はやや東西に長い歪な円形である。壁は底部から直立後に内傾し再び直立し、断面形フラスコ状となる。規模は、開口部径154cm、底部径162cm×190cm、深さは102cmである。埋土は、斜面下方に当たる南側に基盤層起源の黄褐色土が厚く堆積し、その上に乗るように北側に褐色土～暗褐色土が堆積する。底面は基盤層で、ほぼ水平で平坦である。

遺物 埋土から、縄文時代前期の土器小片10数点が出土しているが図化は省略した。

時期 出土遺物・検出面から縄文時代に属するものと推定される。

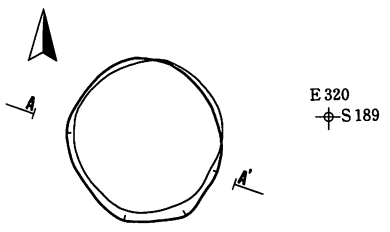


E 321
 ⊕ S 180
 ⊕ S 181
 E 321

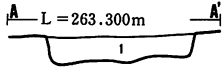


1. 10 Y R% 褐色土
2. 10 Y R% 暗褐色土 炭化物をわずかに含む。
3. 10 Y R% 黄褐色土 褐色土をブロック状に含む。
4. 10 Y R% 褐色土 褐色土をブロック状に含む。

VII D 4 g-3土坑

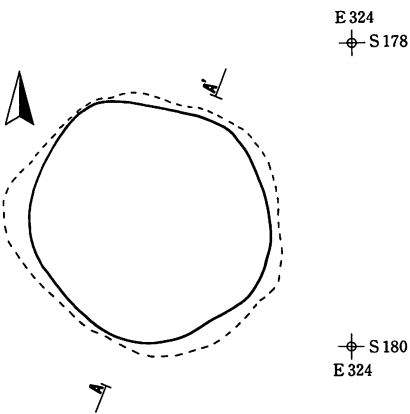


E 320
 ⊕ S 189
 ⊕ S 190
 E 320

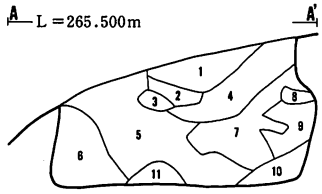


1. 10 Y R% 暗褐色土 しまりなし。

VII D 4 h-2土坑

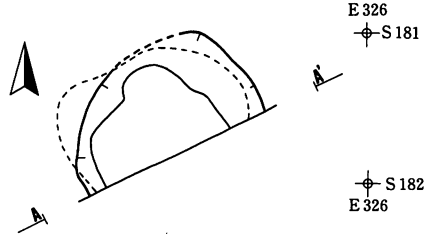


E 324
 ⊕ S 178
 ⊕ S 180
 E 324

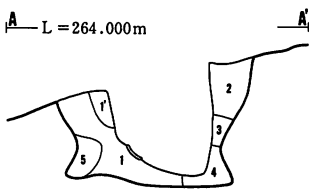


1. 7.5 Y R% 極暗褐色土 炭化物、焼土粒を含む。
2. 7.5 Y R% 暗褐色土 炭化物、焼土粒を含む。
3. 10 Y R% 黄褐色土 暗褐色土を含む。
4. 7.5 Y R% 褐色土 炭化物をわずかに、褐色土をブロック状に含む。
5. 10 Y R% 黄褐色土 炭化物をわずかに含む。
6. 7.5 Y R% 暗褐色土 炭化物を含む。
7. 7.5 Y R% 暗褐色土 炭化物を含む。
8. 10 Y R% 明黄褐色土 崩落土。
9. 10 Y R% 褐色土 明褐色土をブロック状に含む。
10. 10 Y R% におい黄橙色土 崩落土。
11. 10 Y R% 黄褐色土 炭化物をわずかに含む。

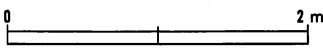
VII D 5 f 土坑



E 326
 ⊕ S 181
 ⊕ S 182
 E 326



1. 7.5 Y R% 褐色土 しまりなし。小角礫を含む。I'は、I層より粘性を欠く。
2. 7.5 Y R% 暗褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
3. 7.5 Y R% 明褐色土 しまりあり。
4. 7.5 Y R% 暗褐色土 しまりあり。
5. 10 Y R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。



VII D 5 g 土坑

ⅦD 5 g 土坑 (遺構番号243)

遺構 (第299図、写真図版115)

西尾根南斜面に位置する。ⅦD 5 g - 3 住居跡の北壁において本土坑の断面を確認した。精査時の埋土観察では、本土坑の方が先行すると考えられた。

南半はⅦD 5 g - 3 g 住居跡に切られていて不明であるが、残存状況から平面形は円形、断面形はフラスコ状であると推定される。規模は、開口部、底部とも130cm程度、頸部径約90cm、深さは88cmである。中央部分から北側上部にかけて攪乱を受けている。埋土は暗褐色土～褐色土を主体とする。底面は基盤層である黄褐色土で、やや凹凸がある。

遺物 (第314図、写真図版222)

埋土から、縄文時代前期に属する木目状撚糸文・RL単節・網目状撚糸文・横位の綾絡文等20数点が出土した。1301は埋土断面図に示されている土器であるが、器形・器厚・焼成等から後晩期の深鉢と考えられる。

時期 出土遺物・検出面から縄文時代に属するものと推定される。

ⅦD 5 g - 2 土坑 (遺構番号244)

遺構 (第300図、写真図版115)

西尾根南斜面に位置する。ⅦD 5 g - 2 住居跡の精査中に検出した。同住居と重複し、埋土断面観察から本土坑の方が新しいと考えられる。斜面下方に当たる南側は、新期の道路により削剥されている。

平面形は円形で、壁は直立気味に立ち上がった後、斜面上方において外傾する。崩落によるものかとも考えられる。規模は、開口部径112cm、底部径102cm、深さは北壁と最深部で52cmである。埋土は極暗褐色土を主体とする。底面は基盤層で、ほぼ水平で平坦である。底面北西よりで副穴が1個検出された。規模は17×19cm、深さ8cmである。性格は不明である。

遺物 埋土から、木目状撚糸文・撚糸文・LR単節斜縄文等縄文時代前期の土器片が7点出土しているが図示は割愛した。石器は図示した2点の他、フレーク1点が埋土から出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代に属するものと推定される。

ⅦD 5 g - 3 土坑 (遺構番号245)

遺構 (第300図、写真図版116)

西尾根南斜面中腹に位置する。小角礫を含む暗褐色土層下位で検出した。平面形は、やや東西に長い歪な円形で、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部径112×123cm、底部径136×140cm、深さ47cmである。埋土は4層に分けられるが、最下層には基盤層起源の黄褐色土が

混入する。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。

遺物 埋土から、網目状撚糸文・S字状連鎖沈文・組縄縄文等10数点の縄文時代前期土器片が出土している。図示は省略した。石器は2点出土した。1307は周縁を二次加工したもので中央部は一次剝離を残す。

時期 出土遺物・検出面・形状から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 5 g - 4 土坑 (遺構番号246)

遺構 (第300図、写真図版116)

西尾根南斜面中腹部に位置する。小角礫を含む暗褐色土層で検出した。南側でVII D 5 g 土坑と接するが、新旧関係は、一部攪乱もあって不明である。

平面形はやや東西に長い歪な円形で、断面形はフラスコ状である。頸部は凹凸が多い。規模は、開口部径 225 cm程度、底部径 145 × 155 cm。頸部径 135 × 155 cm、深さ 132 cmである。埋土は7層に分けられる。上位は黒色土、中位は褐色土を主体とし、下位には崩落土を堆積する。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。

遺物 (第315図、写真図版222・223)

1310は鋸歯状の隆帯を器面に対して斜位に貼り付け隆帯屈折部分に竹管刺突を施したものである。1311は大波状口縁で、頂部上面観は器の内側にややカーブしている。図示した3点の他には撚糸文・木目状撚糸文・横位の羽状縄文等、縄文時代前期の土器片が出土している。石器は図示した2点の他、フレーク5点が埋土から出土している。

時期 出土遺物・検出面・形状から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 5 g - 5 土坑 (遺構番号247)

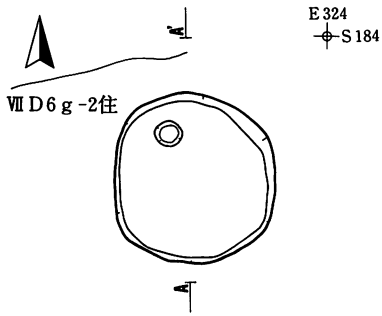
遺構 (第300図、写真図版116)

西尾根南斜面に位置する。VII D 6 g - 2 住居跡の南壁および床面下から検出された。同住居と北側で重複し、本土坑の方が先行すると考えられる。南側は新期の道路により削剝されている。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は開口部径 135 × 144 cm、底部径132×135cm、深さ46cmである。埋土は6層に分けられるが、いずれも固く締まっている。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。

遺物 (第315図、写真図版223)

図示した1314の他、横位の羽状縄文・網目状撚糸文等縄文時代前期の土器片が10数点出土している。

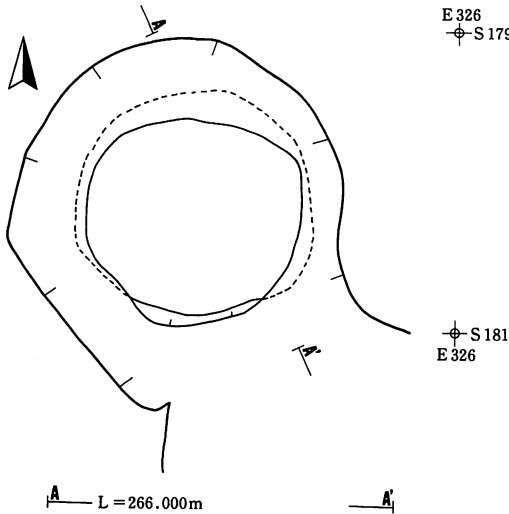
時期 重複関係・出土遺物から、縄文時代前期に属するものと推定される。



S 186 ⊕
E 322
A L 264.000m

1. 7.5 Y R % 極暗褐色土 しまりなし。
2. 7.5 Y R % 明褐色土 しまりなし。

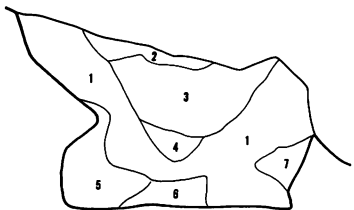
VII D 5 g-2土坑



E 326
⊕ S 179

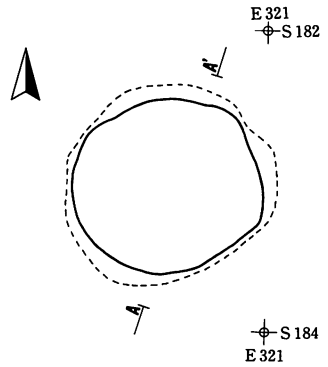
⊕ S 181
E 326

A L = 266.000m



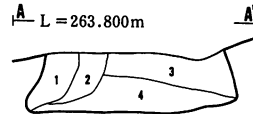
1. 7.5 Y R % 褐色土 しまりあり。小角礫を少量含む。
2. 7.5 Y R % 明褐色土 しまりあり。
3. 7.5 Y R % 黒褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
4. 7.5 Y R % 暗褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
5. 7.5 Y R % 明褐色土 しまりあり。
6. 10 Y R % 黄褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
7. 10 Y R % 褐色土 しまりあり。崩落土。

VII D 5 g-4土坑



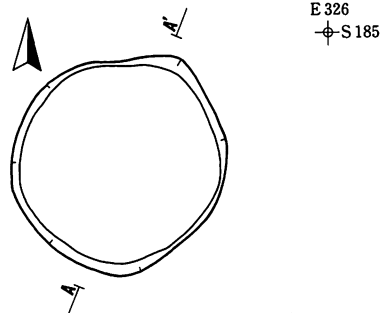
S 184 ⊕
E 319

⊕ S 184
E 321



1. 7.5 Y R % 暗褐色土 しまりなし。
2. 7.5 Y R % 褐色土 しまりあり。
3. 7.5 Y R % 黒褐色土 しまりあり。
4. 7.5 Y R % 褐色土 しまりあり。黄褐色土を含む。

VII D 5 g-3土坑

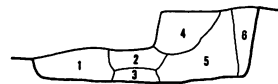


E 326
⊕ S 185

S 187 ⊕
E 324

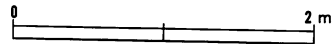
⊕ S 187
E 326

A L = 263.700m



1. 7.5 Y R % 暗褐色土 固くしまっている。
2. 10 Y R % 褐色土 しまりあり。
3. 7.5 Y R % 黒褐色土 固くしまっている。
4. 7.5 Y R % 黒褐色土 しまりあり。
5. 7.5 Y R % 褐色土 しまりあり。暗褐色土をブロック状に含む。
6. 7.5 Y R % 暗褐色土 しまりなし。褐色土をブロック状に含む。

VII D 5 g-5土坑



VII D 5 g - 6 土坑 (遺構番号248)

遺構 (第306図、写真図版116)

西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層で検出した。北側でVII D 5 g - 3 住居跡と重複する。本土坑は同住居の埋土から掘り込んでいることから、本土坑のほうが新しいと考えられる。平面形は東西方向にやや長い歪な円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径145×160cm、底部径134×145cm、深さ68cmである。埋土は3層に分けられるが、上位と下位は暗褐色土で、間に黒褐色土を挟む。自然堆積と考えられる。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。西壁よりに副穴を1個検出した。規模は径16×21cm、深さ26cmである。性格は不明である。

遺物 (第315図、写真図版223)

1315は器形・器厚・焼成等から縄文時代後晩期のものである。他に網目状撚糸文・木目状撚糸文・横位綾絡文等がある。1317は側辺に磨面が観察される他、一部敲打痕もある。軟質で表面が剥落している。

時期 検出面・出土遺物から、縄文時代後期ないし晩期に属するものと推定される。

VII D 5 h 土坑 (遺構番号249)

遺構 (第301図、写真図版117)

西尾根南麓の平坦部への傾斜変換点に位置する。小角礫を含む暗褐色土層で検出した。平面形はやや南北に長い歪な円形で、壁はほぼ直立する。規模は開口部径108×120cm、底部径104cm、深さ40cmである。埋土は4層に分けられるが、暗褐色土(第2層)と褐色土(第3層)を主体とする。第4層はそれらの混土である。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。底面の南北中軸線上に副穴が2個検出された。規模は、径18cmと径20cm、深さ10cmである。

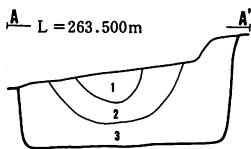
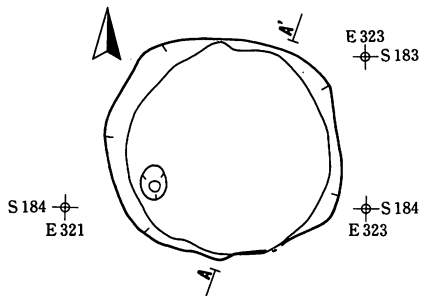
遺物 埋土から、網目状撚糸文・組縄縄文等、縄文時代前期の土器片が6点出土した。

時期 検出面・形状から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 5 h - 2 土坑 (遺構番号250)

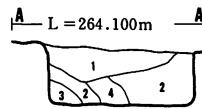
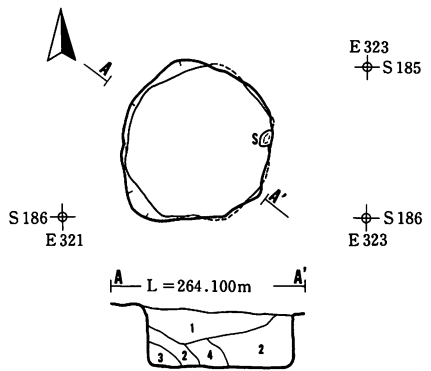
遺構 (第316図、写真図版224)

西尾根南斜面の傾斜変換点に位置する。小角礫を含む暗褐色土層で検出した。平面形は円形で、断面形はややフラスコ状である。規模は開口部径120cm、底部径125cm、深さ67cmである。埋土は4層に分けられるが、暗褐色土(第3層)を主体とする。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。



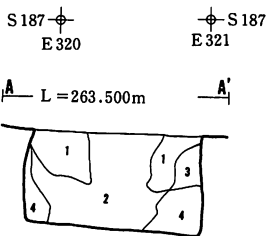
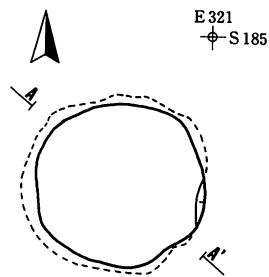
1. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。
2. 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。
3. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。

VII D5 g-6土坑



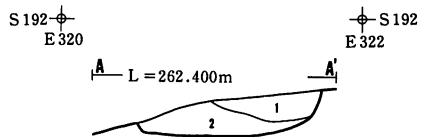
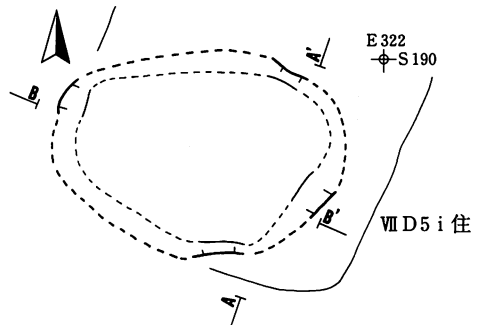
1. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。暗褐色土を含む。
2. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりなし。
3. 7.5Y R% 極暗褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
4. 7.5Y R% 暗褐色土 2層と3層の混土。パミス若干含む。

VII D5 h土坑

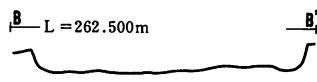


1. 10Y R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
2. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。
3. 10Y R% 暗褐色土 しまりあり。
4. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。

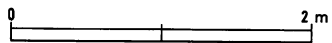
VII D5 h-2土坑



1. 10Y R% 褐色土 しまりなし。炭化物、褐色土ブロックを含む。
2. 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。炭化物を含む。



VII D5 i土坑



第301図 土坑(12)

遺物 (第316図、写真図版223)

1318は組縄縄文を地文とする。底部付近は無文の部分があるが、地文施文後に磨り消したものである。意図的か否かは不明であるが、磨り消しはむらがあり、装飾性を意識したものとは考えにくい。胎土には繊維が多く含まれる。他に木目状捺糸文の土器片が埋土上位から出土している。石器はフレーク5点が埋土から出土したのみである。

時期 出土遺物から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 5 i 土坑 (遺構番号251)

遺構 (第301図、写真図版117)

VII D 5 i 住居跡の埋土観察用のベルトで確認した。同住居の埋土と明瞭に区別され、それと異なる、より新しい遺構と考えられた。当初は同住居の単一遺構と考えられたため、本土坑の大部分を、同住居の埋土と誤って掘り過ぎてしまい、残された埋土断面で形状・規模を推定し把握した。

平面形は楕円形で、長軸方向はN-72°-Wであると推定される。壁はやや外傾する。規模は、開口部径136×194cm、底部径116×160cm、深さ14cmである。埋土は3層に分けられるが、黒褐色土を主体とする。壁・底面ともVII D 5 i 住居跡の埋土である黒褐色土である。

遺物 ベルトとして残した部分から、縄文時代前期の網目状捺糸文・木目状捺糸文・捺糸文の土器片が10数点出土した。石器はフレークが7点出土したのみである。

時期 検出面・出土遺物から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 5 i - 2 土坑 (遺構番号252)

遺構 (第302図、写真図版117)

VII D 5 i - 3 住居跡の床面で検出した。同住居の焼土の下に位置することから、本土坑は同住居に先行するものと考えられる。平面形は円形で、壁はやや外傾する。規模は、開口部径118×120cm、底部径94×98cm、深さ64cmである。埋土は5層に分かれるが、自然堆積の様相を示し、第2層、第3層には基盤層起源の黄褐色土ブロックが混入する。底面は基盤層で、少し凹凸があるが、全体としてはほぼ水平である。南北中軸線上に副穴が2個検出された。規模は、中央部に位置するものが径10cm、深さ5cm、南壁際に位置するものが径15cm、深さ7cmである。遺物は出土していない。

時期 重複関係から、縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦD 5 i - 3 土坑 (遺構番号253)

遺構 (第302図)

ⅦD 5 i 住居跡の床面で検出した。ⅦD 4 h - 4 住居跡とも重複し、同住居の周溝をこわしていることから、本土坑のほうが新しいと考えられる。平面形は隅丸長方形で、長軸方向はN-35°-Eである。壁はほぼ直立する。規模は開口部径110×160cm、底部径86×140cm、深さ5cmである。埋土は調査の不備により断面実測図をとらなかったが、10YR5/6黄褐色シルトを主体とし、10YR4/4褐色土が混入する。固く締まっている。ⅦD 5 i 住居跡のそれに似た暗褐色土である。底面は基盤層である黄褐色土で、凹凸は殆どない。東壁際の一部と西壁際に周溝が巡る。幅12cm~18cm、深さ10cm程度である。

遺物 埋土から、縄文時代前期に属する木目状撚糸文・原体側面圧痕の土器片10数点が出土している。

時期 重複関係から、縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦD 5 i - 4 土坑 (遺構番号254)

遺構 (第302図、写真図版118)

ⅦD 5 i - 3 住居跡の床面において検出した。本土坑の埋土最上部には、同住居に伴う貼り床と想定される黄褐色粘土が、5cm程度の厚さに堆積しており、本土坑は同住居に先行すると考えられる。平面形は円形で、壁は北側がやや外傾し、南側はほぼ直立する。規模は開口部径104×110cm、底部径74×84cm、深さは56cmである。埋土は7層に分けられるが、第1層はⅦD 5 i - 3 住居跡の貼り床と考えられる黄褐色土で、第2層~第7層は自然堆積の様相を示す。第2層は黒褐色土で固くしまっており、他は崩落土を含み締まりを欠く。底面は基盤層である黄褐色土で、凹凸は殆どなく、ほぼ水平である。遺物は出土していない。

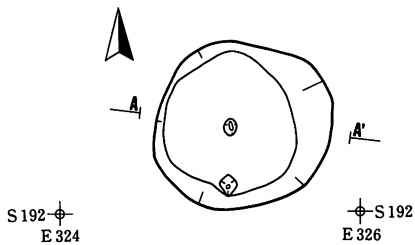
時期 重複関係から、縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦD 6 d 土坑 (遺構番号255)

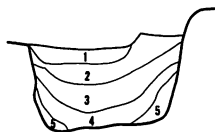
遺構 (第302図、写真図版118)

西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層下位で検出した。西側南壁の一部は掘り過ぎてしまった。平面形は小判形で、長軸方向はN-70°-Wである。壁はほぼ直立する。規模は開口部径116×216cm、底部径100×200cm、深さ41cmである。埋土は3層に分けられるが、褐色土を主体とする。底面はほぼ平坦であるが、斜面に沿って傾斜し、比高最大値18cmである。遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

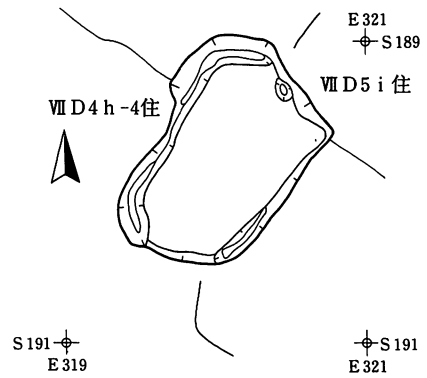


—A— L = 262.400m —A'



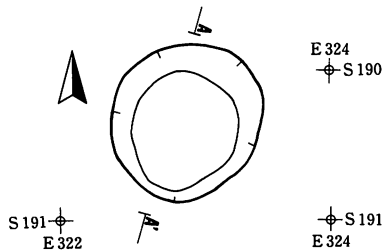
- | | | |
|---------------|---------|----------------------|
| 1. 10 Y R 1/2 | 黒色土 | しまりあり。 |
| 2. 10 Y R 2/3 | 黒色土 | しまりなし。黄褐色土を含む。 |
| 3. 10 Y R 2/3 | 暗褐色土 | しまりなし。黄褐色土をブロック状に含む。 |
| 4. 10 Y R 2/3 | にぶい黄褐色土 | しまりなし。 |
| 5. 10 Y R 2/3 | 明黄褐色土 | しまりあり。 |

VII D 5 i -2土坑

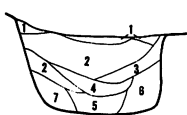


埋土 10 Y R 2/3 黄褐色土 しまりあり。褐色土を含む。

VII D 5 i -3土坑

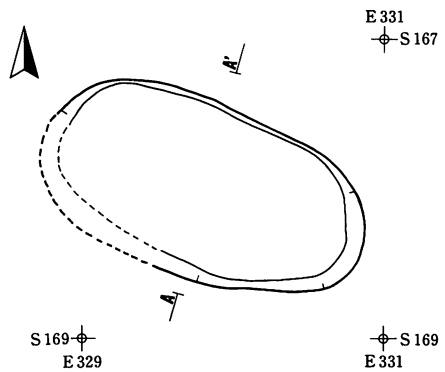


—A— L = 262.300m —A'



- | | | |
|---------------|---------|---------------|
| 1. 10 Y R 2/3 | 黄褐色土 | しまりあり。 |
| 2. 10 Y R 2/3 | 黒褐色土 | しまりあり。 |
| 3. 10 Y R 2/3 | 暗褐色土 | しまりなし。 |
| 4. 10 Y R 2/3 | にぶい黄褐色土 | しまりなし。 |
| 5. 10 Y R 2/3 | 暗褐色土 | しまりなし。 |
| 6. 10 Y R 2/3 | 黄褐色土 | しまりなし。 |
| 7. 10 Y R 2/3 | 明黄褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 |

VII D 5 i -4土坑

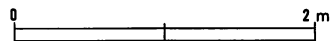


—A— L = 270.900m —A'



- | | | |
|---------------|-------|-----------|
| 1. 10 Y R 2/3 | 褐色土 | 固くしまっている。 |
| 2. 10 Y R 2/3 | 明黄褐色土 | しまりなし。 |
| 3. 10 Y R 2/3 | 黄褐色土 | しまりあり。 |

VII D 6 d土坑



ⅦD 6 e 土坑 (遺構番号256)

遺構 (第303図、写真図版118)

西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層下位で検出した。南側は斜面のため流失している。南東隅で、ⅦD 6 e - 2 土坑と僅かに重複するが、新旧関係を判断することはできなかった。平面形は楕円形で、長軸が斜面にほぼ平行し、その方向はN-70°-Wである。壁はほぼ直立する。規模は、長軸方向が開口部径 210 cm、底部径175cmで、短軸方向は推定値 170 cm程度、深さは58cmである。埋土は 5 層に分けられるが、暗褐色土層および基盤層起源の自然堆積の様相を示す。底面は小さな凹凸が数箇所に認められるが、人工的なものとは考えられない。全体としてはほぼ水平である。

遺物 底面から、縄文時代前期の木目状撚糸文・撚糸文の土器片が10数点出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代に属するものと推定される。

ⅦD 6 e - 2 土坑 (遺構番号257)

遺構 (第303図、写真図版118)

西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層下位で検出した。南側は斜面のため流失している。北側でⅦD 6 e 土坑と僅かに重複するが、新旧関係を判断することはできなかった。平面形は小判形で、長軸が等高線にほぼ直交し、その方向はN-15°-Wである。壁は外傾する。規模は、短軸方向が開口部径 114 cm、底部径88cmで、長軸方向は推定値 130 cm程度、深さは50 cmである。埋土は 7 層に分けられるが、暗褐色土層と基盤の黄褐色土層を起源とし、自然堆積の様相を示す。底面は基盤層である黄褐色土で小さな凹凸が数箇所に認められるが、人工的なものとは考えられない。全体としては斜面に沿って傾斜し、最大比高11cmである。遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

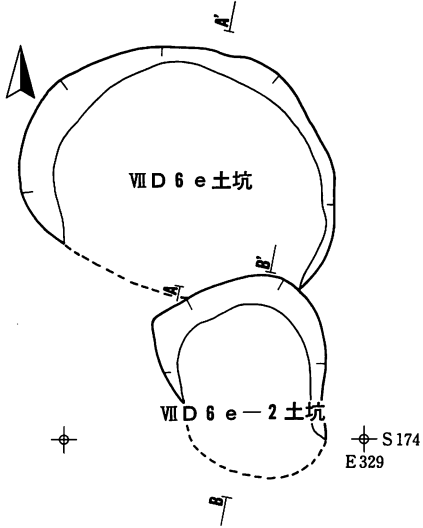
ⅦD 6 f 土坑 (遺構番号258)

遺構 (第303図、写真図版119)

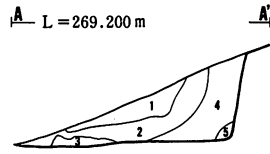
西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層下位で検出した。平面形は、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形で、その方向はN-70°-Wである。壁は南側がやや外傾するが、他はほぼ直立する。規模は、開口部径90×120 cm、底部径70×105 cm、深さ30cmである。埋土は第 3 層・第 4 層の暗褐色土を主体とし、第 2 層がその後に堆積している。底面は基盤層である黄褐色土で、斜面に沿ってやや傾斜し、最大比高13cmである。遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

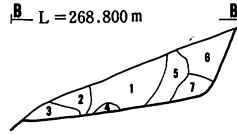
E 329:
 ⊕ S 171



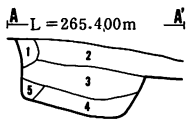
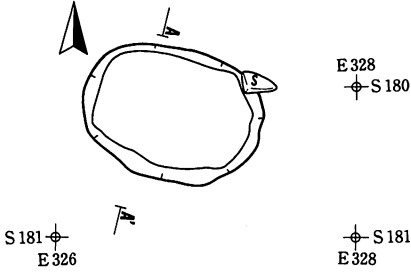
VII D 6 e 土坑・VII D 6 e-2 土坑



1. 10Y R% 褐色土 しまりあり。
2. 10Y R% 黄褐色土 固くしまっている。
3. 10Y R% 暗褐色土 固くしまっている。
4. 10Y R% 黄褐色土 固くしまっている。
5. 10Y R% 明黄褐色土 固くしまっている。

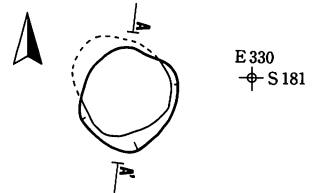


1. 10Y R% 暗褐色土 しまりあり。
2. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
3. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。
4. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。
5. 10Y R% 褐色土 しまりあり。
6. 10Y R% 明黄褐色土 しまりなし。
7. 10Y R% 明黄褐色土 しまりなし。



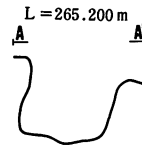
1. 7.5Y R% 暗褐色土 粘土質土。しまりあり。
2. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。
3. 7.5Y R% 暗褐色土 固くしまっている。
4. 7.5Y R% 暗褐色土 固くしまっている。
5. 10Y R % 暗褐色土 しまりなし。

VII D 6 f 土坑

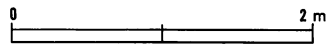


S 182 ⊕
 E 228

⊕ S 182
 E 330



VII D 6 f-2 土坑



第303図 土坑(14)

Ⅶ D 6 f - 2 土坑 (遺構番号259)

遺構 (第303図、写真図版119)

西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層下位で検出した。平面形は円形で、壁は斜面上方に当たる北側が内傾し、南側は逆にやや外傾、東西壁はほぼ直立する。規模は、開口部径60×70cm、底部径55×70cm、深さ55cmである。埋土は調査の不備により実測図をとれなかった。底面は基盤層である黄褐色土で凹凸があり、中央部がやや低い。

遺物 検出面・出土遺物から縄文時代に属するものと推定される。

Ⅶ D 6 g 土坑 (遺構番号260)

遺構 (第304図、写真図版119)

西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層で検出した。平面形は、長軸が等高線に直交する楕円形で、その方向はN-30°-Eである。壁は外傾気味に立ち上がった後、開口部付近で内湾気味に大きく外傾する。規模は開口部径60×80cm、底部径37×57cm、深さ49cmである。埋土は4層に分けられるが、再堆積層起源と考えられる第3層褐色土を主体とする。底面は基盤層である黄褐色土で、中央部がやや低くなっている。

遺物 (第316図、写真図版224)

1319は単節斜縄文の地文のみの深鉢であるが、器形・器厚・焼成等から縄文時代後晩期のものと思われる。他に、埋土から縄文時代前期と思われる単節斜縄文・撚糸文の小破片が出土している。1320は側面観が鋸歯状で交互に剝離した可能性がある。図示した他に小型の磨製石斧の基部のごく一部が残存したもの1点、半円状花崗岩質岩が1点、フレークが12点出土した。

時期 検出面・出土遺物から、縄文時代に属するものと推定される。

Ⅶ D 6 h 土坑 (遺構番号261)

遺構 (第304図、写真図版119)

西尾根南斜面に位置する。新期の道路下、小角礫を含む暗褐色土層下位で黒褐色土の円形プランとして検出した。平面形は円形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は、開口部径100×105cm、底部径80×72cm、深さ16cmである。埋土は3層に分けられるが、上位は暗褐色土、下位は黒褐色土である。底面は基盤層である黄褐色土で、小さな凹凸があり、中央部がやや低い。遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

ⅦD 8 c 土坑 (遺構番号262)

遺構 (第304図、写真図版119)

西尾根東斜面中腹に位置する。ⅦD 8 c 住居跡の斜面下方の、小角礫を含む暗褐色土層で検出した。同住居と本土坑との新旧関係は不明である。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径 140 × 157 cm、底部径 125 × 135 cm、深さ 56 cm である。埋土は褐色土の単層である。底面は基盤層である黄褐色土で、小さな凹凸があり、全体としては中央部がやや低く、最大比高 9 cm である。

遺物 (第317図、写真図版224)

1324の櫛歯状沈線は7本程度を1単位とする。焼成は良好で硬質である。1325～1328は同一個体である。大波状口縁で頂部は円形突起となりやや窪む。口縁部は2段階に複合しており、半截竹管が連続刺突される。口縁胴部には半截竹管による平行沈線が展開し、要所にボタン状突起が配される。1331は胴部破片である。半截竹管平行沈線による弧線が展開する。

時期 検出面・出土遺物から、縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦD 9 a 土坑 (遺構番号263)

遺構 (第304図、写真図版120)

西尾根東斜面中腹に位置する。表土下の小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。平面形はやや東西方向に長い歪な円形で、断面形はフラスコ状である。規模は開口部径 105 × 110 cm、底部径 117 × 130 cm、深さ 43 cm である。埋土は2層に分けられ、上位は基盤層起源、下位は再堆積層起源と考えられ、人為的な埋め戻しが行われたことが明瞭に観察された。底面は小さな凹凸がある他、全体としては、やや南側が低い。

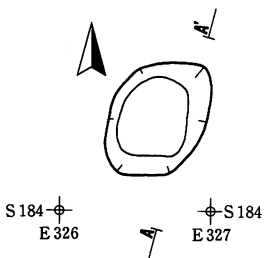
遺物 埋土から縄文時代前期の土器小片が出土しているが図化に耐えないので割愛した。

時期 検出面・出土遺物から、縄文時代前期に属するものと推定される。

ⅦD 9 b 土坑 (遺構番号264)

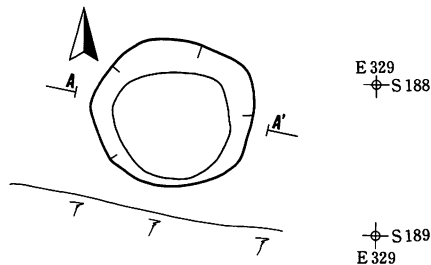
遺構 (第305図、写真図版120)

西尾根東斜面中腹のやや平坦となる傾斜変換点に位置する。表土下の、小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。平面形は円形で、壁はやや内傾気味に立ち上がった後、大きく内傾し、さらに外反する。全体としてはフラスコ状の断面形である。規模は、開口部径 100 × 105 cm、底部径 157 × 174 cm、深さは 134 cm である。埋土は7層に分けられるが、再堆積層起源と考えられる褐色土を主体とする。中位と最下位には、崩落土である暗褐色土が混入する。底面は、小さな凹凸があるが、全体としてはほぼ平坦で水平である。



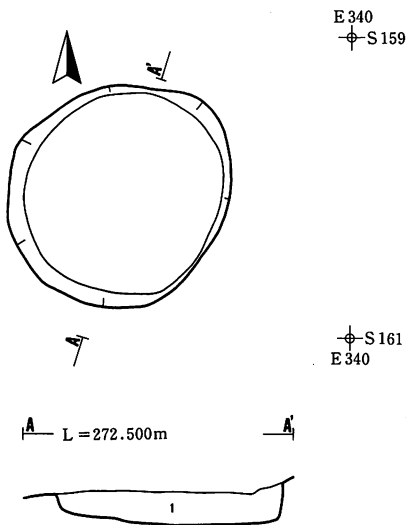
1. 10 Y R 7/4 褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
2. 10 Y R 7/4 褐色土 固くしまっている。小角礫を含む。
3. 10 Y R 7/4 褐色土 しまりあり。炭化物、小角礫を含む。
4. 10 Y R 7/4 明黄褐色土 しまりあり。小角礫を含む。

VII D6 g 土坑



1. 7.5 Y R 7/3 暗褐色土 しまりなし。
2. 7.5 Y R 7/3 黒褐色土 しまりあり。
3. 7.5 Y R 7/3 極暗褐色土 しまりあり。
4. 7.5 Y R 7/3 黒褐色土 しまりあり。

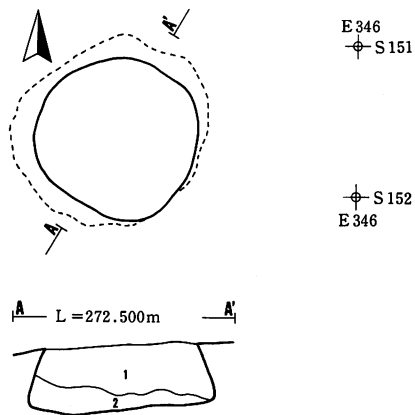
VII D6 h 土坑



1. 7.5 Y R 7/4 褐色土 しまりなし。小角礫を含む。

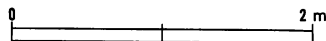
VII D8 c 土坑

E 340
⊕ S 159



1. 10 Y R 7/4 にふい黄橙色土 固くしまっている。小角礫を多く含む。
2. 10 Y R 7/4 褐色土 固くしまっている。

VII D9 a 土坑



第304図 土坑(15)

遺物（第318図、写真図版225）

〈土器〉1333・1334は底面から横倒しの状態で出土したものである。内部の土をフローティングによって処理したが、特別のものは検出されなかった。1333は6個の頂部を有する波状口縁の土器である。頂部から短い隆帯を垂下させ、隆帯上には棒状工具による下方向からの刺突が施される。文様帯は口縁部から頸部におよび、棒状又は竹管の外面による弧状ないし平行沈線が施文される。地文はRLを結束させて縦回転したものである。内面は、ハケメ状の調整が施されている。1334は4つ頂部を有する緩い波状口縁の土器である。縦位の第一種結束羽状縄文を地文とし、口縁部に2段の縄を原体とする圧痕が施される。口縁頂部下には渦巻き状に、その下には山形状のモチーフが展開し、頂部と頂部の間は逆山形状のそれである。しかし対称性は大きく崩れていて、部分により位置・形状・条間の幅等が異なる。文様帯最下部は2条の平行な原体圧痕によって胴部地文区画されるが、区画性は弱い。内面は棒または篋状の工具によりミガキがかけられ、とくに口縁部内面は丁寧である。1335は埋土から破片で出土したものである。口縁部は欠損している。残存部最上部に横位沈線が観察されるが、棒状工具又は竹管の外面によるものである。地文は木目状撚糸文であるが、原体は、R1段の縄の先端部を軸中央部に挟み込み、そこから引き出したものを一旦結んだ後に、軸の両端方向にそれぞれ巻き付けたものであろう。1336は埋土2層上位から一括出土したものである。口縁部分は欠損している。内面の底部付近はススの付着が著しい。

〈石器〉埋土から、磨石の欠損品、岩手火山起源の溶岩各1点が出土しているが図示は省略した。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期末葉に属すると考えられる。

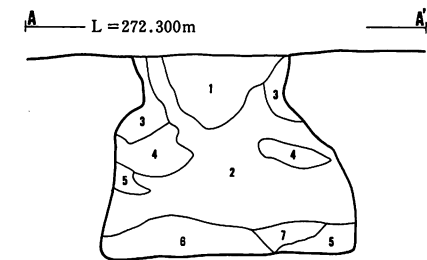
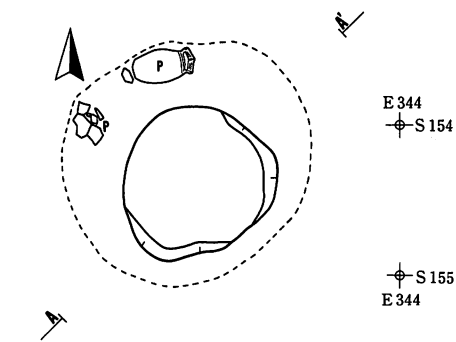
VII D 9 b - 2 土坑（遺構番号265）

遺構（第305図、写真図版120）

西尾根東斜面中腹のやや平坦となる部分から再び傾斜が急になる傾斜変換点に位置する。基盤層上面で検出した。平面形はやや南北に長い歪な円形で、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部径90×115cm、底部径165×180cm、深さ78cmである。埋土は3層に分けられるが、再堆積層起源と考えられる褐色土を主体とする。底面はほぼ平坦であるが、斜面に沿ってやや傾斜し、比高最大値4.5cmである。

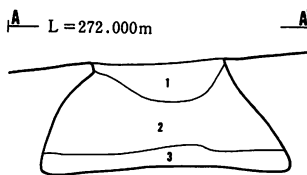
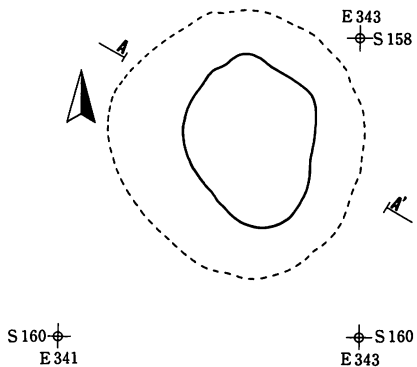
遺物（第318図、写真図版225）

1338は波状口縁の頂部破片である。口縁に沿って2条の凹線が引かれ、頂部からは同じく2条の凹線が垂下する。1339は弁状突起の破片で外側が剥落しており詳細は分からない。他に埋土から、縄文時代前期の木目状撚糸文・多軸絡条体・単節斜縄文・網目状撚糸文の土器小破



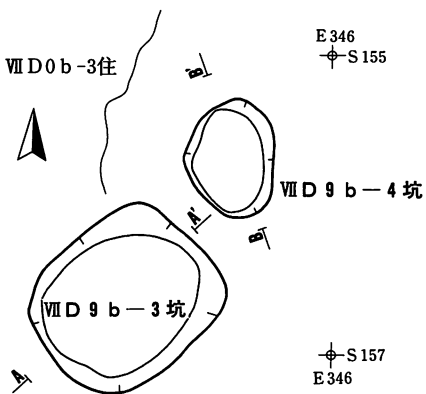
1. 10 Y R% 暗褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
2. 10 Y R% 褐色土 しまりあり。炭化物、暗褐色土を含む。
3. 10 Y R% 褐色土 しまりあり。褐色土を含む。崩落土。
4. 10 Y R% 褐色土 しまりあり。崩落土。
5. 10 Y R% 明黄褐色土 固くしまっている。角礫を含む。崩落土。
6. 10 Y R% 暗褐色土 しまりなし。
7. 10 Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。

VII D9 b 土坑

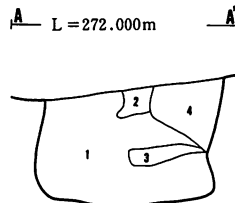


1. 10 Y R% 褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
2. 10 Y R% 褐色土 しまりなし。炭化物、小角礫を少量含む。
3. 10 Y R% 暗褐色土 しまりあり。

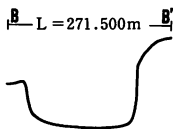
VII D9 b-2 土坑



VII D9 b-3 土坑・VII D9 b-4 土坑



1. 10 Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物、小角礫を含む。
2. 10 Y R% 褐色土 しまりあり。
3. 10 Y R% 明黄褐色土 しまりなし。小角礫を多く含む。
4. 1層と2層の混土。しまりなし。



第305図 土坑(16)

片が出土した。石器は、岩手火山起源の溶岩1点、フレーク3点が出土したのみである。

時期 検出面・出土遺物から、縄文時代に属するものと推定される。

ⅦD9b-3 土坑 (遺構番号266)

遺構 (第305図、写真図版120)

西尾根南斜面に位置する。基盤層で検出した。平面形は楕円形で、長軸が等高線にほぼ平行し、その方向はN-45°-Eである。壁は北側が内傾後にやや外傾、他はほぼ直立する。規模は、開口部径105×123cm、底部径83×106cm、深さ90cmである。埋土は、中位に崩落土を含み、暗褐色土を主体とする。床面は基盤層で、中央部分がやや低く、最大比高8cmである。

遺物 (第319図、写真図版225・226)

1340はやや外反する頸部破片で、半截竹管により数段の波状平行沈線が施される。1341は花弁状口縁で、胴部は撚糸文が施文される。他に埋土から、縄文時代前期のR撚糸文・網目状撚糸文・多軸絡条体・縦位綾絡文等の土器片が出土しているが、地文のみの胴部破片であり図示は割愛した。石器は、埋土から石錘が10点出土した。いずれも古生界北上産地産（9点は凝灰岩、1点は硬砂岩）で、長軸方向に剝離が施されている。大きさも概ね等しい。

時期 検出面・出土遺物から縄文時代に属するものと推定される。

ⅦD9b-4 土坑 (遺構番号267)

遺構 (第305図、写真図版120)

西尾根南斜面に位置する。ⅦD9b-3住居跡の西壁で検出した。調査の不備により埋土断面図をとれなかったが、検出状況からは本土坑が同住居に先行するものと考えられる。

平面形は小判形で、長軸は等高線にほぼ平行し、その方向はN-4°-Eである。壁はほぼ直立する。規模は、開口部径60×80cm、底部径45×70cm、深さ40cmである。底面は基盤層である黄褐色土で小さな凹凸が数箇所認められるが、人工的なものとは考えられない。南壁際に副穴が1個検出された。径は22×27cm、深さは17cmである。その性格については不明である。

遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

ⅦD9h 土坑 (遺構番号268)

遺構 (第306図、写真図版121)

西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層で検出した。平面形は、長軸が等高線に斜交する小判形で、その方向はN-60°-Wである。壁は北側がやや外傾する。南側は斜面のた

め残存状況が悪い。規模は、開口部径100×118cm、底部径90×104cm、深さ24cmである。埋土は2層に分かれ、暗褐色土を主体とする。底面直上は基盤層起源の褐色土である。底面は基盤層である黄褐色土で、斜面に沿って傾斜し、比高最大値20cmである。遺物は出土していない。

時期 検出面から縄文時代に属するものと推定される。

VII D 9 h - 2 土坑 (遺構番号269)

遺構 (第306図、写真図版121)

西尾根南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層で検出した。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は開口部径65×75cm、底部径64×67cm、深さ27cmである。埋土は2層に分かれ、暗褐色土を主体とし、壁際および底面直上は基盤層起源と考えられる層が堆積する。底面は、基盤層である黄褐色土で、小さな凹凸がある。副穴が1個、底面中央部に位置する。規模は、径18×20cm、深さ8cmである。やや開口部がやや南側に傾斜する。性格は不明である。遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

VIII C 1 h 土坑 (遺構番号270)

遺構 (第306図、写真図版127)

西尾根東斜面に位置する。VIII C 1 h 住居跡の床面下およびVIII C 1 h - 2 住居跡の西壁から検出された。本土坑の断面から、VIII C 1 h 住居跡は本土坑の埋土の上に貼り床をしていると観察された。よって本土坑が同住居に先行すると考えられる。またVIII C 1 h - 2 住居跡との関係では、同住居の埋土観察から、本土坑の方が同住居に先行すると考えられる。平面形はやや歪な円形で、壁はほぼ直立する。規模は、最大値で開口部径150cm、底部径132cm、深さ40cmである。埋土は堆積状況に規則性を見出だし難く、人為的な埋め戻しの可能性がある。底面は基盤層である黄褐色土で、凹凸はなく平坦であるが、斜面にそってやや傾斜し、比高最大値7.5cmである。

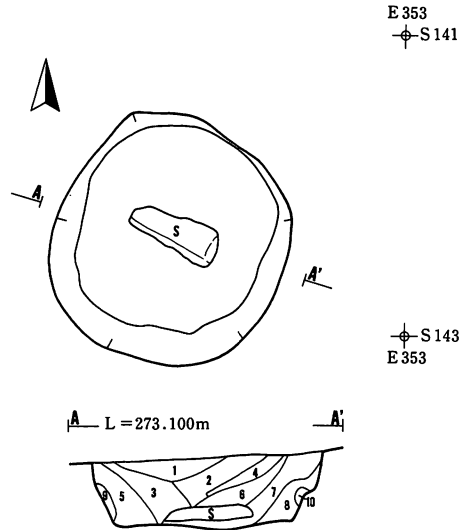
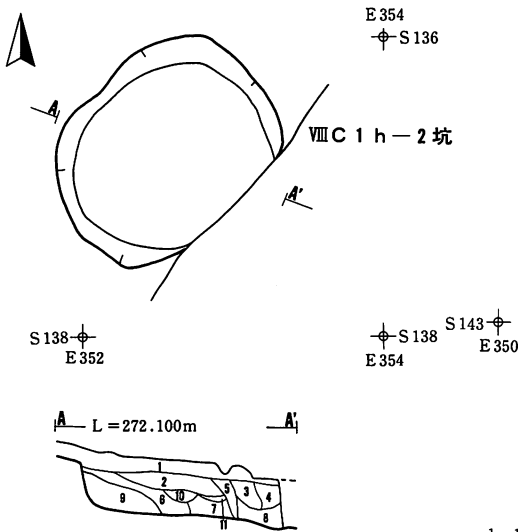
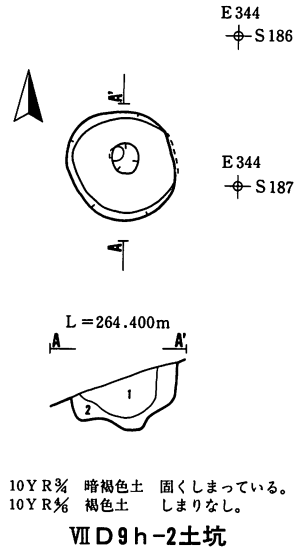
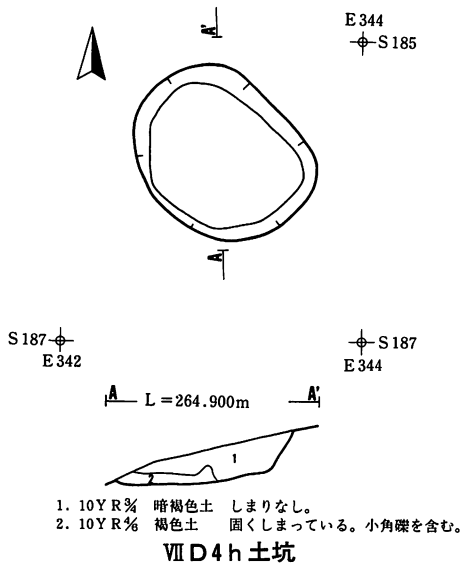
遺物 埋土から縄文時代前期の網目状撚糸文・無文の土器小破片が各1点出土している。

時期 重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属するものと推定される。

VIII C 1 i 土坑 (遺構番号271)

遺構 (第306図、写真図版121)

西尾根東斜面の中腹部緩やかな傾斜地に位置する。小角礫を含む暗褐色土層下位で検出した。

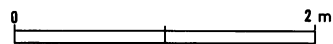


1. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。炭化物を縞状に、焼土粒、小角礫を含む。
2. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
3. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。炭化物、小角礫を含む。
4. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物、小角礫を含む。
5. 7.5Y R% 明褐色土 しまりなし。砂、小角礫を含む。
6. 7.5Y R% 明褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
7. 7.5Y R% 灰褐色土 しまりなし。炭化物を含む。
8. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
9. 7.5Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
10. 7.5Y R% 明褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
11. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を含む。

1. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。炭化物、小角礫を含む。
2. 7.5Y R% 灰褐色土 しまりなし。炭化物、小角礫、明黄褐色土を含む。
3. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。炭化物、小角礫を少量含む。
4. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
5. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
6. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。砂を多く、炭化物、小角礫を少量含む。
7. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。砂を多く、小角礫を少量含む。
8. 7.5Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
9. 10Y R% 褐色土 しまりなし。炭化物を含む。
10. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりなし。砂を多く含む。

VIII C1 h 土坑

VIII C1 i 土坑



平面形は円形で、壁はやや外傾する。規模は、開口部径 160 cm、底部径 130 cm、深さ 45cm である。埋土は 10 層に分けられるが、6 層までに粉炭を含む。全体に小角礫を含み締めりを欠き、自然堆積の様相を示す。底面は基盤層である黄褐色土で、やや小さな凹凸がみられる。

遺物 (第320図)

床面で検出された礫は、長さ約 60cm・幅約 19cm・厚さ約 8 cm で、北上山地産の珪長質凝灰岩である。使用痕、加工痕は観察されない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

VIII C 2 j 土坑 (遺構番号 272)

遺構 (第307図)

西尾根東斜面中腹に位置する。VIII C 2 j 住居跡の床面下から検出された。検出状況から本土坑は、同住居に先行する。東側は削平されていて不明である。平面形は歪な円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径 173 × 206 cm、底部径 156 × 190 cm、深さ 25cm である。埋土は粉炭と焼土粒を含む褐色土を主体とする。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。壁際に断続的に周溝が巡る。規模は幅 6 ~ 10cm、深さ 5 cm 程度である。副穴が 1 個底面中央部に検出された。規模は径 24 × 26cm、深さ 8 cm である。その性格については不明である。

遺物 (第320図、写真図版 226)

1354 は頸部でやや屈曲する器形で、口唇部は平らである。他に縄文時代前期の、L 撚糸文・L R 単節斜縄文・網目状撚糸文・縦位綾絡文等 20 数点の土器片が出土した。

時期 重複関係・出土遺物から、縄文時代前期に属するものと推定される。

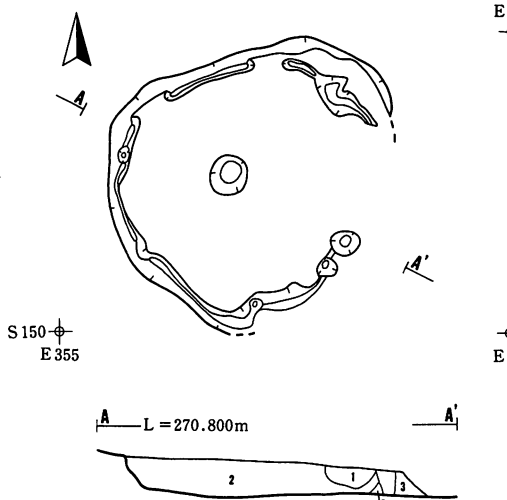
VIII C 2 j - 2 土坑 (遺構番号 273)

遺構 (第307図、写真図版 122)

西尾根東斜面中腹に位置する。VIII C 2 j 住居跡の床面下から検出された。検出状況から、本土坑は同住居に先行する。斜面下方に当たる東側は、木根による攪乱を受け、また壁は一部流失している。平面形は、長軸が等高線にほぼ平行する小判形で、その方向は N-40°-E である。壁はほぼ直立する。規模は開口部径 172 × 246cm、底部径 152 × 220 cm、深さ 22cm である。埋土は焼土粒と粉炭を含む褐色土を主体とし、VIII C 2 j 住居跡の床面を構成している。第 2 層は、同住居に伴う焼土と考えられる。底面は基盤層である黄褐色土で、小さな凹凸があるが全体としてはほぼ水平である。壁際に周溝が全周する。規模は幅 16 ~ 18cm、深さ 4 ~ 8 cm である。

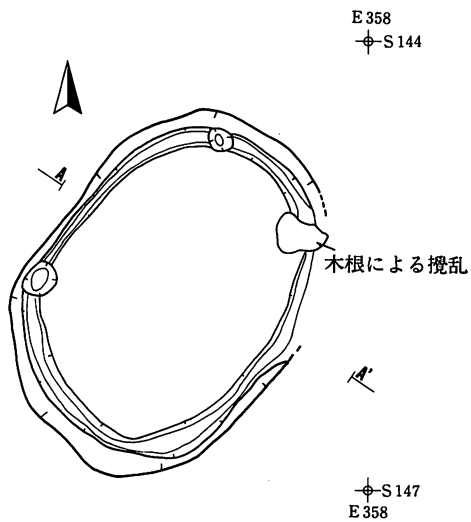
遺物 埋土から縄文時代前期の、R 撚糸文・縦位綾絡文等 4 点の小片が出土している。

時期 重複関係・出土遺物から、縄文時代前期に属するものと推定される。



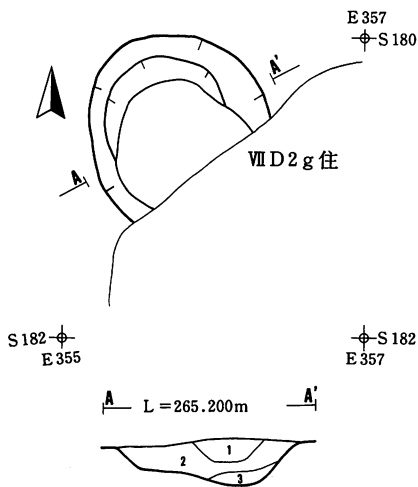
1. 10Y R% 褐色土 しまりなし。炭化物、焼土を含む。
2. 10Y R% 暗褐色土 しまりあり。炭化物、焼土を粒状に含む。
3. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。炭化物、焼土を少量含む。

VIII C 2 j 土坑



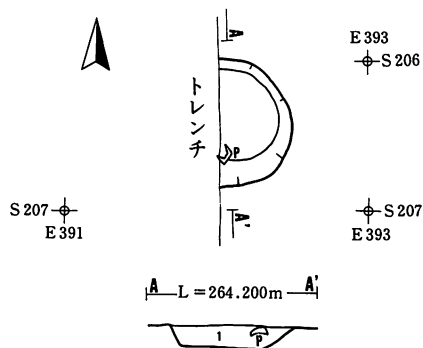
1. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。炭化物、焼土を含む。
2. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。炭化物、焼土を少量含む。

VIII C 2 j-2 土坑



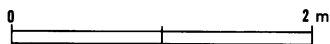
1. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。
2. 10Y R% 褐色土 しまりあり。黒褐色土を含む。
3. 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。

VIII D 2 g 土坑



1. 10Y R¹% 黒色土 しまりあり。炭化物を微量含む。

VIII E 9 b 土坑



VII D 2 g 土坑 (遺構番号274)

遺構 (第307図、写真図版122)

西尾根東麓に位置する。VII D 2 g 住居跡の斜面上方の壁と重複しているが、本遺構の検出が遅れたため新旧関係を明らかにすることはできなかった。平面形は、円形を基調とし、壁は内湾気味に外傾する。規模は開口部径 120 cm 程度、底部径 85 cm 程度、深さは最大 47 cm である。埋土は 3 層に分かれ、上位から黒褐色・褐色・黒褐色土で下層ほどしまっている。底面は基盤層である黄褐色土で、凹凸があり南東部が最も深い。

遺物 埋土から、縄文時代前期の網目状撚糸文の小破片が数点、フレークが 8 点出土した。

時期 重複関係・出土土器から、縄文時代前期に属するものと推定される。

VII E 9 b 土坑 (遺構番号275)

遺構 (第307図、写真図版122)

東尾根南麓の平坦部に位置する。褐色土層を掘り込んでいるが、検出が遅れ基盤層まで下げた段階で、断面で立上がりを確認した。そのため西半分を削剝してしまった。平面形は、径 110 cm の円形と推定され、深さは 20 cm である。壁はやや外傾する。埋土は黒色土を主体とし、微細な炭化物を微量含む。底面は基盤層である黄褐色土で、やや凹凸がある。

遺物 (第320図、写真図版226)

1355 は床面直上から出土したものである。人為的埋設とは考えにくい。胎土・焼成は他の縄文時代前期の土器に等しい。

時期 出土遺物から、縄文時代前期に属するものと推定される。

IX D 1 g 土坑 (遺構番号276)

遺構 (第308図、写真図版122)

東西尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で検出した。平面形は歪な円形で、壁はほぼ直立する。規模は開口部径 92 × 106 cm、底部径 74 × 80 cm、深さ 40 cm である。埋土は暗褐色土を主体とする。底面直上の西側に焼土と粉炭が分布する。底面との間に間層を挟み、底面に焼成が及んでいないことから、異地性のものと考えられる。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。南側に礫が検出されたが、焼成をうけていないことから焼土と関わる可能性は低い。掘り込みも確認されない。

遺物 埋土から縄文時代前期の土器極小片が 1 点出土した。

時期 検出面から、縄文時代前期に属するものと推定される。

IX D 1 g - 2 土坑 (遺構番号277)

遺構 (第308図、写真図版123)

東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で検出した。平面形は歪な円形で、壁は、北側は内傾気味に立上がった後外傾、東側はほぼ直立、西側はやや外傾する。規模は、開口部径 134 × 152 cm、底部径 104 × 114 cm、深さ62cmである。底面は基盤層である黄褐色土で小さな凹凸が数箇所認められる。底面中央の南北軸線に溝が検出された。規模は幅13~20cm、深さ9~10cmである。その性格については不明である。

遺物 (第320図、写真図版226)

1356、1357の他、埋土中位から縄文時代前期の横位綾絡文の土器片が出土している。

時期 検出面・出土遺物から縄文時代に属するものと推定される。

IX D 2 h 土坑 (遺構番号278)

遺構 (第308図、写真図版123)

東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で検出した。平面形は歪な円形で、壁は内湾気味に外傾する。規模は、開口部径 120 × 145 cm、底部径 100 × 117cm、深さ45cmである。埋土は3層に分かれるが、黒褐色土を主体とする。底面は基盤層である黄褐色土で、やや斜面に沿って傾斜し、比高最大値21cmである。底面のほぼ南北中軸線上に副穴を2個検出したが、その性格については不明である。

遺物 埋土から縄文時代前期の、組縄縄文・横位2条の綾絡文・LR単節斜縄文計5点の土器小片が出土している。

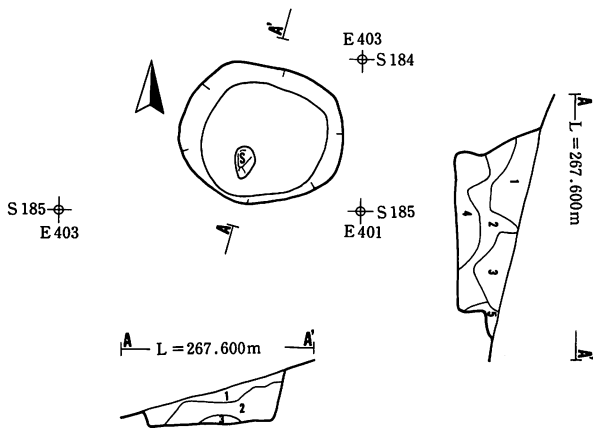
時期 検出面・出土遺物から、縄文時代に属するものと推定される。

IX D 3 g 土坑 (遺構番号279)

遺構 (第308図、写真図版123)

東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で検出した。平面形は、西側がやや不整であるが概ね円形で、壁はほぼ直立する。規模は開口部径83×87cm、底部径64×70cm、深さ39cmである。埋土は2層に分けられるが、褐色土を主体とする。底面は、基盤層である黄褐色土で、小さな凹凸があり、中央部が幾分低い。遺物は出土していない。

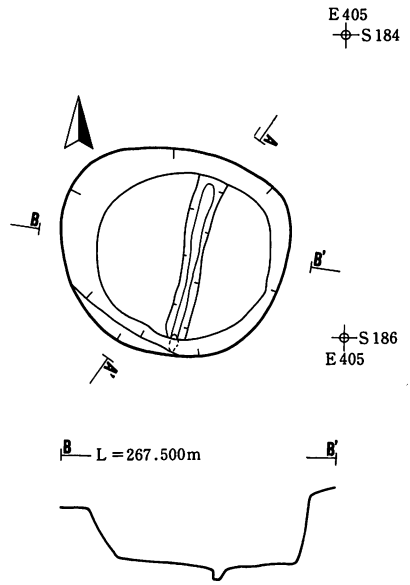
時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。



1. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
2. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。
3. 5 Y R% 暗赤褐色土 しまりあり。焼土を含む。

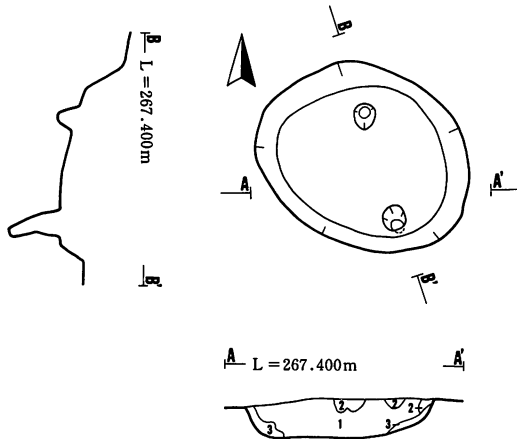
IX D1 g 土坑

E 405 S 185
E 406 S 185



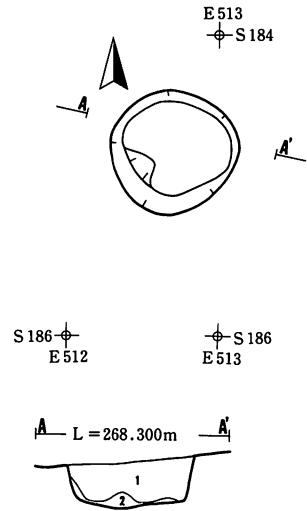
1. 10Y R% 暗褐色土 しまりあり。炭化物を少量含む。
2. 10Y R% 褐色土 ややしまりあり。
3. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。
4. 10Y R% 褐色土 しまりあり。炭化物を少量含む。
5. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。

IX D1 g-2 土坑



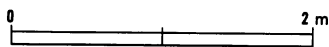
1. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりあり。炭化物、小角礫を含む。
2. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。
3. 10Y R% 褐色土 ややしまりあり。

IX D2 h 土坑



1. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
2. 7.5Y R% にぶい褐色土 しまりあり。

IX D3 g 土坑



第308図 土坑 (19)

IX D 3 h 土坑 (遺構番号280)

遺構 (第309図、写真図版124)

東尾根南斜面に位置する。IX D 3 h 住居跡の床面下から検出された。検出状況から、本土坑はN-47°-Wである。壁はやや外傾する。規模は、開口部径 117 × 157 cm、底部径100×145 cm、深さ43cmである。埋土は4層に分けられるが、堆積状況に規則性を見出だし難く、人為的な埋め戻しの可能性がある。底面は基盤層である黄褐色土で、やや凹凸がある。底面において北壁際に10個の小さい副穴と、西壁際および北東寄りの位置にそれよりは大きめの副穴を2個検出したが、その性格については不明である。

遺物 (第320図、写真図版226)

1358が床面から出土した。口縁部で極く緩やかに外反し、胴部でやや膨らみをもつ。口唇部に指頭状圧痕が施され、胴部には綾絡文が横走するが、原体の末端処理によるものであろう。

時期 重複関係・出土遺物から、縄文時代前期に属するものと推定される。

IX D 8 f 土坑 (遺構番号281)

遺構 (第309図、写真図版123)

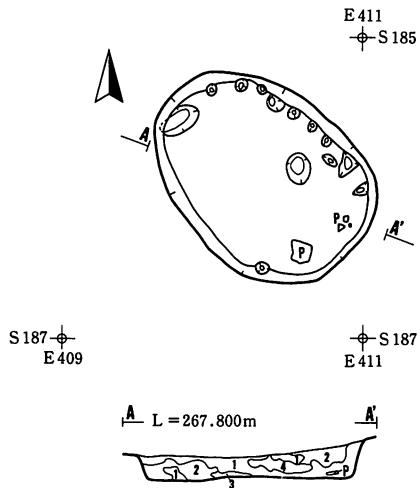
東尾根南斜面の中腹部に位置する。北側でIX D 8 f 住居跡、南側でIX D 8 g - 3 住居跡と重複する。本土坑はIX D 8 f 住居跡の床面で検出されたもので、同住居に先行する。IX D 8 g - 3 住居跡との関係では、同住居の埋土を切って本土坑が構築されたと考えられることから、本土坑の方が新しい。調査の不備により、本土坑の南側を同住居の埋土と誤って掘り過ぎてしまった。

平面形は、南側が不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形で、その方向はN-70°-Eと推定される。壁は緩やかに立ち上がる。規模は、東西方向で開口部径 210 cm、底部径 160 cm、深さは25cmである。埋土は、微細な炭化物を微量含む黒褐色土の単層である。底面は基盤層である黄褐色土でほぼ平坦である。

遺物 (第320図、写真図版226)

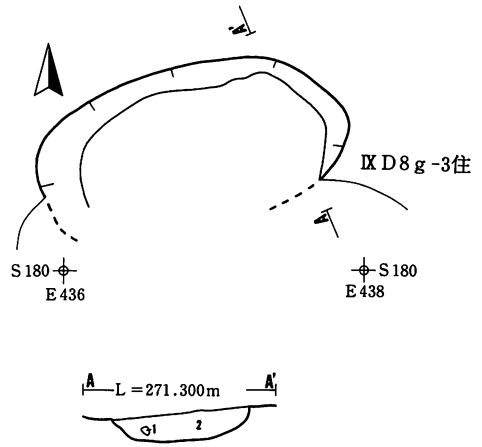
1359は組縄縄文であるが、口唇部にも同一原体により施文される。図示した他に組縄縄文(8点)、横綾絡文(1点)の土器小片が出土している。

時期 重複関係から、縄文時代前期に属するものと推定される。



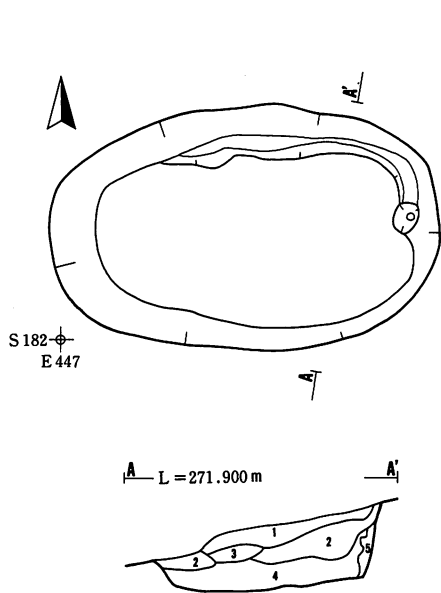
1. 10YR³/4 暗褐色土 しまりなし。
2. 7.5YR³/4 暗褐色土 極めて固くしまっている。
3. 7.5YR³/4 褐色土 しまりなし。
4. 10YR³/4 褐色土 しまりややあり。焼土粒を含む。

IX D 3 h 土坑



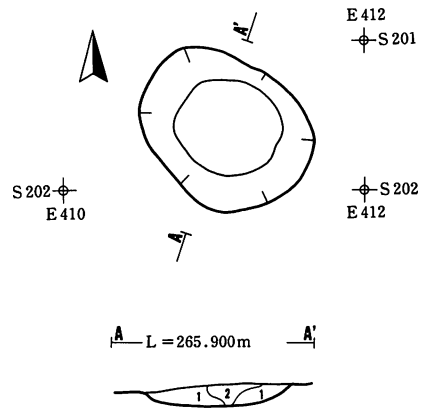
1. 7.5YR³/4 黒褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。
2. 10YR³/4 黄褐色土 しまりあり。

IX D 8 f 土坑



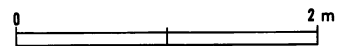
1. 7.5YR³/4 黒色土 しまりなし。
2. 7.5YR³/4 暗褐色土 ややしまりあり。小角礫を含む。
3. 7.5YR³/4 灰褐色土 小角礫を含む。
4. 7.5YR³/4 褐色土 固くしまっている。小角礫を含む。
5. 10YR³/4 褐色土 小角礫を含む。

IX D 0 g 土坑



1. 7.5YR³/4 黒褐色土 固くしまっている。黒色土をブロック状に含む。
2. 7.5YR³/4 褐色土 固くしまっている。明褐色土をブロック状に含む。

IX E 3 a 土坑



IX D 0 g 土坑 (遺構番号282)

遺構 (第309図)

東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。平面形は、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形である。規模は、開口部径 165 × 255 cm、底部径 120 × 210 cmである。上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、ほぼ直立する。深さは53cmである。埋土は5層で構成されるが、非常に固く締まる灰褐色土を主体とする。壁際には崩落土が混入し、全体として自然堆積の様相を示す。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。東壁際に柱穴を1個検出した。径は18×20cm、深さ19cmである。周溝が、東壁際の一部と北壁際に巡る。規模は、幅14～22cm、深さ2～5 cmである。東壁際の周溝が途切れる位置に柱穴が位置する。

遺物 (第321図、写真図版227)

1361・1362は胎土に繊維を混入する組縄縄文の土器片である。1364はノッチ部分が細くない点が特徴的である。1365は両面の平坦部に凹みが数箇所観察される。他に埋土から、縄文時代前期の網目状捺糸文、木目状捺糸文の土器小片が出土している。

時期 出土土器から、縄文時代前期に属すると推定される。

IX E 3 a 土坑 (遺構番号283)

遺構 (第309図、写真図版124)

東尾根南麓の平坦部に位置する。褐色土層上面で検出した。平面形は歪な円形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は、開口部径95×120 cm、底部径60×70cm、深さ17cmである。埋土は微細な炭化物を多く含む黒褐色土を主体とする。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ平坦である。

遺物 (第321図、写真図版227)

1366の1点のみの出土である。やや屈曲した棒状の自然石の一部に磨面が観察される。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

IX D 1 g 土坑 (遺構番号284)

遺構 (第310図、写真図版127)

東西尾根南斜面に位置する。IX D 1 g-3 住居跡の北壁および床面から検出された。同住居の埋土観察から、同住居は本土坑を壊して構築されたと考えられる。南壁と底面の一部は消滅している。平面形は、長軸が等高線にほぼ直交する小判形で、その方向はN-8°-Wである。断面形はフラスコ状である。規模は短軸方向で開口部径105cm・底部径80cmで、長軸方向は、

残存する周溝から、底部で180 cm程度と推定される。深さは60 cmである。埋土は黒色土と褐色土の混土を主体とする。底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。壁際に周溝が検出された。南側は斜面のため消失しているが、全周するものと推定される。規模は、幅6～9 cm、深さ4～5 cmである。遺物は出土していない。

時期 重複関係から、縄文時代前期に属するものと推定される。

X D 2 f 土坑 (遺構番号285)

遺構 (第310図、写真図版125)

西尾根南斜面に位置する。褐色土層を掘り込んで構築されている。平面形は、長軸が斜面に平行する楕円形で、その方向はほぼ東西方向と一致する。壁は北壁はほぼ直立し、南壁はやや外傾する。規模は開口部径170×250 cm、底部径160×220 cm、深さ53 cmである。埋土は、黒色土と褐色土の混土および褐色土を主体とする。底面は基盤層である黄褐色土で、斜面に沿ってやや傾斜し、比高最大値18 cmである。遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

XI B 9 f 土坑 (遺構番号286)

遺構 (第316図、写真図版125)

東尾根東斜面に位置する。基盤層上面で検出した。長軸が等高線に斜交する不整な楕円形で、その方向はN-65°-Wである。壁はやや凹凸があり、全体として外傾する。規模は開口部径85×120 cm、底部径40×65 cm、深さ42 cmである。埋土は締まりを欠く黒褐色土を主体とする。底面はやや凹凸があり、中央部が最も低い。埋土から縄文土器の細片が1点出土している。

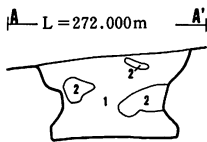
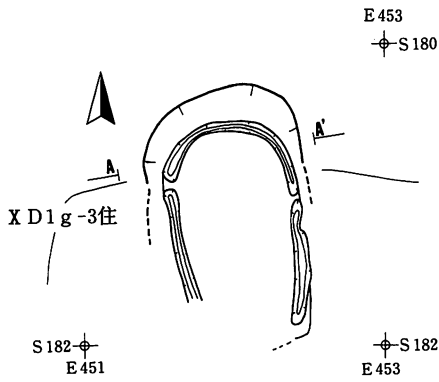
時期 特定する資料を欠き、不明である。

XI B 9 h 土坑 (遺構番号287)

遺構 (第310図、写真図版125)

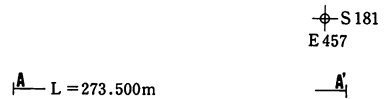
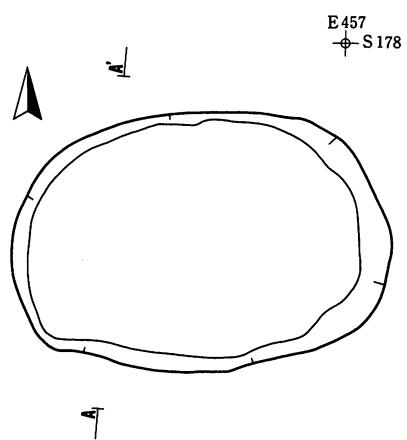
東尾根東斜面に位置する。基盤層上面で検出した。北西部分で攪乱を受けている。長軸が等高線に斜交する不整な楕円形で、その方向はN-65°-Wである。壁はやや凹凸があり、斜面上方にあたる北壁はほぼ直立し、南壁は緩やかに立ち上がる。規模は開口部径80×102 cm、底部径50×80 cm、深さ16 cmである。埋土は微細な炭化物を微量含む黒褐色土による単層である。底面は基盤層である黄褐色土で、やや凹凸がある。遺物は出土していない。

時期 特定する資料を欠き、不明である。



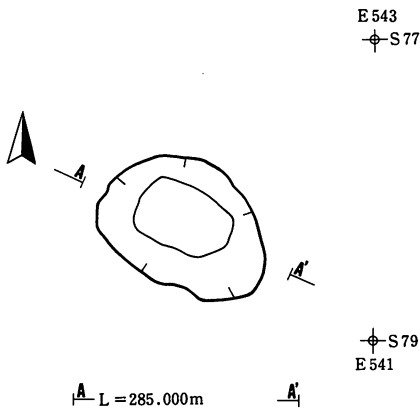
1. 10YR% 黒色土 褐色土との混土。小角礫を含む。
2. 10YR% 黒色土 しまりあり。1層より褐色土少ない。

XD1g 土坑



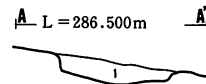
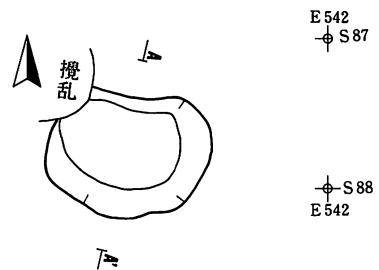
1. 10YR% 黒色土 極めてしまりなし。表土。
2. 7.5YR% 褐色土 小角礫を含む。
3. 7.5YR¹% 黒色土 褐色土を含む。
4. 7.5YR¹% 黒色土 腐植土。小角礫を含む。
5. 10YR% 褐色土 小魚角礫を含む。

XD2f 土坑



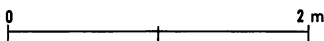
1. 10YR% 黒褐色土 しまりなし。炭化物を微量含む。
2. 10YR% 褐色土 しまりなし。暗褐色土をブロック状に含む。

XI B9f 土坑



1. 10YR% 黒褐色土 しまりあり。褐色土をブロック状に含む。炭化物を微量含む。

XI B9h 土坑



第310図 土坑 (2)

XI B 0 h 土坑 (遺構番号288)

遺構 (第311図、写真図版125)

東尾根東斜面に位置する。基盤層上面で検出した。平面形は、長軸が等高線に斜交する不整な楕円形で、その方向はN-24°-Eである。円形で、壁は、外傾気味に立上がる。規模は、開口部径96×120 cm、底部径68×90cm、深さ33cmである。埋土は4層に分けられるが、褐色土を主体とする。底面は小さな凹凸があるが、全体としてはほぼ水平である。

遺物 (第321図、写真図版227)

1367の他に、埋土から100 g 出土しているが極細片のみである。

時期 時期を特定することは困難であり、不明としておく。

XI B 0 i 土坑 (遺構番号289)

遺構 (第311図、写真図版126)

東尾根東斜面に位置する。基盤層上面で検出した。平面形は不整な円形で、斜面上方に当たる北東壁が緩やかに立ち上がる。他はほぼ直立する。規模は、開口部径80×98cm、底部径42×58cm、深さ40cmである。埋土は微細な炭化物を微量含む黒褐色土を主体とし、斜面上方寄りに崩落土と考えられる黄褐色土が混入する。底面は小さな凹凸はあるが、全体としてはほぼ水平で平坦である。埋土から縄文時代前期のものと思われる無文の土器片が1点、詳細不明の細片1点が出土している。

時期 時期を特定することは困難であり、不明としておく。

XI C 5 f 土坑 (遺構番号290)

遺構 (第311図、写真図版126)

東尾根東斜面に位置する。第IV層黒褐色土層上面で検出した。平面形は円形で壁はほぼ直立する。規模は開口部径77×80cm、底部径64×75cm、深さ20cmである。埋土は黒色土がそのほとんどを占める。底面は基盤層である黄褐色土でややゆるい凹凸がある。遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

XI C 5 f - 2 土坑 (遺構番号290)

遺構 (第311図、写真図版126)

東尾根東斜面に位置する。第IV層黒褐色土層上面で検出した。平面形は円形で、断面形はフラスコ状である。規模は開口部径93×103 cm、底部径110 cm、深さ37cmである。埋土は締めりを欠く黒色土を主体とし、壁際に崩落土を少量含む。底面はほぼ水平で平坦である。

遺物 埋土からR L単節斜縄文の土器片が1点出土したが、図示は省略した。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

XI E 1 c 土坑 (遺構番号292)

遺構 (第311図、写真図版126)

C区西緩斜面に位置する。基盤層上面で検出した。平面形は円形で、壁はやや外傾する。規模は、開口部径98×104 cm、底部径67×74cm、深さ57cmである。埋土は8層に分かれるが、上位は黒色土～黒褐色土、下位は黄褐色土を基調とし、全体としてU字状～レンズ状に堆積している。底面は基盤層である黄褐色土で、中央部が最も深い。遺物は出土していない。

時期 検出面から、縄文時代に属するものと推定される。

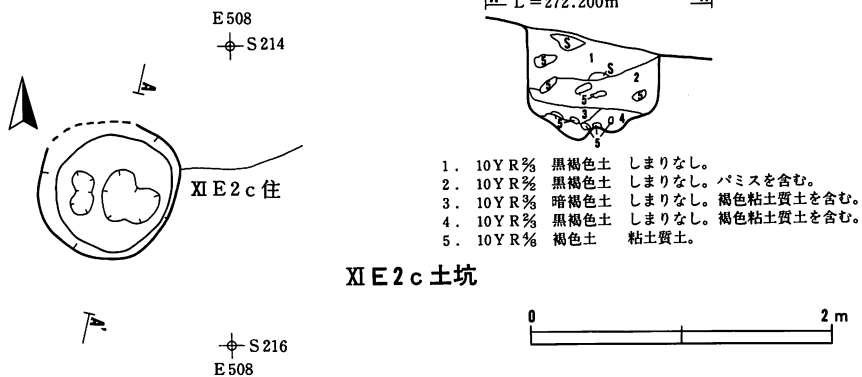
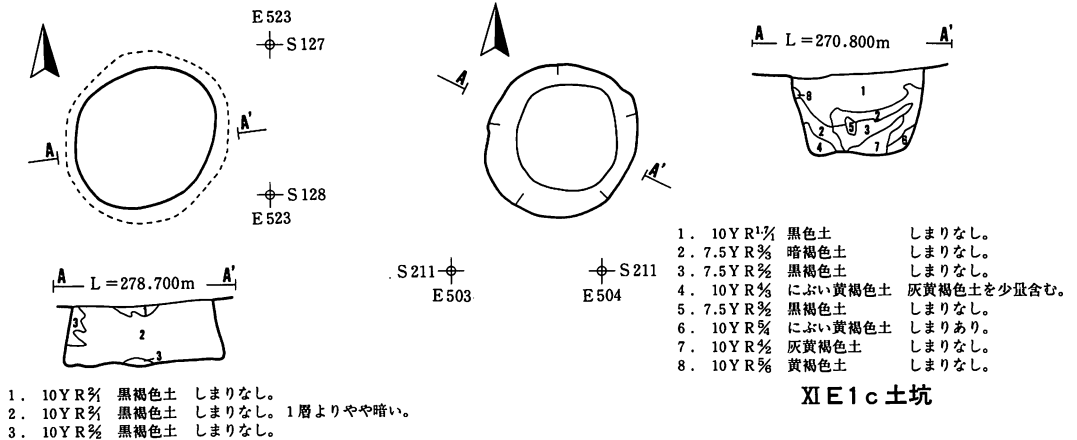
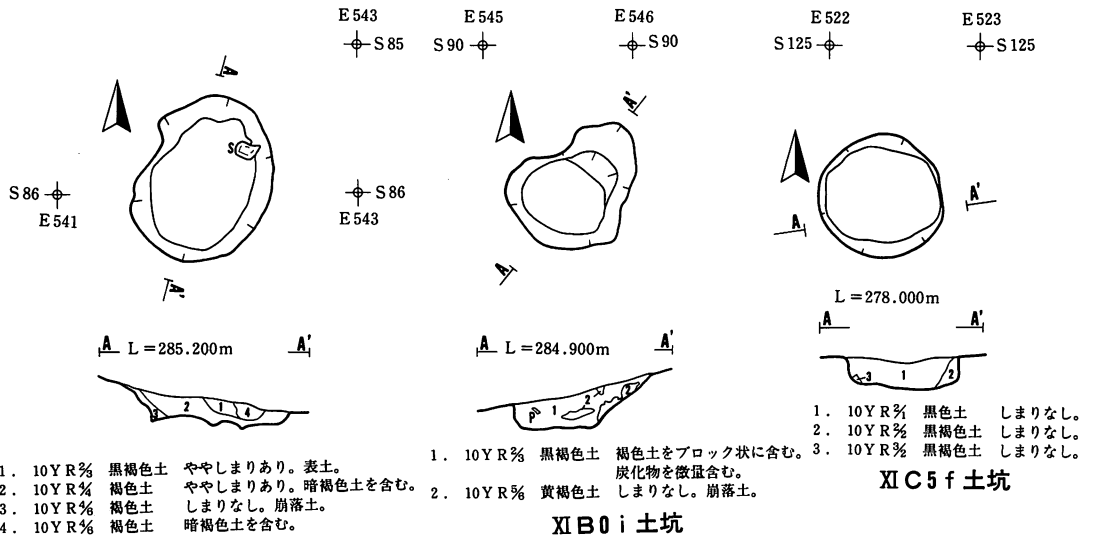
XI E 2 c 土坑 (遺構番号293)

遺構 (第311図、写真図版127)

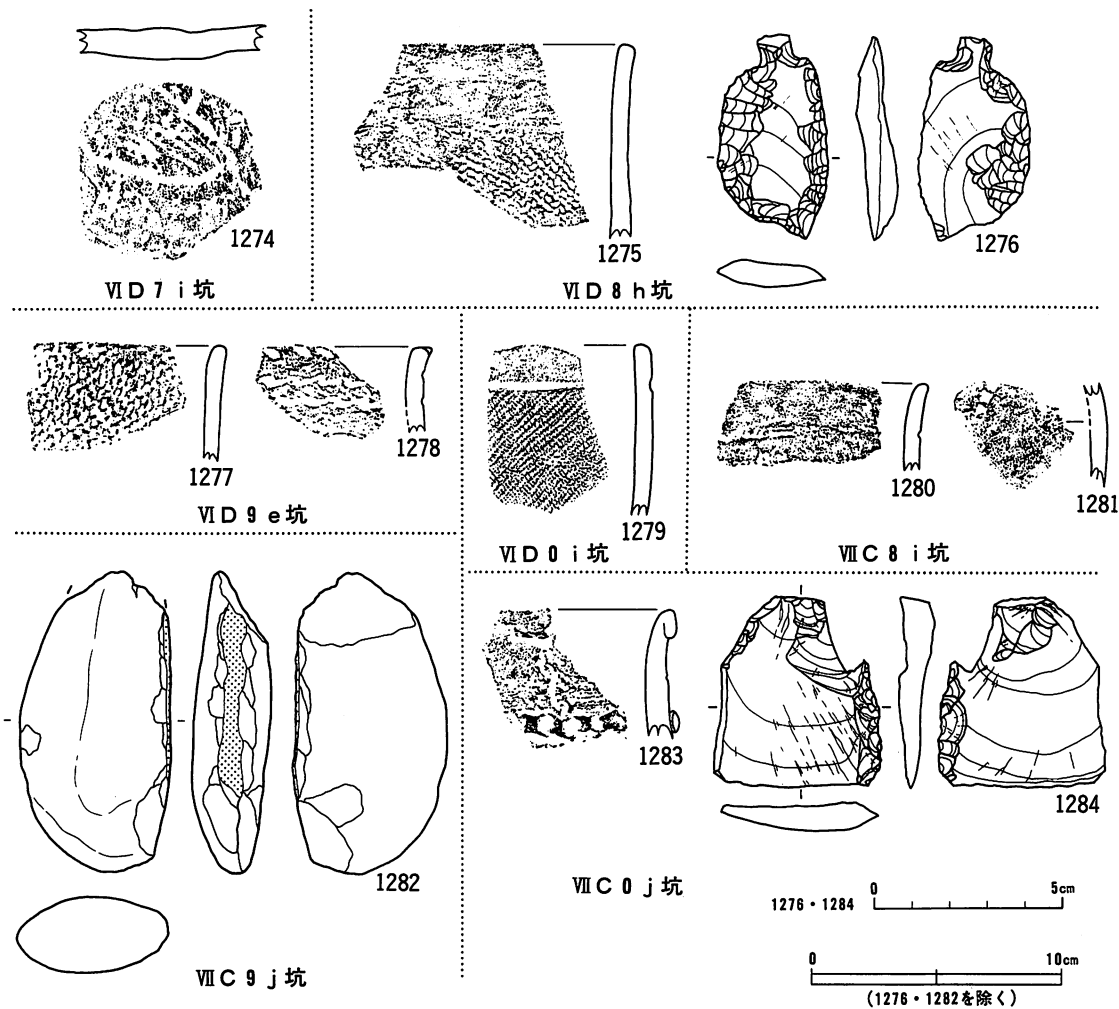
C区西緩斜面に位置する。XI C 2 c 住居跡の精査中に検出した。北側の壁を誤って掘り過ぎてしまった。平面形は円形で、壁はほぼ直立する。規模は、開口部径100 cm、底部径80cmで、深さは概ね60cm、最深部で78cmである。埋土は、締まりを欠く黒褐色土～黒色土を主体とし、十和田 a 降下火山灰 (付編1 参照) がスポット状に散在する。

遺物 埋土中位から土師器甕胴部の小破片が1点出土している。図示は省略した。

時期 検出面・埋土・出土遺物から、平安時代に属するものと考えられる。



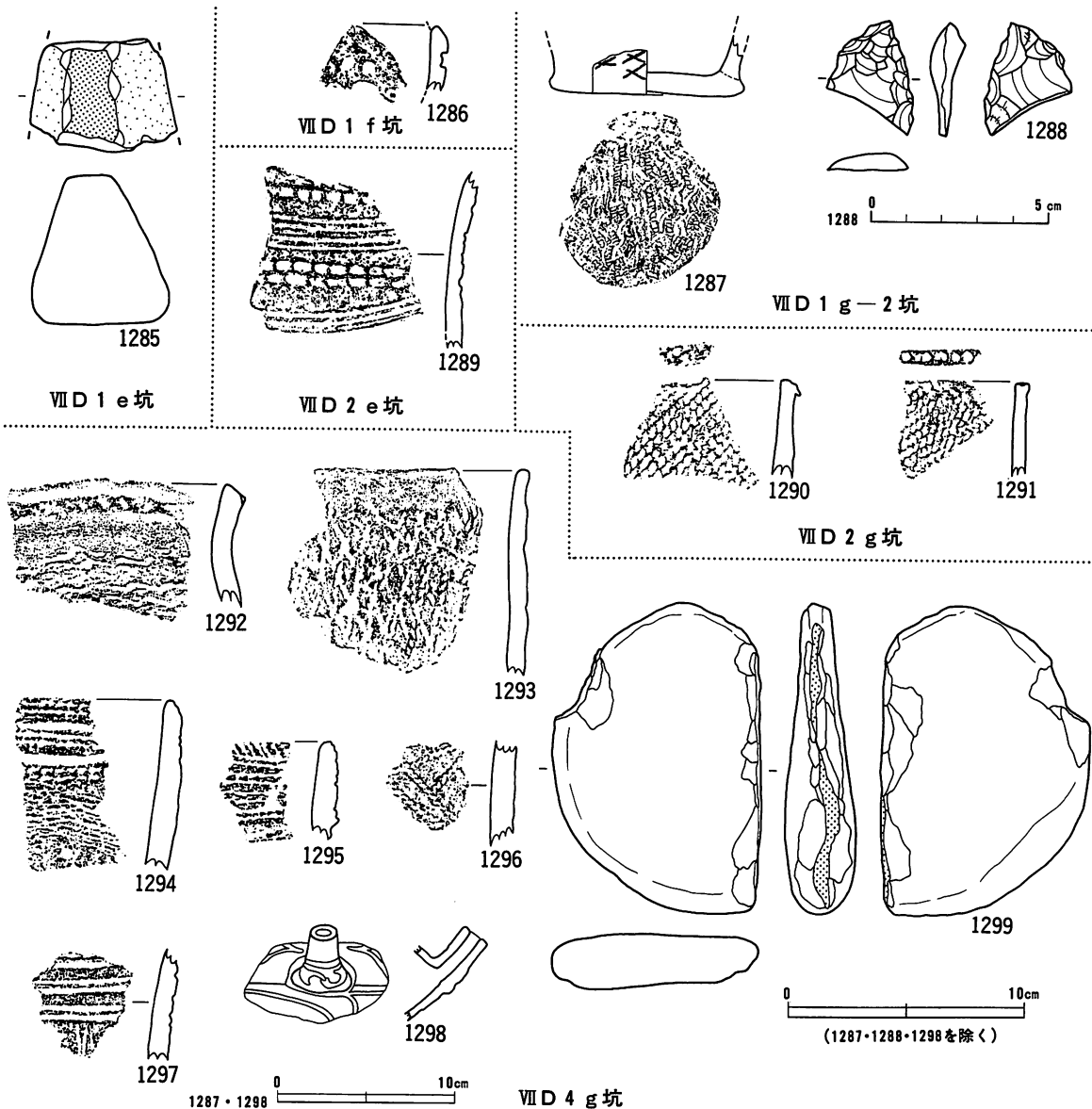
第311図 土坑 (2)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1274	VID 7 i 坑	埋土	木葉痕							220
1275	VID 8 h 坑	埋土中位	横位綾絡文。	組紐。				繊維わずかに混入		220
1277	VID 9 e 坑	埋土		組縄縄文				繊維混入。		220
1278	VID 9 e 坑	埋土	口唇端棒状工具による刻み。横位綾絡文。							220
1279	VID 0 i 坑	埋土	小波状口縁。口縁部浅凹線施文後磨消して無文帯とする。	LR横。						220
1280	VII C 8 i 坑	埋土	L側面圧痕。							220
1281	VII C 8 i 坑	埋土	蹄状工具による押し引き？							220
1283	VII C 0 j 坑	埋土	複合口縁。陸帯左上方向からの指頭状圧痕。爪跡明瞭(上面観波頭状)。							220

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1276	VID 8 h 坑	埋土上位	石匙	粘板岩	北上山地	5.4	2.9	1.2	12.60		I b 2	220
1282	VII C 9 j 坑	埋土	敲磨器類 A 群	緑色凝灰質硬砂岩	北上山地	(11.9)	6.0	5.9	(265)		II b	220
1284	VII C 0 j 坑	埋土上位	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	5.0	4.4	0.7	17.26	側面観鋸齒状。側縁の一部のみ刃部形成。	IV	220

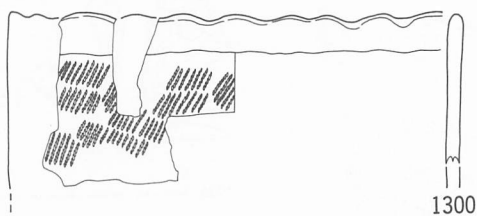
第312図 土坑内出土遺物(1)



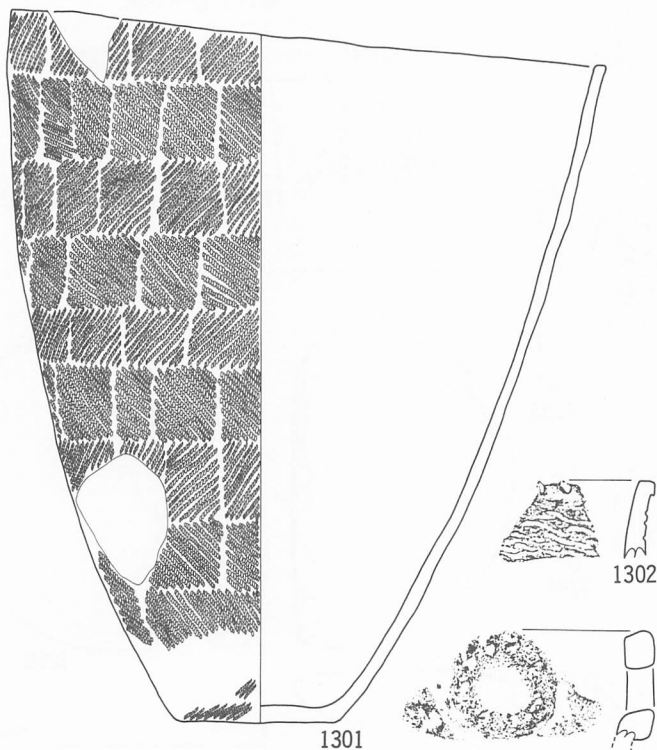
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1286	VII D 1 f 坑	北半埋土	剥落した隆帯か? 竹管刺突。							220
1287	VII D 1 g-2 坑	北半埋土		R 網目状撚糸文	-	11.0	(2.5)			221
1289	VII D 2 e 坑	埋土	半截竹管平行沈線。棒状工具による斜位刺突。						II 7	221
1290	VII D 2 g 坑	埋土	口唇部縄文施文。	粗縄縄文				繊維混入。	II 1 a	221
1291	VII D 2 g 坑	埋土	口唇部圧痕。	粗縄縄文				繊維混入。	II 1 a	221
1292	VII D 4 g 坑	埋土	口唇端へら条工具による右方向からの刻み。重層する横位撚糸文。						II 3	221
1293	VII D 4 g 坑	埋土		L 網目状撚糸文					II 6	221
1294	VII D 4 g 坑	埋土	半截竹管刺突(押し引き)。沈線(凹線)。	R 撚糸文。					II 7	221
1295	VII D 4 g 坑	埋土	口唇端筥状工具による刻み。半截竹管押し引き。							221
1296	VII D 4 g 坑	埋土	R L 側面圧痕。						II 8 a 1	221
1297	VII D 4 g 坑	埋土	半截竹管平行沈線(押し引き)。	L 撚糸文。					II 7	221
1298	VII D 4 g 坑	埋土	三叉文						V 2	221

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1285	VII D 1 e 坑	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	(4.6)	6.2	6.2	(250)	平滑面 3 面。	I a	221
1288	VII D 1 g-2 坑	埋土	不定形石器	硬質泥岩	半石西部	3.2	2.5	0.5	3.56	折断面(折損面)あり。	IV	221
1299	VII D 4 g 坑	埋土	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	北上山地	13.0	8.8	8.6	400		III b 2	222

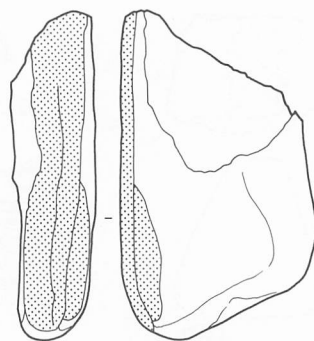
第313図 土坑内出土遺物(2)



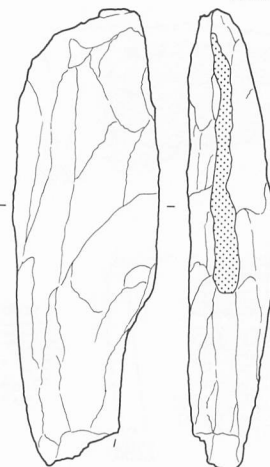
VII D 4 g - 3 坑



VII D 5 g 坑



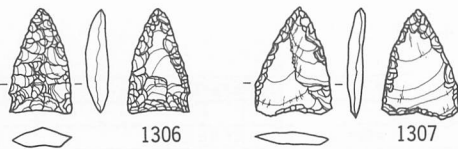
1304



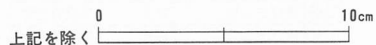
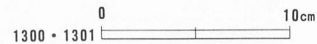
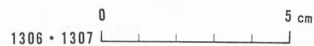
1305



VII D 5 g - 2 坑



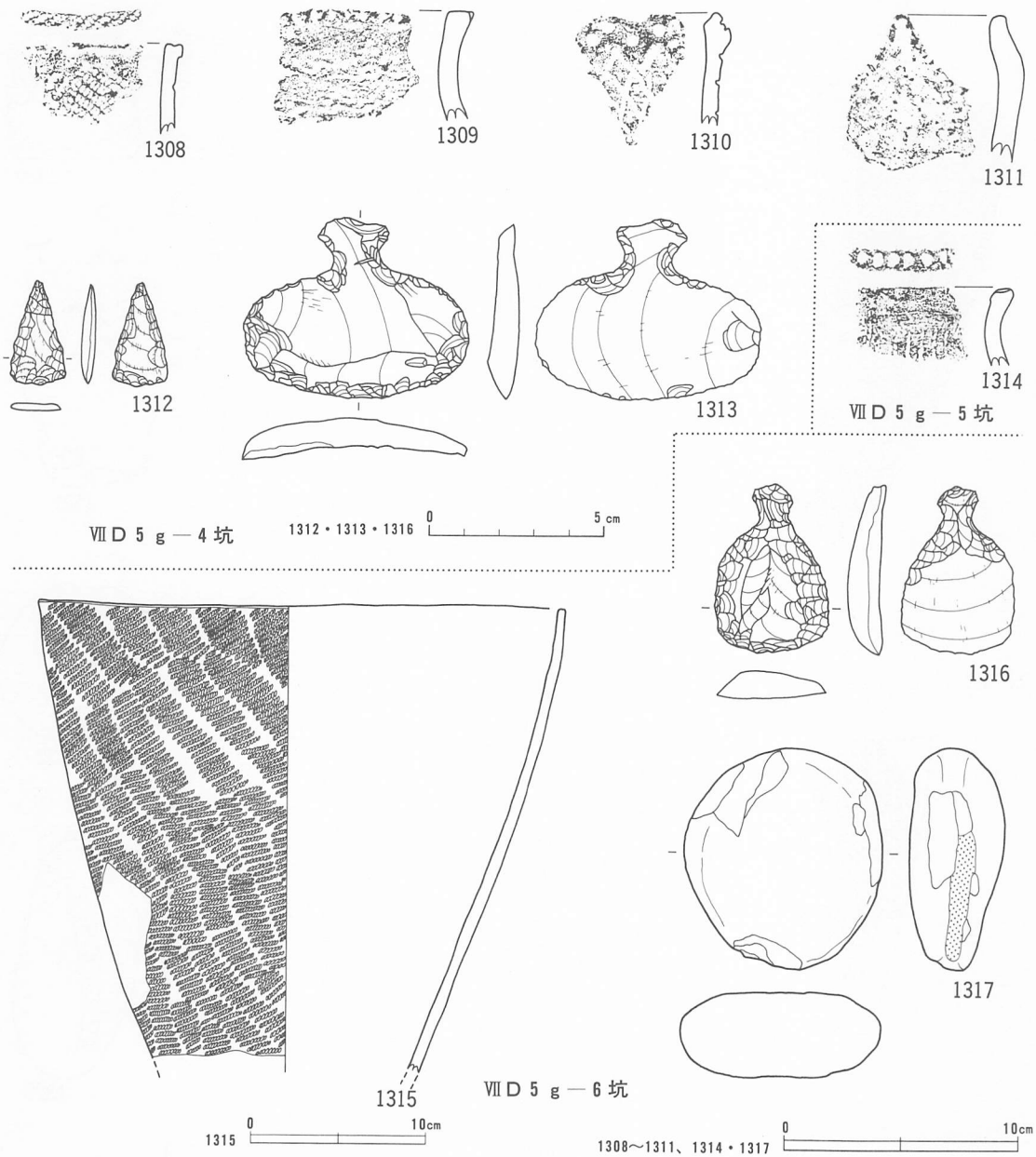
VII D 5 g - 3 坑



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1300	VII D 4 g - 3 坑	埋土	細波状口縁、口縁部無文	L R 横	(24.3)	-	(9.3)		V 2	222
1301	VII D 5 g 坑	埋土上位		L R 非結束羽状縄文	31.5	8.1	38.0		V	222
1302	VII D 5 g 坑	埋土	口唇端棒状工具による刻み。重層する横位綫絡文。						II 3	222
1303	VII D 5 g 坑	埋土	口縁部円環状裝飾体。縄端による刺突か？						II ba 7	222

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1304	VII D 5 g - 3 坑	埋土	蔽磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	(13.0)	(7.7)	(7.4)	(400)	剝離無し。	I a	222
1305	VII D 5 g - 3 坑	埋土	蔽磨器類 A 群	凝灰質千枚岩	北上山地	(18.2)	5.9	5.8	(460)		II a 2	222
1306	VII D 5 g - 3 坑	埋土	石鏃	硬質泥岩	雫石西部	2.8	1.6	0.4	2.14	裏側に平坦部あり、左側縁に一部欠損部あり。	II a 2	222
1307	VII D 5 g - 3 坑	埋土	石鏃	硬質泥岩	雫石西部	2.9	2.0	0.2	1.77	周縁二次加工。中央部は平坦で対称性に欠ける。	II a 2	222

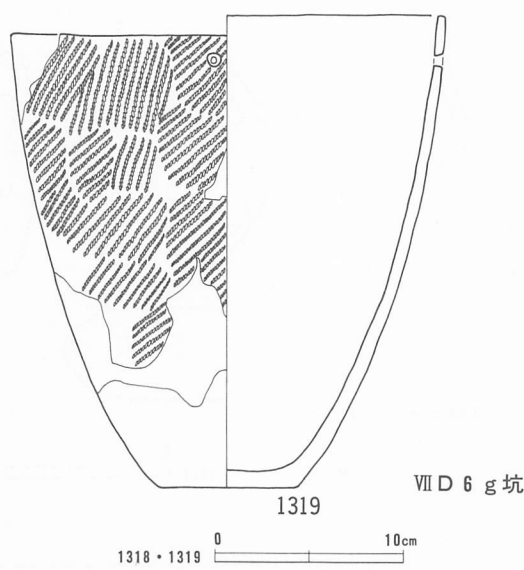
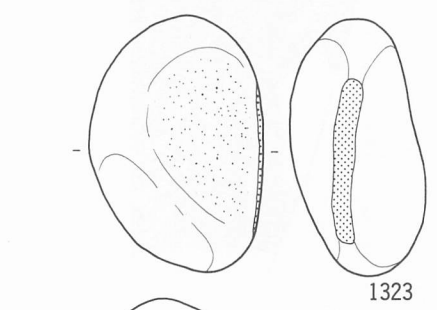
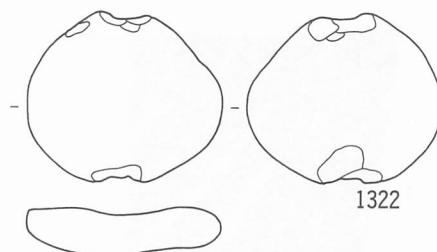
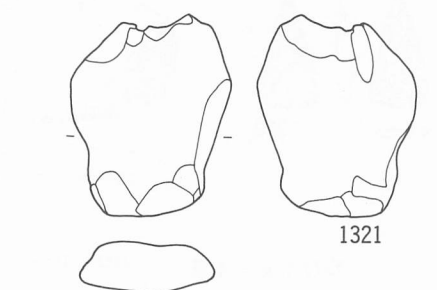
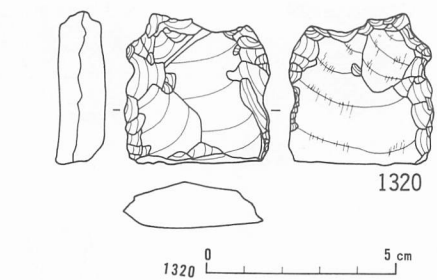
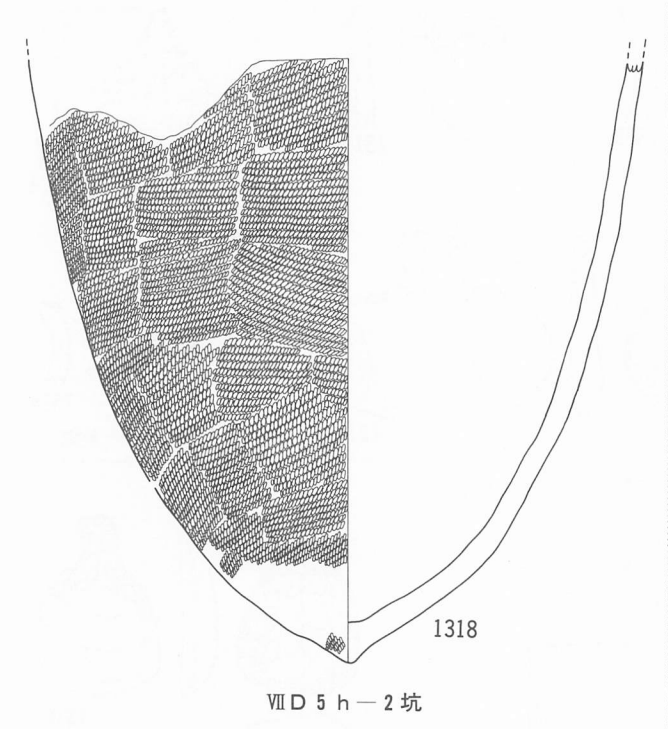
第314図 土坑内出土遺物(3)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1308	VII D 5 g-4 坑	埋土	口唇部 L R 施文。	L R 縦。縦位綾結文。						222
1309	VII D 5 g-4 坑	埋土	口唇部鋸歯状工具による右方向からの刻み。重層する横位綾結文。						II 3	222
1310	VII D 5 g-4 坑	埋土	口唇部鋸歯状裝飾体。裝飾体上竹管刺突。	R 網目状燃糸文。					II 6a7	222
1311	VII D 5 g-4 坑	埋土	大波状口縁。							222
1314	VII D 5 g-4 坑	埋土	口唇部右方向からの指頭状圧痕。	L 燃糸文。					II 6b	223
1315	VII D 5 g-4 坑	埋土		L R 横	(30.0)	-	(26.8)		V	223

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1312	VII D 5 g-4 坑	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	1.6	0.4	1.40		III 1	223
1313	VII D 5 g-4 坑	埋土	石匙	珪質泥岩	雫石西部	5.1	6.5	1.3	23.73		II b	223
1316	VII D 5 g-6 坑	埋土	石匙	珪質泥岩	雫石西部	4.8	3.3	0.7	14.33		III	223
1317	VII D 5 g-6 坑	埋土	敲磨器類 B 群	凝灰岩	北上山地	9.4	8.5	3.6	440	側面に磨面。剥離を伴う敲打痕。	V	223

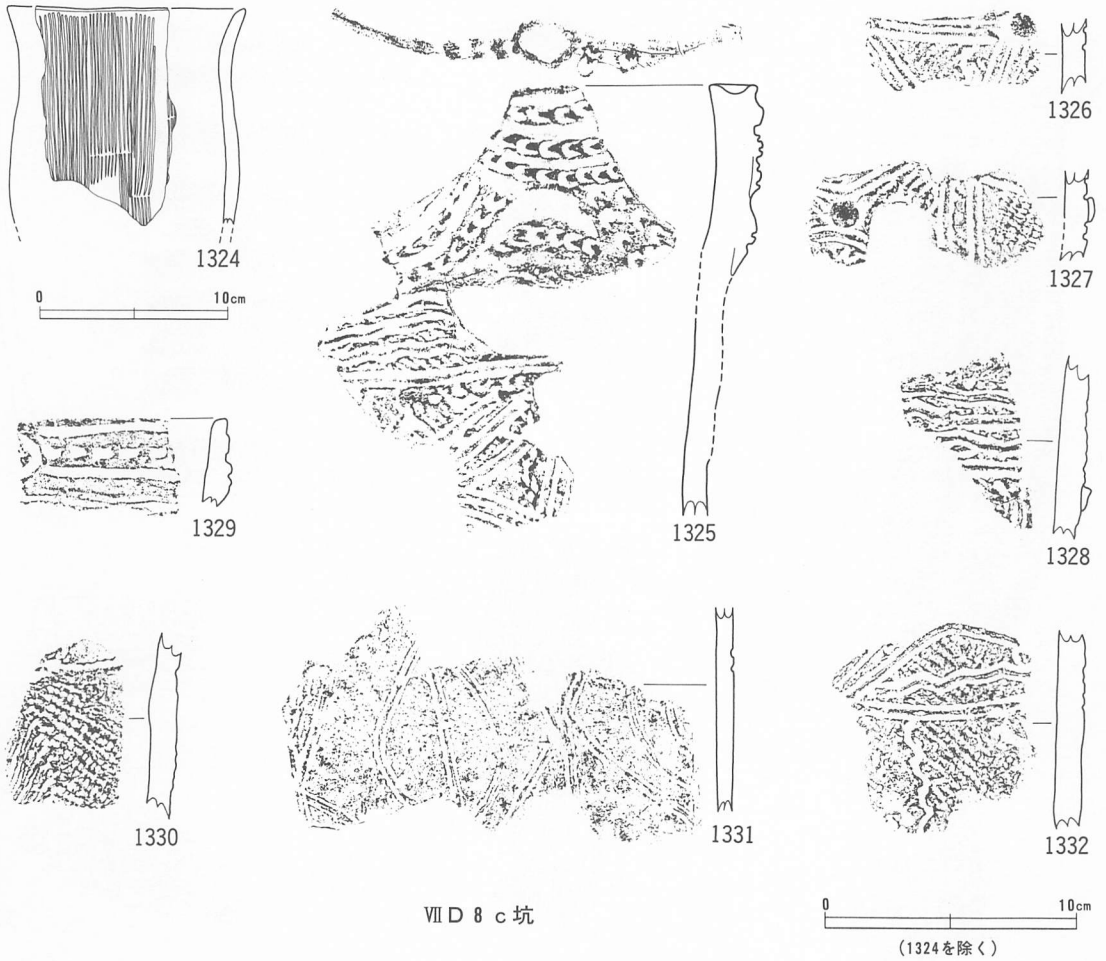
第315図 土坑内出土遺物(4)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1318	VII D 5 h - 2 坑	埋土	尖底	組縄縄文	-	-	(32.1)	繊維混入。	II a	223
1319	VII D 6 g 坑	埋土		L R 横	23.0	7.4	25.2	補修孔。	V	224

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1320	VII D 6 g 坑	埋土	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	平石西部	4.0	3.8	1.0	27.08	側面観が鋸齒縁。	III	224
1321	VII D 6 g 坑	埋土	石錘	緑簾石片岩	北上山地	8.0	6.4	1.9	132		I	224
1322	VII D 6 g 坑	埋土	石錘	緑簾石片岩	北上山地	28.7	43.2	4.0	146		II	224
1323	VII D 6 g 坑	埋土	敲磨器類A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	10.1	7.0	6.8	480	平滑面1面。剝離無し。	I a 1	224

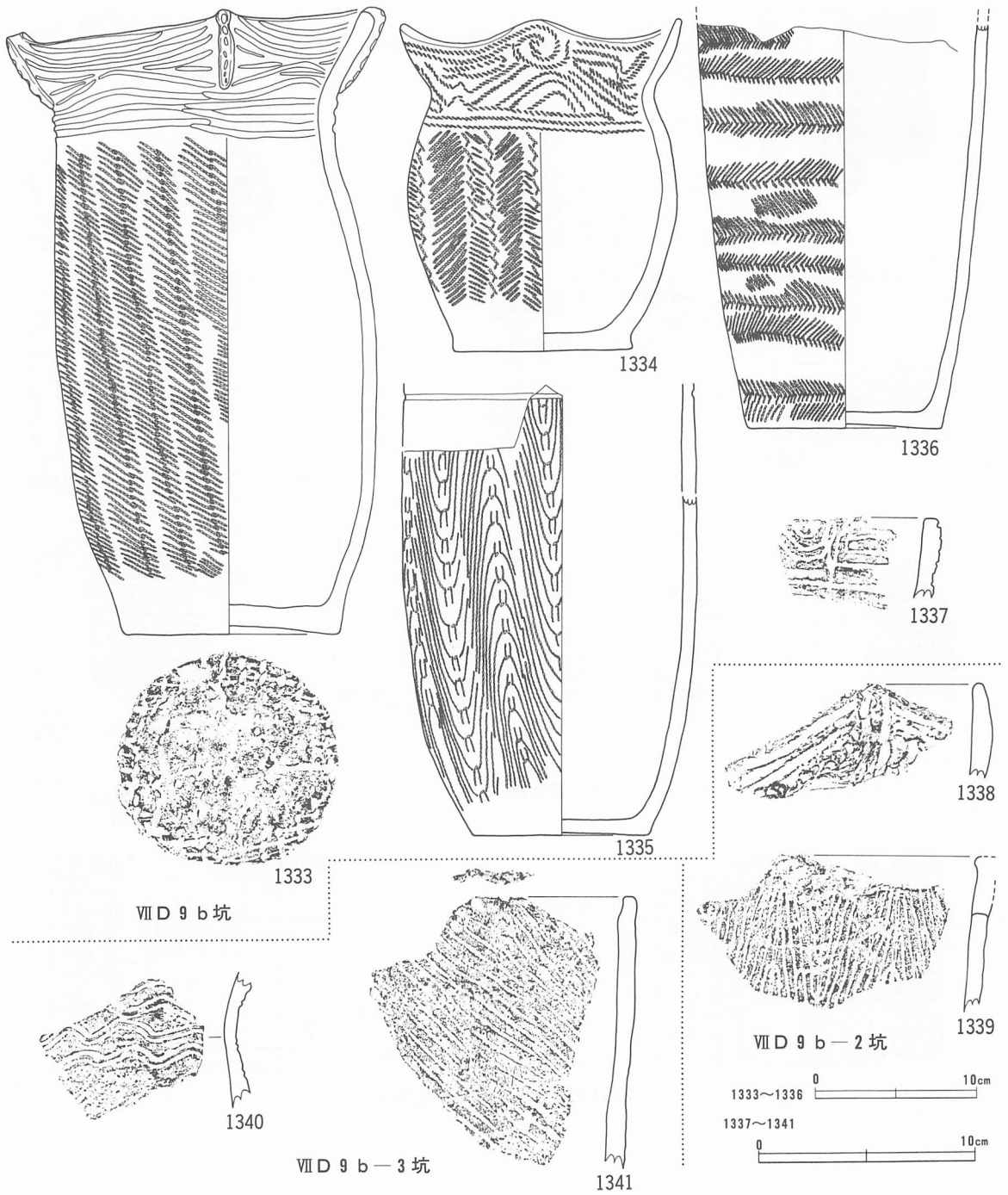
第316図 土坑内出土遺物(5)



ⅦD 8 c 坑

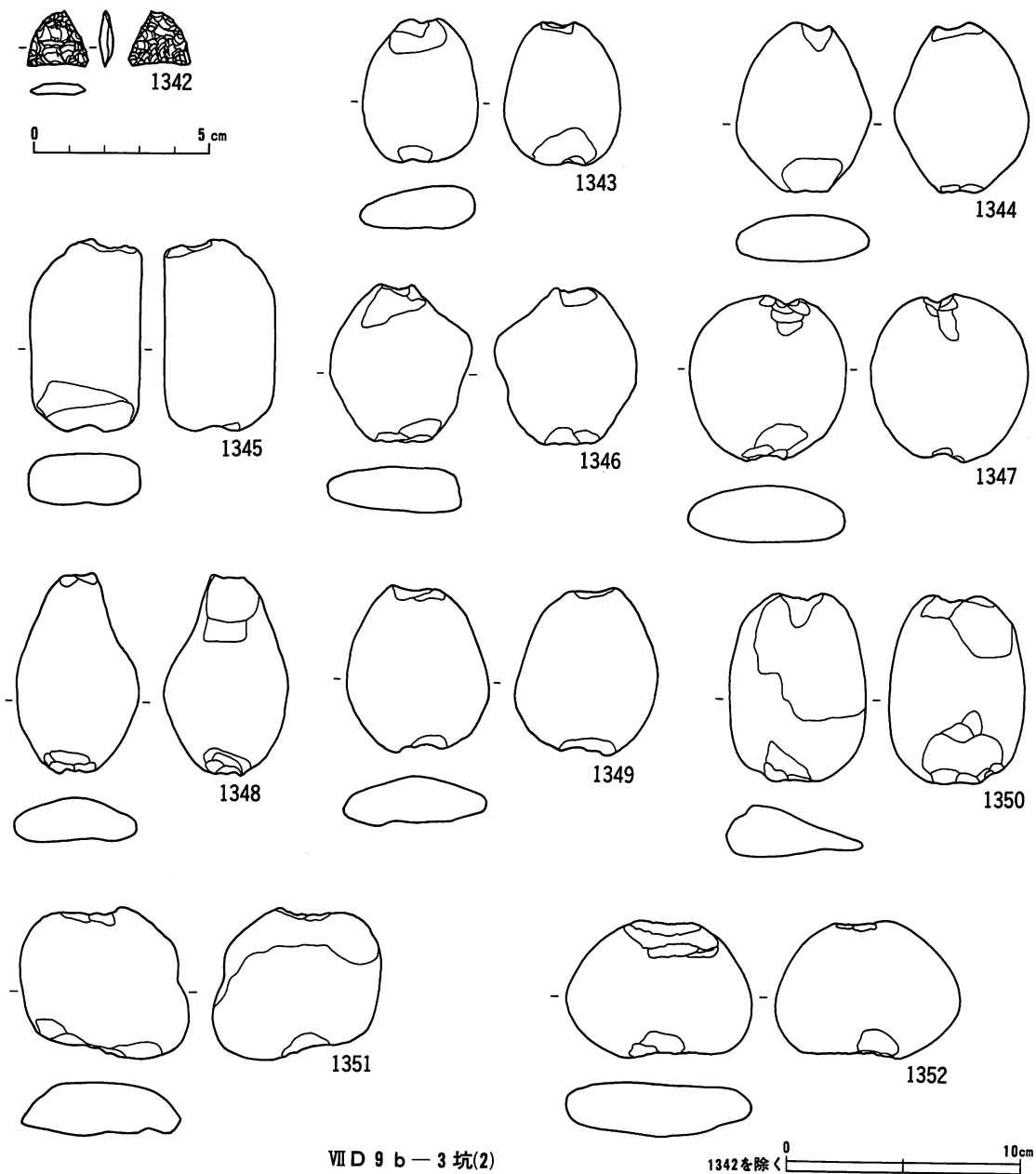
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1324	ⅦD 8 c 坑	埋土	櫛歯状沈線 (縦位)		(12.8)	—	(11.5)		Ⅱ9 a	224
1325	ⅦD 8 c 坑	埋土	大波状口縁。隆帯上半截竹管刺突。半截竹管平行沈線。					1326、1327と同じ個体	Ⅲ1 a	224
1326	ⅦD 8 c 坑	埋土	半截竹管平行沈線。ボタン状突起貼り付け。	L R 縦。				1325、1327と同じ個体	Ⅲ1 a	224
1327	ⅦD 8 c 坑	埋土	半截竹管平行沈線。ボタン状突起貼り付け。	L R 縦。				1325、1326と同じ個体	Ⅲ1 a	224
1328	ⅦD 8 c 坑	埋土	隆帯上棒状工具による刻み。半截竹管平行沈線。						Ⅲ1 a	224
1329	ⅦD 8 c 坑	埋土	竹管外面による右方向からの斜位刺突。沈線(凹線)。							224
1330	ⅦD 8 c 坑	埋土	L R 側面圧痕	L R × R R 第1種結束羽状縄文。						224
1331	ⅦD 8 c 坑	埋土	半截竹管平行沈線。							224
1332	ⅦD 8 c 坑	埋土	半截竹管平行沈線。	L R 縦。片結び縦位縁絡文。					Ⅲ1 a	224

第317図 土坑内出土遺物(6)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1333	VII D 9 b 坑	底面	緩い波状口縁、頂部垂下隆帯に刺突、沈線(凹線)	L R 縦	19.3	13.3	37.8		II 7 a	225
1334	VII D 9 b 坑	底面	波状口縁、L R 側面圧痕	L R × R L 第2種結束羽状織文	17.4	11.0	20.4			225
1335	VII D 9 b 坑	埋土	口頸部沈線(凹線)	R 木目状燃糸文	—	10.8	27.8		II 7 a	225
1336	VII D 9 b 坑	埋土		L R × R L 第1種結束羽状織文	—	12.0	25.0			225
1337	VII D 9 b 坑	埋土	沈線(モチーフ不明)。							225
1338	VII D 9 b - 2 坑	埋土	波状口縁、沈線(凹線)、竹管外面による右方向からの斜位刺突。						II 7	225
1339	VII D 9 b - 2 坑	埋土	波状口縁。	R 木目状燃糸文。					II 6	225
1340	VII D 9 b - 3 坑	埋土	半截竹管平行波状沈線。						II 7	225
1341	VII D 9 b - 3 坑	埋土	花卉状口縁。	L 燃糸文。					II 6	225

第318図 土坑内出土遺物(7)

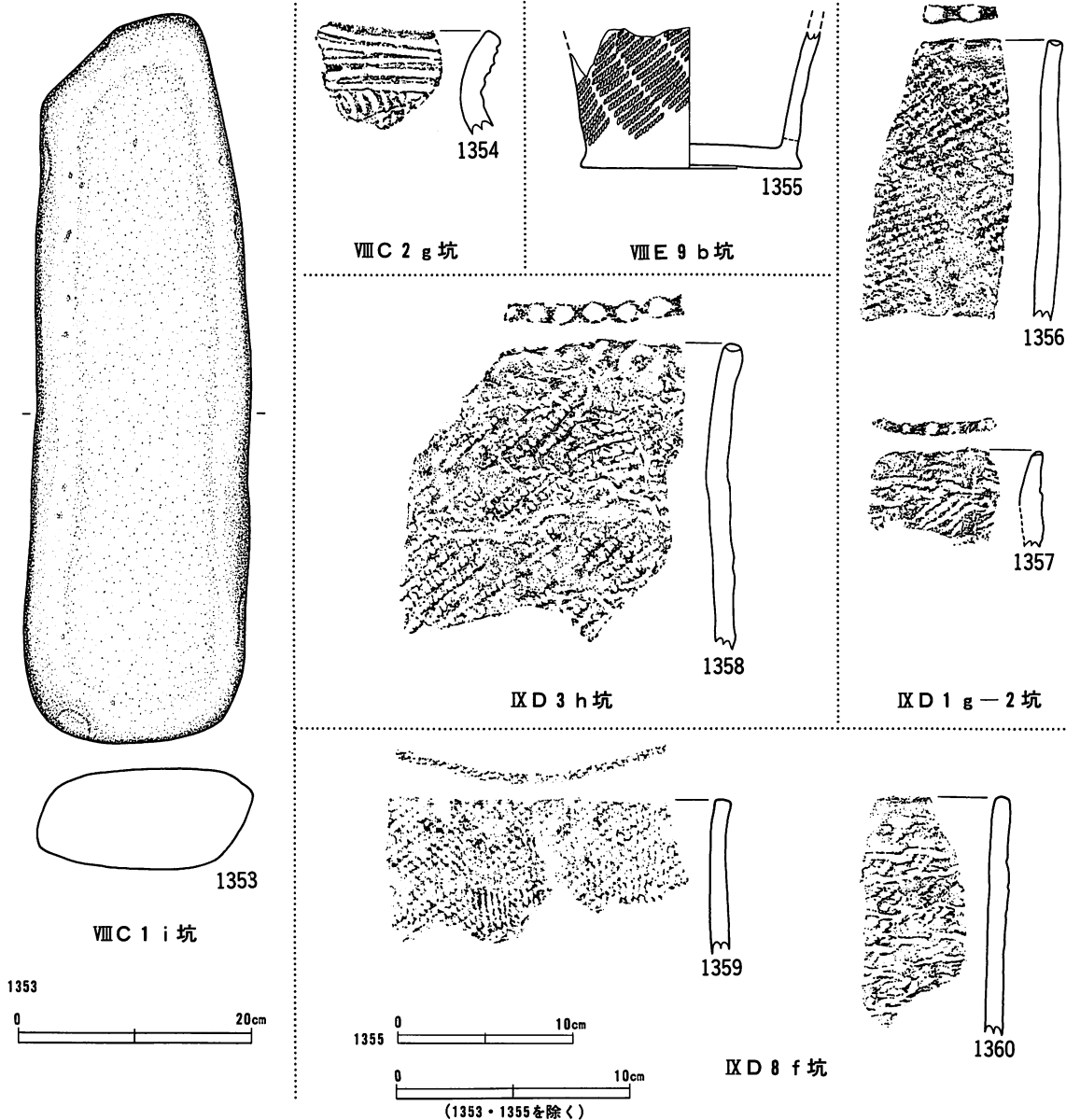


VII D 9 b - 3 坑(2)

1342を除く 0 10cm

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1342	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	1.5	1.7	0.3	0.66		II a 2	225
1343	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	6.1	4.9	1.8	95		I	225
1344	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	7.2	5.7	2.0	135		I	225
1345	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	8.2	4.7	2.2	140		I	225
1346	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	6.6	6.0	1.9	110		I	226
1347	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	7.0	6.6	2.4	170		I	226
1348	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	珩長質凝灰岩	北上山地	8.5	5.3	1.8	120		I	226
1349	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	7.1	6.1	2.0	125		I	226
1350	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	8.1	5.8	2.2	129		I	226
1351	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	6.4	7.0	2.3	145		II	226
1352	VII D 9 b - 3 坑	埋土	石鏃	硬砂岩	北上山地	5.9	7.8	2.2	140		II	226

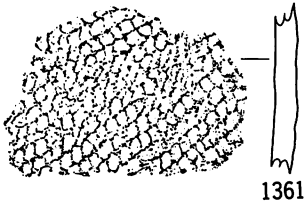
第319図 土坑内出土遺物(8)



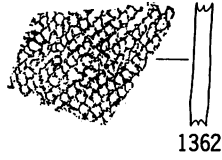
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1354	VII C 2 g 坑	埋土	沈線 (凹線)。						II7	226
1355	VII E 9 b 坑	埋土		L R 横		—	(12.6) (8.6)			226
1356	IX D 1 g - 2 坑	埋土中位	口唇部指頭状压痕	L R 横。横位綾絡文。					II6b†	226
1357	IX D 1 g - 2 坑	埋土中位		L 横。横位綾絡文。					II6b†	226
1358	IX D 3 h 坑	床面	口唇部指頭状压痕。	L R 横。横位綾絡文。					II6b†	226
1359	IX D 8 f 坑	埋土下位	口唇部にも縄文施文。	粗縄縄文					II1 a	226
1360	IX D 8 f 坑	埋土下位	重層する横位綾絡文。						II3	226

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1353	WC 1 i 坑	床面	石柱	珉長質凝灰岩	北上山地	62.2	19.2	8.4	14500			

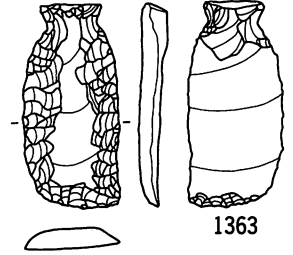
第320図 土坑内出土遺物(9)



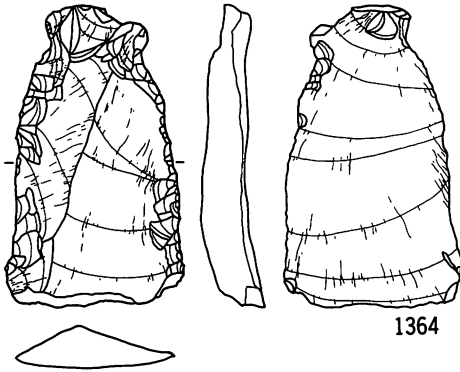
1361



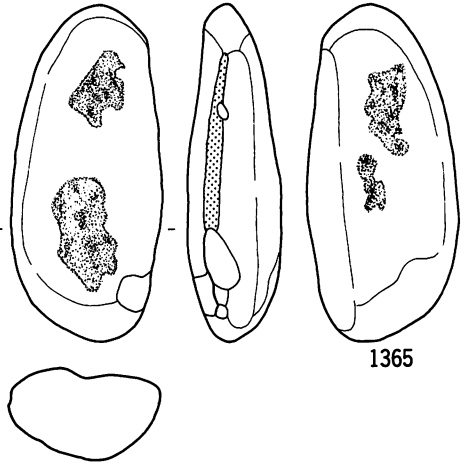
1362



1363

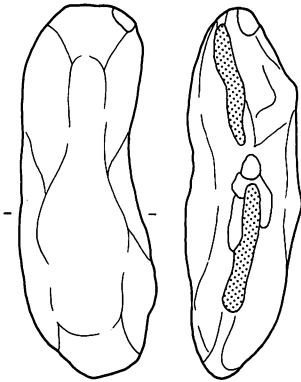


1364

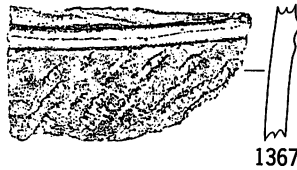


1365

IX D 0 g 坑



1366



1367

XI B 0 h 坑



IX E 3 a 坑

1363・1364 0 5cm

0 10cm

1363・1364を除く

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1361	IX D 0 g 坑	底面						繊維混入。	II 1 a	227
1362	IX D 0 g 坑	底面		組縄縄文				繊維混入。	II 1 a	227
1367	XI B 0 h 坑	埋土	微隆帯 (凹線を描くことによって作出)。	L R 横。						227

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1363	IX D 0 g 坑	埋土	石匙	珪質泥岩	笨石西部	5.5	2.6	0.8	10.18		I b 2	227
1364	IX D 0 g 坑	埋土	石匙	粘板岩	北上山地	8.1	4.7	1.7	46.38		I b 1	227
1365	IX D 0 g 坑	埋土	敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.4	13.0	3.2	320	+凹石。	II a 1	227
1366	IX D 0 g 坑	埋土	敲磨器類 A 群	緑色凝灰岩	北上山地	14.9	4.7	5.3	450		I a 1	227

第321図 土坑内出土遺物(10)

3. 陥し穴

VC 8 j 陥し穴 (遺構番号301)

遺構 (第322図、写真図版127)

A区南斜面に位置する。基盤層上面で検出した。新期の道路部分に当たり、人力による掘り下げが困難だったことから重機により削剝した。構築面はより上層であった可能性がある。

平面形は中央部がやや広い溝状で、長軸が等高線にほぼ平行し、その方向はN-32°-Eである。短軸断面形はU字状であるが、検出状況に記したように、上半部を削平した可能性がある。北壁はややオーバーハング気味であるが、南壁はほぼ直立する。規模は開口部52×370 cm、底部18×370 cm、深さ73 cmである。埋土は6層に分けら、上位は黒褐色土、中位は褐色土、下位は黒褐色土である。最上位には十和田 a 降下火山灰 (付編1参照) が含まれる。底面は、ほぼ平坦であるが、全体として南側に傾斜し、比高最大値27 cmである。遺物は出土していない。

時期 特定する資料を欠くが、形状から縄文時代中期から後期に属するものと推定される。

VI D 7 e 陥し穴 (遺構番号302)

遺構 (第322図、写真図版128)

西尾根南麓平坦部への変換点に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は、長軸が等高線にほぼ平行する長方形で、その方向はN-65°-Eである。側壁は底部から中位までほぼ直立し、その後開口部に向かって外反気味に外傾する。短軸方向の壁はほぼ直立する。規模は開口部105×212 cm、底部47×183 cm、深さ100 cmである。埋土は6層に分けられ、上位は褐色土、中位は黒褐色土、下位は基盤層起源のにぶい黄褐色土が、全体としてU字状に堆積する。最上位に薄く灰白色火山灰が堆積している。底面は、常時湧水があり、施設の有無等の確認は十分にはできなかったが、ほぼ平坦であると観察された。

遺物 (第325図、写真図版227)

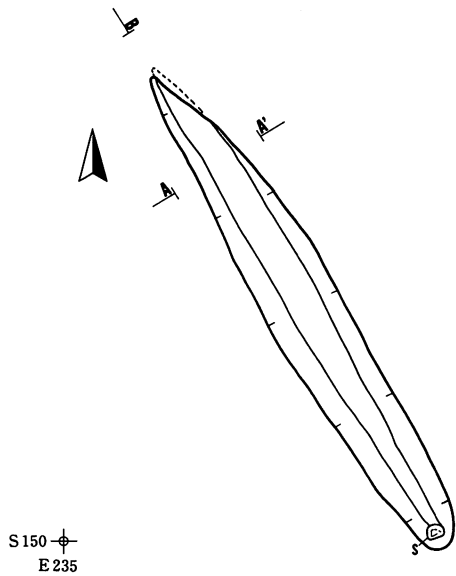
図示した他に、埋土から縄文時代前期のRL単節斜縄文の破片が出土している。

時期 特定する資料を欠き不明である。

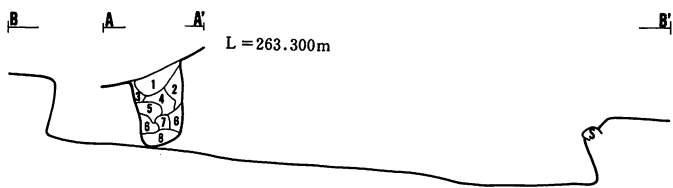
VI D 8 b 陥し穴 (遺構番号303)

遺構 (第322図、写真図版128)

西尾根南麓平坦部への変換点に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は隅丸方形で、壁は底部からやや内傾した後外傾する。規模は、開口部110×134 cm、底部78×88 cm、深さ70 cmである。埋土は9層に分けられるが、全体的に黒色土・黒褐色土が卓越し、最下位に褐色土が堆積する。底面中央部に副穴が検出された。規模は開口部15×18 cm、深さ6 cmと浅いもの



E 238
 ⊕ S 147

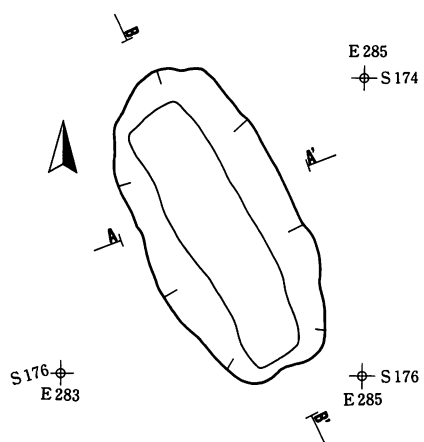


- 1. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし
- 2. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。褐色土を含む。
- 3. 10Y R% 褐色土 しまりあり。崩落土。
- 4. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。灰白色土を含む。
- 5. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。黒色土、崩落土を含む。
- 6. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。崩落土を含む。
- 7. 10Y R% 褐色土 しまりなし。褐色土を含む。
- 8. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。褐色土、灰白色土を粉状に含む。

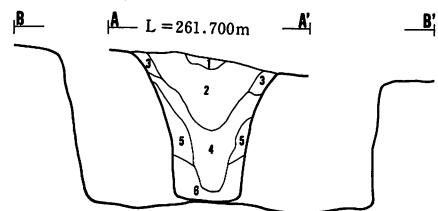
S 150 ⊕
 E 235

⊕ S 150
 E 238

VC8j 陥し穴



E 285
 ⊕ S 174

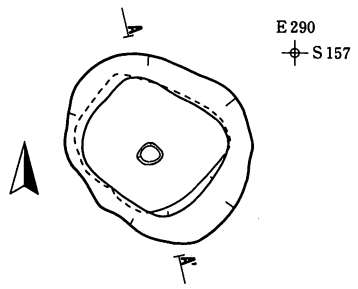


- 1. 10Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。褐色土を粒状に含む。
- 2. 10Y R% 褐色土 ややしまりあり。にぶい黄褐色土を小ブロック状に含む。
- 3. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。草本根を含む。
- 4. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。黄褐色土を粒状に含む。
- 5. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。灰黄褐色土を小ブロック状に含む。
- 6. 10Y R% にぶい黄褐色土 しまりなし。崩落土、砂を含む。

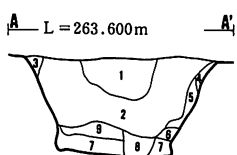
S 176 ⊕
 E 283

⊕ S 176
 E 285

VI D7e 陥し穴



E 290
 ⊕ S 157

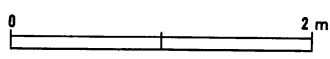


- 1. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。
- 2. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。小角礫を含む。
- 3. 10Y R% 暗褐色土 固くしまっている。
- 4. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
- 5. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。
- 6. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。
- 7. 10Y R% 暗褐色土 固くしまっている。
- 8. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
- 9. 10Y R% 褐色土 しまりなし。

S 159 ⊕
 E 288

⊕ S 159
 E 290

IV VI D8b 陥し穴



第322図 陥し穴(1)

である。

遺物 埋土上位から組縄縄文の小破片2点が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、形状から縄文時代前期初頭と推定される。

ⅦC 8 g 陥し穴 (遺構番号304)

遺構 (第323図、写真図版128)

西尾根頂部に位置する。小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。平面形は、長軸が尾根方向に直交する隅丸長方形で、その方向はN-55°-Wである。壁は長軸中央部はやや外反気味の部分があるが、全体的に概ね直線的に急角度で外傾する。規模は、開口部110×186cm、底部40×134cm、深さ142cmである。埋土は10層に分けられる。第1層は腐植土層である黒色土であるが、他は再堆積層および基盤層起源の褐色土～明黄褐色土がU字状に堆積する。底面は小さな凹凸はあるが、全体的には平坦で、やや東側に傾斜する。

遺物 埋土中位から縄文時代前期の網目状撚糸文の土器片が出土している。

時期 特定する資料を欠き不明である。

ⅦD 1 j 陥し穴 (遺構番号305)

遺構 (第323図、写真図版128)

西尾根南西麓部に位置する。小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。平面形は、歪な円形で、壁は底部から外反気味に立ち上がる。規模は、開口部130×142cm、底部70×70cm、深さ102cmである。埋土は11層に分けられる。上位は腐植土である黒色土、下位は褐色土・および崩落土である明褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す。底面は小さな凹凸はあるが、全体的には平坦である。遺物は出土していない。

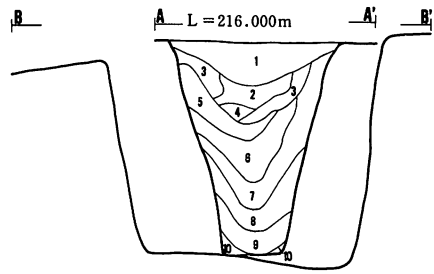
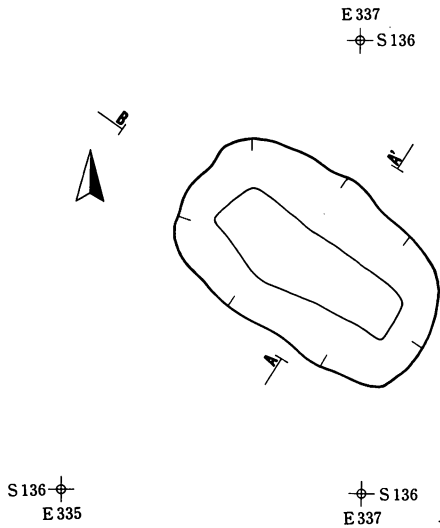
時期 特定する資料を欠くが、形状から縄文時代前期初頭と推定される。

ⅦD 7 j 陥し穴 (遺構番号306)

遺構 (第323図、写真図版129)

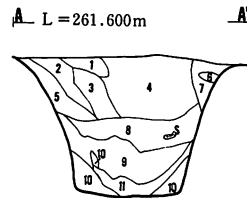
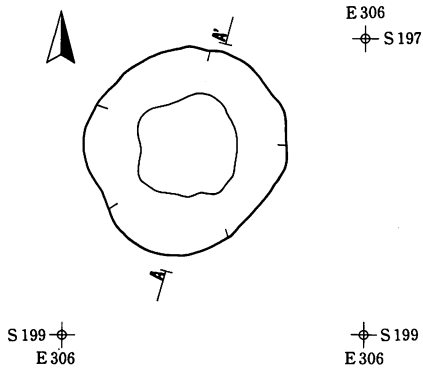
西尾根南麓の平坦部で、沢への移行部に位置する。暗褐色土層上面で検出した。平面形は円形で、壁は底部から中位まではほぼ直立し、その後開口部に向かってやや外傾する。規模は、開口部122×135cm、底部80×100cm、深さ74cmである。埋土は9層に分けられるが、黒色土と黒褐色土が主体をなし、下位に崩落土を含む。底面は、ほぼ水平で平坦である。底面中央部に副穴が1個検出された。規模は開口部径18cm、深さ10cmである。

遺物 埋土から、縄文時代前期の繊維を含有する0段多糸・LR単節斜縄文の土器片が出土



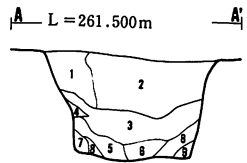
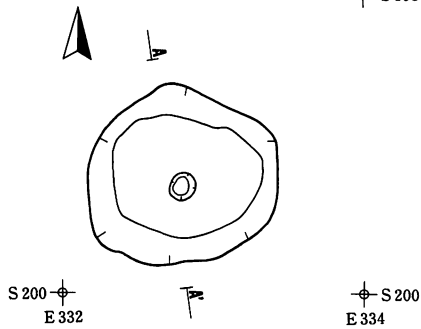
- | | | |
|---------------------------|---------|-----------------------|
| 1. 7.5Y R ¹ /2 | 黒色土 | しまりなし。褐色土をブロック状に含む。 |
| 2. 10Y R% | 灰黄褐色土 | しまりあり。砂を綿状に含む。 |
| 3. 10Y R% | 褐色土 | しまりあり。黄褐色土を小ブロック状に含む。 |
| 4. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりあり。小角礫を少量含む。 |
| 5. 7.5Y R% | 明褐色土 | しまりあり。小角礫を多く含む。 |
| 6. 10Y R% | 褐色土 | しまりあり。小角礫を少量含む。 |
| 7. 10Y R% | にぶい黄橙色土 | しまりあり。小角礫を多く含む。 |
| 8. 10Y R% | 浅黄褐色土 | しまりあり。崩落土を含む。 |
| 9. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりあり。崩落土を少量含む。 |
| 10. 10Y R% | 明黄褐色土 | しまりあり。崩落土を多く含む。 |

Ⅶ C 8 g 陥し穴



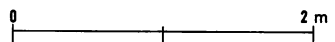
- | | | |
|-------------|------|----------------------|
| 1. 7.5Y R% | 黒色土 | ややしまりあり。小角礫を含む。 |
| 2. 7.5Y R% | 黒色土 | しまりなし。褐色土を含む。 |
| 3. 7.5Y R% | 黒色土 | しまりなし。砂を含む。 |
| 4. 7.5Y R% | 黒色土 | しまりなし。 |
| 5. 7.5Y R% | 黒色土 | ややしまりあり。 |
| 6. 7.5Y R% | 暗褐色土 | しまりあり。崩落土。 |
| 7. 7.5Y R% | 黒色土 | ややしまりあり。褐色土を粒状に含む。 |
| 8. 7.5Y R% | 黒褐色土 | しまりなし。水分を多く含む。 |
| 9. 7.5Y R% | 褐色土 | しまりなし。黒褐色土、灰黄褐色土を含む。 |
| 10. 7.5Y R% | 明褐色土 | 崩落土。 |
| 11. 7.5Y R% | 褐色土 | ややしまりあり。灰黄褐色土を多く含む。 |

Ⅶ D 1 j 陥し穴



- | | | |
|--------------------------|--------|--------------------------|
| 1. 10Y R ¹ /2 | 黒色土 | ややしまりあり。壁際に黄褐色土を粒状に含む。 |
| 2. 10Y R% | 黒色土 | ややしまりあり。明黄褐色土を小ブロック状に含む。 |
| 3. 10Y R% | 黒褐色土 | しまりあり。明黄褐色土を多く含む。 |
| 4. 10Y R% | 黄褐色土 | ややしまりあり。崩落土。 |
| 5. 10Y R% | 暗褐色土 | しまりあり。黄褐色土を含む。 |
| 6. 10Y R% | 灰黄褐色土 | しまりあり。 |
| 7. 10Y R% | 明黄褐色土 | ややしまりあり。崩落土。 |
| 8. 10Y R% | にぶい褐色土 | 崩落土と第6層との混土。 |
| 9. 10Y R% | 黒褐色土 | しまりあり。崩落土を含む。 |

Ⅶ D 7 j 陥し穴



第323図 陥し穴(2)

している。

時期 特定する資料を欠くが、形状から縄文時代前期初頭と推定される。

VIII C 1 f 陥し穴 (遺構番号307)

遺構 (第324図、写真図版129)

西尾根東斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。平面形は、長軸が等高線にほぼ直交する溝状で、その方向はN-52°-Eである。壁は、短軸方向はほぼ直立し、長軸方向は底部からはほぼ直立し、開口部に近づくと内湾気味に外傾する。規模は、開口部80×230 cm、底部18×198 cm、深さ104 cmである。埋土は10層に分けられるが、第4・6・7・8層は崩落土と思われ、間層として暗褐色土層起源の埋土が堆積している。第2・3層部分も崩落していて原形をとどめているものではないと考えられる。底面は平坦であるが、斜面沿ってやや傾斜し、比高最大値28 cmである。

遺物 埋土から、縄文時代前期の綾絡文、木目状燃糸文の土器片が少量出土している。

時期 不明であるが、形状は縄文時代中期から後期に属するものと類似する。

VIII D 2 c 陥し穴 (遺構番号308)

遺構 (第324図、写真図版129)

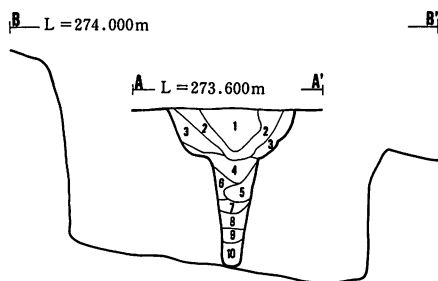
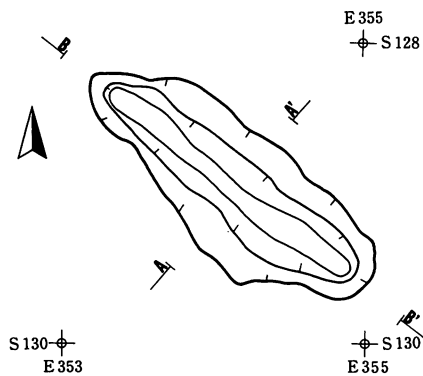
西尾根東斜面下位に位置する。基盤層上面で検出したが、新期の整地に伴う攪乱がある場所で、本来の構築面はより上位からであったと考えられる。平面形は、長軸が等高線にほぼ直交する長方形で、その方向はN-25°-Wである。壁は全体にやや外傾する。規模は、開口部114×218 cm、底部55×170 cm、深さ70 cmである。埋土は4層に分けられる。最上位には灰白色火山灰が混入する砂質土が堆積し、壁際には崩落土が堆積する。底面はほぼ平坦であるが、斜面に沿って南側にやや傾斜し、比高最大値25 cmである。遺物は出土していない。

時期 特定する資料を欠き不明である。

IX D 6 b 陥し穴 (遺構番号309)

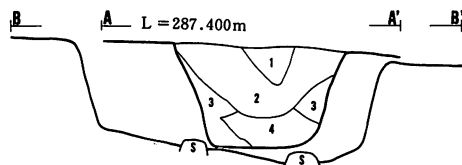
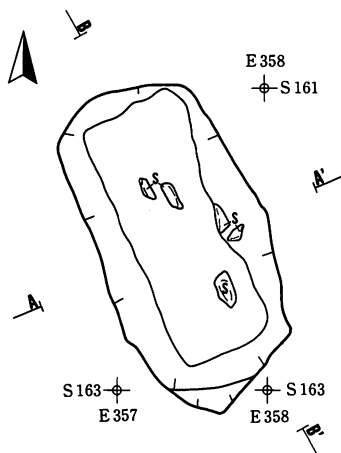
遺構 (第324図、写真図版129)

東尾根西斜面に位置する。黄褐色土層上面で検出した。平面形は、長軸が等高線にほぼ平行する隅丸長方形を基調とし、開口部は小判形である。長軸方向はN-15°-Eである。壁は、底部から30 cmの高さまではほぼ直立し、その後2つの変換点を有して外傾する。規模は、開口部240×305 cm、底部70×178 cm、深さ180 cmである。埋土は20層に分けられる。最上位は腐植土層である黒色土が堆積し、第3・4層には灰白色火山灰(附篇1参照)が縞状に混入する。



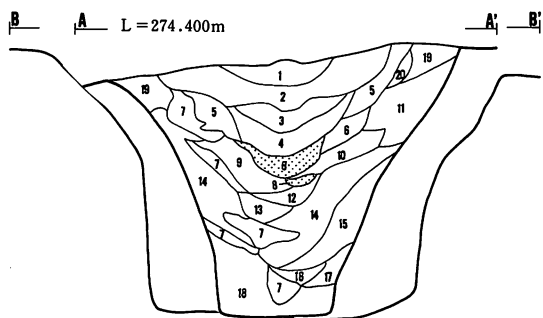
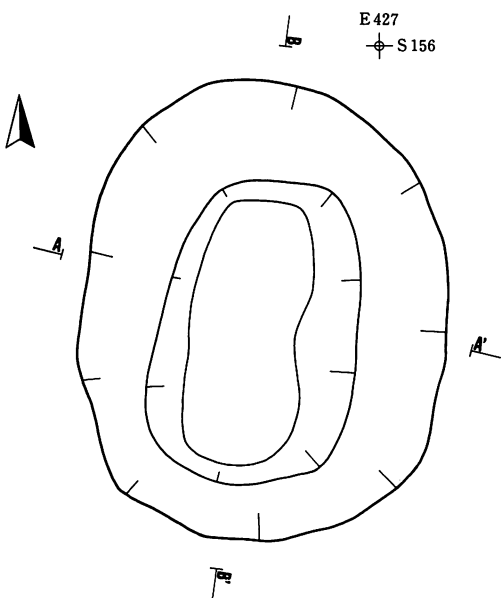
- | | | |
|------------|---------|------------------------|
| 1. 10Y R% | 黒褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 2. 10Y R% | 暗褐色土 | しまりなし。黄褐色土をブロック状に含む。 |
| 3. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりなし。暗褐色土をブロック状に含む。 |
| 4. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりなし。暗褐色土、小角礫を含む。 |
| 5. 10Y R% | 褐色土 | しまりなし。炭化物、小角礫を含む。 |
| 6. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりなし。暗褐色土、小角礫を含む。 |
| 7. 10Y R% | 明黄褐色土 | ややしまりあり。小角礫を含む。 |
| 8. 10Y R% | にふい黄褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。崩落土。 |
| 9. 10Y R% | 暗褐色土 | しまりなし。褐色土、黄褐色土、小角礫を含む。 |
| 10. 10Y R% | 褐色土 | しまりなし。砂を含む。 |

VIII C1 f 陥し穴



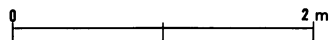
- | | | |
|-----------|-------|--------|
| 1. 10Y R% | 灰黄褐色土 | しまりあり。 |
| 2. 10Y R% | 黒褐色土 | しまりなし。 |
| 3. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりなし。 |
| 4. 10Y R% | 暗褐色土 | しまりなし。 |

VIII D2 c 陥し穴



- | | | |
|-------------|---------|--------------------------|
| 1. 10Y R% | 黒色土 | しまりなし。 |
| 2. 10Y R% | 黄褐色土 | ややしまりあり。 |
| 3. 10Y R% | にふい黄褐色土 | しまりなし。 |
| 4. 10Y R% | 明黄褐色土 | ややしまりあり。 |
| 5. 10Y R% | 明黄褐色土 | ややしまりあり。パミスを含む。 |
| 6. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりなし。 |
| 7. 10Y R% | 黄褐色土 | 粘土質。しまりなし。明黄褐色土との混土。 |
| 8. 10Y R% | 灰白色 | パミス。固くしまっている。 |
| 9. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりなし。 |
| 10. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりなし。 |
| 11. 7.5Y R% | 褐色土 | ややしまりあり。 |
| 12. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりなし。 |
| 13. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりなし。 |
| 14. 7.5Y R% | 黒褐色土 | しまりなし。 |
| 15. 7.5Y R% | 褐色土 | 14'は、14層に7層の粘土を含む。しまりなし。 |
| 16. 10Y R% | 褐色土 | しまりなし。 |
| 17. 10Y R% | 明黄褐色土 | 固くしまっている。 |
| 18. 10Y R% | 黄褐色土 | 7層の粘土をブロック状に含む。 |
| 19. 10Y R% | 褐色土 | しまりなし。 |
| 20. 10Y R% | 黄褐色土 | しまりなし。 |

IX D6 b 陥し穴



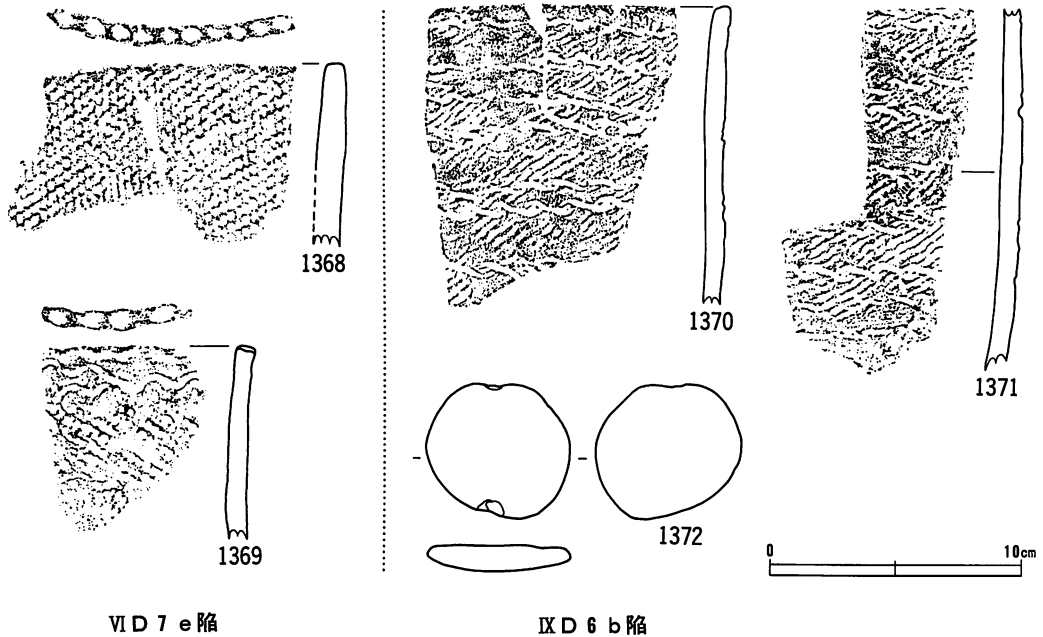
第324図 陥し穴 (3)

中位は再堆積層起源と考えられる褐色土が主体を占め、壁際は崩落土である黄褐色～明黄褐色土が堆積する。全体としてはレンズ状を呈する。底面はほぼ水平で平坦であり、粘土質土であるため湧水により軟質となっている。

遺物（第325図、写真図版227）

図示した2点は同一個体であるが、1371は底面直上、1370は埋土中位からの出土である。

時期 特定する資料を欠き不明である。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1368	VI D 7 e 陥	埋土	口唇部指頭状圧痕。	組縄縄文				繊維混入。		227
1369	VI D 7 e 陥	埋土	口唇部指頭状圧痕。口縁下綾絡文。	R L 横。						227
1370	IX D 6 b 陥	埋土中位		L R 横。横位綾絡文。				1371と同一個体。		227
1371	IX D 6 b 陥	底面直上		L R 横。横位綾絡文。				1370と同一個体。		227

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1372	IX D 6 b 陥	埋土下位	石鏟	珪長質凝灰岩	北上山地	5.3	5.8	1.1	45		I	227

第325図 陥し穴出土遺物

4. 土器埋設遺構

ⅦC 6 h 土器埋設遺構 (遺構番号401)

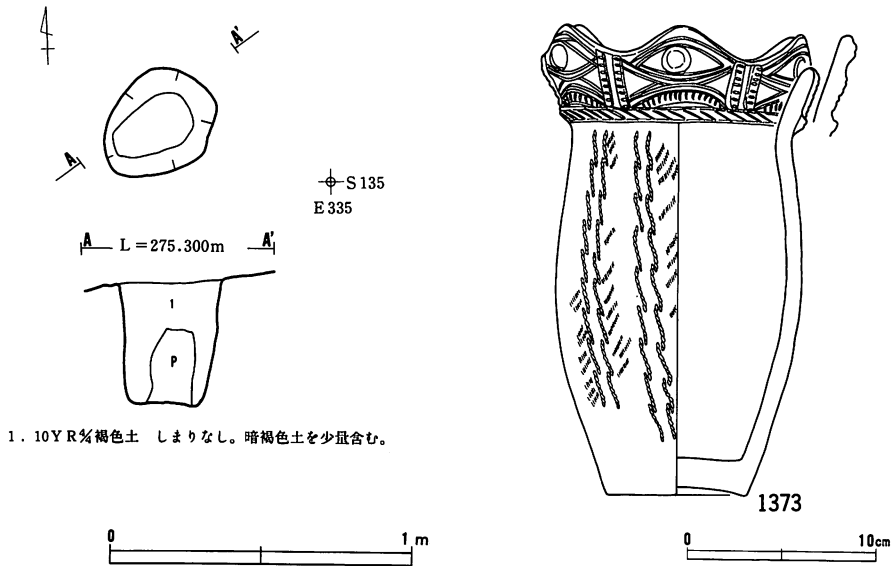
遺構 (第326図、写真図版130)

西尾根頂部に位置する。小角礫を含む暗褐色土層下位でⅦC 6 h 住居跡の精査中に検出したが、断面によって暗褐色土層上位から掘り込んでいることが観察された。土器は底面に口縁部を接して倒立した状態で検出された。掘り方の規模は開口部34×42cm、底部14×28cm、深さ40cmである。埋土は褐色土の単層で締まりを欠く。底面はほぼ水平で平坦である。

遺物 (第326図、写真図版227)

1373が、倒立して埋設されていた深鉢である。6単位の波状口縁を有し、頸部には鋭い斜位の刻みが施された隆帯を巡らしている。口縁波底部からは篋状工具を連続刺突した2本の隆帯が垂下する。同隆帯の区画内には弧線が1画ずつ描かれる。頂部下の弧線内には指頭大の凹文が、頸部隆帯側の上向きの弧線内には篋状工具による連続刺突が施されている。胴部には2条単位の綾絡文が縦走する。

時期 埋設された土器から、縄文時代前期末葉から中期初頭と考えられる。



1. 10Y R%褐色土 しまりなし。暗褐色土を少量含む。

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1373	ⅦC 6 h 埋設		頸部隆帯上刻み目、口縁部沈線弧文、6つの頂部を有する波状口縁、頂部下凹文	R縦、縦位線絡文	14.9	7.5	25.0			227

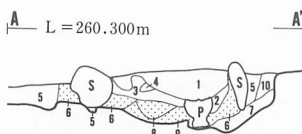
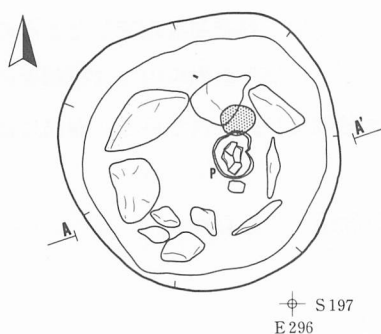
第326図 ⅦC 6 h 土器埋設遺構・埋設土器

5. 炉 跡

VID 0 j 炉跡 (遺構番号501)

遺構 (第327図、写真図版130)

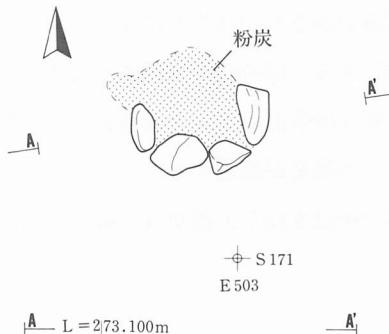
西尾根南麓の平坦部に位置する。表土下の暗褐色土層上面で、炉跡のみ単独で検出した。長さ10~30cmの10個の垂角礫を円形に配し、規模は外法で55×68cmである。垂角礫は全体的に焼成痕を残す。内部には、焼土粒が混入した黒色土・黒褐色土が堆積しており、やや東寄りに高台つきの鉢形土器がやや斜位に埋設される。高台内には明瞭な焼土がパックされている。炉の構築に伴うと考えられる径90cmの円形の掘り方が確認された。



1. 10 Y R¹/2 黒色土 ややしまりあり。
 2. 10 Y R²/2 黒褐色土 ややしまりあり。黄褐色土粒を含む。
 3. 10 Y R³/2 暗褐色土 ややしまりあり。黄褐色土粒を含む。炭化物を含む。
 4. 10 Y R⁴/2 黒褐色土 ややしまりあり。黄褐色土粒を含む。
 5. 10 Y R⁵/2 黒褐色土 しまりなし。褐色土を含む。
 6. 7.5 Y R⁶/2 黒褐色土 焼土粒を含む。
 7. 10 Y R⁷/2 暗褐色土 ややしまりあり。砂、褐色土を含む。
 8. 5 Y R⁸/2 暗赤褐色土 しまりあり。やや焼成を受けている。
 9. 10 Y R⁹/2 暗褐色土 しまりあり。焼土粒を全体にまばらに含む。
 10. 10 Y R¹⁰/2 黒褐色土 しまりなし。
- (土器高台内 5 Y R⁵/2 赤褐色土 しまりなし。焼成良好)



VID 0 j 炉跡

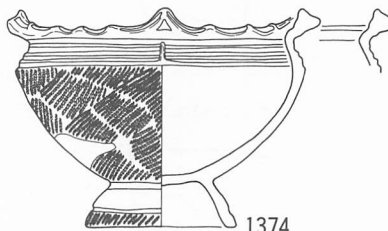


⊕ S 171
E 503

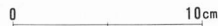


1. 7.5 Y R¹/2 明褐色土 しまりなし。
2. 7.5 Y R²/2 におい橙色土 炭化物を微量含む。
3. 7.5 Y R³/2 褐色土 しまりなし。炭化物を微量含む。

IX D 1 e 炉跡



1374



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1374	VID 0 j 炉	炉埋設	口縁に4つの突起。沈線による文様。	L R 横	16.7	8.6	11.6		V	228

11.6

第327図 炉跡・出土遺物

遺物（第327図、写真図版228）

1374が、炉内に埋設された土器である。口縁部は小波状で4か所に突起をもつ。内側にも横位の沈線が引かれ、突起部は「人」字状となる。全体に焼成を受けて赤変している。

時期 埋設された土器から、縄文晩期中葉に属する。

XI D 1 e 炉跡（遺構番号502）

遺構（第327図、写真図版130）

東尾根南東斜面に位置する。表土下の黒色土上面で検出された。住居のプランや柱穴などは検出できなかった。南側4個の自然礫で構成される。北側半分には礫も、礫の抜き取り痕も確認できなかった。4個の自然礫のうち3個は角礫を用い、残り1個は丸礫である。2個についてその内側に焼成痕が残る。炉内部は焼土の発達が弱く、断面に僅かに現れる程度で、炉外の土と大差ない。炉内には粉炭が多く散在する。構成礫は15～20cmの大きさで、石質は、丸礫が半花崗閃緑岩（北上山地産・中生界）、角礫が緑色凝灰岩質千枚岩（北上山地産・中生界）である。礫の周辺では、断面観察においては僅かな掘り方が観察されたが、明瞭なものではない。遺物は、周辺から縄文時代前期の土器片が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは確認できない。

時期 特定する資料を欠き不明である。

6. 焼土遺構

焼土遺構は、B区の次の3区域において多く検出された。西尾根の南斜面～南麓、同じく頂部～東斜面、東尾根の南斜面～南麓である。それは、竪穴住居跡や土坑が集中する区域でもある。また、焼土遺構の検出面は、住居跡などの検出面より上層である場合もあるが、多くはそれと同じである場合が多い。これらの焼土の中には、住居に伴う地床炉であったものも含まれている可能性も否定できないが、壁や柱穴など住居と認定できる要素を認め得なかったものである。屋外炉の可能性もあるが、それを特定する判断材料は得られなかったことからすべて、同列的に扱うこととする。

焼土の断面観察から、明らかに異地性であると判断されたものは、1遺構を除き、遺構扱わず図面もとらなかつた。すなわちここに報告する焼土は原則的には、原位置を保っている想定されるものである。

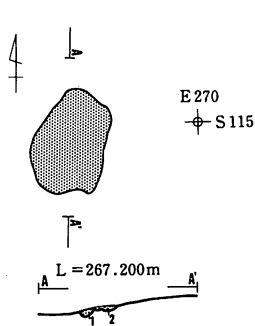
一つ一つの遺構の説明は表によって行うこととする。

遺構名		VID 5 d 焼土 (遺構番号601)				VID h 焼土 (遺構番号602)				VID 8 a 焼土 (遺構番号603)			
図版番号	写真図版番号	図版	328	写真図版		図版	328	写真図版		図版	328	写真図版	
検出面		小角礫を含む暗褐色土層下位				暗褐色土層上面				黒褐色土層上面			
平面形		不整な楕円形				不整形				不整形			
規模		分布範囲	48×70cm	厚さ	8 cm	分布範囲	68×78cm	厚さ	6 cm	分布範囲	75×110cm	厚さ	13cm
備考		縄文時代前期の住居跡と同じ検出面である。				VID 7 g 住居跡に近接する。検出面は、同住居と同一面である。木根により一部攪乱を受けている。				黒褐色土が焼土化したものである。			
時期		検出面から縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				特定する資料を欠き不明である。			

遺構名		VID 9 b 焼土 (遺構番号604)				VID 9 d 焼土 (遺構番号605)				VID 0 f 焼土 (遺構番号606)			
図版番号	写真図版番号	図版	328	写真図版		図版	328	写真図版	131	図版	328	写真図版	
検出面		小角礫を含む暗褐色土層下位				小角礫を含む暗褐色土層下位				小角礫を含む暗褐色土層下位			
平面形		不整形				不整形				不整な円形			
規模		分布範囲	70×105cm	厚さ	14cm	分布範囲	56×88cm	厚さ	18cm	分布範囲	26×28cm	厚さ	5 cm
備考		本焼土の周囲で炭化材や縄文土器片が多く検出されていること、本焼土が固くしっかりしたものであることから、住居に伴うものであった可能性がある。				暗褐色土層が焼土化したもので、固くしっかりしている。本焼土も住居の炉であった可能性が高い。				暗褐色土層が焼土化したもので固くしまっている。			
時期		検出面から縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。			

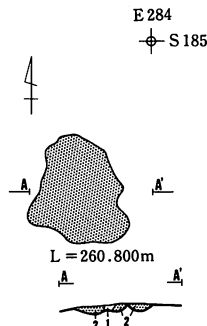
遺構名		VII B 8 h 焼土 (遺構番号607)				VII C 5 h 焼土 (遺構番号608)							
図版番号	写真図版番号	図版	328	写真図版	131	図版	328	写真図版	131	図版	328	写真図版	
検出面		表土直下暗褐色土層上位				小角礫を含む暗褐色土層下位							
平面形		不整な帯状				不整形							
規模		分布範囲	65×180cm	厚さ	12cm	分布範囲	36×50cm	厚さ	6 cm	分布範囲		厚さ	
備考		断面形は溝状で、脆く微細な炭化物を含んでいる。長軸方向が等高線にはほぼ直交する。斜面上位と下位の焼土の比高最大値は71cmで、傾斜角は約23°である。遺物は出土していない。				暗褐色土層下位から相当量の遺物が出土し、それらを取り上げ後に検出した。焼土周辺にフラットな部分があり、住居に伴う焼土である可能性が高い。出土した遺物は縄文時代前期の網目状燃糸文・木目状燃糸文の土器片で、被熱しているものあり。							
時期		表土下での検出であり、不明である。				検出状況から、縄文時代前期に属するものと推定される。							

第6表 焼土遺構観察表(1)



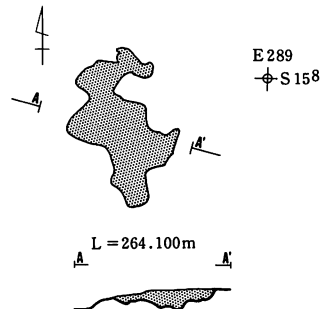
1. 2.5Y R% 暗赤褐色土 焼土。ややしまりあり。
2. 2.5Y R% 赤褐色土 焼土。ややしまりあり。

VI C 5 d 焼土



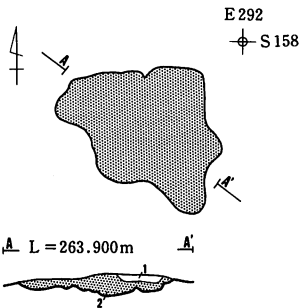
1. 7.5Y R% 黒褐色土 木根痕
2. 5Y R% 赤褐色土 焼土。しまりなし。

VI D 7 h 焼土



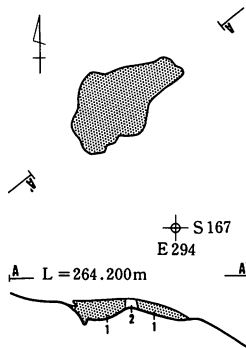
- 5Y R% 明赤褐色土 焼土。ややしまりあり。

VI D 8 a 焼土



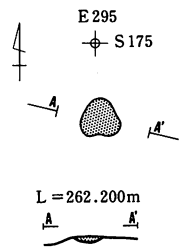
1. 10Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。焼土粒を若干含む。
2. 2.5Y R% 赤褐色土 焼土。しまりあり。

VI D 9 b 焼土



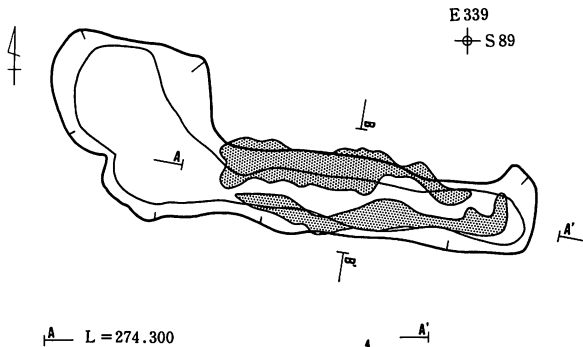
1. 5Y R% 明赤褐色土 焼土。極めて固くしまっている。
2. 7.5Y R% 褐色土 やや焼成を受けている。しまりあり。

VI D 9 d 焼土



- 5Y R% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。

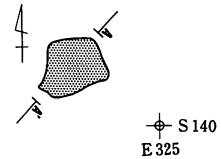
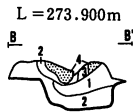
VI D 0 f 焼土



1. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
2. 7.5Y R% 褐色土 ややしまりあり。炭化物を微量含む。
3. 10Y R% 黒色土 ややしまりあり。
4. 5Y R% 赤褐色土 焼土。しまりなし。

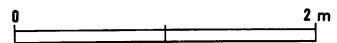
VII B 8 h 焼土

E 339
S 89



- 5Y R% 明赤褐色土 焼土。しまりなし。

VII C 5 h 焼土



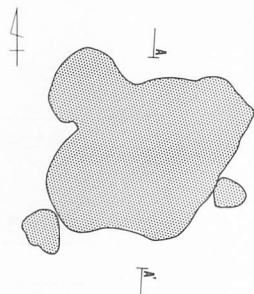
第328図 焼土遺構(1)

遺構名	VII C 9 e 焼土 (遺構番号609)				VII C 0 b 焼土 (遺構番号610)				VII 1 j 焼土 (遺構番号611)				
図版番号	写真図版番号	図版	329, 333	写真図版	229	図版	329	写真図版		図版	329	写真図版	
検出面	小角礫を含む暗褐色土層下位				小角礫を含む暗褐色土層下位				暗褐色土層上面				
平面形	不整形				不整形				不整形				
規模	分布範囲	106×120cm	厚さ	10cm	分布範囲	70×90cm	厚さ	10cm	分布範囲	42×52cm	厚さ	10cm	
備考	暗褐色土層下位から相当量の遺物が出土し、それらと共に検出された。断面から2単位あることが考えられる。1375～1378を共伴遺物として把握した。住居の炉であった可能性が高い。				断面形はレンズ状で、固くしっかっている。地床炉の可能性もあるが、壁や柱穴は確認できなかった。近接した地点から石錘が出土している。				攪乱を受けているが、基盤層まで焼成が及んでいることから現地性の焼土と考えられる。				
時期	検出状況から、縄文時代前期に属するものと推定される。				検出面から、縄文時代に属するものと推定される。				特定する資料を欠き不明である。				

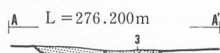
遺構名	VII D 3 g 焼土 (遺構番号612)				VII 5 f 焼土 (遺構番号613)				VII D 5 h 焼土 (遺構番号614)				
図版番号	写真図版番号	図版	329	写真図版	131	図版	329	写真図版		図版	329	写真図版	
検出面	小角礫を含む暗褐色土層下位				小角礫を含む暗褐色土層下位				基盤層へ漸移する暗褐色土層				
平面形	不整な円形				不整形				不整形				
規模	分布範囲	50×50cm	厚さ	9cm	分布範囲	30×46cm	厚さ	4cm	分布範囲	35×40cm	厚さ	5cm	
備考	断面形はレンズ状で、固くしっかっている。本焼土のに周辺は平坦であり、住居の炉である可能性が高い。が、新期の道路造成による攪乱を受けており、詳細は不明である。2047の石鏃が本遺構に伴う可能性がある。				一部攪乱があるものの、漸移的に固くしっかした焼土が形成される。				VII D 5 h-2 焼土と同時に、それと近接して検出された。本焼土および同焼土付近からは縄文時代前期の土器片が多く出土しており、住居の炉である可能性がある。				
時期	検出面から、縄文時代に属するものと推定される。				検出面から、縄文時代に属するものと推定される。				検出状況から、縄文時代前期に属するものと推定される。				

遺構名	VII D 5 h-2 焼土 (遺構番号615)				VII D 6 h 焼土 (遺構番号616)				VIII D 0 j 焼土 (遺構番号617)				
図版番号	写真図版番号	図版	329	写真図版		図版	329	写真図版		図版	329	写真図版	
検出面	基盤層へ漸移する暗褐色土層				小角礫を含む暗褐色土層				基盤層へ漸移する暗褐色土層				
平面形	不整形				不整形				不整形				
規模	分布範囲	20×33cm	厚さ	7cm	分布範囲	× cm	厚さ	cm	分布範囲	62×70cm	厚さ	8cm	
備考	VII D 5 h 焼土と同時に検出した。この2基の焼土は同レベルにあり、遺物量も比較的多かったことから、住居の炉であった可能性がある。				平面で3単位、断面で4単位のみとまがりが見られるが、近接していることから同じ性格のものとして把え1遺構として扱った。漸移的に焼土化しており、現地性のものと考えられる。				焼土は締まりを欠くが、断面形はレンズ状を呈し、現地性と考慮される。				
時期	検出状況から、縄文時代前期に属するものと推定される。				検出面から、縄文時代に属するものと推定される。				検出面から、縄文時代に属するものと推定される。				

第7表 焼土遺構観察表(2)

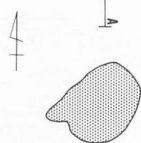


E344
⊕ S122

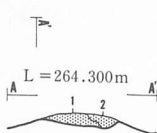


1. 5 YR^{5/6} 明赤褐色土 焼土。しまりなし。
2. 5 YR^{5/6} 赤褐色土 焼土。炭化物を含む。
3. 10 YR^{5/6} 褐色土 しまりなし。
4. 10 YR^{5/6} 褐色土 しまりなし。

VII C9 e 焼土



E314
⊕ S181

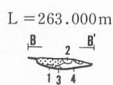


1. 5 YR^{5/6} 赤褐色土 焼土。極めて固くしまっている。
2. 5 YR^{5/6} 赤褐色土 焼土。極めて固くしまっている。

VII D3 g 焼土



S188 ⊕
E319



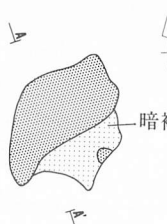
A...A'

1. 7.5 YR^{5/6} 明褐色土 しまりあり。
2. 7.5 YR^{5/6} 褐色土 焼土。固くしまっている。炭化物、バミスを含む。
3. 7.5 YR^{5/6} 暗褐色土 しまりなし。

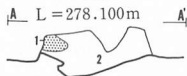
B...B'

1. 7.5 YR^{5/6} 褐色土 焼土。しまりあり。
2. 7.5 YR^{5/6} 暗褐色土 しまりなし。
3. 7.5 YR^{5/6} 極暗褐色土 しまりあり。
4. 7.5 YR^{5/6} 黒褐色土 しまりあり。やや焼成を受けている。

VII D5 h 焼土・VII D5 h-2 焼土

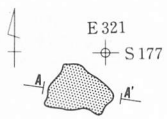


⊕ S147
E350

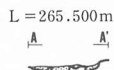


1. 5 YR^{5/6} 明褐色土 焼土。極めて固くしまっている。
2. 5 YR^{5/6} 褐色土 焼土を含む。

VII C0 b 焼土

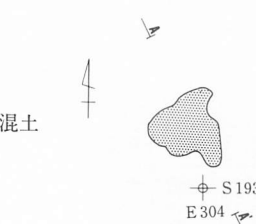


E321
⊕ S177



- 2.5 YR^{5/6} 赤褐色土 固くしまっている。

VII D5 f 焼土

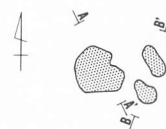


⊕ S193
E304

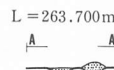


1. 5 YR^{5/6} 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
~%明褐色土
2. 7.5 YR^{5/6} 黒褐色土 しまりあり。
焼成を受けている。

VII D1 j 焼土



E328
⊕ S186



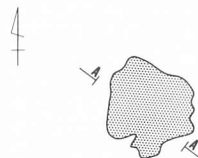
A...A'

- 5 YR^{5/6} 明赤褐色土 焼土。

B...B'

- 5 YR^{5/6} 赤褐色土 焼土。

VII D6 h 焼土

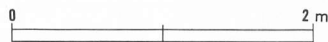


E397
⊕ S185



- 2.5 YR^{5/6} 極暗赤褐色土 焼土。しまりなし。

VIII D0 j 焼土



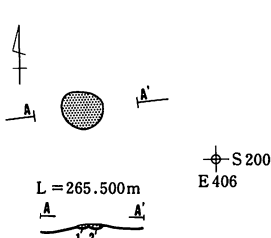
第329図 焼土遺構(2)

遺構名	IXD1j 焼土 (遺構番号618)				IXD3i 焼土 (遺構番号619)				IXD3j 焼土 (遺構番号620)				
図版番号	写真図版番号	図版	330	写真図版	図版	330	写真図版	図版	330	写真図版	図版	330	写真図版
検出面	基盤層へ漸移する褐色土層				基盤層へ漸移する褐色土層				基盤層へ漸移する褐色土層				
平面形	円形				不整形				不整形				
規模	分布範囲	25×30cm	厚さ	4 cm	分布範囲	68×78cm	厚さ	6 cm	分布範囲	20×50cm	厚さ	10cm	
備考	層厚は薄い ^が 、原位置を保っていると考えられる。				木根による攪乱がある。焼土そのものは固くしまっており、漸移的に赤変している。				腐植土層下からIXD3j-2焼土と同時に検出した。固くしまっており、漸移的に赤変している。				
時期	検出面から、縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				

遺構名	IXD3j-2焼土 (遺構番号621)				IXD4j 焼土 (遺構番号622)				IXD5j 焼土 (遺構番号623)				
図版番号	写真図版番号	図版	330	写真図版	図版	330	写真図版	図版	330	写真図版	図版	330	写真図版
検出面	基盤層へ漸移する暗褐色土層				基盤層へ漸移する暗褐色土層				黒褐色土層				
平面形	不整形				不整形				円形				
規模	分布範囲	40×50cm	厚さ	4 cm	分布範囲	40×46cm	厚さ	3 cm	分布範囲	30×32cm	厚さ	2 cm	
備考	腐植土層下からIXD3j焼土と同時に検出した。同焼土よりは軟質である。				一部攪乱を受けている ^が 、漸移的に赤変している。				IXD5j-2焼土、IXD5j-3焼土と同時に同じ面で検出した。層厚薄く締まりを欠く ^が 、黒褐色土層が焼成を受けたものである。本焼土の下からはIXD5j-2住居跡 ^が 検出された。				
時期	検出面から縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				特定する資料を欠き不明である。				

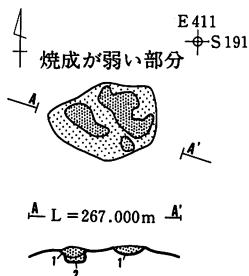
遺構名	IXD5j-2焼土 (遺構番号624)				IXD5j-3焼土 (遺構番号625)				IXD6h 焼土 (遺構番号626)					
図版番号	写真図版番号	図版	330	写真図版	131	図版	330	写真図版	図版	330	写真図版	図版	330	写真図版
検出面	黒褐色土層				黒褐色土層				基盤層					
平面形	不整形				不整形				不正な楕円形					
規模	分布範囲	43×56cm	厚さ	9 cm	分布範囲	19×36cm	厚さ	4 cm	分布範囲	44×50cm	厚さ	12cm		
備考	IXD5j焼土、IXD5j-3焼土と同じ面で検出した。3基の焼土の中では最もしっかりしている。黒褐色土 ^が 焼土化したものでやや締まりを欠く。				IXD5j-2焼土、IXD5j-3焼土と同時に同じ面で検出した。層厚薄く締まりを欠く ^が 、黒褐色土層 ^が 焼成を受けたものである。				近辺に倒木痕 ^が あり、その影響と考えられる攪乱がある。					
時期	特定する資料を欠き不明である。				特定する資料を欠き不明である。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。					

第8表 焼土遺構観察表(3)



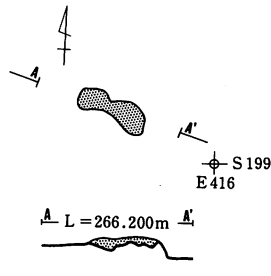
- L = 265.500m
 1. 5.5YR% 赤褐色土 焼土。しまりなし。
 2. 7.5YR% 暗褐色土 焼土。しまりなし。

IX D1 j 焼土



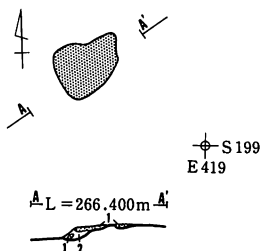
- L = 267.000m
 1. 5YR% 明赤褐色土 焼土。極めて固くしまっている。
 2. 5YR% 暗赤褐色土 焼土。しまりあり。

IX D3 i 焼土



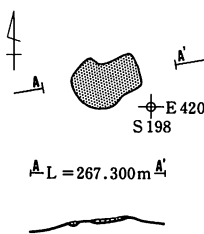
- L = 266.200m
 5YR% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。

IX D3 j 焼土



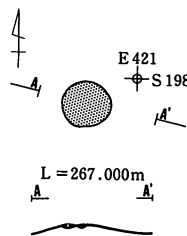
- L = 266.400m
 1. 5YR% 赤褐色土 焼土。しまりなし。
 2. 7.5YR% 黒色土 しまりなし。

IX D3 j-2 焼土



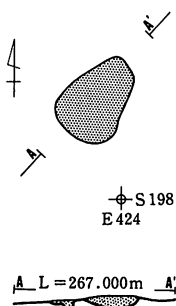
- L = 267.300m
 7.5YR% 明褐色土 焼土。しまりあり。

IX D4 j 焼土



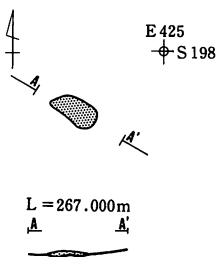
- L = 267.000m
 5YR% 赤褐色土 焼土。しまりなし。

IX D5 j 焼土



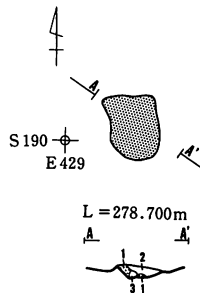
- L = 267.000m
 5YR% 赤褐色土 焼土。

IX D5 j-2 焼土



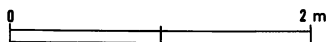
- L = 267.000m
 5YR% 暗赤褐色土 しまりなし。

IX D5 j-3 焼土



- L = 278.700m
 1. 7.5YR% 褐色土 焼土。しまりあり。
 2. 7.5YR% 暗褐色土 しまりなし。
 3. 7.5YR% 暗褐色土 しまりあり。

IX D6 h 焼土



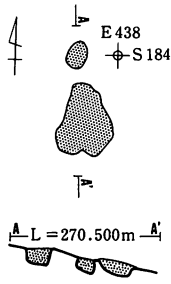
第330図 焼土遺構(3)

遺構名		IXD 8 g 焼土 (遺構番号627)				IXD 8 g-2焼土 (遺構番号628)				IXD 9 h 焼土 (遺構番号629)			
図版番号	写真図版番号	図版	331	写真図版		図版	331	写真図版		図版	331	写真図版	
検出面	小角礫を含む暗褐色土層				基盤層上面				小角礫を含む暗褐色土層				
平面形	不整形				不整形								
規模	分布範囲	40×78cm	厚さ	10cm	分布範囲	28×43cm	厚さ	4 cm	分布範囲	34×52cm	厚さ	5 cm	
備考	IXD 8 g-2 住居跡の埋土に形成された焼土である。				IXD 8 g-3 住居跡の床面と同一面にあり、同住居の炉である可能性もあるが、同住居の推定範囲と若干ずれることから別個の遺構とした。				層厚は薄いが、断面形はレンズ状を呈し、現地性のものと考えられる。				
時期	検出面から縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				

遺構名		IXD 0 f 焼土 (遺構番号630)				IXD 0 g (遺構番号631)				IXD 0 h 焼土 (遺構番号632)			
図版番号	写真図版番号	図版	331	写真図版		図版	331	写真図版		図版	331	写真図版	
検出面	小角礫を含む暗褐色土層				小角礫を含む暗褐色土層				基盤層上面				
平面形	不整形				不整形				不整形				
規模	分布範囲	(22)×53cm	厚さ	(9)cm	分布範囲	34×43cm	厚さ	14cm	分布範囲	28×56cm	厚さ	8 cm	
備考	検出時に、誤って北半分を掘り過ぎてしまった。住居跡の炉を想定して精査をしたが壁は確認できなかった。				住居跡の炉を想定して精査したが、壁は確認できなかった。焼成は弱い。				住居跡の炉を想定して精査したが壁は確認できなかった。				
時期	検出面から縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				

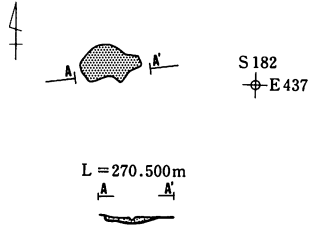
遺構名		IXE 1 b 焼土 (遺構番号633)				IXE 2 a 焼土 (遺構番号634)				XD 5 f 焼土 (遺構番号635)			
図版番号	写真図版番号	図版	331	写真図版		図版	331	写真図版		図版	331	写真図版	
検出面	腐植土である黒色土層上面				腐植土である黒色土層上面				基盤層へ漸移する褐色土層				
平面形	不整形				不整形				不整形				
規模	分布範囲	38×42cm	厚さ	12cm	分布範囲	42×52cm	厚さ	14cm	分布範囲	24×46cm	厚さ	9 cm	
備考	焼土は締まりを欠く。				焼土は締まりを欠く。				発色に均一性を欠くが、褐色土層そのものが黒褐色土と黄褐色土の混土層で不均一であることから現地性焼土として取り上げた。近接して炭化材片と縄文時代前期の土器片が出土している。				
時期	特定する資料を欠き不明である。				特定する資料を欠き不明である。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				

第9図 焼土遺構観察表(4)



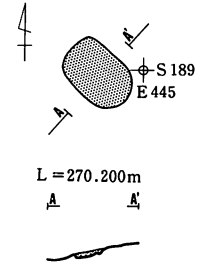
5 Y R% 赤褐色土 焼土。しまりあり。

IX D 8 g 焼土



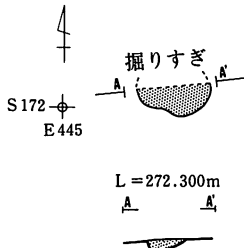
5 Y R% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。

IX D 8 g-2 焼土



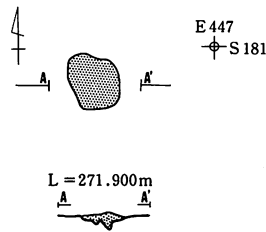
5 Y R% 赤褐色土 焼土。しまりなし。

IX D 9 h 焼土



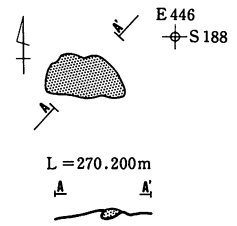
5 Y R% 赤褐色土 焼土。しまりなし。

IX D 0 f 焼土



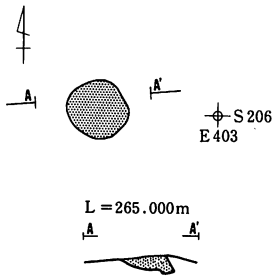
5 Y R% 明赤褐色土 焼土。固くしまっている。

IX D 0 g 焼土



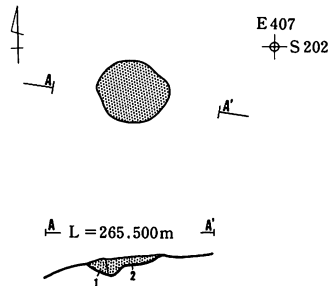
5 Y R% 暗赤褐色土 焼土。しまりなし。

IX D 0 h 焼土



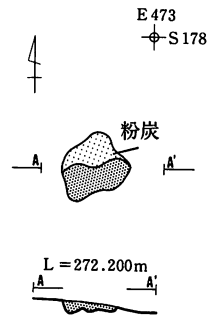
7.5 Y R% 褐色土 焼土。しまりなし。

IX E 1 b 焼土



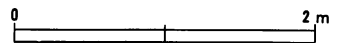
1. 5 Y R% 暗赤褐色土 焼土。しまりなし。
2. 5 Y R% 赤褐色土 焼土。しまりなし。

IX E 2 a 焼土



5 Y R% 暗赤褐色土 焼土。しまりあり。

IX D 5 f 焼土

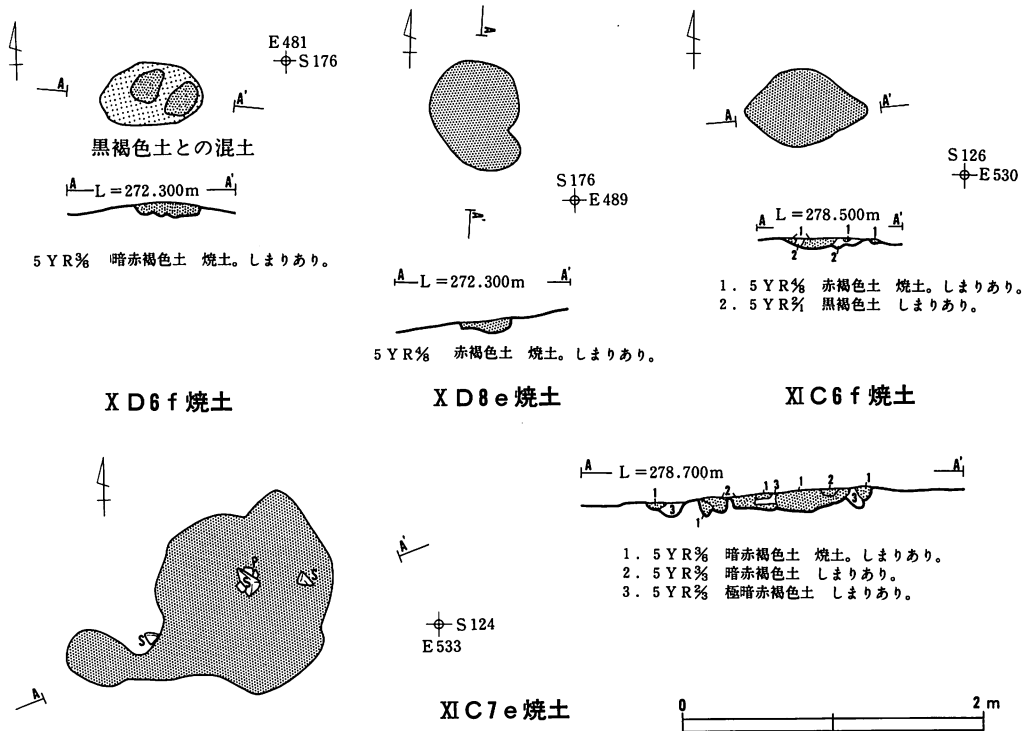


第331図 焼土遺構(4)

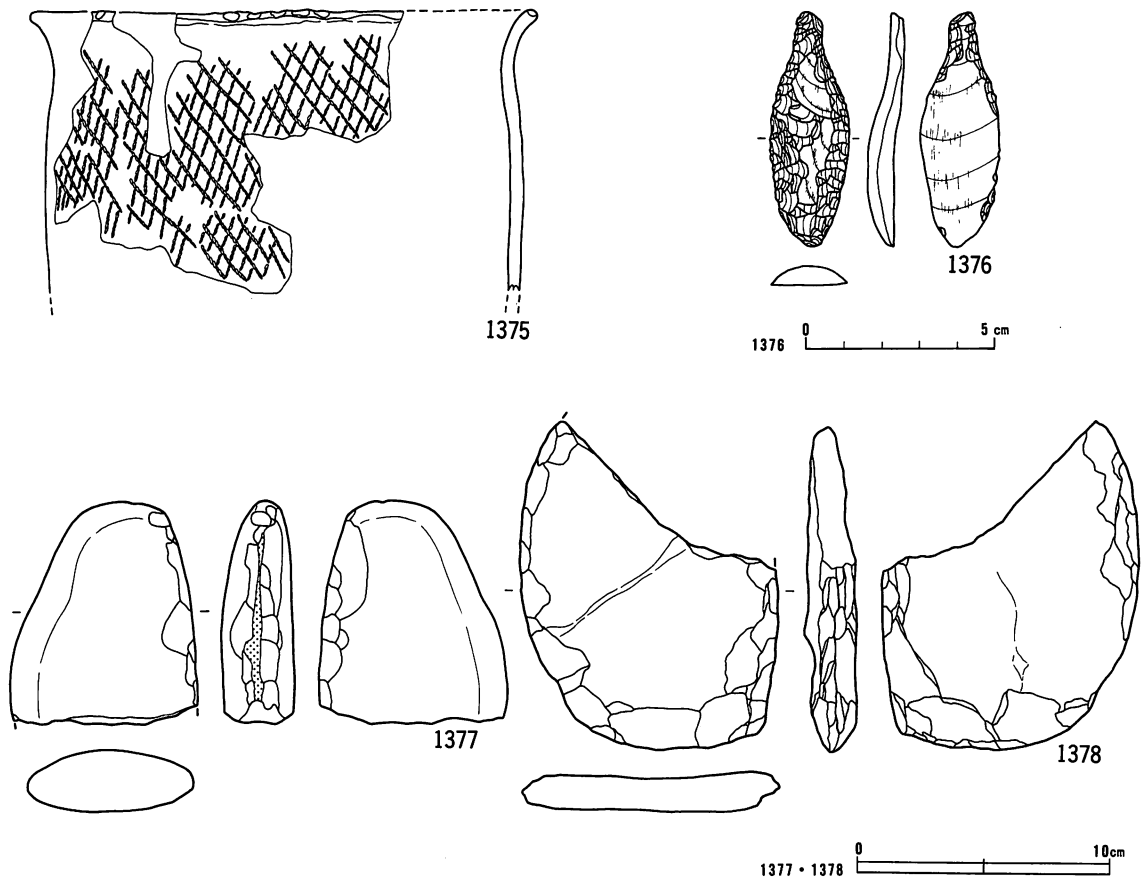
遺構名	XD6f 焼土 (遺構番号636)				XD8e 焼土 (遺構番号637)				XC6f 焼土 (遺構番号638)				
図版番号	写真図版番号	図版	332	写真図版	図版	332	写真図版	図版	332	写真図版	図版	332	写真図版
検出面	基盤層へ漸移する褐色土層				黒色土層上面				黒褐色土層上面				
平面形	楕円形状				不整形				不整形円形				
規模	分布範囲	40×70cm	厚さ	10cm	分布範囲	58×80cm	厚さ	10cm	分布範囲	52×82cm	厚さ	8cm	
備考	平面では、焼成の中心が2単位あるように観察されたが、断面形はレンズ状で、単一のものと考えられる。				断面形はレンズ状で固く締まっている。				表土下の黒褐色土層が焼成を受けたものである。周辺からは、縄文土器片、土師器片が比較的多く出土した。				
時期	検出面から縄文時代に属するものと推定される。				検出面から縄文時代に属するものと推定される。				特定する資料を欠き不明である。				

遺構名	XC7e 焼土 (遺構番号639)		図版番号	332, 333	写真図版番号	131, 228	検出面	黒褐色土層上面
平面形	不整形	規模	分布範囲		124×194cm	厚さ	16cm	
備考	全体的に固くしっかりした焼土であるが、発色・堅さにややむらがある。焼土の中に多量の土師器細片が混入する。これらのことから、本焼土は投棄されたものと考えられる。斜面上方約10mに平安時代の住居跡が存在する。						時期	出土遺物から、平安時代に属する。

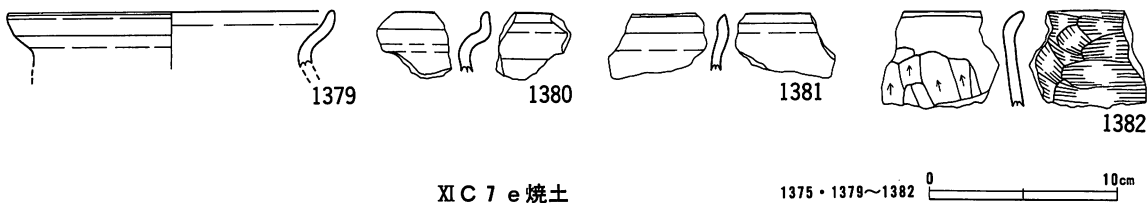
第10表 焼土遺構観察表(5)



第332図 焼土遺構(5)



VII C 9 e 焼土



XI C 7 e 焼土

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1375	VII C 9 e 焼		一部口唇部に指頭状圧痕(4カ所か?)	L網目状捺糸文	(27.0)	-	(15.0)		II 6	228
1379	XI C 7 e 焼		ロクロ		(17.4)	-	(2.7)		VII	228
1380	XI C 7 e 焼	暗褐色土	ロクロ		-	-	-		VII	228
1381	XI C 7 e 焼		ロクロ		-	-	-		VII	228
1382	XI C 7 e 焼		外面ケズリ、内面ナデ		-	-	-		VII	228

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1376	VII C 9 e 焼		石匙	珪質泥岩	雫石西部	6.2	2.1	0.6	15.44		I a 1	228
1377	VII C 9 e 焼		敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	(8.8)	7.5	6.4	(250)		III b	228
1378	VII C 9 e 焼		敲磨器類 A 群	輝石安山岩	奥羽山地	(13)	10.2	1.5	(240)		III c	228

第333図 焼土遺構出土遺物

7. 遺構外出土遺物

(1) 土器・土製品

出土した土器は、遺構内・外合わせてコンテナで約170箱で、うち遺構外は約105箱である。大まかな数であるが大グリッド別の出土量を次表に示した。

大グリッド	III C	V C	V D	IV C	IV D	VII C	VII D	VII E	VIII C	VIII D	VIII E
箱数	0.5	0.5	1.5	1.5	8.0	42.5	15.5	2.0	5.5	5.0	3.0

IX C	IX D	XIC	計
0.5	11.5	8.0	105.5箱

第11表 大グリッド別土器出土量

比較的多量の出土量を示している区域は、多い順にVII C区、VII D区、IX D区、VI D区などであるが、これらの区域は遺構の検出数が多く、しかも著しい重複関係を示す区域と概ね重なる。特に際立って出土量が多いのはVII C区であるが、同区は西尾根を中心とする区域に当たる。西尾根の頂部ないし東斜面の土器出土量と遺構数の関係は上記の傾向を示すのに対して、西斜面においては多量の土器が出土しているにもかかわらず、遺構の検出数は希少である。

土器の分類基準については遺構内・外とも同一とし、遺構外遺物は出土地点とは無関係に分類基準に照らして掲載した。また同基準の大別は上八木田遺跡群の既刊報告書にあわせることとし、時期によって第I群から第VIII群まで次のように設定した。

第I群 縄文早期 第II群 縄文前期 第III群 縄文中期 第IV群 縄文後期
 第V群 縄文晩期 第VI群 弥生 第VII 土師器 第VIII群 時期不明

またそれぞれの群の細分は、今日まで積み上げられてきた編年研究を踏まえ、概ね時期・型式に沿うように努めたが、本遺跡の出土遺物の主体をなす第II群土器については、装飾・文様・器形・地文など任意の基準を設けて行った。但し破片については、器形や全体の文様展開が不明であり、表れた特徴の一部を把えて分類してある。

土器

第I群土器：縄文早期に属する土器群

出土量は少なく、口縁部破片は全体で12点である。分布は西尾根西斜面、同南麓、東尾根

南麓で少量ずつ出土した他、V D 9 cの黒色土で1個体分がまとまって出土した。

I 群 1 類 (第356図1518～1524、写真図版238)

貝殻腹縁文・貝殻条痕文を主な文様構成要素とする土器を集めた。器形および全体の文様展開のわかるものは無い。口縁部は外削ぎである点が特徴的である。

1518と1519は胎土・焼成色調が酷似し同一個体の可能性が高い。貝殻腹縁による刺突を施した後、棒状工具による沈線を、外削ぎによる角度変換点に1条、刺突文を挟んで2条、横位に展開させる。1519の下位の2条の沈線の間には、沈線施文具により右斜方向から刺突が連続しているが、1518にはそれは確認できない。1520は色調は異なるものの刺突・沈線の状況はほぼ等しい。沈線より下部は貝殻腹縁による条痕が施される。1521は条痕のみであるが、1520の下部にあたる可能性がある。1522～1524は沈線が付加されないものである。1523は緩い波状口縁を呈する。貝殻腹縁による刺突は浅い。1524には条痕が観察される。

I 群 2 類 (第335図1383、第356図1525～1528、写真図版229・238)

貝殻条痕文・沈線文・刺突文を主な文様構成要素とする土器群である。器形はキャリパー型を呈する。1383は沈線によって区画された部分を貝殻腹縁により充填している。焼成は良好で硬質である。下部は沈線が横位に数段施される。1525～1527は沈線を曲線的・幾何学的に施文する点は同様だが、同沈線上に腹縁文を施す点が異なる。要所に先端が鋭利な工具による刺突が施されるが1525のそのの回りはやや堆い。

第II群土器：縄文前期に属する土器群

II 群 1 類 (第335図1384～1386、第356図1529～第358図1556、写真図版229・238・239)

胎土に植物性繊維（以下単に繊維という）を多量に含む土器を集めた。地文・焼成などからa～dに細分する。

(注1)
1 類 a. 組縄縄文およびそれら近似する地文を有する土器群（1384～1385、1529～1537）である。

西尾根と東尾根の各麓部からの出土が多い。尾根の頂部・鞍部、およびA区ではほとんど出土していない。器形は、口縁部に最大径を有して徐々にすぼまり底部は尖底となる。焼成は軟質で色調はやや赤みを帯びるものが多い。

用いた縄には、2段（1529、1530など）と3段（1532、1535など）とがある。口唇部の形状や施文パターンには一様ではない。1384と1529は口唇部は無施文であるが丁寧に撫でられ、口唇部と器面との境界は明瞭な角を有する。口唇部に施文されるものでは指頭によるもの（1530～1532）、棒状工具によるもの（1533～1534）、地文原体によるもの（1535～1536）がある。1532は指頭圧痕が強く、細波状口縁状となる。1536は口唇部の内面にも外面と同一の施

文がなされる。他に比し焼成が良好で硬質である。

1 類 b. 地文が a と異なるが器形・胎土・焼成などが酷似する土器を集めた (1386、1538～1548)。分布はⅥ D 区などの西尾根南麓部、Ⅷ D 区の南半である東尾根南麓部に厚い。僅かであるが西尾根鞍部からも出土している。地文は斜縄文・組紐等がある。a と同様に、口唇部への施文についてはバリエーションがある。

1538～1544は斜縄文を地文とする。1543と1544にはループ文に類似した文様が横位に等間隔につけられている。縄端を押圧したものであろうか。1386、1545～1549は組紐を地文とする。

1 類 c. 羽状縄文を地文とする土器群を集めた (1549～1554)。

結束の有無・器厚・胎土などから3分した。

ア、器厚が厚く、非結束の羽状縄文を有する土器 (1549・1550)

イ、器厚が厚く、結束羽状縄文を有する土器 (1551・1552)

ウ、器厚が薄く、非結束の羽状縄文を有する土器 (1553・1554)

アは、器厚が最大15mmで、原体は太いものを用いて柔らかかなうちに施文しており、器面の凹凸が大きい。色調は暗褐色である。イは、焼成が良好で硬質で、色調は黄褐色で明るい。ウは原体の細い縄を用いており、やや軟質である。色調はやや赤みを帯びる褐色である。

1 類 d. 沈線のみが施文された土器である (1555・1556)。

図示した2点のみの出土である。繊維の含有率が大きく、破片の断面には細孔が顕著で、軽量である。外面はやや磨耗しているが内面は丁寧にみがきがかけられているのが観察される。沈線は浅く、モチーフは不明である。焼成は良好で、色調は褐灰色である。

Ⅱ群 2 類 (第335図1387～1390、第358図1557～第359図1577、写真図版229・239)

胎土に繊維を含有する土器で、1 類と比較して隆帯・口唇端への施文など装飾性のあるものおよび撚糸文を有する土器を集めた。繊維の含有量は1 類に比し少ないものが多い。

2 類 a. 地文に組紐を用いるもの (1387、1557～1562)。

1 類にも組紐を地文とするものを入れたが、ここに分類したものは、繊維の含有量が少なく、焼成が良好で硬質で、色調は赤みを帯びた褐色のものが多い点などがそれと異なることから分別した。1387は上面観が楕円形を呈する。口縁部には綾絡文が横位に展開するが正整なものではない。口唇部に無施文のもの (1387、1559) もあるが口唇端部へ施文されるものも多い。筥のような平坦な工具で押圧したもの (1557・1558)、棒状工具を器面に対して平行に (1560)、あるいは斜位に (1561) 押圧したものなどがある。1559・1560は緩い組紐の回転により口縁部文様帯が形成される。1561には凹文が、1562には爪型押圧による隆帯が施される。

2 類 b. 地文に斜縄文他を用いるもの (1388～1390、1563～1574)。

ここに分類したものは、地文は異なるものの、胎土・焼成・施文の特徴が a 種に類似するも

のが多い。爪型押圧による隆帯を有するもの(1388、1563)や、口唇部端部に棒状工具で押圧したもの(1389・1390、1566～1569)などがそれである。やや砂も含有するもの(1564・1565)もある。1570～1574は地文の器面への施文が浅く、明瞭性を欠く。波状口縁や小突起を有する。

2類c. 地文に撚糸文を用いるもの(1575～1577)。

出土量は極少である。網目状撚糸文、木目状撚糸文が、いずれも横位に展開する。

II群3類(第336図1391～1394、第359図1578～第360図1601、写真図版229・239・240)

口縁部を主体に横位に重層する綾絡文や不整撚糸文を有する土器群で繊維を含むものが多いが、一部含まないものもここに入れた。VID区、IXD区などの尾根の麓部に分布する。A区や西尾根鞍部では出土していない。

3類a. 口縁部に横位に重層する綾絡文を有するもの(1391～1394、1578～1584、1586～1595)。

器形は、口縁部がやや外反して径が最大となる。頸部はややくびれ胴中央部で幾分膨らんだ後、曲線的にすばまって底部へと連続する。底部の形状については不明である。口縁には小突起がつくものも多く、口唇部に凹線が施されるもの、口唇端部に棒状工具による刻みが連続するものが一般的である。横位綾絡文は口縁部に限られるもの(1392・1593など)から胴中央部まで展開するもの(1391・1594など)まである。地文は、1392が組紐を用いている他はすべて斜縄文である。全体的に焼成は良好で硬質で、色調は灰黄褐色から明褐色のものが多い。

1595は口唇端部刻み目と横位綾絡文の間に、竹管による刺突文が鋸歯状に展開する。やや軟質で、繊維の含有量は他に比較して多い。

3類b. 不整撚糸文など、aに含まれないもの(1585、1596～1601)。

1585と1596は、胎土・焼成などはaに酷似する。1577は口縁部には不整撚糸文を、胴部には複節の羽状縄文を施文する。1598～1601は器面全体に不整撚糸文が施される。口唇部断面は丸みを帯びる。

II群4類(第336図1395、第361図1602～1608、写真図版229・240)

S字状連鎖沈文を有する土器で繊維を微量含む。焼成は良好で硬質であり、色調はにぶい黄褐色～にぶい黄橙色である。VID区のみで出土している。

S字状連鎖沈文が、器面全体に施されるものと、口縁部のみに施され胴部は縄文のもの(1395)とがある。口縁部は、外反するもの(1395・1605)、直立するもの(1602・1603)、内弯するもの(1607)と各種ある。口縁の断面は外削ぎのもの(1604・1605)があり、1605・1606は波状口縁であることが明らかである。

II群5類(第336図1396、第361図1609～1614、写真図版229・240)

口縁部または胴上半部に鋸歯状沈線が施文される土器群である。分布は西尾根に厚く、口縁

部破片に限ると西尾根の麓部から7点、東尾根の麓部から2点である。

1609～1612は、焼成は良好で硬質、色調は黒褐色～暗褐色であるのに対し、1396・1613・1614は胎土に砂が混入しやや軟質で、色調は黄褐色である。1612には繊維を多く含む。沈線はやや深めの凹線である。1609～1611には、縦位の沈線が2本走る。1614には、一筆でカーブを描く部分がある。

II群6類（第337図1397～第350図1479、第361図1615～第369図1754、写真図版229～235、241～245）

繊維を含まず、地文に斜縄文・羽状縄文・各種撚糸文などを用い、装飾性の乏しい土器群を集めた。焼成は良好で硬質のものが多い。胎土には粗砂を含むものが多く、長石や黒雲母を含むものもある。内面は撫でやおさえた程度で研磨されるものはない。色調は黄褐色から暗褐色でやや赤味を帯びるものもある。調査区全域から出土するが、とくに西尾根の鞍部・東西両斜面からの出土が際立っている。

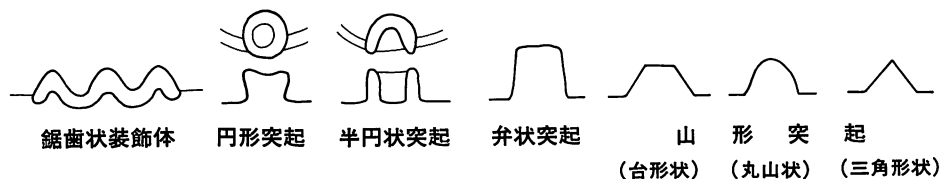
口縁部への加飾の有無によって二分する。

6類a．鋸歯状装飾体や弁状突起・円形突起など各種突起によって口縁部が加飾される土器群である（1397～1414、1615～1678）。

鋸歯状装飾体を有する土器は、遺構外からの出土はそれ程多くはないが、西尾根とその麓部に散在する。その他の突起を有する土器は西尾根鞍部と西斜面に多く、東西麓部がそれに次ぐ。装飾体や突起の形状などによりア～イに三分した。名称については下の模式図による。

ア、鋸歯状装飾体によって加飾されるもの（1397～1400、1615～1632）。

太い粘土紐を、口唇部に波状ないし鋸歯状に貼りつけて加飾するもので一括して鋸歯状装飾体と呼ぶことにする。装飾体上に施文されないもの（1397・1398、1615～1622など）と、竹管刺突などにより施文されるもの（1399・1400、1624～1628）がある。装飾体のほかに隆帯や沈線が付加されるもの（1399、1628～1632）などのバリエーションがある。器体に対して直角につけるものが殆どであるが、斜位につけられるもの（1615・1616・1630など）もある。1632は丸山状突起に隆帯が波状に垂下するものであるが、1631と同一個体であることからここに含めた。



第334図 突起名称概念図

これらの土器群の器形は、口縁部に最大径を有し、緩いカーブを描いて底部へと接続する。装飾については、2種のモチーフが2個一対で対向する位置にそれぞれ配置されるものが多い。1400にみられるように一方は大きく顕然としているのに対し、他方は指頭圧痕のみという相対的に消極的な装飾である。1631と1632も同様の関係で把握できる。

イ、弁状突起によって加飾されるもの（1401～1414、1633～1654）

突起上に施文されないもの（1401、1633～1639）もあるが、爪・指頭・沈線などによって施文されるもの（1402～1414）もある。さらに突起のほか器面に隆帯や沈線が付加されるもの（1412～1414、1649～1654）がある。

これらの土器群もアと同様の器形を有する。底部が外側に張り出すものもあるが本種に限るものではない。装飾が、2個一対で対向する位置にそれぞれ配置されることもまた類似した特徴である。1402・1405・1411は大きさの異なる同種の突起を1対ずつもつものであり、1401は一方が退化して突起が1対のみとなるものである。1408も同じく弁状突起が1対のみのものであるが、低平化し平縁に近づいている。1409・1410は3対6個の弁状突起を有する。突起はほぼ同形同大である。

ウ、円形突起など各種突起によって加飾されるもの（1415・1416、1655～1678）

上面観が円形となる突起（1655～1661）、半円状突起（1415・1662）、山形突起とその組み合わせ（1663～1674）などがある。突起上に刺突が施されるもの（1660など）や器面に隆帯がつけられるもの（1666）がある。1632のように、アやイと組み合わせて用いられたものも多いと考えられる。

6類b. 口縁部に装飾体や突起を有しない土器群（1417～1479、1679～1754）である。

一部に不明なものもあるが、地文・胎土・焼成・遺構内での同伴関係などから、aと同類と考えられる。

ア、隆帯が、口頸部または胴上半部に、曲線的または幾何学的に展開する土器群（1417～1420、1679～1707）。

出土分布状況は、西尾根の鞍部麓部全域から少量ずつ、東尾根の麓部からは口縁部破片に限ると3点のみである。

隆帯上に施文されないもの（1679～1681）と施文されるものがある。施文されるものでは沈線（1682～1688）・竹管刺突（1690～1692など）・指頭圧痕（1693～1700など）・地文原体（1701）によるものなどがある。隆帯のモチーフには、波状（1679～1681）・鋸歯状（1682・1683）・鉤状ないし馬蹄形状（1418・1685など）・円形や渦巻状（1419・1703～1707など）ほかがある。隆帯が器面に対し段差ないように丁寧に調整されるものは1706の1点のみであり、他はすべて無調整である。

イ、口縁に沿って籬状に隆帯が施される土器群（1421～1429、1708～1722）。

隆帯は、断面が偏平で器面との接合部分は調整されない。隆帯上には指頭圧痕（1708～1717など）・竹管刺突（1425）・凹線（1422）・縄文（1718）が施される。隆帯上へ、2種の施文がなされるものがある。指頭圧痕＋凹線（1427・1428など）・竹管刺突＋凹線（1429）のパターンがある。1423の口唇部には、4個1単位の指頭圧痕が、4か所に施されるものと思われる。

ウ、口縁に沿って凹線・竹管文・綾絡文他が施文され裝飾されるもの（1723～1727）。

平縁で、口頸部に凹線が横位に巡るもの（1723～1725）、波状口縁で、口縁に沿って凹線が施文されるもの（1727・1728）がある。1726は、沈線の流れから弁状口縁であろうと思われる。口唇部にも沈線が引かれる。

エ、地文のみで、指頭による前後波状口縁（以下花卉状口縁という。）で裝飾されるもの（1430・1431、1729～1744）。

西尾根の鞍部と斜面、東尾根の南西両斜面と麓部で出土している。

地文には、縄文・撚糸文・網目状撚糸文・櫛歯状沈線などがある。パリエーションとして、前後波状の単位が大きいもの（1737・1741など）や小刻みなもの（1732）、口唇部が平坦に撫でられているもの（1733・1738など）や口唇断面が丸いもの（1735・1736）などがある。指頭のほかに爪痕が外面または内面に顕著な痕跡を残しているものも多い。1730と1734は、前後波状というよりは上斜め方向からの指頭圧痕で、オに分類したものととの中間形をしている。

オ、地文のみで、口唇部に指頭状圧痕などが施されるもの（1432～1439、1745～1750）。

指頭圧痕が口唇部全体に施文されるもの（1432～1435など）と、口唇の一部に施文されるものもの（1437～1439、1749・1750）とがある。指頭押圧が強く施され、細波状口縁状をていするものも多い。

カ、地文のみで、その他の裝飾を有しないもの（1440～1479、1751～1754）。

波状口縁のものは1440・1441の2点を掲げた。1441のそれは緩やかである。平縁の地文には、斜縄文と綾絡文（1442～1445）・撚糸文（1446～1450）・木目状撚糸文とその変形（1451～1460）・網目状撚糸文（1461～1476）・多軸絡条体回転文（1477・1478）・付加条縄文（1753・1754）などがある。

II群7類（第351図1480～第352図1490、第370図1755～1757・1761～第372図1803、写真図版235・236・245～247）

凹線・平行沈線・刺突文他を主要な文様構成要素とする土器を集めた。平行沈線は器体に対し半截竹管の内面を向けたものであり、凹線は竹管の外面を用いたものである。全体に焼成が

良好で硬質である。胎土には粗砂を含む。西尾根の鞍部とその斜面および南麓部から多くの出土をみたのに対し、東尾根からは殆ど出土していない。器形によって二分する。

7類 a. 胴部最大径がほぼ中央部にあり、全体として円筒形を基調とするもの(1480～1485、1755～1757、1761～1789)。

口径に対し器高の低い土器群もあるがここに一括してある。文様が、胴部に展開する土器群(1480、1755～1762)と、口縁部または口頸部に限られる土器群(1481～1485)とがある。

色調は褐色～暗褐色のものが多い。

7類 b. 胴部が球状に膨らみ下半部が円筒形となる、いわゆる金魚鉢形の器形を呈するもの(1486～1490、1790～1802)。

aとは、一見して色調が異なり、にぶい黄褐色～黄褐色を呈するもの(1487・1488など)が多い。

II群 8類 (第353図1491～1500、第372図1804～第373図1829、写真図版236・247・248)

撚紐または絡条体の側面圧痕、竹管刺突他が口縁部文様帯を構成し、器形は円筒形を基調とする土器群である。出土分布は7類のそれに殆ど一致し、西尾根の鞍部とその斜面部および南麓部での出土量が多い。東尾根の東端の谷頭凹型斜面で少量出土している点が異なる。

8類 a. 撚紐の側面圧痕が施されたもの(1491～1496、1804～1819)。

撚紐の圧痕が口縁部に横走するもの(1491～1495、1804～1812)と幾何学的なモチーフをもつもの(1496、1813～1820)とがある。隆帯を有するもの(1809～1812)や凹文をもつもの(1814・1815)がある。半截竹管文と組み合わせるもの(1814～1819)は、7類に分類すべきかもしれない。

8類 b. 絡条体の側面圧痕が施されたもの(1497～1500、1820～1829)

波状口縁のもの(1498・1499、1820・1821など)、凹文を有するもの(1820・1821)、複合口縁となるもの(1499、1824～1826など)、半截竹管文と組み合わせるもの(1829)、棒状工具による刺突文と組み合わせるもの(1498)などがある。

II群 9類 (第354図1501～1505、第374図1830～1847、写真図版236・237・248)

1類から8類のなかに分類できないものを集めた。

9類 a. 地文のみの土器(1501、1820～1826)である。

櫛歯状沈線文を有する土器は第6群b種エにもあるが、1830や1832のような菱形や格子目類似のモチーフをもつものについては、その中にはなくあるいは第7類に伴うものかもしれない。1501・1834～1836は原体不明の土器である。多軸絡条体の回転文かとも思われたが、通常の縄とは異なり、器体に小さな刺突が連続するような印象がある。オオバコの花軸などの可能性もあるかもしれない。^(注2)

9類b. 竹管刺突または半(多?)截竹管文を有するもの(1837~1840)である。

沈線は浅く施文され、不明瞭である。

9類c. 口縁に小突起や刻み目を有するもの(1502~1505、1841~1843)。

1502・1503は口唇端への刻みが第2類に類似するが、胎土に繊維を含まない点が異なる。第6類に各種突起を有するものがあるが、それらと同一視してよいものかどうか不明であり、本類に含めた。

9類d. a~cに含まれないもの(1844~1847)

1844は胎土に繊維を含み軽量で、やや脆弱である。1845~1847は焼成が良好で硬質であり、縄文の条・節が細かい。あるいは第III群に所属するものかもしれない。

第III群：縄文中期に属する土器群

III群1類(第354図1506~第355図1511、第370図1758~1760、第375図1848~第376図1881、
写真図版237・245・246・249・250)

縄文中期前葉に位置づく土器群を一括する。胎土に粗砂を含み、焼成は良好で硬質ある。内面もみがきやなでにより調整されるものが多い。特徴的な施文・時期を勘案して細分する。

1類a. 竹管文を主要な文様構成要素とするもの(1508~1510、1758~1760、1848~1858)

1509と1510は同一個体である。半截竹管による押し引き沈線と波状に垂下する隆帯が施される。1508は不均整な波状口縁を呈するもので、口縁部にハの字状の短沈線が連続する。他には、半截竹管により鋸歯状の平行沈線を施すもの(1848・1849)や三角形彫刻文(1848)、縦位に鋭い沈線を施文後に横位の凹線が引かれるもの(1850・1852)、有節沈線文(1853~1857)、変形爪形文(1857)、交互刺突文(1858)などがある。

1類b. 複合口縁が特徴的な土器群(1506・1507、1859~1868)

1506と1867は同一個体である。口縁部と口頸部の2段にわたって複合させる。縦位に粘土紐を2本垂下させる。1507・1859~1861も同様に2段の複合口縁である。1860は縦位にX字状の隆帯が施される。1862~1866は複合させた口縁に縦位に縄の側面を押圧させたり、工具で鋭い沈線を引いたものである。

1類c. 隆帯が特徴的な土器群(1869~1878)

aやbに含まれないもので、隆帯を有するものを集めた。鋸歯状に垂下する隆帯を有するもの(1870~1872)や、渦巻ないし円を描くもの(1873~1875)などがある。1868・1869の隆帯は第II群のそれと異なり、器体との段差がないようになって調整される。

1類d. a~cに含まれないものを集めた(1511、1879~1882)。

1511は無文の土器であるが、胎土・焼成などから本類に属すると考えられるものである。口縁部に輪積みの痕跡がうかがえる。1879と1880とは同一個体である。口縁に沿ってその内外両側から器体を挟み込むように粘土紐を貼り付け、その境界には縄の側面を押圧する。波状口縁の頂部から2本の隆帯を垂下させる。1880にはボタン状の突起が付けられている。1881は口縁部に浅い沈線が施されるがモチーフは不明である。1882は口縁部および縦位の隆帯の上に縄の側面が押圧され、一部にC字状の圧痕も観察される。

Ⅲ群 2類 (第376図1883～1885、写真図版250)

縄文中期中葉に属する、渦巻状の隆帯が特徴的な土器群である。焼成は良好で硬質である。色調は明褐色で、内面は丁寧なみがきかけられている。西尾根の鞍部から出土している。

1884は胴部まで隆帯が展開し、頸部が括れる器形を有する。1885は隆帯の展開は口縁部に限られ、器形は口縁部が内弯するものである。

Ⅲ群 3類 (第355図1512・1513、第377図1886～1888、写真図版237・250)

縄文中期末葉に属する土器である。焼成は良好で硬質である。色調は褐灰色～褐色で、内面は撫でまたはみがきによって調整される。当該時期の住居跡が検出されたA区に分布するが、西尾根にも極少量の出土をみた。遺構内に比し、遺構外の出土量は比較的少ない。5点のみ図化したのが、遺構内土器も含め文様によって細分した。

3類 a. 沈線によって区画された無文帯が、胴上半部に曲線的に展開する土器群(1512・1886)。

沈線によって区画された円形基調の区域に刺突文を充填させるもの(1886)と、刺突文を伴わないもの(1512)とがある。1512には口縁部内側にも鱗状突起が貼付けられる。

3類 b. 無文帯が口縁部にめぐるもの、または地文のみのもの。

3類 c. a・bに含まれないもの(1513・1887・1888)。

1513は無文の土器である。丸山状の突起を有し、突起の内側に鱗状突起がつく。1887・1888の2点は、撚糸文を地文とし凹線が曲線的に展開するが、a・bのように区画の意味合いは持たない点で異なる。

第Ⅳ群土器：縄文後期に属する土器群

出土量は僅少である。

Ⅳ群 1類 (第377図1889・1891～1895、写真図版250・251)

後期初頭に属する土器群である。隆帯上に刺突が施されるもの(1891～1884など)や一定区画に竹管刺突文・爪形圧痕が充填されるもの(1890・1892)などがある。

Ⅳ群 2類 (第377図1896～1898、写真図版251)

後期前葉に属する土器群である。地文施文後に平行沈線により横位を基調とする曲線的な文

様が展開する土器（1896・1897）と、細く浅い平行沈線により直線的な文様が描かれるもの（1898）とがある。

IV群3類（第377図1890、写真図版250）

後期中葉に属する土器である。大波状口縁で口縁に沿って1条の沈線を施し、その下には下方向からの竹管による刺突を充填させている。

第V群土器：縄文晩期に属する土器群

縄文後期の土器よりは多いものの、やはり僅少である。

V群1類（第377図1898～1904、写真図版251）

縄文晩期初頭に属する土器群である。1899は2山の山形状突起のうちの片側である。1900は隆帯が蛇行して垂下する。1901～1904は入り組み文であろう。

V群2類（第355図1514、第378図1905～1907、写真図版237・251）

縄文晩期前葉に属する土器群である。三叉文を有するもの（1514・1905・1906）と、羊歯状文を有するもの（1907）をここに分類した。

V群3類（第355図1515、第378図1909～1911・1924、写真図版237・251）

縄文晩期中葉に属する土器群である。雲形文を有するもの（1515）と、口縁部や胴上半部に横位に沈線が巡るもの（1908～1911・1924）をここに分類した。

V群4類（第355図1516、第378図1912、写真図版237・251）

粗製の土器である。1912は口縁部に無文帯が形成され小波状を呈する。

第VI群土器：弥生時代に属する土器群（第355図1517、第378図1913～1923、写真図版237・251）

西尾根南麓部から1517が、A区と東尾根の谷頭凹型斜面からは小片が出土した。地文が撚糸文のもの（1517・1913～1915）、細い沈線が施文されるもの（1916など）、交互刺突文およびその簡略形が施文されるもの（1920～1923）などがある。1517には上向きの孤状短沈線が連続する。口縁部内側にも撚糸文が施文される。

第VII群土器：土師器

遺構外からは殆ど出土していない。

底部資料（第379図1925～第 380図1945、写真図版252）

第 379 図は本遺跡の主体をなす縄文前期～中期初頭に属すると思われる土器の底部立上がりや底径のバリエーションを示すものである。

1925～1929は底部から直線的に外反するものである。底径は 5.6cm (1925)～22.1cm(1929)までの幅がある。1930から1935は外弯しながら立ち上がるタイプであるが、直接外弯するものと、一旦内弯したのち外弯するものがある。全体に、底部が外側に張り出すもの（1925～1928、1930・1931）も多い。

第 380 図は底面に網代等の痕跡のあるものを示した。図示した他には不明瞭なものが数点あるのみで、本遺跡では底部に文様があるものは希少である。

1531～1538は網代痕である。密に編まれたもの（1531～1534）と疎に編まれたもの（1535～1538）とがある。1534は底面中央部が密で外周部分が疎らな痕跡が残るもので、2種のものを用いたものか。1539は笹葉痕、1540は木葉痕である。

小型土器・土製品（第381図1946～第382図1975、写真図版253）

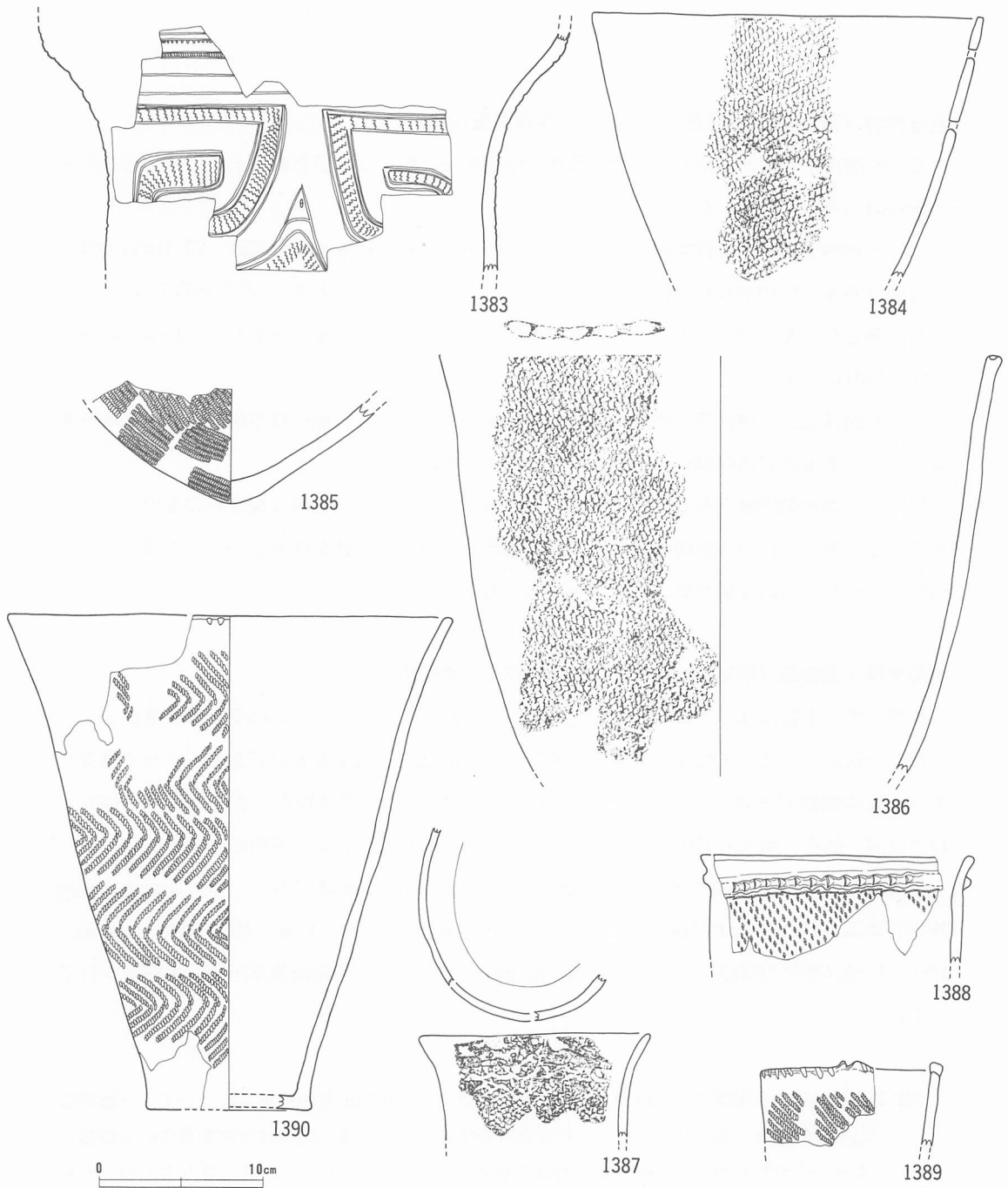
小型土器・土製品は、ここに図示したものが本遺跡から出土したものの全てである。

1947～1951は、胎土・焼成から縄文前期ないし中期初頭に属するものである。すべて無文で手づくねの痕跡が明瞭である。1946・1952・1953は縄文後晩期の所産と考えられる。1952と1953は同一個体で無文の壺型土器である。1954は耳栓か茸状土製品か不明である。

第48図は円盤状土製品であるが、1956～1972・1976は円形基調であり、1973～1975は方形基調である。1956は胎土に繊維を含み、縦方向に条痕が施されている。1975～1963は縄文、1966～1970は横位の綾絡文、1971～1975は組紐回転文、1976は多軸絡条体回転文が施文されている。

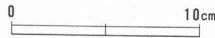
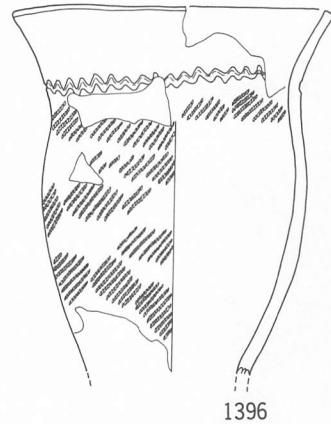
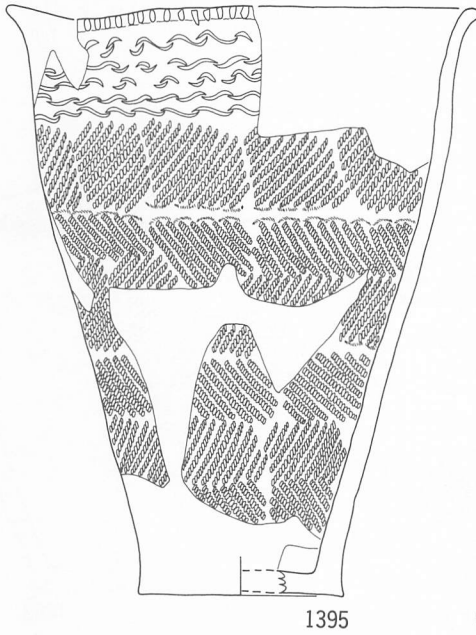
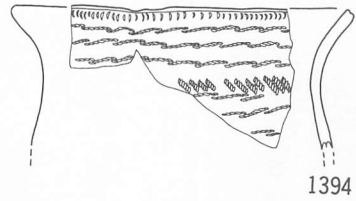
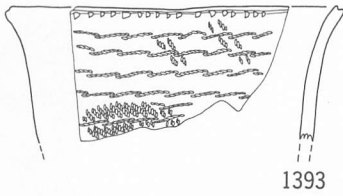
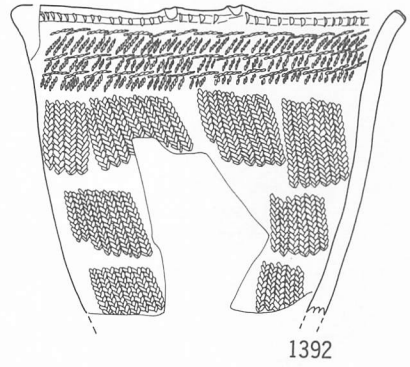
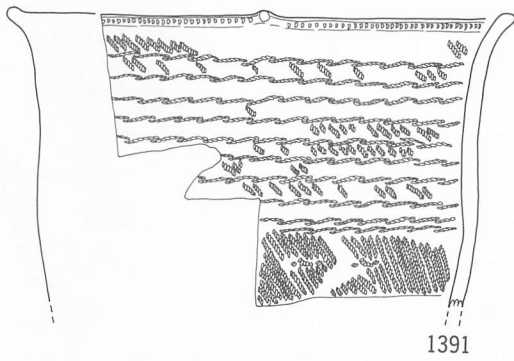
（注1）組縄縄文の用語は、高橋亜貴子（1992）「東北地方前期前葉組縄縄文について」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史歴史学論集』に拠る。滝沢村教育委員会のご好意により、氏が明らかにした組縄縄文の原体を見せていただくとともに、その作り方についてもご指導いただいた。

（注2）その可能性について林謙作氏からご教示いただいた。しかし、時季的な問題により報告者は試みることでできなかった。



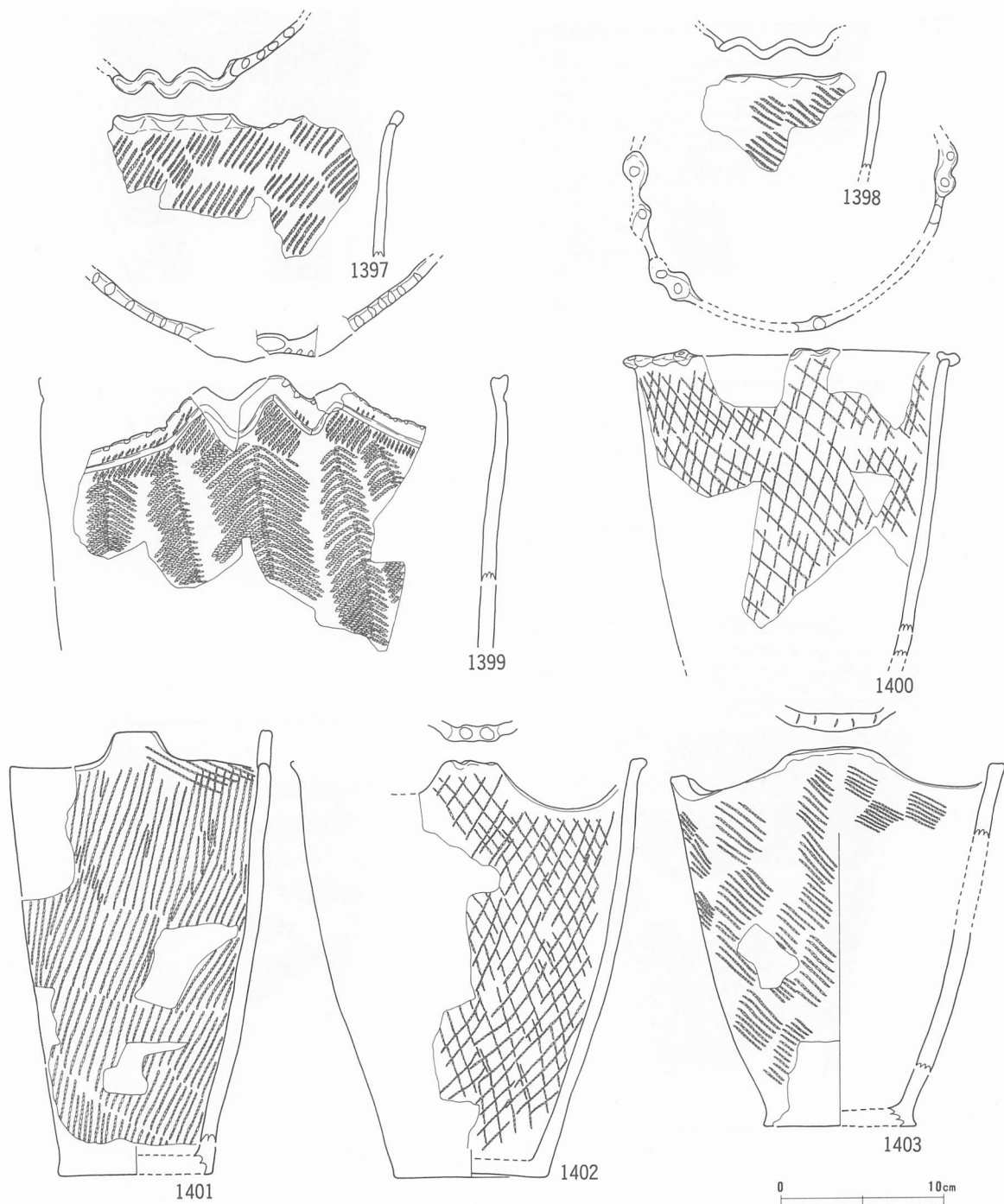
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1383	VD9c	II層 (黒色土)	沈線、貝殻腹縁圧痕文		—	—	(17.8)		I 2	229
1384	VII D 6 g	II層			(24.0)	—	(16.0)	繊維混入。	II 1 a	229
1385	VID 7 d	暗褐色土	尖底土器	組縄羅文	—	—	(7.5)	繊維混入。	II 1 a	229
1386	KD 0 h		口唇部指頭状圧痕、尖底土器	組紐?	(34.2)	—	(25.8)	繊維混入。	II 1 b	229
1387	KD 3 h	II層	石炭パケツ形		—	—	(6.2)	繊維わずか混入。	II 2	229
1388	No13トレンチ	盛土	隆帯上指頭状圧痕 (爪跡顕著)	R L R横	(16.8)	—	(6.5)	繊維わずか混入。	II 2	229
1389	IX E 3 a		口唇端棒状工具による刻み、山形状小突起(2山)	R L横	(11.2)	—	(5.2)	繊維わずか混入。	II 2	229
1390	VII C 8 e	再堆積層下位	口唇端刺突	L R × R L 第1種結束縄文	(27.2)	(10.2)	30.3	繊維わずか混入。	II 2	229

第335図 遺構外出土遺物 土器(1) 第I群・第II群1~2類



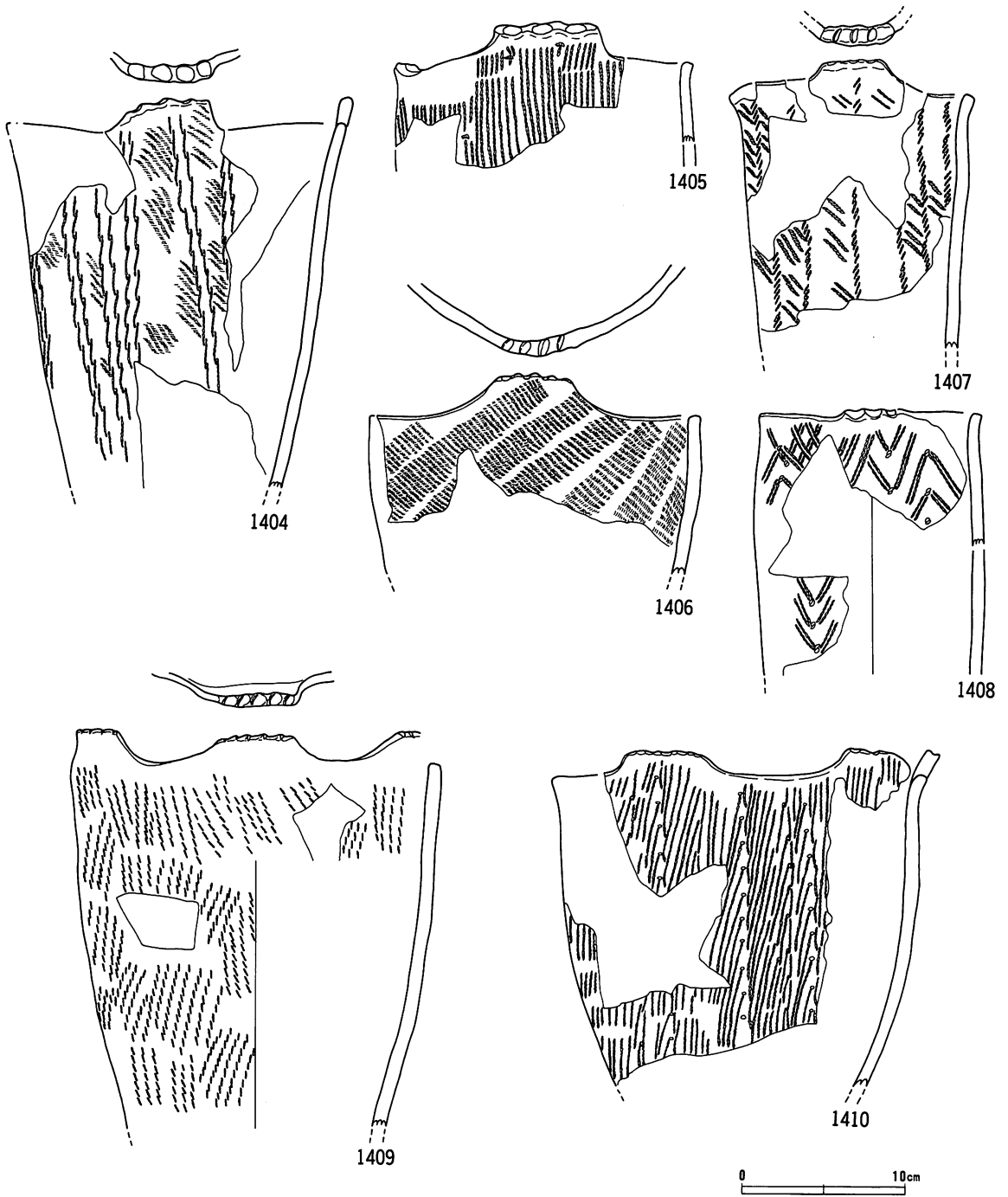
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1391	VI D 9 e	暗褐色土	山形状突起、口唇端篋状工具による刻み、口頸部重層縦絡文 (R L片結び)	R L 0 段多条	(27.0)	—	(15.6)		II 3 a	229
1392	VI D 6 i	黑色土	口唇端篋状工具による刻み、口頸部重層する横位縦絡文 (L R横片結び)	組紐	(21.2)	—	(16.5)	2個一単位の頂部を4単位	II 3 a	229
1393	VII D 2 g	I 層	口唇端篋状工具による刻み、重層する横位縦絡文 (R L片結び)		(18.0)	—	(7.3)		II 3 a	229
1394	VI D 8 g	I 層	口唇部沈線、口端篋状工具による刻み、重層する横位縦絡文 (R L片結び)		(18.4)	—	(7.5)		II 3 a	229
1395	VI D 0 b	褐色土下位	口唇端棒状工具による刻み、口頸部 S 字状連鎖沈文	L R + R L 非結束羽状縦文	(25.0)	(11.0)	31.5		II 4	229
1396	IX D 6 i	II 層	口頸部篋歯状沈線	L R 横	(17.0)	—	(19.5)		II 5	229

第336図 遺構外出土遺物 土器(2) 第II群3～5類



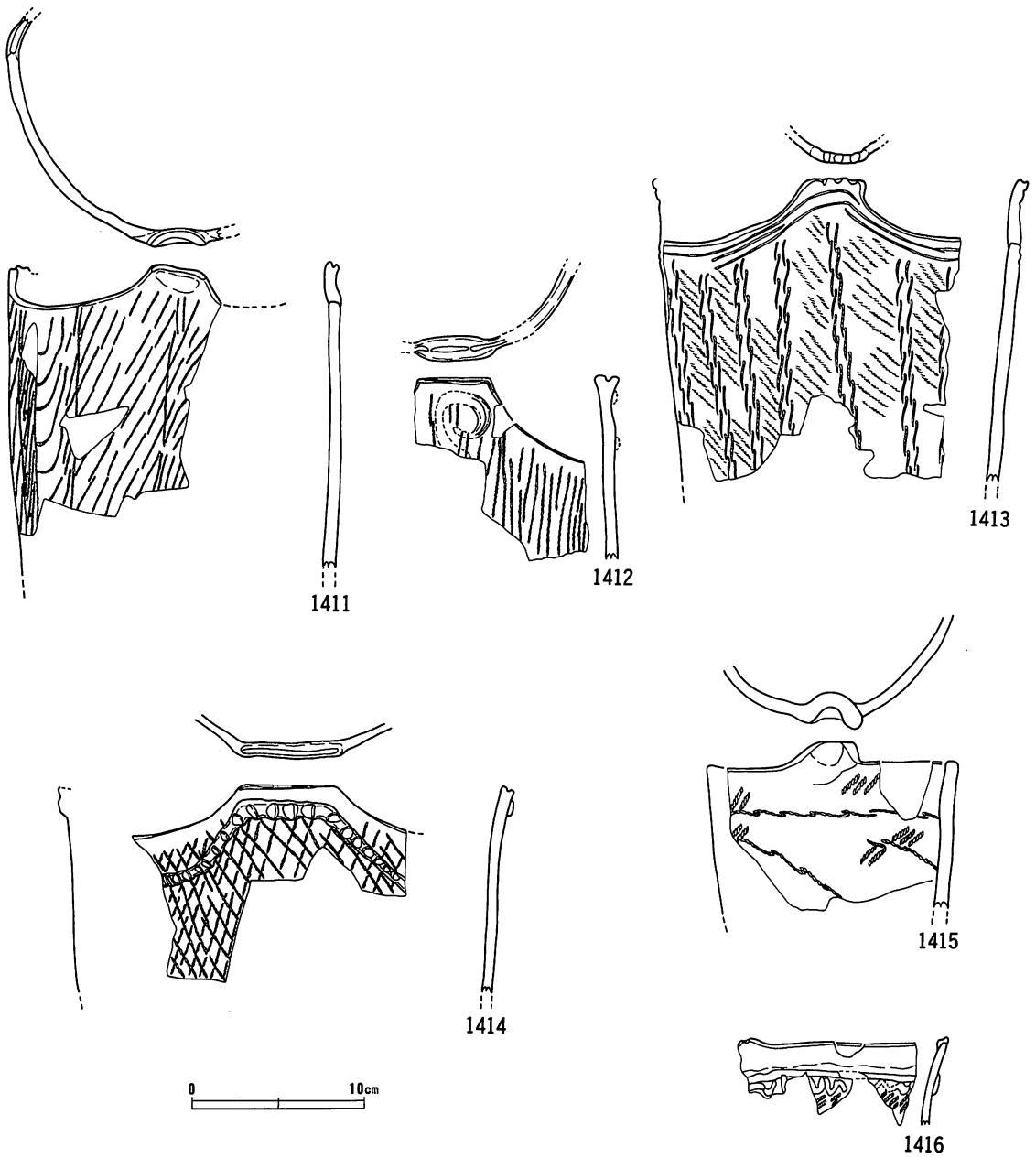
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1397	VIII D 9 f	I 層	鋸齒状裝飾体、口唇部指頭状圧痕	L R 横	-	-	(9.0)		II 6 a 7	229
1398	IX D 2 d	I 層	鋸齒状裝飾体	L R 縦	-	-	(6.0)	1417 と同一個体	II 6 a 7	229
1399	VII D 5 h	I 層	口縁部鋸齒状裝飾体、裝飾体頂部指頭状圧痕、口唇部棒状工具による刻み、洗線(凹線)	L R × R L 第1種結束羽状縄文	(29.0)	-	(16.4)	1628、1928 と同一個体	II 6 a 7	229
1400	VII C	I 層	口縁部鋸齒状裝飾体、裝飾体上竹管刺突、口唇部指頭状圧痕	R 網目状燃糸文	(29.8)	-	(19.0)		II 6 a 7	230
1401	VII C 4 h	再堆積層下位	弁状突起 (2 単位)	R 燃糸文	(16.0)	(9.5)	25.3		II 6 a 4	230
1402	VII C 8 e	再堆積層下位	波状口縁、弁状突起頂部指頭状圧痕	R 網目状燃糸文	(21.8)	(9.6)	25.7		II 6 a 4	230
1403	VII C 5 h	I 層下位	波状口縁、弁状突起、突起頂部爪形圧痕	L R 縦	20.6	(9.4)	23.3	突起の他の一対はやや低い	II 6 a 4	230

第337図 遺構外出土遺物 土器(3) 第II群6類



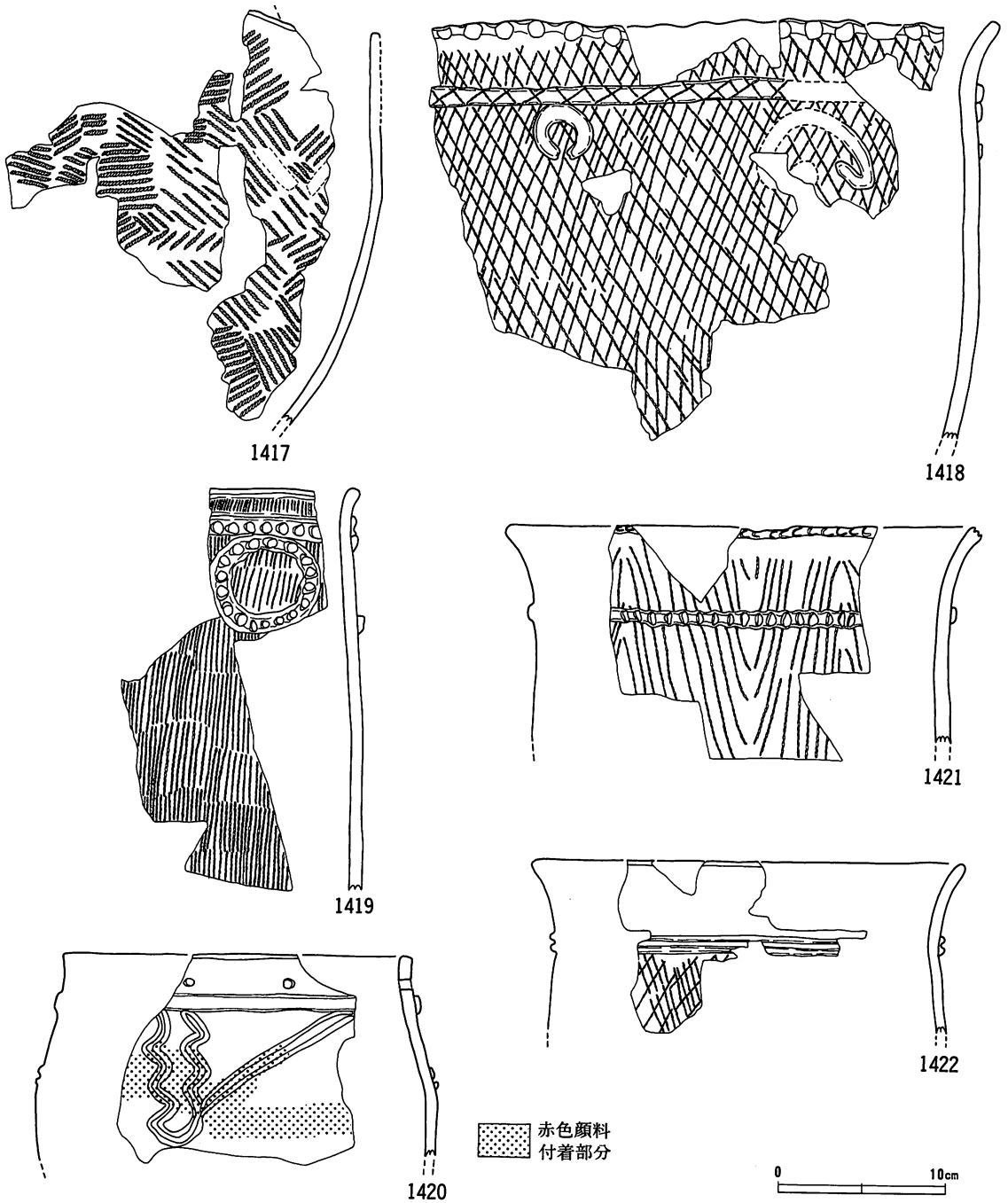
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1404	VII C 7 f	再堆積層下位	弁状突起、突起上指頭状圧痕	L縦、2条1単位の縦位綾絡文	(21.0)	—	(24.1)		II 6 a 4	230
1405	VI D 0 i	黑色土	緩い波状口縁、弁状突起、突起上指頭状圧痕	L燃糸文	(18.0)	—	(8.6)		II 6 a 4	230
1406	VII C 6 f	再堆積層	波状口縁、弁状突起、突起上指頭状圧痕(爪跡顕著)	L	(20.4)	—	(12.7)		II 6 a 4	230
1407	VIII C 4 f	再堆積層	弁状突起、突起上指頭状圧痕	L R縦、縦位綾絡文	(15.0)	—	(17.7)		II 6 a 4	230
1408	VII C 4 h	再堆積層下位	低平な弁状突起、突起上指頭状圧痕(2単位)	L木目状燃糸文	(13.6)	—	(16.3)		II 6 a 4	230
1409	VII C区	I層	波状口縁、弁状突起(6単位)、突起上指頭状圧痕(爪跡顕著)	R L多軸絡糸体	(23.6)	—	(25.3)		II 6 a 4	230
1410	Ⅳ D 8 i	II層	緩い波状口縁、弁状突起(6個)、突起上指頭状圧痕	L燃糸文	(22.9)	—	(20.8)		II 6 a 4	230

第338図 遺構外出土遺物 土器(4) 第II群6類



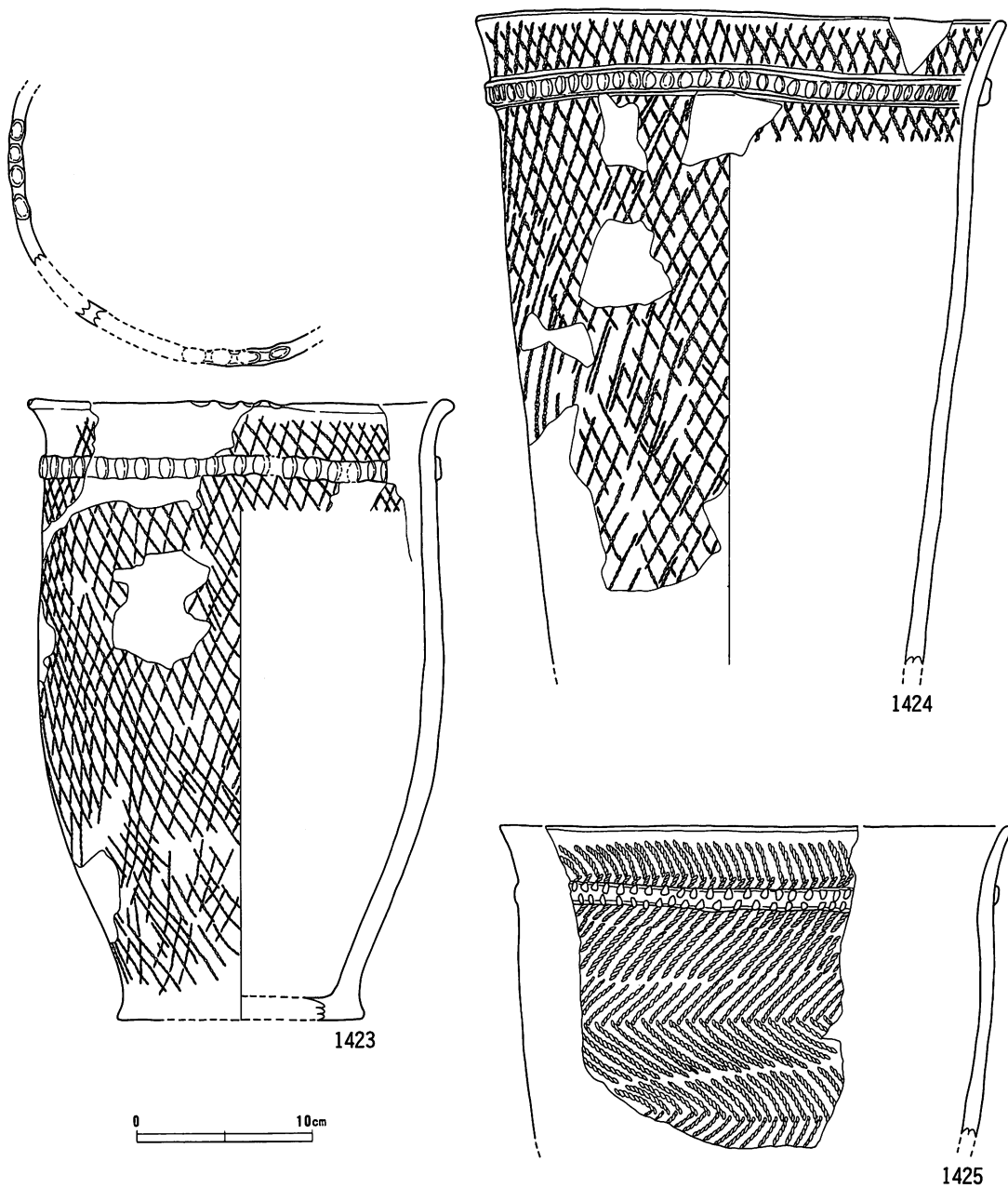
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1411	Ⅶ C 7 f	再堆積層	波状口縁、弁状突起、突起頂部沈線（凹線）	R 燃糸文	(19.1)	—	(18.0)		Ⅱ6a 4	230
1412	Ⅶ E 6 b	黒色土	波状口縁、弁状突起、頂部沈線、口唇部沈線、渦巻き状隆帯上沈線	L 燃糸文	—	—	(10.6)	隆帯剥落。	Ⅱ6a 4	230
1413	Ⅶ C 6 g	再堆積層	波状口縁、弁状突起、突起上（棒状工具？）刺突	L 縦、縦位 2 条 1 単位縦絡文	(21.1)	—	(17.6)		Ⅱ6a 4	230
1414	Ⅶ C 6 h	I 層	波状口縁、弁状突起頂部沈線	L 網目状燃糸文	(26.6)	—	(12.0)		Ⅱ6a 4	231
1415	Ⅶ C 4 h	再堆積層下位	半円状裝飾体	L R 横、縦位縦絡文	(14.6)	—	(9.7)	口縁裝飾体。	Ⅱ6a 7	231
1416	Ⅸ D 4 g	Ⅱ層	鋸齒状隆帯（細い粘土紐）	L R 横	—	—	(6.1)		Ⅱ6a 7	231

第339図 遺構外出土遺物 土器(5) 第Ⅱ群 6類



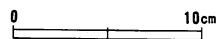
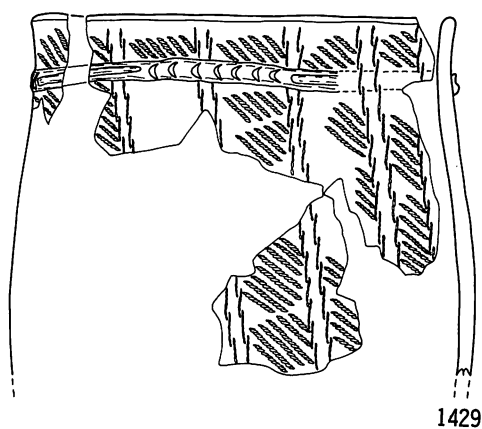
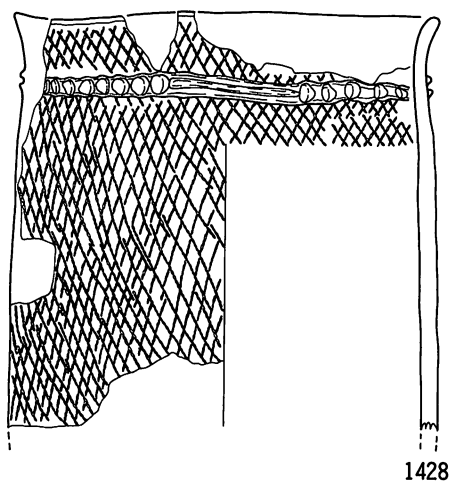
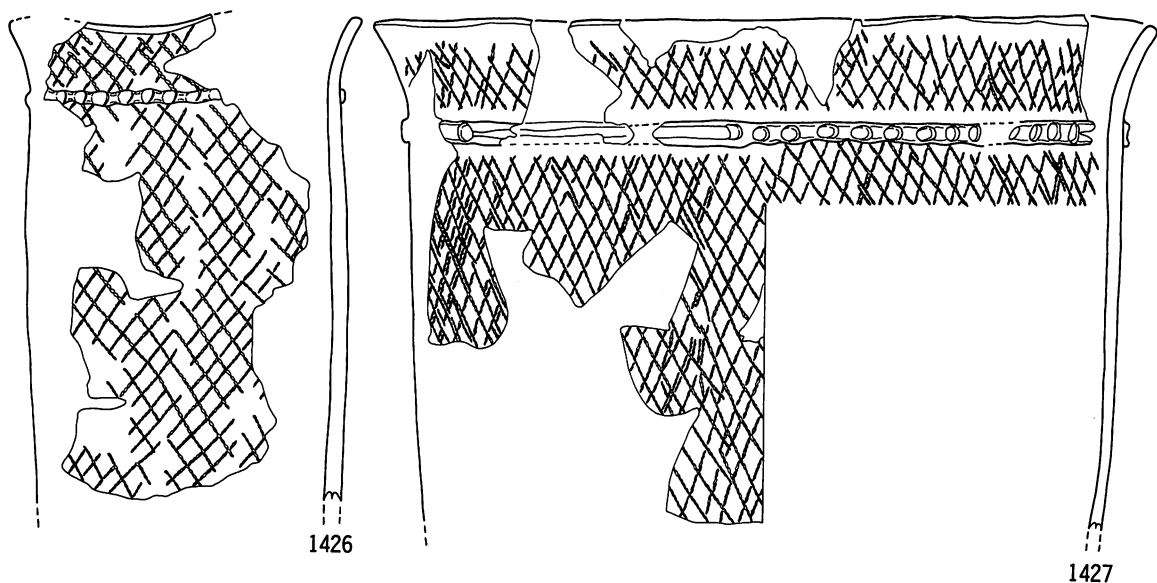
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1417	Ⅸ D 2 d	I層	波状口縁、隆帯剥落	L R	-	-	(24.6)	1398と同一個体、	Ⅱ 6 b 7	231
1418	Ⅸ D 0 g	I層	花卉状口縁、隆帯上も施文、馬蹄状隆帯	R 網目状捺糸文	-	-	(25.0)	1701と同一個体	Ⅱ 6 b 7	231
1419	Ⅶ D 3 g	I層	隆帯上指頭状压痕	R 捺糸文	-	-	(24.3)		Ⅱ 6 b 7	231
1420	Ⅶ D 0 j	黑色土	隆帯、鋸齒状隆帯、口縁部穿孔		[21.0]	-	(12.5)		Ⅱ 6 b 7	231
1421	Ⅶ C 6 e	再堆積層	隆帯上指頭状压痕、口唇部半截竹管刺突	R 木目状捺糸文	[28.6]	-	(13.0)		Ⅱ 6 b 4	231
1422	Ⅶ C 4 f	I層	隆帯上沈線（凹線）	R 網目状捺糸文	[26.0]	-	(10.2)		Ⅱ 6 b 4	231

第340図 遺構外出土遺物 土器(6) 第Ⅱ群6類



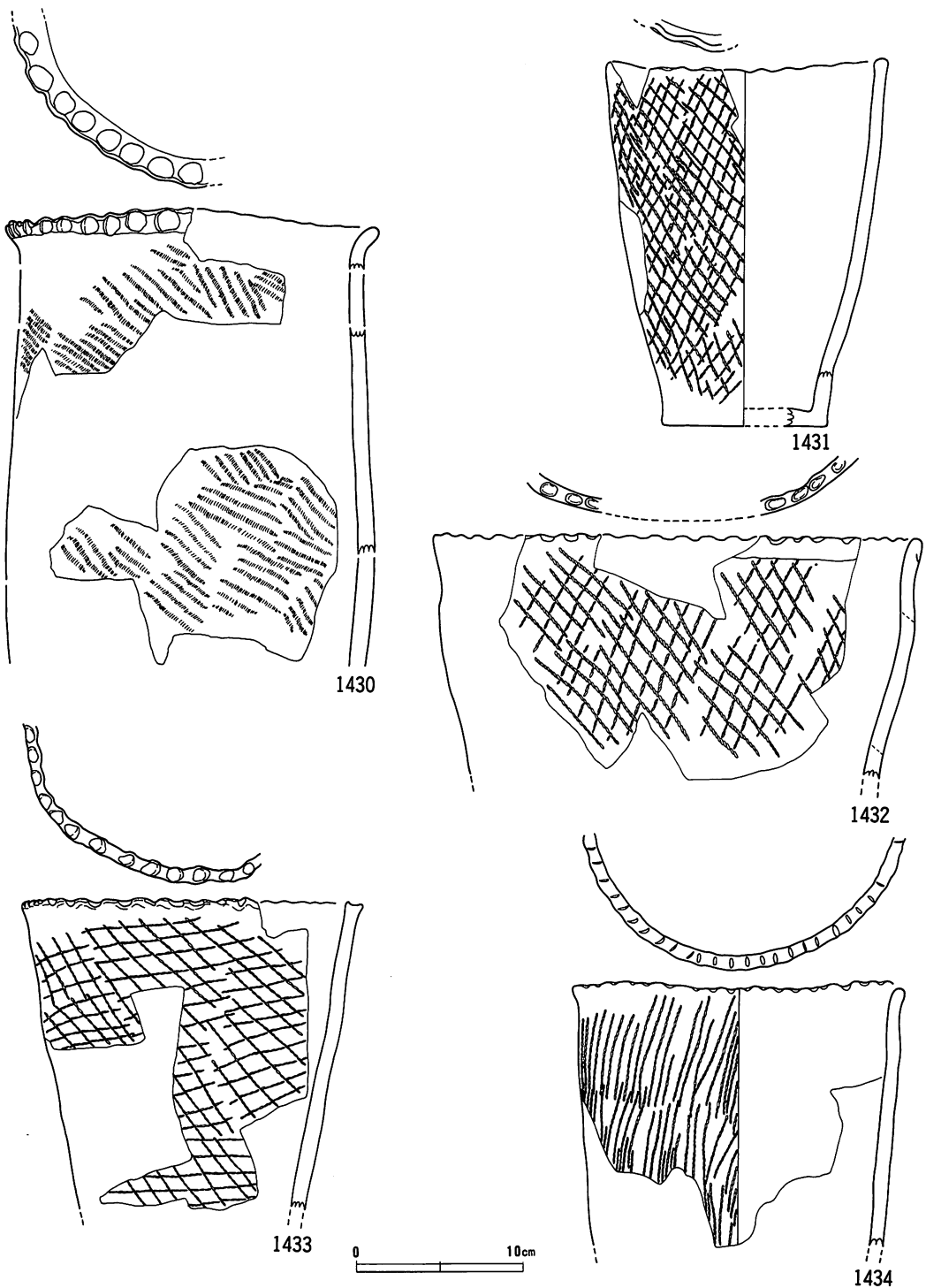
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1423	VII C 8 e	再堆積層	一部口唇部指頭状圧痕(4か所?)、隆帯上左方向からの指頭状圧痕	R網目状燃糸文	(24.4)	(14.0)	35.4		II 6b 4	231
1424	VII C 7 f	再堆積層	口頸部隆帯上指頭状圧痕	L R網目状燃糸文	(30.0)	-	(32.3)		II 6b 4	231
1425	VII C 7 e	再堆積層	隆帯上棒状工具による刺突	L R × R L 第1種結束羽状焼文	(29.8)	-	(17.6)		II 6b 4	231

第341図 遺構外出土遺物 土器(7) 第II群6類



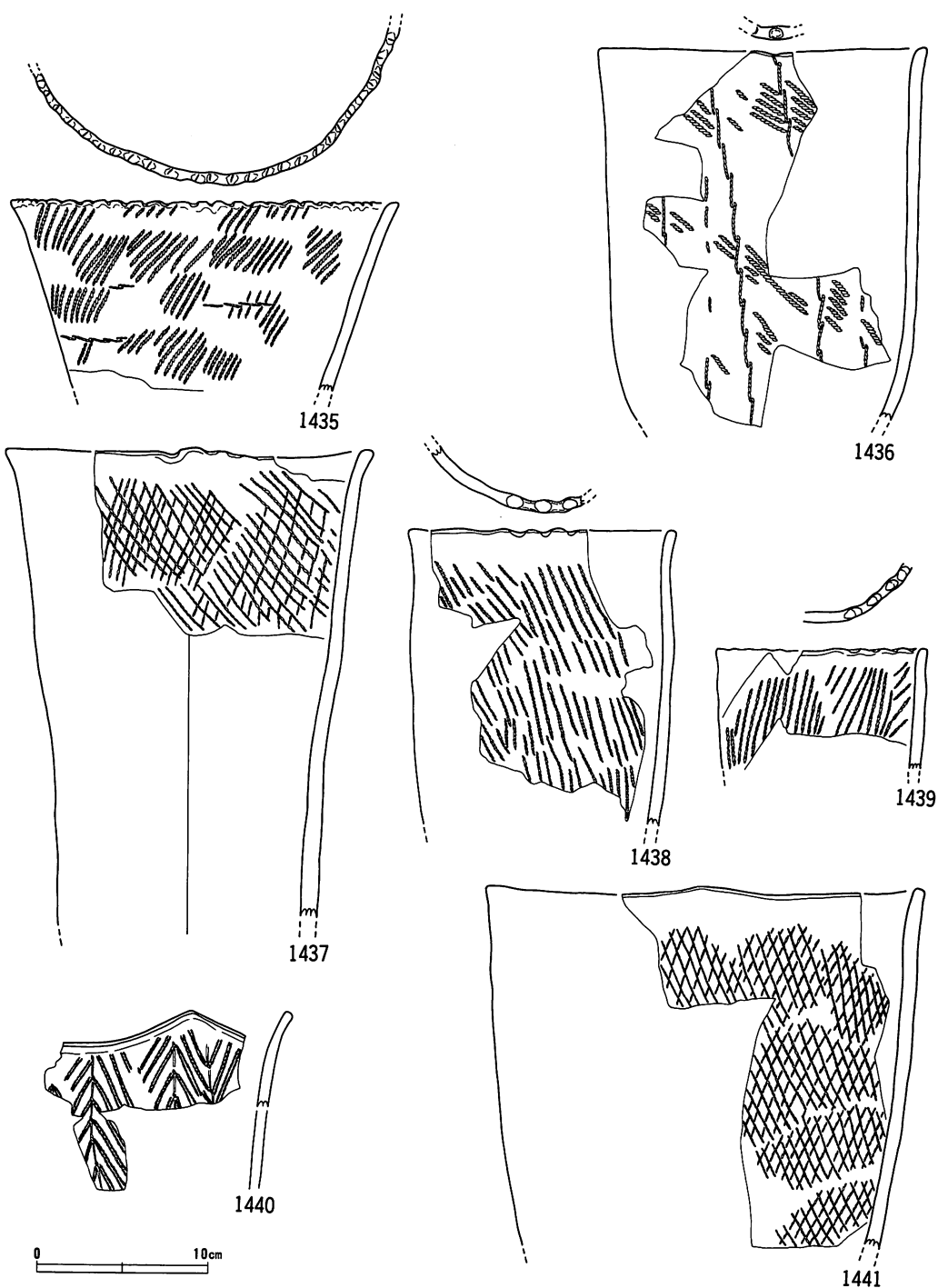
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1426	VII C 4 h	再堆積層下位	口頸部隆帶上指頭状圧痕 (爪跡顯著)	R 網目状燃糸文	(18.7)	—	(25.8)		II6b4	231
1427	VII C 6 f	再堆積層	口頸部隆帶上指頭状圧痕と沈線(凹線)、沈線は4か所?	L 網目状燃糸文	(41.5)	—	(26.7)		II6b4	231
1428	VII C 6 e	再堆積層	口頸部隆帶上指頭状圧痕と沈線(凹線)	R 網目状燃糸文	(22.6)	—	(22.0)		II6b4	232
1429	X D 1 g	再堆積層		L R縦、縦位綾絡文	(22.4)	—	(19.0)		II6b4	232

第342図 遺構外出土遺物 土器(8) 第II群6類



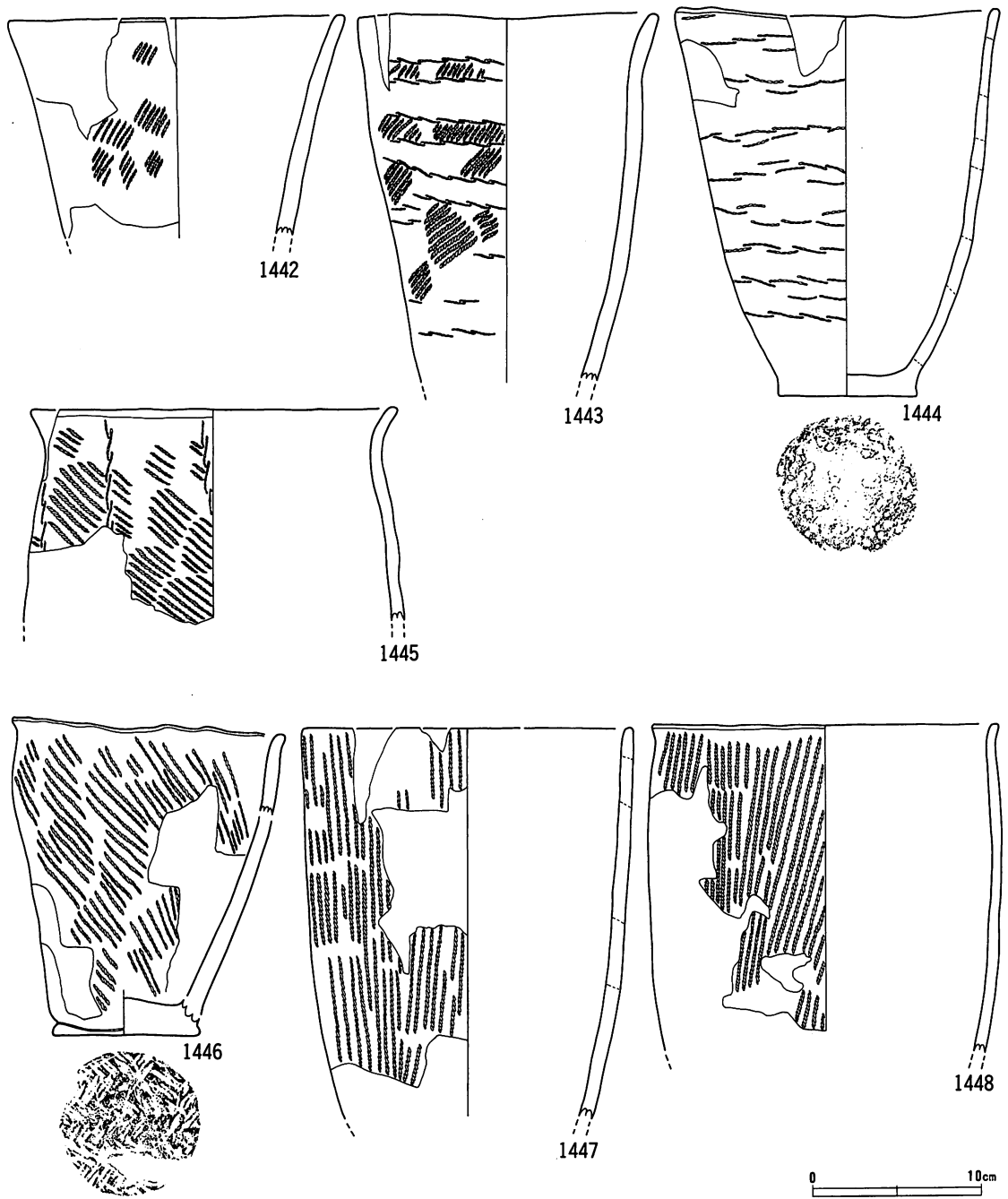
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1430	VII C 4 g	再堆積層下位	花卉状口縁 (指頭明瞭)	I 燃糸文 ?	(22.4)	—	(27.5)		II6b±	232
1431	VII/D14 h	検出面	花卉状口縁	L 網目状燃糸文	16.9	(10.0)	22.2		II6b±	232
1432	VII C 3 h	再堆積層下位	口唇部右方向からの指頭状圧痕	L 網目状燃糸文	(29.4)	—	14.5	輪痕顯著。	II6b±	232
1433	VII C 6 g	再堆積層	口唇部指頭状圧痕	R 網目状燃糸文	(20.2)	—	(18.7)		II6b±	232
1434	VII C 6 f	再堆積層	口唇部指頭状圧痕 (爪跡顯著)	R 燃糸文	(20.0)	—	(15.7)		II6b±	232

第343図 遺構外出土遺物 土器(9) 第II群6類



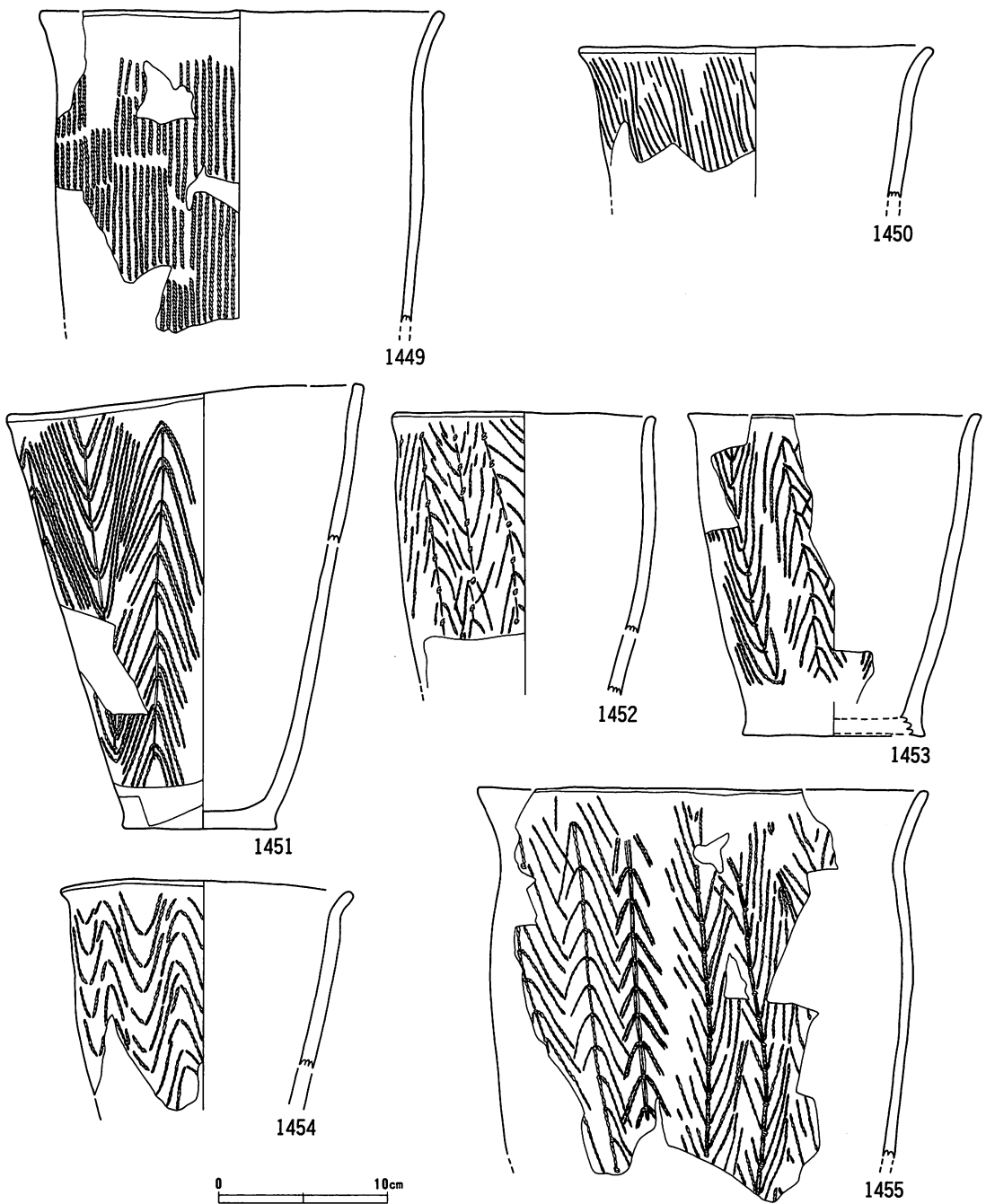
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1435	VII C 6 g	再堆積層	口唇部右方向からの指頭状圧痕 (爪跡顕著)	L R横、横位綾絡文	(22.8)	-	(11.0)	口唇部刻目	II6b才	232
1436	VII C 3 e	再堆積層	口唇部指頭状圧痕。	L R縦、縦位綾絡文	(19.2)	-	(22.0)		II6b才	232
1437	VII C 7 g	再堆積層下位	一部口唇部指頭状圧痕 (4か所?)	R網目状燃系文	(21.4)	-	(27.4)		II6b才	232
1438	VII C 7 g	I層下位	--部口唇部指頭状圧痕	R燃系文	(15.7)	-	(17.2)		II6b才	232
1439	VII C 6 g	再堆積層	一部口唇部指頭状圧痕	L燃系文	(12.6)	-	(7.0)		II6b才	232
1440	IX D 1 j	II層	波状口縁	L + Rの木目状燃系文	-	-	(10.5)	山形口縁	II6b才	232
1441	VII C 6 f	再堆積層下位	緩い波状口縁	R網目状燃系文	(25.8)	-	(21.0)		II6b才	232

第344図 遺構外出土遺物 土器(10) 第II群6類



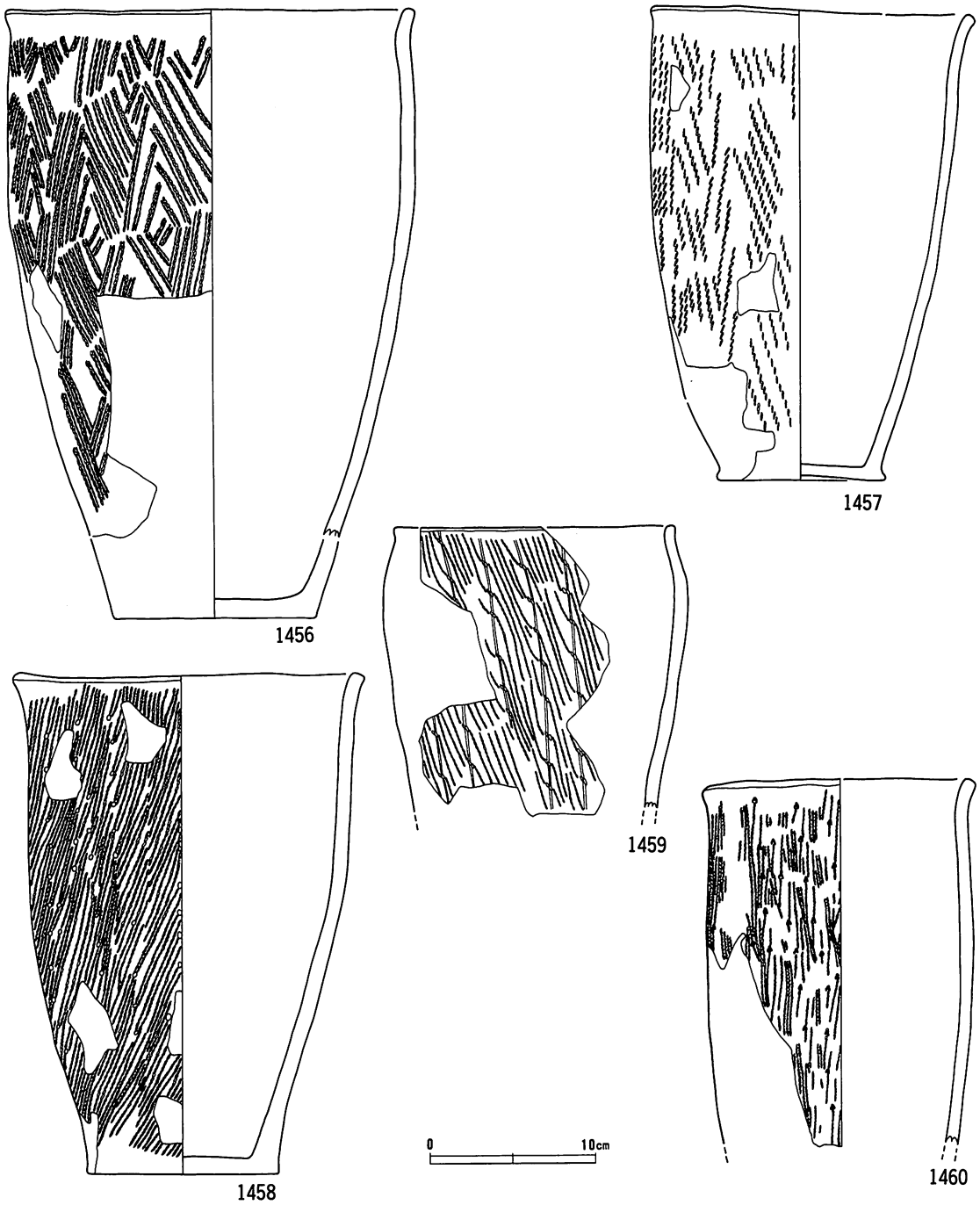
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1442	VII C 4 h	再堆積層下位		L R横	(18.6)	—	(13.0)		II6b/c	232
1443	VI D 9 d	I層		L R横、横位綾絡文	17.8	—	(21.9)		II6b/c	233
1444	IX D 4 g	II層		L R横 横位綾絡文	19.2	8.2	22.4		II6b/c	233
1445	VII C 4 h	再堆積層下位		L R縦 縦位綾絡文	(21.8)	—	(12.5)		II6b/c	233
1446	VII C 7 e	再堆積層上位	小波状口縁	L 擦糸文	16.3	8.7	18.8	底部網代痕。	II6b/c	233
1447	VII C 7 f	再堆積層		R 擦糸文	(19.6)	—	(23.2)		II6b/c	233
1448	VII C 8 f	再堆積層下位		R 擦糸文	(20.5)	—	(19.3)		II6b/c	233

第345図 遺構外出土遺物 土器(1) 第II群6類



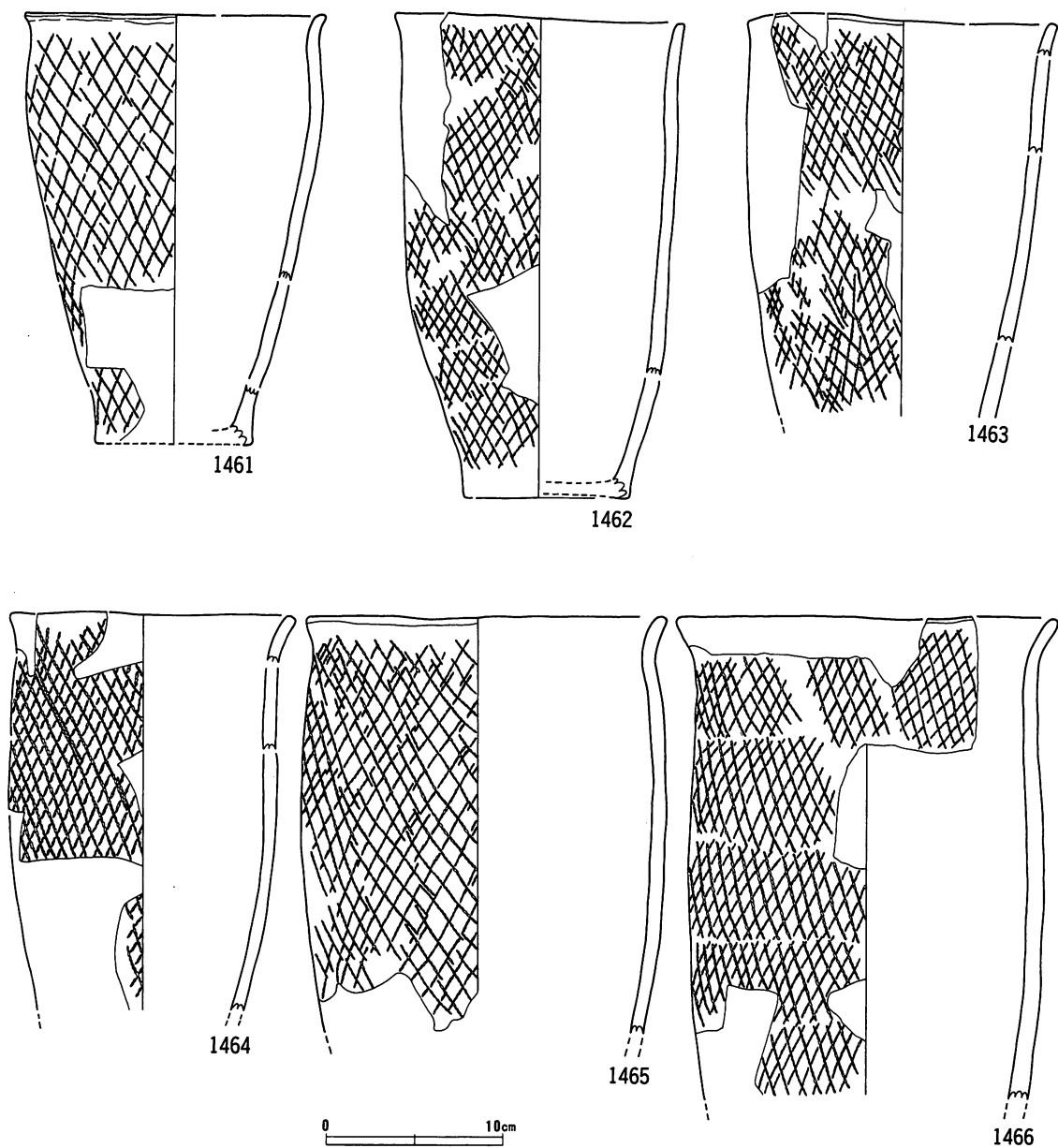
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1449	VII C 6 f	再堆積層下		R 燃糸文	(24.0)	—	(19.0)		II 6b ㄗ	233
1450	VII C 6 e	再堆積層下位		R 燃糸文	(21.0)	—	(9.0)		II 6b ㄗ	233
1451	VII C 7 f	再堆積層		L 木目状燃糸文	(21.1)	9.0	26.5		II 6b ㄗ	233
1452	VII C 7 f	再堆積層下位		L 木目状燃糸文	15.6	—	(16.3)		II 6b ㄗ	233
1453	VII C 0 a	再堆積層		L 木目状燃糸文	(17.4)	(10.8)	19.1		II 6b ㄗ	233
1454	VII C 6 f	再堆積層		L 木目状燃糸文	17.3	—	(12.7)		II 6b ㄗ	233
1455	VII C 7 f	再堆積層		L 木目状燃糸文	(26.7)	—	(23.9)		II 6b ㄗ	233

第346図 遺構外出土遺物 土器(12) 第II群6類



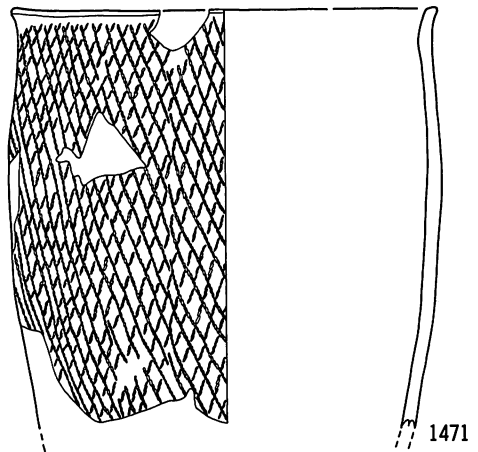
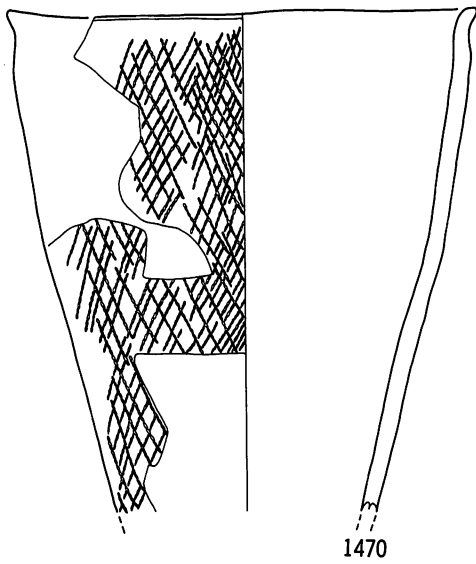
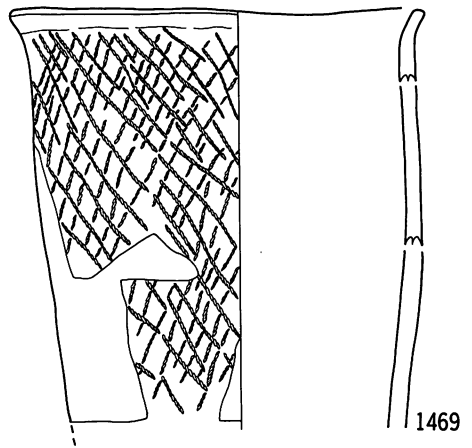
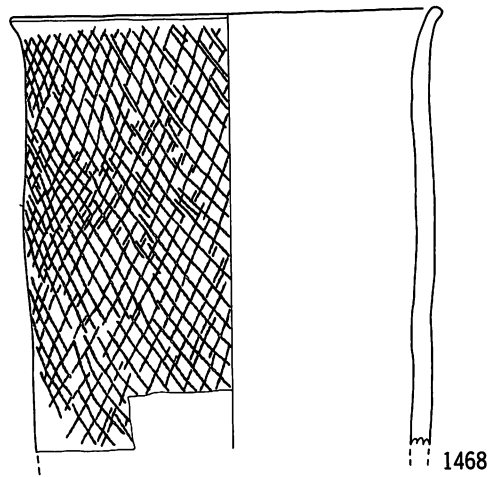
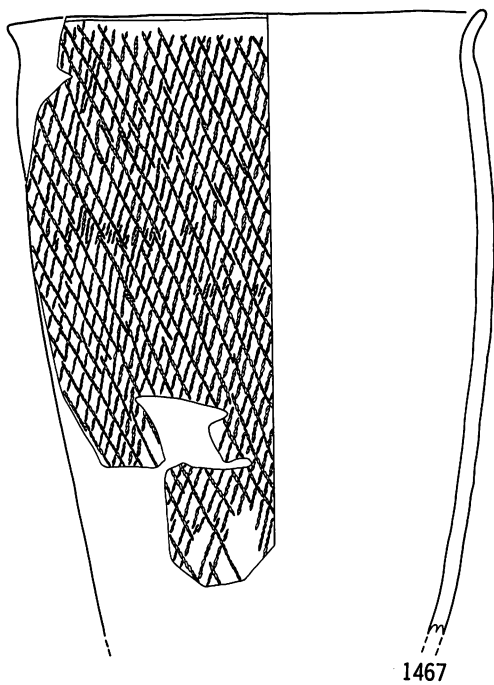
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1456	VII C 7 g	再堆積層 下位	菱形文 (原体の左右を変えて)	R + L Rによる木目状燃糸文	(24.8)	12.2	32.0		II 6 b 才	2333
1457	VII C 7 f	再堆積層 下位		L R木目状燃糸文	(19.6)	10.0	28.8		II 6 b 才	233
1458	VII C 5 i	再堆積層		燃糸文	21.2	11.6	30.5		II 6 b 才	233
1459	VII C 6 g	再堆積層		R燃糸文	(17.0)	-	(17.0)		II 6 b 才	234
1460	VII C 2 g	再堆積層 下位		L燃糸文	(16.6)	-	(22.4)		II 6 b 才	234

第347図 遺構外出土遺物 土器(13) 第II群6類



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1461	VII C 6 f	再堆積層下位		R網目状燃糸文	(17.0)	(9.0)	24.3		II 6 b 力	234
1462	VII C 8 i	再堆積層		R網目状燃糸文	(16.4)	(9.4)	27.5		II 6 b 力	234
1463	VII C 5 h	I層下位		R網目状燃糸文	(17.7)	—	(23.0)		II 6 b 力	234
1464	VII C 4 h	再堆積層		L網目状燃糸文	(16.4)	—	(22.5)		II 6 b 力	234
1465	VII C 7 f	再堆積層		R網目状燃糸文	20.4	—	(23.5)		II 6 b 力	234
1466	VII C 7 f	再堆積層下位		R網目状燃糸文	(21.6)	—	(27.3)		II 6 b 力	234

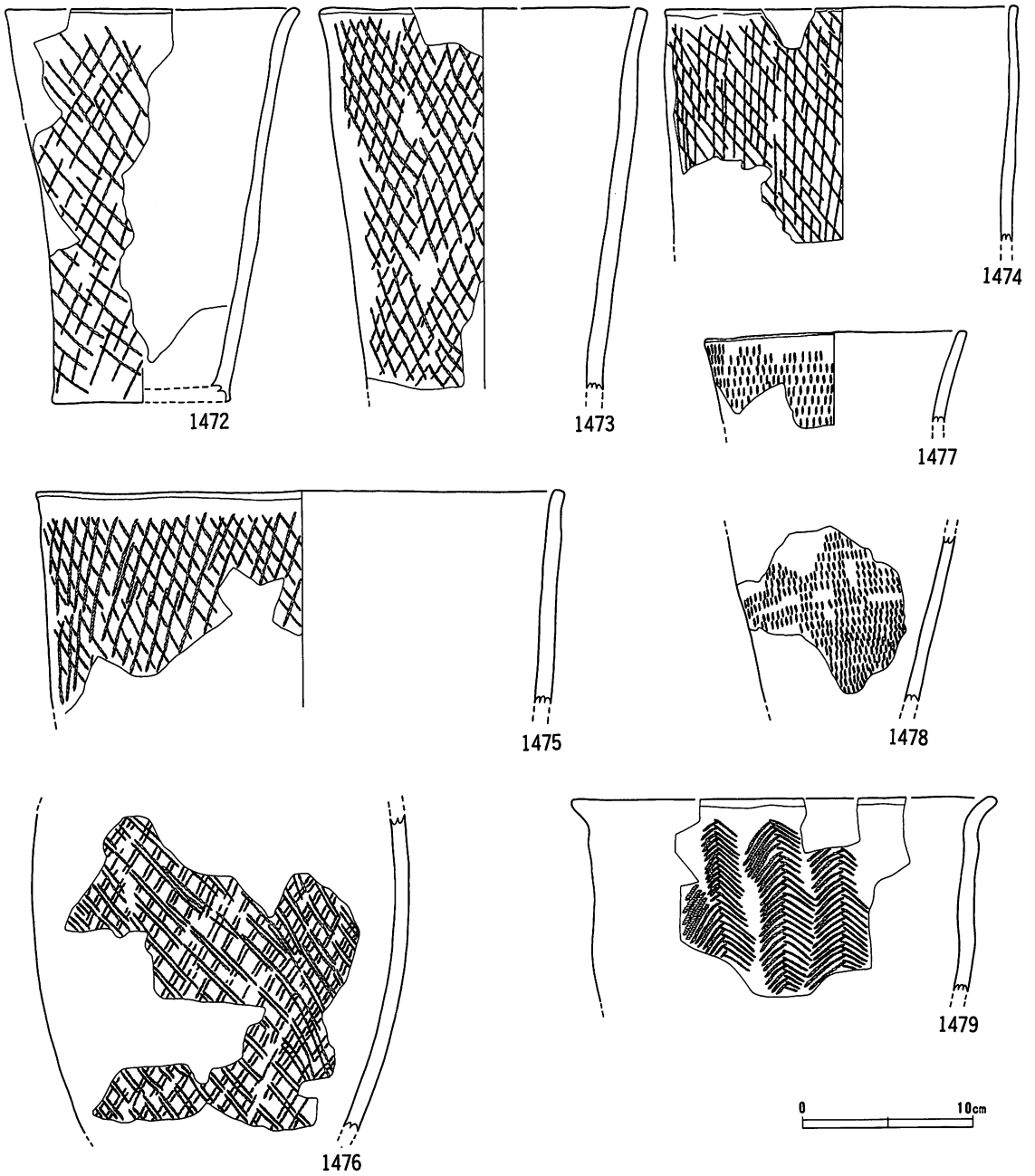
第348図 遺構外出土遺物 土器(14) 第II群6類



0 10cm

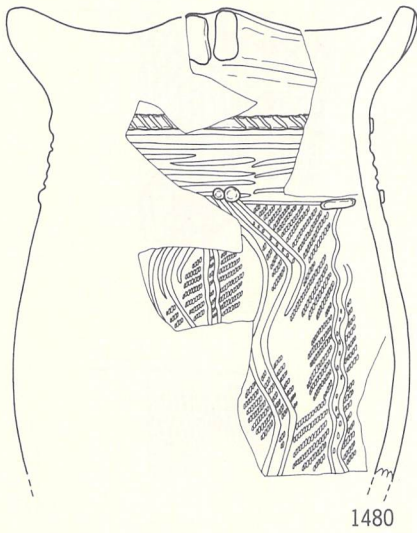
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1467	Ⅶ C 7 e	再堆積層		L網目状燃糸文	(25.4)	—	(33.3)		Ⅱ6b)	234
1468	Ⅶ C 7 g	再堆積層下位		R網目状燃糸文	(11.5)	—	(23.0)		Ⅱ6b)	234
1469	Ⅶ C 6 e	再堆積層下位		L網目状燃糸文	22.1	—	(21.9)		Ⅱ6b)	234
1470	Ⅶ C 4 h	再堆積層下位		R網目状燃糸文	(25.0)	—	(26.8)		Ⅱ6b)	234
1471	Ⅶ C 7 f	再堆積層下位		L網目状燃糸文	(22.7)	—	(22.4)		Ⅱ6b)	234

第349図 遺構外出土遺物 土器(15) 第Ⅱ群6類

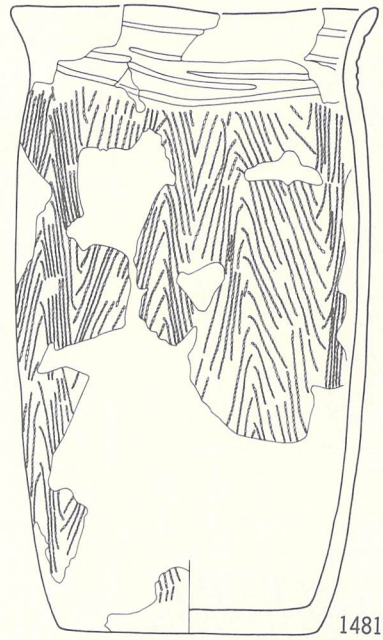


番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1472	ⅦC 8 f	再堆積層		R網目状捺糸文	(17.3)	(10.5)	23.1		Ⅱ6 bカ	234
1473	ⅦC 6 g	再堆積層下位		L網目状捺糸文	(19.2)	-	(22.3)		Ⅱ6 bカ	234
1474	ⅦC 5 c	I層		R網目状捺糸文	(20.8)	-	(13.8)		Ⅱ6 bカ	235
1475	ⅦC 7 f	再堆積層下位		L網目状捺糸文	(31.2)	-	(12.5)		Ⅱ6 bカ	235
1476	ⅦC 4 h	再堆積層下位		L網目状捺糸文	-	-	(18.8)		Ⅱ6 bカ	235
1477	ⅦC 6 e	再堆積層		R L多軸絡条体	(15.4)	-	(5.5)	1478と同一個体	Ⅱ6 bカ	235
1478	ⅦC 6 e	再堆積層下位		R L多軸絡条体。	-	-	(9.9)	1477と同一個体	Ⅱ6 bカ	235
1479	ⅦC 8 e	I層下位		L R × R L第1種結束羽状縄文	(25.0)	-	(11.5)		Ⅱ6 bカ	235

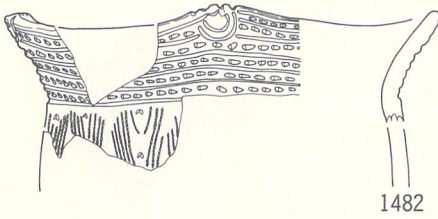
第350図 遺構外出土遺物 土器(16) 第Ⅱ群6類



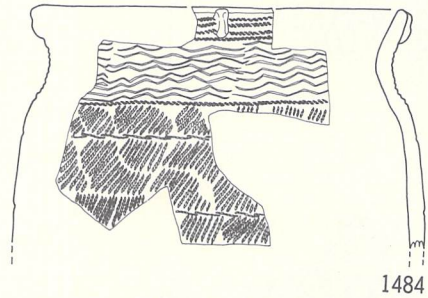
1480



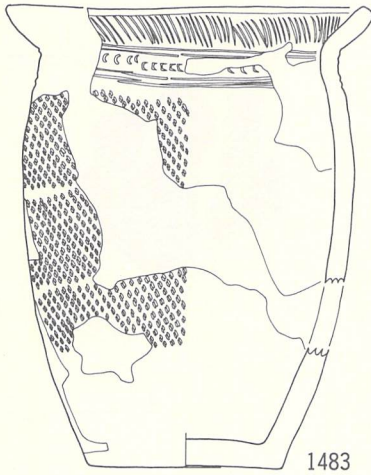
1481



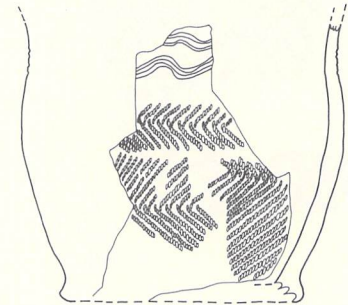
1482



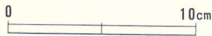
1484



1483

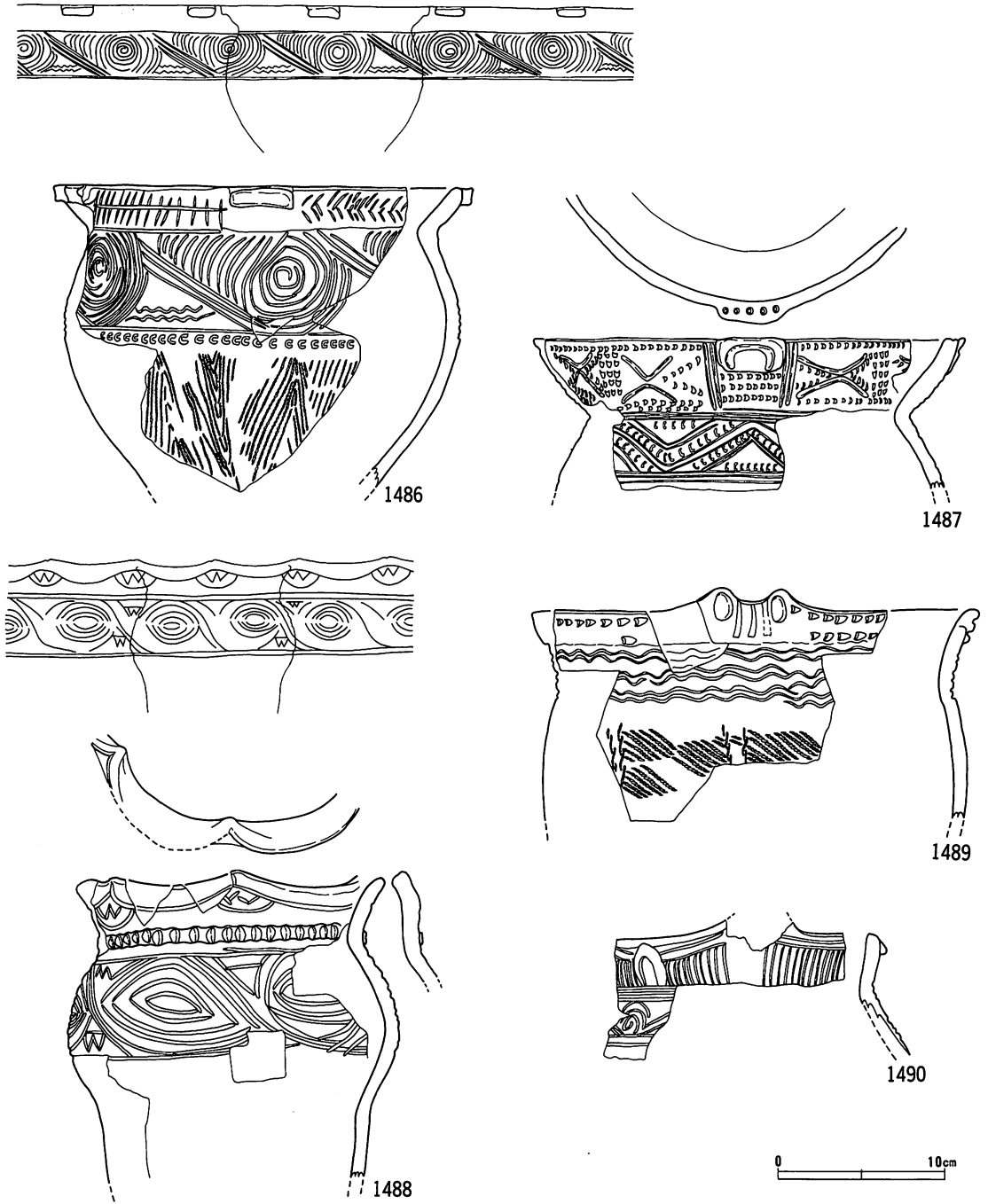


1485



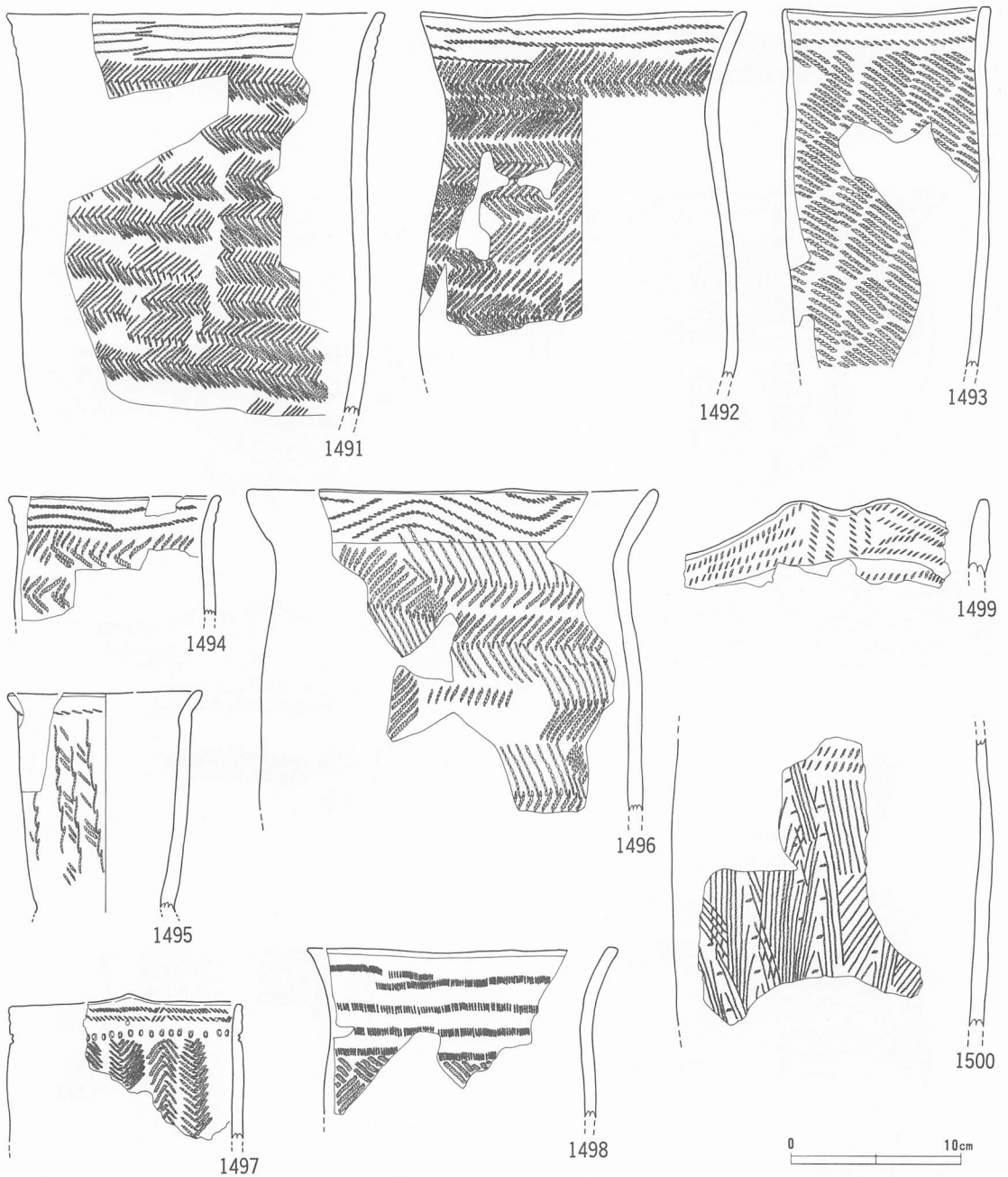
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1480	VII C 3 h	再堆積層下位	波状口縁、頸部隆帯上棒状工具による刻み、沈線(凹線)、ボタン状突起	L R 横	(21.8)	—	(24.9)		II 7 a	235
1481	VII C 3 g	再堆積層	口頸部沈線(凹線)	R 木目状擦糸文	(19.5)	13.7	33.3		II 7 a	235
1482	VII C 6 h	再堆積層	緩い波状口縁、頂部棒状工具による圧痕、沈線(凹線)、棒状工具による刺突	L 木目状擦糸文	(23.2)	—	(9.5)		II 7 a	235
1483	VII C 4 i	II 層	口縁部縦位短沈線、頸部沈線、半截竹管刺突	R L R 横	(19.5)	(10.2)	(24.5)		II 7 a	235
1484	VII C 2 j	II 層	半截竹管平行沈線、L R 側面圧痕、縦長ボタン状突起	L R 横	(20.4)	—	(12.6)		II 7 a	235
1485	VII D 0 b	I 層	半截竹管平行沈線	L R × R L 第1種結東羽状縄文	—	(13.2)	(14.7)		II 7 a	235

第351図 遺構外出土遺物 土器(17) 第II群7類



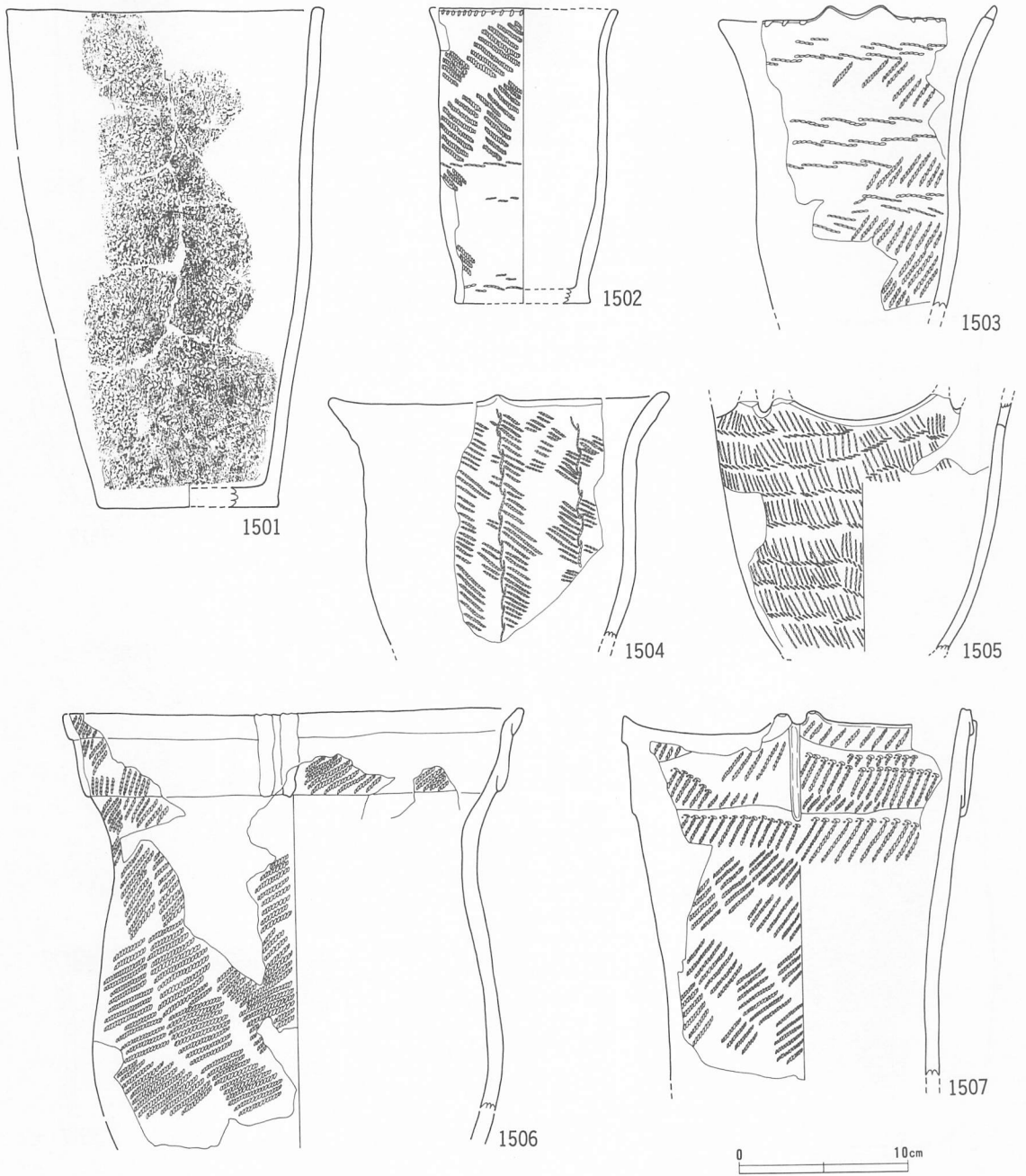
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1486	Ⅶ C 5 f	再堆積層下位	沈線による渦巻文、波状文、短沈線、半截竹管刺突、持手状突起	L 木目状燃糸文	(25.2)	—	(18.0)		Ⅱ 7 b	235
1487	Ⅶ C 6 f	再堆積層	持手状突起上竹管刺突、口縁部沈線（凹線）、棒状工具による刺突、肩部半截竹管		(25.8)	—	(9.0)		Ⅱ 7 b	235
1488	Ⅶ C 7 g	再堆積層下位	変形花卉状口縁、沈線による渦線、頸部隆帯上指頭状圧痕		18.6	—	(18.4)		Ⅱ 7 b	235
1489	Ⅶ C 2 h	再堆積層	山形（2山）状突起、凹文、口縁部棒状工具による刺突、頸部半截竹管平行沈線	L R 縦、縦位綾絡文	(26.8)	—	(12.6)		Ⅱ 7 b	236
1490	Ⅶ D 2 e	再堆積層	緩い波状口縁、馬蹄状隆帯、沈線	L R 横	—	—	(7.2)		Ⅱ 7 b	236

第352図 遺構外出土遺物 土器(10) 第Ⅱ群7類



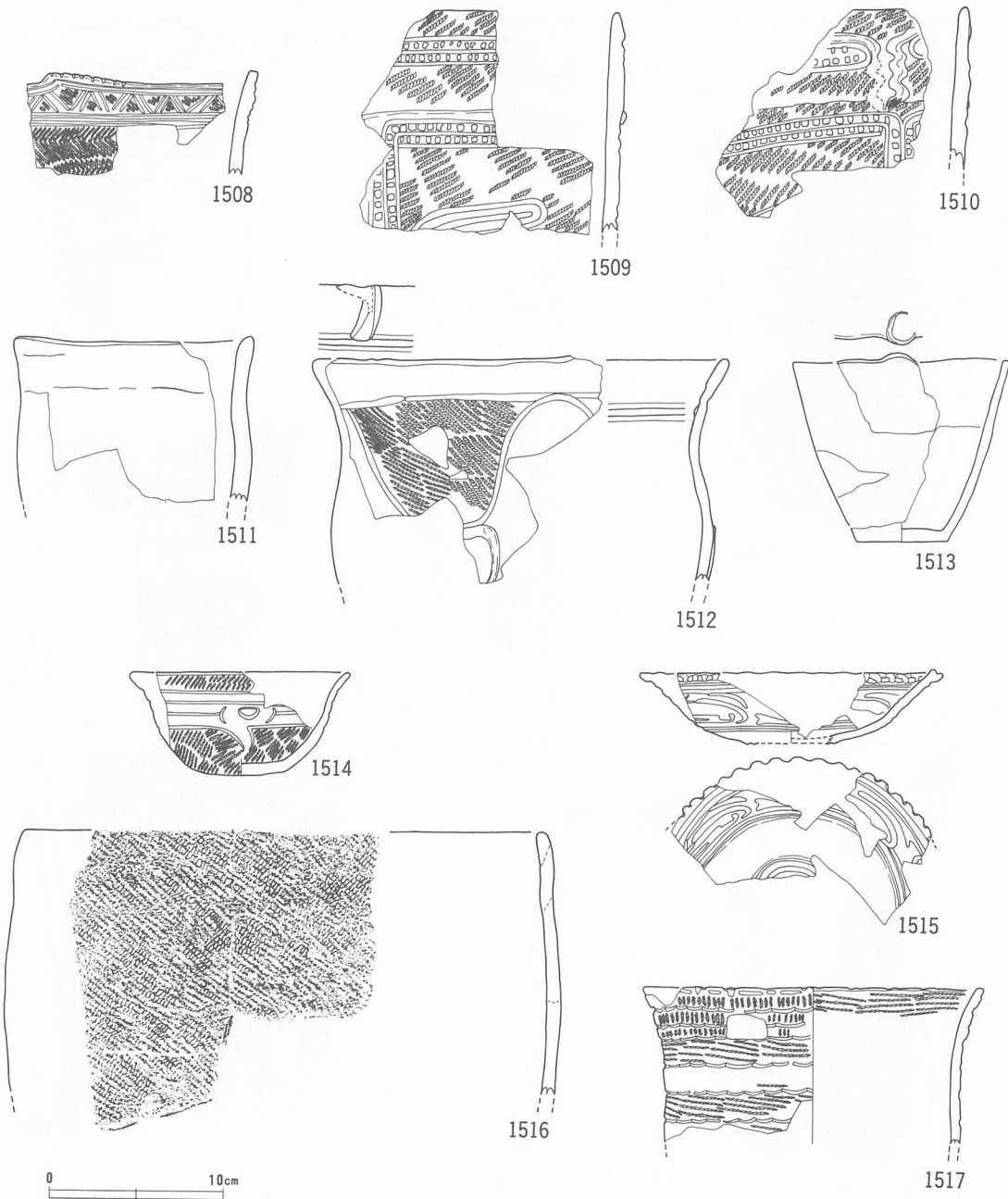
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1491	VII C 5 h	再堆積層下位	R側面圧痕	LR×RL第1種結束羽状縄文	(20.2)	—	(23.7)		II 8a7	236
1492	VII D 8 g	1層	L R側面圧痕	LR×RL第1種結束羽状縄文	19.2	—	(21.5)	原体圧痕	II 8a7	236
1493	VII D 4 f	再堆積層	口頸部LR側面圧痕	LR縦	(12.3)	—	(21.1)		II 8a7	236
1494	VII C 6 h	1層上位	L R側面圧痕	LR×RL第1種結束羽状縄文	(12.4)	—	(7.1)		II 8a7	236
1495	VII C 6 f	再堆積層	L R側面圧痕	LR縦、縦位綾絡文	(11.6)	—	(13.0)		II 8a7	236
1496	VII D 0 a	1層	L R側面圧痕	LR×RR第1種結束羽状縄文	(24.4)	—	(19.0)		II 8a4	236
1497	VII C 4 g	再堆積層下位	山形状突起、LR側面圧痕、棒状工具による刺突	LR×RL第1種結束羽状縄文	(13.8)	—	(8.6)		II 8b	236
1498	VII C 1 j	再堆積層	絡条体圧痕	RL	(18.4)	—	(10.0)		II 8b	236
1499	VII C 2 g	再堆積層	波状口縁、頂部2山	RL絡条体圧痕	—	—	(5.0)	1500と同一個体	II 8b	236
1500	VII C 4 h	再堆積層	RL絡条体圧痕	R木目状然糸文	—	—	(16.8)	1499と同一個体	II 8b	236

第353図 遺構外出土遺物土器(19) 第II群8類



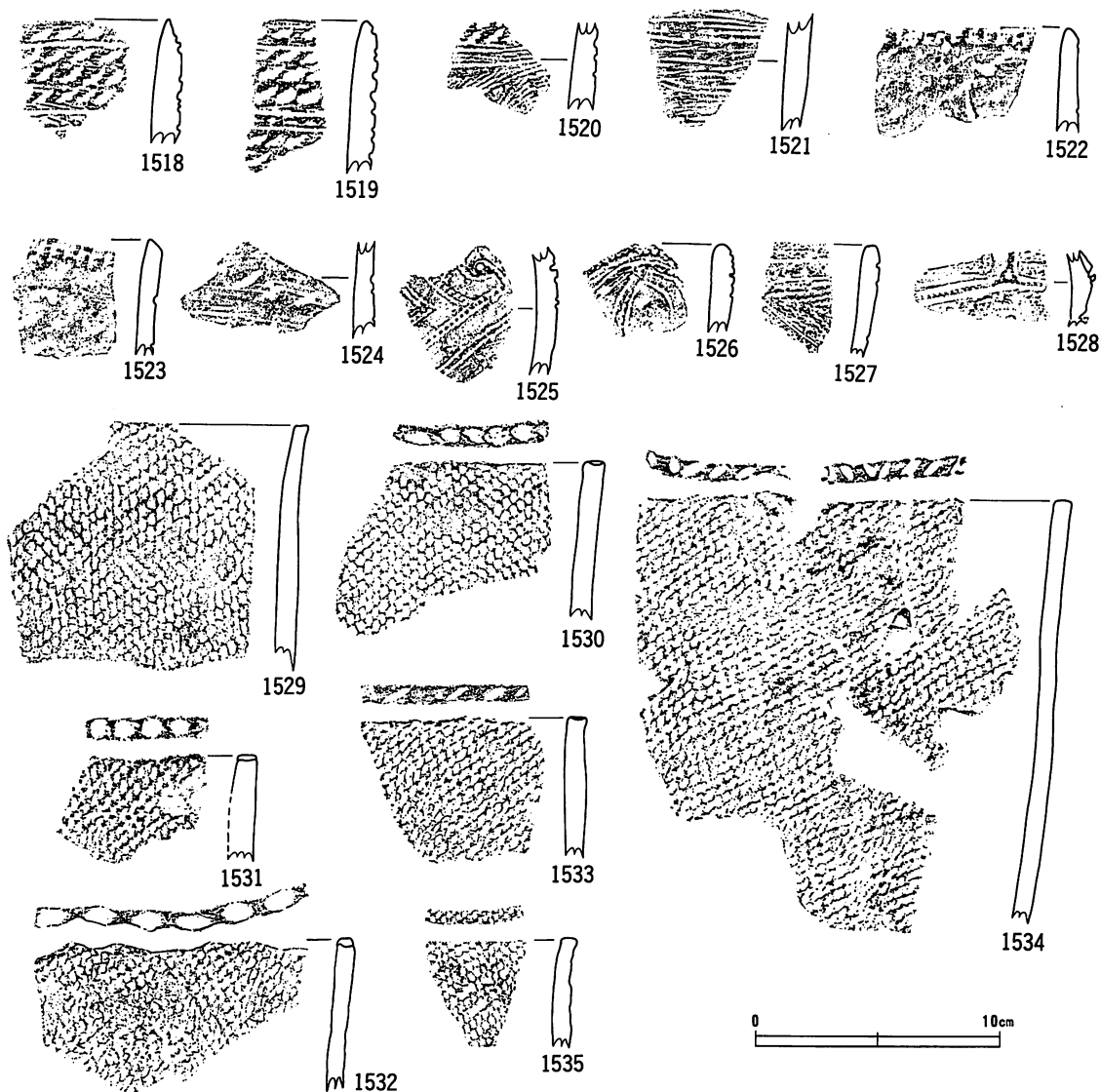
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1501	VII C 7 f	再堆積層		多軸給糸体? (詳細不明)	(18.8)	(10.6)	29.6		II 9 a	236
1502	IX D 8 f	I層	口唇端棒状工具による刻み	R L横、横位綾絡文	(11.2)	(8.0)	12.5		II 9 d	236
1503	IX D 3 f	II層	山形状突起(2山)、口唇端棒状工具による刻み	L R横、横位綾絡文	(16.5)	—	(18.1)		II 9 c	236
1504	VII C 6 h	再堆積層	山形状突起	L R縦、縦位綾絡文	(20.2)	—	(14.5)		II 9 c	237
1505	VII C 6 i	再堆積層	波状口縁、頂部下穿孔	R捻糸文(単軸第4類30-3)	—	—	(14.8)		II 9 c	237
1506	VII C 6 g	再堆積層	複合口縁、垂下隆帯	L R横	(27.0)	—	(24.0)	1867と同一個体	III 1 b	237
1507	VII C 4 f	再堆積層	折り返し口縁、山形状突起(2山)、垂下する隆帯	L R横、繩端顕著	(20.8)	—	(21.7)		III 1 b	237

第354図 遺構外出土遺物土器(20) 第II群9類・第III群



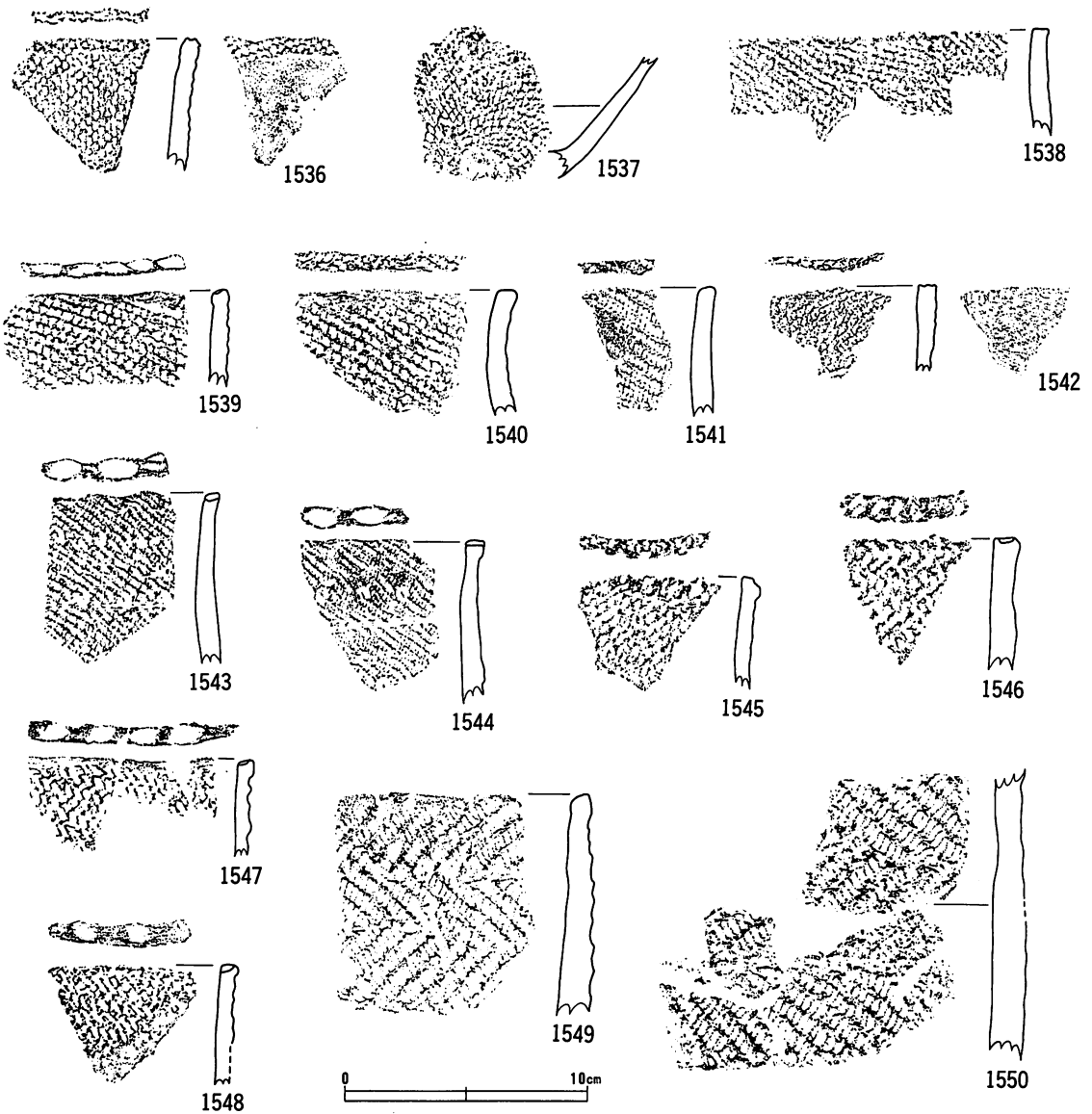
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1508		再堆積層	不均整波状口縁?、頂部棒状工具による刻み、沈線	LR×RL第1種結束羽状縄文	—	—	(5.8)		Ⅲ 1 d	237
1509		再堆積層	半截竹管平行沈線(多載?)、刺突	LR横	—	—	(12.8)	1510と同一個体。	Ⅲ 1 a	237
1510		再堆積層	波状隆帯、半截竹管平行沈線(多載?)、刺突	LR横	—	—	(9.0)	1509と同一個体	Ⅲ 1 a	237
1511		再堆積層下位	無文		(13.8)	—	(9.5)		Ⅲ 1 d	237
1512		Ⅲ層	沈線(凹線)、磨消縄文、内面に隆帯、鱗状突起	LR縦	(23.9)	—	(12.9)		Ⅲ 3 a	237
1513		Ⅱ層	無文、口縁部内側鱗状突起		(12.4)	5.2	10.6		Ⅲ 3 c	237
1514		I層	三叉文	LR横	(12.7)	5.0	6.0		V 1	237
1515		Ⅱ層	雲形文、赤色顔料付着		(17.5)	—	(4.0)		V 2	237
1516		I層		RL横	(30.0)	—	(15.0)		V 4	237
1517		I層	孤状沈線口縁部内側も施文	L捻系文	(19.4)	—	(9.0)		VI	237

第355図 遺構外出土遺物 土器(21) 第三～VI群



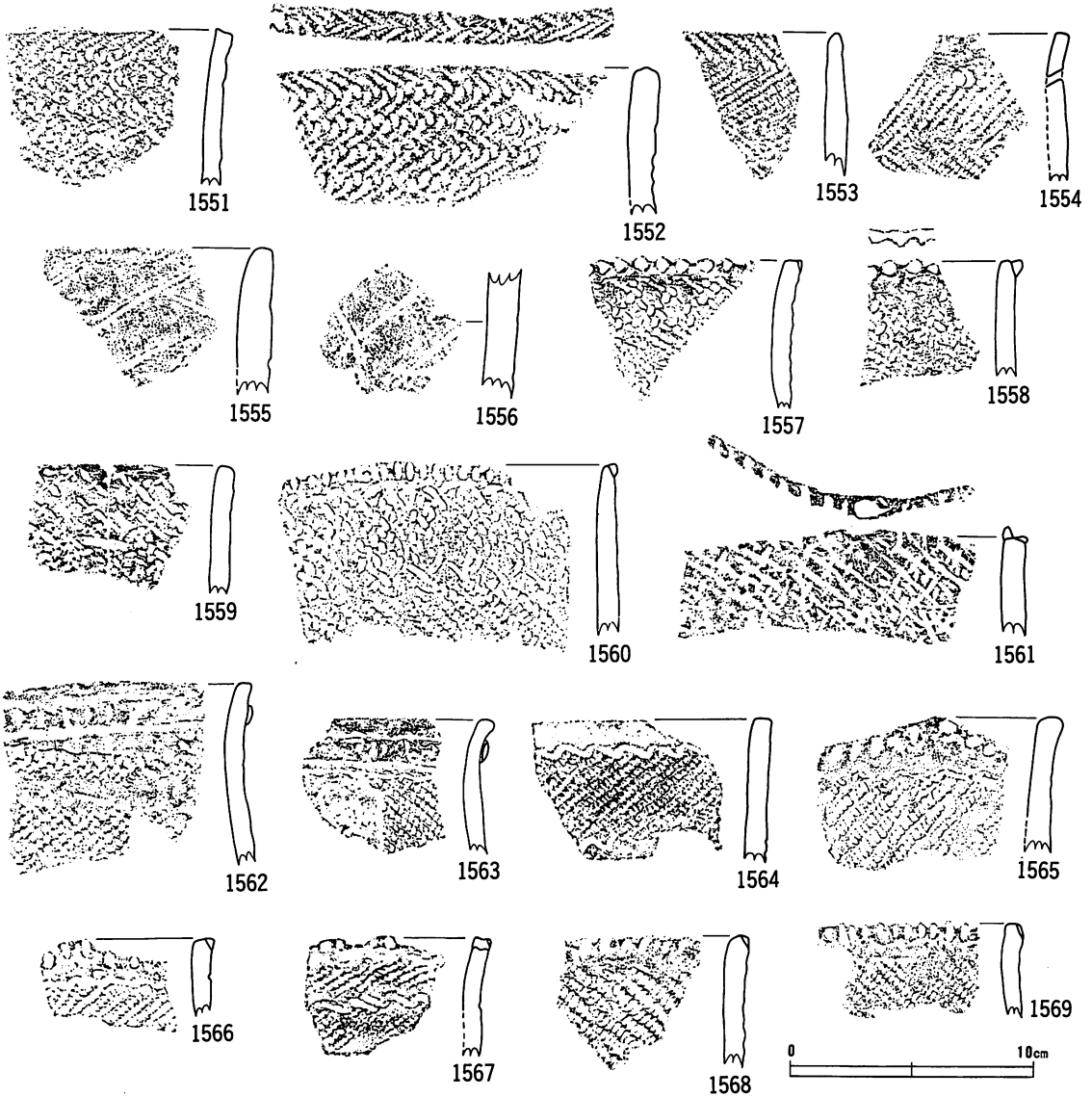
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1518	VII D 5 g	暗褐色土	貝殻腹縁刺突。沈線。					1519と同一個体。	II 1	238
1519	VII D 5 g	暗褐色土	貝殻腹縁刺突。沈線。					1518と同一個体。	II 1	238
1520	VII C 6 i	再堆積層	貝殻腹縁刺突。沈線。条痕。						II 1	238
1521	VI D 9 c	褐色土	貝殻痕。						II 1	238
1522	VI C 5 g	再堆積層下位	貝殻腹縁刺突。						II 1	238
1523	VI D 0 g	褐色土	貝殻腹縁刺突。緩波状口縁。						II 1	238
1524	VI D 9 d	褐色土	貝殻腹縁刺突。貝殻条痕。						II 1	238
1525	VIII E 8 a	黒色土	波状口縁。沈線。貝殻腹縁による幾何学的文様。刺突。						II 2	238
1526	VIII E 8 a	黒色土	沈線。貝殻腹縁による幾何学的文様。刺突。						II 2	238
1527	VIII E 8 a	II層	沈線。貝殻腹縁刺突による幾何学的文様。						II 2	238
1528	IX E 1 a	II層	沈線と貝殻腹縁による施文。先端鋭利な棒状工具による刺突。						II 2	238
1529	VII D 2 e	再堆積層		組縄縄文				繊維混入。	II 1 a	238
1530	VII E 9 a	II層	口唇部指頭状圧痕。	組縄縄文(右上がり)				繊維混入。	II 1 a	238
1531	VII D 1 i	検出面	口唇部爪形圧痕により小波状口縁となる。	組縄縄文				繊維混入。	II 1 a	238
1532	IX D 8 h	II層	口唇部指頭状圧痕。	組縄縄文「？」				繊維混入。	II 1 a	238
1533	VI D 8 f	暗褐色土	口唇部棒状工具による圧痕。	組縄縄文3段?				繊維混入。	II 1 a	238
1534	VI D 7 d	暗褐色土	口唇部棒状工具による圧痕。	組縄縄文				繊維混入。	II 1 a	238
1535	IX D 8 f	II層	口唇部縄圧痕。	組縄縄文				繊維混入。	II 1 a	238

第356図 遺構外出土遺物 土器(22) 第I群・第II群1類



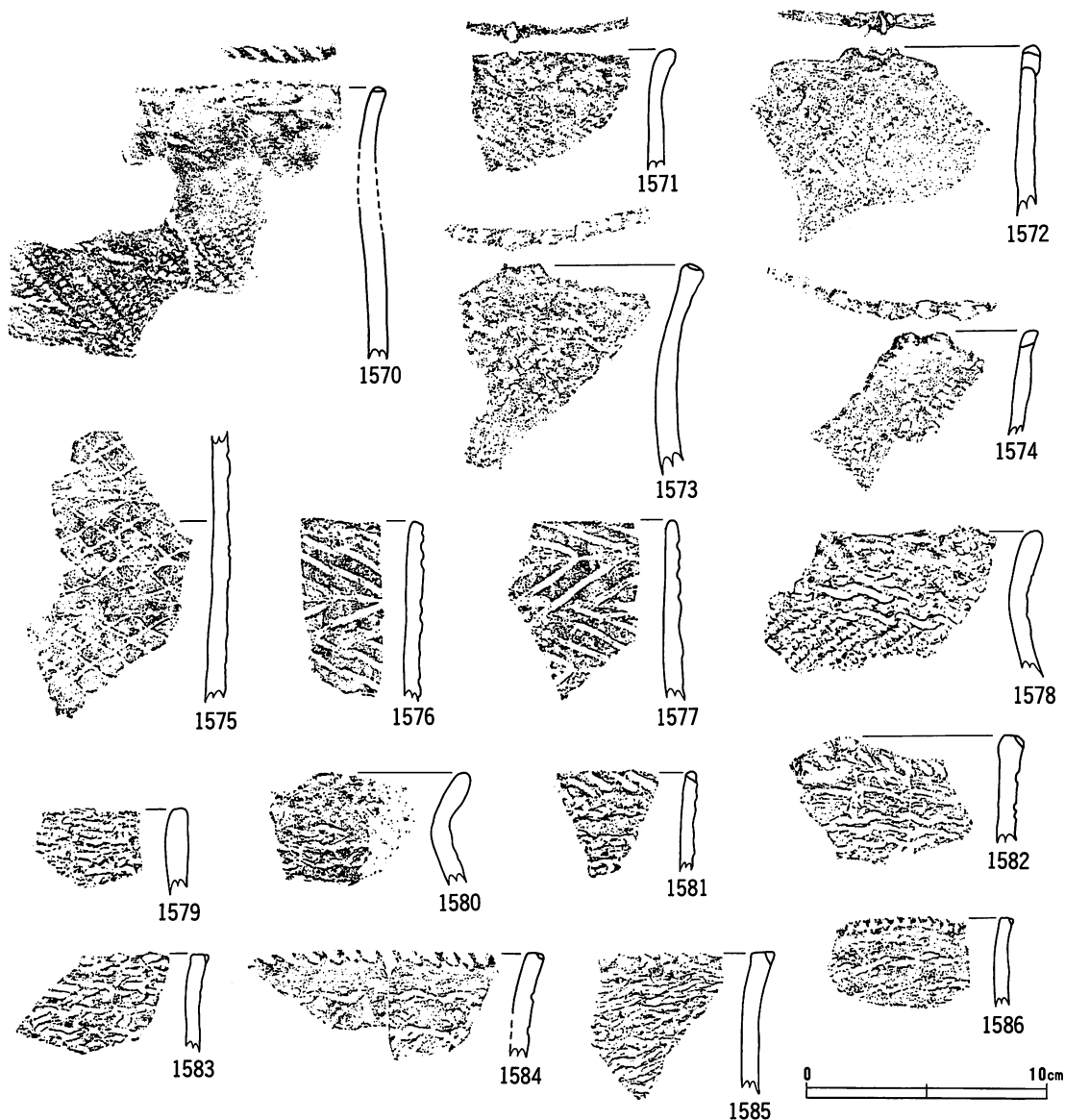
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1536	ⅩD 7 i	I層	口唇部と内側にも施文。	粗縄縄文				繊維わずか混入。	Ⅱ1 a	238
1537	V D 9 g	I層		粗縄縄文				繊維混入。	Ⅱ1 a	238
1538	X D 5 f	再堆積層	口唇部にも縄文施文。複節R L R	R L R横。				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1539	ⅩD 0 h	Ⅱ層	口唇部指頭状圧痕。	R L横?				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1540	ⅦD 0 b	褐色土下部	口唇部縄文施文。	R L横。				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1541	ⅧD 9 i	I層	口唇部にも縄文施文。	R R L横?				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1542	Na4トレンチ	盛土	口唇部と口縁部内側にも施文。	L R横。				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1543	ⅥD区	I層	口唇部指頭状圧痕。部分的にループ状。	R R L横?				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1544	ⅦD 0 e	I層	口唇部指頭状圧痕。部分的にループ状。	R R L横?				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1545	Na13トレンチ	盛土	口唇部縄圧痕。	粗縄縄文				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1546	ⅦD 8 i	I層	口唇部原体側面(縄端?) 圧痕。	粗紐。				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1547	ⅦD 1 e	再堆積層	口唇部指頭状圧痕。	粗紐?。				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1548	ⅦD 0 f	I層	口唇部指頭状圧痕。	粗紐。				繊維混入。	Ⅱ1 b	238
1549	ⅩD 8 f	Ⅱ層		L R + R Lの0段多条羽状縄文。				繊維混入。	Ⅱ1 c 7	238
1550	ⅦD 0 c	I層		R L 0段多条による羽状縄文				繊維・黒雲母混入。	Ⅱ1 c 7	238

第357図 遺構外出土遺物 土器(23) Ⅱ群1類



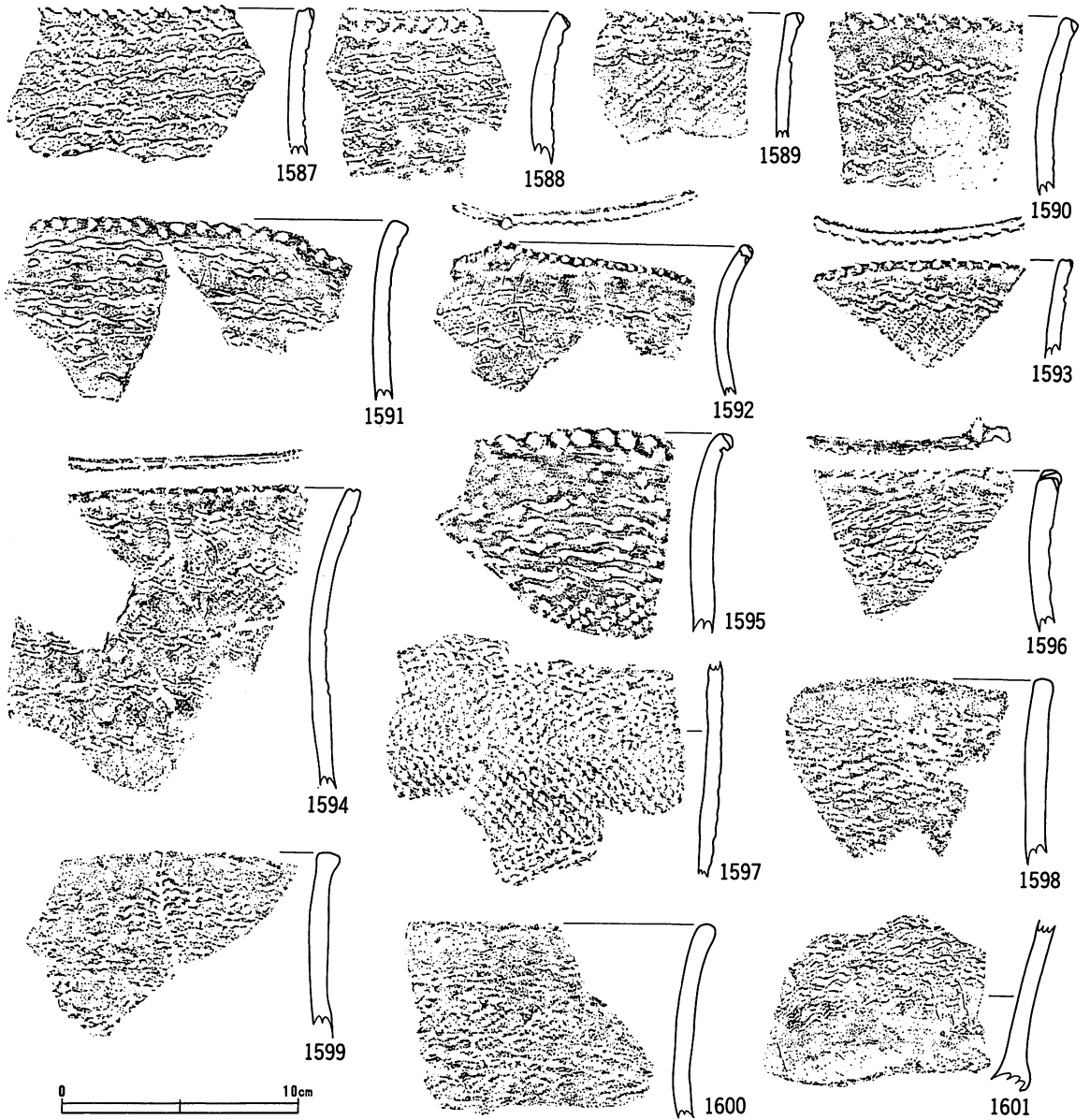
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	備考	備考	分類	写真
1551	ⅩD 9 i	Ⅱ層	口唇部平坦。	L R × R L 第1種結束羽状縄文。				繊維混入。	Ⅱ1c 4	238
1552	X D 2 i	Ⅱ層	口唇部にも縄文施文。	L R × R L 第1種結束羽状縄文。				繊維混入。	Ⅱ1c 4	238
1553	X D 9 f	Ⅱ層		L R × R L 第1種結束羽状縄文。				繊維混入。	Ⅱ1c 7	239
1554	ⅦC 7 e	再堆積層		非結束?羽状縄文。				補修孔。繊維混入。	Ⅱ1c 7	239
1555	ⅦC 7 g	トレンチ	棒状工具による沈線(モチーフ不明)。					繊維多量。軽量。1556と同一個体。	Ⅱ1d	239
1556	ⅦD 4 f	I層	棒状工具による沈線(モチーフ不明)。					繊維多量。軽量。1555と同一個体。	Ⅱ1d	239
1557	ⅩD 6 i	Ⅱ層	口唇端篋状工具による刻み。	組紐。				繊維わずか混入。	Ⅱ2a	239
1558	ⅦD 9 f	I層	口唇端指頭状刻み。	組紐。				繊維混入。	Ⅱ2a	239
1559	ⅦD 0 e	I層		網目状燃糸文。組紐。				繊維わずか混入。	Ⅱ2a	239
1560	ⅦC 2 h	暗褐色土	口唇端棒状工具による刻み。	組紐。R L 横。				繊維わずか混入。	Ⅱ2a	239
1561	Ⅹ I D 0 h	暗褐色土	口唇端棒状工具による刻み。凹文。	網目状燃糸文。				繊維わずか混入。	Ⅱ2a	239
1562	ⅦD 8 a	I層	隆帯上篋状工具による刻み。	組紐。				繊維混入。	Ⅱ2a	239
1563	ⅦD 8 h	検出面	隆帯左上方向からの指頭状圧痕(爪跡顯著)。	R L 横。				繊維混入。	Ⅱ2b	239
1564	ⅦD 8 a	I層		L R 横。横位綾結文。				繊維混入。	Ⅱ2b	239
1565	ⅦD 5 i	暗褐色土	小波状口縁。口唇端棒状工具による刻み。	L R 横。				繊維混入。	Ⅱ2b	239
1566	ⅦC 1 g	再堆積層	波状口縁。口唇端棒状工具による刻み。	L R 横。横位綾結文。				繊維わずか混入。	Ⅱ2b	239
1567	ⅦD 9 j	再堆積層	小波状口縁。頂部2山。口唇端篋状工具による刻み。	L L R ? 横。				繊維混入。	Ⅱ2b	239
1568	ⅦE 6 a	I層	口唇端棒状工具による刻み。	R L 横。				繊維わずか混入。	Ⅱ2b	239
1569	ⅦC 0 h	I層	口唇端棒状工具による刻み。	R L 横。				繊維混入。	Ⅱ2b	239

第358図 遺構外出土遺物 土器(24) 第Ⅱ群1~2類



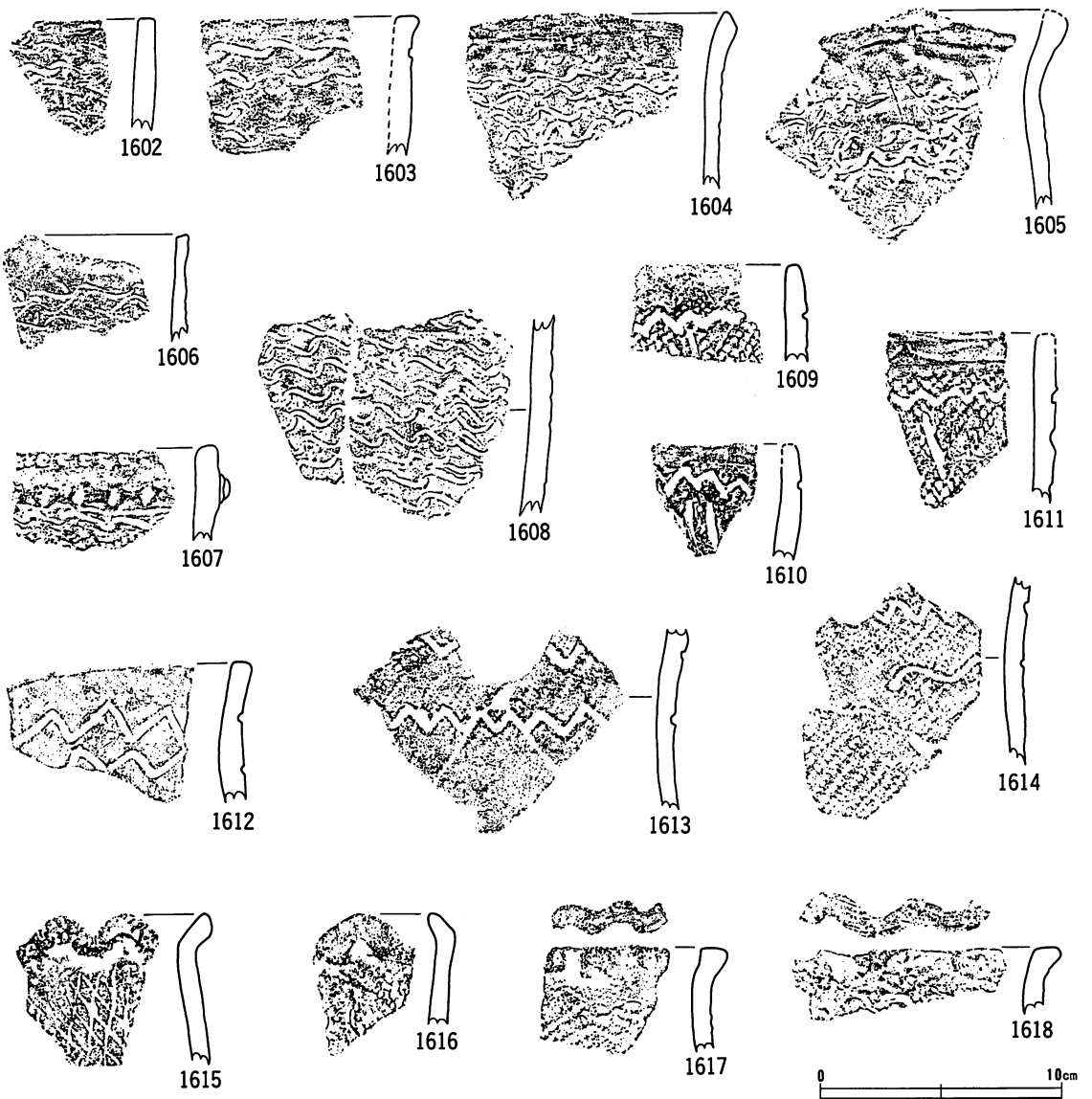
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1570	IX D 5 h	Ⅲ層上面	口唇部棒状工具押圧。横位綾結文。	R L横。				繊維わずか混入。	Ⅱ 2 b	239
1571	VII C 3 h	再堆積層	口唇部棒状工具による押圧。	L R縦。				繊維わずか混入。	Ⅱ 2 b	239
1572	IX D 2 h	Ⅱ層	小突起。	L R横。				繊維わずか混入。	Ⅱ 2 b	239
1573	IX E 4 b	Ⅱ層	波状口縁。口唇部指頭状圧痕。横位綾結文。	L R横。				繊維わずか混入。	Ⅱ 2 b	239
1574	IX D 9 g	I層	波状口縁。口唇部指頭状圧痕。横位綾結文。	L R横。				繊維わずか混入。	Ⅱ 2 b	239
1575	VII C 7 f	再堆積層下位		R網目状燃系文				繊維わずか混入。	Ⅱ 2 c	239
1576	VII C 4 a	再堆積層下位		L木目状燃系文(横位)。				繊維わずか混入。	Ⅱ 2 c	239
1577	VII C区	再堆積層		L木目状燃系文(横位)。				繊維わずか混入。	Ⅱ 2 c	239
1578	VII C 4 h	再堆積層	波状口縁。重層する横位綾結文。	L R横。					Ⅱ 3 a	239
1579	VII C 1 i	整地下位	重層する横位綾結文。						Ⅱ 3 a	239
1580	VI D 8 h	I層	波状口縁。重層する横位綾結文。						Ⅱ 3 a	239
1581	IX D 8 i	黒色土	口唇部外面棒状工具による斜位刻み。重層する横位綾結文。						Ⅱ 3 a	239
1582	IX D 3 h	Ⅱ層	山形状突起。口唇部棒状工具による右方向からの刻み。重層する横位綾結文。	L R横。					Ⅱ 3 a	239
1584	VII D 1 e	再堆積層	口唇部棒状工具による雑な刻み。重層する横位綾結文。						Ⅱ 3 a	239
1584	IX D 3 h	Ⅱ層	口唇部棒状工具による刻み。重層する横位綾結文。	L R横。					Ⅱ 3 a	239
1585	VI D 9 f	I層	口唇部篋状工具による刻み。重層する横位綾結文。					繊維混入。	Ⅱ 3 b	239
1586	VI D 6 i	黒色土	緩い波状口縁?口唇部篋状工具による刻み。重層する横位綾結文。						Ⅱ 3 a	240

第359図 遺構外出土遺物 土器(25) 第Ⅱ群2類～3類



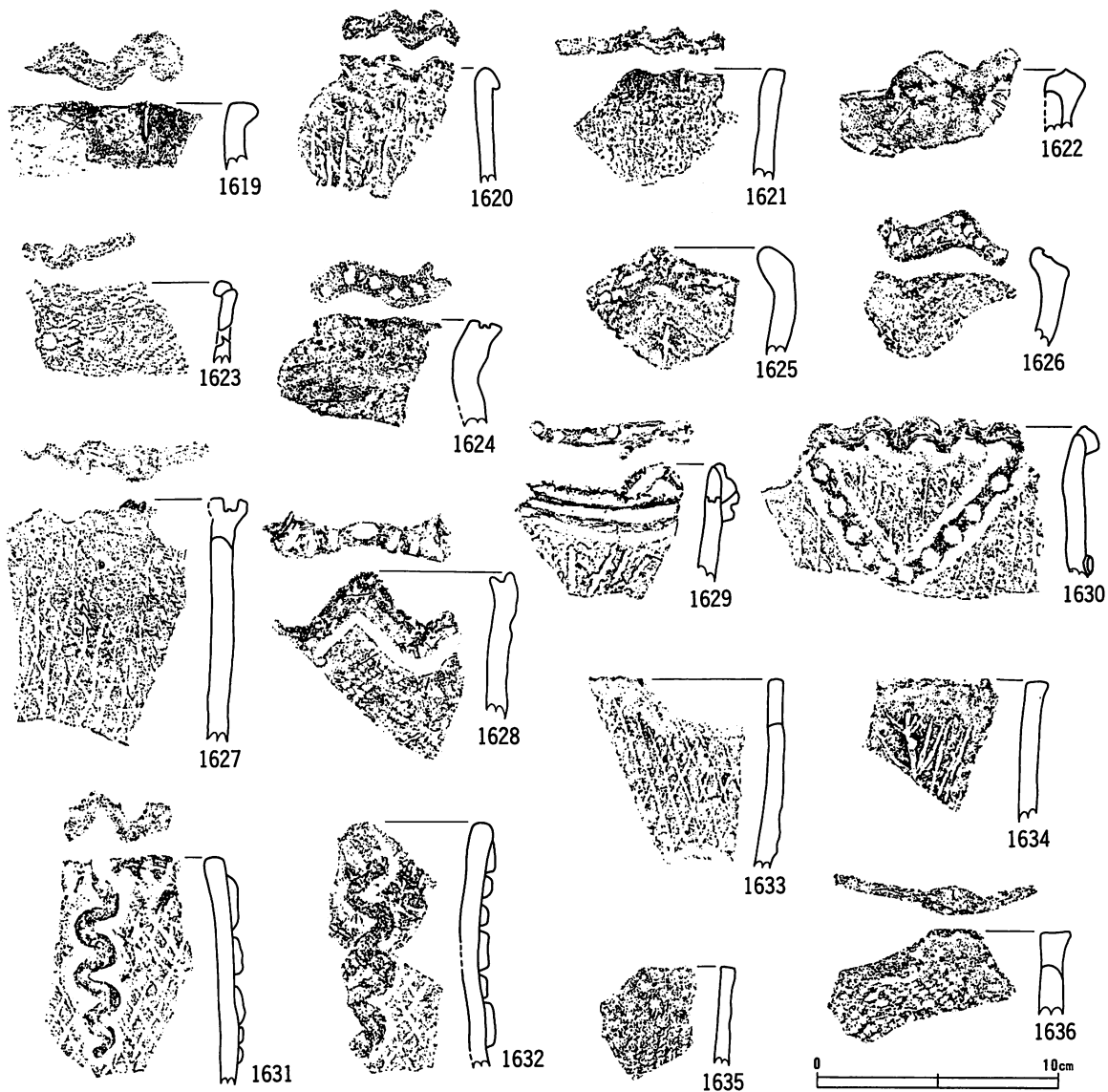
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1587	K D 5 j	I 層	口唇端筒状工具による右方向からの刻み。重層する横位綾絡文。	R L 横。					II 3 a	240
1588	Ⅷ D 0 i	I 層	口唇端筒状工具による右方向からの刻み。重層する横位綾絡文。	R L 横。					II 3 a	240
1589	K D 5 f	II 層	口唇端筒状工具による右方向からの刻み。重層する横位綾絡文。	L R 横。					II 3 a	240
1590	Ⅷ D 8 i	II 層	口唇端筒状工具による右方向からの刻み。重層する横位綾絡文。	R L 横。					II 3 a	240
1591	K E 2 a	I 層	不均整波状口縁。口唇端筒状工具による右方向からの刻み。重層する横位綾絡文。						II 3 a	240
1592	Ⅶ D 6 i	黒色土	小波状口縁。口唇端筒状工具による刻み。重層する横位綾絡文。						II 3 a	240
1593	K D 9 j	I 層	口唇部沈線。口唇端筒状工具による右方向からの刻み。重層する横位綾絡文。	L R 横。					II 3 a	240
1594	K D 3 i	II 層	口唇部沈線。口唇端刻み。重層する横位綾絡文。	L R 横。					II 3 a	240
1595	Ⅶ D 7 i	黒色土	口唇端指頭状圧痕(爪跡顕著)。竹管刺突による鋸歯文。重層する横位綾絡文。	L R 横。				繊維混入。	II 3 a	240
1596	Ⅶ D 8 a	暗褐色土	小波状口縁。頂部内側棒状工具、口唇端筒状工具による刻み。重層する横位綾絡文。						II 3 b	240
1597	XI D 5 f	検出面	重層する横位綾絡文。	R L R。					II 3 b	240
1598	Ⅶ D 5 f	検出面	重層する横位綾絡文。						II 3 b	240
1599	Ⅶ D 8 c	I 層	重層する横位綾絡文。	L R 横。					II 3 b	240
1600	Ⅶ D 8 d	暗褐色土	重層する横位綾絡文。	L R 横。					II 3 b	240
1601	Ⅶ D 5 f	検出面	重層する横位綾絡文。					繊維混入。	II 3 b	240

第360図 遺構外出土遺物 土器(26) 第II群3類



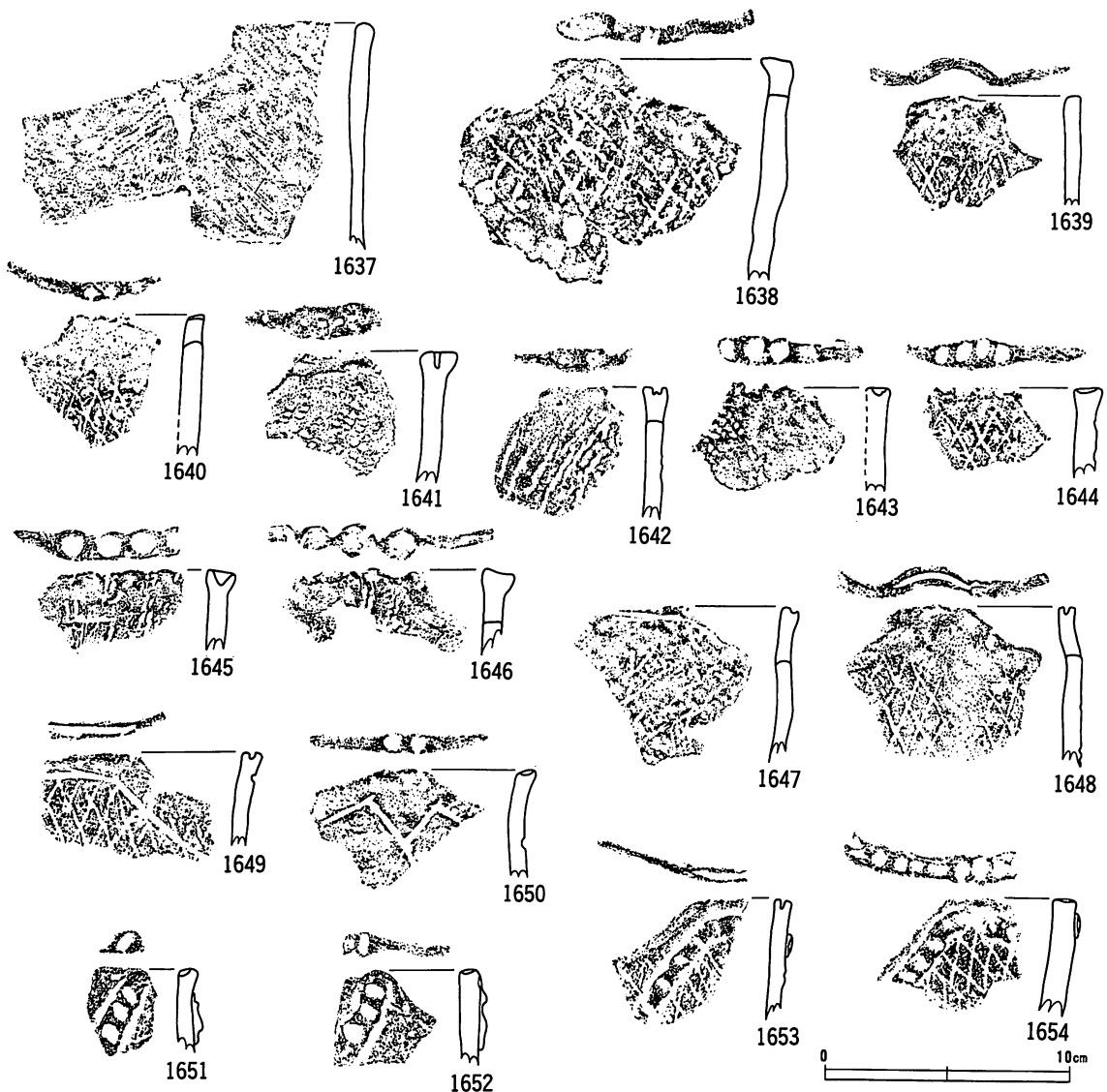
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
1602	ⅦD 8 h	Ⅱ層	S字状連鎖沈文。						Ⅱ 4	240
1603	ⅦD 4 h	Ⅱ層	S字状連鎖沈文。					繊維混入。	Ⅱ 4	240
1604	ⅦD 9 a	褐色土	S字状連鎖沈文。						Ⅱ 4	240
1605	ⅦD 9 a	褐色土	S字状連鎖沈文。						Ⅱ 4	240
1606	No14トレンチ	盛土	波状口縁。S字状連鎖沈文。						Ⅱ 4	240
1607	ⅦD 5 f	I層	半截竹管斜位刺突。陸帯土撿取工具による圧痕。	S字状連鎖沈文。				繊維混入。	Ⅱ 4	240
1608	ⅦD 7 e	I層	S字状連鎖沈文。						Ⅱ 4	240
1609	ⅦD 0 f	I層	鋸齒状沈線。縦位2条の沈線。	L R横。					Ⅱ 5	240
1610	ⅦD 0 i	I層	鋸齒状沈線。縦位2条の沈線。						Ⅱ 5	240
1611	ⅦD 5 h	I層	鋸齒状沈線。縦位の沈線。	R燃糸文。L R横。				疑似口縁。	Ⅱ 5	240
1612	ⅦD 9 h	黒色土	鋸齒状沈線。						Ⅱ 5	240
1613	ⅦD 8 d	暗褐色土	鋸齒状沈線。(棒状工具)。	L R横。				1614と同一個体。	Ⅱ 5	240
1614	ⅦD 8 d	暗褐色土	鋸齒状沈線。波状沈線(棒状工具)。	L R横。				1613と同一個体。	Ⅱ 5	240
1615	ⅦD 1 a	Ⅱ層	鋸齒状裝飾体。	R網目状燃糸文。					Ⅱ 6 a 7	241
1616	ⅦC 5 h	再堆積層下位	鋸齒状裝飾体。	L R横。片結び縦位絡文。					Ⅱ 6 a 7	241
1617	ⅦC 4 f	再堆積層	鋸齒状裝飾体。	L R横。横位綾絡文。				内面スズ顯著。	Ⅱ 6 a 7	241
1618	ⅦC 3 e	Ⅱ層	鋸齒状裝飾体。	横位綾絡文。					Ⅱ 6 a 7	241

第361図 遺構外出土遺物 土器(27) 第Ⅱ群4類～6類



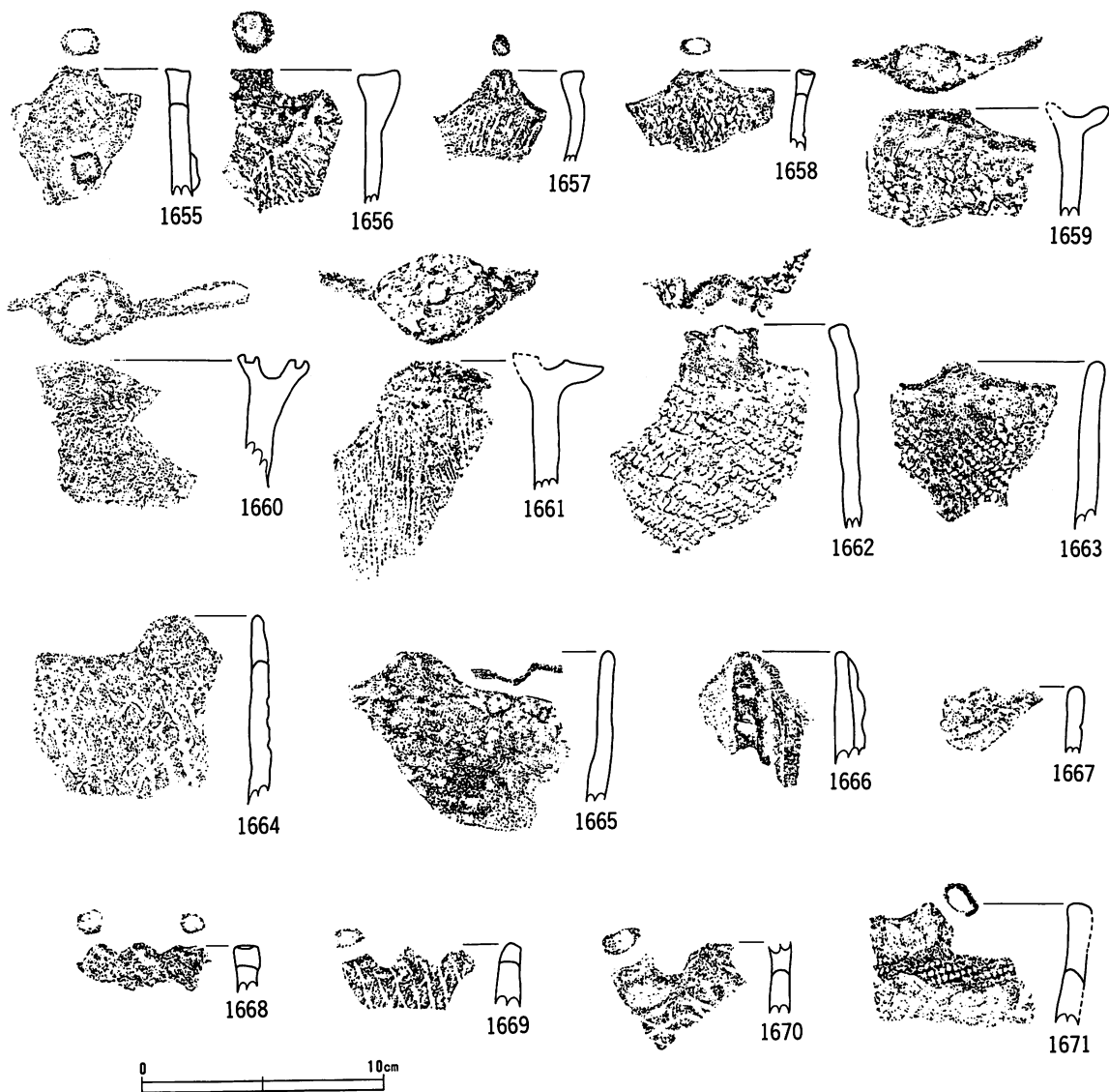
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底面径	器高	備考	分類	写真
1619	VII C 4 e	再堆積層	鋸歯状裝飾体。						II 6 a 7	241
1620	VII D 4 i	再堆積層	鋸歯状裝飾体。	R 網目状燃系文。					II 6 a 7	241
1621	VII C 7 f	I 層	鋸歯状裝飾体 (弁状突起上に指頭圧痕により花卉状とする)	不明瞭(多軸結条体?)					II 6 a 7	241
1622	VII E 9 a	I 層	鋸歯状裝飾体。						II 6 a 7	241
1623	IX B 3 c	I 層	口唇部に鋸歯状裝飾体。重層する横位線格文。楕形孔。	L R 横。					II 6 a 7	241
1624	VII D 8 e	I 層	鋸歯状裝飾体。裝飾体上に棒状工具による割突。半截竹管割突。						II 6 a 7	241
1625	VII C 3 b	再堆積層	鋸歯状裝飾体。裝飾体上に半截竹管割突。	R 網目状燃系文。					II 6 a 7	241
1626	VII D 1 g	I 層	鋸歯状裝飾体。裝飾体上に半截竹管割突。	R 網目状燃系文。					II 6 a 7	241
1627	No.22 トレンチ	盛土	弁状口縁。鋸歯状裝飾体上沈線。両端凹文に棒状工具による割突。	R 網目状燃系文。					II 6 a 7	241
1628	IX D 6 i	I 層	鋸歯状裝飾体。口唇部棒状工具による刻み。頂部凹み。沈線(凹線)。	L R × R L 第1種結束羽状縄文。			1399、1928と同一個体		II 6 a 7	241
1629	VII D 7 d	II 層	鋸歯状裝飾体。裝飾体上沈線(凹線)。口唇部竹管割突。隆帯上沈線(凹線)。	L R 木目状燃系文。					II 6 a 7	241
1630	VII D 0 ライン	再堆積層	鋸歯状裝飾体。隆帯上指頭状圧痕。	R 網目状燃系文。					II 6 a 7	241
1631	VII D 8 g	II 層	鋸歯状裝飾体。垂下する波状隆帯。	R 網目状燃系文。				1632と同一個体	II 6 a 7	241
1632	VII D 9 f	再堆積層	波状口縁。頂部から垂下する波状隆帯。	R 網目状燃系文。				1631と同一個体	II 6 a 7	241
1633	VII E 6 a	I 層	弁状突起。	R 網目状燃系文。					II 6 a 7	241
1634	VII D 0 g	再堆積層	弁状突起(やや肥厚)。	R 木目状燃系文。					II 6 a 7	241
1635	VII C 6 f	再堆積層	弁状突起。	L 燃系文。					II 6 a 7	241
1636	不明		弁状突起。	L R 縦。					II 6 a 7	241

第362図 遺構外出土遺物 土器(20) 第II群6類



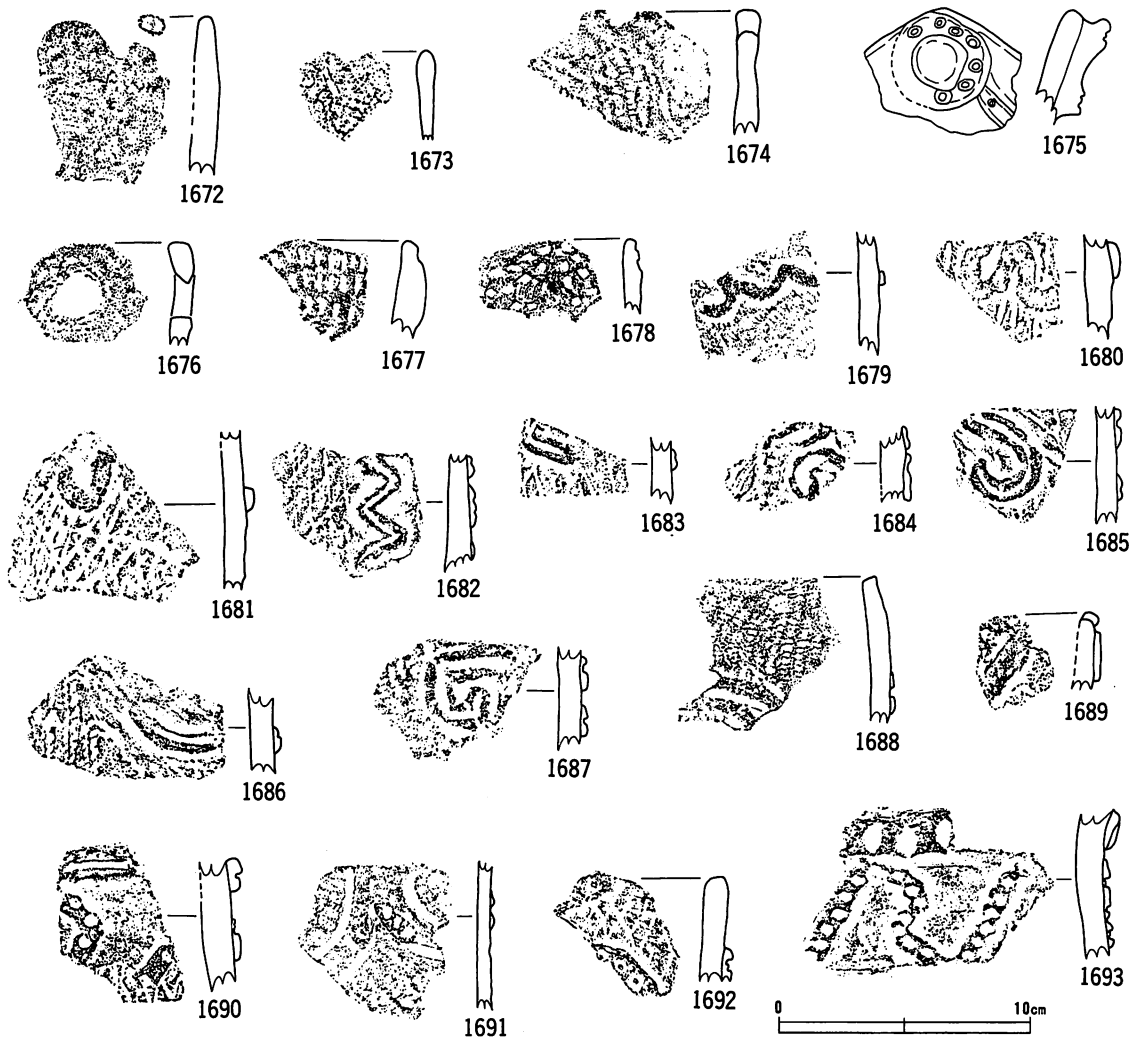
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1637	VII E 5 c	黑色土	弁状突起。	L R縦。					II 6 a f	241
1638	VII C 3 e	再堆積層	裝飾口縁 (弁状突起)。花弁状口縁。	R網目状燃糸文。					II 6 a f	241
1639	VII C 6 h	I層	弁状突起。	L網目状燃糸文。					II 6 a f	241
1640	VII C 6 e	再堆積層	弁状突起。頂部鏝状工具による刻み。	L網目状燃糸文。					II 6 a f	241
1641	VII D 0 g	再堆積層	弁状突起。頂部と口唇部に棒状工具による刺突。	多軸絡条体?					II 6 a f	241
1642	VII E 9 a	I層	弁状突起。頂部竹管刺突。	R燃糸文。					II 6 a f	241
1643	VII C 5 e	再堆積層	弁状突起。頂部指頭状圧痕 (爪跡顕著)。	R L横。					II 6 a f	242
1644	VII C 8 h	再堆積層	弁状突起。頂部指頭状圧痕 (爪跡顕著)。	R網目状燃糸文。					II 6 a f	242
1645	VII D 6 g	II層	弁状突起。頂部棒状工具回転 (?) による凹み。	L燃糸文 (?)。					II 6 a f	242
1646	VII C 7 f	再堆積層	弁状突起。頂部指頭状圧痕。側面も指頭により凹凸を作り出す。	L燃糸文。					II 6 a f	242
1647	VII C 6 f	再堆積層	弁状突起。頂部棒状工具による沈線。	R網目状燃糸文。					II 6 a f	242
1648	VII C 5 h	再堆積層	弁状突起。頂部に棒状工具による沈線。	L網目状燃糸文。					II 6 a f	242
1649	VII C 4 g	再堆積層	弁状突起。頂部に棒状工具による沈線。口縁下に沈線 (凹線)。	L網目状燃糸文。					II 6 a f	242
1650	VII C 4 i	再堆積層	弁状突起。頂部指頭状圧痕。沈線。						II 6 a f	242
1651	VII D 2 e	再堆積層	弁状突起。頂部圧痕。隆帯上指頭状圧痕。						II 6 a f	242
1652	VI D 8 c	I層	弁状突起。頂部圧痕。隆帯上指頭状圧痕。						II 6 a f	242
1653	VII C 6 h	I層	弁状突起。頂部に棒状工具による沈線。隆帯上左方向からの指頭状圧痕。	L網目状燃糸文。					II 6 a f	242
1654	VIII B区	再堆積層	弁状突起。頂部と口唇部に指頭状圧痕。隆帯上左方向からの指頭状圧痕。	R網目状燃糸文。					II 6 a f	242

第363図 遺構外出土遺物 土器(29) 第II群6類



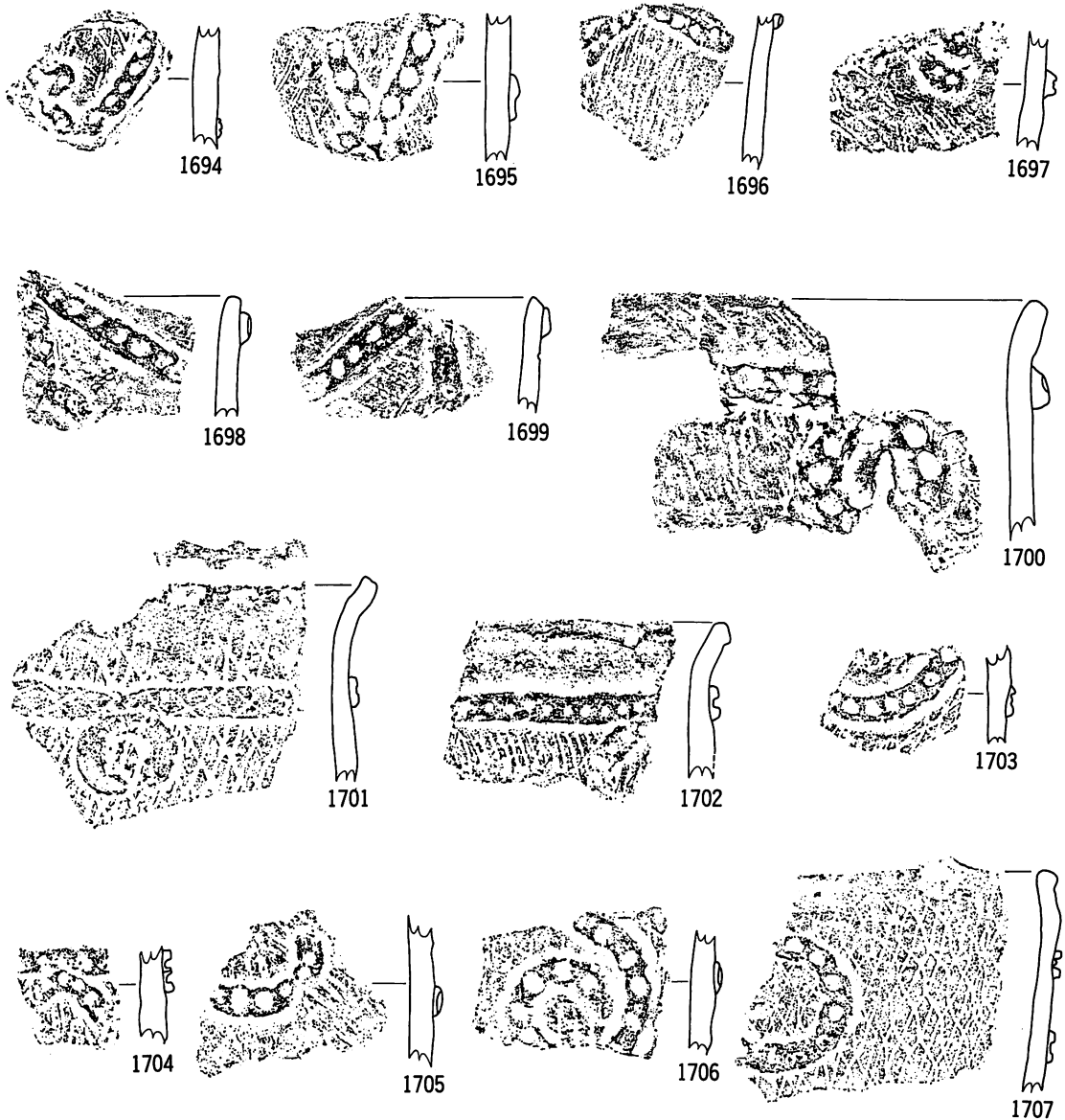
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底口径	器高	備考	分類	写真
1655	IX D 5 j	I層	台形状突起。ボタン状貼付文。(1個剥落)。						II 6 a ㉗	242
1656	VII D 9 f	I層	円文状突起。鋸齒状(波状)粘土紐貼付け。	R燃糸文。					II 6 a ㉗	242
1657	VII C 6 g	再堆積層	台形状突起(上面観円形に近い)。						II 6 a ㉗	242
1658	VII C 5 h	再堆積層	台形状突起。	L網目状燃糸文。					II 6 a ㉗	242
1659	VII C 2 i	再堆積層	円環状突起。中央部凹文。	縦位綾絡文。					II 6 a ㉗	242
1660	Na20トレンチ	盛土	円環状裝飾体。裝飾体上竹管刺突。波状口縁。口唇部沈線。	L燃糸文。					II 6 a ㉗	242
1661	VII D 2 g	再堆積層	円環状突起。中央部凹文。	L燃糸文。					II 6 a ㉗	242
1662	VII D 8 i	II層	半円状裝飾体。口唇部縄文施文。	L R縦。					II 6 a ㉗	242
1663	VII C 6 f	再堆積層	山形状突起。	L R縦。縦位綾絡文。					II 6 a ㉗	242
1664	VII D 1 i	検出面	丸山状突起。	R網目状燃糸文。					II 6 a ㉗	242
1665	VII D 9 f	I層	山形状突起。平縁部指頭交互押圧により上面観鋸齒状(花卉状)。						II 6 a ㉗	242
1666	VII D 1 b	斜面トレンチ	波状口縁。垂下する隆帯上に指頭状圧痕。	R網目状燃糸文。					II 6 a ㉗	242
1667	VII D 7 d	II層	山形状突起(三角形+三角形) 右側欠損。	L R側面圧痕?					II 6 a ㉗	242
1668	VII E 6 d	II層	山形状突起(三角形+三角形+台形状)。						II 6 a ㉗	242
1669	VII B区	再堆積層	山形状突起(台形状+三角形+三角形) 右側欠損。	L網目状燃糸文。					II 6 a ㉗	242
1670	VII E 0 e	I層	山形状突起(台形状) 右側欠損して不明。	網目状燃糸文。					II 6 a ㉗	242
1671	IX D 2 d	I層	突起(形状不明)。	L R横。					II 6 a ㉗	242

第364図 遺構外出土遺物 土器(30) 第II群6類



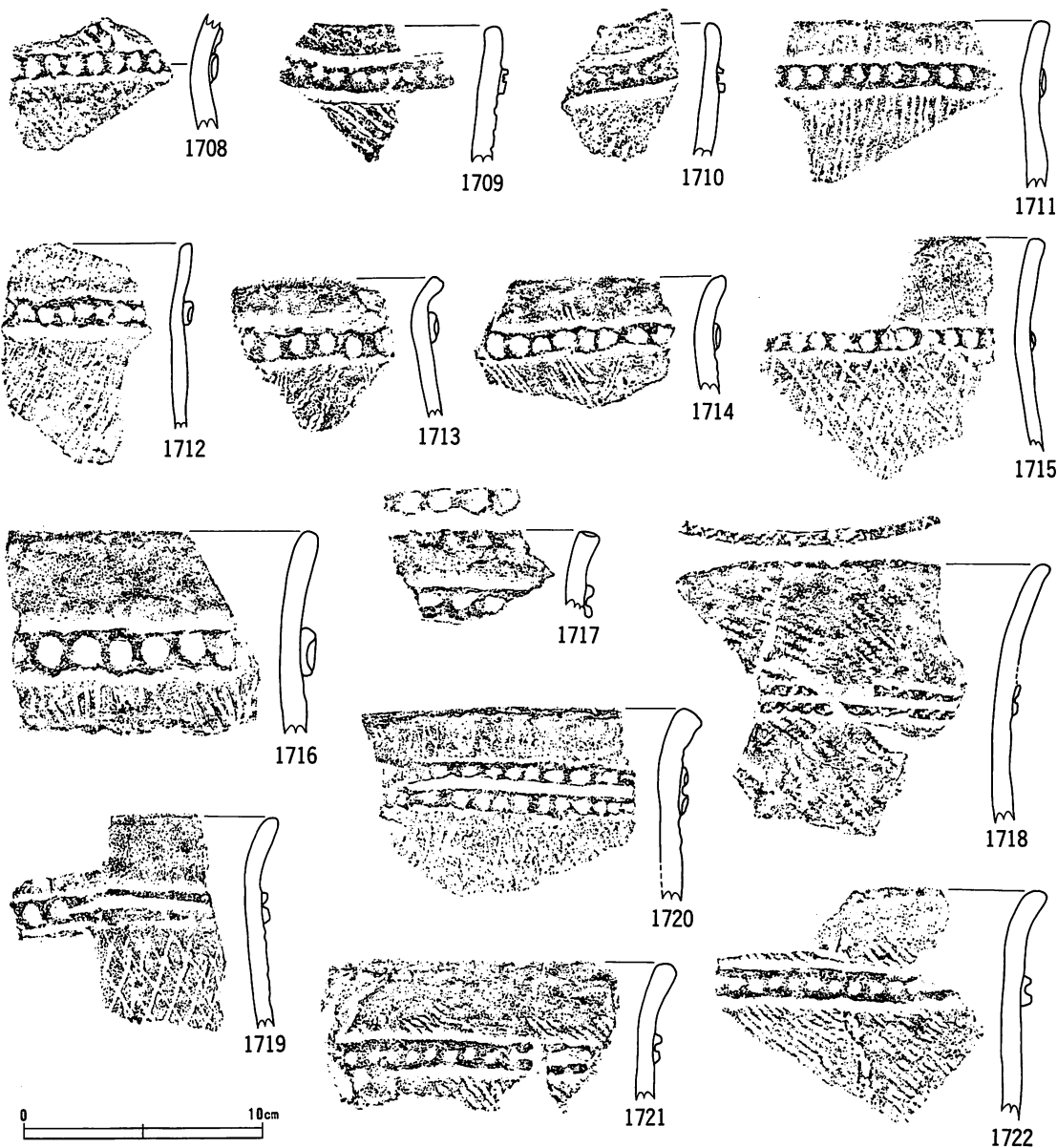
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1672	ⅦC 3 e	再堆積層	山形状突起 (丸山状+台形状) 右側欠損。						Ⅱ6aウ	242
1673	ⅦD 7 c	Ⅱ層	山形状突起 (三角形状+三角形状) 欠損。	縦位綾結文。					Ⅱ6aウ	242
1674	ⅦD 0 h	Ⅱ層	波状口縁。山形状突起。	L R ?					Ⅱ6aウ	242
1675	ⅦD 3 i	褐色土	山形状突起円環状裝飾体貼付け。竹管刺突。隆帯上竹管刺突。						Ⅱ6aウ	242
1676	ⅦE 5 f	黒色土直上	円状突起。						Ⅱ6aウ	242
1677	ⅦC 5 f	I層	波状口縁頂部甕状工具による刺突。						Ⅱ6aウ	242
1678	ⅦD区	I層	波状口縁頂部甕状工具による刺突。						Ⅱ6aウ	242
1679	No22トレンチ	盛土	隆帯による波状文と円文。	L R。					Ⅱ6bア	242
1680	ⅨD 0 g	Ⅱ層	隆帯。	捺糸文。					Ⅱ6bア	242
1681	ⅨD 0 g	Ⅱ層	隆帯。	網目状捺糸文。					Ⅱ6bア	243
1682	ⅦD 8 j	Ⅱ層	隆帯 (鋸歯状) 上沈線 (凹線)。	R 網目状捺糸文。捺糸文。					Ⅱ6bア	243
1683	ⅦD 9 j	I層	隆帯 (鋸歯状?) 上沈線 (凹線)。	R 網目状捺糸文。					Ⅱ6bア	243
1684	ⅦD 7 i	暗褐色土	隆帯 (曲線) 上沈線 (凹線)。	L + R の捺糸文。					Ⅱ6bア	243
1685	ⅦE 3 c	I層	隆帯 (釣針状) 上沈線 (凹線)。	L 捺糸文。					Ⅱ6bア	243
1686	不明		隆帯 (曲線) 上沈線 (凹線)。	L R 木目状捺糸文。					Ⅱ6bア	243
1687	ⅦD 3 h	検出面	隆帯 (方形) 上沈線 (凹線)。	L R × R L 第1種結束羽状縄文。					Ⅱ6bア	243
1688	ⅨE 3 b	Ⅱ層	波状口縁。隆帯上沈線 (凹線)。隆帯上にも縄文施文。	L R 横。					Ⅱ6bア	243
1689	不明		口唇部から肩部へ隆帯。横位綾結文。						Ⅱ6bア	243
1690	ⅦD 5 f	再堆積層	隆帯上沈線。隆帯上竹管刺突。	L 網目状捺糸文。					Ⅱ6bア	243
1691	ⅦC 7 f	Ⅱ層上面	隆帯貼付。隆帯上に棒状工具による刺突。沈線 (凹線)。	L R 縦。					Ⅱ6bア	243
1692	No16トレンチ	盛土	隆帯上竹管刺突。	R 網目状捺糸文。					Ⅱ6bア	243
1693	ⅦD 5 c	赤色土上面	隆帯上指頭状圧痕。隆帯上竹管刺突。	L 網目状捺糸文。					Ⅱ6bア	243

第365図 遺構外出土遺物 土器(31) 第Ⅱ群6類



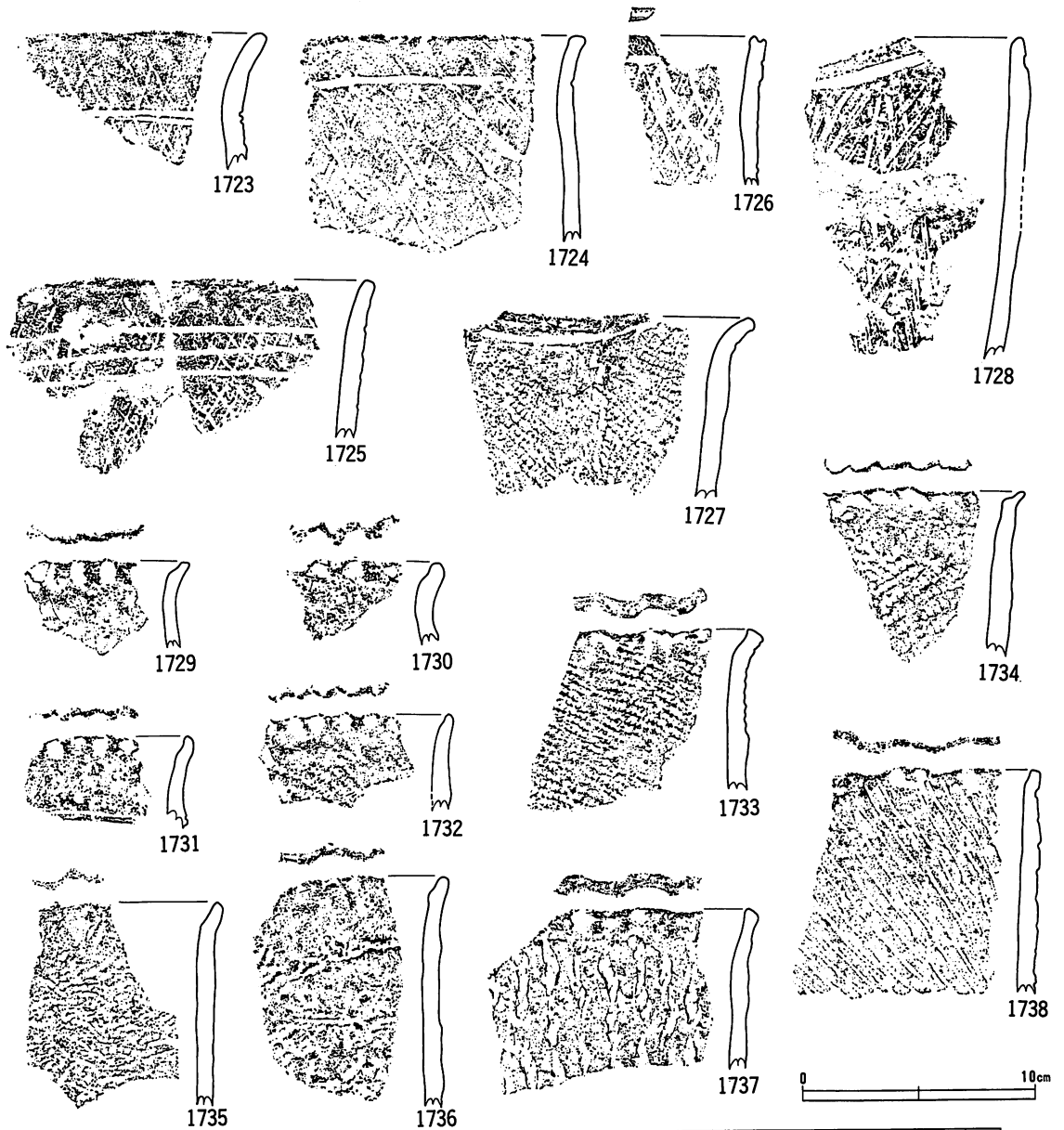
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1694	ⅦD 9 f	I層	沈線。隆帶上竹管刺突。	L網目状燃系文。					Ⅱ6b7	243
1695	ⅦD 4 g	I層	隆帶上指頭状压痕。	R木目状燃系文。					Ⅱ6b7	243
1696	ⅦD 7 d	II層	隆帶上竹管刺突。	燃系文 (r?)					Ⅱ6b7	243
1697	ⅦC 4 h	II層	隆帶上竹管刺突。	L + R (木目状?) 燃系文。					Ⅱ6b7	243
1698	ⅦC 4 h	II層	波状口縁(弁状突起?)。隆帶上指頭状压痕と竹管刺突。					1699と同一個体	Ⅱ6b7	243
1699	ⅦC 4 h	II層	波状口縁(弁状突起?)。隆帶上指頭状压痕と竹管刺突。	L燃系文。				1698と同一個体	Ⅱ6b7	243
1700	ⅦD 4 b	II層	隆帶上指頭状压痕。	L燃系文。					Ⅱ6b7	243
1701	X D 1 f	I層	花弁状口縁。隆帶上網目燃系文施文。馬蹄状隆帶。	R網目状燃系文。					Ⅱ6b7	243
1702	ⅦD 0 g	I層	隆帶上竹管刺突。	R網目状燃系文。					Ⅱ6b7	243
1703	ⅦD 6 a	暗褐色土	隆帶上竹管刺突。	網目状燃系文。					Ⅱ6b7	243
1704	不明		隆帶上竹管刺突。	L木目状燃系文。					Ⅱ6b7	243
1705	ⅦC 1 g	褐色土上面	隆帶上指頭状压痕。	R木目状燃系文。					Ⅱ6b7	243
1706	ⅦD 1 a	斜面	隆帶上指頭状压痕。	R網目状燃系文。					Ⅱ6b7	243
1707	Ⅷa16トレンチ	盛土	隆帶上竹管刺突。	R網目状燃系文。				口唇部平坦	Ⅱ6b7	243

第366図 遺構外出土遺物 土器(32) 第II群6類



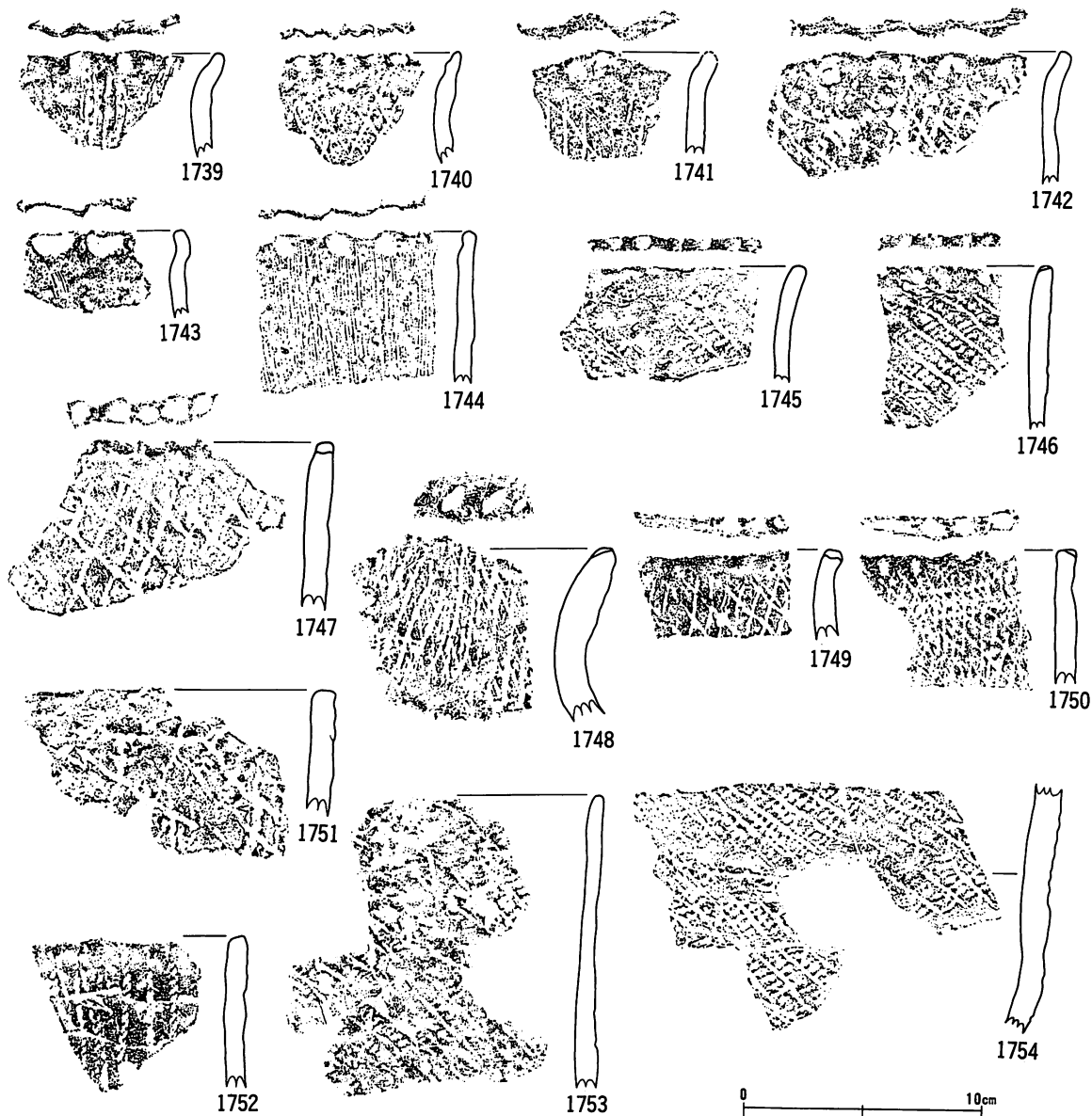
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1708	ⅦC 6 d	再堆積層	隆帯上指頭状圧痕 (爪痕顕著)。	L R縦。					Ⅱ6 b 4	243
1709	ⅦE 5 b	I層	波状口縁。隆帯上竹管刺突。	L 燃糸文。				1710と同一個体。	Ⅱ6 b 4	243
1710	ⅦE 5 b	I層	波状口縁。隆帯上竹管刺突。	L 燃糸文。				1709と同一個体。	Ⅱ6 b 4	243
1711	ⅦC区	I層	隆帯左上方向からの爪による刻み。	R 燃糸文。					Ⅱ6 b 4	244
1712	ⅦC 6 f	再堆積層	波状口縁。隆帯上指頭状圧痕 (爪跡顕著)。	r 燃糸文。					Ⅱ6 b 4	244
1713	ⅦD 3 c	再堆積層	隆帯上指頭状圧痕。	L 木目状燃糸文。					Ⅱ6 b 4	244
1714	ⅦC 5 h	再堆積層	隆帯上指頭状圧痕。	R 木目状燃糸文。					Ⅱ6 b 4	244
1715	ⅦC 2 g	I層	隆帯左上方向からの指頭状圧痕 (爪跡顕著)。	R 網目状燃糸文。					Ⅱ6 b 4	244
1716	ⅦD 1 g	Ⅱ層	隆帯上指頭状圧痕。	R 木目状燃糸文。					Ⅱ6 b 4	244
1717	ⅦD 9 h	I層	口唇部右方向からの指頭状圧痕。隆帯左上方向からの棒状工具による刺突。						Ⅱ6 b 4	244
1718	ⅦC 4 h	再堆積層下位	口唇部縄文施文。隆帯上縄文施文後沈線 (凹線)。	L R縦。					Ⅱ6 b 4	244
1719	ⅦC 4 g	再堆積層下位	隆帯左上方向からの指頭状圧痕。隆帯上沈線 (凹線)。	L 網目状燃糸文。					Ⅱ6 b 4	244
1720	ⅦD 1 a	Ⅱ層	隆帯上指頭状圧痕施文後沈線 (凹線)。	R 網目状燃糸文。					Ⅱ6 b 4	244
1721	ⅦC 9 e	I層	隆帯上棒状工具 (竹管?) による刺突。	L 縦。縦位綾絡文。					Ⅱ6 b 4	244
1722	ⅦD 0 c	黄褐色土	隆帯上棒状工具 (竹管?) 刺突。隆帯上沈線 (凹線)。	L 縦。縦位綾絡文。					Ⅱ6 b 4	244

第367図 遺構外出土遺物 土器(33) 第Ⅱ群 6類



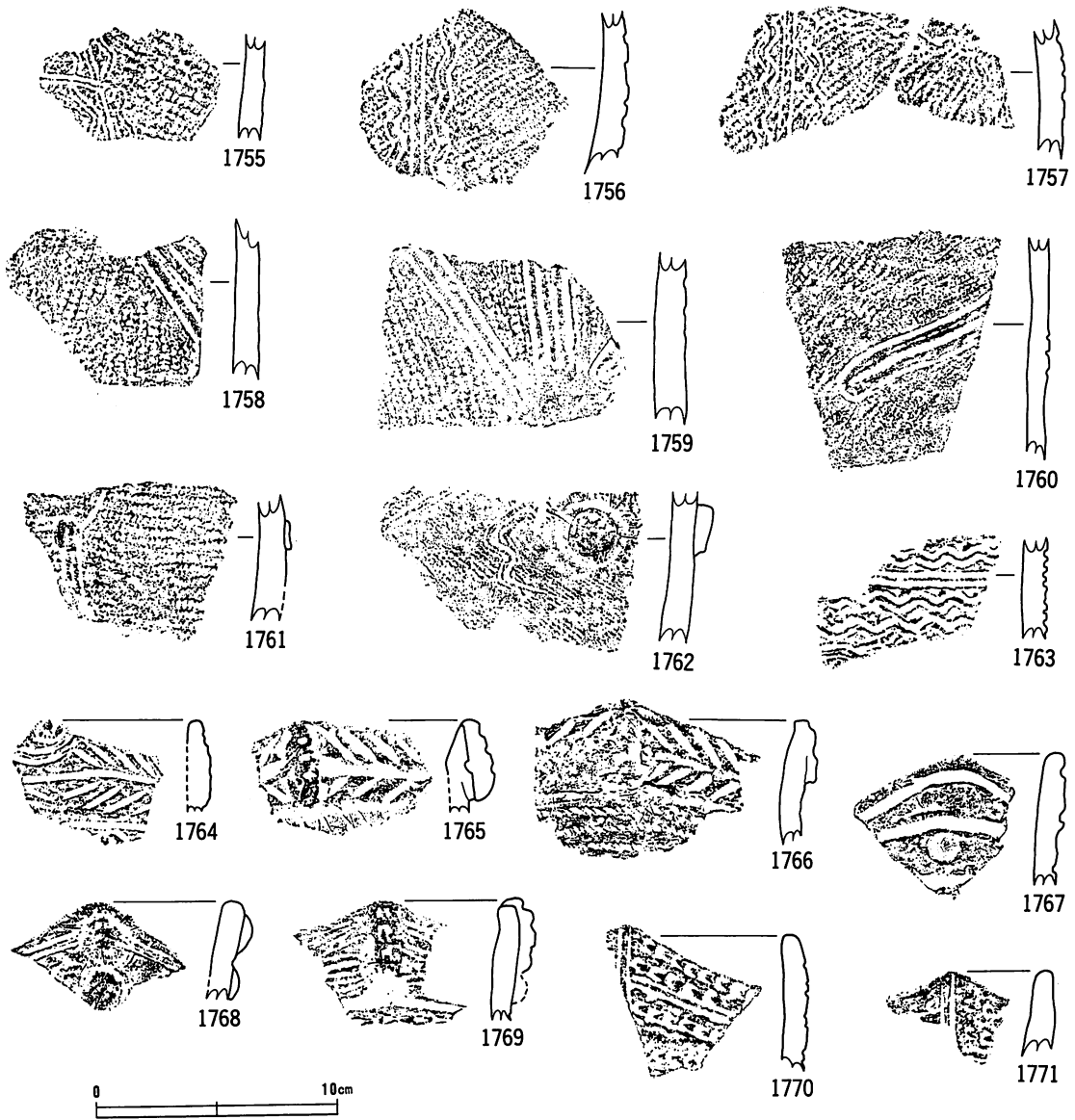
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1723	VII C 5 g	再堆積層	沈線（凹線）。	L網目状襷糸文。					II6bウ	244
1724	VII C 7 f	再堆積層	沈線（凹線）。	L網目状襷糸文。					II6bウ	244
1725	VII D 7 b	II層	沈線（凹線）。	R網目状襷糸文。					II6bウ	244
1726	VII C 区	I層	口唇部沈線、口縁直下沈線、胴部曲線の沈線。（すべて凹線）。	L網目状襷糸文。					II6bウ	244
1727	VI C 0 i	I層	波状口縁。沈線（凹線）。	L R縦。縦位綾絡文。					II6bウ	244
1728	VII C 6 h	再堆積層	波状口縁。沈線（凹線）。	R木目状襷糸文。					II6bウ	244
1729	VII D 0 c	黄褐色土	花卉状口縁（爪跡顕著）。						II6bエ	244
1730	VII C 5 j	I層	花卉状口縁（口唇部に近い位置）。						II6bエ	244
1731	VII C 6 e	再堆積層	花卉状口縁。半截竹管平行沈線。					前後波状は小刻み。	II6bエ	244
1732	VII C 6 h	再堆積層	花卉状口縁。爪痕顕著。	L R縦。				前後波状は小刻み。	II6bエ	244
1733	VIII D 1 a	II層	花卉状口縁。	L R縦。第1種結束。				内面指頭明瞭。口唇部平坦	II6bエ	244
1734	VIII E 0 b	I層	花卉状口縁（内面爪跡顕著）。	L R横。横位綾絡文。				口唇部指頭状圧痕風。	II6bエ	244
1735	IX E 2 d	I層	花卉状口縁。						II6bエ	245
1736	VII D 0 j	黑色土	花卉状口縁。	L R横。横位綾絡文。				口唇部丸み。	II6bエ	245
1737	VII C 3 e	I層	花卉状口縁。	縦位綾絡文。				口唇部平坦。	II6bエ	245
1738	VIII D 1 a	II層	花卉状口縁。	L襷糸文。				口唇部丸み。	II6bエ	245

第368図 遺構外出土遺物 土器(34) 第II群6類



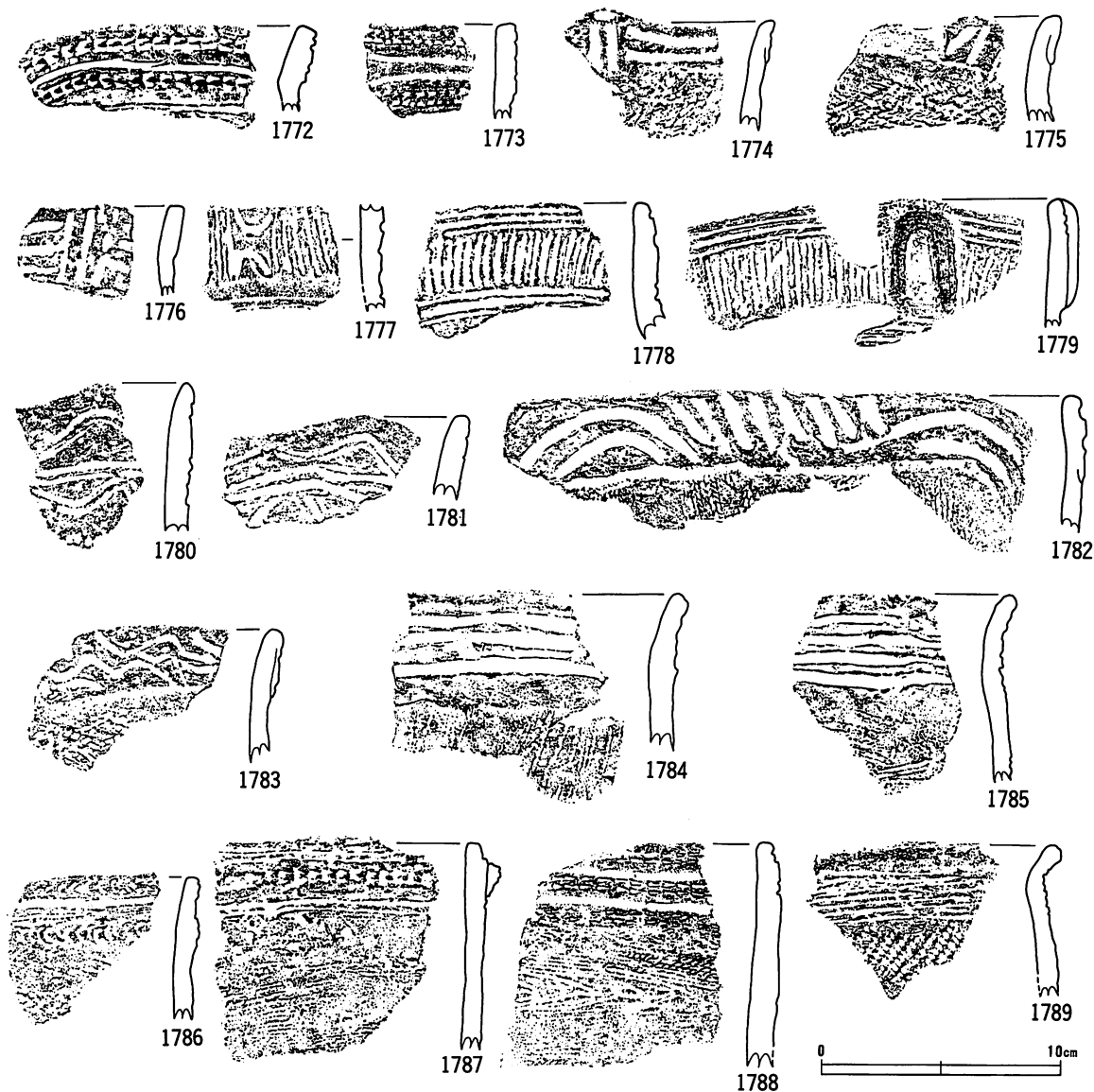
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1739	ⅧD 2 e	再堆積層	花卉状口縁。	R 燃糸文。				口唇部丸み。	Ⅱ6 b ㊦	245
1740	ⅧD 3 e	再堆積層	花卉状口縁。	R 網目状燃糸文。				前後波状は小刻み。	Ⅱ6 b ㊦	245
1741	ⅦE 5 b	I 層	花卉状口縁。	R 網目状燃糸文。					Ⅱ6 b ㊦	245
1742	ⅧC 3 c	再堆積層	花卉状口縁。	R 網目状燃糸文。					Ⅱ6 b ㊦	245
1743	ⅧC 8 d	再堆積層	花卉状口縁。						Ⅱ6 b ㊦	245
1744	ⅧD 0 a	褐色土	花卉状口縁。(外面右方向からの指頭状圧痕顯著)。						Ⅱ6 b ㊦	245
1745	ⅧD 9 f	I 層	口唇部左方向からの指頭状圧痕。	縹卷縄文(Lに1)					Ⅱ6 b ㊦	245
1746	ⅧD 9 f	I 層	口唇部右方向からの指頭状圧痕。	縹卷縄文(Lに1)					Ⅱ6 b ㊦	245
1747	ⅨD 4 j	Ⅱ層	口唇部指頭状圧痕。	R 網目状燃糸文。					Ⅱ6 b ㊦	245
1748	ⅧD 6 f	検出面	口唇部内側棒状工具による刻み。	L 網目状燃糸文。					Ⅱ6 b ㊦	245
1749	ⅧD 9 j.	I 層	口唇部指頭状圧痕(部分的)。	R 網目状燃糸文。				2単位になるものか?	Ⅱ6 b ㊦	245
1750	ⅧD 6 g	Ⅱ層	口唇部指頭状圧痕(部分的)。口縁直下指頭状圧痕(部分的)。	R 網目状燃糸文。				2単位になるものか?	Ⅱ6 b ㊦	245
1751	ⅧC 9 e	I 層		R 網目状燃糸文。				粗砂含む。	Ⅱ6 b ㊦	245
1752	ⅧD 5 f	I 層		L 燃糸文。				輪痕明瞭。	Ⅱ6 b ㊦	245
1753	ⅧC 4 f	褐色土		縹卷縄文(Lに1)					Ⅱ6 b ㊦	245
1754	ⅧC 4 f	褐色土		縹卷縄文(Lに1)					Ⅱ6 b ㊦	245

第369図 遺構外出土遺物 土器(35) 第Ⅱ群6類



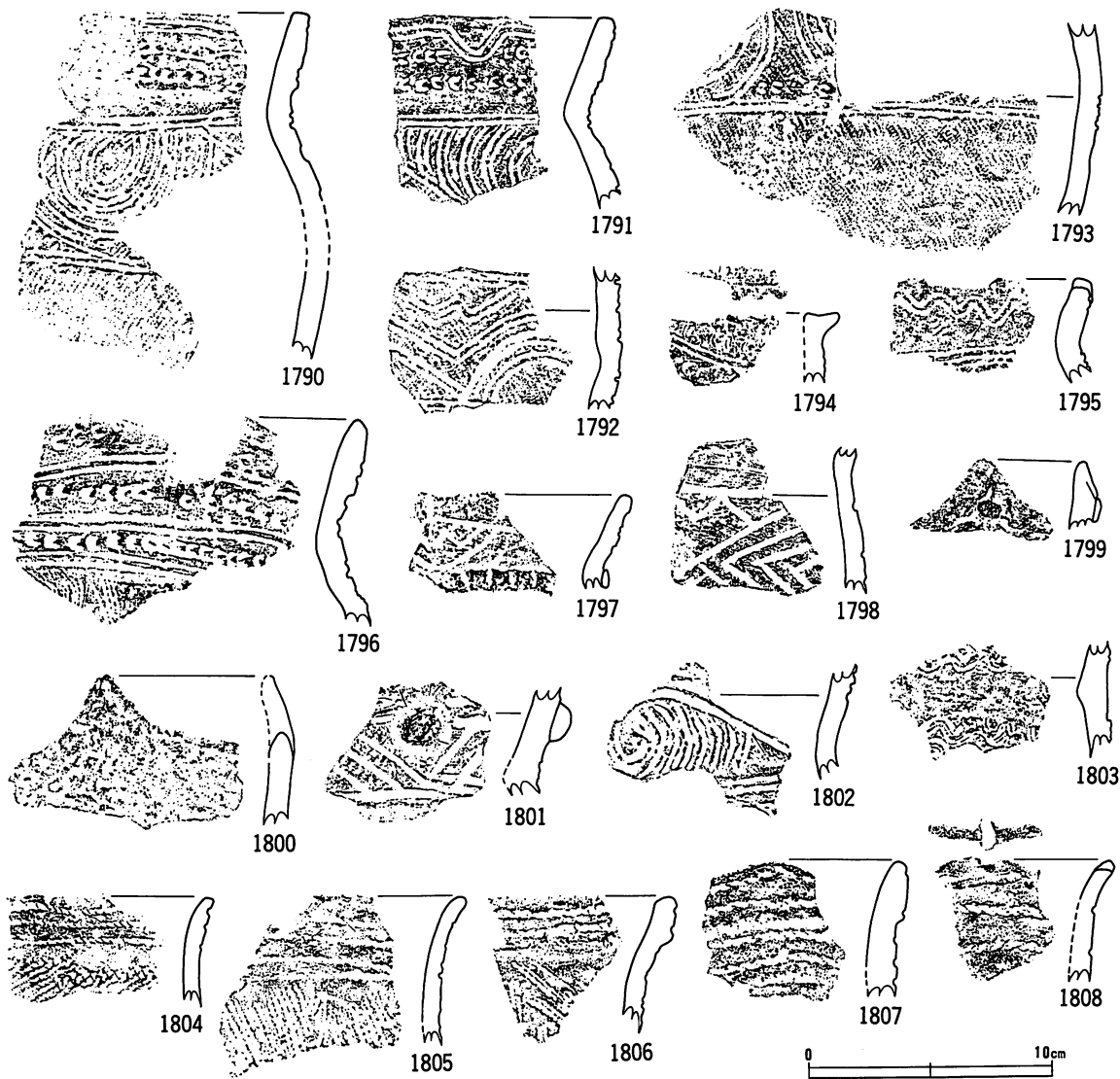
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1755	VII D 3 h	I層	半截竹管平行沈線。	L R縦。					II 7 a	245
1756	VII C 7 f	再堆積層	半截竹管平行沈線。	L R横。					II 7 a	245
1757	VII C 5 f	再堆積層	半截竹管平行沈線。	L R横。					II 7 a	245
1758	VIII C 2 j	再堆積層	半截竹管平行沈線。						II 7 a	245
1759	VIII C 2 i	整地層	半截竹管平行沈線。	L R横。					II 7 a	246
1760	VIII C 1 g	II層	半截竹管平行沈線。	L R横。					II 7 a	246
1761	VII C 5 h	再堆積層	半截竹管平行沈線。ボタン状貼付け。	L R横。					II 7 a	246
1762	No20トレンチ	盛土	ボタン状突起。半截竹管平行沈線。	R L横。					II 7 a	246
1763	VII C 7 f	I層	沈線（凹線）。						II 7 a	246
1764	VII C区	再堆積層	波状口縁。沈線（凹線）。						II 7 a	246
1765	VII C区	再堆積層	複合口縁。垂下する陸帯上棒状工具による刻み。沈線（凹線）。						II 7 a	246
1766	VII C 4 g	再堆積層	波状口縁。複合口縁。棒状工目による沈線（凹線）。L側面圧痕。						II 7 a	246
1767	VII D 2 a	I層	波状口縁。沈線（凹線）。凹文。						II 7 a	246
1768	VII D 3 f	再堆積層	波状口縁。ボタン状貼付け。沈線（先端鋭利）。						II 7 a	246
1769	VII C 8 h	再堆積層下位	波状口縁。頂部から垂下する陸帯上半截竹管刺突。半截竹管平行沈線。						II 7 a	246
1770	VII C 5 f	再堆積層	波状口縁。半截竹管平行沈線。半截竹管刺突。						II 7 a	246
1771	VII D 3 h	I層	波状口縁。頂部から垂下する沈線。半截竹管刺突。						II 7 a	246

第370図 遺構外出土遺物 土器(36) 第II群7類



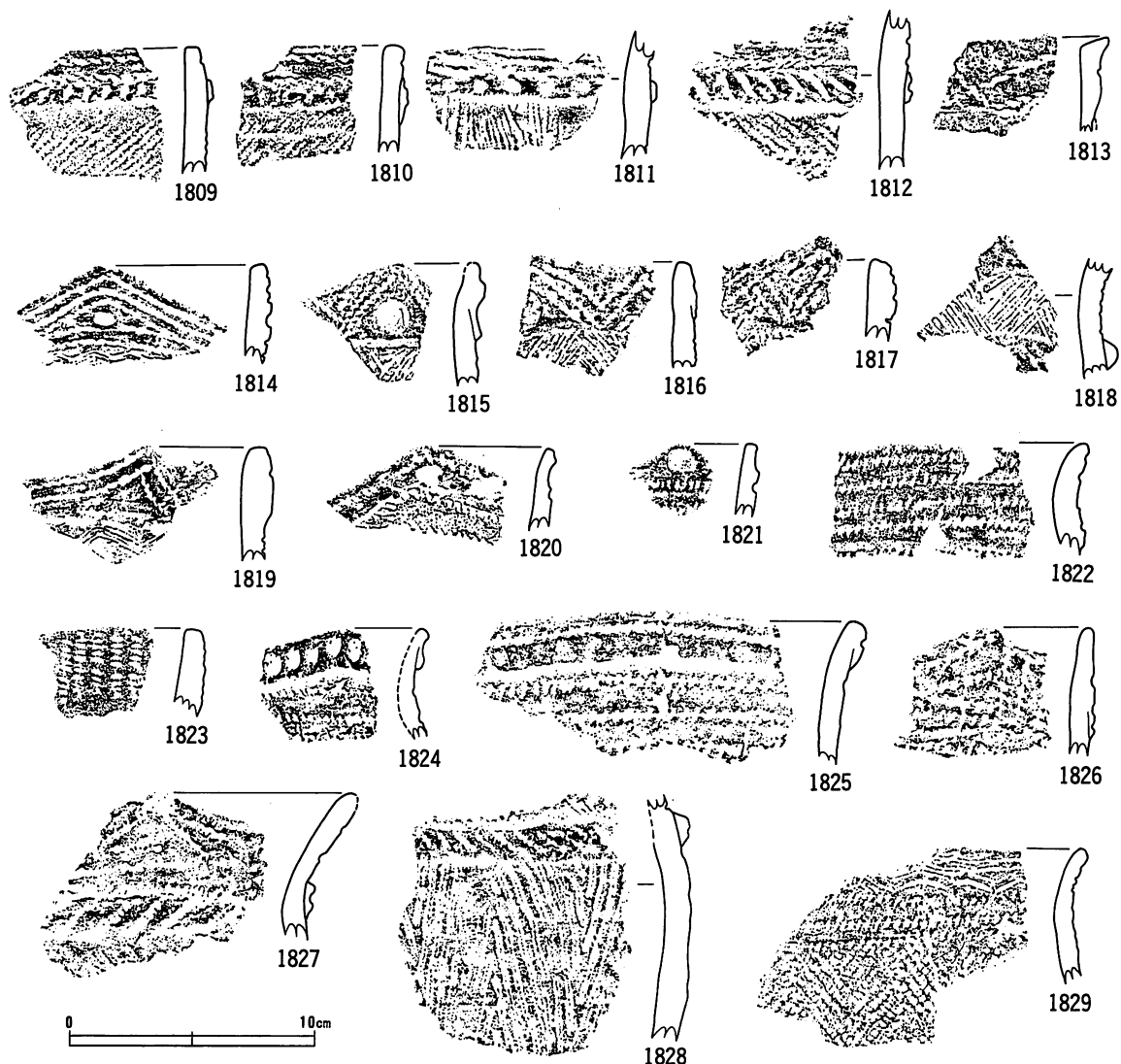
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1772	VII D 7 d	II層	沈線 (凹線)。半截竹管刺突。						II 7 a	246
1773	VII D 3 f	II層	半截竹管押し引き。沈線 (凹線)。						II 7 a	246
1774	VII D 3 h	検出面	複合口縁。波状口縁。篋状工具による沈線。	R R L ?					II 7 a	246
1775	VII C 7 f	再堆積層	複合口縁。沈線 (凹線)。重層する横位綾絡文。	R L 横。横位綾絡文。					II 7 a	246
1776	VII D 2 e	再堆積層	沈線 (凹線)。						II 7 a	246
1777	VII D 5 f	再堆積層	沈線 (凹線)。短沈線は篋状工具。						II 7 a	246
1778	VII D 2 g	I層	沈線。						II 7 a	246
1779	VII C 6 h	I層	粘土紐貼付けによる逆U字。沈線。						II 7 a	246
1780	VII C 1 f	I層	波状口縁。棒状工具による沈線。						II 7 a	246
1781	VII C 4 g	再堆積層	波状口縁。半截竹管平行沈線。						II 7 a	246
1782	VII C 4 g	再堆積層	複合口縁。沈線 (凹線)。	L + R の燃糸文。					II 7 a	246
1783	VII C 2 e	再堆積層	複合口縁。棒状工具による沈線。	L L R ?					II 7 a	246
1784	VII D 6 d	再堆積層	沈線 (凹線)。	R 燃糸文。					II 7 a	246
1785	VII D 6 f	II層	沈線 (凹線)。	L + R の燃糸文 (横回転)。					II 7 a	246
1786	VII D 3 e	再堆積層	口縁と微隆帯上半截竹管刺突。半截竹管平行沈線。	第1種結束羽状縄文。					II 7 a	246
1787	VII C 6 g	再堆積層	半截竹管平行沈線。隆帯上半截竹管刺突。	横位燃糸文。					II 7 a	246
1788	VII D 4 f	再堆積層	半截竹管刺突。沈線 (凹線)。	R 木目状燃糸文 (横)。					II 7 a	247
1789	VII C 7 f	再堆積層	半截竹管平行沈線。	L R 横。					II 7 a	247

第371図 遺構外出土遺物 土器(37) 第II群7類



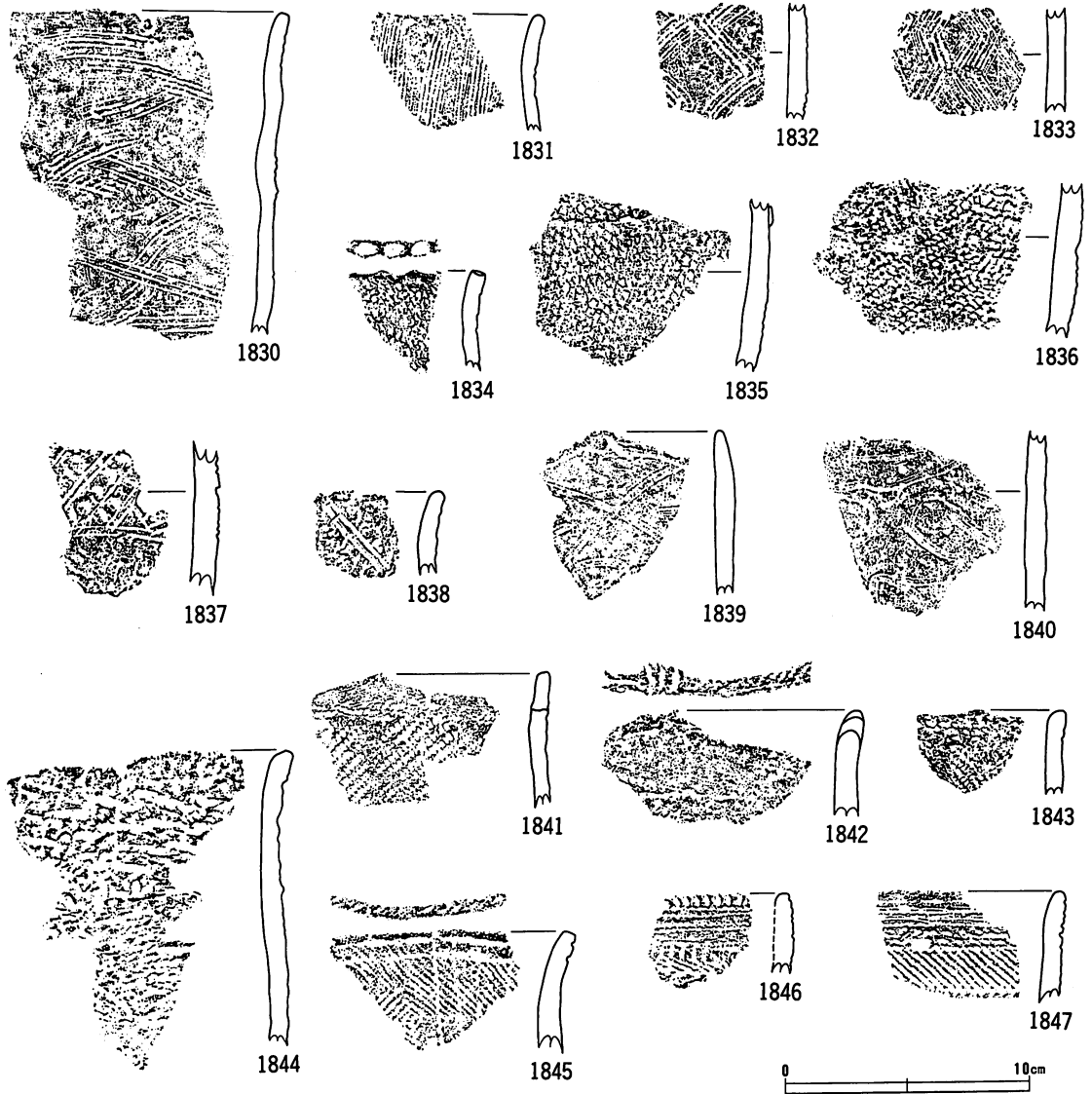
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1790	ⅦC 5 g	再堆積層	半截竹管平行沈線。半截竹管刺突。	L R横。					Ⅱ7b	247
1791	ⅦC 5 g	再堆積層	半截竹管平行沈線。半截竹管刺突。						Ⅱ7b	247
1792	ⅦC 4 h	I層	半截竹管平行沈線。半截竹管刺突。						Ⅱ7b	247
1793	ⅦD 2 g	I層	半截竹管平行沈線。半截竹管刺突。						Ⅱ7b	247
1794	ⅦC区	再堆積層	口唇部内側刻み(棒状工具?)。半截竹管平行沈線。半截竹管?爪彩文。						Ⅱ7b	247
1795	ⅦC区	再堆積層	半截竹管平行沈線。口唇部に細い粘土紐を縦位に貼付け。						Ⅱ7b	247
1796	ⅦC 5 f	再堆積層	半截竹管平行沈線。半截竹管刺突。	L木目状捺糸文。					Ⅱ7b	247
1797	ⅦD 1 b	斜面トレンチ	波状口縁。沈線。陸帯上爪による刻み。						Ⅱ7b	247
1798	ⅦC 0 f	再堆積層上位	沈線。陸帯剥落。						Ⅱ7b	247
1799	ⅦC 6 h	再堆積層	波状口縁。複合口縁。頂部下にボタン状突起貼付け。						Ⅱ7b	247
1800	ⅦD 6 h	Ⅱ層	変形花卉状口縁。						Ⅱ7b	247
1801	ⅦD 1 g	I層	沈線(凹線)。ボタン状突起	L R横。					Ⅱ7b	247
1802	ⅦC区	再堆積層	先端が鋭利な工具による短沈線。棒状工具による沈線。						Ⅱ7b	247
1803	ⅦD 6 c	斜面トレンチ	半截竹管平行沈線。内面に稜を有する。						Ⅱ7b	247
1804	ⅦC 5 g	再堆積層	L R側面圧痕。	L R × R L第1種結束羽状縄文。					Ⅱ8a7	247
1805	ⅦD 2 e	再堆積層	L R側面圧痕。	L + Rの木目状捺糸文。				繊維わずかに混入	Ⅱ8a7	247
1806	ⅦC 3 j	I層	複合口縁。L R側面圧痕。	R 2条木目状捺糸文。					Ⅱ8a7	247
1807	ⅦC 3 f	再堆積層	波状口縁。複合口縁。L R側面圧痕。						Ⅱ8a7	247
1808	ⅦC 4 h	再堆積層	波状口縁。頂部棒状工具による圧痕。L R側面圧痕。						Ⅱ8a7	247

第372図 遺構外出土遺物 土器(30) 第Ⅱ群7～8類



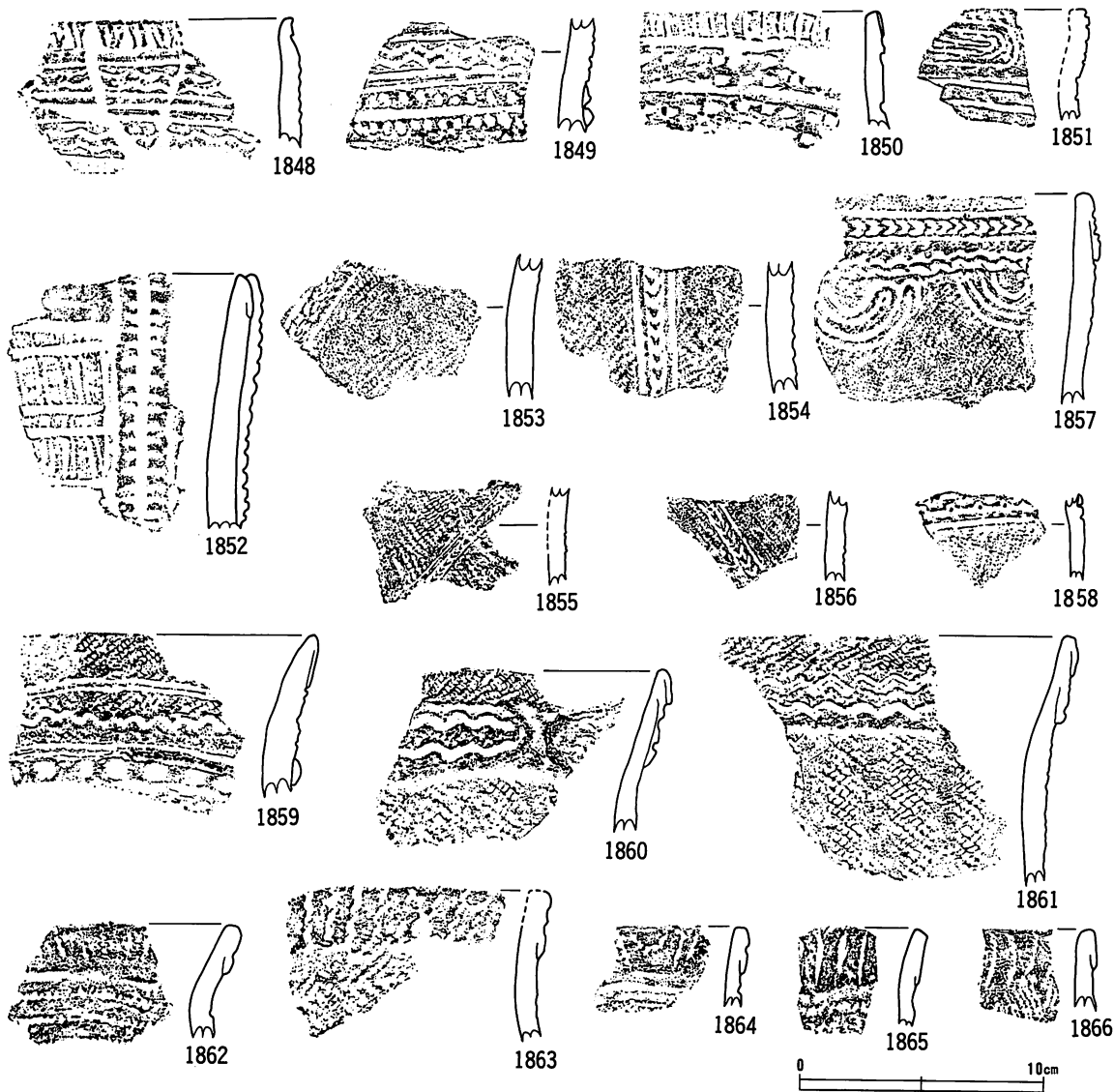
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1809	VII D 1 g	I層	L R側面圧痕。隆帯上繩圧痕。	L R横。					Ⅱ8a 7	247
1810	VII D 2 e	再堆積層	隆帯上繩側面圧痕。口縁部L R側面圧痕。	L R横。					Ⅱ8a 7	247
1811	VII C 6 f	再堆積層	L R側面圧痕。隆帯上(繩端?)圧痕。						Ⅱ8a 7	247
1812	VII D 2 e	再堆積層	隆帯上棒状工具による刻み。口縁部R側面圧痕。沈線。						Ⅱ8a 7	247
1813	VII D 3 f	II層	L R側面圧痕。						Ⅱ8a 4	247
1814	VII C 5 h	褐色土	波状口縁。頂部下凹文。複合口縁。口縁部L R側面圧痕。半截竹管平行沈線。						Ⅱ8a 4	247
1815	VII D 4 f	再堆積層	複合口縁。波状口縁。L R側面圧痕。短沈線。凹文。					1816、1818と同一個体	Ⅱ8a 4	247
1816	VII D 4 g	再堆積層	複合口縁。波状口縁。L R側面圧痕。短沈線。					1815、1818と同一個体	Ⅱ8a 4	247
1817	VII D 4 f	再堆積層	波状口縁。複合口縁。L側面圧痕。鋸状工具による沈線。						Ⅱ8a 4	247
1818	VII D 3 h	検出面	鋸状工具による沈線。隆帯上L R側面圧痕。					1815、1816と同一個体	Ⅱ8a 4	247
1819	VII D 0 c	褐色土	波状口縁(頂部2山)。複合口縁。口縁部L R側面圧痕。半截竹管平行沈線。						Ⅱ8a 4	247
1820	VII C 5 h	II層	波状口縁。複合口縁。単軸絡条体圧痕。						Ⅱ8b	247
1821	VII D 0ライン	I層	波状口縁。頂部下凹文。L R単軸絡条体圧痕。						Ⅱ8b	248
1822	VII D 1 g	I層	L R単軸絡条体圧痕。						Ⅱ8b	248
1823	VII C 0 f	再堆積層下位	R L絡条体圧痕。						Ⅱ8b	248
1824	VII E 0 b	I層	複合口縁。爪による圧痕。単軸絡条体圧痕。						Ⅱ8b	248
1825	VII D 7 e	II層	複合口縁。	絡条体圧痕。					Ⅱ8b	248
1826	VII C 3 h	再堆積層	波状口縁。R L単軸絡条体圧痕。						Ⅱ8b	248
1827	VII D 3 c	I層	波状口縁。隆帯。R L単軸絡条体圧痕。	L + Rの燃糸文。				粗砂含む。	Ⅱ8b	248
1828	VII D 6 g	II層	隆帯上L側面圧痕。口縁部沈線。	L + Rの木目状燃糸文。					Ⅱ8b	248
1829	VII D 0 h	I層	半截竹管平行沈線。絡条体圧痕。	L R × R L第1種結束羽状組文。					Ⅱ8b	248

第373図 遺構外出土遺物 土器(39) 第II群 8類



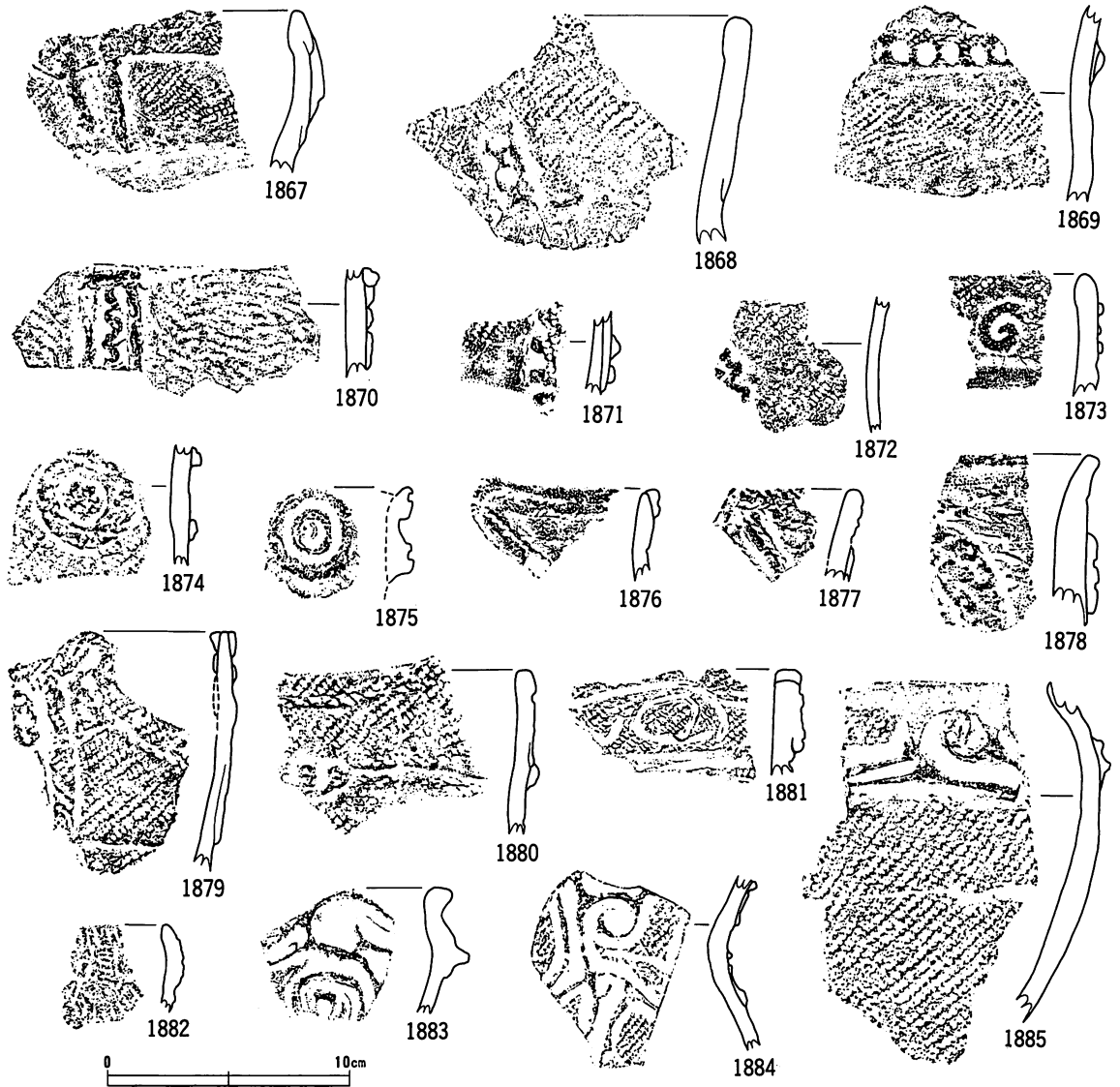
No	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1830	VII C 4 e	削平部	櫛歯状沈線文。						II 9 a	248
1831	VII C 6 f	再堆積層	櫛歯状沈線文。						II 9 a	248
1832	不明		櫛歯状沈線文。						II 9 a	248
1833	VII C 6 h	再堆積層	櫛歯状沈線文。						II 9 a	248
1834	IX D 3 h	II層	口唇部指頭状圧痕。	オオバコ花軸?				原体詳細不明。	II 9 a	248
1835	IX D 5 e	II層		オオバコ花軸?				原体詳細不明。	II 9 a	248
1836	VII C 1 f	I層		オオバコ花軸?				原体詳細不明。	II 9 a	248
1837	VII D 7 i	再堆積層	半截竹管平行沈線。半截竹管? 爪形文。						II 9 b	248
1838	VII C 3 e	I層	半截竹管平行沈線。						II 9 b	248
1839	VII C 7 f	再堆積層	波状口縁。口唇部彫状工具による刻み。半截(多截)竹管平行沈線。						II 9 b	248
1840	VII C 2 f	再堆積層	半截竹管平行沈線(多截竹管)。						II 9 b	248
1841	IX E 3 a	I層	波状口縁。横位綾絡文。	L R 縦。					II 9 c	248
1842	VII C 6 f	再堆積層	山形状突起。頂部と口唇部に原体圧痕。						II 9 c	248
1843	VII C 1 i	I層	山形状突起。棒状工具による右方向からの刺突。	L R 縦。					II 9 c	248
1844	VII E 8 b	黑色土	重層する横位綾絡文。	R 燃糸文?				繊維混入。	II 9 d	248
1845	VII C 7 f	I層	L R 側面圧痕。	L R × R L 第1種結束羽状縄文。					II 9 d	248
1846	不明		口唇部刻み。L側面圧痕。口縁部文様帯下彫状工具による刻み。	無節第1種結束羽状縄文。				繊維混入。	II 9 d	248
1847	VII C 7 f	再堆積層	R側面圧痕。沈線。右方向からの棒状工具による刺突。R L側面圧痕。	R × L 第1種結束羽状縄文。				繊維混入。	II 9 d	248

第374図 遺構外出土遺物 土器(40) 第II群9類



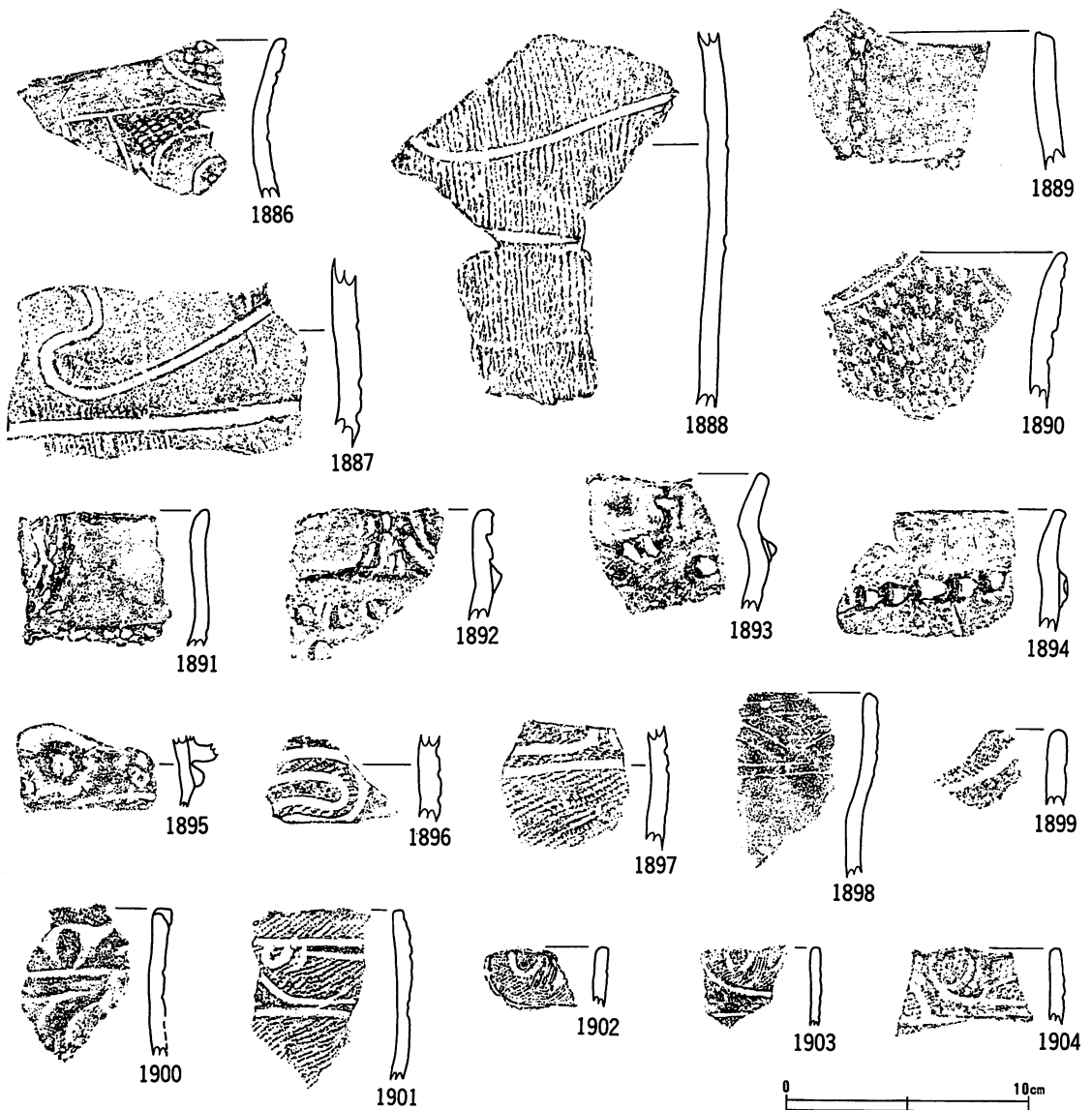
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1848	ⅦD 8 i	I 層	三角形浮文。半截竹管平行沈線。						Ⅲ 1 a	249
1849	ⅦD 0 d	I 層	隆帯上棒状工具による刻み。半截竹管平行鋸齒状沈線。						Ⅲ 1 a	249
1850	ⅦC 4 g	再堆積層	寛状工具による縦位沈線。棒状工具による横位沈線(凹線)。棒状工具による刺突。						Ⅲ 1 a	249
1851	ⅦC 区	再堆積層	口唇端棒状工具による刻み。先端が鋭利な棒状工具による沈線。沈線(凹線)。						Ⅲ 1 a	249
1852	ⅦD 0 b	再堆積層	縦位隆帯上に凹線。縦位沈線施文後に凹線。						Ⅲ 1 a	249
1853	ⅦC 8 j	I 層	半截竹管の先端外側を斜位に削り落とした工具による刺突。沈線(凹線)。	L R 横。					Ⅲ 1 a	249
1854	ⅦC 8 h	再堆積層下位	半截竹管の先端側を外斜位に削り落とした工具による刺突。沈線(凹線)。	L R 横。					Ⅲ 1 a	249
1855	ⅩB トレンチ	盛土	半截竹管の先端部を加工した工具による連続刺突。沈線。	L R。					Ⅲ 1 a	249
1856	ⅩC 7 b	I 層	半截竹管の先端部を加工した工具による連続刺突。施文後沈線。	L R。					Ⅲ 1 a	249
1857	ⅦC 9 i	再堆積層	複合口縁。口縁部に半截竹管の外側を斜位に削って押し引き。凹線。コンパス文。	L R 横。					Ⅲ 1 a	249
1858	ⅦC 6 f	再堆積層	沈線。竹管交互刺突。	L R 横。					Ⅲ 1 a	249
1859	ⅦC 9 i	再堆積層	複合口縁。半截竹管平行沈線。棒状工具による波状沈線。隆帯上指頭状圧痕。	L R 横。					Ⅲ 1 b	249
1860	ⅦC 6 f	再堆積層	複合口縁。波状沈線(凹線)。縦位弧状微隆帯。	L R 横。					Ⅲ 1 b	249
1861	ⅦC 6' f	再堆積層	複合口縁。波状沈線。(半截竹管?)	L R 横。					Ⅲ 1 b	249
1862	ⅦD 13 e.	再堆積層	複合口縁。R 単軸絡条体圧痕。						Ⅲ 1 b	249
1863	ⅦC 6 j	再堆積層	複合口縁。口縁部 L R 側面圧痕(縦位)。	L R × R L 第 1 種結束羽状綴文。					Ⅲ 1 b	249
1864	ⅦC 6 i	再堆積層下位	複合口縁。L 側面圧痕。沈線(凹線)。						Ⅲ 1 b	249
1865	ⅦD 1 e	再堆積層	複合口縁。筥状工具による沈線。単軸絡条体? 圧痕(R L)。						Ⅲ 1 b	249
1866	ⅦC 3 h	再堆積層	口縁部外側にやや肥厚。R (R L?) 原形圧痕。	L + R の木目状燃糸文。					Ⅲ 1 b	249

第375図 遺構外出土遺物 土器(41) 第Ⅲ群 1類



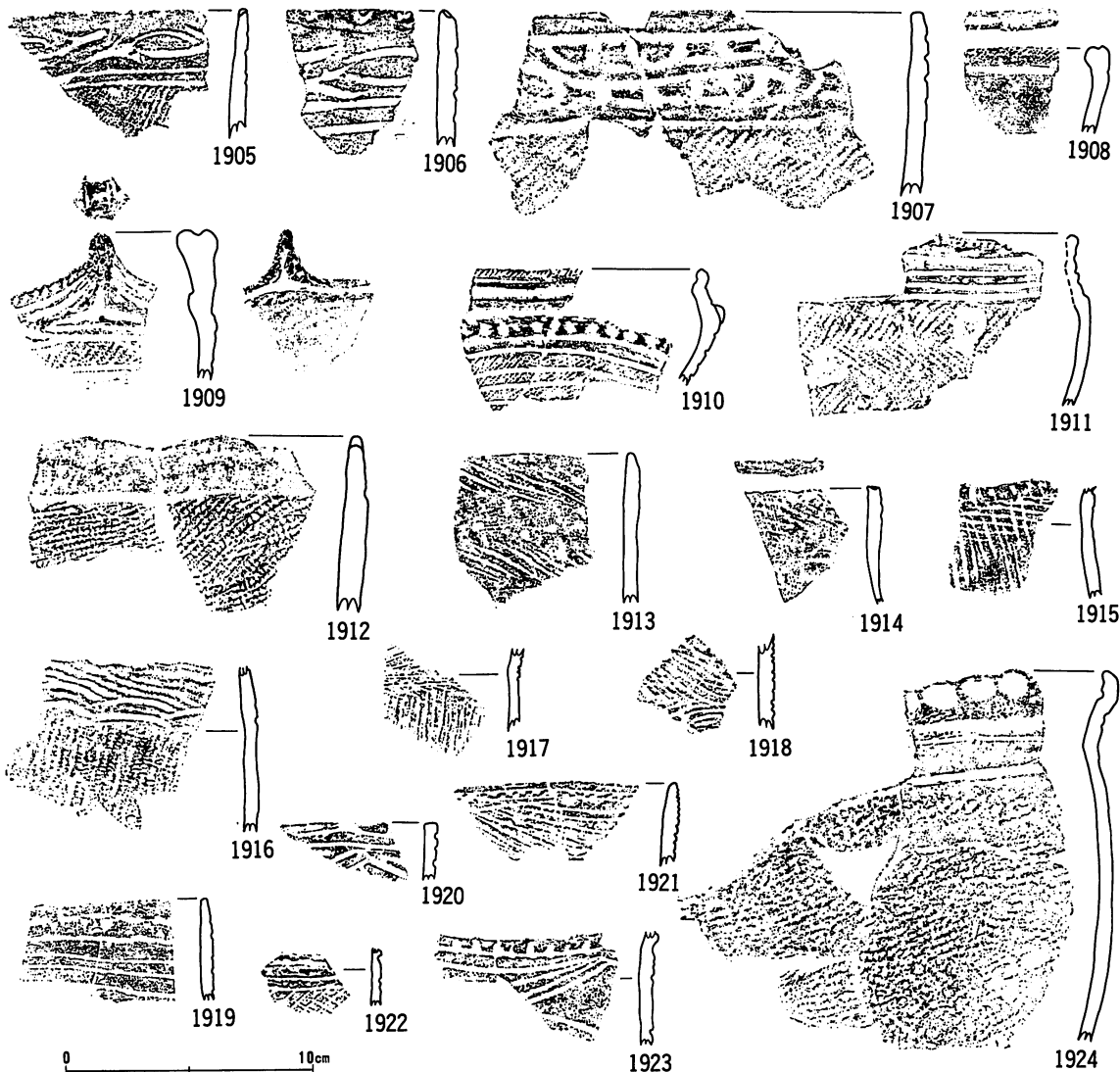
番号	Ⅷ出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1867	ⅧC 6 g	再堆積層下位	複合口縁。垂下隆帯。	L R横。				1506と同一個体。	Ⅲ1 b	249
1868	ⅧC 5 e	I層	隆帯上指頭状圧痕。複合口縁。	L R横。					Ⅲ1 c	249
1869	ⅧC 5 g	再堆積層	隆帯上指頭状圧痕。	L R横。					Ⅲ1 c	249
1870	ⅧC 6 f	再堆積層	細い粘土紐による方形区画隆帯、垂下波状隆帯。	L R横。					Ⅲ1 c	249
1871	ⅧC 7 h	II層	垂下波状隆帯上縄文施文。	L R横。					Ⅲ1 c	250
1872	ⅧC 8 h	I層	隆帯(粘土紐鋸歯状)	L R横。					Ⅲ1 c	250
1873	ⅧC 6 i	I層	複合口縁。隆帯(粘土紐による渦巻き)	L R横。					Ⅲ1 c	250
1874	No26トレンチ	盛土	隆帯による円文。隆帯上にも縄文施文。	L R横。					Ⅲ1 c	250
1875	ⅧC 2 f	再堆積層	円状裝飾体。沈線(凹線)。						Ⅲ1 c	250
1876	ⅧD 1 g	I層	波状口縁。粘土紐貼付け。R側面圧痕。						Ⅲ1 c	250
1877	ⅧD 3 b	再堆積層	口唇端も縄文圧痕。R側面圧痕。隆帯上R側面圧痕。						Ⅲ1 c	250
1878	ⅧC 0 b	再堆積層	隆帯上L側面圧痕。						Ⅲ1 c	250
1879	ⅧC 7 h	I層	波状口縁。複合口縁。口唇端と内側に粘土紐貼付け。L R側面圧痕。垂下隆帯。	L R横。				1880と同一個体	Ⅲ1 d	250
1880	ⅧC 7 h	I層	波状口縁。複合口縁。L R側面圧痕。2つのボタン状突起貼付け。	L R横。				1879と同一個体	Ⅲ1 d	250
1881	ⅧD 3 g	I層	小突起。沈線。	L R横。					Ⅲ1 d	250
1882	ⅧC 6 b	I層	隆帯上L側面圧痕。						Ⅲ1 d	250
1883	ⅧC 5 g	II層	渦巻き状隆帯。						Ⅲ2	250
1884	ⅧD 9 e	I層	隆帯による渦巻き文。	R L縦。					Ⅲ2	250
1885	ⅧC 7 f	I層	隆帯による渦巻き文。	R L R縦。					Ⅲ2	250

第376図 遺構外出土遺物 土器(42) 第Ⅲ群1～2類



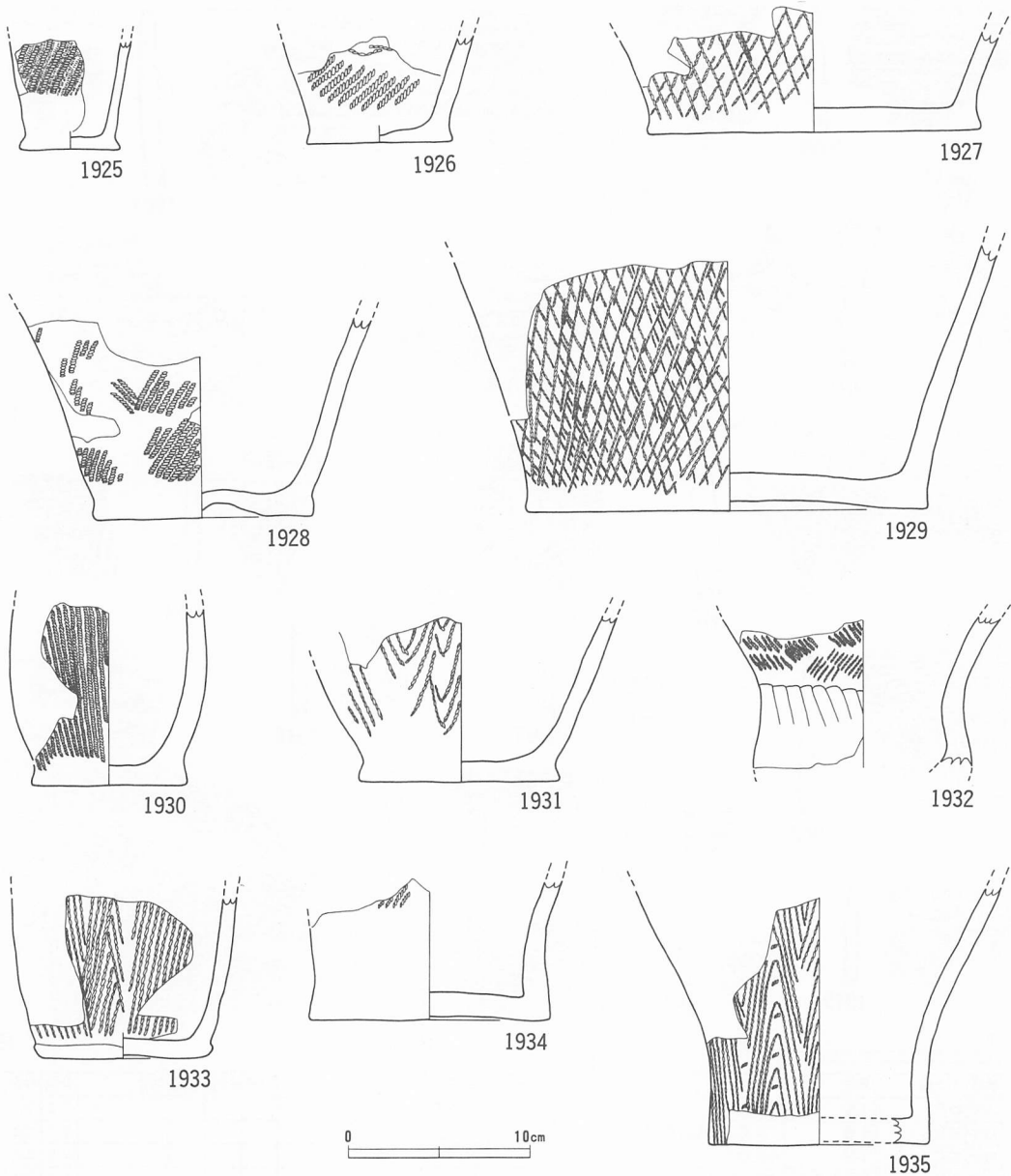
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1886	VD 1 d	I層	沈線（凹線）。竹管刺突。	L R縦。					Ⅲ 3 a	250
1887	VD 1 d	I層	沈線（凹線）。	L 撚糸文。				1888と同一個体。	Ⅲ 3 c	250
1888	VD 2 d	I層	沈線（凹線）。	L 撚糸文。				1887と同一個体。	Ⅲ 3 c	250
1889	XI C 7 f	II層上面	連鎖状浮線文。						Ⅳ 1	250
1890	No.17トレンチ	盛土	波状口縁。竹管刺突。沈線（凹線）。					内面ミガキ顯著。	Ⅳ 3	250
1891	VID 6 h	I層	隆帯。棒状工具による刺突。						Ⅳ 1	250
1892	XI C 5 e	I層	隆帯。爪形文。棒状工具による刺突。						Ⅳ 1	250
1893	VD区	表土	隆帯上棒状工具による刻み。						Ⅳ 1	250
1894	VD 5 f	表土	隆帯上指頭状刻み。						Ⅳ 1	250
1895	XI C 7 g	II層	円文状突起。						Ⅳ 1	251
1896	VD 1 d	No.3トレンチ	沈線（凹線）。	L R横。					Ⅳ 2	251
1897	VD 1 d	No.4トレンチ	沈線（凹線）。	L R横。					Ⅳ 2	251
1898	IX E 3 a	II層	沈線						Ⅳ 2	251
1899	VID 4 g	I層	突起。沈線（凹線）。	R L横。					V 1	251
1900	VID 3 g	I層	沈線（凹線）。三叉状。	R L横。					V 1	251
1901	不明	I層		L R横。					V 1	251
1902	VII C 5 a	再堆積層		L R。					V 1	251
1903	VII C 5 f	I層		L R。					V 1	251
1904	VII C 6 g	再堆積層	磨消縄文。	L R。					V 1	251

第377図 遺構外出土遺物 土器(43) 第Ⅲ群3類～Ⅴ群1類



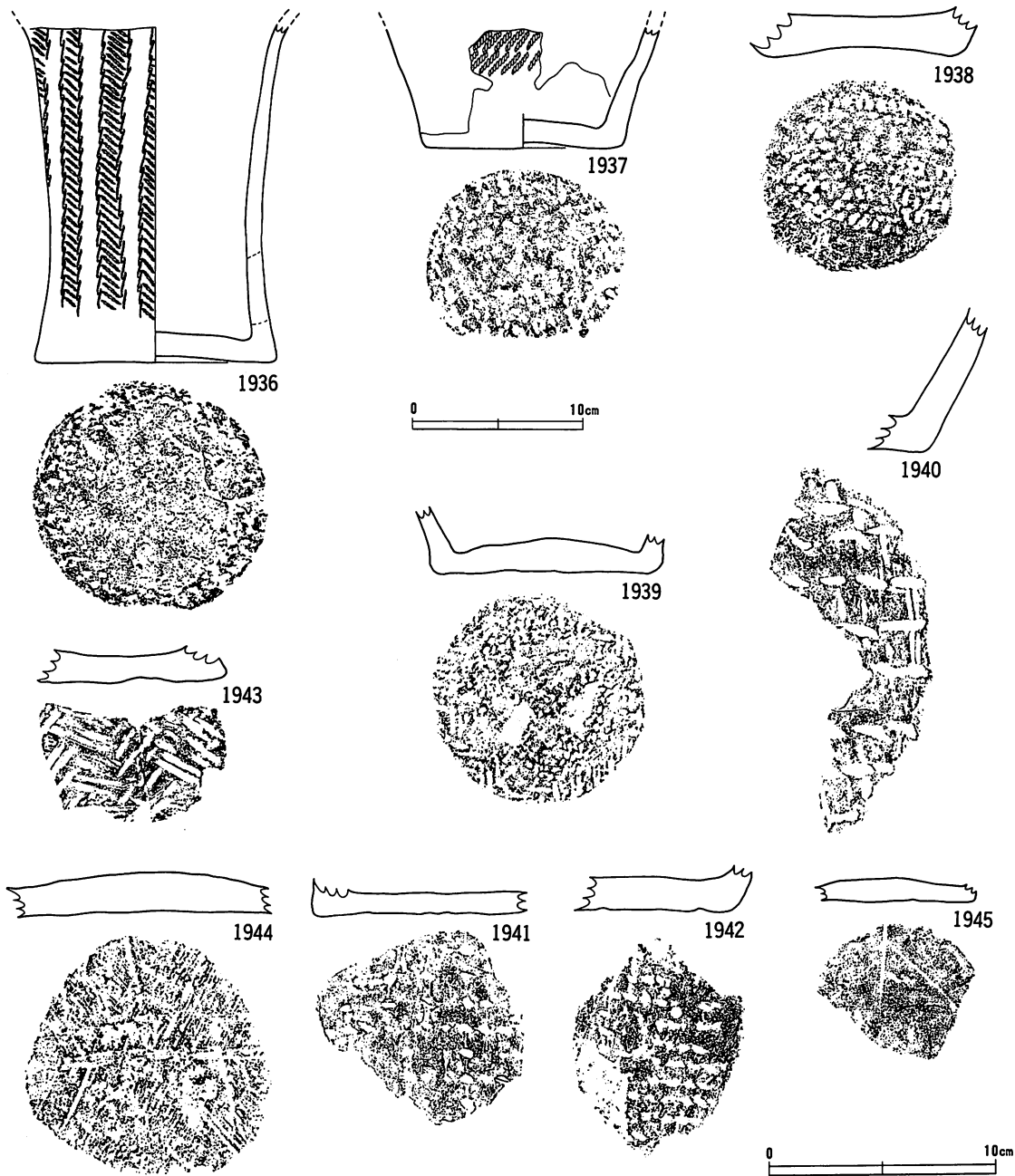
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1905	ⅧD 4 d	I 層	三叉文。	L R 横。					V 2	251
1906	ⅧD 8 i	I 層	三叉文。口唇部半截竹管刺突。						V 2	251
1907	ⅧC 5 j	I 層	羊歯状文。	L R 横。					V 2	251
1908	ⅦE 7 b	黒色土下部	沈線 (凹線)。口唇部にも沈線。	L R 横。					V 3	251
1909	ⅦD 0 i	黒色土	突起。沈線。内側にも沈線。	L R 横。					V 3	251
1910	ⅦD 6 i	黒色土	口唇部篋状工具による刻み。肩部篋状工具刻み。沈線。	L R 横。					V 3	251
1911	ⅦD 6 h	黒色土直上	口唇部篋状工具による刻み。沈線。	L R + R L 非結束羽状縄文。					V 3	251
1912	ⅦC 5 h	I 層	小波状口縁。沈線 (凹線)。口縁部無文。	L R 横。					V 4	251
1913	ⅦD 4 b	表土		L 燃糸文。					Ⅵ	251
1914	XI 区	№37 トレンチ	口唇部も施文。	L 燃糸文。					Ⅵ	251
1915	ⅧE 1 a	黒色土検出面	竹管刺突。	L 燃糸文。					Ⅵ	251
1916	ⅦD 2 g	I 層	孤状短沈線。	L 燃糸文。					Ⅵ	251
1917	ⅦC 区	I 層	沈線。	L 燃糸文。					Ⅵ	251
1918	ⅦD 2 c	Ⅱ層	沈線。						Ⅵ	251
1919	X D 9 f	Ⅱ層	交互刺突文。沈線。						Ⅵ	251
1920	XI C 6 f	Ⅱ層上面	沈線。						Ⅵ	251
1921	ⅦD 2 d	№5 トレンチ	交互刺突。沈線。						Ⅵ	251
1922	ⅧE 9 b	I 層	交互刺突。沈線。	L + R の燃糸文。					Ⅵ	251
1923	№31 トレンチ	盛土	竹管刺突。沈線。						Ⅵ	251
1924	ⅦD 8 i	Ⅱ層	沈線。口縁内側も沈線。	L R。					V 3	251

第378図 遺構外出土遺物 土器(44) 第V群2類～VI群



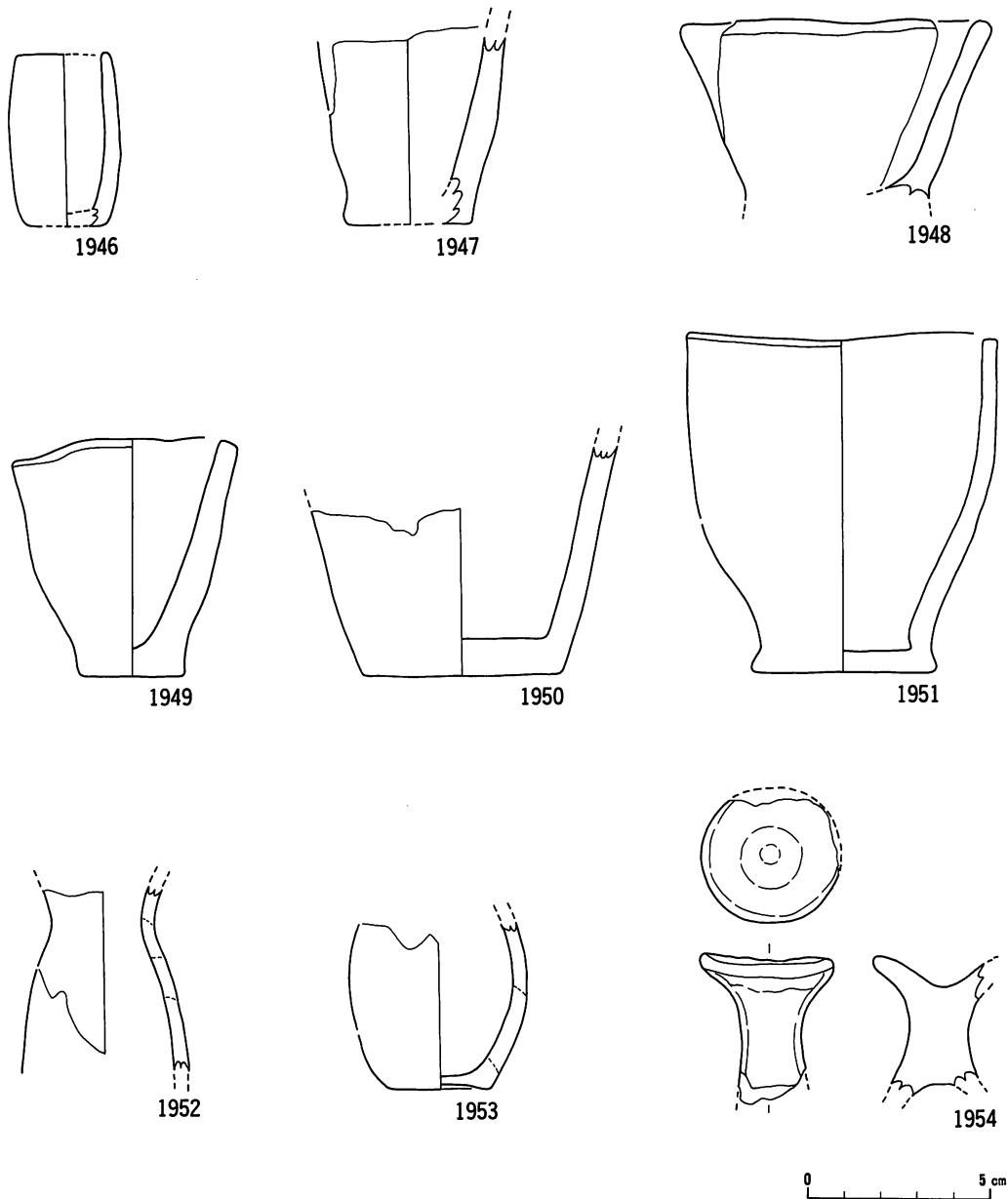
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1925	VII C 5 g	I 層		繩卷繩文	-	5.6	(6.0)			252
1926	VII C 5 h	I 層		L R 横、横位綾結文	-	8.0	(0.9)			252
1927	VII C 3 g	再堆積層		L 網目状燃糸文	-	(18.3)	(6.8)			252
1928	VII D 5 h	I 層		L R × R L 第 1 種結束羽状繩文	-	(12.0)	(12.0)	1399、1628 と同一個体		252
1929	VII C 5 g	再堆積層		L 網目状燃糸文	-	(22.1)	(14.3)			252
1930	VII C 7 g	再堆積層		R 燃糸文	-	(8.5)	(10.0)			252
1931	VII C 7 f	再堆積層		L 木目状燃糸文	-	11.0	9.0	底部網代痕。		252
1932	VII D 3 e	再堆積層		R L 横	-	-	(8.2)	底部付近ケズリ。		252
1933	VII C 8 e	再堆積層		L 燃糸文	-	9.0	(8.9)			252
1934	VII D 8 g	I 層		L R 横	-	13.2	(7.6)			252
1935	VII C 4 g	再堆積層		R 木目状燃糸文	-	(12.2)	(14.0)			252

第379図 遺構外出土遺物 土器(45) 底部資料(1)



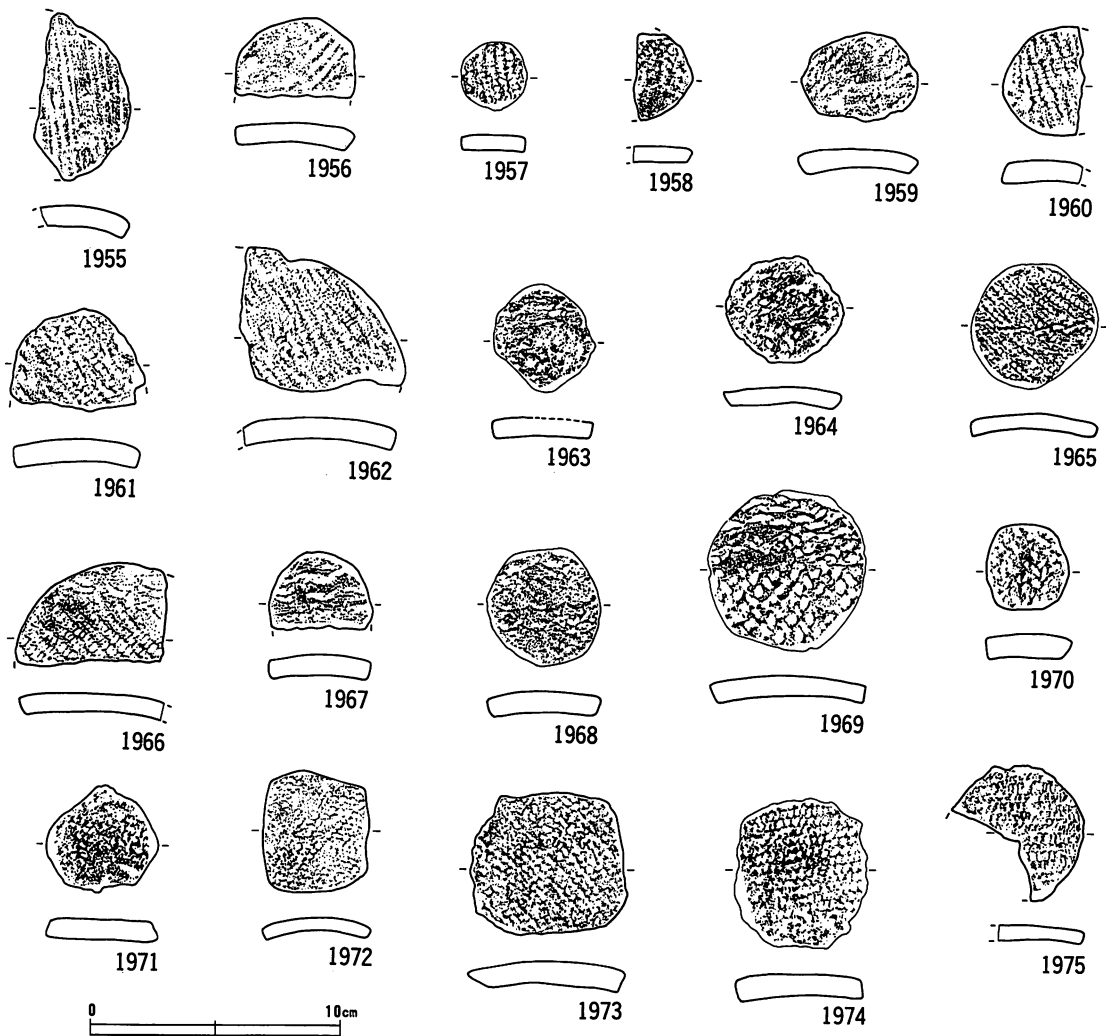
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1936	VIII C 8 b	I層	縦格文間磨消し	L R縦、縦位縦格文、磨消し	-	14.0	(19.7)			252
1937	IV C 6 g	再堆積層下位		L R横	-	11.4	6.9			252
1938	V C 7 h	III層	網代痕。							252
1939	IX D 8 g	II層	網代痕。縄文。							252
1940	VIII C 5 j	整地層下位	網代痕。							252
1941	VII D 4 h	再堆積層	網代痕。							252
1942	VII D 3 f	褐色土	網代痕。							252
1943	VII D 6 f		網代痕。							252
1944	VI D 7 i	黑色土	網代痕。							252
1945	Na17トレンチ	盛土	木葉痕。							252

第380図 遺構外出土遺物 土器(46) 底部資料(2)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1946	IX D 1 f	I 層	無文		(2.7)	(2.2)	4.7			253
1947	VII C 2 i	I 層	無文		-	(3.4)	(5.0)			253
1948	IX D 2 d	I 層	無文		(17.0)	-	(4.8)			253
1949	VII C 4 e	削平部	無文		6.1	2.8	5.5			253
1950	VID 7 d	暗褐色土	無文		-	5.4	(6.2)			253
1951	VII E 5 a a	I 層	無文		(8.5)	5.1	9.2			253
1952	IX D 1 f	I 層	無文		-	-	(5.0)	1953と同一個体		253
1953	IX D 1 f	I 層	無文		-	3.0	(4.5)	1952と同一個体		253
1954	VII C 4 d	再堆積層	無文		-	-	-			253

第381図 遺構外出土遺物 小型土器・土製品(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1955	ⅧC 7 g	I 層下位						纖維混入。		253
1956	ⅧD 4 i	検出面								253
1957	X I C 7 f	II 層上面								253
1958	ⅧC 7 g	I 層下位								253
1959	ⅧD 0 h	I 層								253
1960	ⅧC 3 g	再堆積層下位						纖維混入。		253
1961	ⅧD 0	I 層								253
1962	ⅧD 9 e	検出面								253
1963	ⅧD 3 i	I 層						纖維混入。		253
1964	ⅧC 5 f	再堆積層								253
1965	ⅧD 7 h	I 層								253
1966	ⅧD 7 i	I 層						纖維混入。		253
1967	ⅧD 7 j	黒色土						纖維混入。		253
1968	ⅧD 8 c	I 層						纖維混入。		253
1969	ⅧD 7 a	I 層								253
1970	ⅧD 5 i	検出面								253
1971	ⅧD 5 h	検出面						纖維混入。		253
1972	ⅧD 5 i	検出面								253
1973	ⅧD 6 i	I 層								253
1974	ⅧE 9 a	II 層						纖維混入。		253
1975	ⅧC 0 j	再堆積層上位								253

第382図 遺構外出土遺物 土製品(2)

(2) 石器・石製品

本遺跡で石器・石製品として、遺構内 883点、遺構外2103点、計2986点を登録した。これらの中には、フレクやチップは含まない。

剥片石器については、定形的な石鏃・尖頭器・石錐・石匙・石篋をまず抽出し、次に形態・法量から尖頭器様石器とピエス・エスキューをとりあげた。残った剥片石器群から、刃部形状・二次加工状況によって不定形石器としてI群からVII群を設けた。以上の抽出の結果残ったものを、二次加工のある剥片（リタッチドフレク。Rフレと略称する。）、および微小剥離が連続していることから使用したと考えられる剥片（ユーティライズドフレク。Uフレと略称する。）とした。

石核石器・礫石器については形状・使用痕・加工痕から、磨製石斧・打製石斧・敲磨器類・石皿台石類・砥石・礫器・石核という器種名を設けて分類した。

石製品については、耳飾・円盤状石製品・石刀石剣・石棒・有孔石の5種類に分類した。

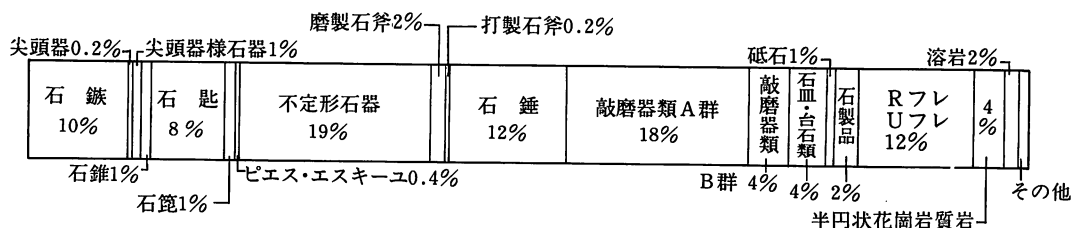
以上の他に、加工痕が判然としないものの半円形を呈する花崗閃緑岩（半円状花崗岩質岩と仮称する）、本遺跡の地層には存在しない溶岩（両輝石安山岩）が遺構内外から出土しており、これらも本遺跡の性格を把握する上での資料となりうるという立場から登録してある。

それぞれの器種の細分は遺構内出土石器も含めて行い、その出土点数も器種毎に示した。ただし、粗掘り・検出作業時の排土はふるいをかけていないので、剥片石器を中心にサンプリングエラーがかなりあるものと思われる。前年度に実施された試掘のトレンチの盛土については、全て1cmメッシュのふるいをかけて遺物を採取してから排土した。

器種毎の出土量と全体に占める割合は図表（第12表・第383図）に示した。

器種	石鏃	尖頭器	尖頭器様石器	石錐	石匙	石篋	ピエス・エスキュー	不定形石器	磨製石斧	打製石斧	石錘	敲磨器類A群	敲磨器類B群	石皿・台石類	砥石	礫器	石核	石製品	URフレ・Uフレ	花崗岩	溶岩	計
遺構内	131	0	13	14	67	8	5	153	9	6	62	130	16	21	5	0	3	21	168	30	21	883
遺構外	173	5	8	18	161	16	8	417	37	2	291	407	102	98	16	2	12	35	175	90	30	2103
計	304	5	21	32	228	24	13	570	46	8	353	537	118	119	21	2	15	56	343	120	51	2986

第12表 石器 器種別出土点数



第383図 石器 器種別出土割合

ここに図示したのは561点で、遺構外出土石器の総量の28%に過ぎない。各器種の細分毎に代表的なものを取り上げた。ただし、図示した点数は出土量を反映していない。

本遺跡では分層的な発掘はできなかったため、遺物の時期を特定することは不可能であり、時間幅の広い石器が含まれている。土器の時期は、縄文前期の中葉ないし中期の初頭までが主体を占めることから、多くの石器の時期もそれら時期に相当する蓋然性は高いと言えよう。

石器

(1) 石鏃 (第419図1976～第422図2051、写真図版254～257)

矢の先につけて用いたと思われる小型の石器である。偏平で左右対称、尖頭部とそれより幅の広い基部を有する。遺構内からの出土点数は131点、遺構外からの出土点数は173点、合計304点が出土した。調査面積の割合には、遺構内からの出土割合が高いと言えよう。ただし、遺構外のサンプリングエラーは多いと思われる。遺構外からの出土総数は173点である。

茎の有無・基部の形状によって、I類～VI類に分類した。さらに側辺の形状によって、(1)直線状のもの、(2)外弯するもの、(3)外弯するもので基部側が内側にさらにすぼまるもの、(4)内弯するものにそれぞれ細分し、分類表記は、基部形状と側辺形状とを組み合わせ、I 2・II c 1などとしてある。

I類 (平基無茎鏃) : 基部形状が直線状で中心線に対しほぼ直交するもの。(1978～2000)

I 1は7点出土したがそのうちの3点(1976～1978)を図示した。片面に大きく一次剝離面を残すものと、丁寧な二次加工が施され一次剝離面が全く分からないもの、その中間型がある。

I 2は38点のうち20点(1980～1999)を図示した。幅に対する長さの比(以下、長幅比)の大

基部形状

I (平基)	II (凹基)					III (円基)	IV (尖基)	V	VI (有茎)
	a	b	c	d	e				

側辺形状

1	2	3	4

第384図 石鏃分類概念図

きい細身のもの（1980～1983）がある。表裏両面に一次剝離面を残すもの（1997）もあるが希である。1998は長・幅の点で2009（II b 1）や2019（II b 2）に類似する。I 3は1点あるが欠損品であり図示していない。I 4は4点のうち2点（1999・2000）を図示した。対称性をやや欠く。

II類（凹基無茎鏃）：基部に抉りを有するもので、本遺跡から出土した石鏃の主体をなす。基部形状によって細分する。（2001～2034）

II a：抉りの部分の弧の半径が石器の最大幅より大きく、抉りは1mm程度と不明瞭で浅いものをここに入れた。Iと次のII bとの中間に位置する。（2001～2005）

II a 1は2点のみの出土である。2001～2005はII a 2に分類した。23点出土している。

II b：抉りの部分の弧の半径が石器の最大幅より大きく、抉りは2mm程度またはそれ以上で凹基であることが明瞭である。（2006～2027）

II b 1は13点が出土し、6点（2006～2011）を図示した。2012～2020はII b 2である23点のうち9点を図示した。長幅比は1.2（2012）から2.4（2005）まで多様である。II b 3は5点出土し2点（2021・2022）、II b 4は7点の出土のうち5点（2023～2027）をそれぞれ図示した。

II c：抉りの部分の弧の半径が石器の最大幅より小さく、逆U字状となるもので、a・bに比し抉りが深い。（2028・2029）

II c 1は1点のみ出土した。II c 2は3点の出土のうち2点（2028・2029）を図示した。

II d：抉りが直線的なハの字状のもの。（2030～2031）

遺構外からの出土としては、図示した2点（II d 2に分類）とII d 4に分類できる欠損品1点のみのである。

II e：抉りが直線的な一の字状で、基部両端が下方に突き出したような形になるもの。中には両端の突出部が一方にしか見られず、II bとの区別が困難なものもあった。（2032～2034）

図示した3点のほかに、II e 2に分類できる欠損品が1点出土した。2032・2033は片面からみると突出部は不明瞭である。

III類（円基鏃）：基部が外側に弧を描くもので、弧の径が大きく緩いものと、小さくより丸みを帯びるものがある。（2035～2045）

III 1は7点出土のうち5点（2035～2039）、III 2は出土した全て（2040～2044）を図示した。2039と2040については、III 3あるいはIVに分類すべきかも知れない。

IV類（尖基鏃）：基部が尖るもの。

遺構外からは出土していない。

V類：基部が左右対称な2つの弧によって抉りをもち、結果として基部両端と中央部がやや突

	I (平基)	II (凹基)					III (円基)	IV (尖基)	V	VI (有基)	その他	計
		a	b	c	d	e						
遺構内	44	19	28	6	4	3	10	1	0	2	14	131
遺構外	56	25	49	3	3	5	12	0	4	3	13	173

第13表 石鏃基部形状による分類別出土点数

I (平基) 100 (33%)	II (凹基) 145 (48%)			III(円基) 22 (7%)	その他 27 (9%)
	II a 44(14%)	II b 77 (25%)	II c 9 (3%)	IV1(0.3%)	VI5(2%)
		II d7(2%)		II e8(3%)	

第385図 石鏃基部形状による分類別出土割合

	I	II					III	IV	V	VI	その他	計
		a	b	c	d	e						
1 (直線状)	13	4	21	1	0	3	13	0	2	3	60	
2 (外 弯)	72	40	40	8	4	4	7	1	2	1	179	
3	2	0	6	0	0	0	0	0	0	0	8	
4 (内 弯)	7	0	9	0	0	1	1	0	0	0	18	

第14表 石鏃側辺形状による分類別出土点数

1 (直線状) 60 (20%)	2 (外 弯) 179 (59%)		3 8(3%)	4 (内弯) 18 (6%)	その他 39 (13%)
---------------------	----------------------	--	------------	-------------------------	--------------------

第386図 石鏃側辺形状による分類別出土割合

泥 岩 (雫 石) 168 (55%)	粘板岩(北上山地) 79 (26%)	凝 灰 岩 (雫 石) 40 (13%)	流 紋 岩 3 (1%)
------------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------

第387図 石鏃石材別割合

(雫石)14(5%)

出する平面形を有する。(2046~2048)

巨視的には平基 (I) に分類すべきかも知れない。4点出土した。

VI類 (有茎鏃) : 茎を有する石鏃。(2050~2052)

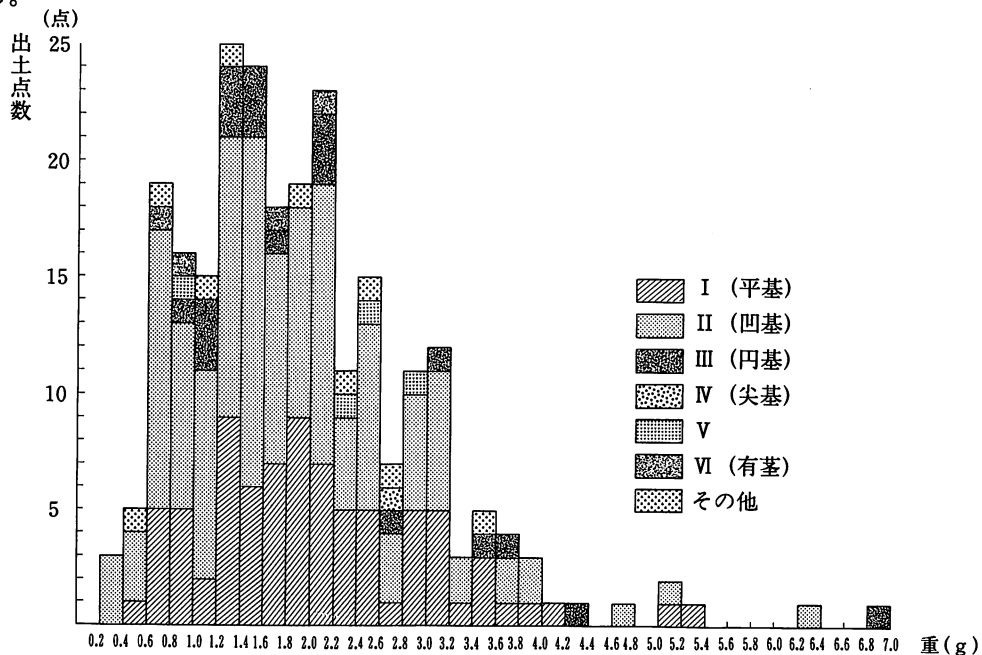
図示した3点のみの出土である。

基分形状による分類別出土割合は、凹基が最も多く全体の約半数を占め、ついで平基が多いが、平基と凹基で全体の8割強、本遺跡から出土した石鏃の大部分を占める。凹基の内でも、決りが緩い弧を描くII aとII bが全体の4割で最も多い。遺構内からの出土・遺構外からの出土を問わず、この傾向は同じである。

側辺形状による分類別割合では、外弯するものが全体の6割を占める。直線状のものも含めると8割となる。本遺跡では、基部が平基であれ凹基であれ、側辺は外弯するものが主体的である。

重量分布は、欠損品を除いた245点を対象にしたものである。最小値は0.28g、最大値は6.81gでピークは1.2g~1.4gの25点である。1.2g~2.2gに44%にあたる109点が入り、0.6g~2.2gの間には、4分の3強の185点が入る。

石材は大半が奥羽山脈の東端である雫石西部産の泥岩(珪質泥岩・硬質泥岩)で、北上山地産の粘板岩が約4分の1でそれに次ぐ。凝灰岩・流紋岩を含めると雫石産は73%を占め、本遺跡の石鏃の大部分は、本遺跡から15km以上離れた場所から持ち込まれているといえる。



第388図 石鏃重量分布

(2) 尖頭器 (第422図2052～第423図2056、写真図版257)

鋭い尖頭部を有し、突き刺す道具として用いられたと思われるもののうち、石鏃と石錐をのぞいたものである。有舌尖頭器 (I) と石槍的なもの (II) とがある。

I 類：有舌尖頭器 (2052・2053)

図示した2点のみの出土である。出土地点はいずれも東尾根谷頭凹型斜面にあたるXIC区である。微細で精巧な剥離が連続し、側縁はきめ細かな鋸歯状となる。2053は尖頭部が欠損している。石材は北上山地の粘板岩と雫石西部の硬質泥岩で、同質ではない。

II 類：石槍的なもの (2055～2057)

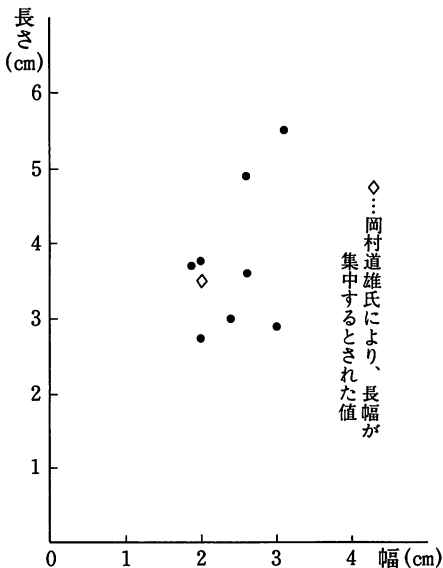
図示した3点のみを本類にいられた。2056は先端が平面形は丸みを帯びており疑問も残るが、二次加工の状況から先端部が機能面と考えられることから便宜上本類とした。

(3) 尖頭器様石器 (第423図2057～2064、写真図版257)

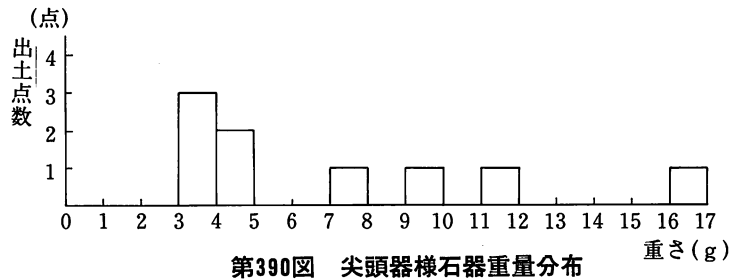
尖頭部がつくり出された扁平な石器のうち二次加工が粗いものである。岡村道雄氏によって新器種とされた石器 (岡村1979) に類似するものを集めた。^(注1) 細分は行わない。

大きさは、幅2cm～3cm・長さ2.5cm～5.5cmで、2063と2064を除くと、ほぼ一定の纏まりを示す。先端角を石鏃と比較した。石鏃は本遺跡で最も多く出土しているIIb2類のうち、図示したものを計測した。石鏃は1点を除き20°～36°に分布するのに対し、尖頭器様石器は全て40°以上である。重量は3g～5gが最も多い。

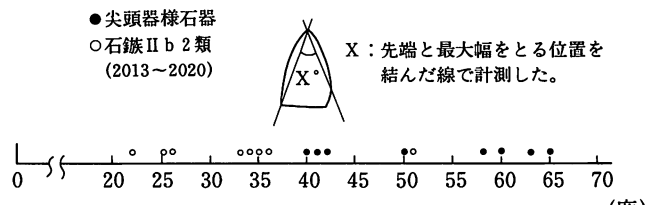
石材は、2060が凝灰岩、他は全て泥岩である。産地はいずれも雫石西部である。



第389図 尖頭器様石器長幅相関図



第390図 尖頭器様石器重量分布



第391図 尖頭器様石器と石鏃の先端角の対比 (度)

(4) 石錐 (第423図2065～第424図2084、写真図版257・258)

鋭い尖頭部を有し、孔を穿つのに用いられたと思われるものである。遺構外から18点の出土である。全体に身部が短く、つまみ部と明瞭に区別されるものはない。平面形によって2分する。

I類：棒状ないし柳葉形のもの (2065～2067)。

側辺は二次加工が全周に施される。一部一次剝離面を残す。小型である。

II類：素材の形を大きく残し、その一端に二次加工を施したもの (2068～2080)。

つまみ部は一次剝離の状態を保つ。平面形は素材に規定され、Iのような一定の形状をもたない。

石材は、I類・II類とも雫石西部産の泥岩が主体をなす。

(5) 石匙 (第424図2081～第429図2140、写真図版258・262)

両側辺から抉りをいれることによって作出されたつまみ部と、刃部とを有する石器である。遺構内から67点、遺構外から116点が出土している。石鏃に比し遺構外出土の割合が高い。つまみ部と剥片の長軸方向の関係・尖頭部の有無・刃部形状などから分類する。分類毎の出土点数は表 (第15表) に示した。

I類：つまみ部が剥片のほぼ長軸方向に位置するもの。いわゆる縦型石匙である。(2081～2130)










I a：先端部 (つまみ部に対向する部分) が多少なりとも尖るもの (2081～2105)。

I a 1：平面形がほぼ左右対称となるもの (2081～2090)。

「有撮石器」と称されるものもここに含めた。^(注2) 2081～2084は断面形が厚い凸レンズ状であり、「切る」よりは「突き刺す」用途を想定できる。2084～2090は断面形がより扁平で、平面形の対称性も低い。

I a 2：平面形が非対称のもの (2028～2105)

左側辺が直線状で右側辺が弧状となるもの (2028～2099) と、その逆に左側辺が弧状となるもの (2100～2105) とがある。二次加工が表面の左右両側辺に施されるもの (2093～

I (縦型)					II (横型)			III (中間型)
a		b			a		b	
1	2	1	2	3				
								

第392図 石匙分類概念図

2094他) や、直線部分のみに施されるもの (2104他)、弧の部分のみ施されるもの (2099他) などがある。2101や2103は「打面調整剥離」によるものか。^(注3)

I b : 先端部が尖らないもの (2106~2130)。

I b 1 : 長軸方向にのみ刃部を有するもの (2106~2117)。

I b 2 : 先端部にも刃部を有するもの (2118~2127)。

先端部が、つまみ部の中軸線に対し直角に交わるもの (2126・2127他) と斜位に交わるもの (2120・2121他) がある。後者は I a 2 と区別が困難になる場合もある。

I b 3 : 先端部の刃部が丸凸刃となるもの (2128~2130)。

II類 : つまみ部が、剥片の長軸と直交する方向に位置するもの。いわゆる横型石匙である。
(2131~2137)

	I (縦型)						II (横型)					III	その他	計	
	a		b				その他	a			b				その他
	1	2	1	2	3	その他		1	2	その他					
遺構内	5	12	12	9	6	0	6	3	1	2	5	2	3	1	67
遺構外	12	27	35	28	9	4	8	0	4	2	13	3	7	9	161

第15表 石匙 分類別出土点数

I 縦型 173 (76%)			II (横型) 35 (15%)		III 中間型 10 (4%)	その他 10 (4%)
I a 46 (20%)	I b 103 (45%)		I その他 14 (6%)	II a 12 (5%)	II b 18 (2%)	II その他 5 (2%)

第393図 石匙 分類別割合

泥岩 (雫石) 169 (74%)			粘板岩 (北上山地) 23 (10%)	凝灰岩 (雫石) 21 (9%)	凝灰岩 5 (2%)	その他 7 (3%)
----------------------	--	--	------------------------	---------------------	---------------	---------------

(北上山地) 5 (12%)

第394図 石匙 石材別割合

II a : 多少なりとも尖頭部分を有するもの (2131~2134)。

II a 1 : 左右がほぼ対称なもの。

遺構内で3点出土しているが、遺構外からは出土していない。

II a 2 : 左右が非対称なもの (2131~2134)。

2134・2135はやや丸みを帯びる。

II b : 尖頭部分を有しないもの (2135~2137)。

III類 : I類およびII類に分類できないもの (2138~2139)。

長軸方向の判断が困難なもの (2138) や、長軸とつまみ部の角度が45°に近いもの (2139) をここに入れた。

出土総点数 228 点のうちの大部分、4分の3強はI類(縦型)に属する。II類(横型)は15%にすぎない。縦型のうちでも、尖頭部を有しないI b類が全体の約半数を占める。

石材は、多い順に泥岩・粘板岩・凝灰岩であるが、雫石西部産の泥岩がその主体を占め、凝灰岩と合わせると、雫石西部産は83%を占める。雫石西部産の占有率は石鏃の場合より10%も高い。

(6) 石筥 (第430図2141~第431図2161、写真図版263・264)

平面形が撥形あるいは短冊形で、一端に刃部を作出する石器である。裏面に一次剥離面を大きく残して断面形が薄鋸状(片面凸レンズ状)となるもの、および両面加工で凸レンズ状となるものでも7cm以下のものは石筥とし、8cm以上のものは打製石斧とした。

刃部の剥離の状況によって二分する。

I類 : 比較的長い奥まで入る剥離が連続するもの (2141~2145)。

遺構内から3点、遺構外から6点出土している。刃部からは、搔器としての用途を想定できる。

II類 : 粗い不均整な階段状の剥離(ステップ状剥離)が連続するもの (2146~2154)。

遺構内から5点、遺構外から9点出土している。刃部に強い打撃を加えたことが想定され、I類とは異なった用途を考えるべきかも知れない。

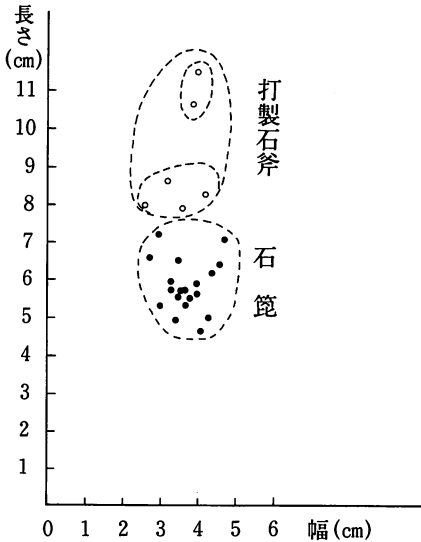
石材はI類が、北上山地産の千枚岩が1点の他は、すべて雫石西部産で泥岩5点、凝灰岩4点である。II類は、北上山地産の粘板岩が2点、他は雫石西部産の泥岩11点、凝灰岩1点である。I・II類とも9割は雫石西部産の石材を用いていることになる。

重量分布では20g~50gに7割以上の16点が集中する。

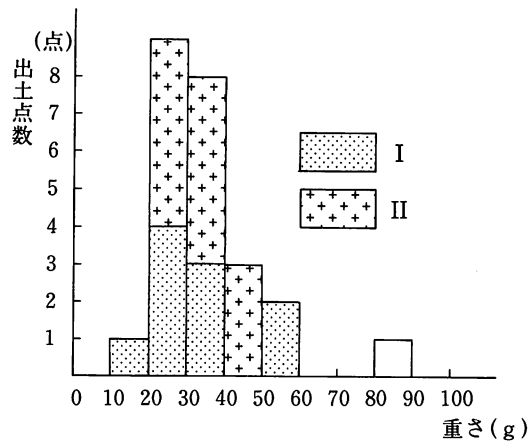
(7) ピエス・エスキュー (第431図2155~2161、写真図版264)

対向する側辺にステップ状またはリングの密な剝離が認められるもので、両極打法によったと思われるものである。遺構内5点、遺構外8点の計13点を認定した。細分はしない。

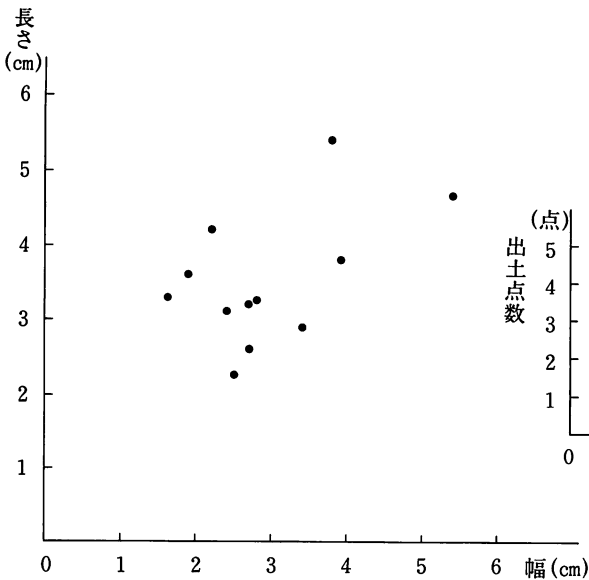
大きさは、最大長・幅6 cm程度のももあるが、概ね2 cm~4 cmのところに集中する。重さは、2 g~4 gが最も多い。



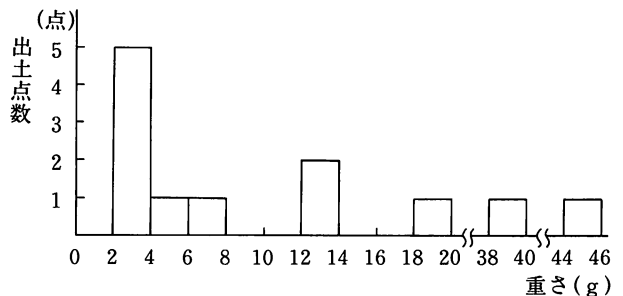
第395図 石筥・打製石斧 長幅相関図



第396図 石筥 重量分布図



第397図 ピエス・エスキュー 長幅相関図



第398図 ピエス・エスキュー 重量分布

石材は、2159が北上山地産の粘板岩である他は、遺構内出土のものを含め、すべて雫石西部産の泥岩である。

(8) 不定形石器 (第432図2162～第443図2288、写真図版264～272)

剥片に刃部と想定される二次加工が施された石器のうち定形的な石器 (石鏃、尖頭器、尖頭器様石器、石錐、石匙、石筥、ピエス・エスキーユ) を除いたものを不定形石器として一括する。二次加工の状況によってⅠ～Ⅶに分類する。

Ⅰ類：削器・搔器・削搔器などと呼称されるものにあたる。器体に沿って連続してスクレーパーエッジを有する石器である。(2162～2250)。

二次加工の剥離の部位によってa～eに分類し、さらにその平面形状によって、(1)直線状の刃部を有するもの、(2)凸状の刃部を有するもの、(3)凹状の刃部を有するもの、(4)丸凸状の刃部を有するもの、に細分した。二次加工が複数ある場合には、便宜的に刃部として、より主体的と判断される方で取り上げた。

分類表記はこれらの組み合わせにより、Ⅰa1、Ⅱb2などとした。

Ⅰa：素材の1側辺に二次加工が施され、スクレーパーエッジを有するもの(2162～2189)。

Ⅰb：素材の隣接する2側辺に二次加工が施され、スクレーパーエッジを有するもの(2190～2202)。

Ⅰc：素材の、直接には隣接しない2側辺に二次加工が施され、スクレーパーエッジを有するもの(2203～2218)。

Ⅰd：素材の3側辺、または全周に二次加工が施され、スクレーパーエッジを有するもの(2219～2246)。

Ⅰe：尖頭部を形成するものうち、尖頭器や尖頭器様石器などに分類できないもの(2247～2250)

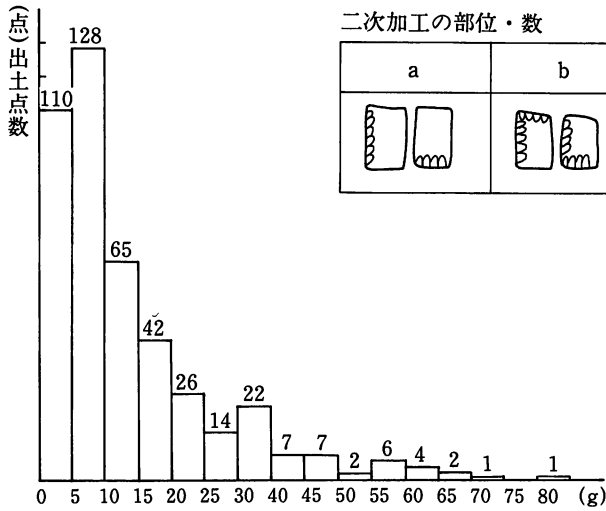
分類別の出土点数については第16表に示した。1側辺にのみ二次加工が施されるⅠa類が4割を占めて最も多く、隣接する2側辺に施されるⅠb類がそれに次ぐ。刃部の形状では、約半数が凸刃を有する。ついで直刃が3割である。

重量別では、約3割が5g～10gで最も多く、0g～10gの範囲に全体の半数以上が収まる。概ね35g以下ということができよう。

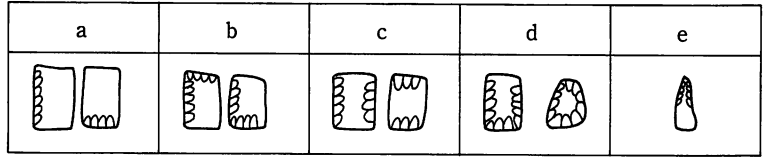
石材は、雫石西部産の泥岩と凝灰岩で8割強を占める。

Ⅱ類：鋸齒縁石器と呼ばれるもので、二次加工の施された側辺の平面観が鋸齒状を呈するものである(2251～2257)。

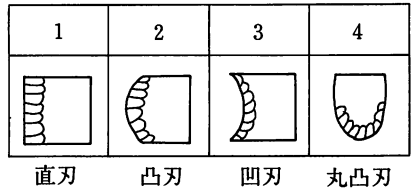
細分は行わない。全体にネガティブバルブが発達する短い剥離で、2256・2257を除き側



二次加工の部位・数



刃部形状



第406図 不定形石器I類分類概念図

	a				b				c				d				e	その他	計
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4			
遺構内	23	22	5	0	4	16	4	4	3	6	1	0	0	8	2	0	7	3	108
遺構外	43	72	6	6	9	48	3	9	30	21	8	2	15	15	4	12	11	15	329
計	66	94	11	6	13	64	7	13	33	27	9	2	15	23	6	12	18	18	437

第16表 不定形石器I類 分類別出土点数

加工部位

a 177 (41%)	b 97 (22%)	c 71 (16%)	d 56 (13%)	e 18 (4%)	その他 18 (4%)
-------------	------------	------------	------------	-----------	-------------

刃部形状

1 (直刃) 127 (29%)	2 (凸刃) 208 (48%)	3 (凹刃) 33 (8%)	4 (丸凸刃) 33 (8%)
------------------	------------------	----------------	-----------------

第401図 不定形石器I類 分類別出土割合

泥岩 (雫石西部) 315 (72%)	粘板岩 (北上山地) 72 (17%)	凝灰岩 (雫石西部) 41 (9%)	玉髓 (北上山地) 1 (0.2%)
---------------------	---------------------	--------------------	--------------------

第402図 不定形石器I類 石材別割合

その他 8 (2%)

面観は直線状に近い。

遺構内出土 5 点、遺構外出土 21 点、計 26 点を本類に入れた。

石材は、雫石西部産が³19 点、北上山地産が³7 点である。雫石西部産のうちわけは泥岩 15 点、凝灰岩 4 点、北上山地産のうちわけは粘板岩 6 点、玉髓 1 点である。

Ⅲ類：平面観は直線状であるが³、側面観が鋸歯状を呈する石器である。交互剝離石器と呼ばれることもある（2258～2259）。

遺構内出土 7 点、遺構外出土 9 点、計 16 点を本類に分類した。

石材は、雫石西部産が³14 点、北上山地産が³2 点である。雫石西部産のうちわけは泥岩 10 点、凝灰岩 4 点、北上山地産は 2 点とも粘板岩である。

Ⅳ類：粗く比較的大きな剝離が施された石器である。急角度で片刃のもの、面的な粗い加工が両面に施されたものを一括した（2260～2274・2287・2288）。

遺構内出土 23 点、遺構外出土 37 点、計 60 点を本類とした。

2274・2287・2288は急角度の粗く大きな剝離が施されたものである。同種のもは、遺構内から 3 点、遺構外から 4 点出土している。

石材は、雫石西部産が³92%にあたる 57 点、北上山地産が³8%にあたる 5 点である。雫石西部産のうちわけは泥岩 51 点、凝灰岩 6 点、北上山地産は凝灰岩 1 点、粘板岩 4 点である。

Ⅴ類：抉入石器またはノッチなどと呼ばれる石器で、二次加工がノッチ状を呈するものである（2275～2282）。

11 点を本類に分類したが、全て遺構外からの出土である。

石材は全て雫石西部産で、泥岩 9 点、凝灰岩 1 点である。

Ⅵ類：急角度の細かい二次加工が施された石器で、急角度細加工石器と呼ばれたりするものである（2283～2286）。

遺構内出土 3 点、遺構外出土 7 点、計 10 点を本類に入れた。

石材は、雫石西部産が³8 点、北上山地産が³2 点である。雫石西部産のうちわけは泥岩 5 点、凝灰岩 3 点、北上山地産は 2 点とも粘板岩である。

Ⅶ類：その他、加工状況に纏まりがなく、Ⅰ～Ⅵに分類できないものを一括した。

遺構内出土 7 点、遺構外出土 1 点、計 8 点を本類に入れた。

(9) 磨製石斧（第 443 図 2289～第 444 図 2305、写真図版 272～274）

研磨によって製作された斧状の石器である。

遺構内出土 8 点、遺構外出土 30 点であるが³、基部のみ又は刃部の一部など大幅な欠損品が多い。平面形や大きさによって分類する。

凝灰岩(北上山地) 24 (52%)	砂岩(北上山地)	粘板岩(北上山地) 13 (28%)	その他
5 (11%)			

第403図 磨製石斧 石材別割合

I類：両側辺が基部側に向かって収斂するもの。最大幅が刃部にあり、基部は幅と厚さが近い値を示す。(2289～2294)

II類：両側辺がほぼ平行するもの。基部側は偏平である。(2295～2299)

III類：幅ほぼ3 cm以下の細長い形状を有するもの。(2300～2302)

IV類：長さほぼ6 cm以下の小型のもの。(2303・2304)

V類：長さほぼ18cm以上の大型のもの(2305)

2289・2298は敲打と部分的な研磨によって整形されている。2290・2304には部分的に剝離による整形が観察される。擦り切り技法による痕跡が顕著なものは2292である。

2301は、中央に穿孔があり、あるいは石製品とすべきかも知れない。2303は、石錘として転用したものと思われる。

石材は、雫石西部産は凝灰岩が1点あるのみで、他はすべて北上山地産である。凝灰岩と粘板岩の占める割合が高い。

(10) 打製石斧(第445図2306～2307、写真図版274)

打製による斧状の石器で、長さは8 cm以上で断面形は凸レンズ状となる。遺構内出土6点、遺構外出土2点、計8点である。

平面形によって二分する。

I類：撥形ないし短冊形のもの(2306・2307)。図示したものが全てである。

II類：胴張形のもの。遺構外からの出土はない。

石材は、雫石西部産は泥岩が4点、凝灰岩が2点、北上山地産は粘板岩が2点である。

(11) 石錘(第446図2308～第451図2373、写真図版274～278)

偏平な礫の、長軸あるいは短軸方向の両端を打ち欠き、抉りを入れた石器である。

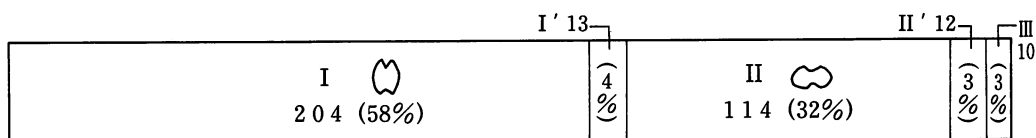
打ち欠きの位置によって分類する。分類別の出土点数については第17表に示す。

I類：長軸方向の両端に打ち欠きがあるもの(2308～2342)。

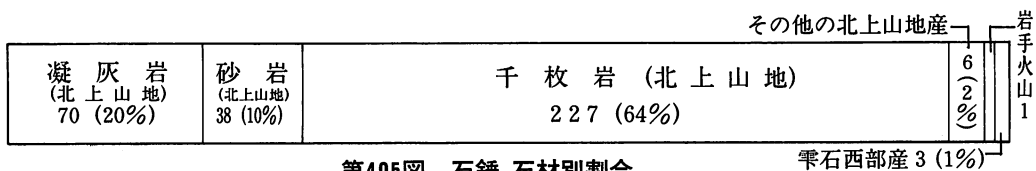
I'類：長軸方向の両端に打ち欠きがあり、さらに短軸方向の1箇所打ち欠きのあるもの(2343～2348)。

	I	I'	II	II'	III	計
遺構内	38	1	19	0	4	62
遺構外	166	12	95	12	6	291
計	204	13	114	12	10	353

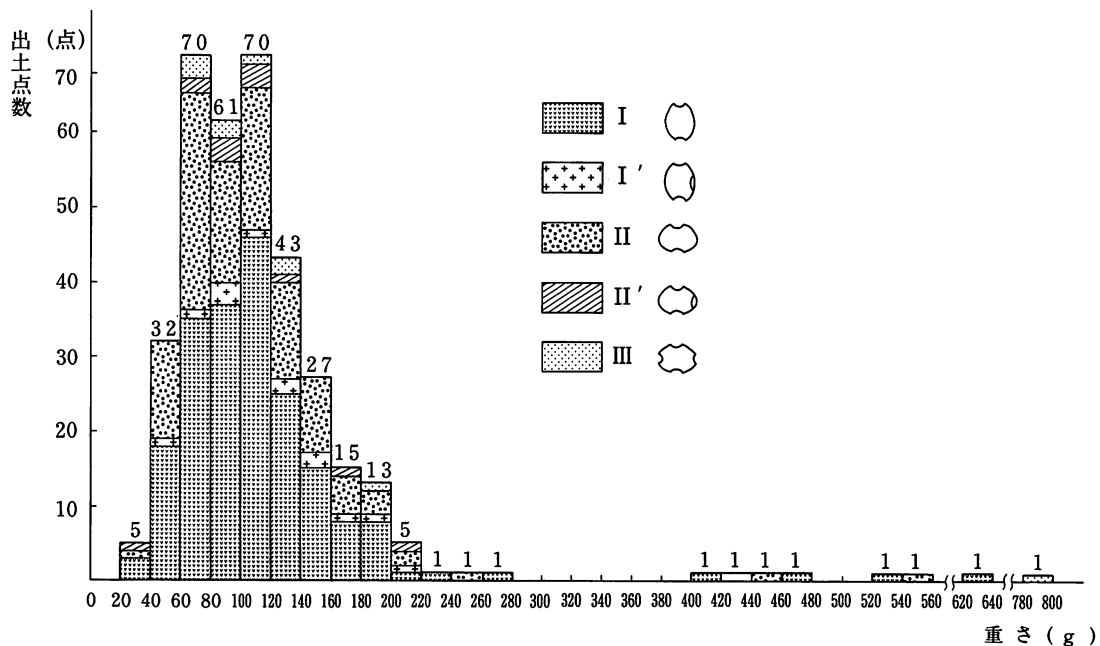
第17表 石錘 分類別出土点数



第404図 石錘 分類別割合



第405図 石錘 石材別割合



第406図 石錘 重量分布

II類：短軸方向の両端に打ち欠きがあるもの（2349～2364）。

II'類：短軸方向の両端に打ち欠きがあり、さらに長軸方向の1箇所³に打ち欠きのあるもの（2365～2372）。

III類：長軸方向・短軸方向の両方向に打ち欠きのあるもの（2373）。

I類・II類の打ち欠きが明瞭な抉りとなるのに対し、I'類・II'類の1箇所だけの打ち欠きは抉りとはならないものが多く、その意味ではI'類をI類に、II'類をII類に含めて考えることも可能である。

分類別出土割合では、I類が6割弱、II類は3割強で本遺跡では、長軸方向を打ち欠くものの方が多い。重量別分布をみると、60g～120gに全体の57%が集中し、最も多くを占める。この傾向は、I類・II類とも同様である。400g以上のものが8点あるが、分布が稀薄であるだけでなく、空白地帯を挟んでの分布である事を考えれば、異なった用途を想定する必要があるだろう。

石材は、9割以上が北上山地産であり、なかでも千枚岩が大部分を占める点が特徴的である。

(12) 敲磨器類

自然石の一部に、敲打痕・磨（擦）面などを有し、「敲き潰す」・「磨り潰す」・「敲き切る」・「磨り切る」などに用いられたと思われる石器を一括した。2群に大別する。

A群：細長く、断面が三角形から偏平な石を素材とし、その1側面ないし複数の側面を使用しているものである。従来、「特殊磨石」・「棒状擦石」などとよばれてきたものと、「半円状偏平打製石器」・「横刃型石器」・「敲打磨石」とよばれてきたものの両者を含む。これらは機能が重複する例も多く、判然と分離できないものがあり、一括して取り上げた。

B群：円形ないし長円形基調の自然石を素材とし、その平坦面や側面に敲打痕・磨（擦）面などが観察されるものである。従来、磨石、敲石、凹石とよばれてきたものを一括した。

敲磨器類A群（第451図2374～第446図2458、写真図版278～288）

自然石の側面に形成された磨面（機能面）には、そのほとんどに、使用痕または加工痕と考えられる剝離が伴う。また磨面がほとんど無く剝離のみが観察される場合もある。また、機能面とは別に、周縁に整形のためと考えられる加工痕（剝離）が観察される場合もある。

これらのことをふまえ、本群の石器を、断面形、機能面の状況、および周縁加工（ないし剝離）の有無によって分類する。

〈断面形〉

- I類：厚手で、三角形ないしそれに近いもの。
- II類：I類とII類の間接形で、楕円形基調（最大厚が器体のほぼ中央部にある）のもの。
- III類：薄く、扁平なもの。

〈機能面の状況〉

- a：剥離に比べ磨面が顕著で、その幅がほぼ一定の形状となるもの。
- b：剥離が連続し、磨面は、不定形をなすもの。
- c：磨面は観察されず、剥離が連続するもの。

〈周縁加工（剥離）の有無〉

本群の石器の周縁の剥離には、整形のためであることが明らかなものもあるが、使用の痕跡かどうか判断が困難なものもある。ここでは両者を分離せず、周縁に剥離を伴うものを全てとりあげた。「加工（剥離）」という言葉は、加工によるもの他に、一部は使用によるものも含めたという意味で用いた。

- 1：周縁に加工（剥離）を伴わないもの。
- 2：周縁の一部に加工（剥離）を伴うもの。
- 3：周縁の全体ないしほぼ全体に加工（剥離）を伴うもの。

なお、2と3には、長軸方向の加工が抉り状となるものも含めた。

分類表記は、以上の3つの観点を組み合わせて、例えばI a 1（断面三角形・磨面顕著・周縁加工なし）、II b 2（断面楕円形・磨面不定形・周縁一部加工）などとした。

また、磨面（機能面）に接する側面には、自然面をそのまま残す場合も多いものの、1面または両面を、磨って平滑に調整したと考えられるものもある。これについてはスクリーントンによって表現した。

I類（第451図2374～第459図2415、写真図版278～283）

I a 1（2374～2403）

遺構内23点、遺構外108点、計131点出土した。遺構外出土のうち30点を図示した。

機能面に剥離がほとんどないもの（2376・2381・2385・2389他）もあるが、多くは磨面の外縁に剥離を伴う（2373・2374他）。この剥離は、磨面（機能面）方向からの打撃によ

断 面 形	I	II	III	機 能 面	a	b	c	周 縁 加 工 状 況	1	2			3

第407図 敲磨器類A群 分類基準概念図

るもので、深さはあまりない。磨面が1面のもの(2374～2396)と、2面のもの(2397～2399)、3面のもの(2400～2403)がある。側面に凹み(または凹みには至らない連続的敲打痕)が観察されるもの(2393～2396)もある。

側面への調整については、無調整のもの(2374～2382他)、1面が平滑に調整されるもの(2383～2385・2394・2396他)と、両面が調整されるもの(2386～2392・2395・2399)がある。

I a 2 (2404～2408)

遺構内5点、遺構外11点、計16点出土した。遺構外出土のうち5点を図示した。

長軸方向の端部に、強い打撃による剝離を伴う。使用痕と考える方が妥当であろう。剝離後に磨っているもの(2407)もある。

2408は磨面が3面ある。2407は両側面に凹みが観察される。側面が平滑に調整されるのは2406～2408である。

I b 1 (2409・2410)

遺構内3点、遺構外8点、計11点出土した。遺構外出土のうち2点を図示した。

磨面が細く不定形で、剝離後に磨面が形成されたと考えられる。2410は、端部にも磨面が観察される。

I b 2 (2411～2413)

遺構内1点、遺構外5点、計6点出土した。遺構外出土のうち3点を図示した。

2412は機能面の対辺に剝離を伴う。使用痕か、整形のための加工痕か、判然としない。

I c 1 (2414～2415)

遺構外出土2点を全て図示した。

2414は1面が磨面、1面が剝離のみである。2415はやや薄くなるが、最大厚は周縁部にあることからI類に入れた。

II類(第89図2416～第91図2425、写真図版283・284)

II a 1 (2417～2420)

遺構内7点、遺構外27点、計34点出土した。遺構外出土のうち5点を図示した。

2417～2420は、磨面の外縁に剝離はほとんど観察されない。

II a 2 (2421)

遺構内3点、遺構外5点、計8点出土した。遺構外出土のうち1点のみ図示した。

2421は欠損品であるが、端部の剝離が明瞭であり、平面形では抉り状には至らないが、それに近似する形状である。

II b 1

遺構内 1 点、遺構外 5 点、計 6 点出土した。

II b 2 (2422～2424)

遺構内 8 点、遺構外 8 点、計 16 点出土した。遺構外出土のうち 3 点を図示した。

2422の端部の剥離は単位が大きく、破損の可能性も考えられる。2424の端部は抉り状となる。

II b 3 (2425)

遺構内 1 点、遺構外 1 点、計 2 点出土した。

2425はやや厚手であるが、全周を加工して半円状に整形している。磨面は 1 面であるが、弧状を呈する対辺は明瞭な稜を有する。

III 類 (第91図2426～第96図2458、写真図版 284～288)

III a 1 (2426・2429)

遺構内 1 点、遺構外 10 点、計 11 点出土した。遺構外出土のうち 2 点を図示した。

2426は未製品かも知れない。

2427・2428は欠損品であり、周縁加工の有無については不明である。

III a 2 (2430)

遺構外から 8 点出土した。うち 1 点のみ図示した。

端部の剥離は両方とも、やや抉り状となる。

III a 3 (2431・2432)

遺構外から 3 点出土し、うち 2 点を図示した。

磨面の剥離が、2431は顕著であるのに対し、2432はほとんど観察されない。周縁の加工は2432は粗く不均一である。

III b 1 (2434～2436)

遺構内 3 点、遺構外 8 点、計 11 点出土した。遺構外出土のうち 3 点を図示した。

磨面がやや幅広のもの (2434) から、ごく一部のもの (2436) までである。2433は周縁加工の有無は不明である。

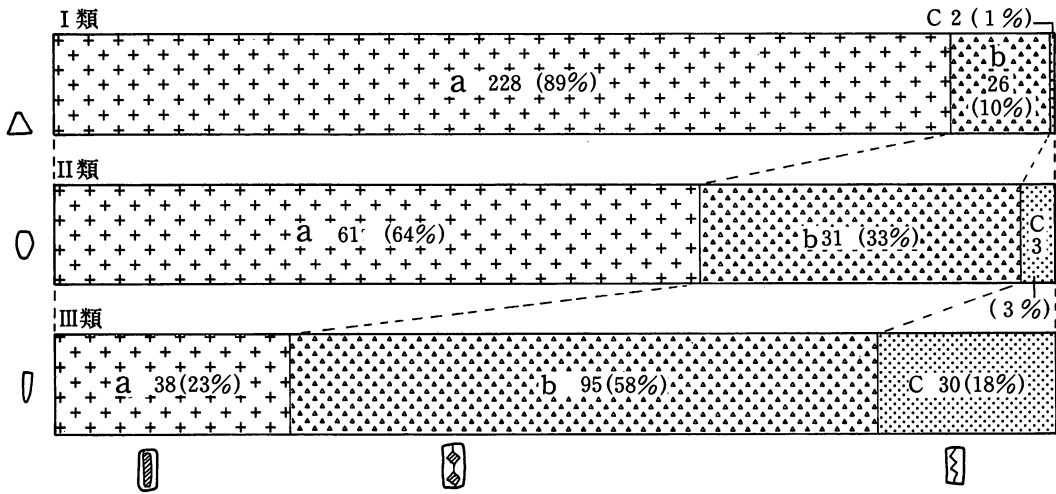
III b 2 (2437～2448)

遺構内 12 点、遺構外 33 点、計 45 点出土した。遺構外出土のうち 10 点を図示した。

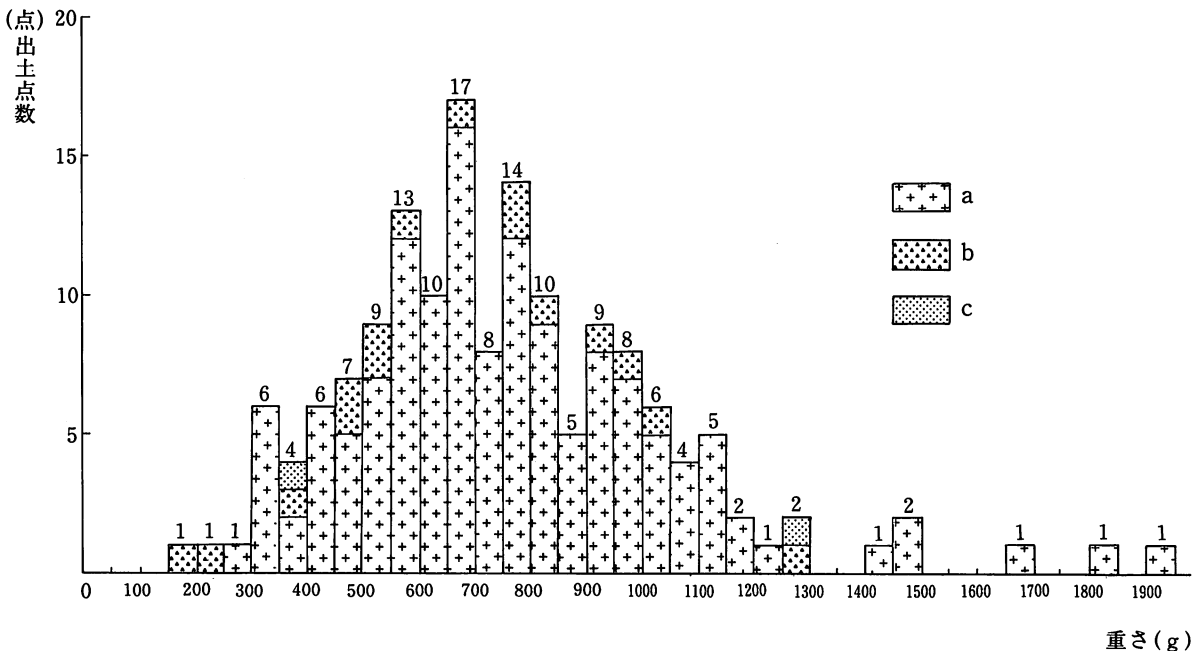
周縁加工は、機能面の対辺の弧状部に施されるもの (2437・2438)、長軸の端部に施されるもの (2439～2445)、その両方に施されるもの (2446～2448) がある。端部の剥離が、抉り状となるもの (2439～2447) が多い。

	I			II			III			その他	計
	a	d	c	a	b	c	a	b	c		
遺構内	41	7	0	12	11	1	3	35	11	9	130
遺構外	187	19	2	49	20	2	35	60	19	14	407
計	228	26	2	61	31	3	38	95	30	23	537
	256			95			163				

第18表 敲磨器類A群分類別出土点数



第408図 敲磨器類A群分類別割合



第409図 敲磨器類A群 重量分布 (I類)

III b 3 (2449)

遺構内15点、遺構外10点、計25点出土した。遺構外出土のうち1点のみ図示した。

2449は剥離が全周におよび、端部の剥離は抉り状となる。2面を磨面とし、平面形は弧状をなさず、長方形に近い。

III c 1 (2450)

遺構内1点、遺構外2点、計3点出土した。遺構外出土のうち1点のみ図示した。

III c 2 (2451～2455)

遺構内6点、遺構外8点、計14点出土した。遺構外出土のうち5点を図示した。

III c 3 (2457～2458)

遺構内3点、遺構外8点、計11点出土した。遺構外出土のうち3点を図示した。

3045は機能面の対辺に抉り状の剥離を有する。全周する剥離は片面に観察される。2458は、端部が抉り状となるほか、機能面の対辺の剥離は、抉りを2単位形成する。

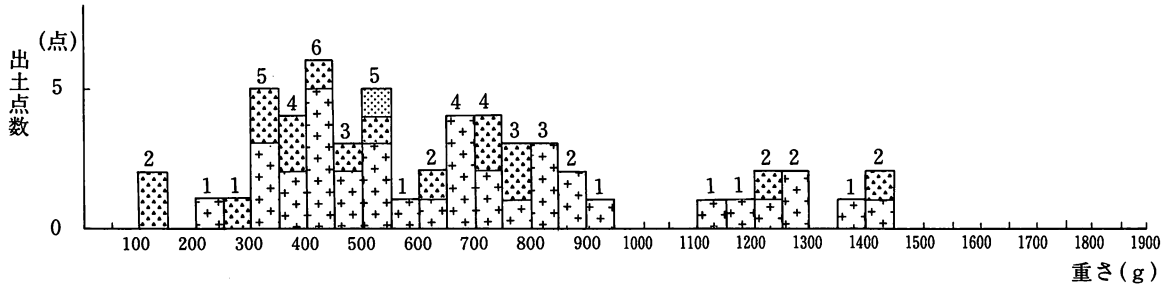
重量分布を類別に図示した。欠損品は統計から除外してある。I類は150g～1950gの範囲に分布するが、650g～700gをピークに、500g～1000gのものが66%を占める。II類は100g～1450gの範囲に分布し、とくに集中する階級はない。III類は150g～1900gの範囲に分布するが、400g～450gをピークとし、300g～500gのものが約6割を占める。I類がIII類より重いことは断面形からも容易に想定できることであるが、それぞれの用途にかかわる重要な要素の1つといえよう。

機能面（磨面）の状況を類別にみる。I類は、磨面が顕著なもの（a）がそのほとんどを占める。磨面がなく剥離による稜線を有するもの（c）は、1%に満たない2点のみである。III類は、磨面が顕著なもの（a）と、磨面がなく剥離のみのもの（c）が、それぞれ約3割で、剥離が顕著で磨面が不定形となるもの（b）が6割弱と最も多い。

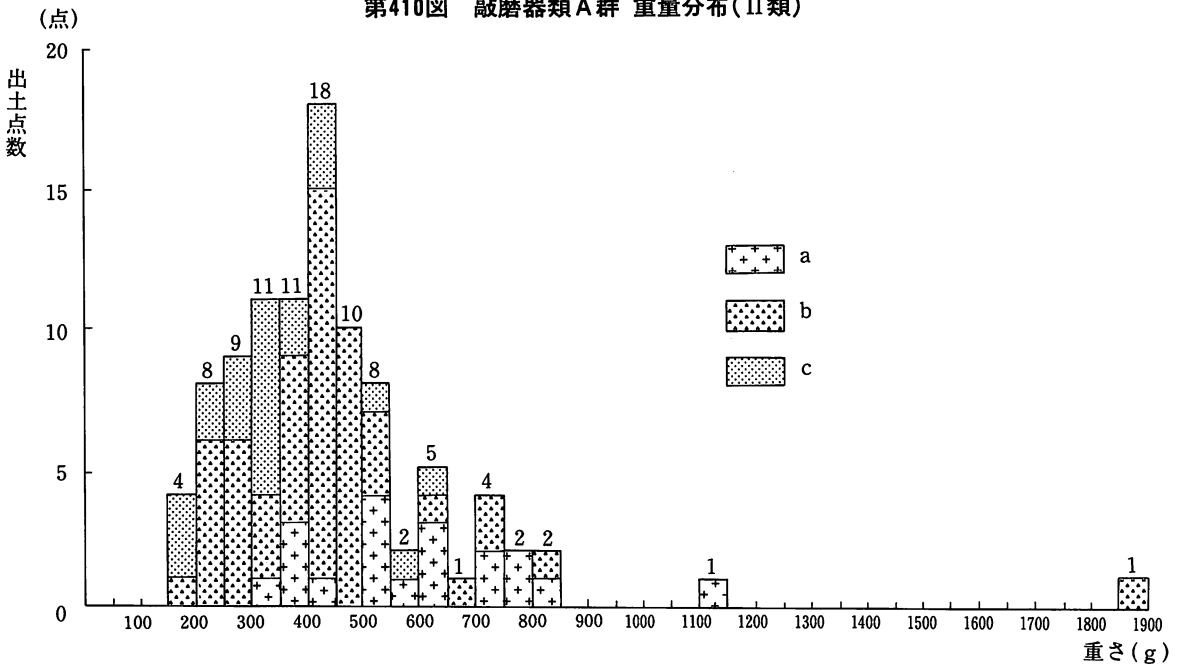
磨面の最大幅の分布をみる。磨面がなく剥離による稜線を有するもの（c）は、各類とも統計から除外してある。I類は1.4cm～1.6cmをピークとし、4.2cmまで分布している。0.6cm～2.6cmが大部分を占め、約88%である。II類は0.8cm～1.0cmをピークとし3.8cmまで分布している。0.6cm～2.0cmに8割強が入る。III類は同じく0.8cm～1.0cmをピークとし、2.6cmまで分布している0.4cm～1.4cmが7割強を占める。

機能面（磨面）の状況と、磨面の幅については、素材として用いた石材に規制されたと考えられることもできるが、用途を想定して選材していたとすれば、機能面（磨面）の状況および磨面幅の分布が異なることは、I類～III類の用途を推定する際の要素として、やはり重要なことと思われる。

石材については、I類～III類のいずれも北上山地産の砂岩、凝灰岩が主体をなす。I類でや



第410図 敲磨器類A群 重量分布(II類)

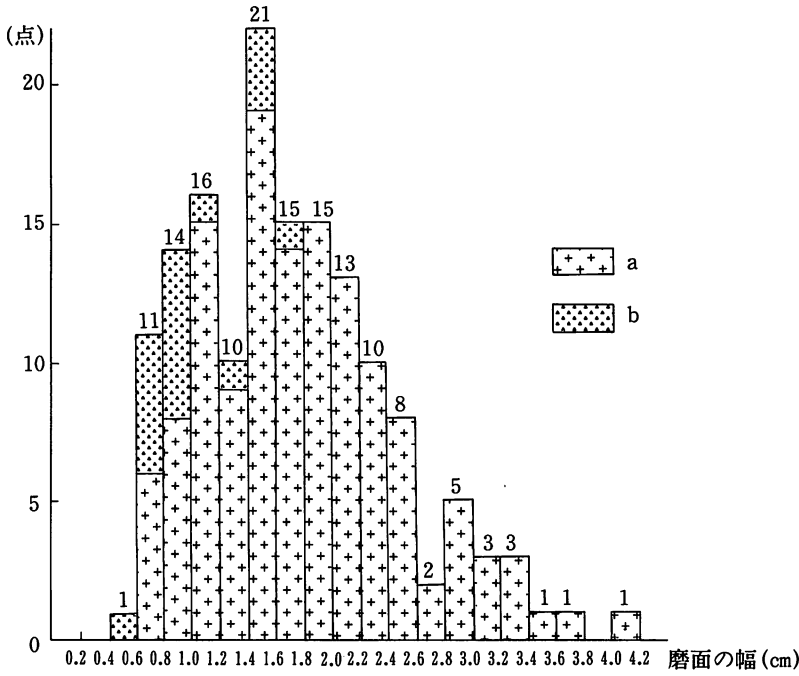


第411図 敲磨器類A群 重量分布(III類)

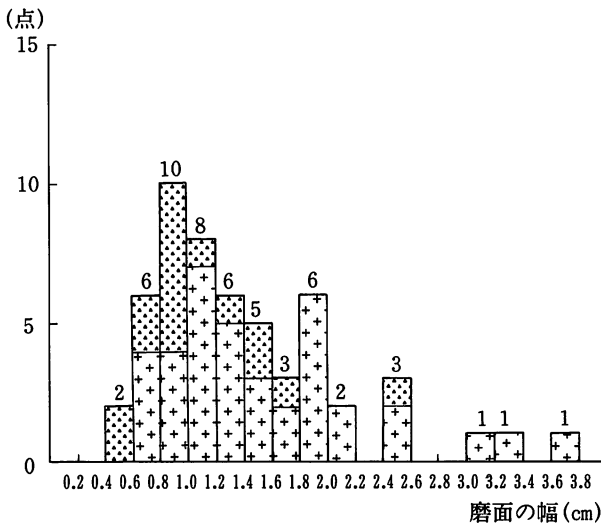
I類	凝灰岩(北上山地) 67(26%)	砂岩(北上山地) 62(24%)	千枚岩(北上山地) 15(6%)	安山岩(北上山地) 28(11%)	花崗岩質岩 チャート	安山岩(奥羽山地) 62(24%)	その他
II類	凝灰岩(北上山地) 31(33%)	砂岩(北上山地) 25(26%)	千枚岩(北上山地) 9(10%)	粘板岩(北上山地) 5(5%)	安山岩(北上山地) 3(3%)	安山岩(奥羽山地) 15(16%)	凝灰岩(磐石西部) 5(5%) その他
III類	凝灰岩(北上山地) 30(18%)	砂岩(北上山地) 45(28%)	千枚岩(北上山地) 29(18%)	粘板岩(北上山地) 4(3%)	安山岩(北上山地) 6(4%)	片岩(北上山地) 8(5%) 安山岩(奥羽山地) 24(15%)	安山岩(岩手山) 4(3%) その他

第412図 敲磨器類A群石材別割合

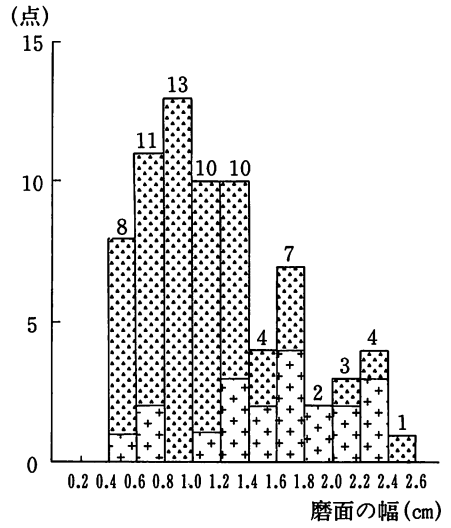
や奥羽山地産安山岩のものが多く、Ⅲ類でやや千枚岩が多い点を除けば、大きな相違はない。



敲磨器類 A 群 I 類



敲磨器類 A 群 II 類



敲磨器類 A 群 III 類

第413図 敲磨器類 A 群磨面幅の分布

敲磨器類B群（第467図2459～第472図2499、写真図版289～292）

円形基調の自然石の一部または全部に使用痕が観察されるものである。使用痕には「磨面」、「凹み」、「敲打痕」がある。これらの使用痕は複合することも多く、1種類に特定できない場合が多い。分類はそのことを考慮して、次のように行った。

I類：「磨面」のみを有するもの。（2459～2469）

磨面には、ややザラつきを有するものと、研磨され光沢を帯びるものがあるが、その両者を含めた。磨面が平坦な片面に観察されるもの（2460・2461他）、両面に観察されるもの（2461・2466他）、側面に磨面を有するもの（2463・2467他）がある。2468・2469は溶岩に磨面が観察されるものである。2468は整形が丁寧であり、あるいは石製品の一種かも知れない。

II類：「凹み」のみを有するもの。（2470～2473）

凹みには、円錐状のもの（2472）や溝状のもの（2471）があるが、全て凹みとして把握した。

III類：「敲打痕」を有するもの。（2475～2480）

敲打痕が一部に集中し、凹みと区別が困難なものもあるが、浅く凹みに至らないものはここに入れた（2474・2475）。また、礫の端部に強い打撃による剝離を伴うもの（2480）も本類に含めた。

IV類：「磨面」と「凹み」を有するもの。（2481～2483）

V類：「磨面」と「敲打痕」を有するもの。（2484～2494）

VI類：「凹み」と「敲打痕」を有するもの。

VII類：「磨面」と「凹み」と「敲打痕」を有するもの。（2495～2499）

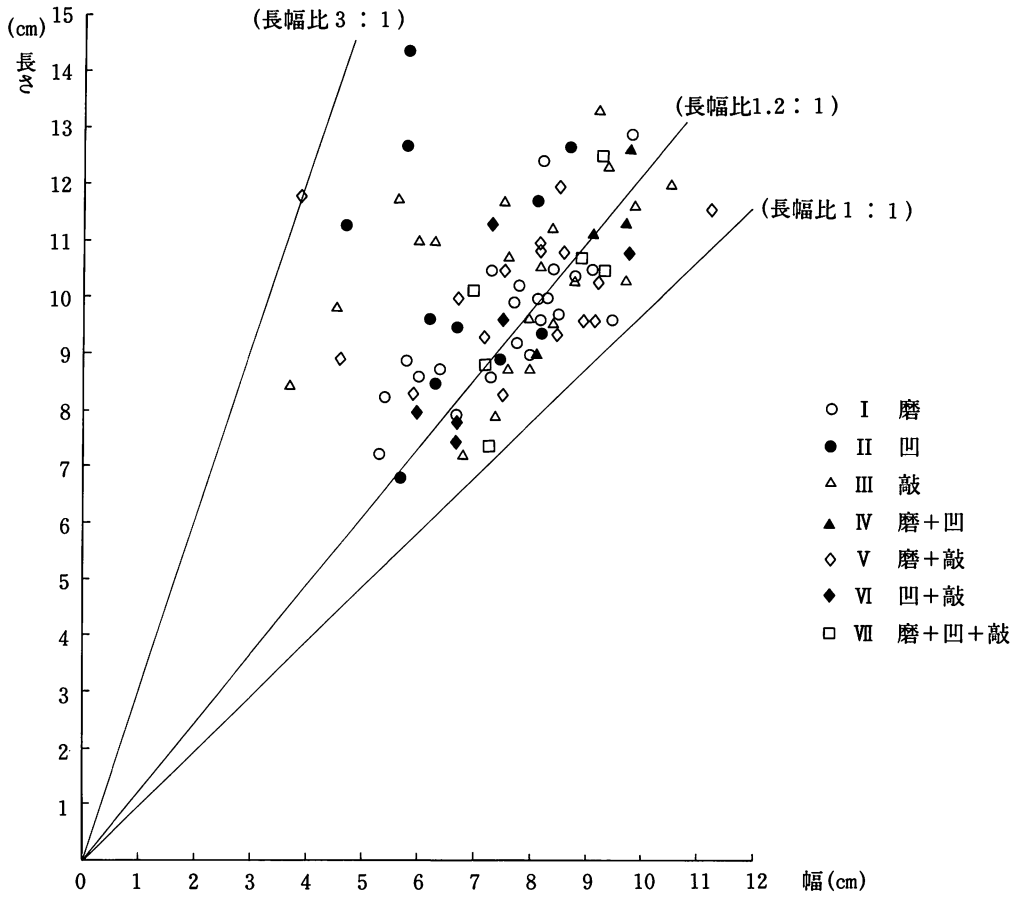
出土点数は第19表に示した。

I群～VII群の長幅相関図をみると、長幅比が3～1の範囲に分布するが、集中するのはおよそ1・2前後のところである。群による分布の偏りはみられず混在している。

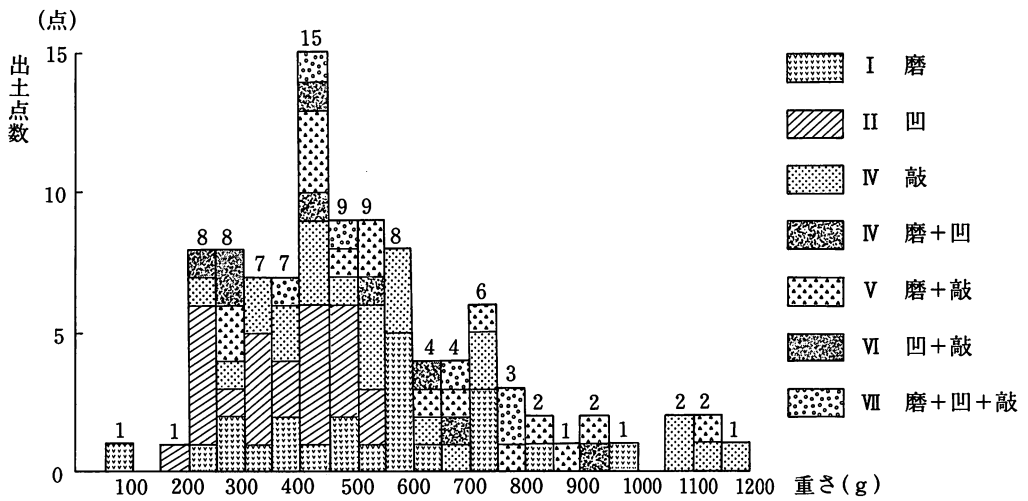
重量分布では、最小値75g最大値1180gであるが、400g～450gをピークとして、7割は200g～600gの中に収まる。群別では、II類がやや軽い傾向を示し、平均値は357gと、敲磨

	I	II	III	IV	V	VI	VII	他	計
遺構内	4	4	2	0	3	2	0	1	16
遺構外	26	22	26	5	13	4	6	0	102
計	30	26	28	5	16	6	6	1	118

第19表 敲磨器類B群分類別出土点数



第414図 敲磨器類B群長幅相關図



第415図 敲磨器類B群 重量分布

凝灰岩(北上山地) 27 (23%)	砂岩(北上山地) 42 (36%)	千枚岩(北上山地) 3 (3%)	安山岩(北上山地) 11 (9%)	安山岩(奥羽山地) 17 (15%)	安山岩(岩手火山) 6 (5%)	その他
-----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	-----------------------	---------------------	-----

第416図 敲磨器類B群 石材別分布

器類B群全体の平均値502gより150g弱少ない点が注目される。

石材は、北上山地産の砂岩・凝灰岩・安山岩を主体とし、その割合は敲磨器類A群に類似する。

(14) 石皿・台石類 (第473図2500～第474図2509、写真図版292)

遺構内21点、遺構外88点、計109点をここに入れた。

整形・調整されたものはなく、扁平な自然円礫ないし不整形な亜角礫の平坦面に、敲打痕や磨面が観察されるものである。

2506～2508に代表されるように、原形を止めないほどに細かな破損品が多く出土しているが図示は省略した。

石材は、北上山地産の凝灰岩60点、砂岩18点で、その他10点である。

(15) 砥石 (第474図2510・2511、写真図版293)

遺構内5点、遺構外16点、計21点出土した。表土からの出土も多く、近現代のものも多く含まれている可能性がある。

石材は、雫石西部産の凝灰岩14点、北上山地産の凝灰岩2点、その他5点である。

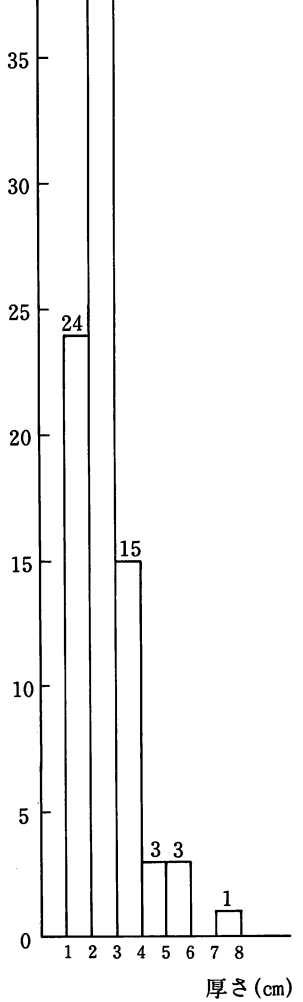
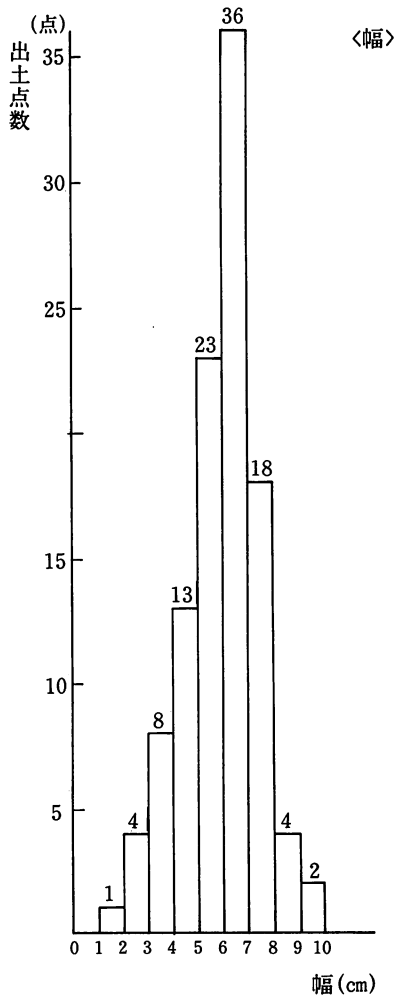
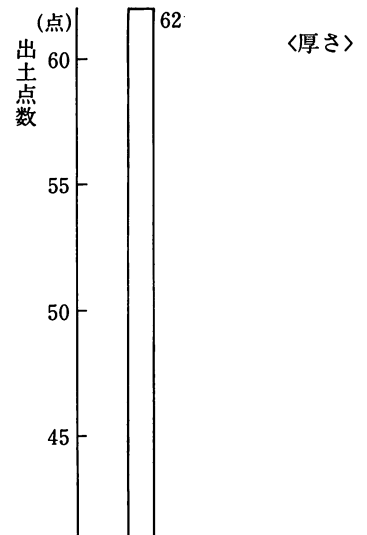
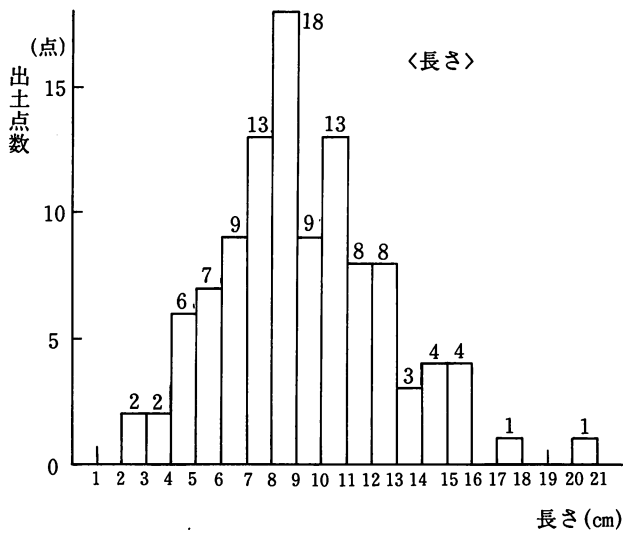
(16) 礪器 (第475図2512、写真図版293)

遺構外出土の2点を礪器とした。2512は、両面に自然面を残し、下半部に粗い剝離によって明瞭な稜が形成されている。図示していないが、もう1点は、2512より小振りの扁平な礪の周縁に、片面からの粗い剝離が連続するものである。

(17) 石核 (第475図2513、写真図版293)

遺構内3点、遺構外12点、計15点を石核とした。多方向からの剝離により、多面体の計上を呈するものが殆どである。図示した2513は、一定方向から剝離が多く観察される希な例である。

石材はすべて雫石西部産で、泥岩12点、凝灰岩3点である。



第417図 半円状花崗岩質岩計測値分布

(18) 半円状花崗岩質岩 (第477図2536・2537、写真図版294)

平面形が半円状を呈する花崗岩質の岩石が出土した。剝落が激しく脆弱化しているため、加工痕も使用痕も不明であるが、形状に一定の纏まりを有すること、出土量も相当数あることから遺物として取り上げた。

遺構内30点、遺構外90点、計120点したが、2536・2537の2点のみを図化した。平面形・法量は敲磨器類A群Ⅲ類としたもの(いわゆる半円状偏平打製石器)に酷似することから、それと同様の用途が想定される。

(19) 溶岩 (第468図2468・2469、写真図版289)

岩手火山起源の溶岩(両輝石安山岩)が、遺構内21点、遺構外30点、計51点出土した。これらは、本遺跡に持ち込まれたものであり遺物として取り上げた。磨石として用いられたもの(2468・2469)のみを図化した。2468以外は全て不整形であり、また磨面などの使用痕は不明瞭である。

石製品

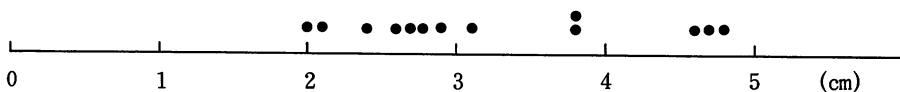
(1) 耳飾 (第475図2514～2521、写真図版293)

中央部に円形の穴があり、下端から切り込みを入れた、いわゆる玦状の耳飾である。遺構内から6点、遺構外から8点、計14点出土した。

全て破損品であるが、円形を基調とするものが多く、断面形は偏平である。破損部に孔が穿たれているもの(2515・2521)もあり、補修を目的としたものかと思われる。遺構内出土のものには、制作時の痕跡が中央部の穴の側面に表れているもの(1080)、切り込みが完成する前に破損したと思われるもの(1123)もある。

幅の値の分布をみた。欠損のため正確な値は不明なものが殆どであり、残存部の形状から推定したもので、やや正確性を欠くが、それほど大きな相違もないと思われる。それによると、2 cm～4.8 cmの範囲に分布するが、とくに集中する部分はない。2 cm～3 cmは連続し、3 cm～5 cmは間断的である。

石材は北上山地産のチャート6点、チャート質凝灰岩6点、その他2点である。



第418図 耳飾幅分布

(2) 円盤状石製品 (第476図2522・2523、写真図版293)

遺構外からのみ2点の出土である。2522は周縁を打ち欠いただけであるが、2523は表裏および側面を磨って調整している。石材は、いずれも北上山地産の千枚岩である。

(3) 石刀・石剣類 (第476図2524～2528、写真図版293)

扁平で細長い、刀状または剣状の石製品である。遺構内から3点、遺構外から7点、計10点をここに入れた。2525・2527は擦痕が明瞭である。2525は端部に孔が穿たれる。2528は加工痕は不明瞭であるが、形状から遺物として取り上げた。

石材は、全て北上山地産で、粘板岩4点、千枚岩4点、その他2点である。

(4) 石棒 (第476図2529～第477図2535、写真図版293・294)

棒状の石器であるが、加工の有無については必ずしも明瞭ではない。石材から他地域から持ち込まれたことが明らかであるもの、および形状がそれに類似するものをここに入れた。遺構内13点、遺構外18点、計31点をここに分類した。

2529・2532・2533・2535などは、松尾村長者屋敷産の流波岩を用いており、断面形が三角形状または四角形・五角形状である。2530・2531・2535などは、北上山地産の粘板岩である。2531は、敲磨器類(凹石)に分類すべきかも知れない。

(5) 有孔石

自然石の一部に孔を有するもので、582の1点のみである。

(注1) 岡村道雄(1979):「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例—その1—」

『東北歴史資料館研究紀要』No 5

岡村氏は、同論文(p 9)で石鏃と異なる属性として次の5点を上げている。

- a. 大きさは長さ3.5cm、幅2.0cmに集中し、石鏃と分布を異にする。
- b. この器種は、石錐や石鏃に分類するものより先端角平均20°大きく、先端に加工が無かったり、尖らせるに十分な二次加工が施されていない。
- c. 完形である。石鏃と機能を異にする。
- d. 一次剝離面を残す半両面加工のものが圧倒的に多い。
- e. アスファルト付着はみられない。

(注2) 秋田県教育委員会(1988):「上ノ山遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II』

p 239～241

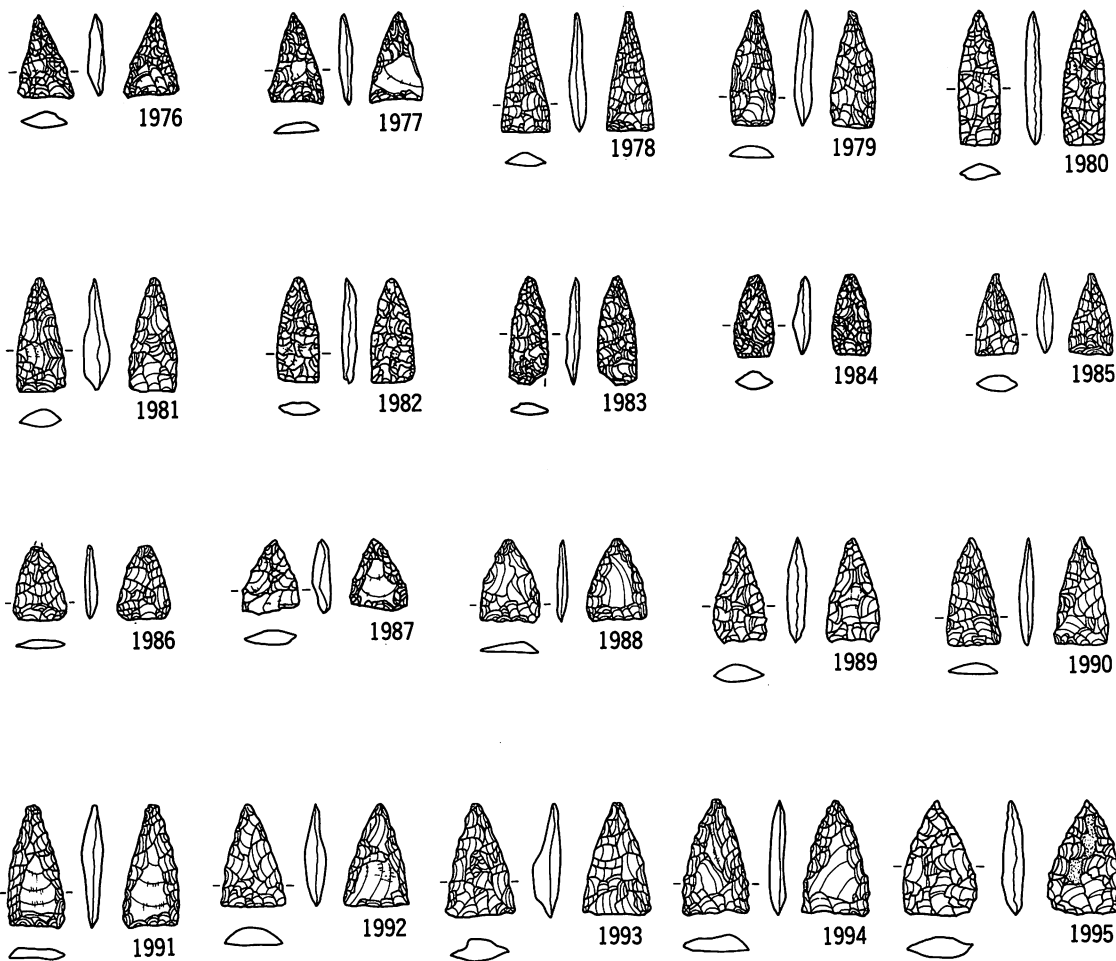
(注3) 宮城県教育委員会 (1986) : 『田柄貝塚Ⅱ 土製品 石器・石製品編』宮城県文化財
調査報告書第111集 p 126～127

3. 鉄器

針状鉄製品 (第477図2538、写真図版294)

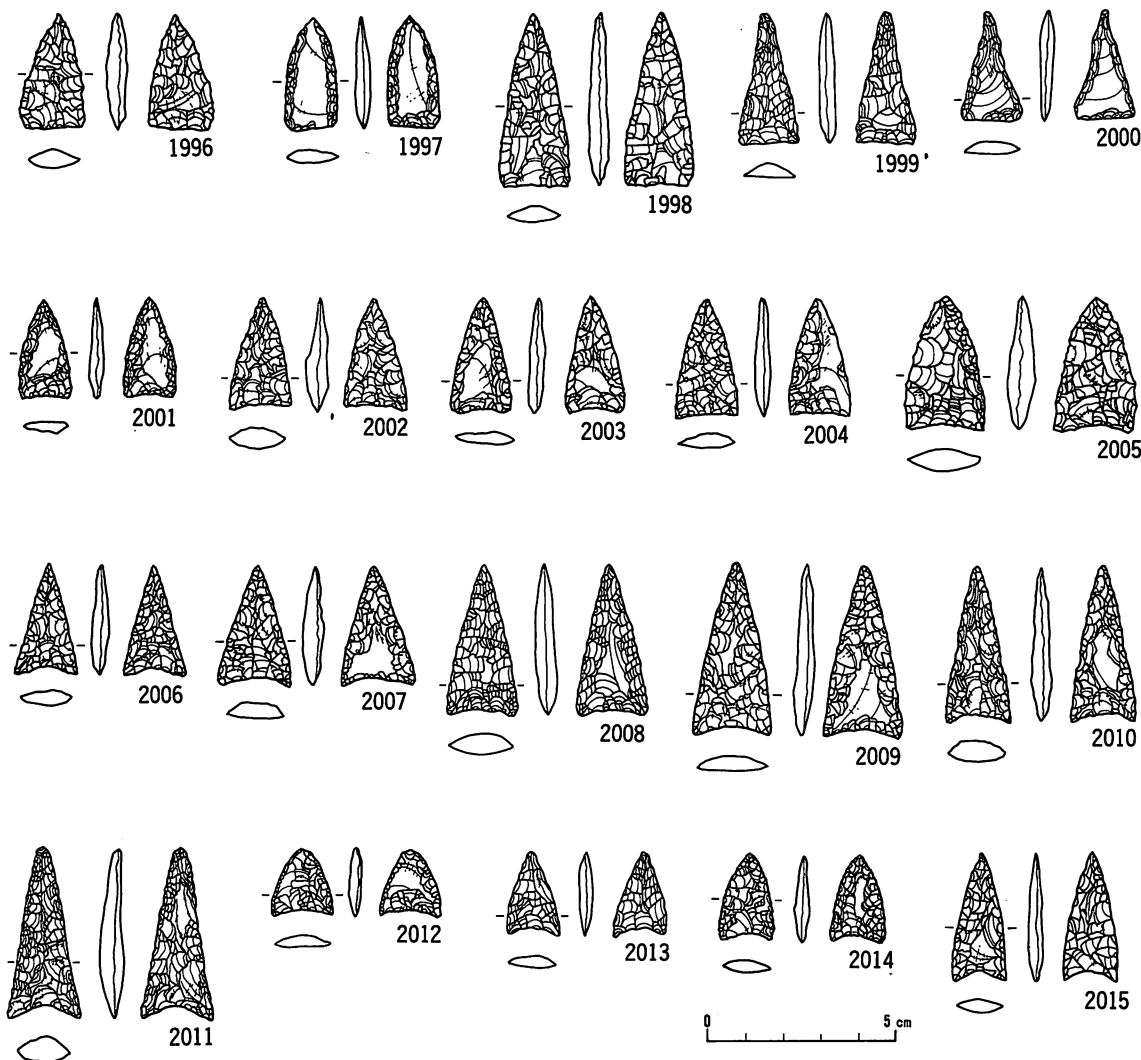
遺構外出土のものは 1点のみである。

I層からの出土であり、出土状況からは時期は特定できない。分析の結果、チタンの含有量が多いことなどから、たたら製鉄によるものの可能性が指摘されている。(付篇5参照)



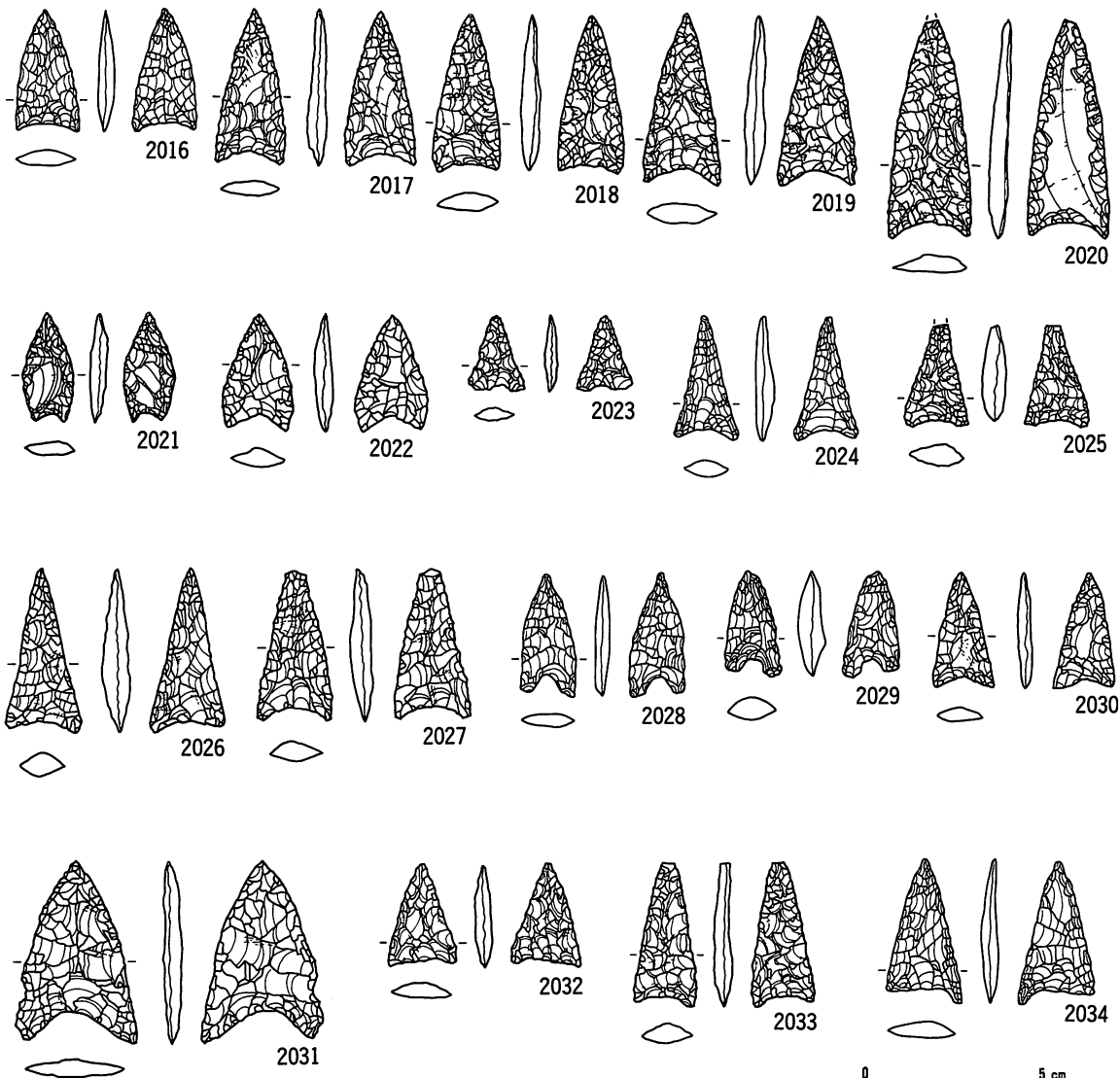
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1976	VII D 4 h	表土	石鏃	珪質泥岩	礮石西部	2.7	1.5	0.4	0.86		I 1	254
1977	VII D 9 d	褐色土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.4	1.5	0.3	0.85		I 1	254
1978	IX D 3 c	I 層	石鏃	流紋岩	礮石西部	3.1	1.3	0.3	1.15		I 1	254
1979	VIII C 1 j	表土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	3.0	1.2	0.3	1.46	幅狭で、扁平である。	I 2	254
1980	VIII C 8 g	I 層	石鏃	珪質泥岩	礮石西部	3.5	1.1	0.5	1.59	巾に対して長めの石鏃である	I 2	254
1981	VIII C 2 i	再堆積層	石鏃	硬質泥岩	礮石西部	3.0	1.3	0.6	1.97	幅狭で、肉厚の盛あり。	I 2	254
1982	VII C 5 j	I 層	石鏃	硬質泥岩	礮石西部	2.8	1.1	0.4	1.03	表、裏とも凹凸があり、断面形がうねる感じである。	I 2	254
1983	VII D 4 g	再堆積層	石鏃	硬質泥岩	礮石西部	2.9	1.0	0.3	0.88		I 2	254
1984	VII C 2 g	暗褐色土	石鏃	硬質泥岩	礮石西部	2.1	1.0	0.5	0.78		I 2	254
1985	IX D 7 g	II 層	石鏃	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	2.1	1.1	0.4	0.90	小振り。	I 2	254
1986	表探		石鏃	粘板岩	北上山地	2.0	1.4	0.2	0.70	薄手で小振りである。	I 2	254
1987	VII C 2 j	I 層	石鏃	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	1.9	1.4	0.35	0.93	対称性に欠け基部縁辺が斜傾する。第一次剥離面を残す。	I 2	254
1988	IX D 1 e	I 層	石鏃	硬質泥岩	礮石西部	2.2	1.6	0.2	0.98		I 2	254
1989	IX D 5 f	III 層	石鏃	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	2.8	1.4	0.5	1.57		I 2	254
1990	IX D 2 h	III 層	石鏃	珪質泥岩	礮石西部	2.9	1.4	0.3	1.42		I 2	254
1991	IX D 5 j	I 層	石鏃	珪質泥岩	礮石西部	3.2	1.5	0.4	2.01		I 2	254
1992	IX D 4 d	I 層	石鏃	珪質極細粒凝灰岩	礮石西部	2.8	1.7	0.5	2.16		I 2	254
1993	X D 1 h	III 層	石鏃	粘板岩	北上山地	3.1	1.9	0.6	2.61	一部に素材の瘤を残す。	I 2	254
1994	VIII C 6 g	I 層	石鏃	珪質泥岩	礮石西部	3.1	1.7	0.3	2.13		I 2	254
1995	V D 9 c	II 層	石鏃	珪質泥岩	礮石西部	3.1	1.9	0.6	2.94	素材の平坦部を一部に残す。表面にはやや凹凸あり。	I 2	254

第419図 遺構外出土遺物 石鏃(1)



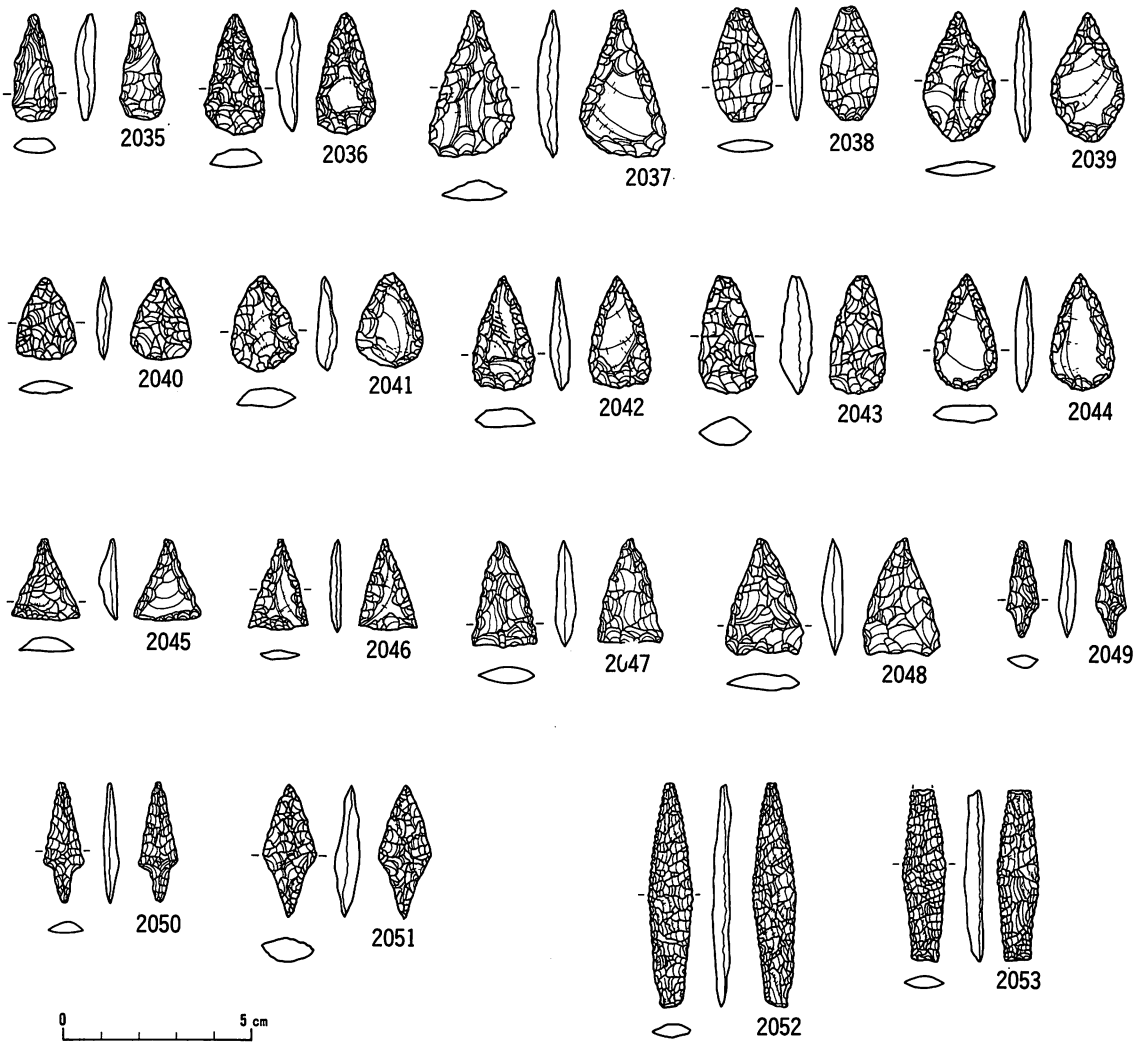
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1996	ⅦC 6 g	再堆積層下位	石鏃	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	3.1	1.8	0.6	2.33		Ⅰ 2	254
1997	ⅦD 3 h	検出面	石鏃	硬質泥質凝灰岩	雫石西部	3.0	1.4	0.4	1.95		Ⅰ 2	254
1998	ⅦB 8 h		石鏃	硬質泥質凝灰岩	雫石西部	4.6	1.9	0.6	3.43		Ⅰ 2	254
1999	不明		石鏃	珪質極細粒凝灰岩	雫石西部	3.5	1.6	0.4	1.85		Ⅰ 4	254
2000	ⅧD 0 i		石鏃	粘板岩	北上山地	2.9	1.6	0.3	1.32		Ⅰ 4	254
2001	ⅦD 1 g		石鏃	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	2.6	1.4	0.3	1.15	表裏とも素材の面を活用して二次加工。	Ⅱ a 2	254
2002	ⅦD 1 j		石鏃	粘板岩	北上山地	2.9	1.6	0.6	2.02	やや厚手。	Ⅱ a 2	255
2003	ⅦC 7 f	Ⅰ層	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	1.6	0.4	1.37		Ⅱ a 2	255
2004	ⅦD 5 b	Ⅰ層	石鏃	硬質泥岩	雫石西部	3.1	1.6	0.4	1.62	素材面を一部に残す。	Ⅱ a 2	255
2005	ⅦC 4 f	Ⅰ層	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	3.5	2.1	0.6	3.65		Ⅱ a 2	255
2006	ⅦD 6 b	斜面トレンチ	石鏃	粘板岩	北上山地	2.9	1.7	0.4	1.25		Ⅱ b 1	255
2007	ⅦC 7 f	再堆積層	石鏃	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	3.2	1.9	0.5	1.92		Ⅱ b 1	255
2008	ⅦC 5 j	Ⅱ層	石鏃	粘板岩	北上山地西縁	3.8	1.9	0.5	3.26		Ⅱ b 1	255
2009	ⅦD 7 a	風倒木	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	4.6	2.1	0.4	3.13		Ⅱ b 1	255
2010	ⅦD 8 g	Ⅱ層	石鏃	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	4.1	1.7	0.5	2.82		Ⅱ b 1	255
2011	ⅦD 5 a	Ⅰ層	石鏃	珪質極細粒凝灰岩	雫石西部	4.6	2.0	0.6	3.31		Ⅱ b 1	255
2012	ⅦD 9 h		石鏃	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	1.8	1.5	0.3	0.75	表面に素材の平坦部を残す。先端部の先端のごく一部を欠損。	Ⅱ b 2	255
2013	ⅧD 3 g		石鏃	粘板岩	北上山地	2.2	1.4	0.3	0.88		Ⅱ b 2	255
2014	ⅦC 2 d	再堆積層	石鏃	珪質極細粒凝灰岩	雫石西部	2.3	1.5	0.4	0.97		Ⅱ b 2	255
2015	ⅦD 0 h		石鏃	珪質泥岩	雫石西部	2.4	1.4	0.4	1.56		Ⅱ b 2	255

第420図 遺構外出土遺物 石鏃(2)



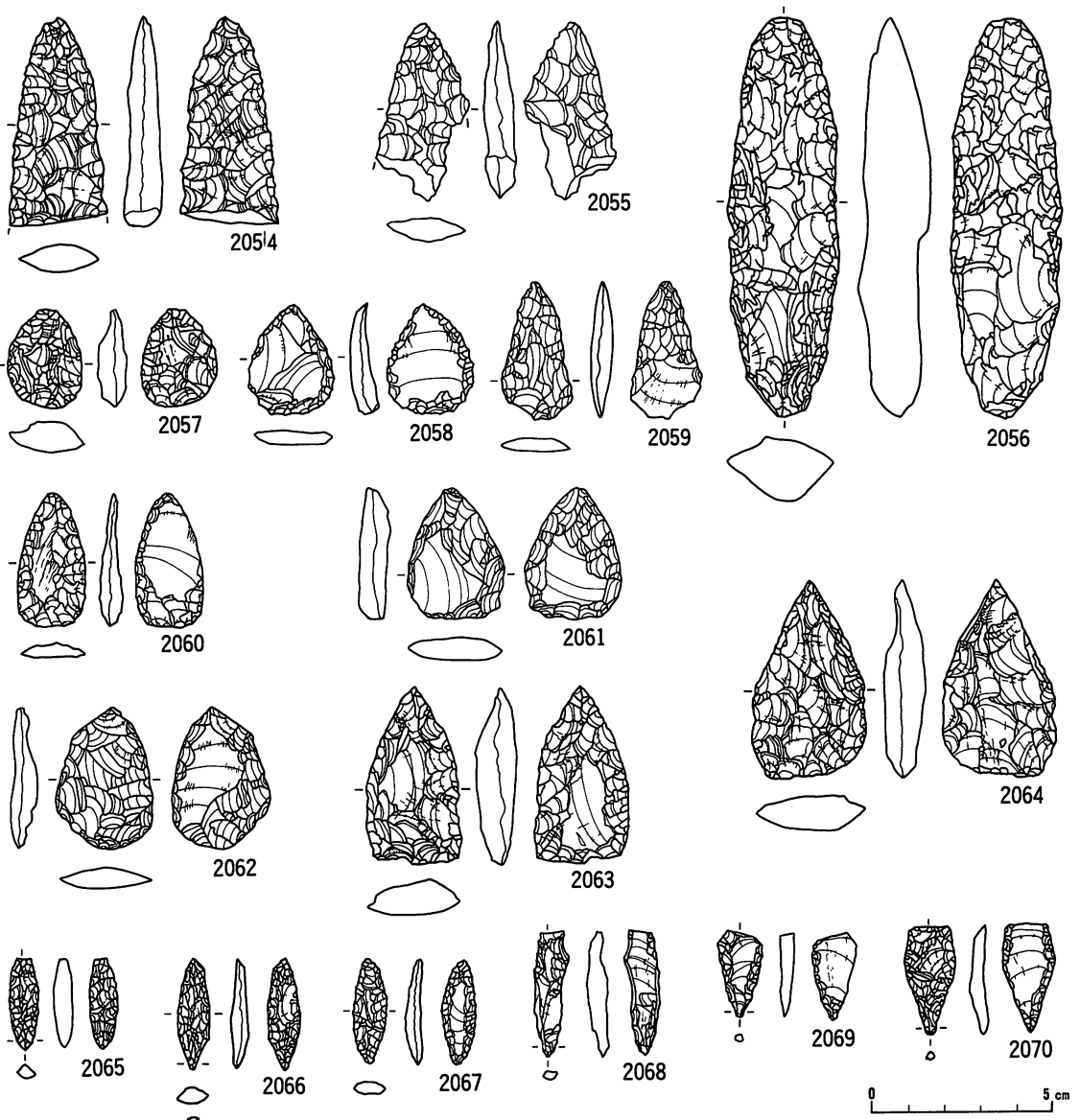
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2016	KD 3 i	Ⅲ層上面	石鏃	珉質泥岩	礫石西部	3.3	1.7	0.4	2.09		Ⅱ b 2	255
2017	Ⅶ C 6 e	再堆積層	石鏃	珉質泥岩	礫石西部	4.2	1.9	0.5	3.04	中央部に素材の平坦面を残す。	Ⅱ b 2	255
2018	Ⅶ C 4 h	Ⅱ層	石鏃	粘板岩	北上山地	4.3	1.8	0.5	3.08		Ⅱ b 2	255
2019	Ⅶ D 7 f	再堆積層	石鏃	珉質極細粒凝灰岩	礫石西部	4.6	2.1	0.6	3.91		Ⅱ b 2	255
2020	Ⅶ D 0 f	Ⅰ層	石鏃	珉質極細粒凝灰岩	礫石西部	(6.0)	2.3	0.6	(6.17)	裏面の調整は弱く、片刃のような出来上がりとなる。	Ⅱ b 2	255
2021	Ⅶ C 2 f	再堆積層	石鏃	珉質泥岩	礫石西部	3.0	1.3	0.4	1.34		Ⅱ b 3	255
2022	Ⅶ C 2 j	整地層下	石鏃	珉質極細粒凝灰岩	礫石西部	3.3	2.6	0.6	2.42		Ⅱ b 3	255
2023	Ⅶ C 9 i	再堆積層	石鏃	硬質泥岩	礫石西部	2.1	1.5	0.4	0.63	脚部がやや強く張り出す。	Ⅱ b 4	255
2024	KD 5 j	Ⅰ層	石鏃	珉質泥岩	礫石西部	3.3	1.8	0.4	1.64		Ⅱ b 4	256
2025	Ⅶ D 4 h	再堆積層	石鏃	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	(2.8)	1.8	0.6	(2.16)	肉厚。尖頭部の一部欠損。使用による欠損かと思われる。	Ⅱ b 4	256
2026	Ⅶ E 7 b	表探	石鏃	粘板岩	北上山地	4.5	2.0	0.8	3.82		Ⅱ b 4	256
2027	Ⅶ C 4 h	再堆積層下位	石鏃	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	4.1	2.0	0.6	3.64	尖頭部先端が欠損。	Ⅱ b 4	256
2028	X I C 8 b	Ⅰ層	石鏃	珉質泥岩	礫石西部	3.3	1.5	0.3	1.73	基部の挟りが大きい。	Ⅱ c 2	256
2029	IX E 4 a	Ⅰ層	石鏃	粘板岩	北上山地	2.9	1.5	0.6	2.58	肉厚で横の断面形が紡錘状。	Ⅱ c 2	256
2030	Ⅶ C 4 h	表土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	3.1	1.7	0.4	1.54	二次加工が丁寧。基部の凹部の挟りは二等辺三角形。	Ⅱ d 2	256
2031	Ⅶ D 8 f	Ⅰ層	石鏃	珉質泥岩	礫石西部	5.0	3.3	0.5	6.33	脚部の一部に破損の状況が観察される。	Ⅱ d 2	256
2032	Ⅶ D 0 f	Ⅰ層	石鏃	硬質泥岩	礫石西部	2.8	1.9	0.4	2.06	側辺は一方は外弯、他の一方は直線。	Ⅱ e 1	256
2033	Ⅶ C 5 g	再堆積層	石鏃	珉質泥岩	礫石西部	3.9	1.7	0.5	3.07	尖頭部先端が欠損。	Ⅱ e 1	256
2034	X I C 6 g	黒色土上面	石鏃	珉質泥岩	礫石西部	4.0	2.0	0.4	2.47		Ⅱ e 1	256

第421図 遺構外出土遺物 石鏃(3)



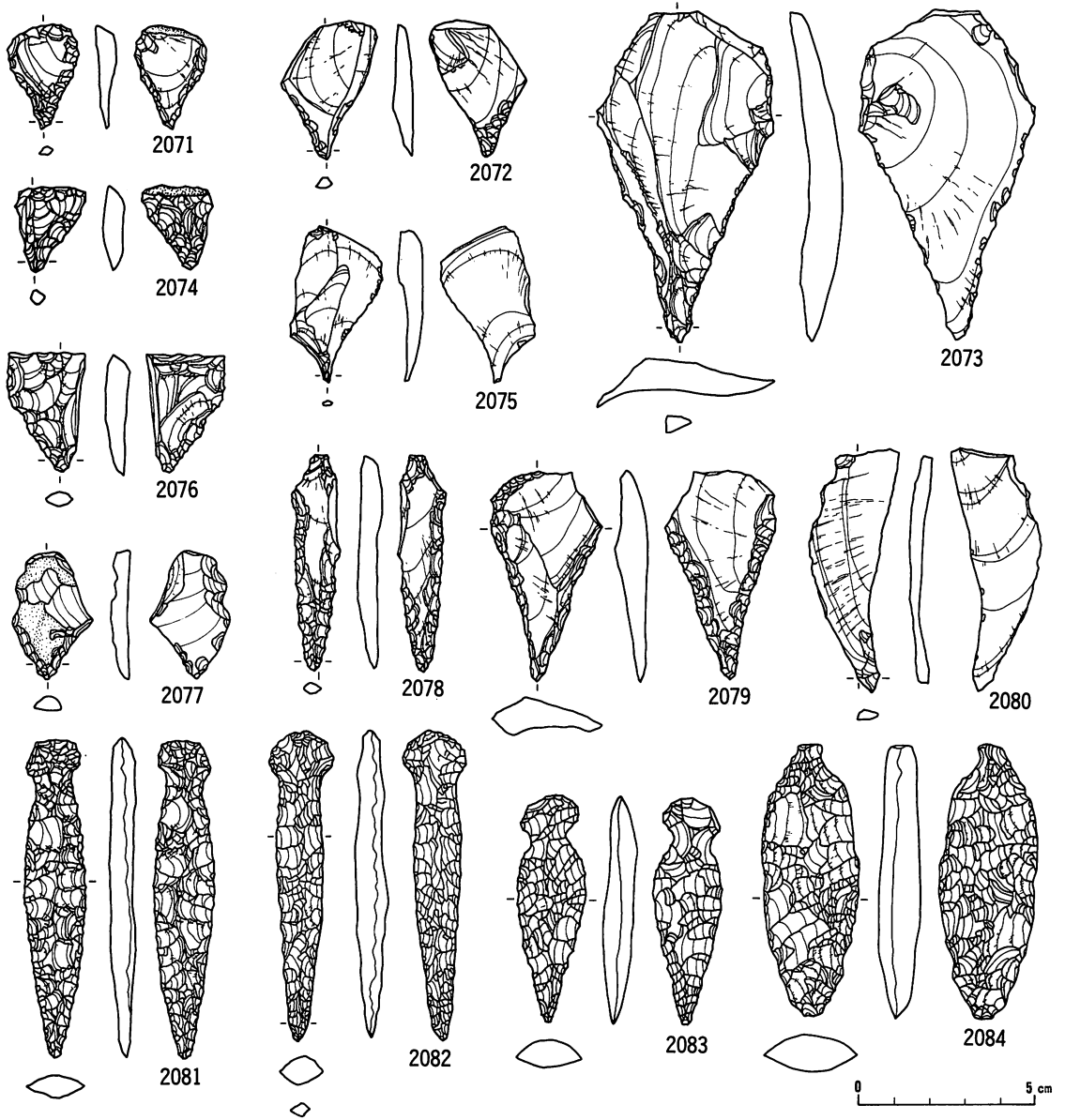
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2035	表採		石鏃	粘板岩	北上山地	2.8	1.2	0.3	1.59		Ⅲ 1	256
2036	Ⅷ C 5 f	暗褐色土	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	3.2	1.6	0.5	2.09		Ⅲ 1	256
2037	Ⅶ C 0 j		石鏃	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	3.9	2.3	0.6	3.67		Ⅲ 1	256
2038	Ⅸ D 6 g	表土	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	3.3	1.6	0.2	1.55	尖頭部先端欠損。	Ⅲ 1	256
2039	Ⅶ C 4 h	再堆積層下位	石鏃	粘板岩	北上山地	3.3	1.9	0.4	2.27		Ⅲ 1	256
2040	Ⅶ E 4 a		石鏃	チャート	北上山地	2.2	1.6	0.4	1.09		Ⅲ 2	256
2041	Ⅶ C 9 f	I層	石鏃	粘板岩	北上山地	2.5	1.8	0.5	2.16		Ⅲ	256
2042	Ⅶ D 4 h		石鏃	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	3.0	1.6	0.5	2.08	素材の面を両面に残す。	Ⅲ 2	256
2043	Ⅶ C 6 g	再堆積層下位	石鏃	硬質泥質凝灰岩	雫石西部	3.1	1.5	0.9	3.47	断面形が菱形になるような肉厚の石鏃である	Ⅲ 2	256
2044	Ⅶ D 3 i	褐色土直上	石鏃	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	3.0	1.7	0.4	2.16	両面とも素材面を残し、扁平である。	Ⅲ 2	256
2045	Ⅸ E 8 a		石鏃	粘板岩	北上山地	2.2	1.8	0.4	1.26		Ⅲ 4	256
2046	Ⅶ C 7 d	再堆積層下位	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	2.4	1.5	0.3	0.82		V 1	256
2047	Ⅶ D 3 g		石鏃	硬質泥岩	雫石西部	2.8	1.7	0.4	2.34		V 1	256
2048	Ⅸ D 4 h	Ⅱ層	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	3.1	2.0	0.5	2.81		V 2	257
2049	Ⅸ C 4 j	I層	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	2.6	0.9	0.4	0.67	身部 2cm	Ⅵ 1	257
2050	X I C 6 f	Ⅱ層上位	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	3.2	1.1	0.4	0.92	身部 2.2cm	Ⅵ 1	257
2051	Ⅶ C 5 j	Ⅱ層	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	3.6	1.4	0.6	2.10	やや肉厚の盛あり。	Ⅵ 1	257
2052	X I C 5 e	Ⅱ層	尖頭器	粘板岩	北上山地西縁	6.0	1.1	0.4	2.67			257
2053	X I C 4 d	Ⅱ層	尖頭器	硬質泥岩	新第三系中新統	(4.6)	1.1	0.3	(2.09)			257

第422図 遺構外出土遺物 石鏃(4)・尖頭器(1)



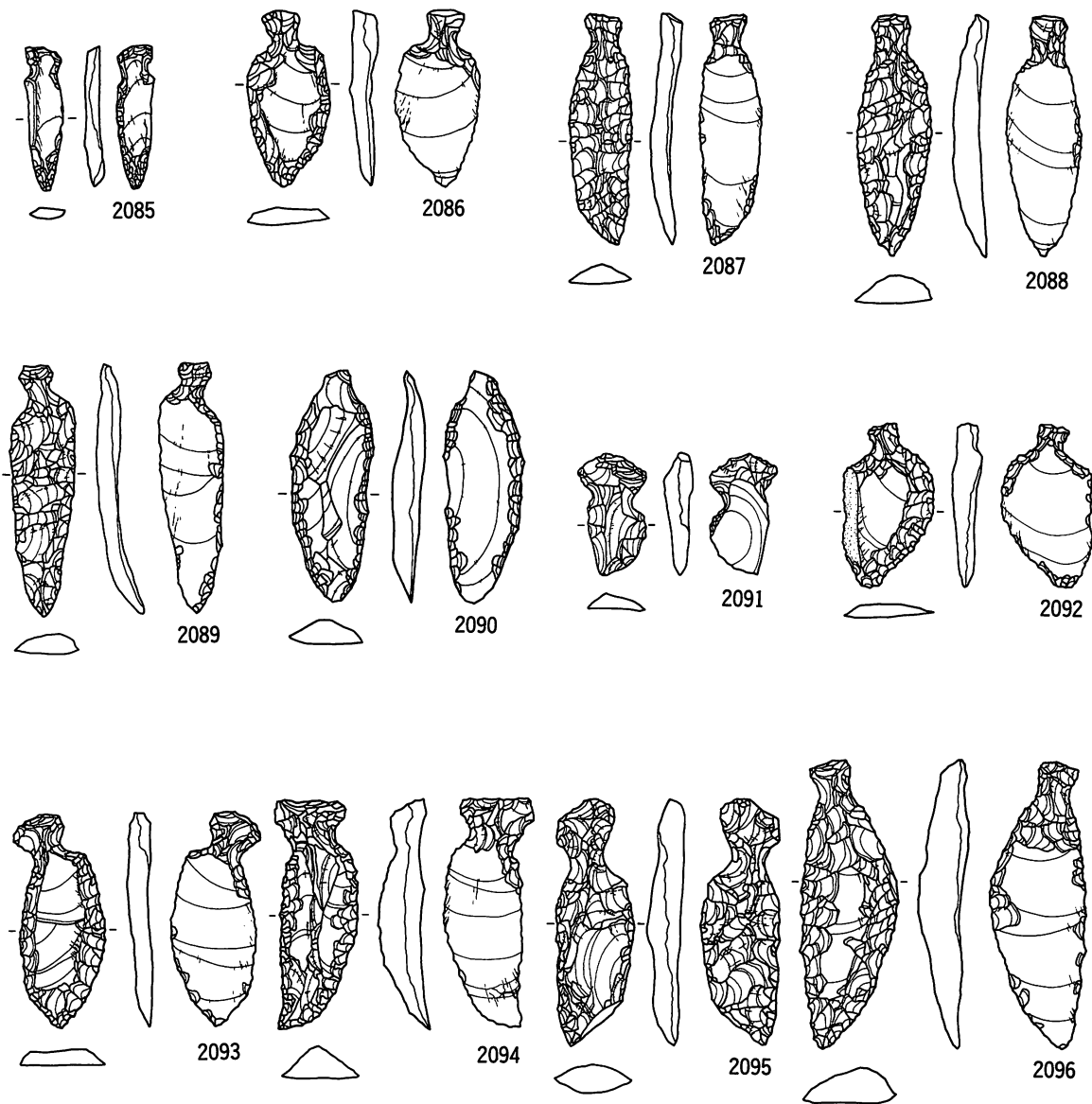
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2054	VII E 6 a	表採	尖頭器	硬質泥岩	礮石西部	(5.6)	2.7	1.0	(14.94)		II	257
2055	VII C 5 g		尖頭器	硬質泥質凝灰岩	礮石西部	(4.8)	(2.2)	(0.7)	(6.00)		II	257
2056	VII D 7 a		尖頭器	硬質泥質凝灰岩	礮石西部	11.0	3.7	1.7	60.87	尖頭部はやや丸み。	II	257
2057	VIII C 3 f	暗褐色土	尖頭器様石器	珪質泥岩	礮石西部	2.7	2.0	0.8	4.31			257
2058	VIII D 8 i	II層	尖頭器様石器	硬質泥岩	礮石盆地西部	3.0	2.4	0.5	3.23			257
2059	VII D 4 j	表土	尖頭器様石器	珪質泥岩	礮石西部	3.8	2.0	0.5	3.95			257
2060	VI D 0 a	表採	尖頭器様石器	硬質泥質凝灰岩	礮石西部	3.7	1.9	0.7	3.82	尖頭部はやや丸みがかっている。裏面は素材面を残す。		257
2061	No.31トレンチ		尖頭器様石器	硬質泥岩	礮石西部	3.6	2.6	0.8	9.11			257
2062	VII C 4 g	再堆積層	尖頭器様石器	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	3.9	2.6	0.6	7.11			257
2063	VII D 6 b	表土	尖頭器様石器	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	4.9	2.6	1.0	11.17			257
2064	VII E 7 a	黒色土	尖頭器様石器	珪質泥岩	礮石西部	5.5	3.1	1.0	16.67			257
2065	VIII D 1 a	II層	石錐	粘板岩	北上山地	2.5	0.8	0.5	1.07			257
2066	VII D 0 c		石錐	珪質極細凝灰岩	礮石西部	3.0	0.9	0.5	1.09	石錐の可能性あり。		257
2067	VII C 1 i	I層	石錐	珪質泥岩	礮石西部	2.9	0.9	0.5	1.09			258
2068	IX D 5 i	II層	石錐	硬質泥岩	礮石西部	3.5	1.0	0.2	1.73			258
2069	VII D 5 i	表土直下	石錐	粘板岩	北上山地	2.4	1.2	0.4	1.09	尖頭部のみ二次加工。他は素材面を残す。		258
2070	不明		石錐	硬質泥質凝灰岩	礮石西部	3.0	1.4	0.5	1.49	鏃に似るが、抉り・瘤有り。		258

第423図 遺構外出土遺物 尖頭器(2)・尖頭器様石器・石錐(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2071	IX E 区		石錐	粘板岩	北上山地	3.0	2.0	0.5	3.40			258
2072	X I C 6 c	II層上面	石錐	珪質泥岩	雫石西部	3.8	2.8	0.6	5.89			258
2073	VII C 9 f	I層	石錐	珪質泥岩	雫石西部	9.3	5.0	0.9	37.52			258
2074	VII D 4 h		石錐	硬質泥岩	雫石西部	2.3	1.9	0.6	2.76	尖頭部がやや摩耗していることから石錐とした。		258
2075	VII C 6 g	再堆積層	石錐	硬質泥岩	雫石西部	4.4	2.7	0.7	5.84			258
2076	IX D 9 j	II層	石錐	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.4	2.2	0.7	5.34			258
2077	IX D 2 h	II層	石錐	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.6	2.3	0.4	4.60			258
2078	VII D 6 h	表土直下	石錐	粘板岩	北上山地	6.1	1.9	0.3	5.22			258
2079	IX D 2 h	I層	石錐	硬質泥岩	雫石西部	5.9	3.1	0.9	10.20			258
2080	VII D 7 i	暗褐色土	石錐	珪質泥岩	雫石西部	6.9	2.6	0.5	6.15			258
2081	VII D 0 c	II層	石匙	珪質泥岩	雫石西部	9.0	1.7	0.7	10.36	刺突具。	I a 1	258
2082	VI D 0 j		石匙	硬質泥岩	新第三系中新統	8.8	1.8	0.8	10.22		I a 1	258
2083	VIII C 2 j	I層	石匙	赤色凝灰岩	北上山地	6.5	2.0	0.8	9.15	鋭い尖頭部を作り出す。素材の瘤を一部残す。	I a 1	258
2084	VII C 6 f	再堆積層	石匙	黒曜石	北海道置戸	7.8	2.7	1.0	23.72		I a 1	258

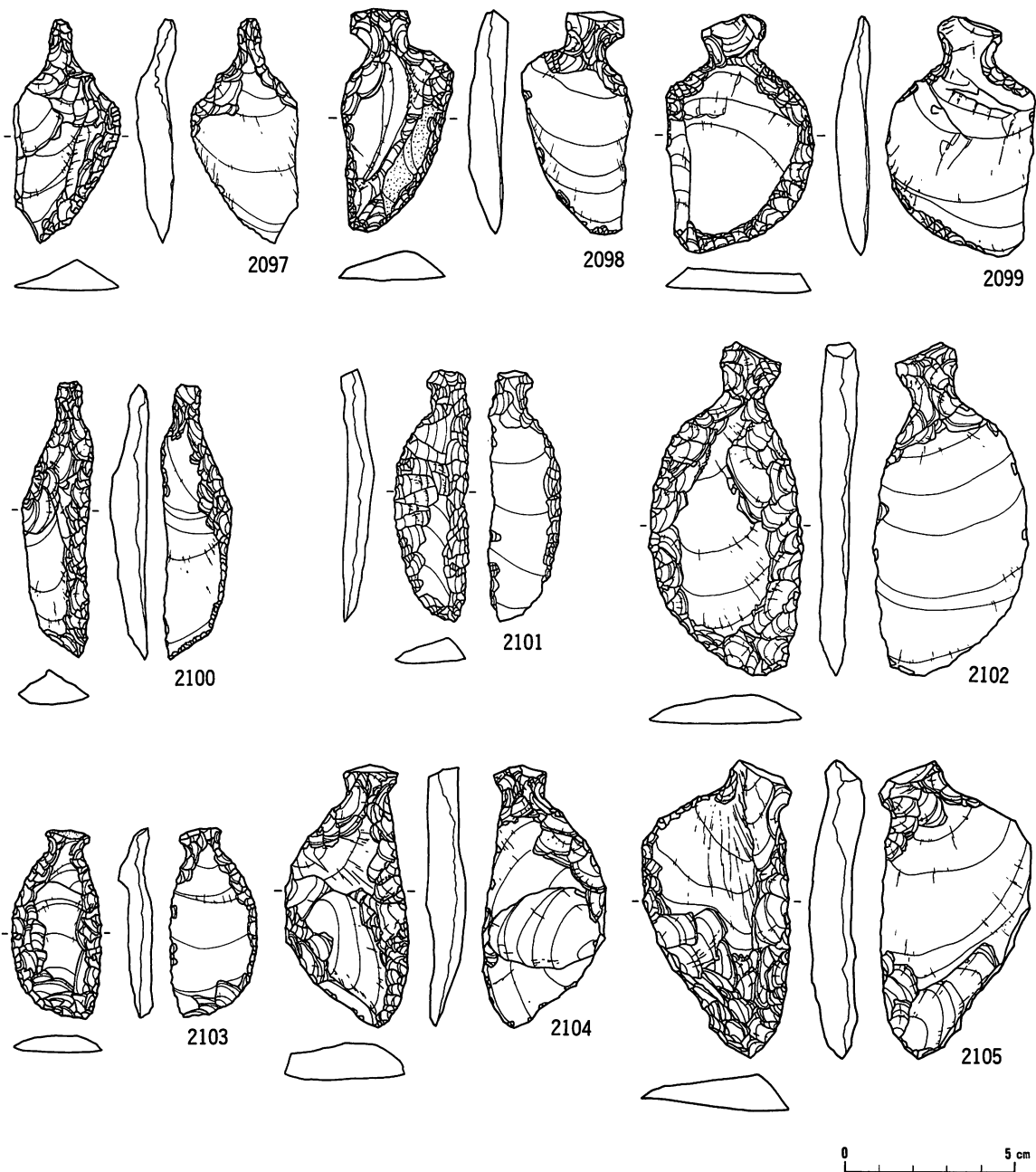
第424図 遺構外出土遺物 石錐(2)・石匙(1)



0 5 cm

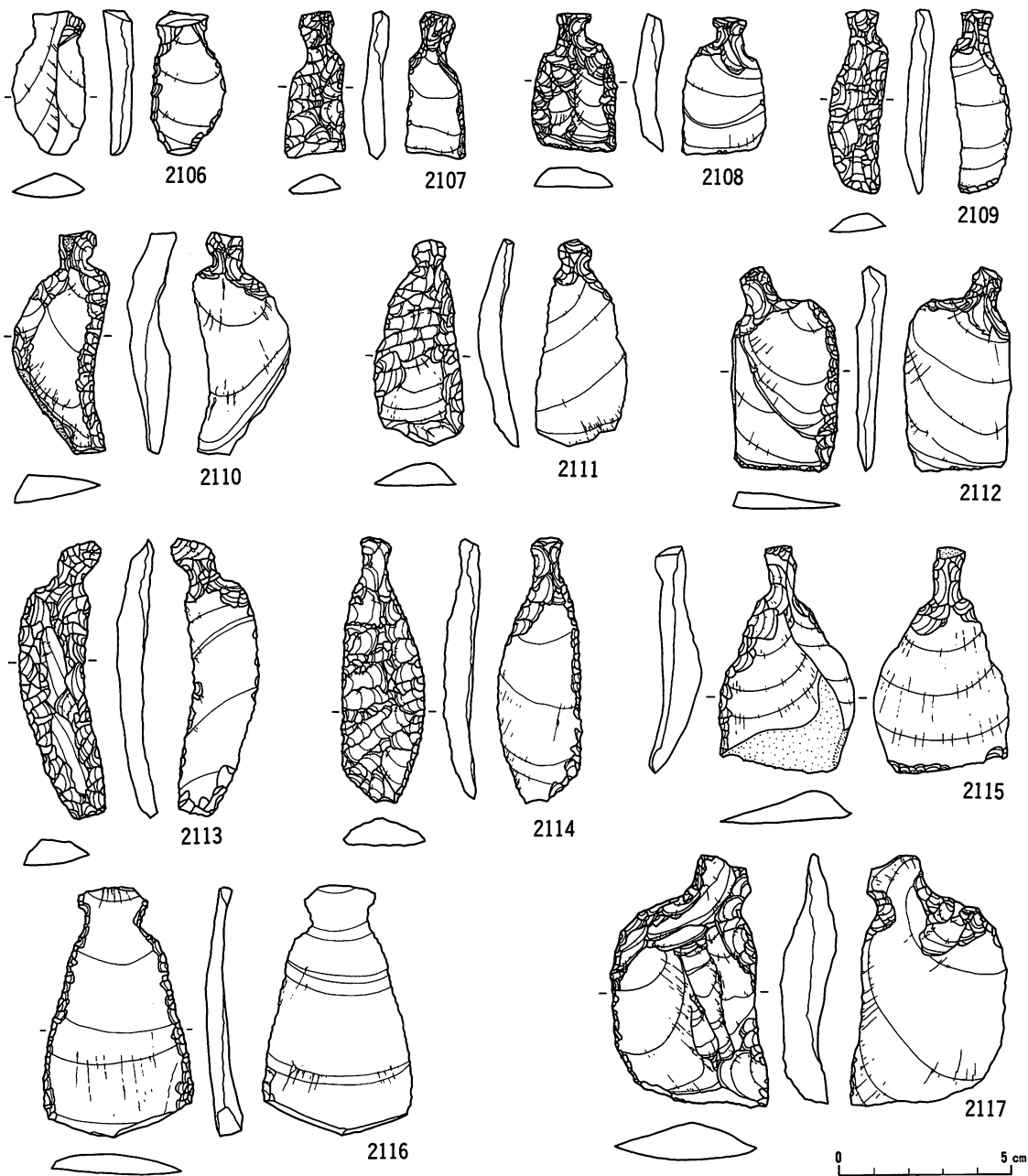
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2085	VIII D 2 i		石匙	粘板岩	北上山地	4.0	1.1	0.4	1.82		I a 1	259
2086	IX D 1 f	II層	石匙	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	4.9	2.4	0.8	6.58		I a 1	259
2087	IX D 5 j	II層	石匙	硬質泥岩	礮石西部	6.5	1.8	0.8	5.52		I a 1	259
2088	IX D 1 i	I層	石匙	硬質泥岩	礮石西部	6.8	2.1	0.9	10.15		I a 1	259
2089	X D 2 g	III層	石匙	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	7.1	1.8	1.3	7.81		I a 1	259
2090	X D 3 f		石匙	硬質泥岩	礮石盆地西部	6.4	2.2	0.8	9.46		I a 1	259
2091	VIII C 2 j	I層	石匙	珪質泥岩	礮石西部	3.4	1.9	0.8	3.54	刃部、身部よりつまみ部の方が大ぶり。	I a 2	259
2092	IX D 1 f	II層	石匙	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	4.5	2.5	0.4	5.56	凹刃。	I a 2	259
2093	IX D 8 j	I層	石匙	粘板岩	北上山地	6.0	2.6	0.7	8.57		I a 2	259
2094	表採		石匙	珪質泥岩	礮石西部	6.4	2.1	1.1	12.72		I a 2	259
2095	VIII C 4 f	暗褐色土	石匙	珪質泥岩	礮石西部	6.9	2.3	0.8	12.73		I a 2	259
2096	IX D 5 f	II層	石匙	珪質極細粒凝灰岩	礮石西部	8.1	2.8	1.4	19.98		I a 2	259

第425図 遺構外出土遺物 石匙(2)



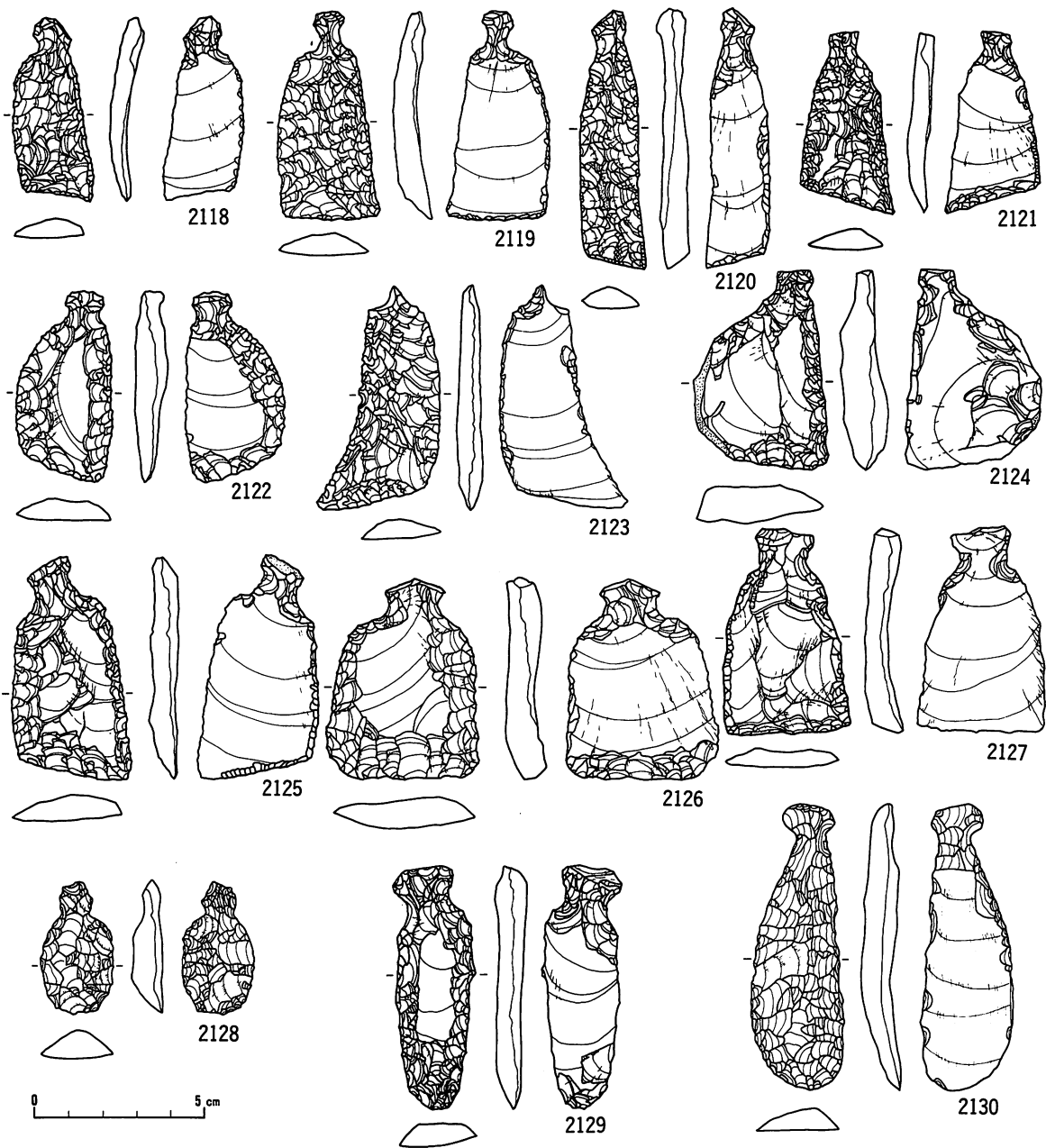
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2097	X D 2 g	Ⅲ層	石匙	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	6.2	3.1	0.9	12.17		I a 2	259
2098	VII D 3 e	再堆積層	石匙	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	6.6	3.3	0.9	18.94	全周加工。	I a 2	259
2099	VII C 7 f	再堆積層	石匙	硬質泥岩	礫石西部	7.0	4.4	0.5	22.87	全周加工。	I a 2	259
2100	VII D 2 j	表土直下	石匙	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	8.2	2.1	1.1	12.67		I a 2	260
2101	X E 6 f		石匙	硬質泥岩	新第三系中新統	7.3	2.1	0.7	10.69		I a 2	260
2102	VII D 7 f	再堆積層	石匙	硬質泥岩	礫石西部	9.8	4.6	0.8	38.39	尖頭部やや丸味がある。	I a 2	260
2103	X D 4 h		石匙	珪質泥岩	礫石西部	5.5	2.6	1.7	10.07		I a 2	260
2104	VII C 4 f		石匙	珪質泥岩	礫石西部	7.7	3.6	1.0	27.74		I a 2	260
2105	VII C 5 h	I層	石匙	粘板岩	北上山地	8.7	4.4	1.0	39.20		I a 2	260

第426図 遺構外出土遺物 石匙(3)



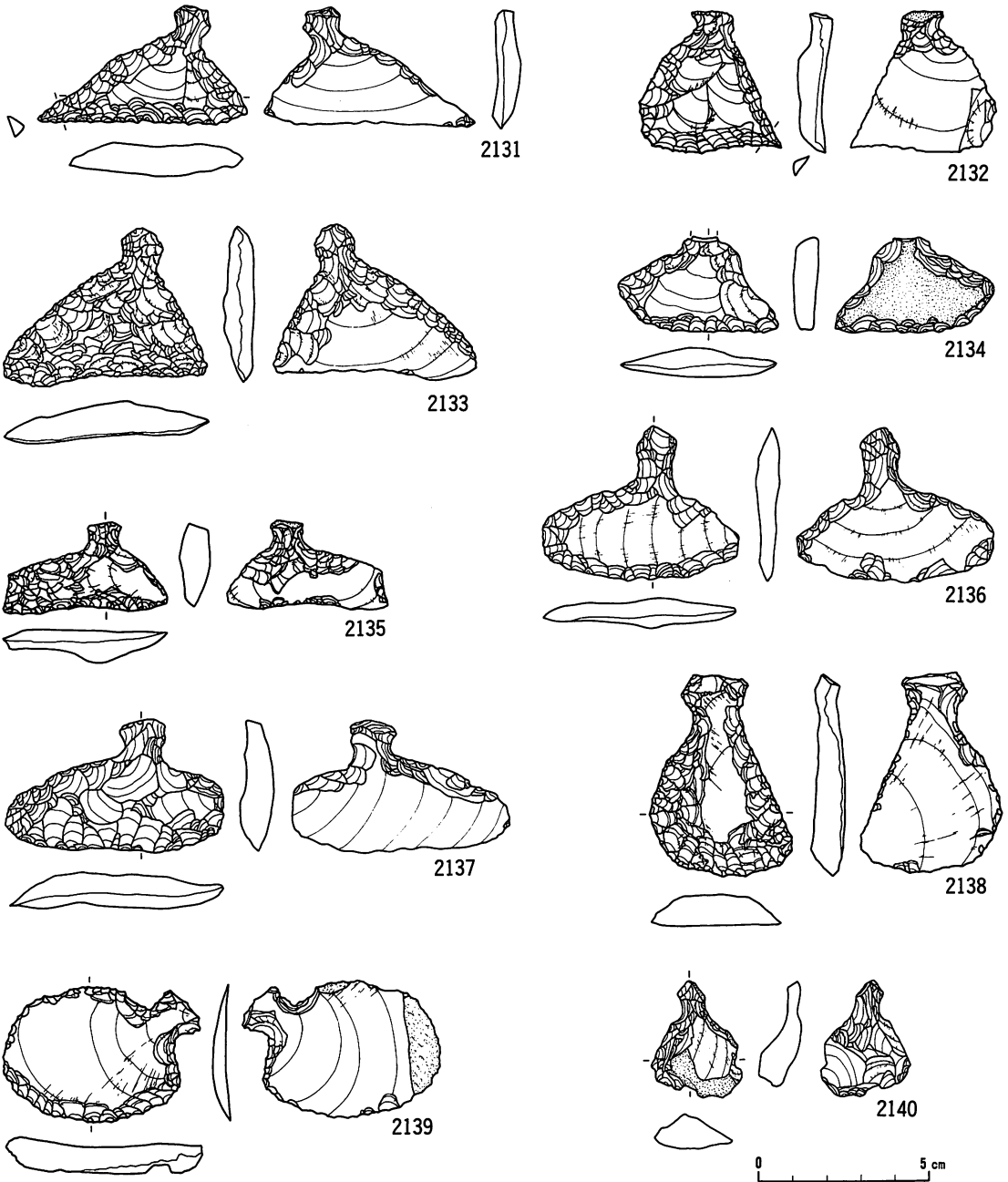
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2106	XD 2 g	再堆積層	石匙	珪長質細粒凝灰岩	雫石西部	4.1	2.1	0.9	5.02		I b 1	260
2107	VI D 7 f	再堆積層	石匙	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	4.3	1.7	0.6	4.11		I b 1	260
2108	VI D 6 h	検出面	石匙	珪質泥岩	雫石西部	4.0	2.4	0.6	6.27		I b 1	260
2109	IX E 1 a		石匙	珪質泥岩	雫石西部	5.4	1.8	0.8	5.31		I b 1	260
2110	VI E 6 a		石匙	珪質泥岩	雫石西部	6.4	2.8	0.8	13.48		I b 1	260
2111	XD 8 a	表土	石匙	硬質泥岩	雫石西部	6.0	2.6	1.2	10.49		I b 1	260
2112	VI D 4 h		石匙	硬質泥岩	雫石西部	6.0	3.1	0.5	12.02		I b 1	260
2113	IX D 5 g		石匙	珪質泥岩	雫石西部	8.0	2.4	1.1	13.42		I b 1	260
2114	VC 0 h	木の切り株	石匙	珪質泥岩	雫石西部	7.7	2.4	0.7	12.94		I b 1	261
2115	VI D 3 i	I層	石匙	硬質泥岩	雫石西部	6.6	3.9	1.3	20.43		I b 1	261
2116	IX D 3 j	II層	石匙	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	7.2	4.4	1.0	21.60		I b 1	261
2117	VI C 0 j	再堆積層	石匙	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	7.3	4.5	1.2	34.16		I b 1	261

第427図 遺構外出土遺物 石匙(4)



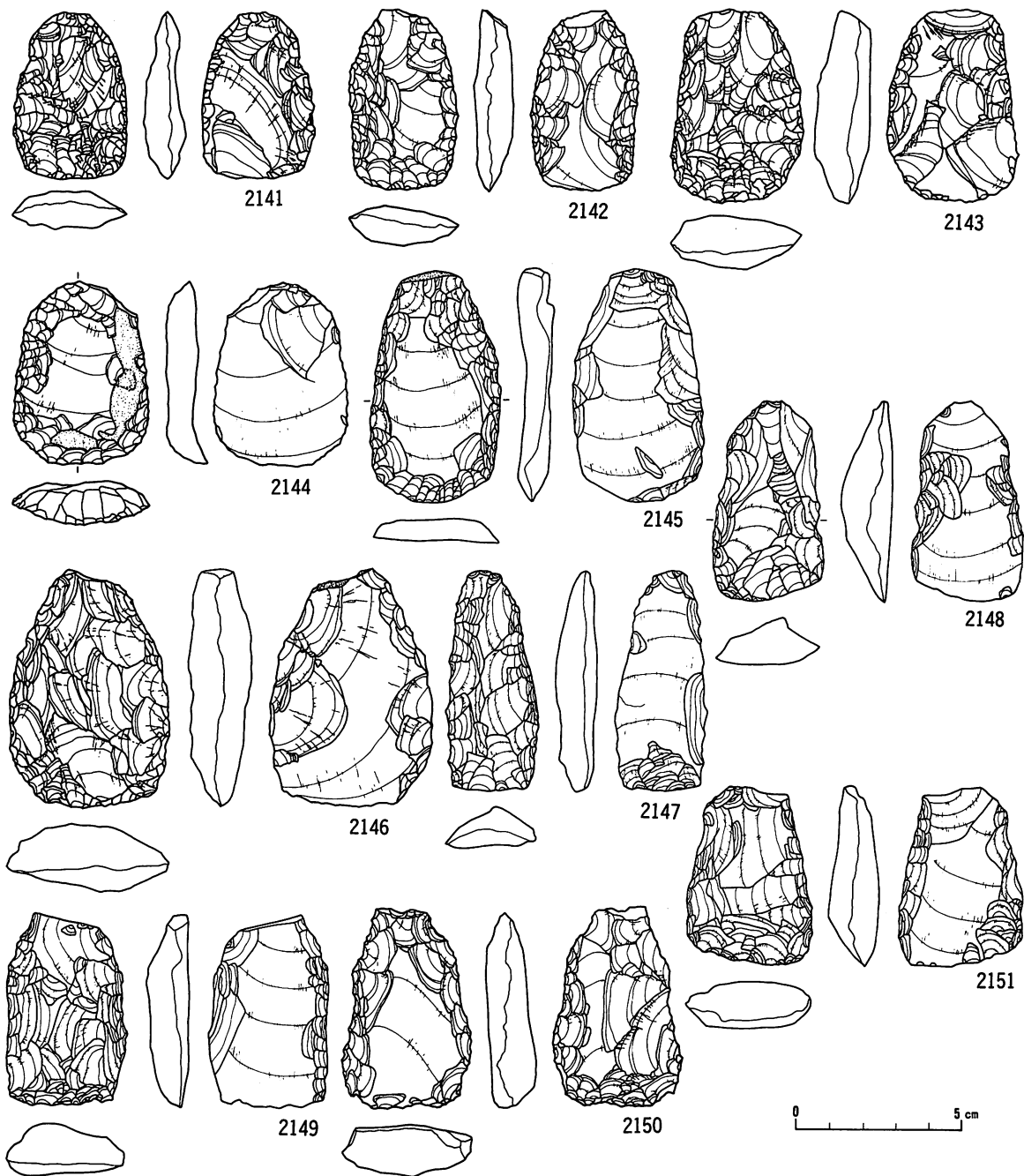
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2118	ⅨD 7 h	I 層	石匙	硬質泥岩	隼石西部	5.5	2.4	1.0	7.34		I b 2	261
2119	ⅦD 7 b	I 層表土直下	石匙	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	6.2	3.0	0.6	12.76		I b 2	261
2120	ⅨE 3 a		石匙	硬質泥岩	隼石西部	7.7	1.9	0.7	8.98		I b 2	261
2121	ⅦD 3 h	検出面	石匙	粘板岩	北上山地	5.3	2.7	0.6	8.09		I b 2	261
2122	X D 3 h	再堆積層	石匙	硬質泥岩	隼石西部	5.6	2.9	0.6	12.55		I b 2	261
2123	表採		石匙	珪質極細粒凝灰岩	隼石西部	6.2	2.9	0.7	12.36	凹刃。	I b 2	261
2124	ⅦC 0 b	再堆積層	石匙	粘板岩	北上山地	5.8	3.9	1.1	27.30		I b 2	261
2125	X I D 6 a	I 層	石匙	珪質泥岩	隼石西部	6.4	3.4	0.7	16.09		I b 2	261
2126	ⅨD 2 h	Ⅱ層	石匙	珪質泥岩	隼石西部	6.0	4.5	1.2	28.56		I b 2	261
2127	ⅦD 1 g		石匙	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	6.1	3.7	0.5	17.04		I b 2	261
2128	ⅦD 9 b	表土直下	石匙	黒曜石	青森出来島	3.9	2.1	0.8	6.58		I b 2	262
2129	ⅦD 0 f	表土	石匙	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	7.2	2.4	0.7	14.76		I b 2	262
2130	ⅨE 1 b		石匙	珪質泥岩	隼石西部	8.4	2.7	0.8	19.12		I b 2	262

第428図 遺構外出土遺物 石匙(5)



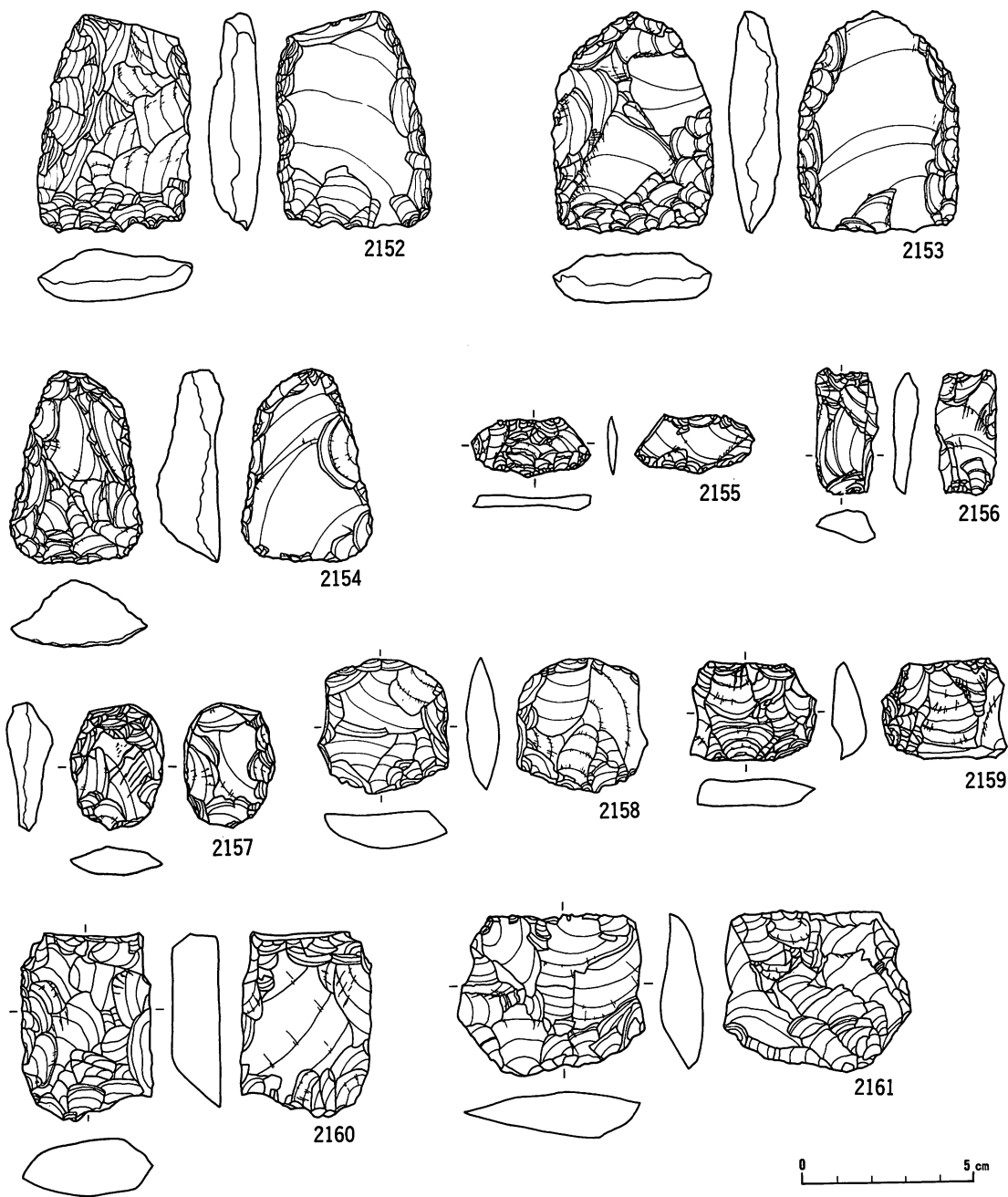
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2131	VIC 5 i	I層	石匙	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	3.4	6.1	0.7	10.55		II a 2	262
2132	XI区トレンチ	盛土	石匙	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	4.0	3.6	0.6	8.94		II a 2	262
2133	VC 0 g	I層	石匙	珪質泥岩	雫石西部	4.6	5.9	0.9	17.11		II a 2	262
2134	No17トレンチ	盛土	石匙	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	2.8	4.2	0.8	10.06		II a 2	262
2135	VID 7 c	III層	石匙	硬質泥岩	雫石西部	2.6	4.7	0.9	6.70	全周加工。	II b	262
2136	VID 4 f	再堆積層	石匙	硬質泥岩	雫石西部	4.5	5.7	0.7	14.35	全周加工。	II b	262
2137	VIC 6 h	II層	石匙	珪質泥岩	雫石西部	3.8	6.4	0.8	20.85	全周加工。	II b	262
2138	VID 9 c	II層	石匙	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	5.8	4.1	0.9	19.04		III	262
2139	No25トレンチ	盛土	石匙	硬質泥岩	雫石西部	5.5	4.0	0.4	13.17	全周加工。	III	262
2140	IXD 1 d	I層	石匙	黒曜石	雫石	3.4	2.6	1.0	7.05	未製品。	IV	262

第429図 遺構物外出土遺物 石匙(6)



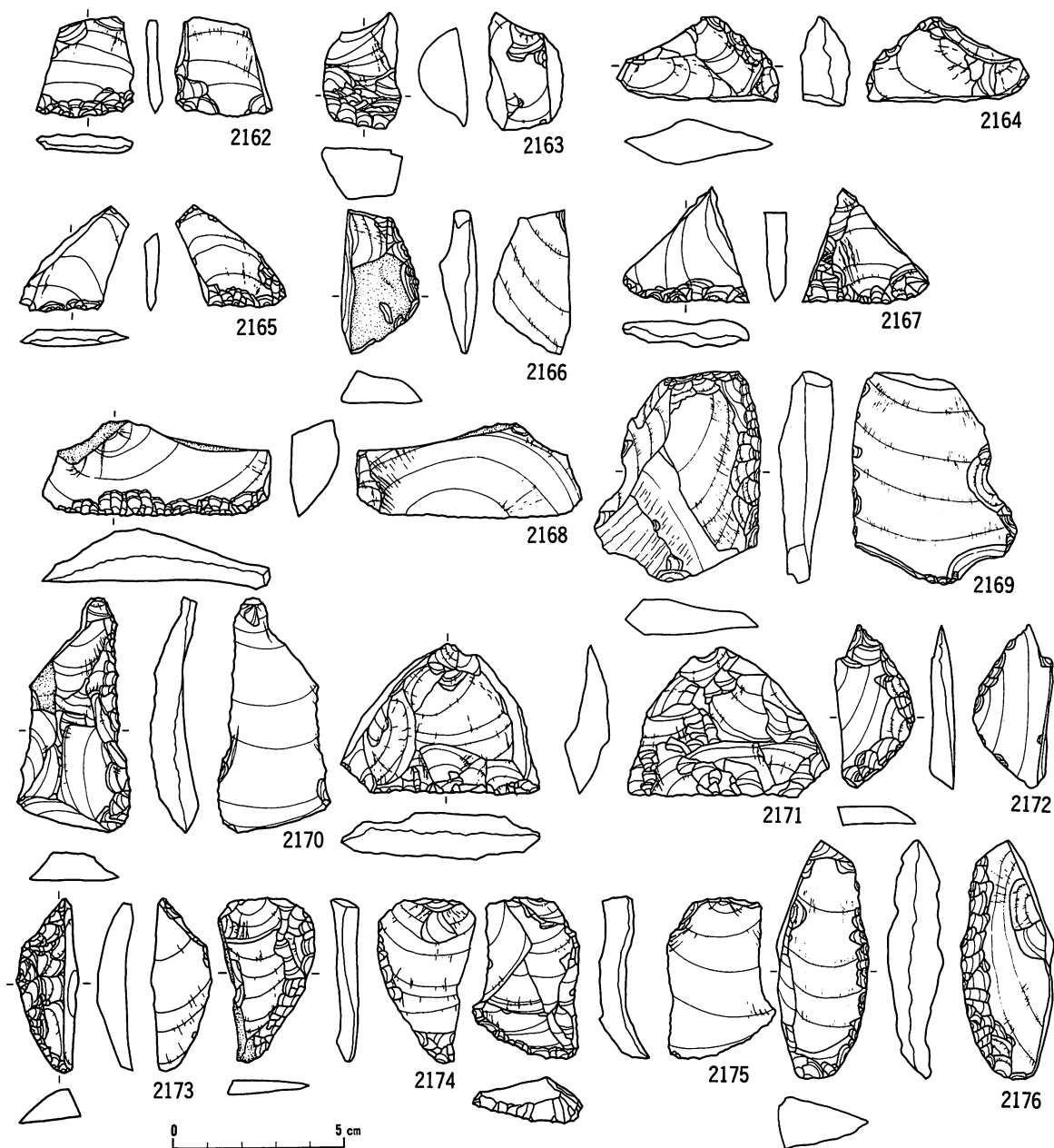
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2141	ⅧC 1 j	再堆積層	石甕	珪質泥岩	礪石西部	5.0	3.4	1.1	19.90		I	263
2142	ⅦC 5 f	表土	石甕	珪長質細粒凝灰岩	礪石西部	5.4	3.3	1.2	23.79		I	263
2143	ⅦD 3 e	再堆積層	石甕	珪長質細粒凝灰岩	礪石西部	5.7	4.0	1.4	36.87		I	263
2144	No22 トレンチ	盛土	石甕	凝灰質硬質泥岩	礪石西部	5.5	4.0	1.3	28.26		I	263
2145	X E 6 f	I層	石甕	硬質泥岩	礪石盆地西部	7.0	3.9	0.7	29.07		I	263
2146	ⅦD 0 a	表土直下	石甕	珪長質細粒凝灰岩	礪石西部	7.2	4.8	1.7	59.47		II	263
2147	出土不明		石甕	硬質泥岩	礪石西部	6.7	2.7	1.0	21.62		II	263
2148	ⅦD 2 g		石甕	硬質泥岩	礪石西部	6.0	3.3	1.5	27.67		II	263
2149	ⅧD 8 i	I層	石甕	凝灰質硬質泥岩	礪石西部	5.8	3.6	1.3	33.35		II	263
2150	ⅦC 2 h	表探	石甕	粘板岩	北上山地	5.8	3.6	1.3	40		II	263
2151	IX E 3 a	II層	石甕	硬質泥岩	礪石西部	5.3	3.7	0.6	32.70		II	263

第430図 遺構外出土遺物 石甕(1)



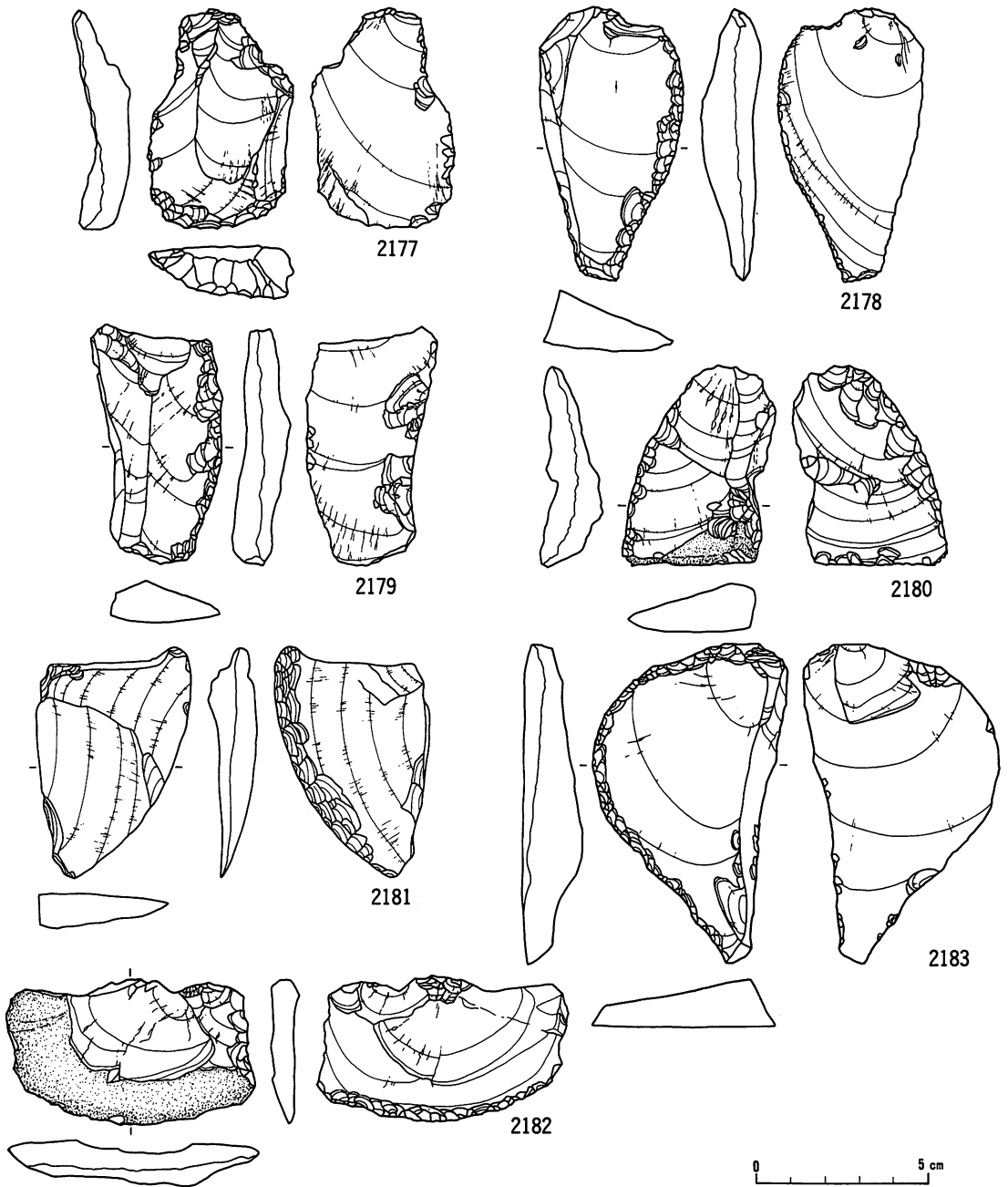
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2152	X D 3 h	再堆積層	石筥	粘板岩	北上山地	6.3	4.4	1.5	49.98		II	263
2153	IX D 9 i	II層	石筥	硬質泥岩	礮石西部	6.5	4.6	1.3	48.10		II	264
2154	VI C 2 e	II層	石筥	硬質泥岩	礮石盆地西部	5.6	3.8	1.8	31.97		II	264
2155	VII C 3 h	再堆積層下位	ピエス・エスキュー	硬質泥岩	礮石西部	3.3	1.6	0.5	2.66			264
2156	X I C 4 e	II層	ピエス・エスキュー	珪質泥岩	礮石西部	3.6	1.8	0.8	6.85			264
2157	VIII C 2 j	I層	ピエス・エスキュー	珪質泥岩	礮石西部	3.7	2.7	1.4	12.12			264
2158	IX D 1 d	I層	ピエス・エスキュー	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	3.8	3.9	1.0	18.21			264
2159	VII D 9 c	II層	ピエス・エスキュー	粘板岩	北上山地	2.9	3.4	0.8	12.49			264
2160	VII C 3 h		ピエス・エスキュー	珪質泥岩	礮石西部	5.4	3.8	1.7	45.97			264
2161	VII C 8 e	再堆積層	ピエス・エスキュー	珪質泥岩	礮石西部	4.7	5.4	1.3	39.58			264

第431図 遺構外出土遺物 石筥(2)・ピエス・エスキュー



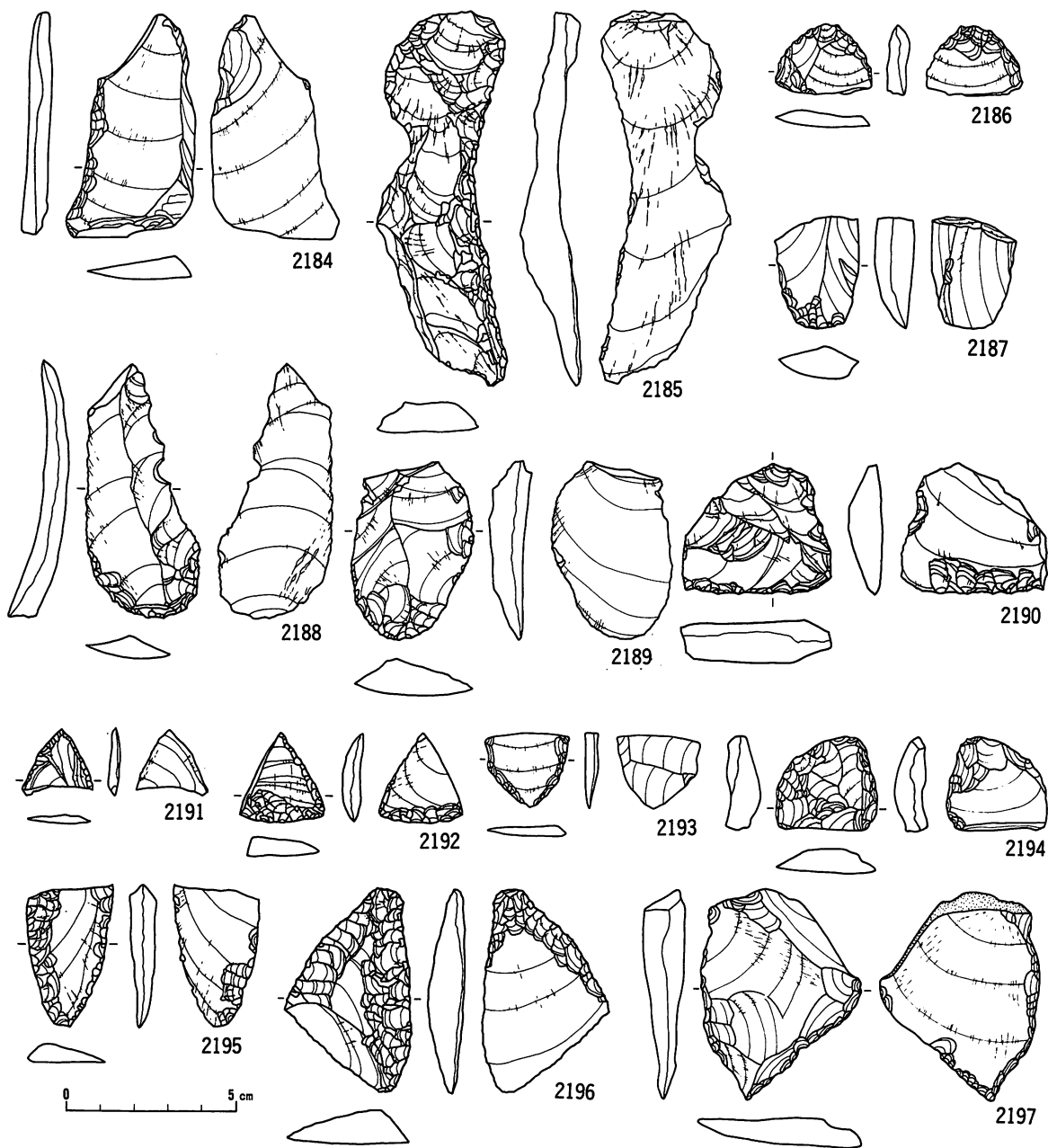
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2162	X D 9 g	II層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	2.8	2.9	0.5	4.72	2つの折断面がかかわる。台形状を呈する。	I a 1	264
2163	VIII C 4 f		不定形石器	粘板岩	北上山地	2.2	3.4	1.4	10.66		I a 1	264
2164	VIII C 4 f	暗褐色土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	2.4	4.7	1.3	13.84		I a 1	264
2165	VIII C 2 i	整地層下	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	2.9	3.2	0.5	3.41	側面はやや屈曲状を呈する。2つの辺が折断または欠損。	I a 1	264
2166	VII C 5 g	再堆積層	不定形石器	硬質泥質凝灰岩	礮石西部	4.2	2.3	1.0	8.61	大きな剝離の中に微小剝離あり。	I a 1	264
2167	X D 7 g	II層	不定形石器	粘板岩	北上山地	3.6	3.4	0.8	7.80		I a 1	264
2168	VII D 4 f	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	2.8	6.7	1.6	23.08		I a 1	264
2169	X D 5 f	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	礮石盆地西部	5.9	4.7	1.1	35.54		I a 1	264
2170	VII D 5 i	再堆積層	不定形石器	硬質泥質凝灰岩	礮石西部	6.8	3.3	1.5	18.16		I a 1	264
2171	IX E 4 a	I層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.3	5.9	1.3	26.66		I a 1	265
2172	VII D 1 a	II層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.7	2.2	0.6	7.72	折断面あり、欠損品の可能性もある。	I a 2	265
2173	VII C 5 g	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	5.1	1.8	0.9	6.41		I a 2	265
2174	VII D 3 b	I層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.8	2.8	0.5	7.06	裏面の刃部加工は表より弱い。	I a 2	265
2175	VII D 4 h	検出面	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	4.7	3.1	1.5	11.38	いわゆる搔器。	I a 2	265
2176	出土地不明		不定形石器	珪質凝灰質泥岩	礮石西部	7.0	2.7	1.5	22.01		I a 2	265

第432図 遺構外出土遺物 不定形石器 I類(1)



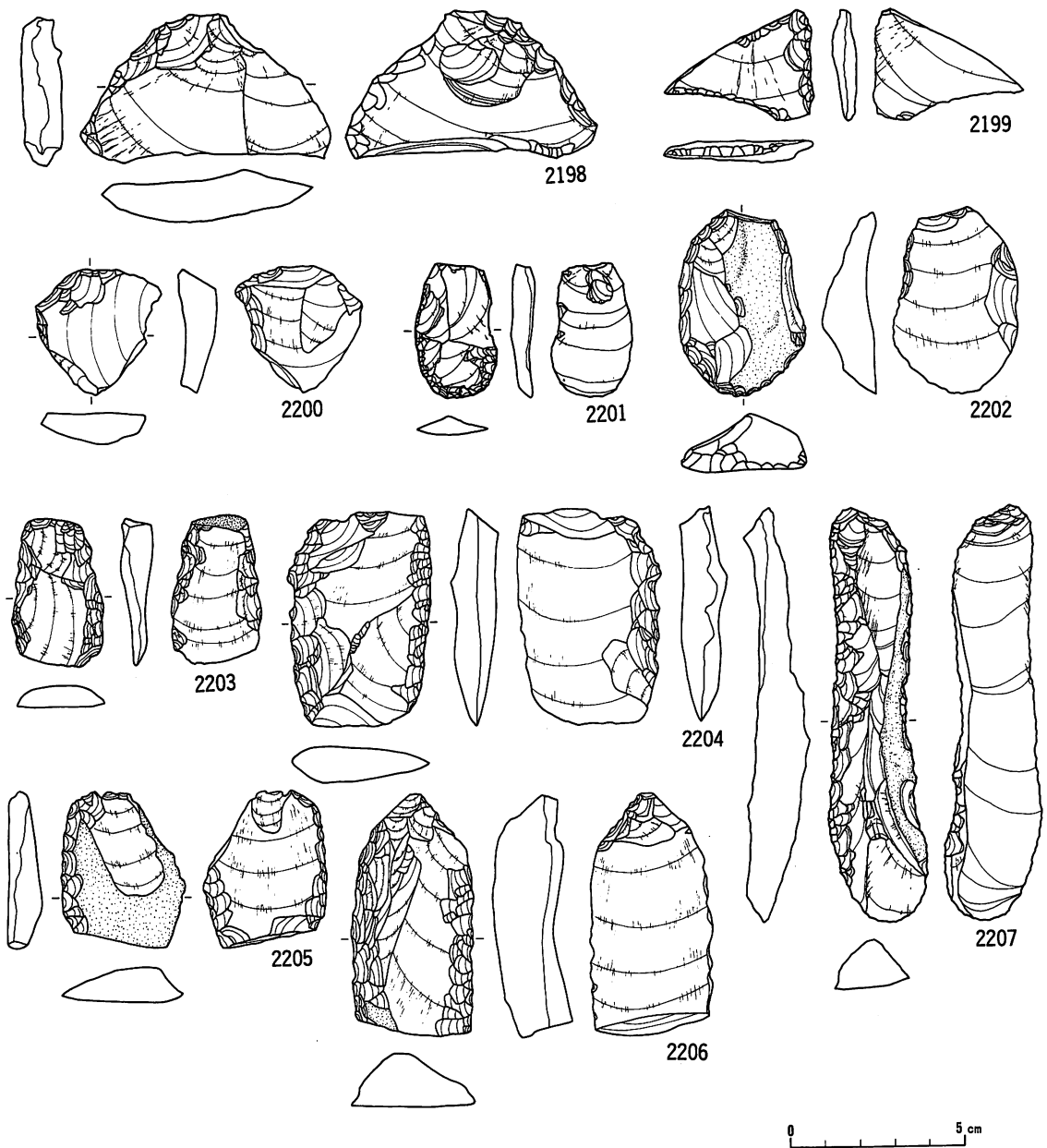
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2177	Ⅸ D 2 i	I層	不定形石器	珉質泥岩	礮石西部	6.3	4.7	1.8	26.14		I a 2	265
2178	Ⅵ D 9 i		不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	7.8	3.7	1.4	50		I a 2	265
2179	Ⅶ C 7 f	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	6.9	3.8	1.2	30.10		I a 2	265
2180	Ⅶ C区トレンチ		不定形石器	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	5.7	3.9	1.3	31.57		I a 2	265
2181	Ⅵ D 2 d		不定形石器	粘板岩	北上山地	6.2	4.4	1.1	35.66	刃部はやや階段状剥離である。	I a 2	265
2182	Ⅷ C 2 i	I層	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	4.2	7.3	1.1	30.37		I a 2	265
2183	Ⅷ C 1 i	表土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	9.3	5.7	1.4	64.79		I a 2	265

第433図 遺構外出土遺物 不定形石器 I類(2)



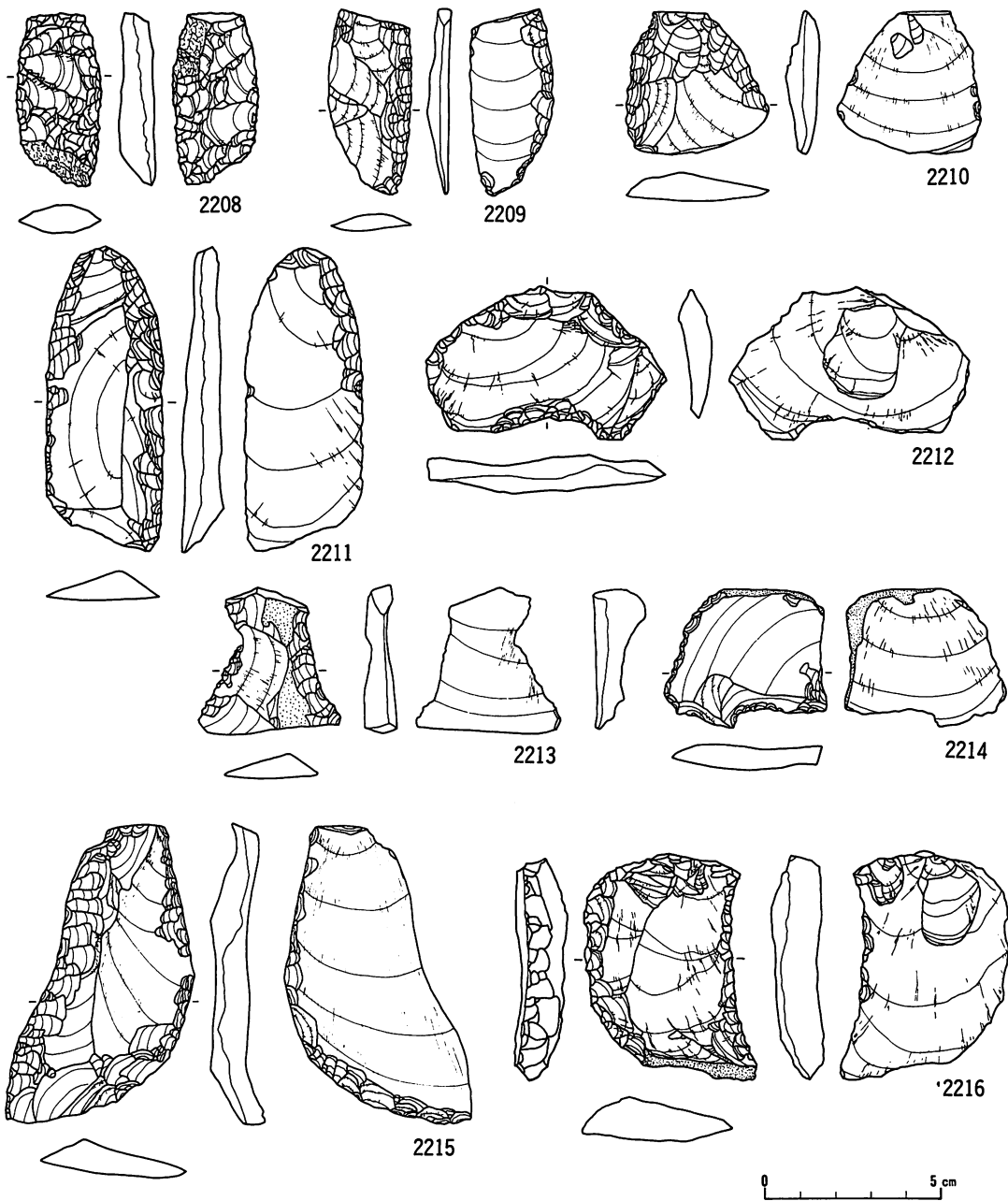
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2184	IK D 1 d	I 層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	隼石西部	6.5	3.7	0.6	17.34		I a 3	266
2185	VI D 3 e	再堆積層	不定形石器	粘板岩	北上山地	10.9	3.8	1.3	37.82		I a 3	266
2186	IK D 4 g		不定形石器	硬質泥質凝灰岩	隼石西部	5.3	3.2	0.7	15.85		I a 4	266
2187	VII C 7 f	再堆積層下位	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	3.3	2.5	1.0	9.11		I a 4	266
2188	VII C 7 e	再堆積層	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	7.3	3.3	0.8	15.25		I a 4	266
2189	VII D 0 ライン		不定形石器	硬質泥岩	隼石西部	5.2	3.6	1.3	16.69		I a 4	266
2190	VII D 2 c		不定形石器	珪質泥岩	隼石西部	3.8	4.4	1.1	19.26		I a 1	266
2191	VIII C 2 h	褐色土上位	不定形石器	硬質泥岩	隼石西部	1.9	2.1	0.3	0.85		I b 2	266
2192	VIII C 区	I 層	不定形石器	珪質泥岩	隼石西部	2.6	2.5	0.6	3.02		I b 2	266
2193	VI C 区		不定形石器	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	2.2	2.4	0.2	2.08		I b 2	266
2194	VIII D 1 a		不定形石器	凝灰質硬質泥岩	隼石西部	2.8	3.0	0.9	8.29	折断面あり、欠損品の可能性もある。	I b 2	266
2195	XD 2 h	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	隼石西部	4.0	2.5	0.7	5.27		I b 2	266
2196	VII D 4 g	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	隼石西部	6.0	3.7	1.1	17.45		I b 2	266
2197	IX E 4 c		不定形石器	硬質泥岩	隼石西部	5.6	4.8	1.1	27.16		I b 2	266

第434図 遺構外出土遺物 不定形石器 I 類(3)



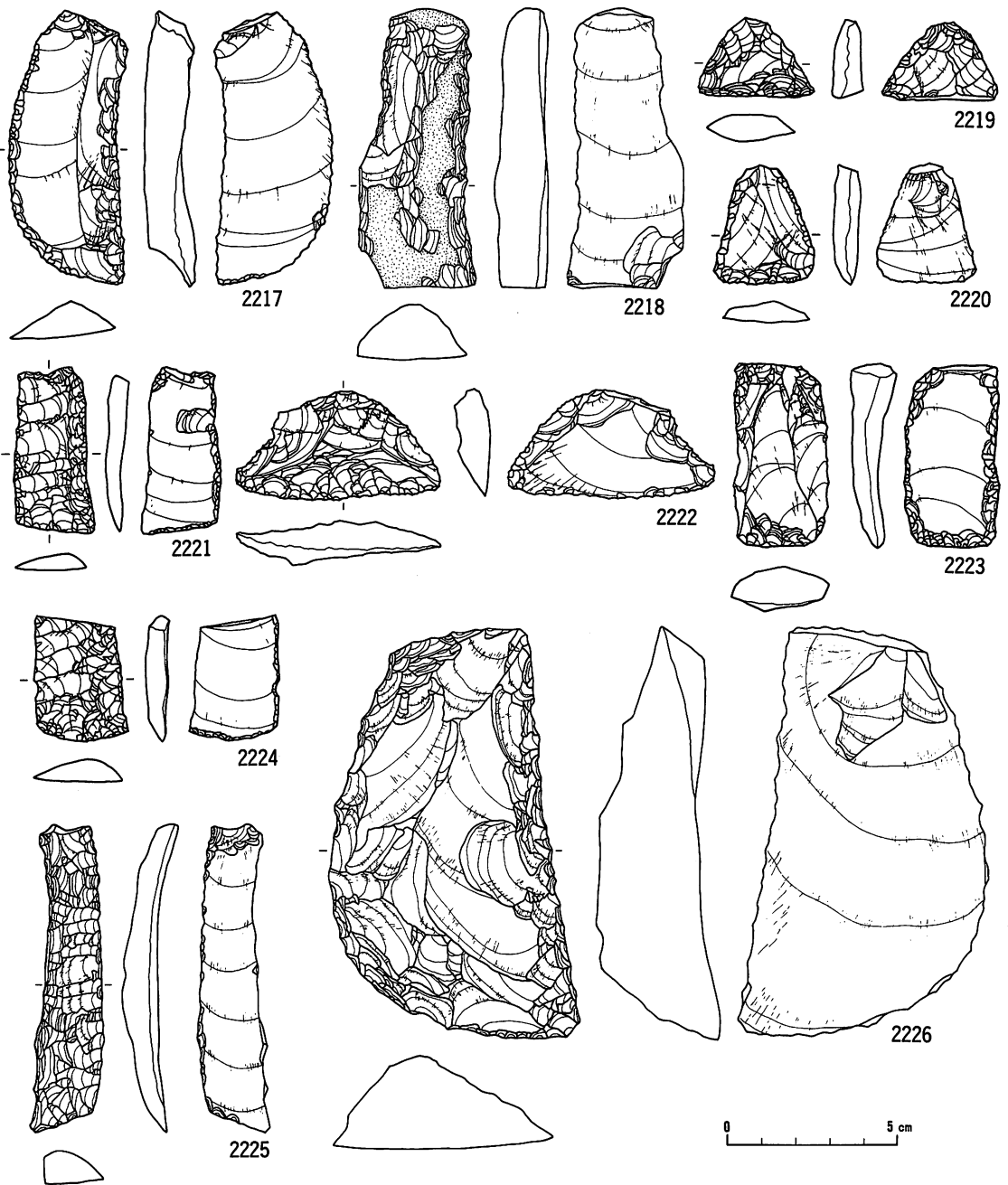
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2198	VII C 6 g	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	4.0	7.2	1.0	30.73		I b 2	267
2199	X D 9 e	II層	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	3.1	4.3	0.7	6.60	折断面がかかわる。平面形が鋭角の二等辺三角形状。	I b 3	267
2200	IX D 8 i	I層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礫石西部	3.6	3.6	1.0	12.89		I b 3	267
2201	VII C 7 f	再堆積層	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	3.8	2.3	0.5	5.21		I b 4	267
2202	VII C 8 e		不定形石器	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	3.3	2.5	1.0	9.11	籠状石製品に似るが、二次加工は周縁のみ。	I b 4	267
2203	Na26トレンチ	盛土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	4.2	1.6	0.8	10.72		I c 1	267
2204	IX E 2 c	表土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	6.2	4.1	1.1	32.90	対向する辺にも二次加工あり。粗く側面は鋸歯状である。	I c 1	267
2205	VII D 6 d	再堆積層	不定形石器	粘板岩	北上山地西縁	4.3	3.5	1.0	16.09		I c 1	267
2206	IX E 2 b	表土	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	6.9	3.5	1.7	55.44		I c 1	267
2207	VII D 8 i		不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	11.8	2.9	2.0	42.90	横の断面形が三角形。	I c 1	267

第435図 遺構外出土遺物 不定形石器 I 類(4)



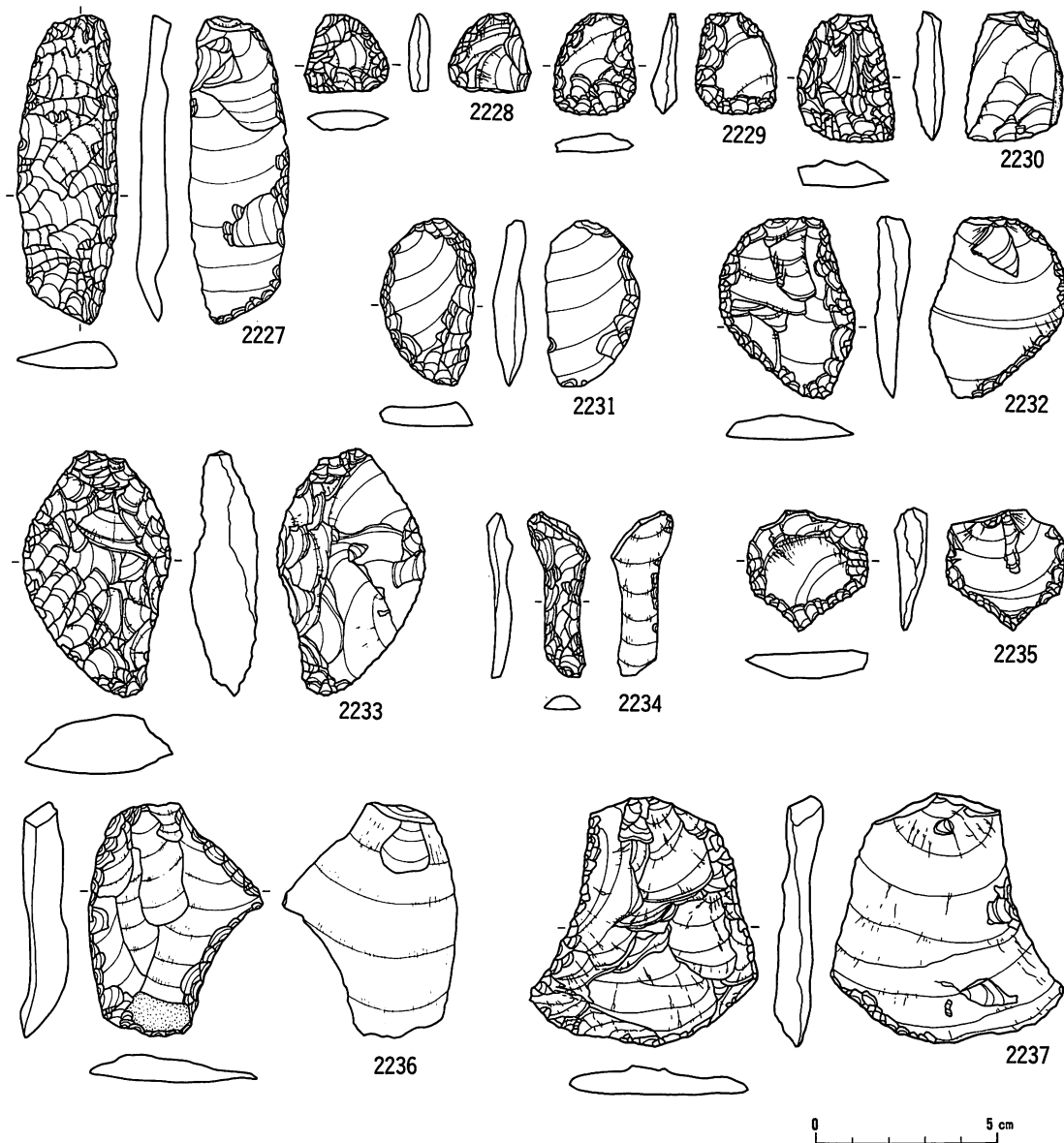
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2208	ⅧC 2 h	表土	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	4.9	2.4	1.0	12.86		I c 2	267
2209	X I D 1 f	I層	不定形石器	泥質凝灰岩	礮石西部	5.2	2.4	0.4	6.89		I c 2	267
2210	ⅦD 8 f		不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.0	4.1	0.8	14.22		I c 2	267
2211	ⅨD 9 h	表土	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	8.2	3.3	0.9	26.43		I c 2	267
2212	ⅦC 8 c	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.3	6.9	0.7	22.12		I c 3	267
2213	ⅦD 4 g	I層	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	4.2	4.0	0.9	9.86	1辺は正整、もう1辺はやや不整。	I c 3	267
2214	ⅦC 5 f	Ⅲ層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.9	4.6	1.0	18.63	凹刃の方には使用の痕跡あり。	I c 3	267
2215	X D 4 f	Ⅱ層	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	礮石西部	8.5	3.4	0.9	40.92		I c 3	268
2216	ⅦD 6 f	黒褐色土	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	6.4	4.8	1.2	34.62		I c 3	268

第436図 遺構外出土遺物 不定形石器 I類(5)



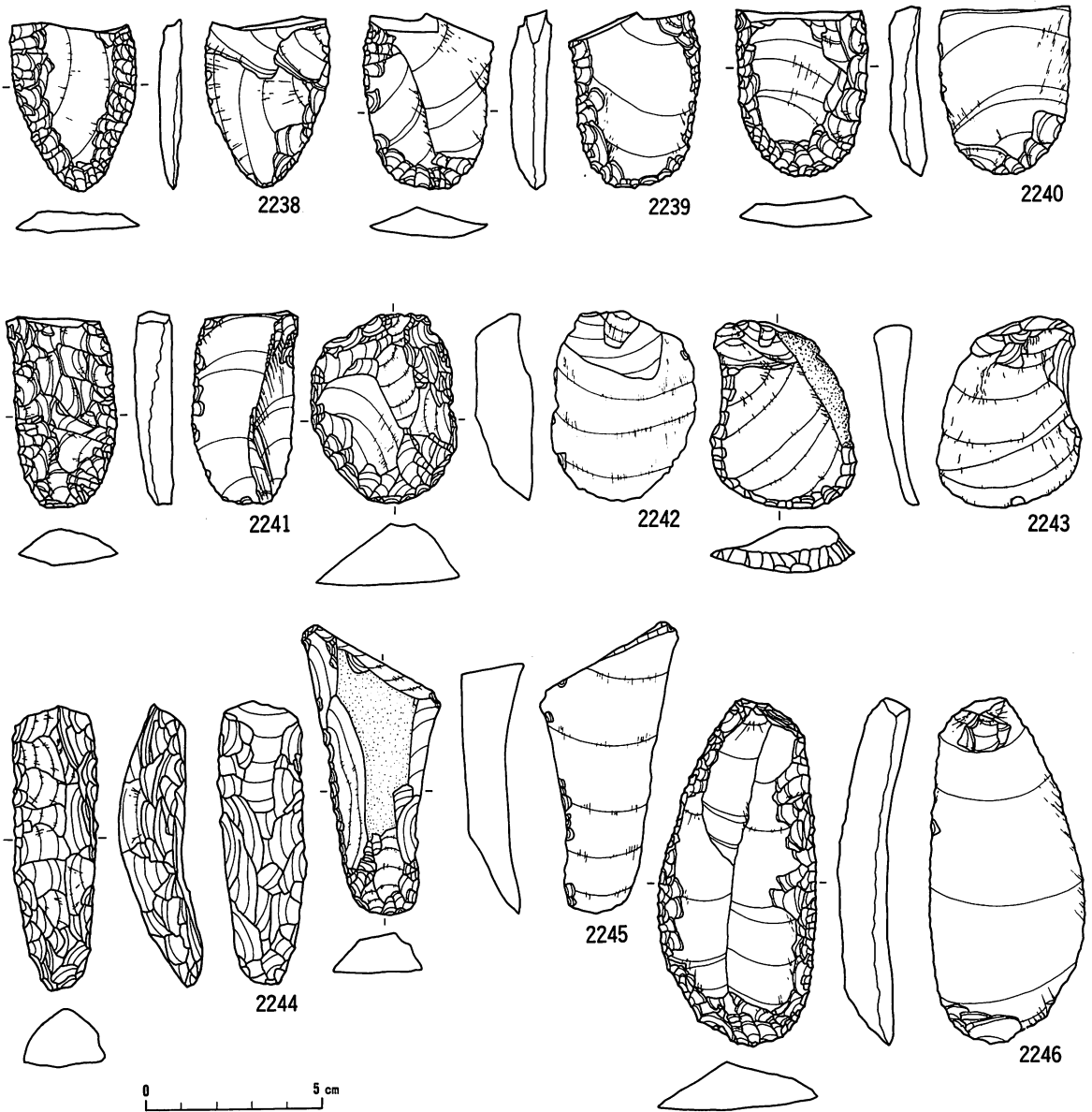
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2217	IK D 3 j		不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	7.6	3.2	1.1	30.90		I c 3	268
2218	VII C 1 j	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	8.2	3.2	1.6	54.39		I c 3	268
2219	IK D 4 j	I層	不定形石器	硬質泥岩	礮石盆地西部	2.3	3.4	0.9	6.35		I d 1	268
2220	X D 6 g	II層	不定形石器	粘板岩	北上山地	3.5	3.0	0.8	7.59		I d 1	268
2221	VII C 2 i	I層	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	4.9	2.3	0.6	7.12	石匙の欠損品?	I d 1	268
2222	VII D 6 h	II層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.2	6.1	1.3	18.02	刃部の端部に尖頭部あり。	I d 1	268
2223	VII D 5 i	検出面	不定形石器	珪質細粒凝灰岩	礮石西部	5.3	2.8	1.3	17.02		I d 1	268
2224	VII C 3 f	再堆積層	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	3.7	2.7	0.7	6.74	石匙の欠損品?	I d 1	268
2225	No20トレンチ	盛土	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	9.1	2.0	0.9	19.88	石匙の欠損品?	I d 5	268
2226	IK E 1 a	表土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	12.0	7.3	2.8	240		I d 1	268

第437図 遺構外出土遺物 不定形石器 I類(6)



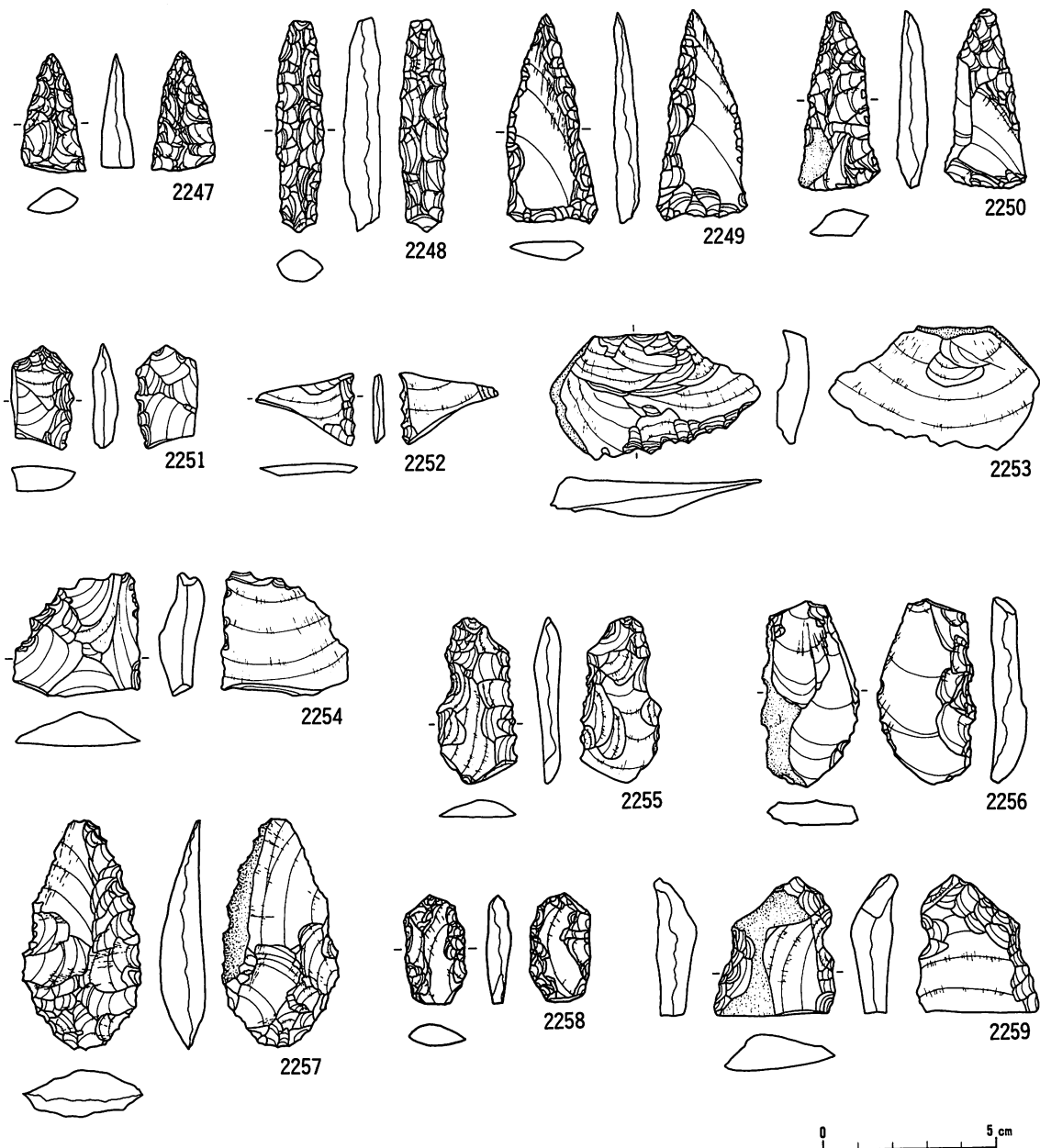
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2227	XD 9 e	II層	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	8.4	2.7	0.9	21.60		Id 1	269
2228	IX D 7 i	II層	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	2.1	2.3	0.5	2.77		Id 2	269
2229	VII C 4 f	I層	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	2.8	2.2	0.6	4.92		Id 2	269
2230	VI D 7 h	表土直下	不定形石器	粘板岩	北上山地	3.5	2.7	0.9	9.03		Id 2	269
2231	VI D 5 i		不定形石器	珪質細粒凝灰岩	礫石西部	4.6	2.6	0.6	10.15	1刃は急角度、もう1刃は鋭い。	Id 2	269
2232	VI D 7 b		不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	4.9	3.7	1.0	13.69	I率な作り。両面加工の部分も一部あるが、片刃主体である。	Id 2	269
2233	VII C 6 g	II層	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	6.7	4.0	1.8	41.26		Id 2	269
2234	XI C 4 g	II層	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	礫石西部	4.5	1.4	0.6	3.64		Id 3	269
2235	VI D 7 b		不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	3.2	3.3	0.9	8.55	2つの凹刃が接して鋭い尖頭部を形成する。	Id 3	269
2236	IX D 5 i	II層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礫石西部	6.4	4.8	0.9	26.88		Id 3	269
2237	VII C 6 h	再堆積層	不定形石器	流紋岩	礫石西部	6.8	6.3	0.8	31.03		Ib 3	269

第438図 遺構外出土遺物 不定形石器 I類(7)



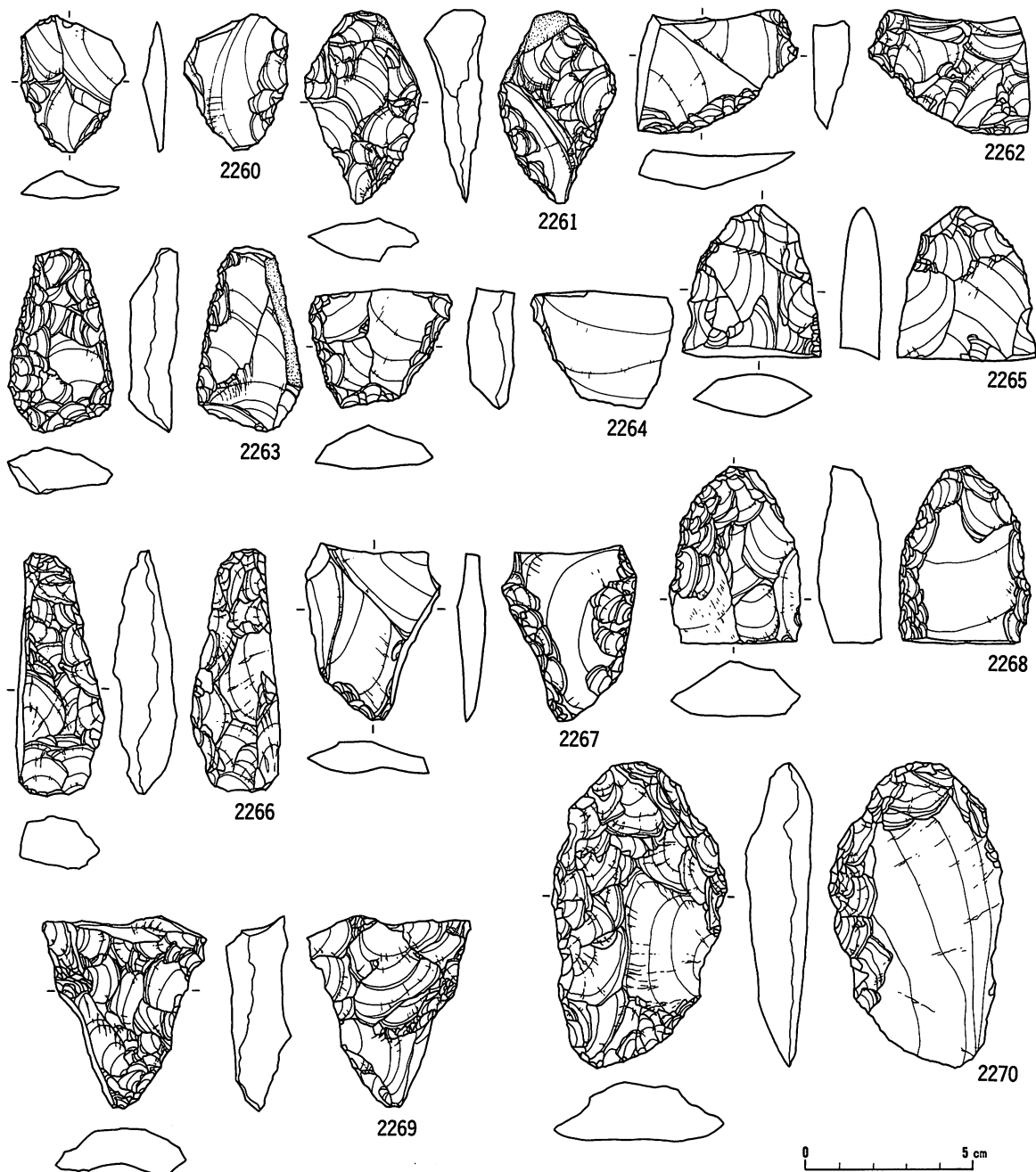
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2238	VII C 1 f	再堆積層	不定形石器	珪質凝灰質泥岩	礮石西部	4.8	3.5	0.8	11.46		I d 3	269
2239	IX D 1 h	II層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.9	3.6	0.8	16.61		I d 4	269
2240	VII D 7 i	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.7	3.7	1.2	20.36		I d 4	269
2241	VII D 7 f	再堆積層	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	5.4	3.1	1.1	20.57		I d 4	269
2242	IX E 4 c		不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	5.4	4.1	1.6	41.44	丁寧な作り。	I d 4	269
2243	VII D 3 i	I層	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	5.4	4.0	0.8	19.90	一側縁に自然面を残す。	I d 4	270
2244	VII D 4 g	I層	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	8.0	2.3	1.6	35.65	磨れたような粗い加工。断面三角形、尖頭部はつくり出さない。	I d 4	270
2245	IX D 5 i	II層	不定形石器	凝灰岩	礮石西部	8.3	3.5	1.5	39.47	丁寧な作り。大ぶり。	I d 4	270
2246	VII C 6 f		不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	9.8	4.5	2.0	59.58		I d 4	270

第439図 遺構外出土遺物 不定形石器 I類(8)



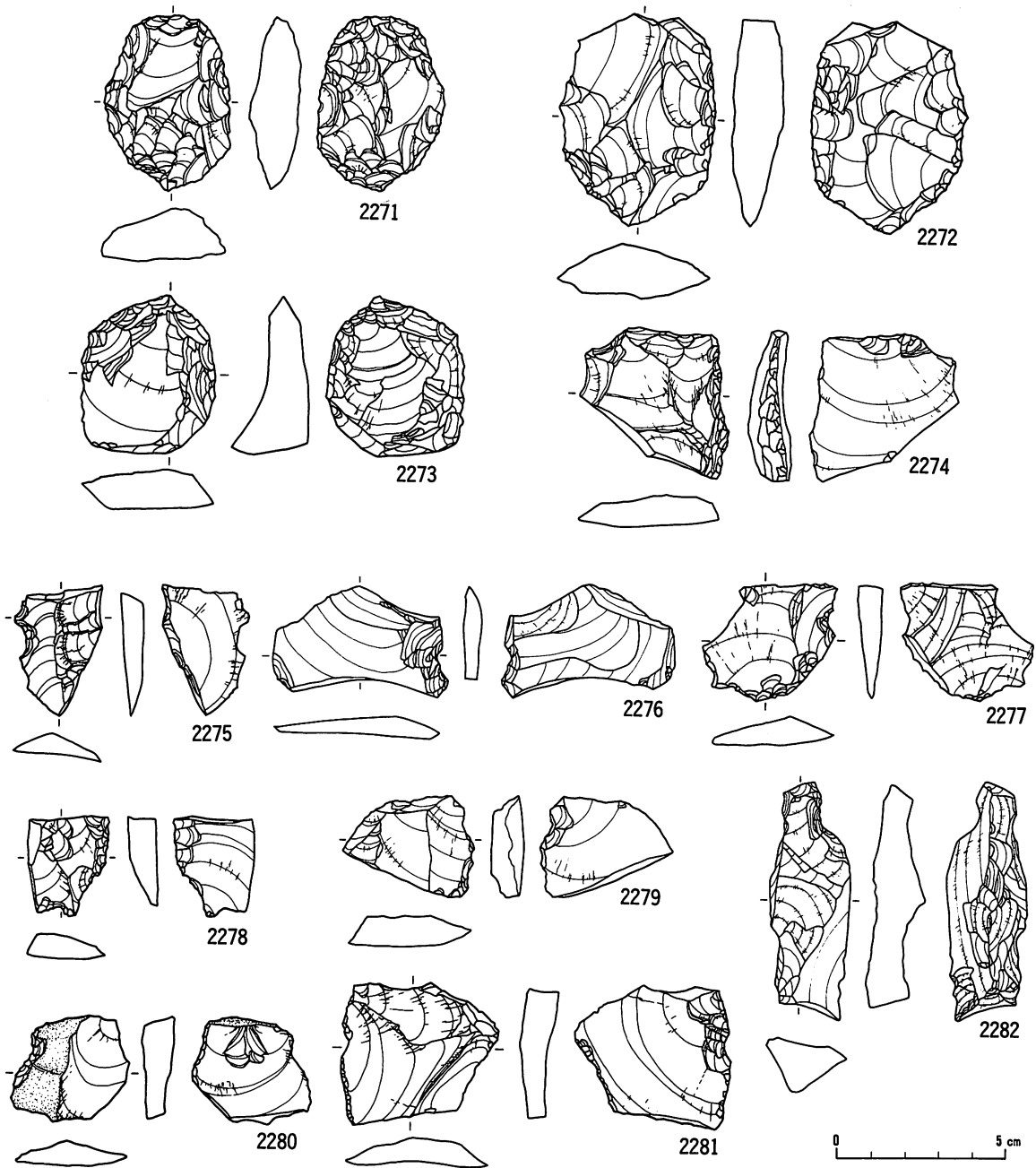
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2247	ⅦD 9 c	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	3.4	1.8	0.8	3.97		I e	270
2248	ⅦC 5 h	I 層	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	5.1	1.4	1.0	8.22		I e	270
2249	ⅦC 6 g	再堆積層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礫石西部	6.1	2.6	0.7	8.54		I e	270
2250	不明		不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礫石西部	5.1	2.4	0.9	7.75	2つの刃部で尖頭部を形成する。横断面が菱形を示す。	I e	270
2251	ⅦC 0 h	表土	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	5.5	4.6	0.8	23.99	加工は粗末。	II	270
2252	ⅠKD 1 h	II 層	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	2.1	2.8	0.2	1.50	2つの辺が折断面で、全体として鋭角二等三角形形状。	II	270
2253	ⅦC 5 i	I 層	不定形石器	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	3.6	6.1	0.7	15.68		II	270
2254	ⅠKD 5 j	I 層	不定形石器	粘板岩	北上山地	3.4	3.7	0.9	14.34		II	270
2255	No28トレンチ	盛土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	4.8	2.2	0.6	8.08		II	270
2256	ⅦD 8 d		不定形石器	珪質細粒凝灰質	礫石西部	5.3	3.0	1.1	12.40		II	270
2257	ⅣD区	表探	不定形石器	硬質泥岩	礫石盆地西部	6.6	3.4	1.3	23.32		II	271
2258	ⅦC 0 e	I 層	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	3.1	1.8	0.6	4.10		III	271
2259	ⅦC 4 h	再堆積層下位	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	4.4	2.4	0.4	6.24		III	271

第440図 遺構外出土遺物 不定形石器(9)・II～III類



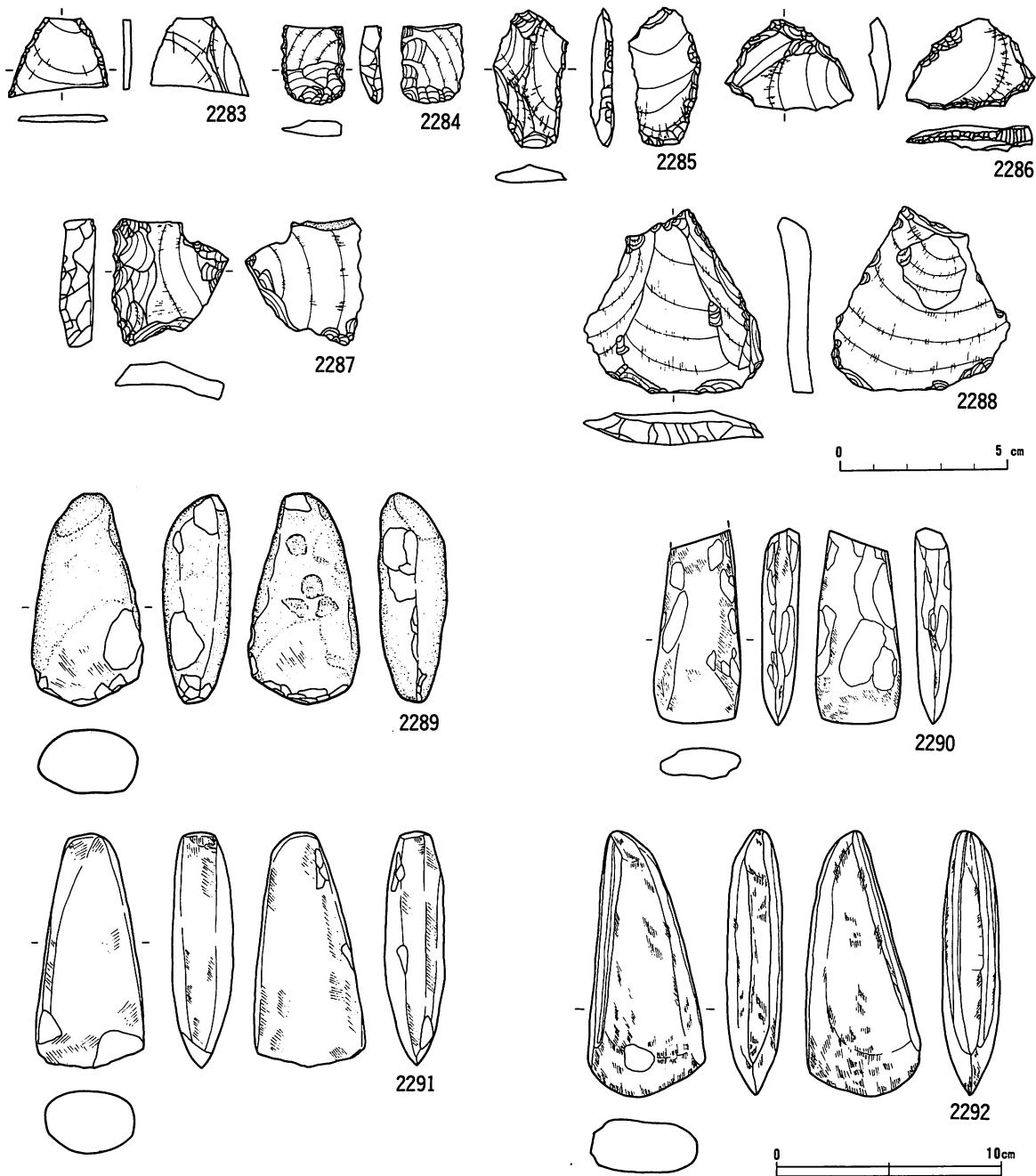
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2260	VII C 1 g	表土	不定形石器	硬質泥質凝灰岩	礮石西部	4.1	3.1	0.7	7.76		IV	271
2261	VII C 7 d	再堆積層	不定形石器	粘板岩	北上山地	5.7	3.5	1.6	24.32		IV	271
2262	VII D 5 g	再堆積層下位	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	3.5	4.8	1.1	21.21		IV	271
2263	VII D 9 e		不定形石器	硬質泥岩	礮石盆地西部	5.5	3.1	1.4	22.41	石鏡の未製品か?	IV	271
2264	VII E 6 a		不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.5	4.2	1.4	20.42		IV	271
2265	IX D 3 e	I層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	5.1	4.2	1.4	26.64		IV	271
2266	VII D 6 h		不定形石器	珪質細粒凝灰岩	礮石西部	7.2	2.6	1.5	30.52		IV	271
2267	VII E 5 a		不定形石器	珪質細粒凝灰岩	礮石西部	5.3	4.0	0.9	15.82		IV	271
2268	V C 8 i	I層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	5.3	3.8	1.5	38.55		IV	271
2269	VII C 6 h	再堆積層下位	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	5.7	4.8	1.4	34.74	加工は粗いが、連続する剥離である。	IV	271
2270	VII D 7 b	I層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	9.1	5.2	1.7	74.05		IV	271

第441図 遺構外出土遺物 不定形石器IV類(1)



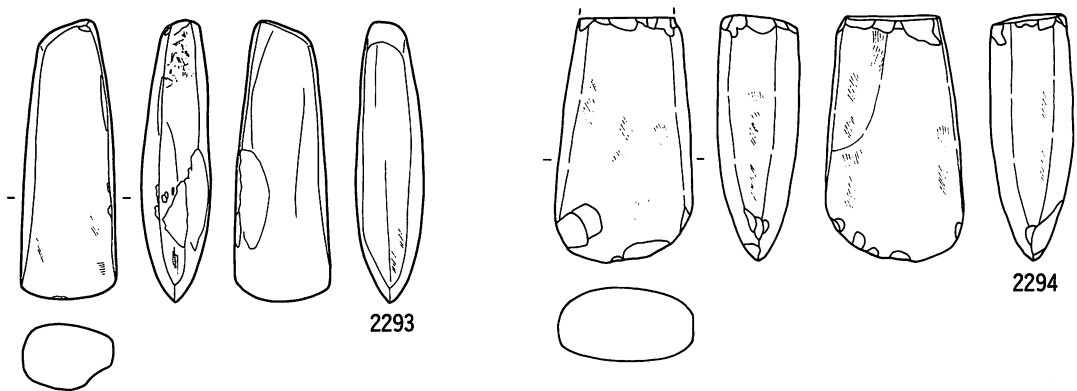
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2271	VII D 8 i	表土	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	礮石西部	5.2	3.7	1.5	30.58		IV	272
2272	VIII C 5 f	表土	不定形石器	硬質泥質凝灰岩	礮石西部	6.3	4.6	1.5	46.9		IV	272
2273	VII D 4 h	検出面	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	4.7	4.0	2.1	35.69		IV	272
2274	VII C 7 h	I層	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	4.5	4.4	0.9	20.12		IV	272
2275	VII D 3 h	検出面	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	3.6	2.6	0.6	5.70		V	272
2276	VII E 6 b		不定形石器	硬質泥質凝灰岩	礮石西部	5.2	2.8	0.5	10.64		V	272
2277	XI C 5 d		不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.4	3.9	0.7	10.94		V	272
2278	VII D 6 d	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	2.9	2.4	0.9	6.80		V	272
2279	VII D 4 g	検出面	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	3.0	3.9	0.9	11.82		V	272
2280	VII E 1 a		不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	3.0	3.4	0.9	9.65		V	272
2281	VII 1 d	再堆積層	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.2	4.6	1.0	19.23		V	272
2282	IX D 3 e	I層	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	7.1	2.4	1.4	28.04		V	272

第442図 遺構外出土遺物 不定形石器IV類(2)・V類



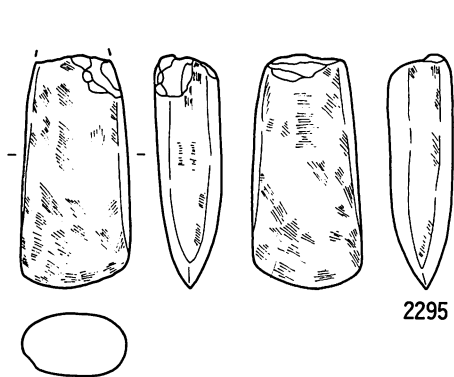
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2283	ⅧD 1 a	Ⅱ層	不定形石器	粘板岩	北上山地	2.3	2.5	0.2	2.22	欠損部または折断面がかかわる。	Ⅵ	272
2284	ⅨE 7 a		不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	2.3	1.9	0.4	2.86		Ⅵ	272
2285	ⅨD 7 i	Ⅱ層	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	雫石西部	4.1	2.2	0.7	4.91		Ⅵ	272
2286	ⅦD 2 h		不定形石器	粘板岩	北上山地西縁	2.6	3.6	0.6	5.68		Ⅵ	272
2287	ⅥC 4 e	Ⅱ層	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	3.8	3.5	0.7	11.43		Ⅴ	272
2288	ⅥD 5 i		不定形石器	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	5.5	4.6	0.8	23.99	素材面を大きく残す。	Ⅶ	272
2289	XIC区トレンチ	盛土	磨製石斧	凝灰岩	北上山地	9.4	4.9	2.9	175	敲打痕あり。	I	272
2290	ⅥD 7 i	I層	磨製石斧	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(8.6)	3.8	1.3	(80)		I	272
2291	ⅦD 3 f	Ⅱ層	磨製石斧	珪質凝灰岩質硬砂岩	北上山地	10.5	4.8	2.7	200		I	273
2292	ⅥD 7 h	黒色土	磨製石斧	粘板岩	北上山地	11.8	5.2	1.4	210	擦り切り手法。	I	273

第443図 遺構外出土遺物 不定形石器Ⅵ～Ⅶ類・磨製石斧(1)



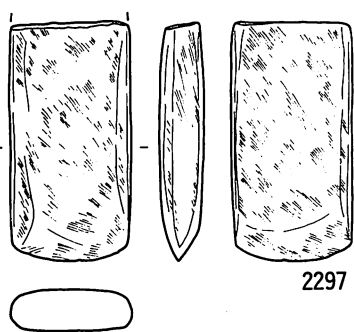
2293

2294



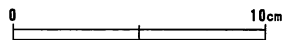
2295

2296



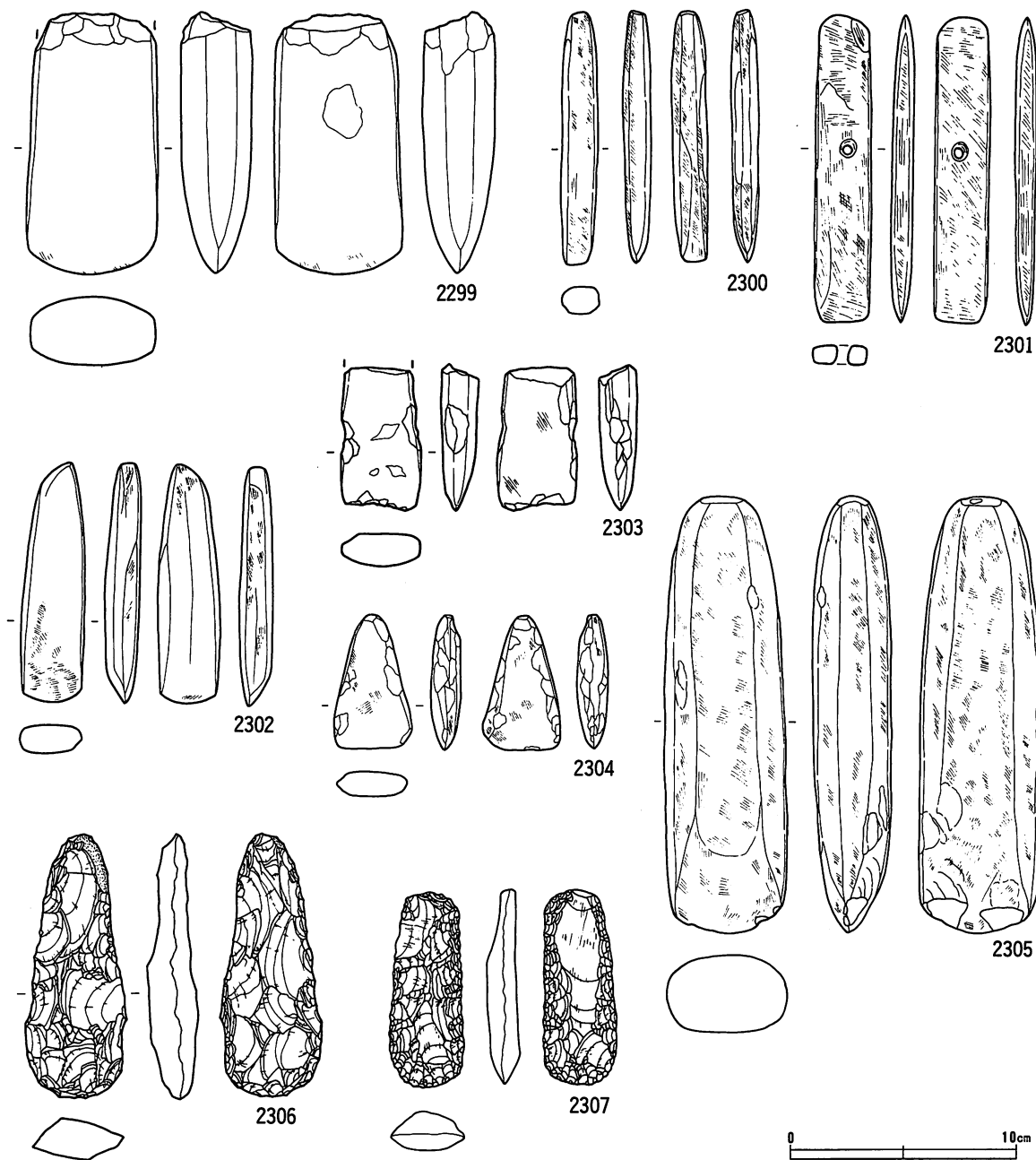
2297

2298



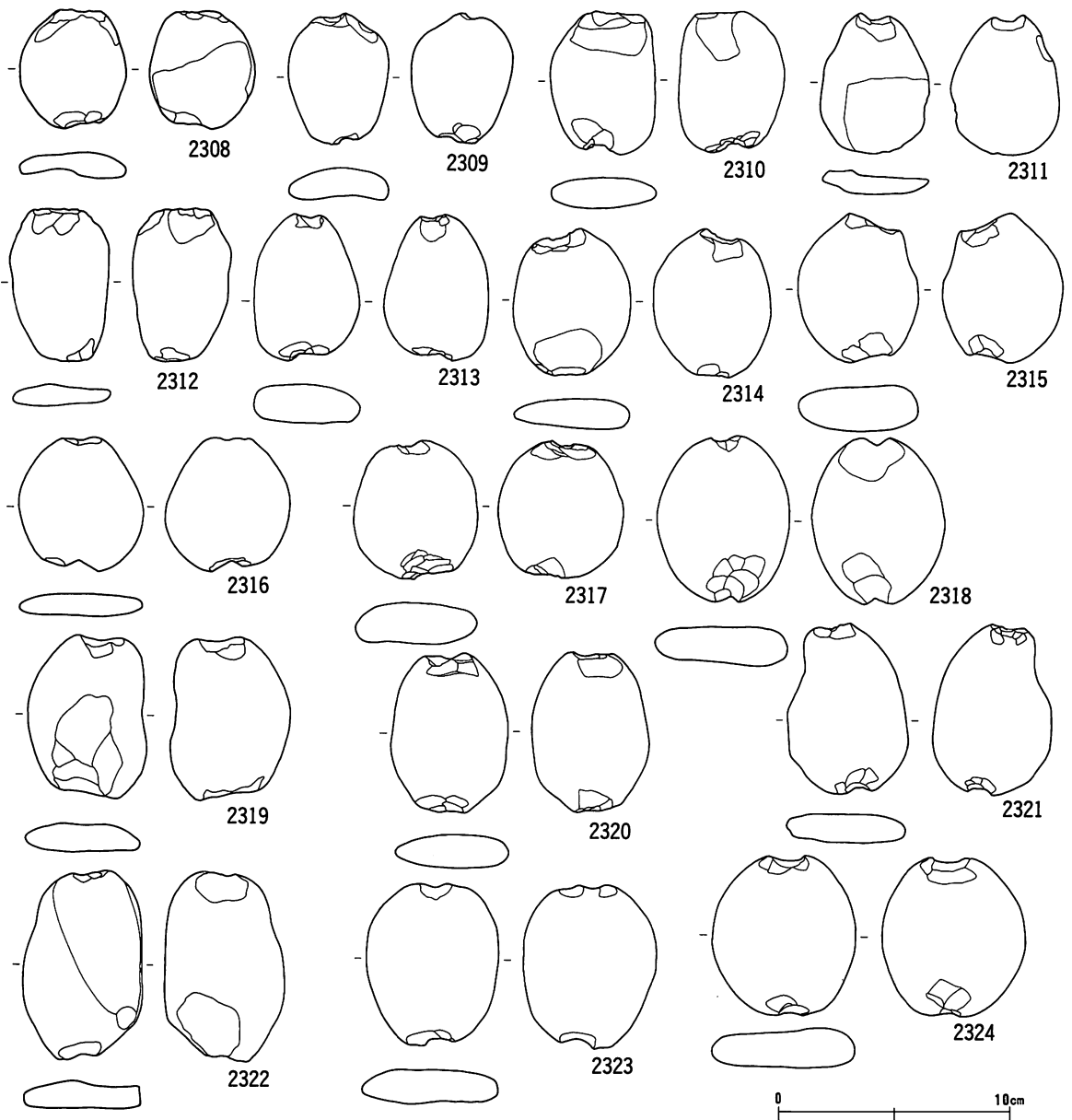
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2293	VII C 区		磨製石斧	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	11.1	3.8	2.6	195	擦り切り手法。	I	273
2294	IX D 1 e		磨製石斧	凝灰岩	北上山地	(9.7)	5.4	3.1	(290)	基部欠損か？	I	273
2295	VIII D 9 i	I 層	磨製石斧	珪質凝灰岩質硬砂岩	北上山地	(9.3)	4.4	2.7	(190)		II	273
2296	VII D 7 i	II 層	磨製石斧	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	10.0	5.4	2.7	270		II	273
2297	V D 4 a	表土	磨製石斧	緑色凝灰岩	北上山地	(9.5)	4.9	1.7	(180)		II	273
2298	VIII C 4 f	暗褐色土	磨製石斧	凝灰岩	北上山地	9.8	5.4	2.3	220		II	273

第444図 遺構外出土遺物 磨製石斧



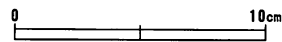
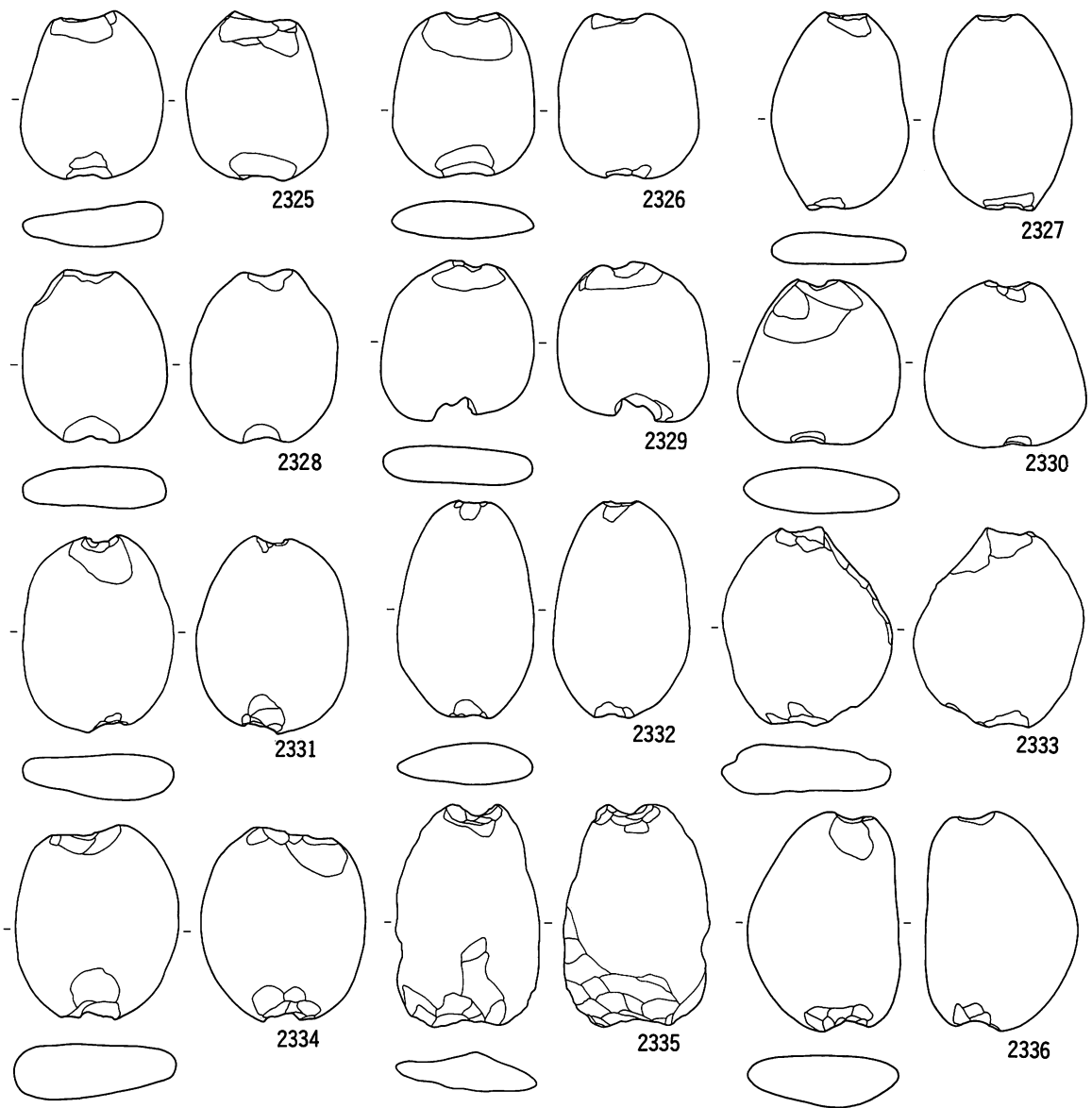
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2299	X D 4 f	II層	磨製石斧	凝灰岩	北上山地	11.5	5.8	3.0	370		II	273
2300	IX D 4 h	II層	磨製石斧	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	11.1	1.5	1.2	50	擦り切り手法。	III	273
2301	IX D 1 i	II層	磨製石斧	粘板岩	北上山地	13.5	2.5	0.9	75	石刀?	III	273
2302	VI D 8 e	表土直下	磨製石斧	粘板岩	北上山地	10.6	2.8	1.3	80	擦り切り手法。	III	273
2303	X I C 7 g	II層上面	磨製石斧	粘板岩	北上山地	(6.3)	3.5	1.5	(75)		III	273
2304	VI D 9 i	黑色土	磨製石斧	粘板岩	北上山地	5.9	3.5	1.1	40		IV	273
2305	X I D 5 a		磨製石斧	緑色片岩	北上山地西縁	19.3	5.4	2.3	660		V	274
2306	VII D 4 e	再堆積層	打製石斧	粘板岩	北上山地	11.7	4.5	1.9	100		I	274
2307	VII D 7 a	倒木底	打製石斧	硬質泥質凝灰岩	雫石西部	8.7	3.2	1.3	48		I	274

第445図 遺構外出土遺物 磨製石斧(3)・打製石斧



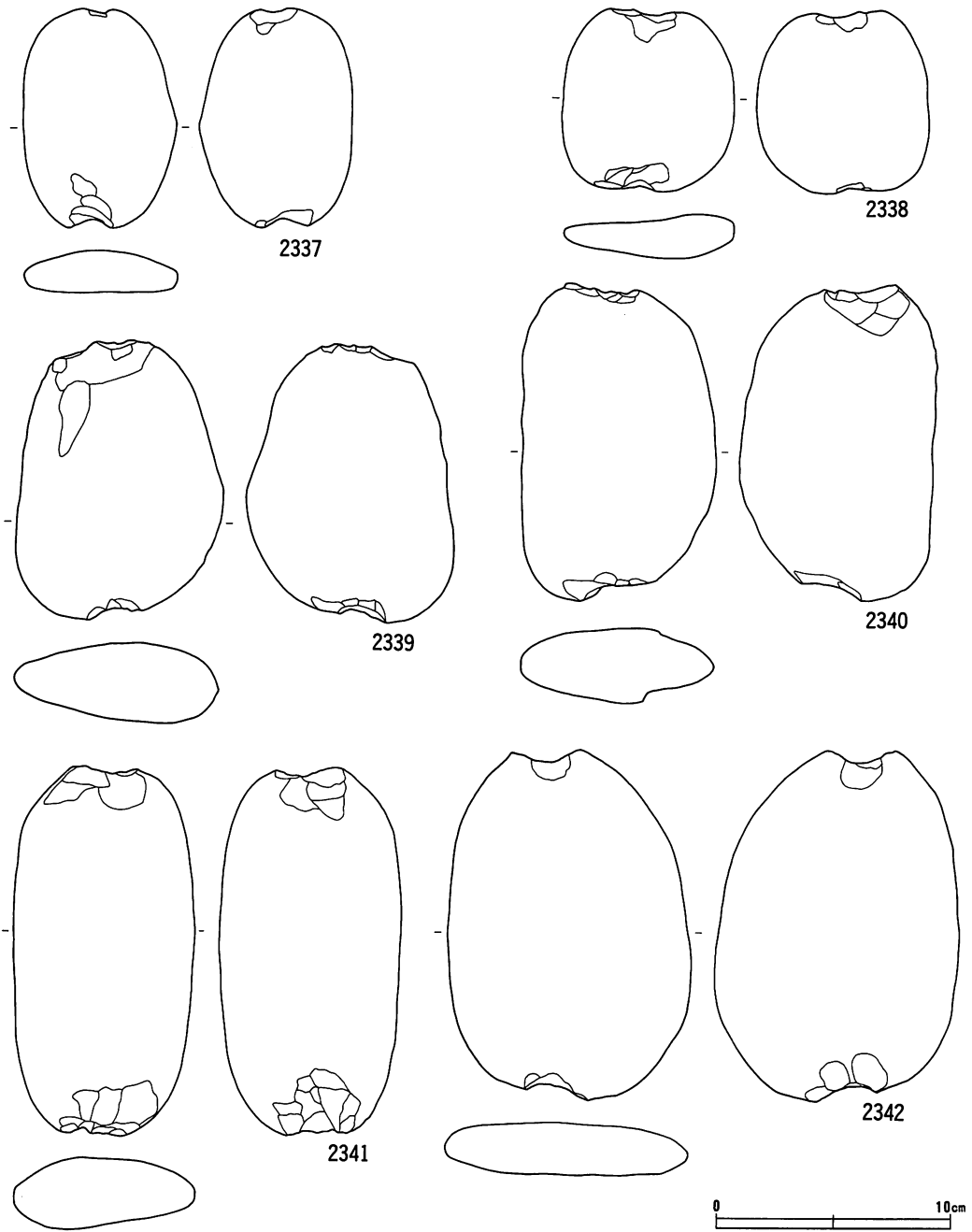
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2308	ⅦD 3 e	再堆積層	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	5.2	4.6	1.0	35		I	274
2309	ⅣD 9 j	I層	石錘	綠色凝灰質千枚岩	北上山地	5.7	4.3	1.4	45		I	274
2310	ⅣC 1 g	暗褐色土上面	石錘	赤色凝灰岩質千枚岩	北上山地	6.2	5.6	1.3	60		I	274
2311	ⅣC 5 d	再堆積層	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.0	4.7	1.0	30		I	274
2312	ⅣC 6 f	再堆積層	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	6.6	4.3	1.1	40		I	274
2313	ⅤE 9 g		石錘	綠色凝灰質千枚岩	北上山地	6.4	4.5	1.7	90		I	274
2314	ⅥC 5 g	再堆積層	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	6.3	5.1	1.3	60		I	274
2315	ⅦD 区	II層	石錘	硬砂岩	北上山地	6.4	5.3	1.9	100		I	274
2316	ⅦC 5 g	再堆積層	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	5.8	5.4	1.0	50		I	274
2317	ⅠD 1 i	II層	石錘	綠色凝灰質千枚岩	北上山地	6.0	5.3	1.8	80		I	274
2318	ⅠD 1 h	II層	石錘	硬砂岩	北上山地	7.2	5.7	1.7	100		I	274
2319	ⅠD 1 h	I層	石錘	綠色凝灰質千枚岩	北上山地	7.0	5.0	1.3	80		I	274
2320	ⅠD 4 i	I層	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.0	5.0	1.5	75		I	274
2321	ⅦC 7 f	再堆積層下位	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	7.5	5.2	1.3	70		I	274
2322	ⅠD 4 h		石錘	硬砂泥岩	磐石西部	8.3	5.1	1.2	70		I	274
2323	ⅦE 7 a	表土直下	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.0	5.7	1.6	100		I	274
2324	ⅠD 5 g	II層	石錘	綠色凝灰質千枚岩	北上山地	7.0	6.2	1.7	110		I	275

第446図 遺構外出土遺物 石錘(1)



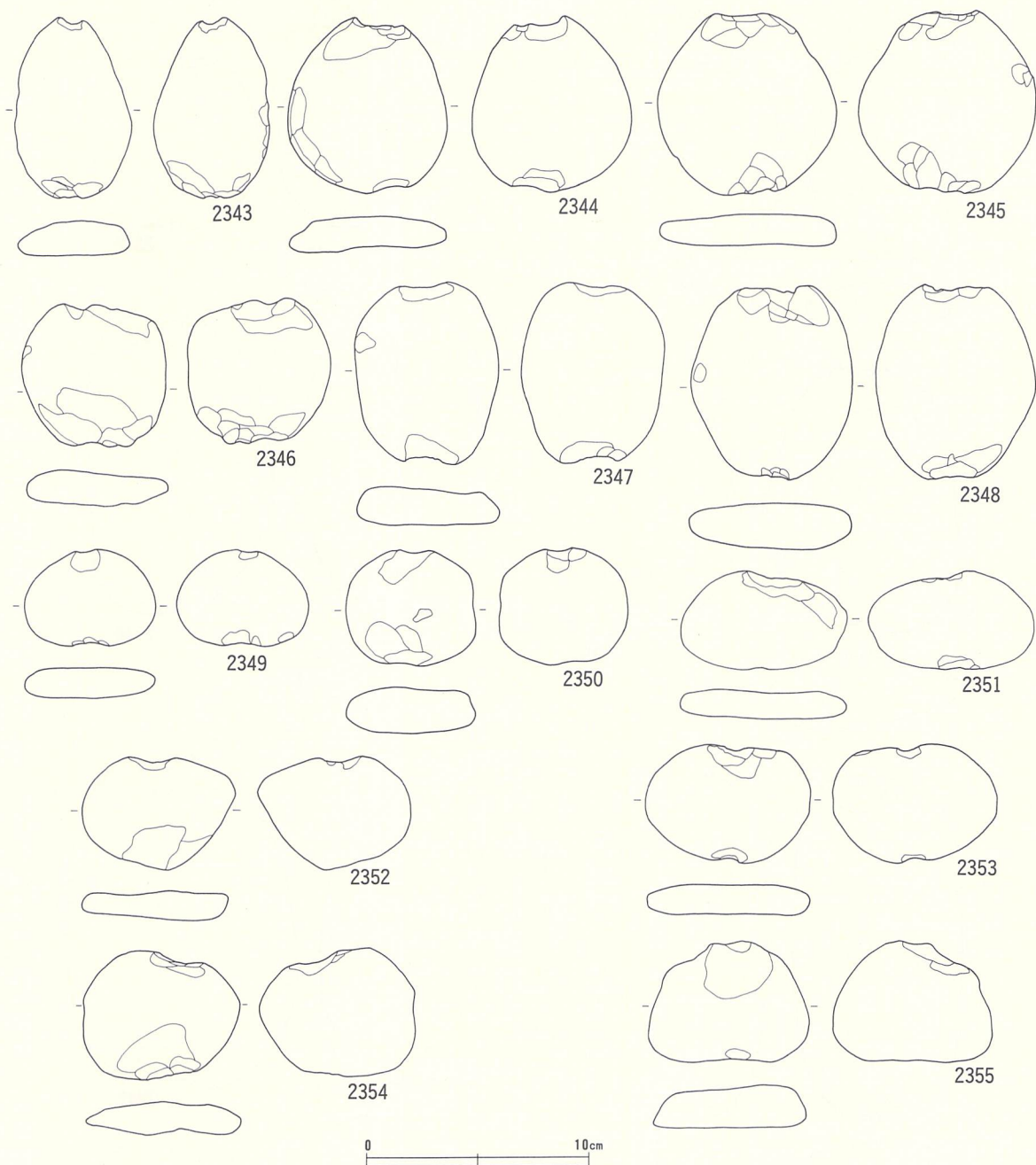
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2325	VII D 7 f	再堆積層	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	6.9	6.0	1.6	105		I	275
2326	VII C 6 h	I層	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	7.0	6.0	1.6	105		I	275
2327	VII D 0 g		石錘	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.3	5.9	1.8	95		I	275
2328	VII E 5 a	黒色土直上	石錘	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.3	6.1	1.6	120		I	275
2329	VII D 4 f	再堆積層	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	6.8	6.5	1.5	105		I	275
2330	№23トレンチ	盛土	石錘	硬砂岩	北上山地	7.0	6.9	1.9	130		I	275
2331	IX D 5 g	I層	石錘	珪長質細粒凝灰岩	雫石西部	8.3	6.4	1.9	110		I	275
2332	IX D 2 g	II層	石錘	硬砂岩	北上山地	9.3	5.8	1.8	135		I	275
2333	IX C 0 i	I層	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	8.4	7.2	2.1	170		I	275
2334	VII C 6 d	I層	石錘	アルコース砂岩	北上山地	8.2	6.8	2.4	180		I	275
2335	VIII D 2 c	黒色土中	石錘	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	9.5	6.1	1.7	125		I	275
2336	IX D 3 j	II層	石錘	硬砂岩	北上山地	9.3	6.5	2.1	190		I	275

第447図 遺構外出土遺物 石錘(2)



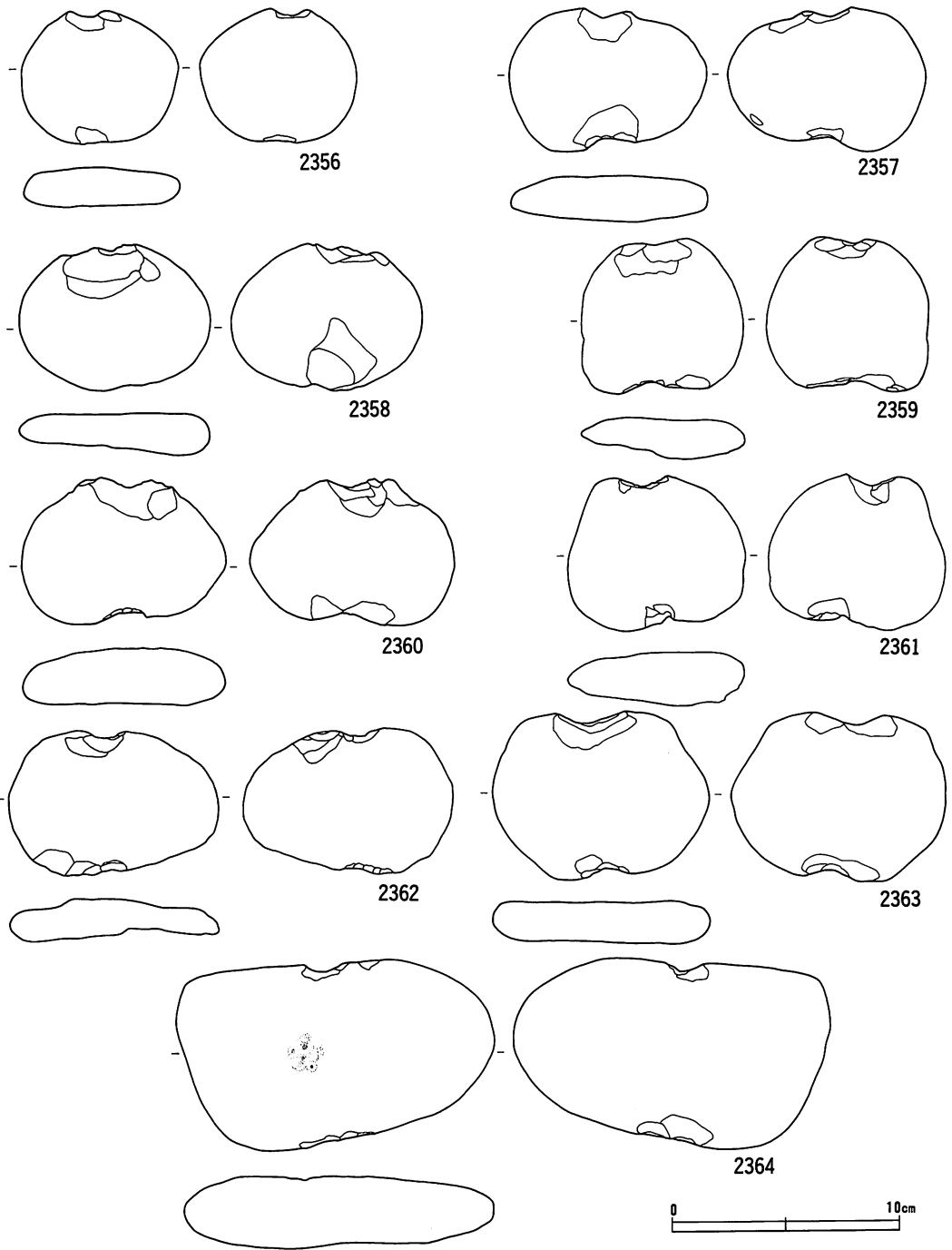
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2337	VII D 7 i	暗褐色土	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	9.3	6.5	1.8	145		I	275
2338	VII C 8 g		石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	7.8	7.4	1.9	175		I	275
2339	VI C 5 h	黒色土	石錘	輝石安山岩	北上山地	12.0	8.8	3.9	460		I	276
2340	VII D 2 g	表土直下	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	13.6	8.4	3.2	525		I	276
2341	IX E 1 a		石錘	苔鉄質凝灰岩	北上山地	15.8	7.7	3.4	625		I	276
2342	VII D 3 e	再堆積層	石錘	兩輝石安山岩	岩手山	15.1	10.4	3.2	430		I	276

第448図 遺構外出土遺物 石錘(3)



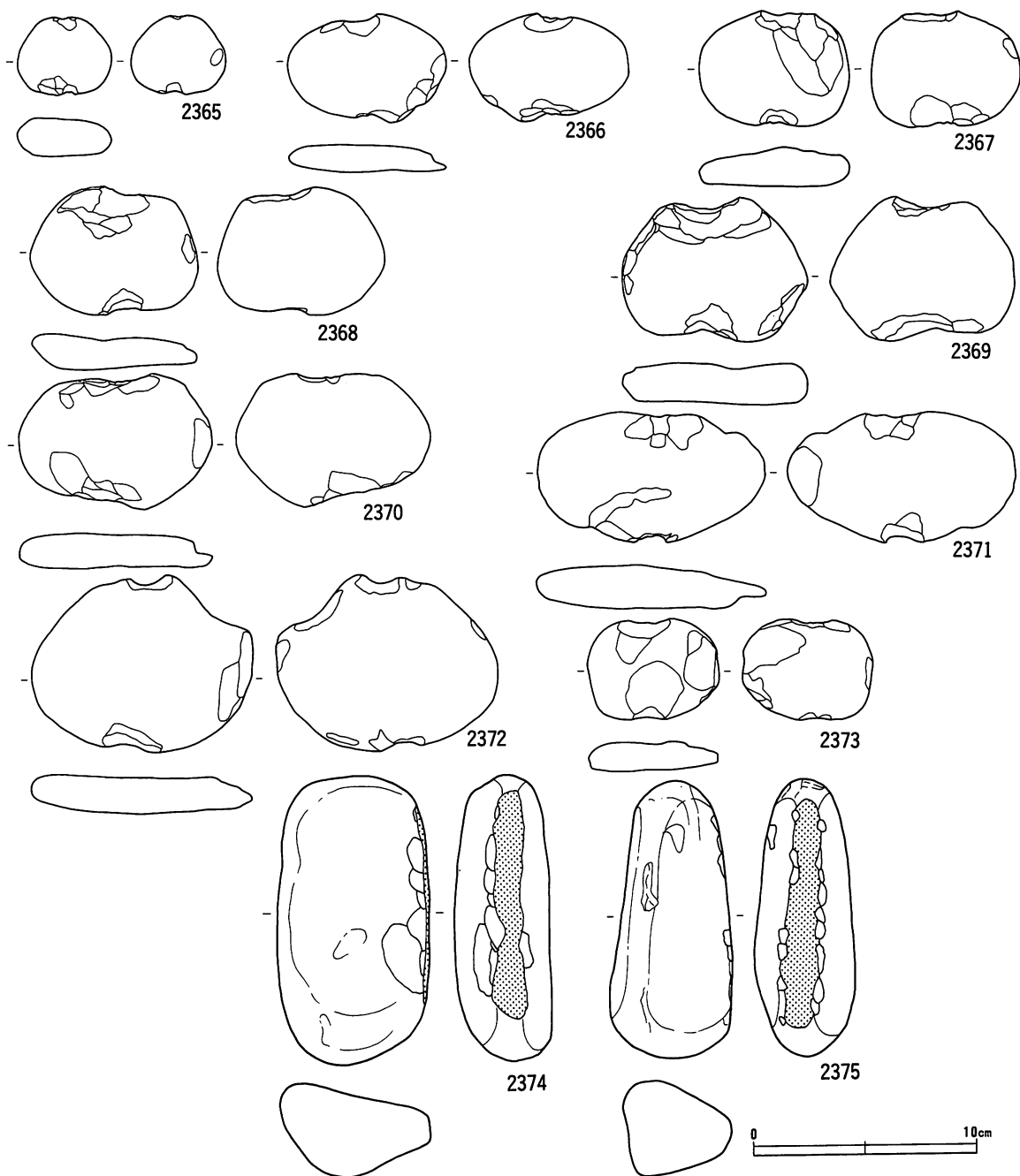
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	
2343	VII C 5 g	再堆積層下位	石錘	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.1	5.3	1.7	95		I'	276
2344	VII D区	II層	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	7.8	7.2	1.6	135		I'	276
2345	IX D 5 i	II層	石錘	珪長質凝灰岩	北上山地	8.2	8.0	1.4	150		I'	276
2346	IX D 0 i	I層	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.4	6.5	1.6	100		I'	276
2347	VII D 5 g	II層	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	8.2	6.5	2.0	165		I'	276
2348	No25 トレンチ	盛土	石錘	硬砂岩	北上山地	8.8	7.3	2.1	210		I'	276
2349	VI D 0 e	表土	石錘	苦鉄質凝灰岩	北上山地	4.0	5.8	1.4	55		II	276
2350	VII C 8 c	再堆積層	石錘	硬砂岩	北上山地	5.2	5.8	2.0	95		II	276
2351	VIII D 9 f	I層	石錘	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	4.5	7.4	1.3	75		II	276
2352	VI D 7 d	表土直下	石錘	チャート質千枚岩	北上山地	5.1	6.8	1.3	60		II	276
2353	VII C 8 f	再堆積層	石錘	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.4	7.5	1.4	98		II	277
2354	VII C 8 e	再堆積層	石錘	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.8	7.1	1.5	80		II	277
2355	IX D 1 h	II層	石錘	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.4	7.2	1.9	125		II	277

第449 図 遺構外出土遺物 石錘(4)



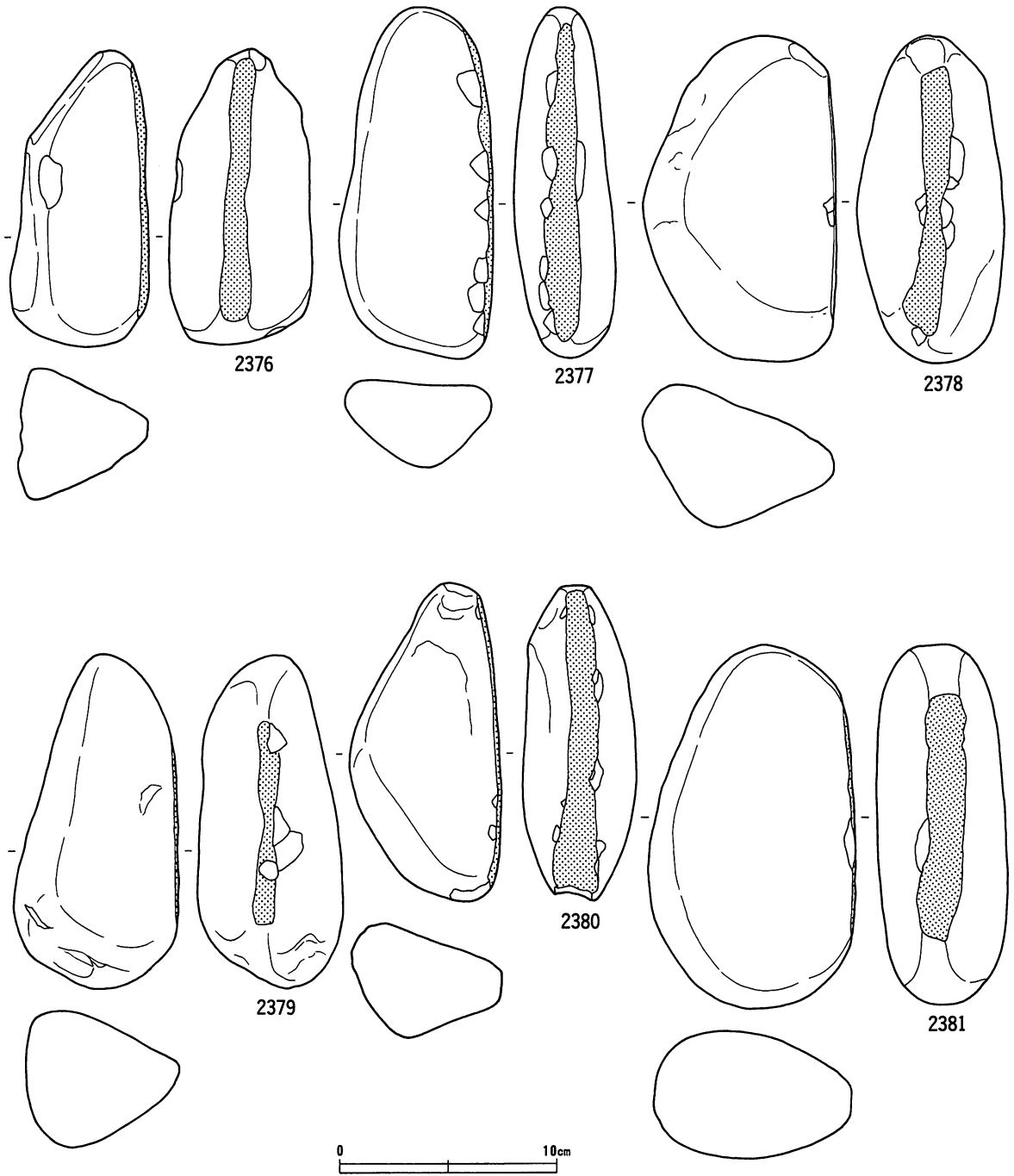
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2356	ⅦE 5 a		石錘	硬砂岩	北上山地	6.0	6.9	1.7	115		Ⅱ	277
2357	ⅦC 6 g	再堆積層	石錘	硬砂岩	北上山地	6.3	8.7	2.1	145		Ⅱ	277
2358	ⅦD 8 c	I層	石錘	輝石安山岩	北上山地	6.4	8.4	1.9	140		Ⅱ	277
2359	ⅦC 2 c		石錘	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.8	7.1	1.7	120		Ⅱ	277
2360	ⅦD 0 a	黄褐色土	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.5	9.0	2.5	180		Ⅱ	277
2361	ⅦD 8 i	Ⅱ層	石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.8	6.7	2.3	160		Ⅱ	277
2362	ⅦD 0 ライン		石錘	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.4	9.3	1.9	150		Ⅱ	277
2363	ⅦD 7 a	Ⅱ層上面	石錘	チャート質千枚岩	北上山地	7.4	9.5	1.9	195		Ⅱ	277
2364	ⅨD 9 j	I層	石錘	硬砂岩	北上山地	8.4	13.9	3.1	555	+凹石。	Ⅱ	278

第450図 遺構外出土遺物 石錘(5)



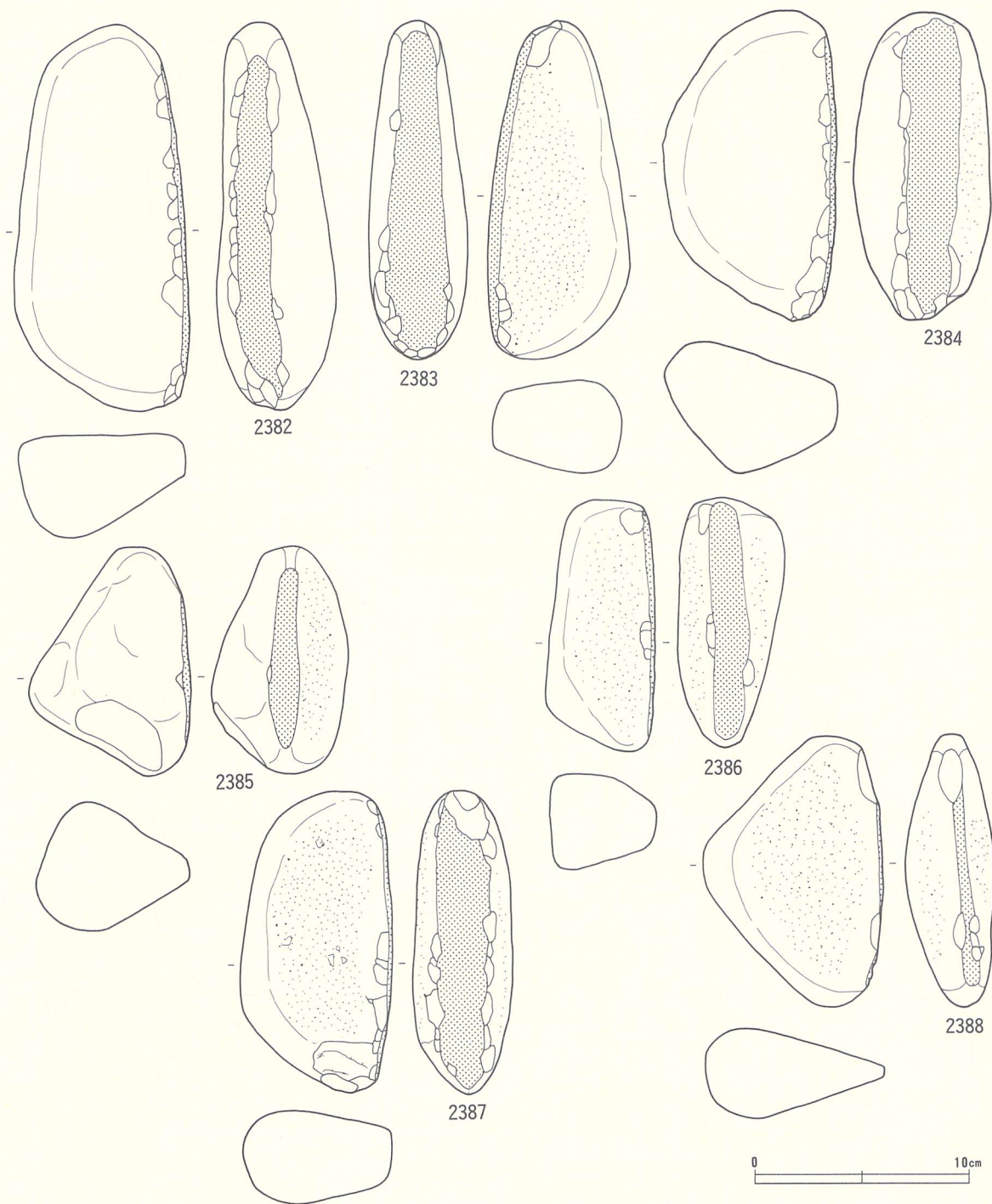
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2365	Na25トレンチ		石錘	アルコース砂岩	北上山地	3.5	4.2	1.8	30		II'	278
2366	VII D 0 f	表土直下	石錘	チャート質千枚岩	北上山地	4.8	7.1	1.6	65		II'	278
2367	VI D 7 a	II層上面	石錘	チャート質千枚岩	北上山地	5.2	6.8	1.8	95		II'	278
2368	VII C 9 f	II層	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	5.8	7.6	1.7	85		II'	278
2369	VII C 7 e	再堆積層	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	6.5	8.4	1.8	115		II'	278
2370	VII C 7 f	再堆積層下位	石錘	凝灰質千枚岩	北上山地	6.1	8.8	1.6	110		II'	278
2371	IX D 1 h	II層	石錘	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	10.4	5.8	2.1	170		II'	278
2372	VII D 区	II層	石錘	硬砂岩	北上山地	10.0	8.0	1.8	200		II'	278
2373	VII C 9 e	I層	石錘	チャート質千枚岩	北上山地	4.5	5.9	1.4	60		III	278
2374	IX D 7 g	I層	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	13.0	6.9	4.1	570		I a 1	278
2375	X D 区	表土	敲磨器類A群	赤色凝灰質角礫岩	北上山地	12.5	5.5	4.5	440		I a 1	278

第451図 遺構外出土遺物 石錘(6)・敲磨器類A群(1)



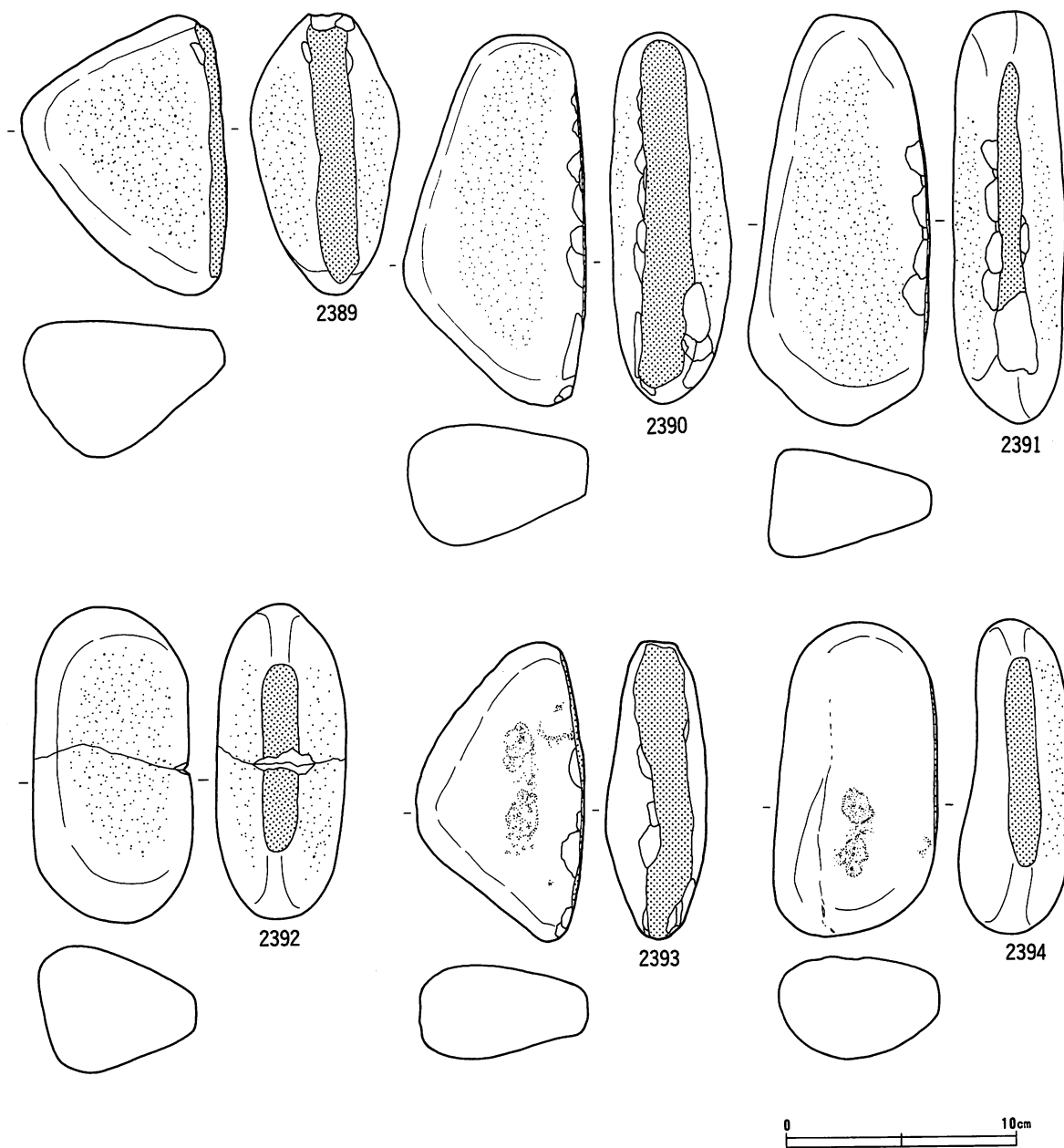
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2376	Ⅸ D 9 g	Ⅱ層	敲磨器類A群	珪長質凝灰岩	北上山地	13.6	6.3	5.9	680	剝離無し。	I a 1	279
2377	Ⅵ D 7 i	黒色土	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	16.1	7.1	4.1	640		I a 1	279
2378	Ⅷ E 0 a		敲磨器類A群	緑色凝灰岩	北上山地	14.9	9.0	6.6	1110		I a 1	279
2379	Ⅶ E 6 b		敲磨器類A群	緑色凝灰岩	北上山地	15.3	7.7	6.2	1020		I a 1	279
2380	Ⅶ D 6 f	Ⅱ層	敲磨器類A群	輝石安山岩	北上山地	14.6	7.0	5.3	615		I a 1	279
2381	Ⅵ D 5 h	表探	敲磨器類A群	緑色凝灰岩	北上山地	16.7	9.6	6.0	1400		I a 1	279

第452図 遺構外出土遺物 敲磨器類A群(2)



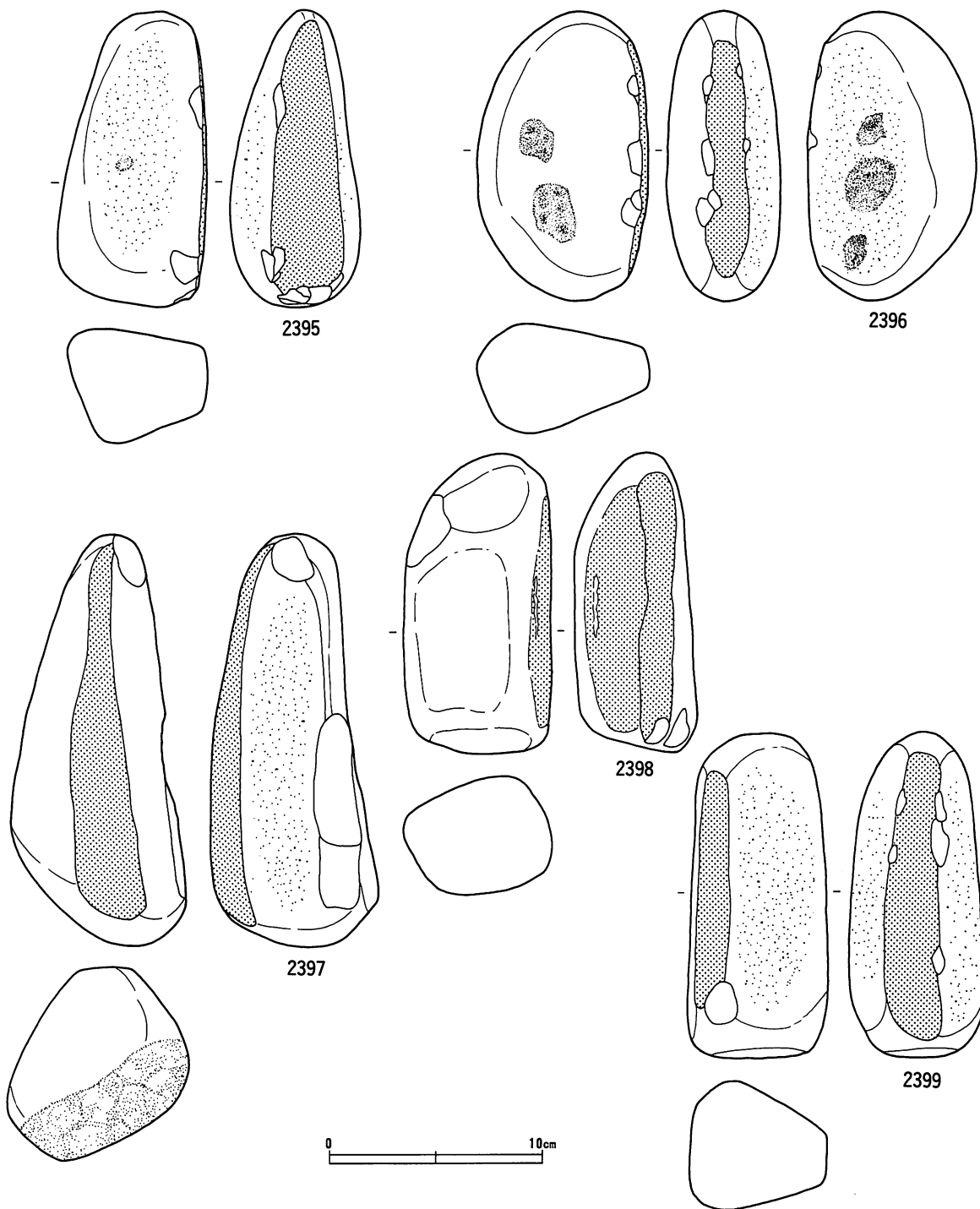
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2382	Ⅶ C 5 h	再堆積層	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	北上山地	18.2	8.2	5.7	1110		I a 1	279
2383	IX E 4 a	Ⅱ層	敲磨器類 A 群	兩輝石安山岩	奥羽山地	15.7	6.6	4.6	690	平滑面 1 面。	I a 1	279
2384	Ⅷ C 2 h	整地層下位	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	北上山地	14.5	8.1	6.1	910	平滑面 1 面。	I a 1	279
2385	Ⅶ C 4 f	再堆積層下位	敲磨器類 A 群	花崗閃緑岩	北上山地	10.6	7.6	6.0	620	平滑面 1 面。	I a 1	280
2386	Ⅶ D 2 j		敲磨器類 A 群	兩輝石安山岩	奥羽山地	11.7	5.1	4.5	430	平滑面 2 面。	I a 1	280
2387	Ⅵ C 4 g	再堆積層下位	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	奥羽山地	14.1	7.1	4.3	695	平滑面 2 面。	I a 1	280
2388	Ⅶ D 3 f	再堆積層	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	北上山地	12.6	8.3	4.1	490	平滑面 2 面。	I a 1	280

第453図 遺構外出土遺物 敲磨器類 A 群(3)



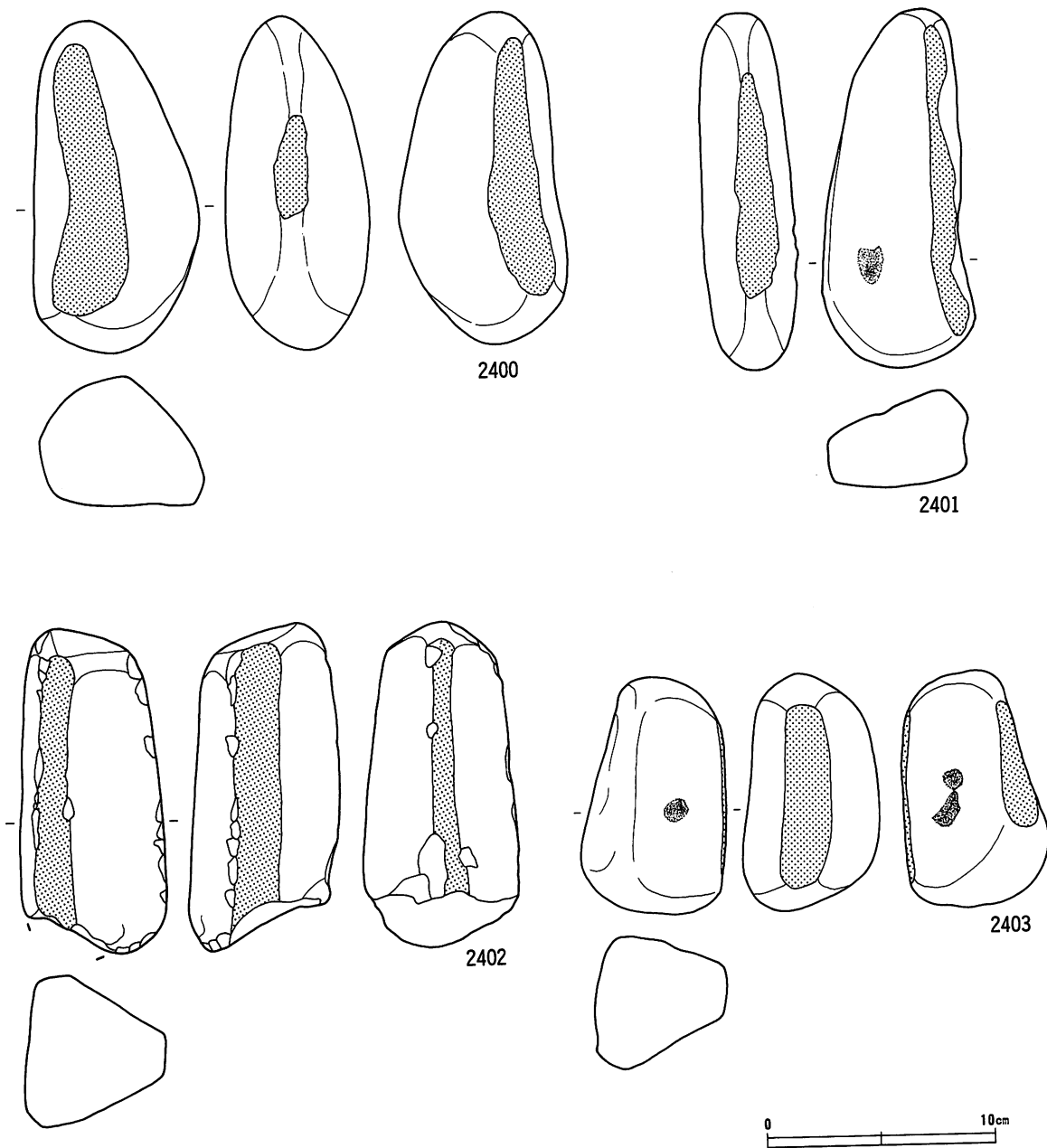
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2389	№25 トレンチ	盛土	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	北上山地	12.2	8.9	6.5	720	平滑面 2 面。	I a 1	280
2390	VIII D 8 i	II 層黒色土	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	北上山地	16.2	8.0	5.2	920	平滑面 2 面。	I a 1	280
2391	IX E 9 a		敲磨器類 A 群	輝石安山岩	奥羽山地	17.8	8.0	4.8	990	平滑面 2 面。	I a 1	280
2392	IX E 1 a		敲磨器類 A 群	輝石安山岩	北上山地	13.7	7.1	5.5	830	平滑面 2 面。剝離無し。	I a 1	280
2393	VIII D 9 f	I 層	敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.0	7.4	4.0	520	+ 凹石。	I a 1	280
2394	VIII D 9 f	I 層	敲磨器類 A 群	珉長質凝灰岩	北上山地	13.6	7.1	4.5	670	剝離無し。平滑面 1 面。	I a 1	280

第454図 遺構外出土遺物 敲磨器類 A 群(4)



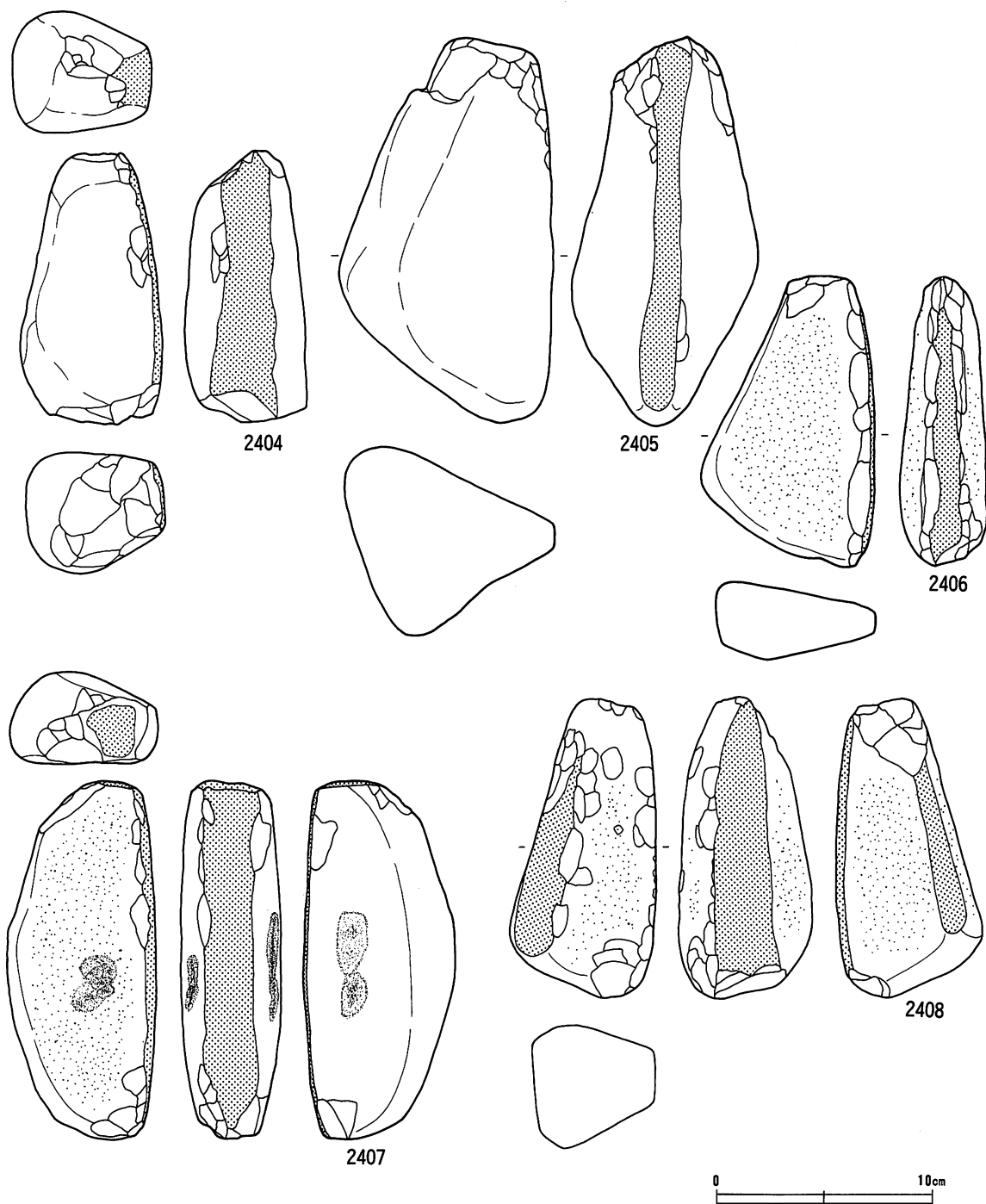
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2395	Ⅵ D 5 e		敲磨器類A群	輝石安山岩	北上山地	13.9	7.0	5.4	805	平滑面2面。	I a 1	280
2396	Ⅶ D 5 i		敲磨器類A群	珪長質凝灰岩	北上山地	13.6	8.1	5.4	780	+凹石。平滑面1面。	I a 1	281
2397	Ⅷ D 0 f		敲磨器類A群	緑色凝灰岩	北上山地	19.3	8.0	8.9	1460	平滑面1面。+敲石?。剝離なし。	I a 1	281
2398	Ⅷ C 8 i	I層	敲磨器類A群	珪岩	北上山地	14.1	7.0	5.3	835	磨面2面。剝離なし。	I a 1	281
2399	X D 6 g	再堆積層	敲磨器類A群	輝石安山岩	北上山地	15.3	6.6	6.3	1030	磨面2面。平滑面2面。	I a 1	281

第455図 遺構外出土遺物 敲磨器類A群(5)



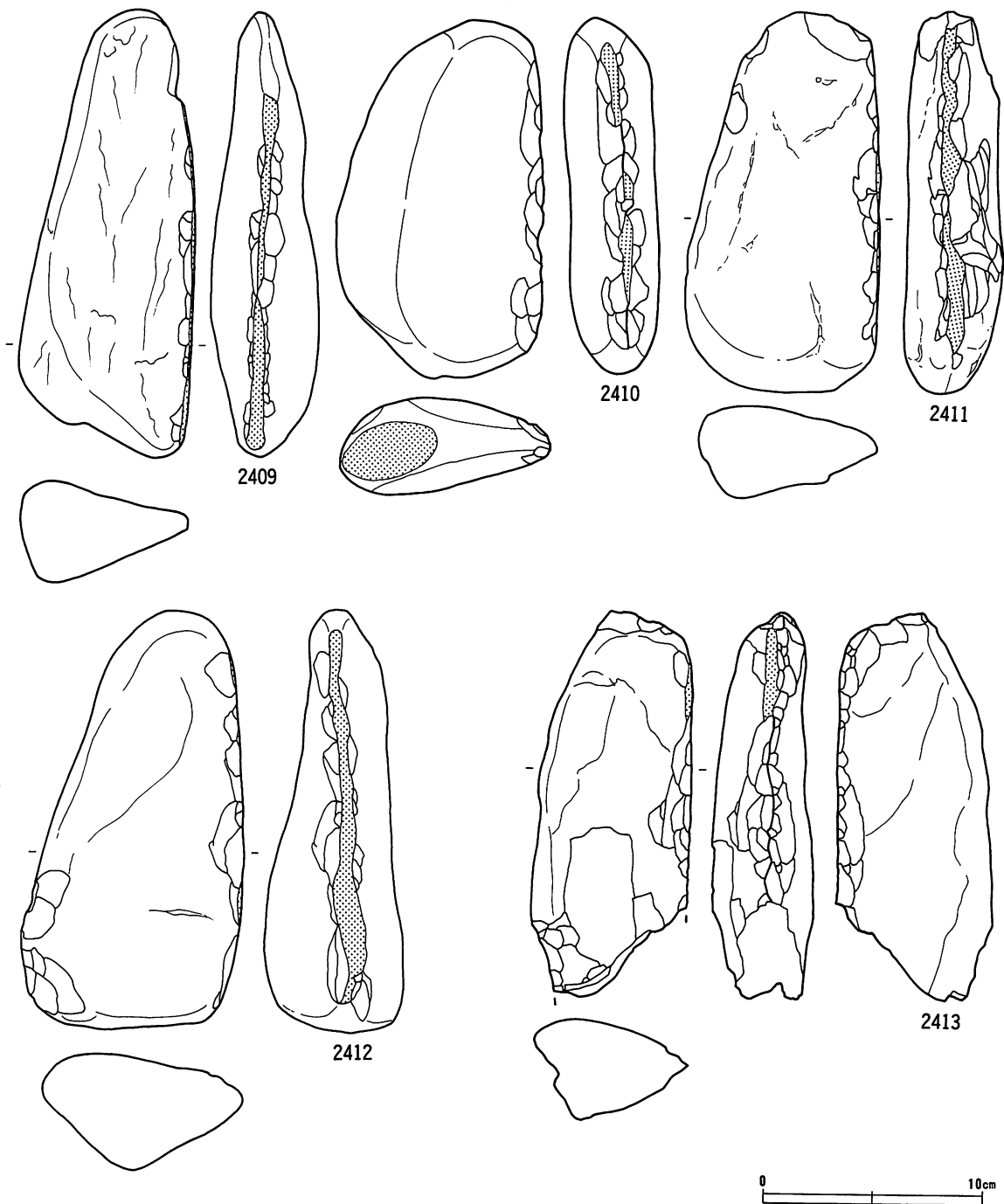
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2400	ⅧE区		敲磨器類A群	綠色凝灰岩	北上山地	14.6	7.4	5.7	830	磨面3面。剝離無し。	I a 1	281
2401	ⅨE 2 b		敲磨器類A群	凝灰岩	北上山地	15.7	6.7	4.1	600	磨面2面。+凹石。剝離なし。	I a 1	281
2402	ⅨE 4 a	I層	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	(13.5)	6.4	6.5	(790)	磨面3面。	I a	281
2403	ⅧD区	表土	敲磨器類A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	10.3	6.4	5.7	580	磨面2面。+凹石。剝離なし。	I a 1	281

第456図 遺構外出土遺物 敲磨器類A群(6)



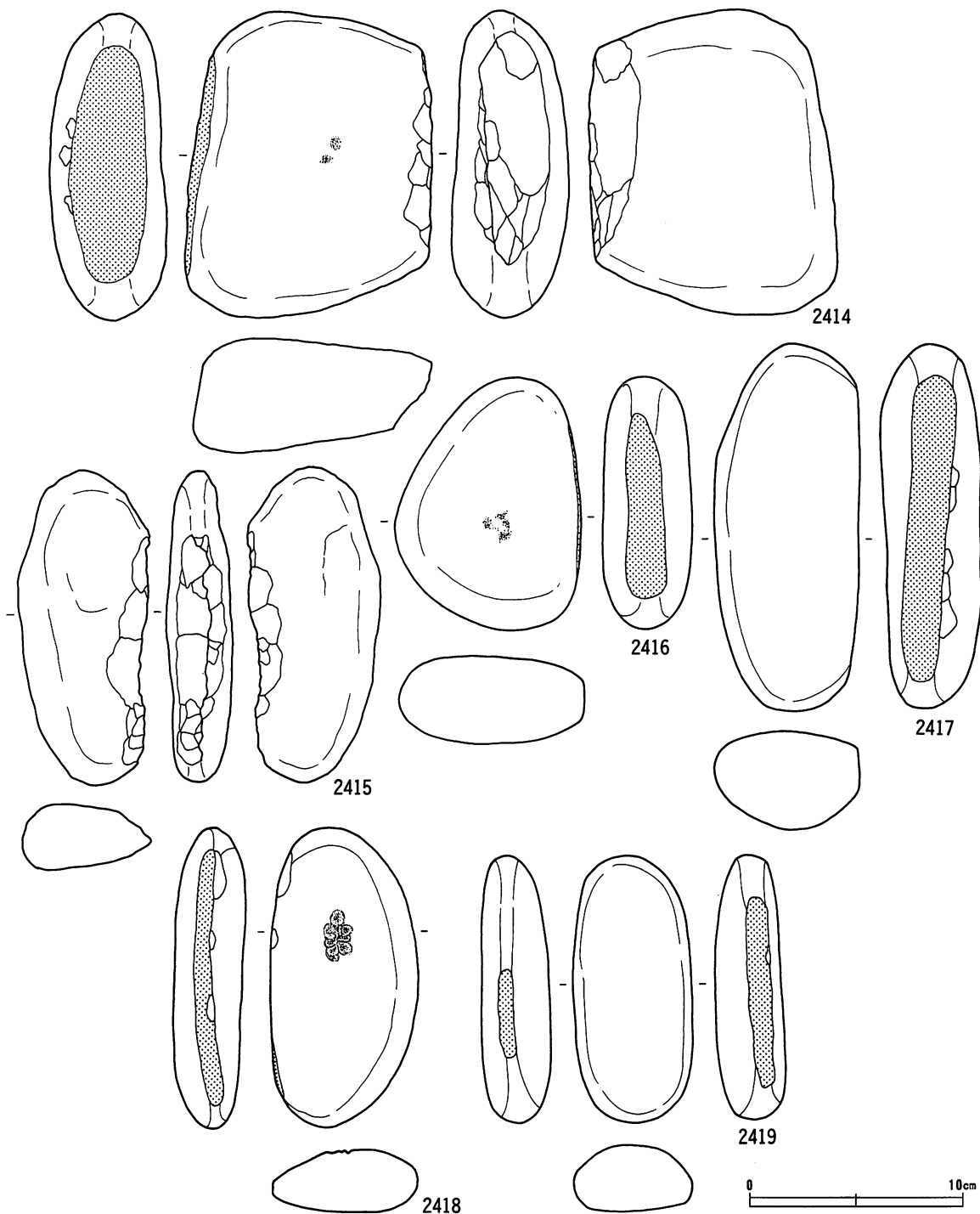
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2404	VIII D 9 f	I層	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	奥羽山地	12.5	6.6	5.6	610	+ 敲石。	I a 2	282
2405	VII D 1 g	表土	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	北上山地	17.9	9.9	8.4	1810	+ 敲石?	I a 1	282
2406	IX D 6 i	表土	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	北上山地	13.3	8.1	3.3	520	平滑面 2 面。	I a 2	282
2407	VII C 8 f	再堆積層	敲磨器類 A 群	凝灰岩質千枚岩	北上山地	16.5	6.9	4.6	750	端部磨面。+ 凹石。平滑面 1 面。	I a 2	282
2408	IX D 1 g	II層	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	奥羽山地	13.9	6.8	5.7	740	磨面 3 面。平滑面 3 面。	I a 2	282

第457図 遺構外出土遺物 敲磨器類 A 群(7)



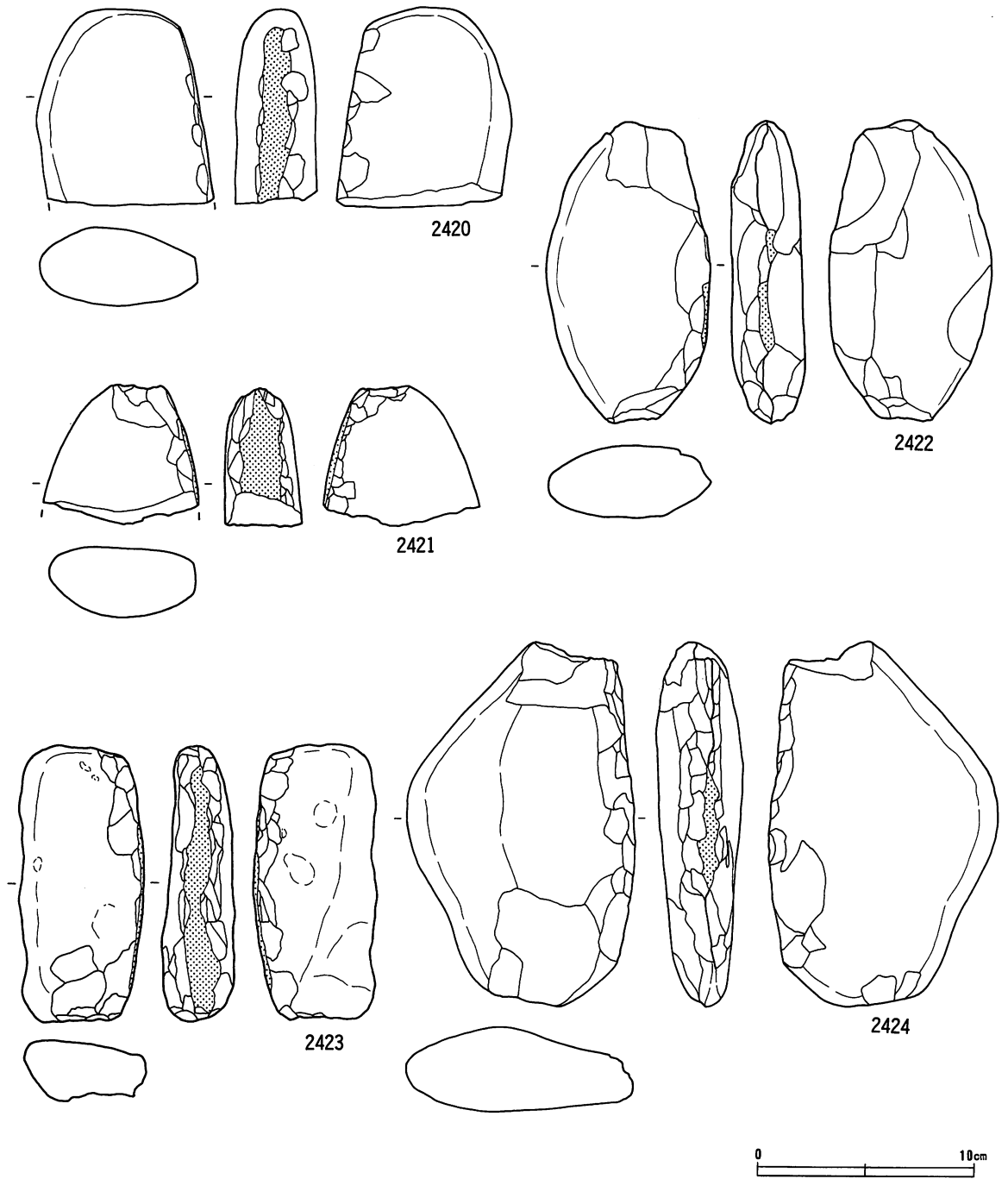
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2409	IX D 7 i	II層	敲磨器類A群	珪長質凝灰岩	北上山地	20.4	7.8	4.6	760		I b 1	282
2410	IX D 1 i	I層	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	15.9	9.5	3.9	930		I b 1	282
2411	VII D 3 i	II層暗褐色土	敲磨器類A群	綠色凝灰岩	北上山地	17.1	8.8	4.2	970		I b 2	282
2412	IX D 3 h	I層	敲磨器類A群	珪長質凝灰岩	北上山地	19.0	10.0	5.3	1280		I b 2	283
2413	VII D 0 c		敲磨器類A群	綠色凝灰質千枚岩	北上山地	(16.9)	7.0	4.6	(700)		I b 2	283

第458図 遺構外出土遺物 敲磨器類A群(8)



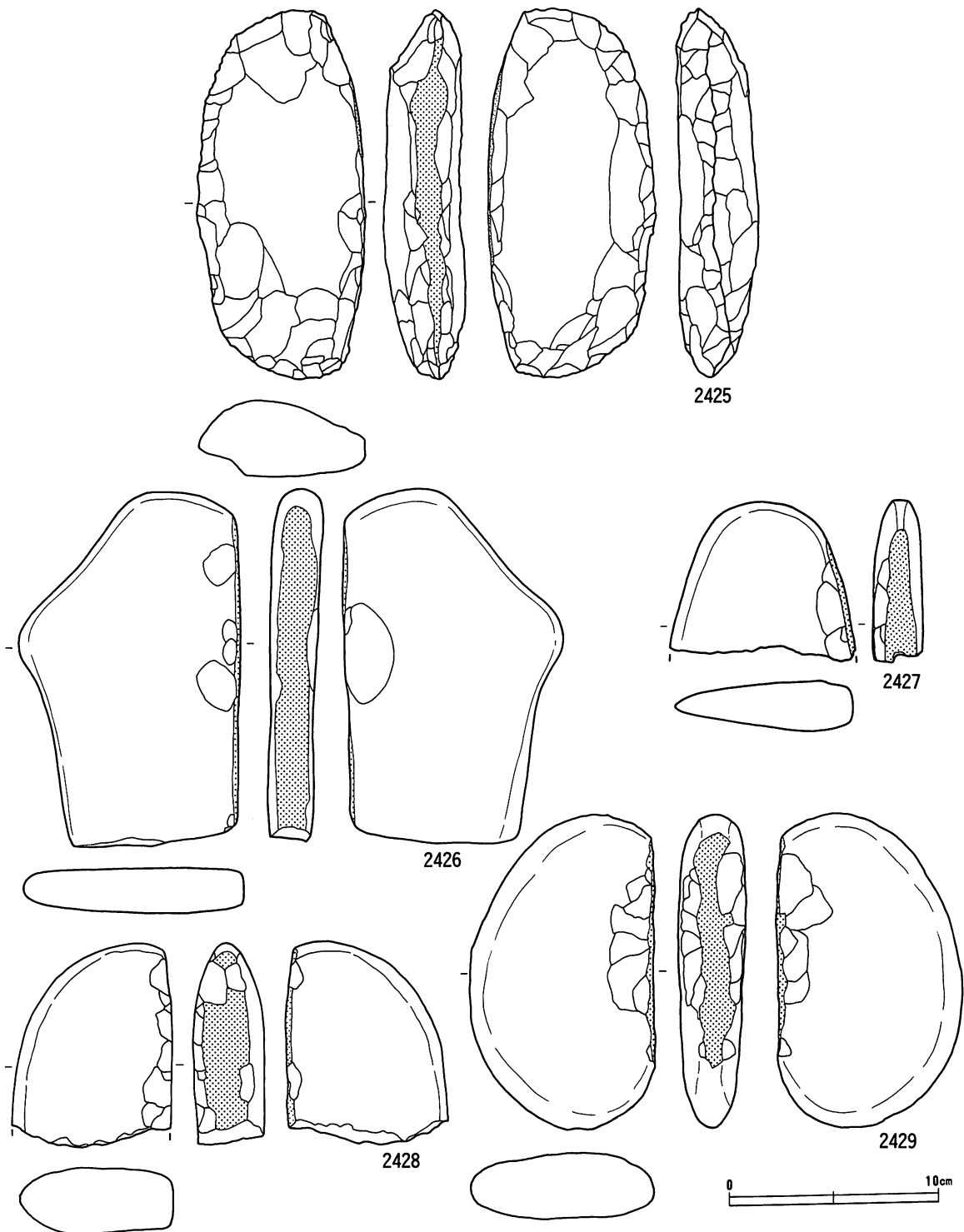
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2414	IX D 1 j	I層	敲磨器類 A群	硬砂岩	北上山地	14.1	1.6	5.2	1350	+ I a	I c 1	283
2415	IX E 3 c		敲磨器類 A群	両輝石安山岩	奥羽山地	14.7	6.2	3.0	355		I c 1	283
2416	不明		敲磨器類 A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	11.7	8.7	4.1	730	剝離無し。+凹石。	II a 1	283
2417	Na17 トレンチ	盛土	敲磨器類 A群	両輝石安山岩	奥羽山地	17.0	6.7	4.2	850		II a 1	283
2418	IX D 1 h	II層	敲磨器類 A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	14.0	7.0	3.0	440	+凹石。	II a 1	283
2419	VII D 5 a		敲磨器類 A群	アルコース砂岩	北上山地	12.5	5.6	3.2	350	磨面 2面。剝離無し。	II a 1	283

第459図 遺構外出土遺物 敲磨器類 A群(9)



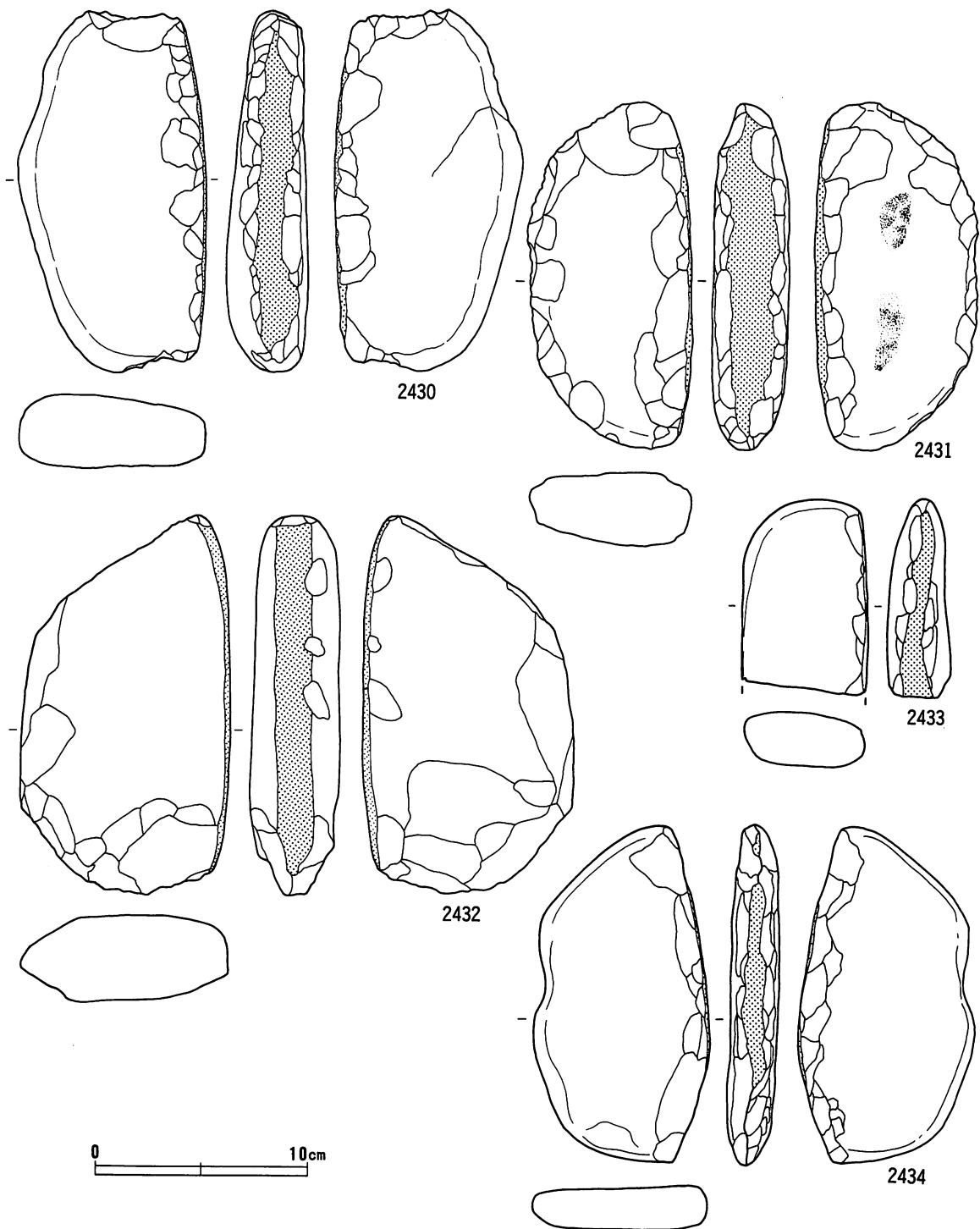
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2420	VII D 1 f	I 層	敲磨器類 A 群	緑色凝灰岩	掣石西部	(9.0)	8.2	3.8	(385)		II a	283
2421	VII D 1 g	表土	敲磨器類 A 群	輝石安山岩	北上山地	(6.4)	(7.1)	(3.2)	(210)	抉り有り。	II a 2	283
2422	VII C 5 i	I 層	敲磨器類 A 群	緑簾石千枚岩	北上山地	13.7	7.5	3.2	460		II b 2	284
2423	IX D 4 b	I 層	敲磨器類 A 群	流紋岩質細粒凝灰岩	掣石西部	12.6	5.7	2.8	320		II b 2	284
2424	IX E 1 a		敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	16.6	10.5	4.0	770	抉り有り。	II b 2	284

第460図 遺構外出土遺物 敲磨器類 A 群(10)



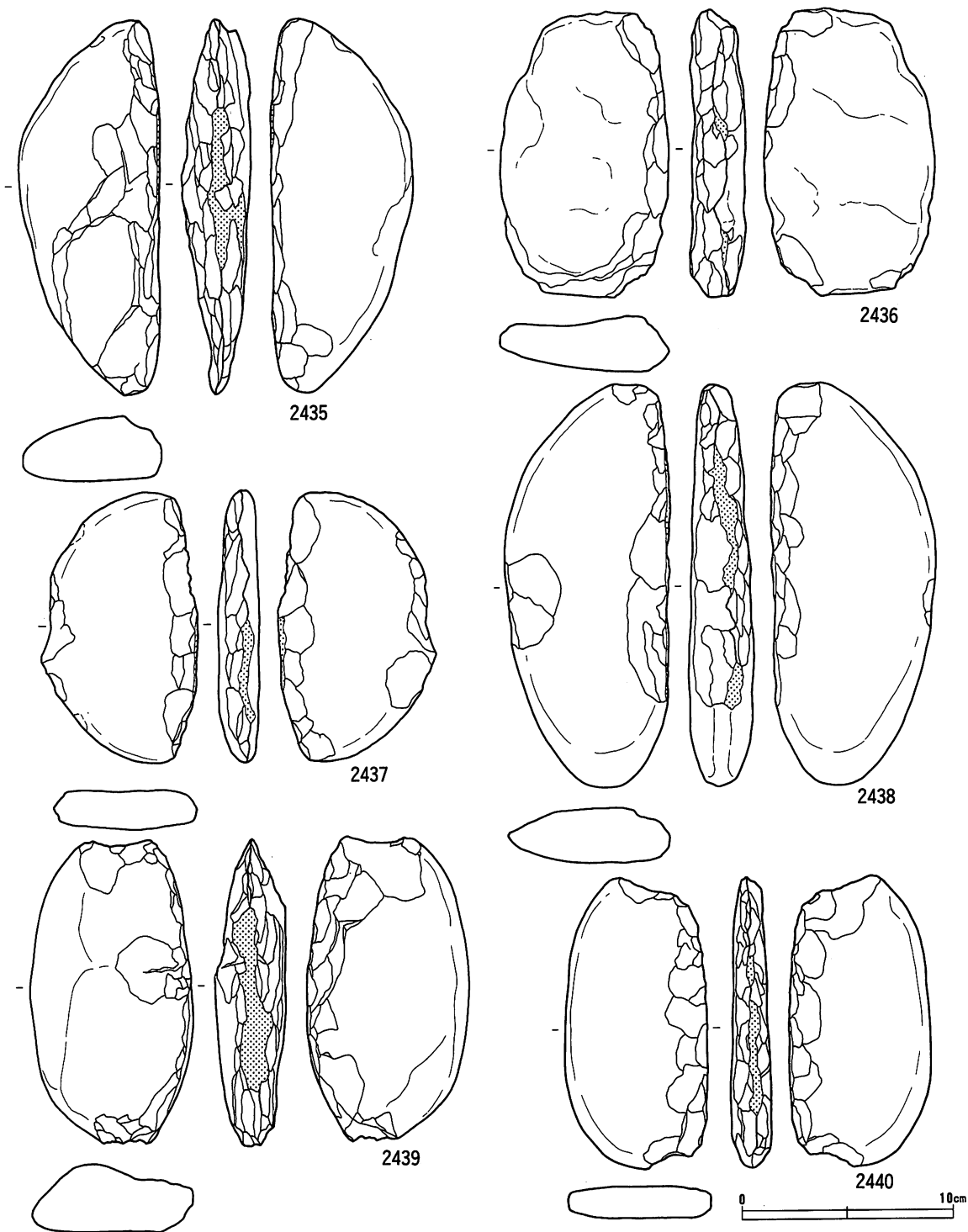
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2425	VII C区トレンチ	盛土	敲磨器類A群	流紋岩質凝灰岩	北上山地	17.4	8.1	4.0	700		II b 3	284
2426	VII D 0 h	I層	敲磨器類A群	珪長質極細粒凝灰岩	磐石西部	16.9	10.6	2.1	610		III a 1	284
2427	VII D 2 g	I層	敲磨器類A群	輝石安山岩	北上山地	(7.8)	(8.7)	(2.3)	(230)		III a	284
2428	VII D 0 g		敲磨器類A群	両輝石安山岩	岩手火山	(9.3)	7.7	3.1	(400)		III a	284
2429	VII E 5 b	黒色土	敲磨器類A群	凝灰岩	北上山地	15.0	8.9	3.2	620		III a 1	285

第461図 遺構外出土遺物 敲磨器類A群(11)



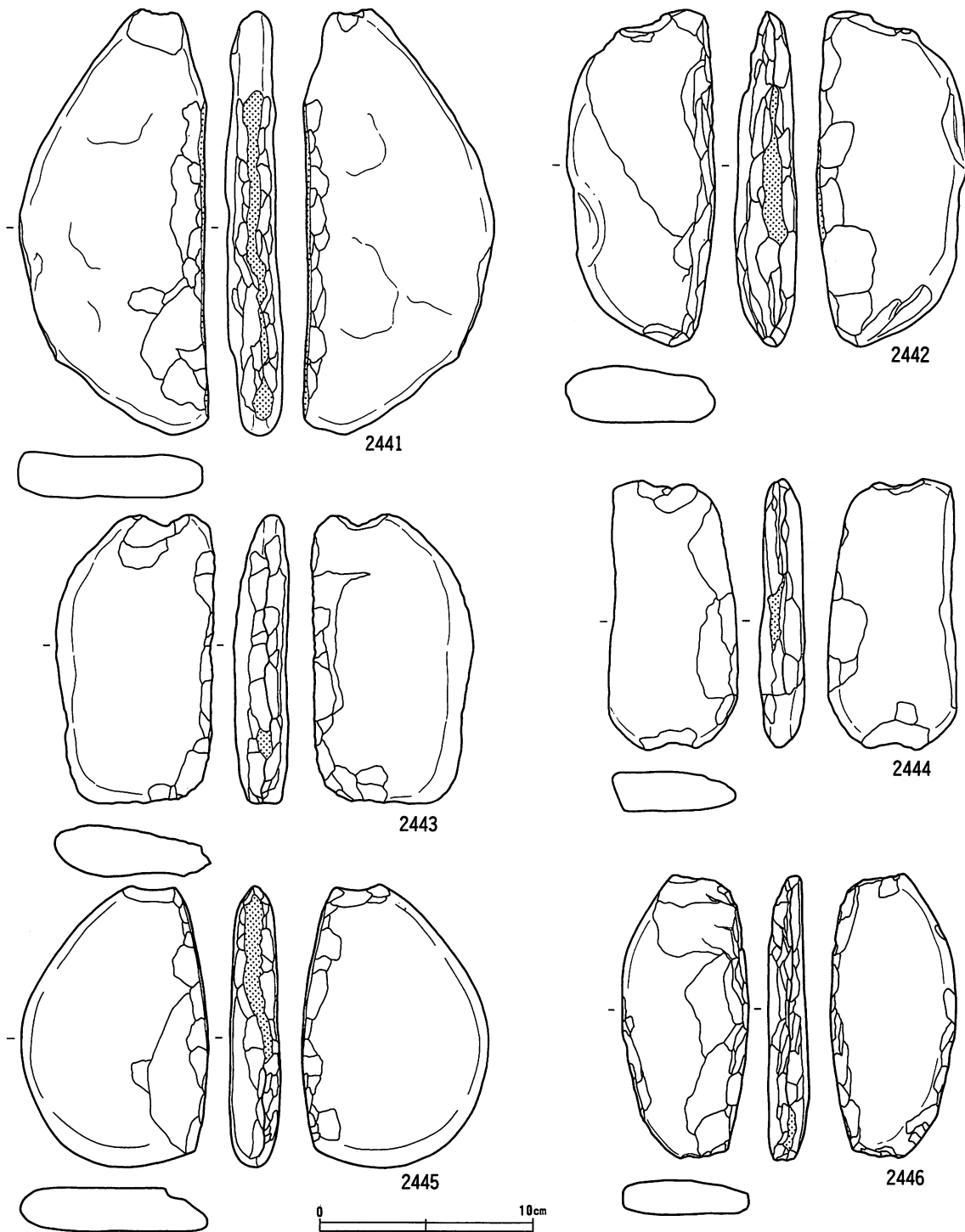
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2430	X E 6 f		敲磨器類 A 群	珪長質凝灰岩	北上山地	16.9	8.9	3.8	815	挟り有り。	III a 2	285
2431	Ⅶ D 8 b	I 層	敲磨器類 A 群	珪長質凝灰岩	北上山地	16.1	7.8	3.6	610	+凹石。	III a 3	285
2432	Ⅶ C 5 h	I 層	敲磨器類 A 群	珪長質凝灰岩	北上山地	17.0	9.9	4.0	1110		III a 3	285
2433	Ⅶ D 5 a		敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.2)	5.9	2.6	(270)		III b	285
2434	Ⅶ C 4 g	表採	敲磨器類 A 群	流紋岩質細粒凝灰岩	磐石西部	15.8	8.3	2.0	400		III b 1	286

第462図 遺構外出土遺物 敲磨器類 A 群(12)



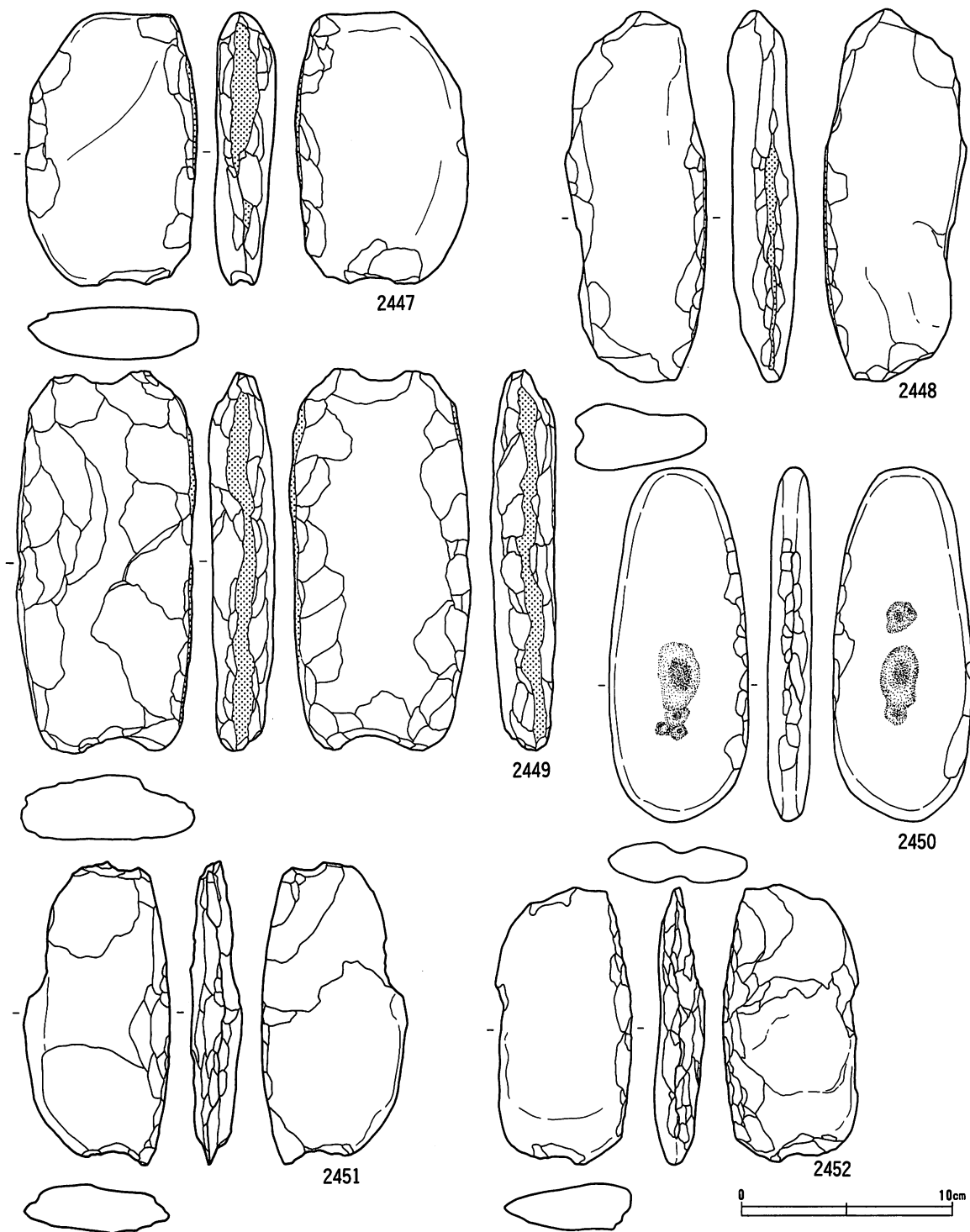
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2435	VII E 2 e	再堆積層	敲磨器類A群	緑礫石千枚岩	北上山地	17.6	6.7	3.1	420		III b 1	286
2436	出土不明		敲磨器類A群	粘板岩質千枚岩	北上山地	13.4	8.1	2.6	390		III b 1	286
2437	VIII D 2 c	黑色土	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	12.7	7.4	1.8	265		III b 2	286
2438	VII D 6 b	I層	敲磨器類A群	珪長質凝灰岩	北上山地	18.9	7.9	2.6	515		III b 2	286
2439	IX D 9 g	II層	敲磨器類A群	細粒凝灰岩	奥羽山地	14.4	7.6	3.2	460	挟り有り。	III b 2	286
2440	IX D 4 h	I層	敲磨器類A群	細粒凝灰岩	奥羽山地	13.7	6.8	1.5	230	挟り有り。	III b 2	286

第463図 遺構外出土遺物 敲磨器類A群(13)



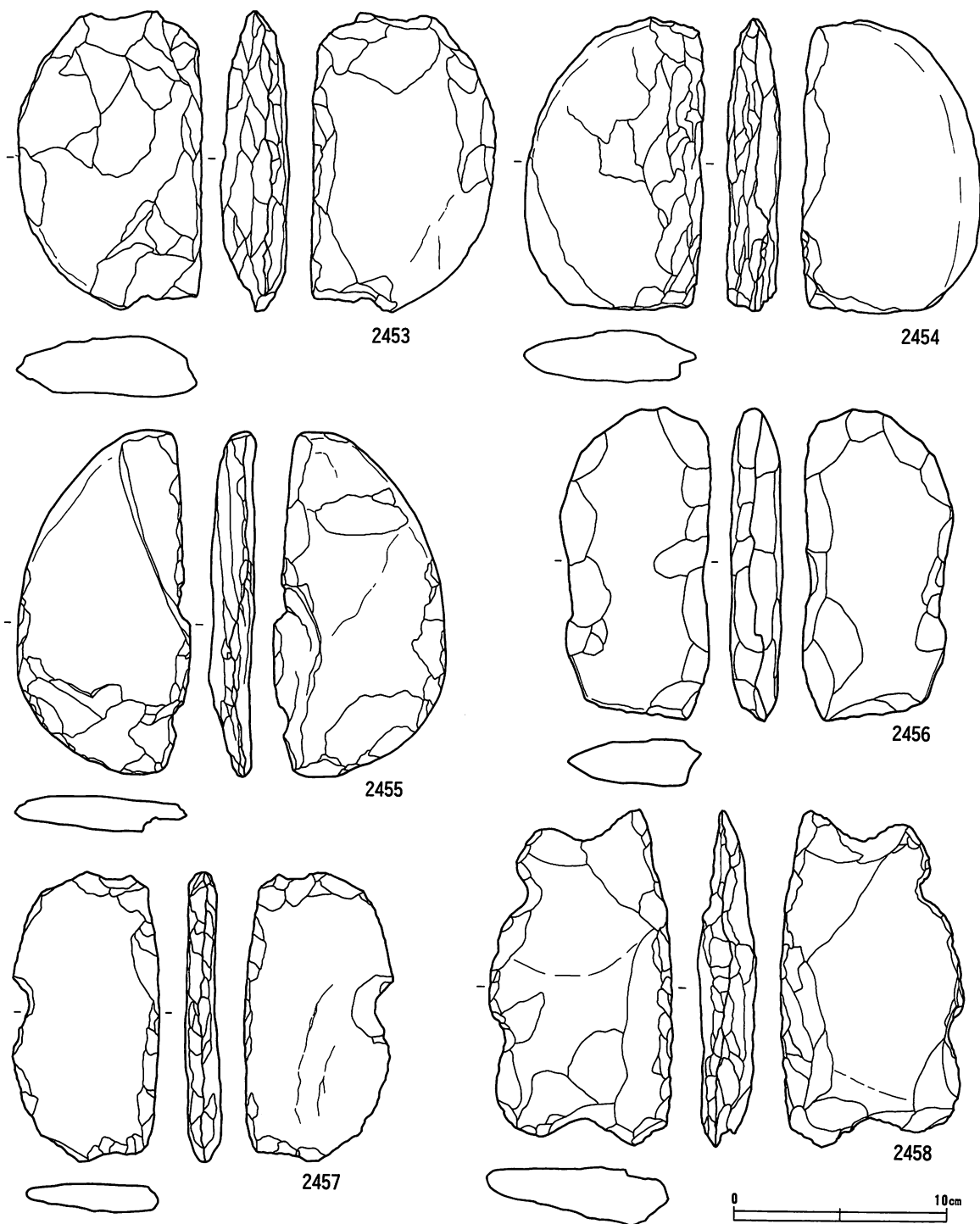
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2441	VII C 4 g	再堆積層	敲磨器類 A 群	流紋岩質細粒凝灰岩	礮石西部	19.6	8.8	2.0	520	抉り有り。	III b 2	286
2442	VII C 8 g		敲磨器類 A 群	綠簾石千枚岩	北上山地	15.6	7.0	2.7	420	抉り有り。	III b 2	286
2443	VI D 9 h	II 層	敲磨器類 A 群	兩輝石安山岩	奥羽山地	13.4	7.4	2.5	360	抉り有り。	III b 2	287
2444	IX D 1 i	I 層	敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	12.5	6.1	1.9	235	抉り有り。	III b 2	287
2445	VII C 6 g	再堆積層上位	敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.0	8.8	2.1	405	抉り有り。	III b 2	287
2446	VII C 7 e	再堆積層上位	敲磨器類 A 群	綠簾石千枚岩	北上山地	13.1	5.9	2.1	210		III b 2	287

第464図 遺構外出土遺物 敲磨器類 A 群(14)



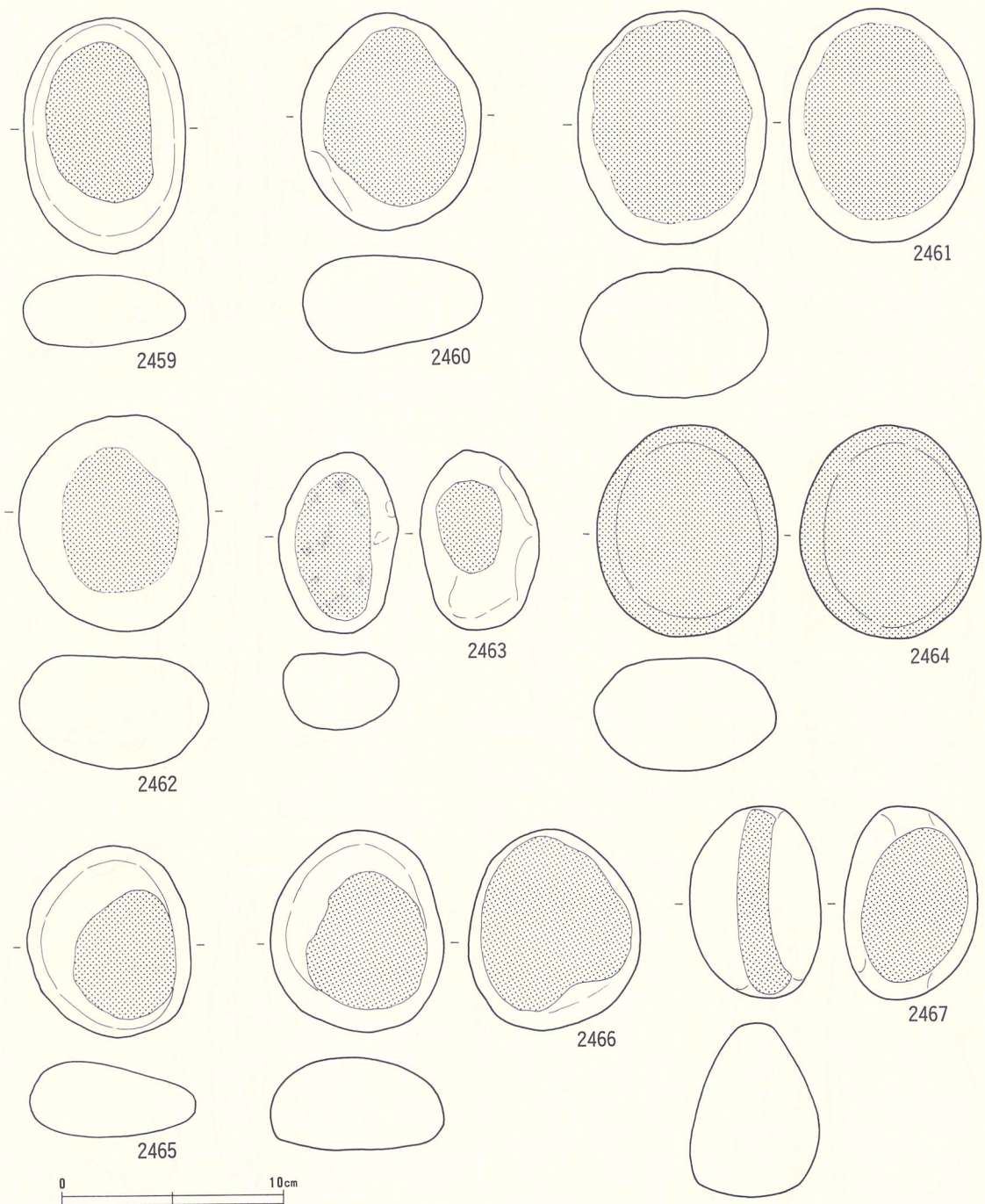
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2477	VII D 3 h		敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	12.7	8.2	2.5	430	抉り有り。	III b 2	287
2448	VII D 0 j	I 層	敲磨器類 A 群	粘板岩	北上山地	17.4	6.6	3.1	440		III b 2	287
2449	VII D 4 g	I 層	敲磨器類 A 群	粗粒凝灰岩	北上山地	17.9	8.3	3.0	740	磨面 2 面。抉り有り。	III b 3	287
2450	IX D 1 d	I 層	敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	16.6	6.6	1.9	320	+凹石。	III c 1	287
2451	IX D 5 j	表土	敲磨器類 A 群	凝灰岩千枚岩	北上山地	14.3	6.9	2.2	265	抉り有り。	III c 2	288
2452	IX D 1 h	II 層	敲磨器類 A 群	凝灰岩	北上山地	13.0	6.5	2.2	265	抉り有り。	III c 2	288

第465図 遺構外出土遺物 敲磨器類 A 群(15)



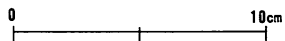
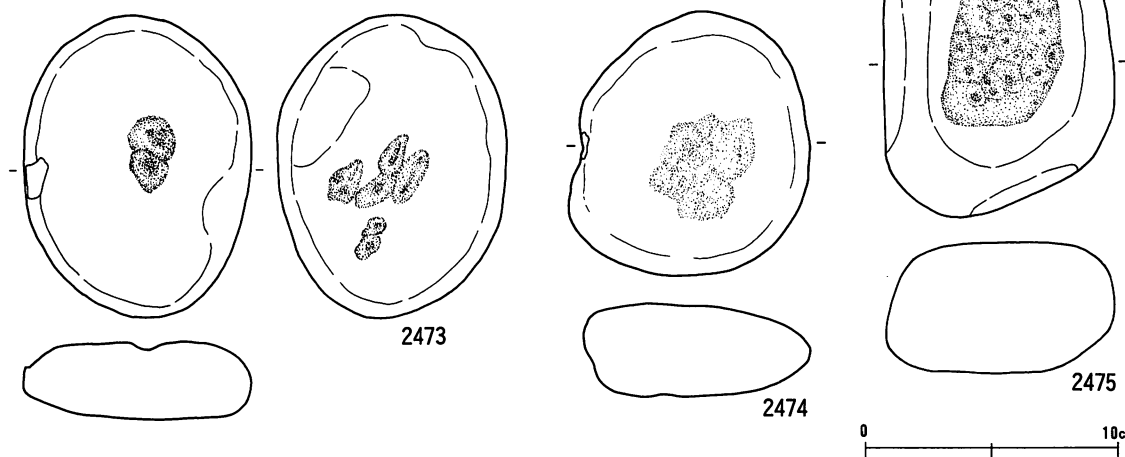
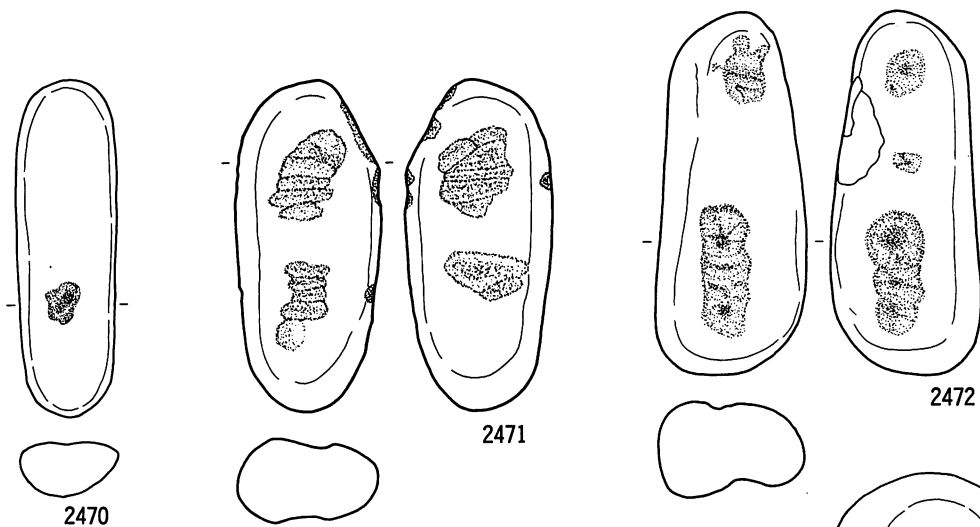
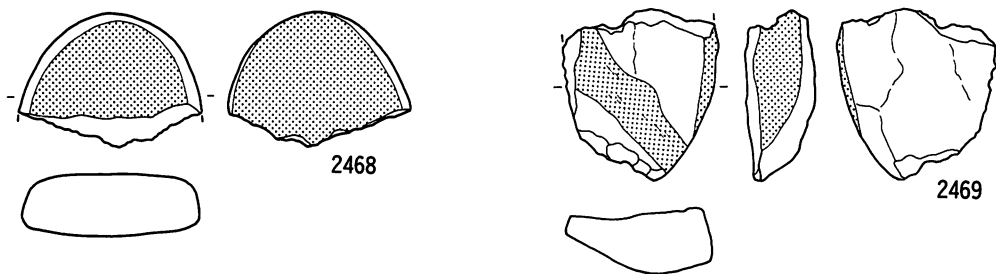
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2453	ⅦD 6 b	I層	敲磨器類A群	粘板岩質千枚岩	北上山地	13.1	8.2	3.0	400	挟り有り。	Ⅲc 2	288
2454	Ⅱa15トレンチ		敲磨器類A群	玄武岩質凝灰岩	北上山地	13.5	8.1	2.0	410		Ⅲc 2	288
2455	ⅦD 3 h		敲磨器類A群	凝灰岩	北上山地	16.0	8.0	1.6	265		Ⅲc 2	288
2456	ⅨC 0 i	I層	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	14.2	6.8	2.1	340		Ⅲc 2	288
2457	ⅨE 2 b	表土	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	13.5	6.9	1.7	195	挟り有り。	Ⅲc 2	288
2458	ⅨD 4 g	II層	敲磨器類A群	凝灰岩	北上山地	15.7	8.6	2.8	400	挟り有り。	Ⅲc 2	288

第466図 遺構外出土遺物 敲磨器類A群(16)



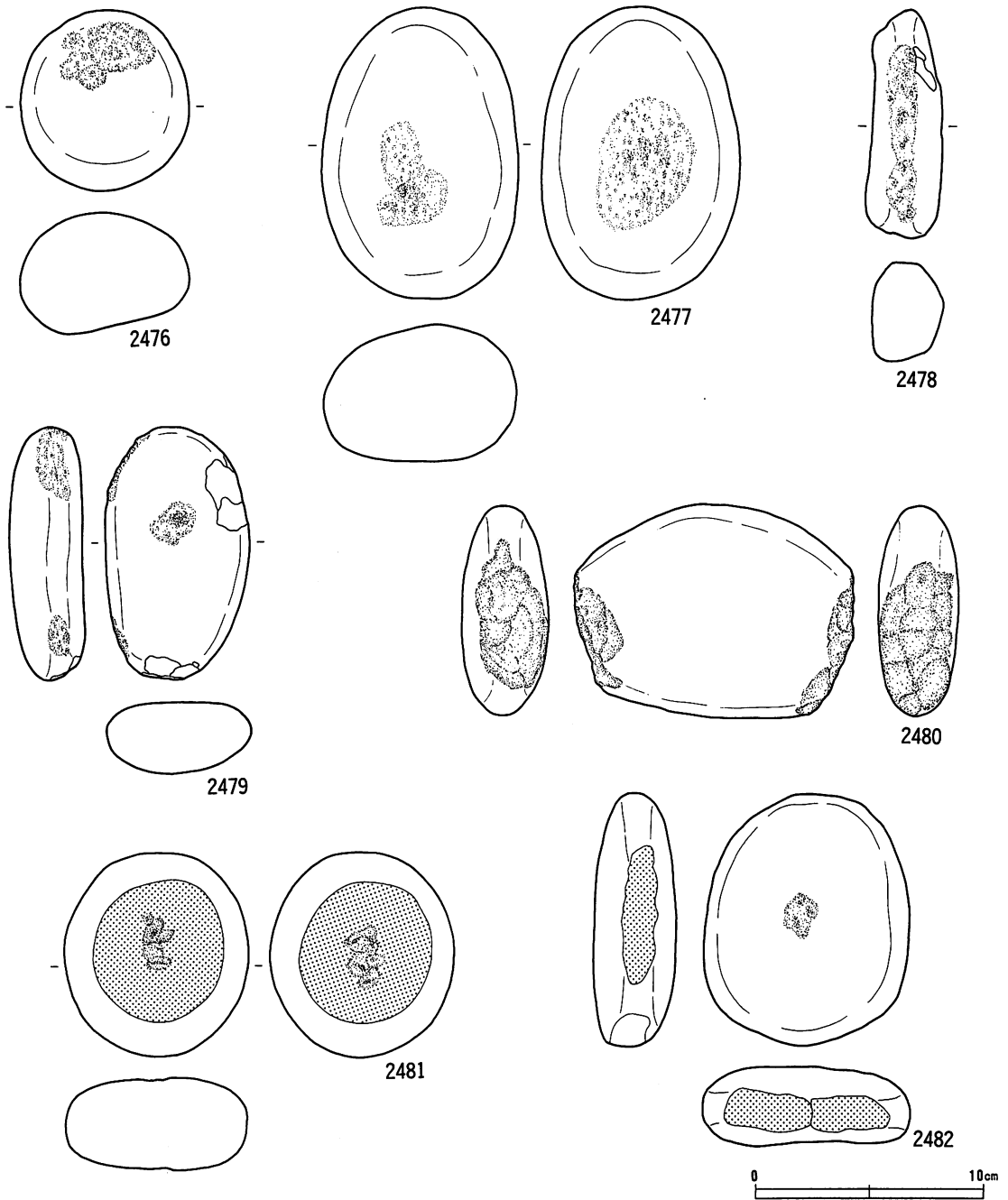
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2459	VII E 5 b	黒色土中	敲磨器類B群	凝灰質硬砂岩	北上山地	10.5	7.3	3.2	380	磨面ざらつき。	I	289
2460	No32トレンチ	盛土	敲磨器類B群	チャート粘板岩互層	北上山地	9.8	8.2	4.4	460	磨面は光沢あり。	I	289
2461	VII C 5 h	I層	敲磨器類B群	輝石安山岩	北上山地	10.5	8.4	5.8	740	両面磨面。光沢あり。	I	289
2462	VI D 9 i	黒色土直上	敲磨器類B群	珪長質凝灰岩	北上山地	9.7	8.5	5.1	610	磨面はざらつき。	I	289
2463	VII C 4 h	再堆積層下位	敲磨器類B群	珪岩	北上山地	8.2	5.4	3.5	265	側面も磨面。光沢あり。	I	289
2464	VI D 7 h		敲磨器類B群	輝石安山岩	北上山地	9.6	8.2	5.1	590	全面光沢あり。	I	289
2465	IX D 1 h	II層	敲磨器類B群	斑れい岩	北上山地	8.6	7.3	3.5	380	磨面はざらつき。	I	289
2466	X D 2 i		敲磨器類B群	斑れい岩	北上山地	9.2	7.8	4.2	490	磨面はざらつき。	I	289
2467	VII C 7 j	I層	敲磨器類B群	珪長質凝灰岩	北上山地	8.6	6.0	7.9	570	磨面はざらつき。	I	289

第467図 遺構外出土遺物 敲磨器類B群(1)



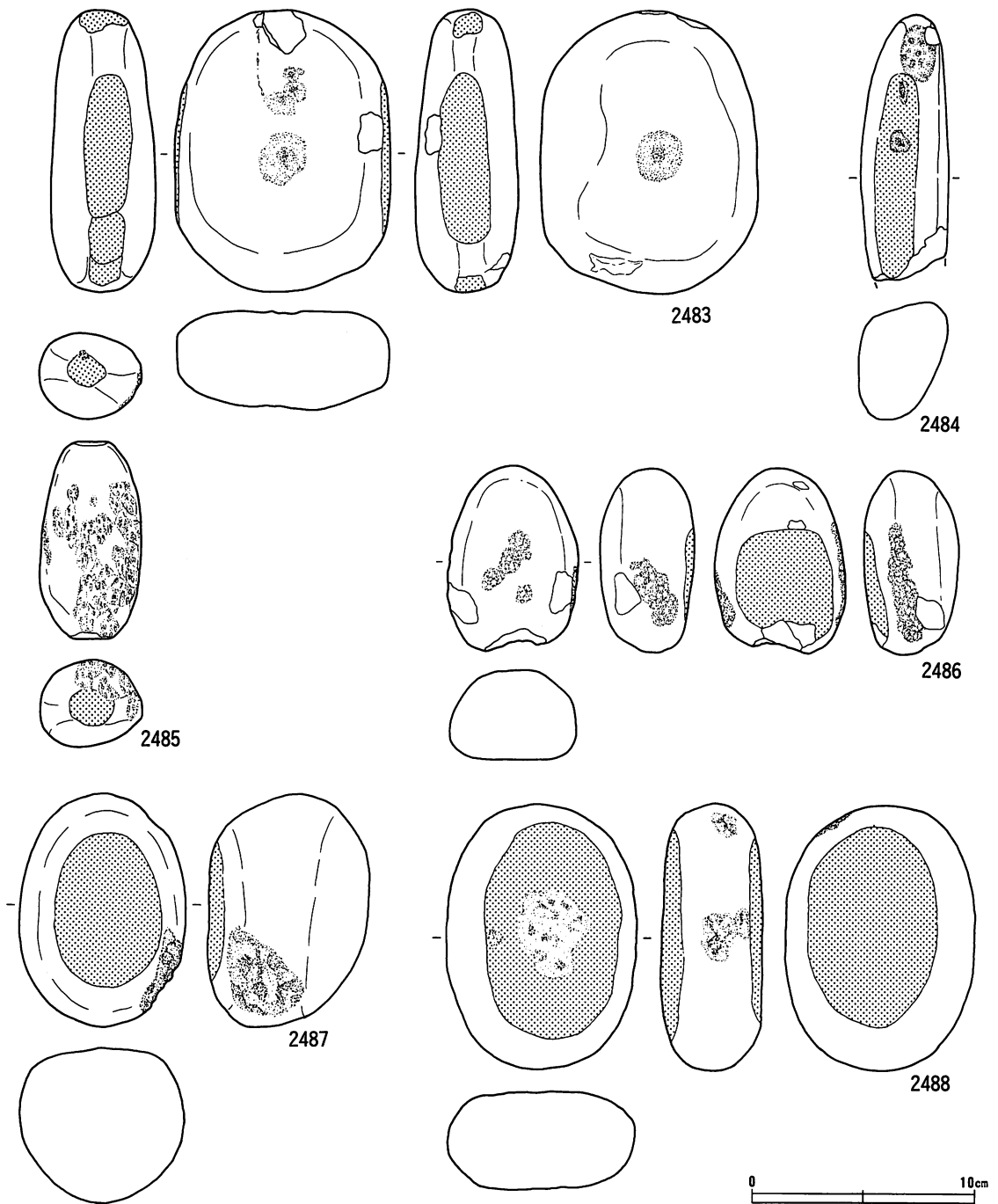
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2468	V D 6 a	I 層	敲磨器類 B 群	両輝石安山岩	岩手火山	(5.3)	(7.2)	(2.4)	(75)	溶岩。全面ざらつき。	I	289
2469	VI D 6 i		敲磨器類 B 群	両輝石安山岩	岩手火山	(6.8)	(6.2)	(2.4)	(70)	溶岩。	I	289
2470	VII D 5 a	II 層	敲磨器類 B 群	珪質凝灰質硬砂岩	北上山地	13.2	3.8	2.5	200	片面に凹部。	II	289
2471	VI D 7 i	黒色土直上	敲磨器類 B 群	硬砂岩	北上山地	13.0	5.8	3.4	400	両面に凹部。	II	289
2472	VII C 2 f	表採	敲磨器類 B 群	硬砂岩	北上山地	14.3	6.0	3.8	480	両面に凹部。	II	289
2473	V D 2 d	I 層	敲磨器類 B 群	緑色凝灰質硬砂岩	北上山地	11.9	9.0	2.8	500	両面に凹部。	II	290
2474	VII D 3 h	表土	敲磨器類 B 群	緑色凝灰質硬砂岩	北上山地	10.4	9.7	3.7	550	片面に凹部。	III	290
2475	VII D 6 h	黒褐色土	敲磨器類 B 群	安山岩	北上山地	13.3	9.2	5.3	1180	台石様の敲打痕。	III	290

第468図 遺構外出土遺物 敲磨器類B群(2)



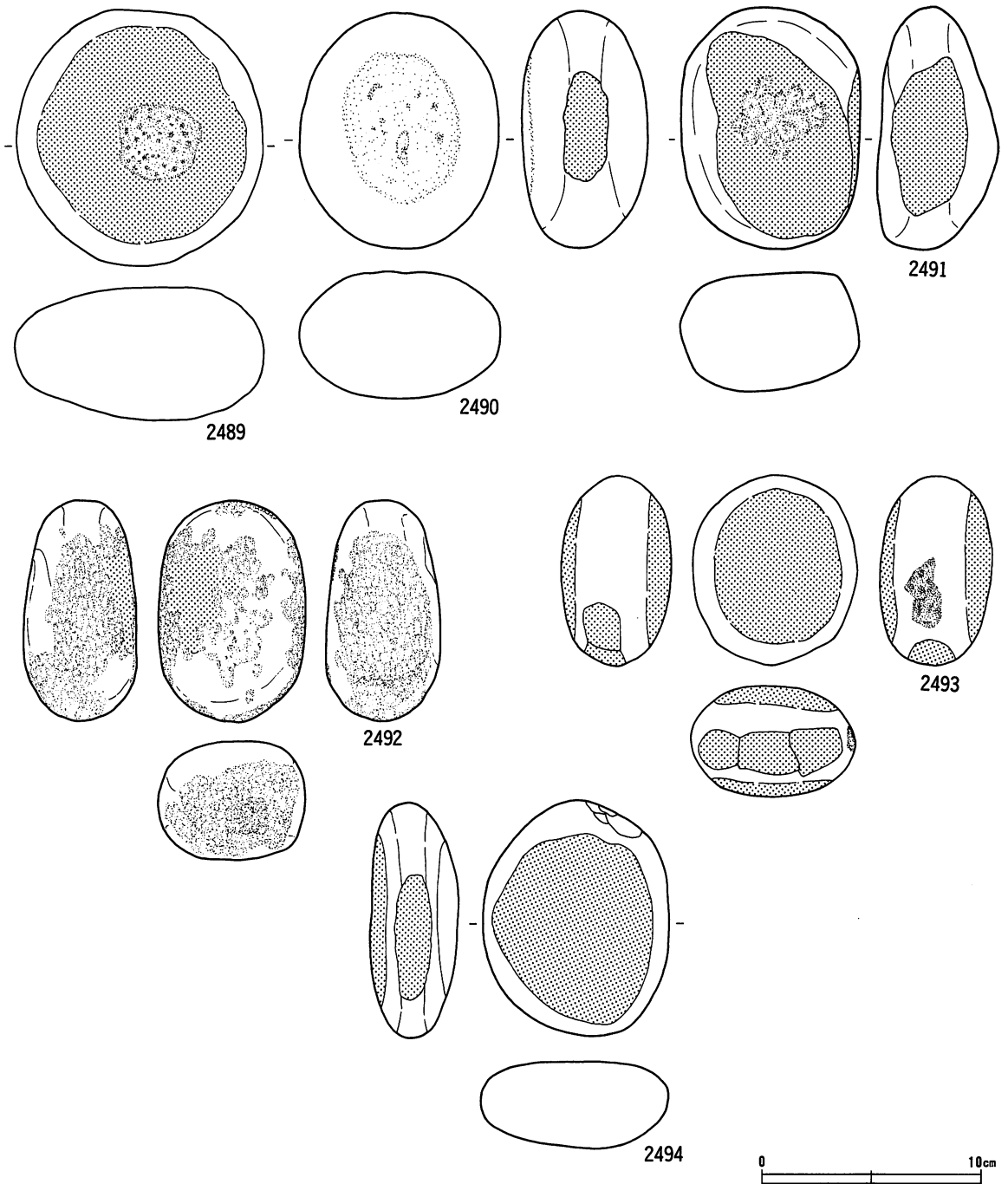
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2476	VC 9 g	I 層	敲磨器類 B 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	7.9	7.4	5.2	420		Ⅲ	290
2477	XD 1 g		敲磨器類 B 群	安山岩	北上山地	12.7	8.7	6.0	1050	台石様の敲打痕。	Ⅲ	290
2478	IX D 8 g	表土直下	敲磨器類 B 群	緑色凝灰岩	雫石西部	9.8	4.5	3.1	205		Ⅲ	290
2479	VII C 4 g	再堆積層	敲磨器類 B 群	硬砂岩	北上山地	11.0	6.3	3.2	335		Ⅲ	290
2480	VII D 7 i		敲磨器類 B 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	9.4	12.3	3.5	740	両端に刻線を伴う敲打痕あり。	Ⅲ	290
2481	VII D 4 b	表土直下	敲磨器類 B 群	両輝石安山岩	奥羽山地	9.0	8.1	4.0	400		Ⅳ	290
2482	No24 トレンチ	盛土	敲磨器類 B 群	珪長質凝灰岩	北上山地	11.1	9.1	3.7	530	磨面はざらつき。敲打痕は浅いが集中する。	Ⅳ	290

第469図 遺構外出土遺物 敲磨器類 B 群(3)



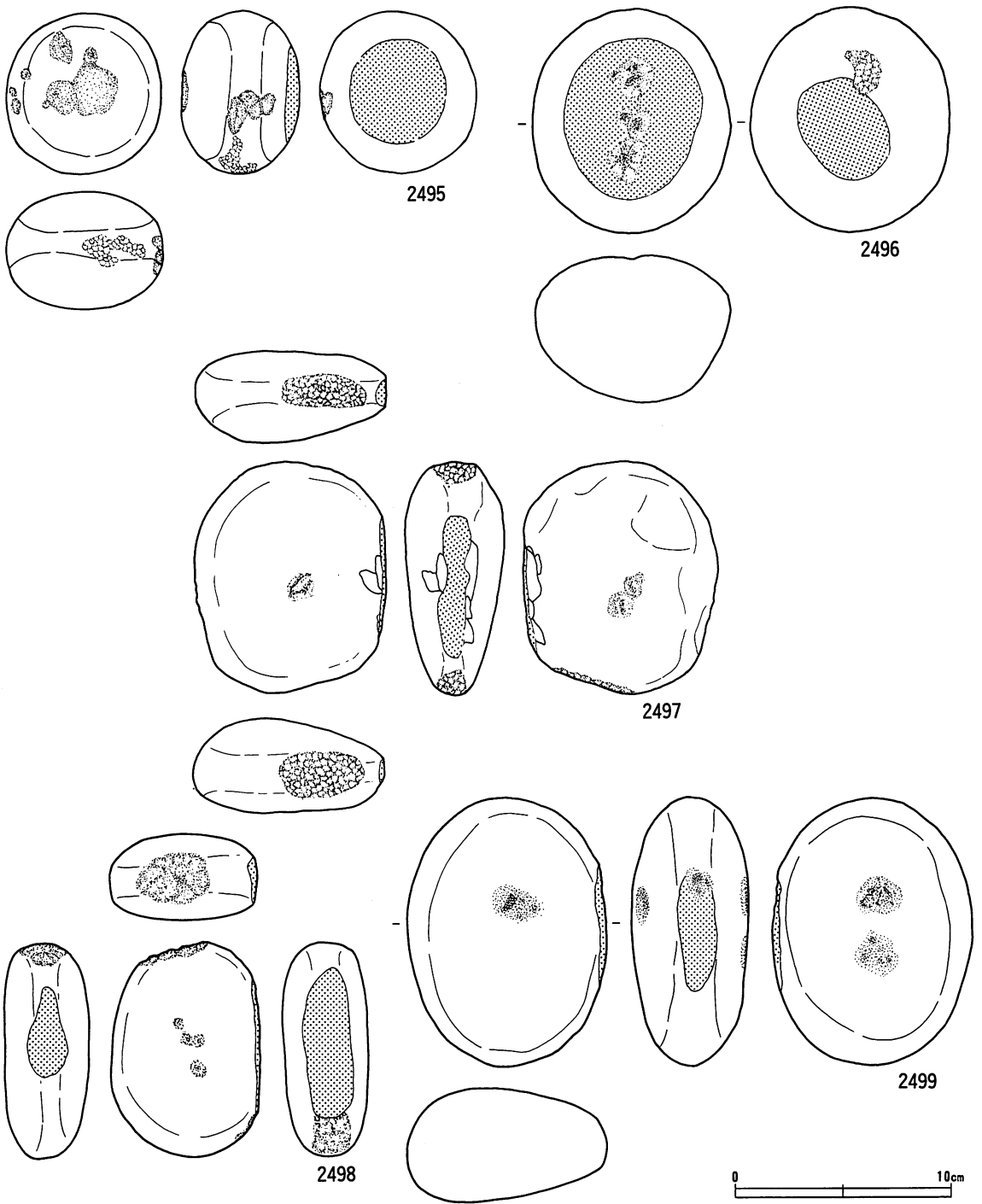
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2483	X D 5 g	II層	敲磨器類B群	硬砂岩	北上山地	12.6	9.8	4.4	920	磨面はざらつき。敲打痕は浅いが集中する。	IV	290
2484	V D 4 e	II層	敲磨器類B群	輝石安山岩	奥羽山地	(11.8)	3.9	5.4	(400)	側辺部に敲打痕。	V	290
2485	IX D 9 g	I層	敲磨器類B群	安山岩	北上山地	8.9	4.6	3.9	270	磨面はざらつき。	V	290
2486	VII C 区	表土	敲磨器類B群	緑色凝灰岩	北上山地	8.3	5.9	4.0	285	磨面は光沢あり。	V	291
2487	VII D 8 b	I層	敲磨器類B群	凝灰質硬砂岩	北上山地	10.5	7.5	7.1	880	磨面光沢あり。	V	291
2488	VII D 7 i		敲磨器類B群	両輝石安山岩	岩手火山	12.0	8.5	4.4	810	磨面はざらつき。	V	291

第470図 遺構外出土遺物 敲磨器類B群(4)



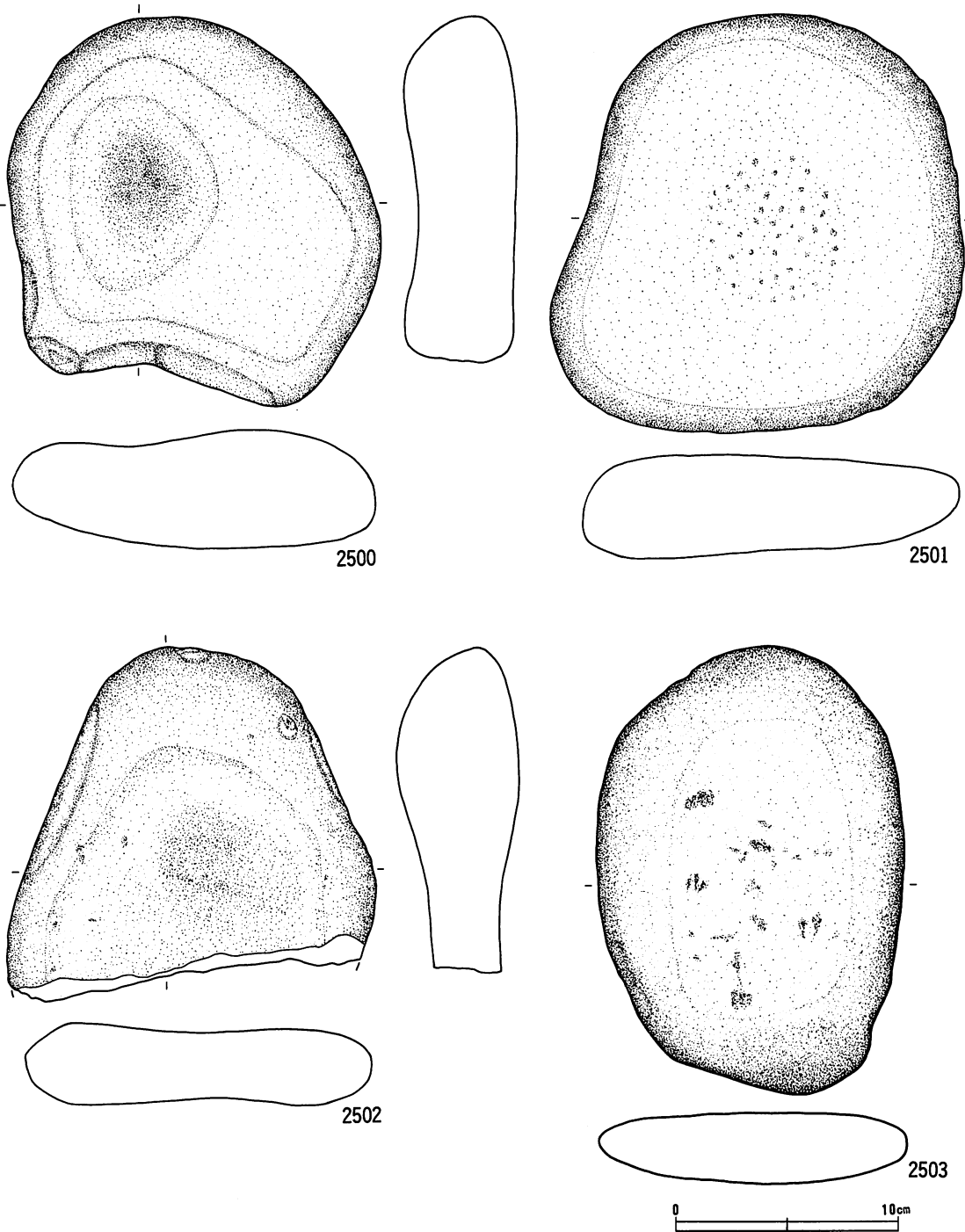
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2489	IX D 3 h	II層	敲磨器類B群	珪長質凝灰岩	北上山地	11.6	11.2	6.0	1110	敲打痕は台石様だがやや集中。	V	291
2490	X D 9 f	II層	敲磨器類B群	珪長質凝灰岩	北上山地	10.8	9.2	5.7	780	磨面はざらつき。敲打痕は台石様。	V	291
2491	IX D 0 h		敲磨器類B群	珪長質凝灰岩	北上山地	11.0	8.2	5.6	720	磨面はざらつき。敲打痕は台石様。	V	291
2492	VII D 7 h		敲磨器類B群	凝灰質硬破岩	北上山地	10.0	6.7	5.3	615	磨面は光沢あり。	V	291
2493	VI D 0 f	表土	敲磨器類B群	輝石安山岩	北上山地	8.7	7.5	5.0	480	全面磨り。平滑だが光沢なし。	V	291
2494	VII E 5 a	表土	敲磨器類B群	珪長質凝灰岩	北上山地	10.8	8.6	4.1	540	磨面光沢あり。	V	291

第471図 遺構外出土遺物 敲磨器類B群(5)



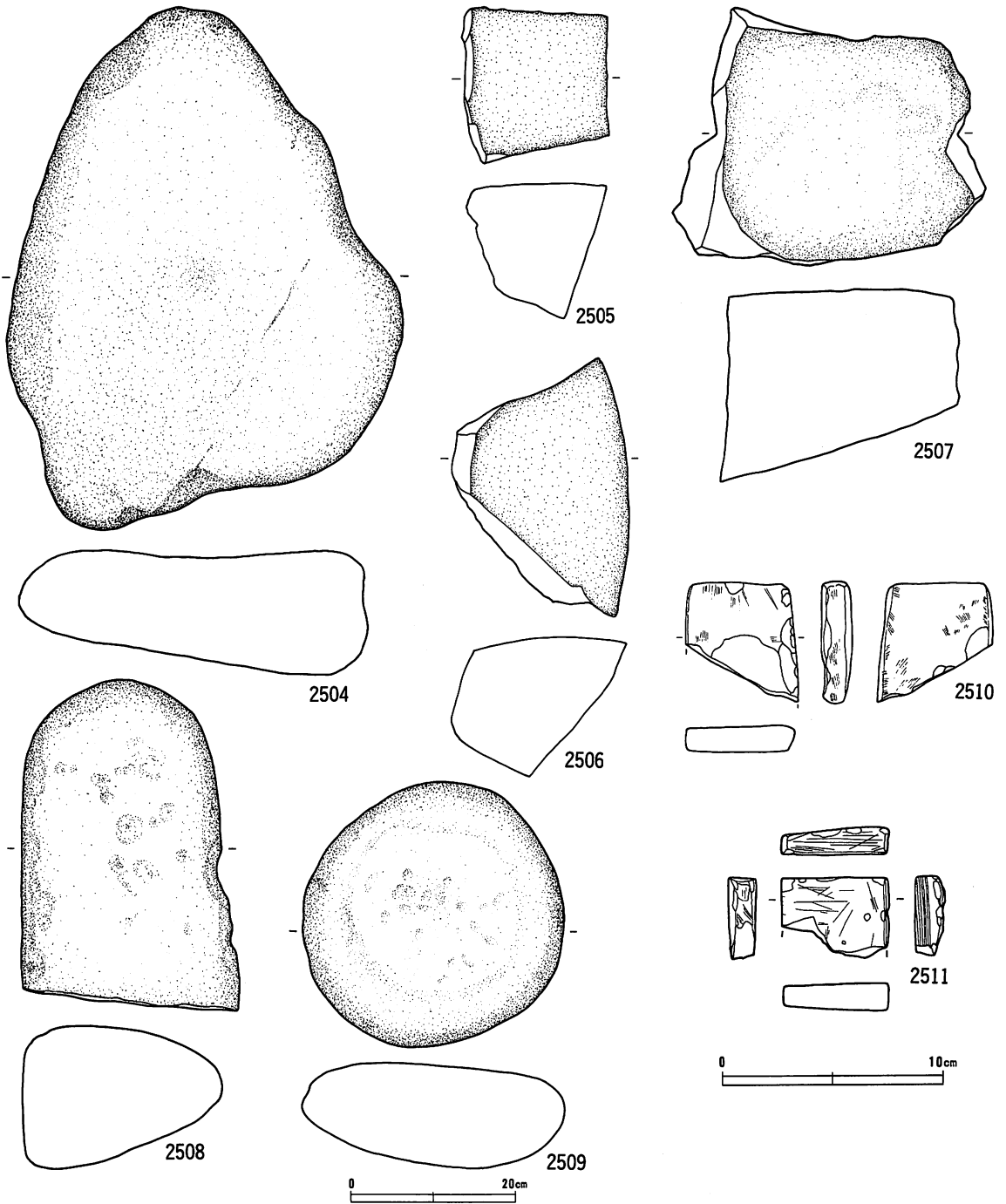
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2495	X I C 6 f	II層	敲磨器類 B群	両輝石安山岩	奥羽山地	7.4	7.3	5.4	420	磨面ざらつき。	VII	291
2496	VII C区	表採	敲磨器類 B群	輝石安山岩	奥羽山地	10.4	9.3	6.7	780	磨面は光沢あり。	VII	291
2497	IX D 8 i	I層	敲磨器類 B群	緑色凝灰岩	雫石西部	10.7	8.9	4.0	670	磨面は側辺部。	VII	292
2498	V D 1 d	III層	敲磨器類 B群	両輝石安山岩	奥羽山地	10.1	7.0	4.0	450	磨面はざらつき。敲打痕は台石様。	VII	292
2499	VII C 6 h	再堆積層	敲磨器類 B群	輝石安山岩	奥羽山地	12.5	9.3	5.4	780	側辺磨面。ざらつき。	VII	292

第472図 遺構外出土遺物 敲磨器類B群(6)



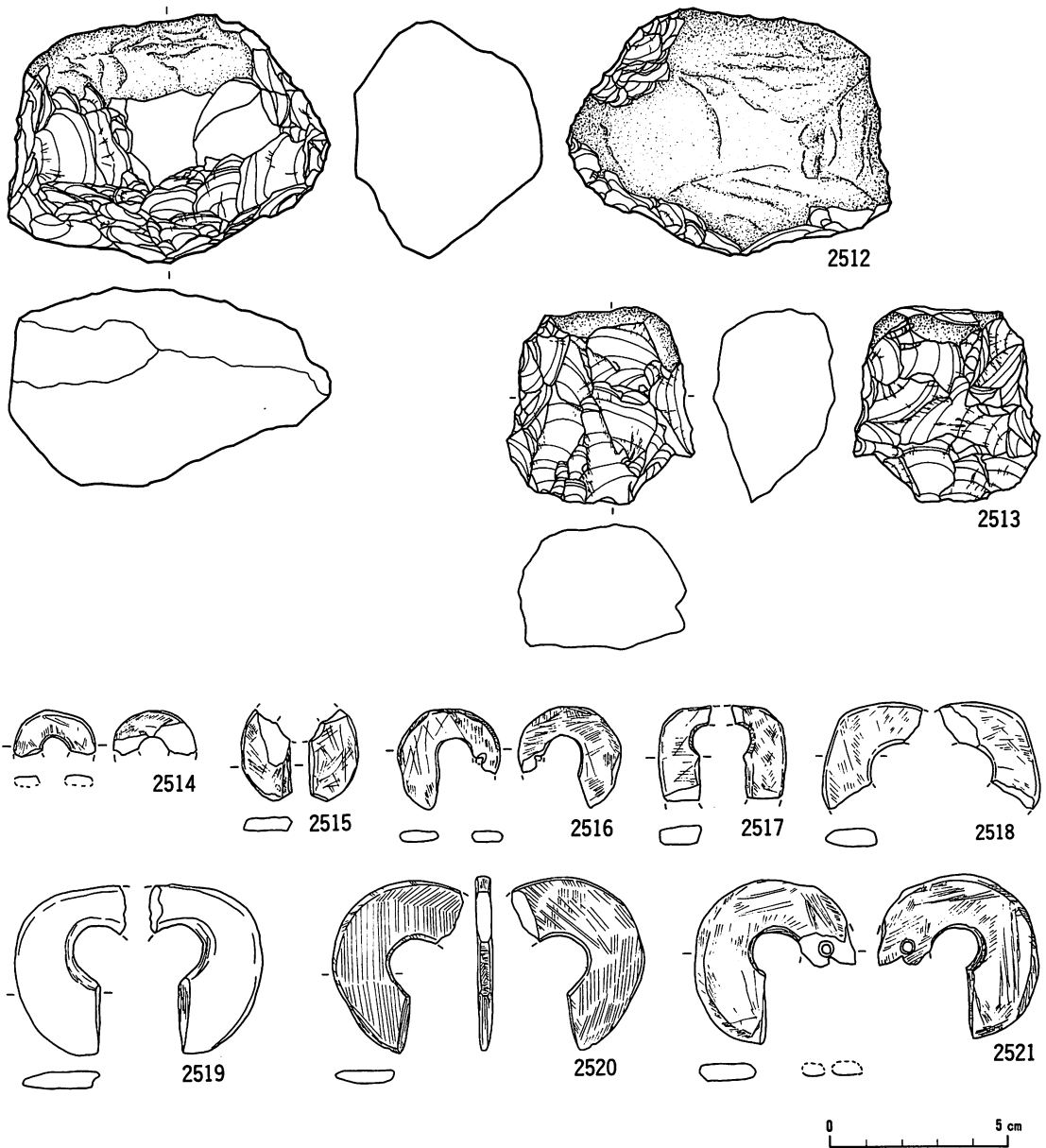
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2500	Ⅷ E区	黒色土	石皿・台石類	珪長質凝灰岩	北上山地	16.3	16.5	5.6	2440			292
2501	Ⅵ D 7 d		石皿・台石類	珪長質凝灰岩	北上山地	18.8	18.3	4.8	2610			292
2502	Ⅸ D 7 f	Ⅱ層	石皿・台石類	両輝石安山岩	岩手山	(14.8)	16.2	5.1	(960)			292
2503	Ⅸ D 0 j		石皿・台石類	苦鉄質凝灰岩	北上山地	27.2	18.7	4.3	3640			292

第473図 遺構外出土遺物 石皿・台石類(1)



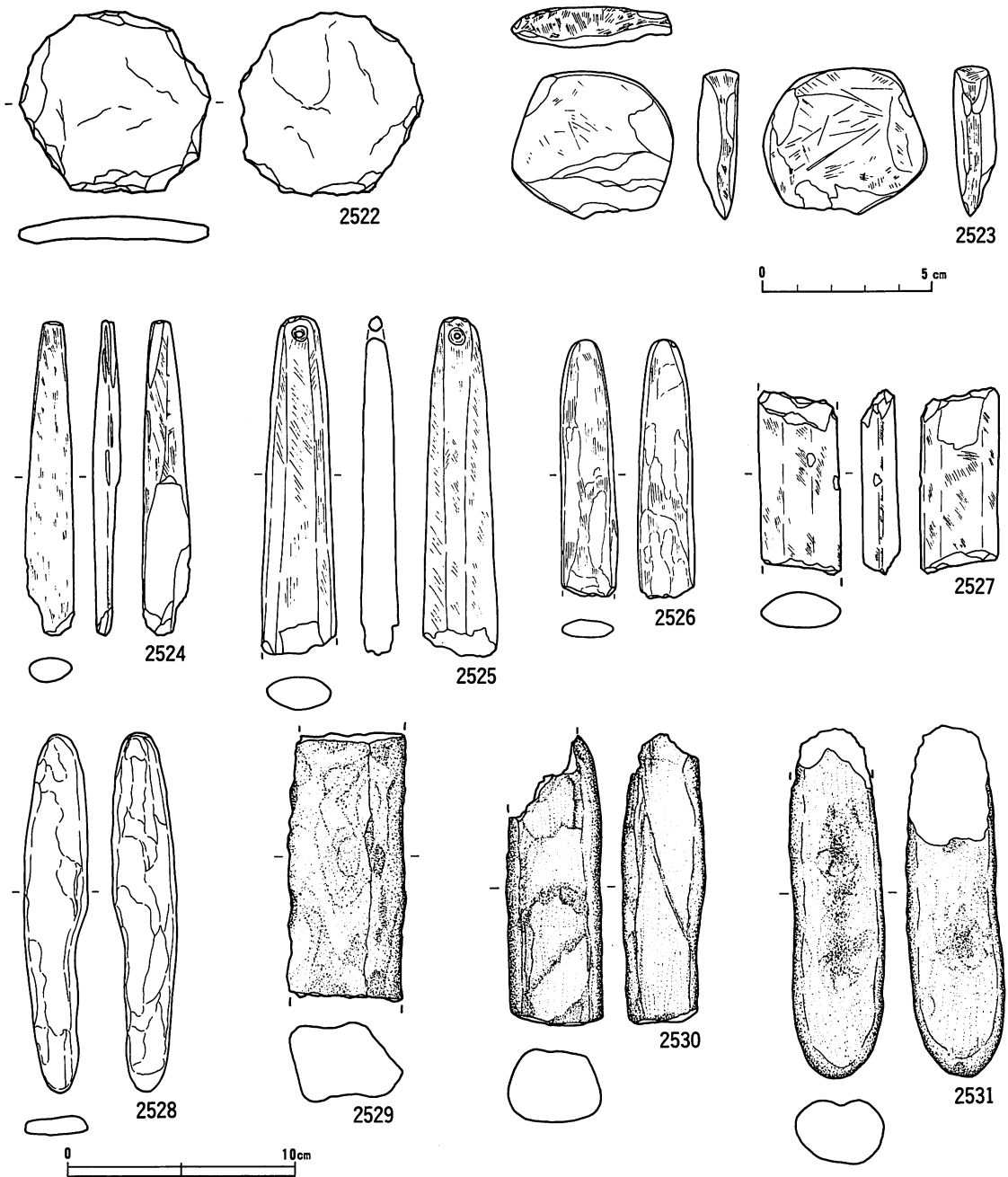
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2504	Ⅸ D 0 g		石皿・台石類	凝灰質硬砂岩	北上山地	23.7	17.9	5.6	3330			292
2505	Ⅸ E 1 a		石皿・台石類	珪長質凝灰岩	北上山地	(7.1)	(6.6)	(7.1)	(480)			292
2506	Ⅶ C 0 g	I層	石皿・台石類	珪長質凝灰岩	北上山地	(11.7)	(8.1)	(6.4)	(610)			292
2507	Ⅶ C 7 h	I層	石皿・台石類	珪長質凝灰岩	北上山地	(11.8)	(14.3)	(9.2)	(2030)			292
2508	Ⅶ C 9 f	I層	石皿・台石類	珪長質凝灰岩	北上山地	(20.2)	13.3	8.6	(3560)			292
2509	Ⅸ D 8 i	I層	石皿・台石類	アルコース砂岩	北上山地	15.9	16.2	6.4	2290			292
2510	Ⅶ D 0 j		砥石	珪長質細粒凝灰岩	雫石西部	(5.4)	(2.2)	1.2	(43.64)			293
2511	Ⅶ D 8 j	表採	砥石	粘板岩	北上山地	(3.7)	4.9	1.1	(37.20)			293

第474図 遺構外出土遺物 石皿・台石類(2)・砥石



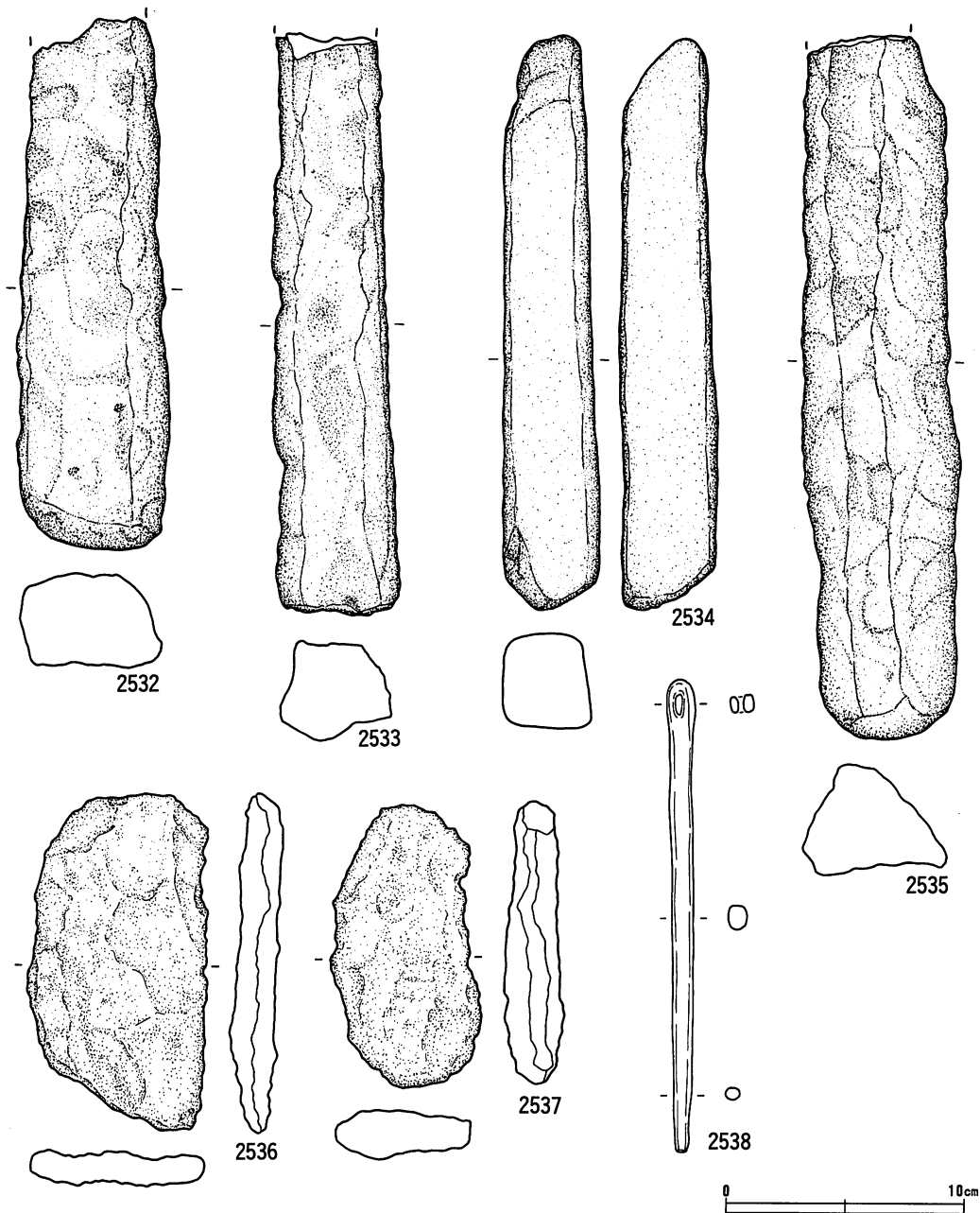
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2512	Ⅶ D 7 i	表土直下	碟器	珉質泥岩	礮石盆地	6.9	9.0	15.1	405			293
2513	Ⅶ D 3 g	暗褐色土	石核	珉質泥岩	礮石西部	5.5	5.3	3.5	112.3			293
2514	Ⅸ D 5 g	Ⅱ層	耳飾	チャート質凝灰岩	北上山地	(1.3)	(2.3)	0.2	(1.01)			293
2515	Ⅸ D 2 h	Ⅱ層	耳飾	チャート質凝灰岩	北上山地	(2.5)	(1.4)	0.4	(2.19)			293
2516	Ⅸ D 5 j	Ⅱ層	耳飾	チャート質凝灰岩	北上山地	2.8	2.9	0.3	(2.76)			293
2517	Ⅸ E 1 b		耳飾	硬質泥岩	礮石西部	2.6	(1.2)	0.5	(2.75)			293
2518	Ⅶ D 0 c	Ⅱ層	耳飾	チャート質粘板岩	北上山地	(2.6)	(1.4)	0.5	(4.30)			293
2519	Ⅸ D 4 j	Ⅰ層	耳飾	チャート質凝灰岩	北上山地	4.7	(3.1)	0.5	(9.02)			293
2520	Ⅶ D 3 e		耳飾	チャート質粘板岩	北上山地西縁	5.9	(4.6)	0.4	(9.05)			293
2521	Ⅸ D 3 h	Ⅱ層	耳飾	チャート	北上山地	4.6	(4.5)	0.5	(10.52)			293

第475図 遺構外出土遺物 碟器・石核・石製品(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2522	Ⅵ D 8 b		円盤状石製品	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.4	5.6	0.7	29			293
2523	Ⅵ D 9 f	I 層	円盤状石製品	粘板岩質千枚岩	北上山地	4.4	4.7	1.1	32			293
2524	Ⅵ D 7 i	表土直下	石刀	粘板岩	北上山地	(13.9)	2.2	1.1	(40)			293
2525	Ⅵ C 8 g	I 層	石剣	凝灰岩質千枚岩	北上山地	(14.9)	2.9	1.5	(105)	穿孔有り。		293
2526	No25 トレンチ	盛土	石刀	凝灰岩質千枚岩	北上山地	(11.4)	2.5	0.8	(36)			293
2527	No20 トレンチ		石刀	凝灰岩質千枚岩	北上山地	(8.1)	3.6	1.5	(70)			293
2528	Ⅵ D 8 j	表探	石刀	ホルンフェルス	北上山地	15.9	2.8	0.9	54			293
2529	Ⅵ D 7 d		石棒	流紋岩	松尾(長者屋敷)	(11.3)	5.3	3.5	(365)			293
2530	出土地不明		石棒	粘板岩	北上山地	(12.3)	4.1	3.5	(285)			293
2531	Ⅵ C 7 e	再堆積層上位	石棒	粘板岩	北上山地	(15.4)	4.1	2.8	(270)			294

第476図 遺構外出土遺物 石製品(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2532	VII C 6 g	再堆積層上位	石棒	流紋岩	松尾(長者屋敷)	(22.3)	6.4	3.9	(900)			294
2533	VII C 8 j	I層	石棒	流紋岩	松尾(長者屋敷)	(24.5)	5.2	4.2	(820)			294
2534	VII D 5 g		石棒	細粒凝灰岩	宇石西部	24.0	4.0	4.1	660			294
2535	VIII C 1 e	再堆積層	石棒	流紋岩	松尾(長者屋敷)	(29.5)	6.6	4.7	(1150)			294
2536	VII C 5 i	I層	花崗岩	花崗閃緑岩	北上山地	14.0	7.5	1.3	240			294
2537	VII C 5 i	I層	花崗岩	花崗閃緑岩	北上山地	11.8	6.4	2.0	200			294

番号	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
2538	XI C 8 b	I層	針	13.2	0.7	0.6	13.4			294

第477図 遺構外出土遺物 石製品(3)・鉄器

V まとめ

1. 遺構

本遺跡において検出された遺構は、竪穴住居跡 166 棟（縄文時代 162 棟、平安時代 4 棟）、土坑 93 基（縄文時代 88 基、平安時代 1 基、不明 4 基）、陥し穴 9 基、土器埋設遺構 1 基（縄文時代）、炉跡 2 基（縄文時代）、焼土遺構 39 基（縄文時代 29 基、平安時代 1 基、不明 9 基）である。ここでは、それらの遺構についての本遺跡の傾向や特徴を述べることにする。

(1) 竪穴住居跡

個別の記述に入る前に、前提となるいくつかの事柄について述べておく。

時期 竪穴住居跡の時期は、床面出土土器や埋設土器を中心に判断材料とした。埋土からの出土遺物についても、異なる時期の遺物の混入がない場合や、層位を異にした出土状況を示すなど、相当の妥当性を示すと考えられる場合などには時期決定の資料として用いた。また、重複関係や出土土器等から特定時期に所属する可能性が高いと認められる場合には、「推定」として記述した。時期の特定は、可能な限り時間幅を限定するように努めたが、かならずしも一様の時期の区切りにはなっていない。それは時期決定の困難度によるものであって、ある遺構は「縄文時代後葉」と限定的な時期を設定し、またある遺構は「縄文時代前期後葉から末葉」と幅をもたせたものとしている。

本遺跡の竪穴住居の大半は、縄文時代前期に属するものである。その時期の細分については、本遺跡の土器分類に基づいて行った。型式・時期の比定について詳細は後述するが、おおむね次のような時期を想定している。第Ⅱ群 1～3 類土器は縄文前期初頭から前葉、第Ⅱ群 4 類土器は前期中葉、第Ⅱ群 6 類 a と同類 b アおよびイの土器は前期後葉、第Ⅱ群 7 類と 8 類土器は前期末葉から中期初頭、第Ⅲ群 1 類土器は中期初頭に、それぞれ位置づくと考えた。

前葉・後葉などの区分は、編年研究が明らかにしてきた型式名では、上川名式または長七谷地Ⅲ群・早稲田 6 類など大木 1 式期以前を前期初頭、大木 1 式から大木 2 a 式期までを前葉、大木 2 b 式から 3 式期までを中葉、大木 4 式から 5 式期までを後葉、大木 6 式または円筒下層 d 式期を末葉と考えた。

本遺跡の土器分類と型式名が直接対応するものではないが、以上のようなおおよその時期併行関係を想定し、それを前提として記述していく。

この前提に立って、検出された竪穴住居跡数を時期毎に区分けすると次表のようになる。

平面形 平面形の名称は、おおむね次に示すものに近いものを用いた。

- 円形
- 長円形（短軸方向は弧を描き、長軸方向は直線状）

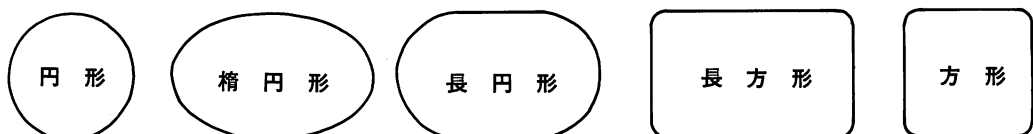
- 楕円形（長軸方向も弧を描く）
- 長方形（特に角が強く弧を描くものについては隅丸長方形）
- 方形（特に角が強く弧を描くものについては隅丸方形）

ただし、長円形と楕円形については實際上区別が困難な場合もあり、厳密なものではない。

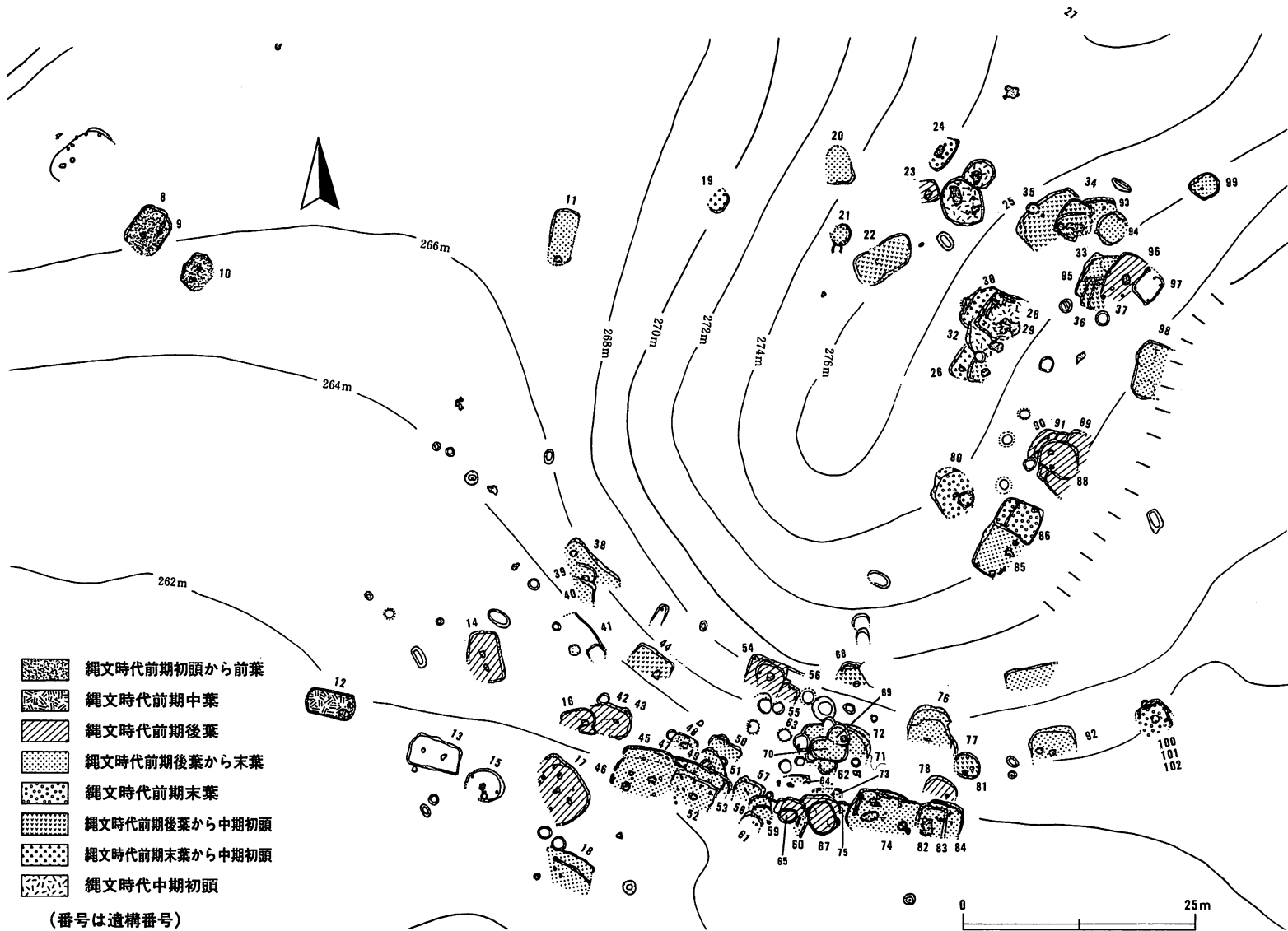
遺存状況 本遺跡は、尾根鞍部・山腹斜面・山麓緩斜面にあって、崖錐性再堆積層が不均一に形成されており、遺構はこれら斜面を主体として再堆積層中に構築されている。このため、遺構の斜面下方はほとんど流失しており、また頻繁な住居の建て替えによる重複が激しく、それ

時 期	ほぼ 特定	推定	計	本報告書土器分類	時期	土器型式
縄文時代前期初頭から前葉	3	11	14	第II群1～3類	初頭～前葉	大木2 aまで
縄文時代前期中葉	1		1	第II群4類	中 葉	大木2 b・3
縄文時代前期後葉	13	21	34	第II群6類 a、bア・イ	後 葉	大木4・5
縄文時代前期後葉から末葉	48	11	59	第II群6類 bウ～カ	末 葉	大木6 円筒下層 d
縄文時代前期末葉	4	2	6	第II群7・8類		
縄文時代前期		20	20			
縄文時代前期後葉から中期初頭	10	1	11		中期 初頭	大木7 a
縄文時代前期末葉から中期初頭	2	1	3			
縄文時代中期初頭	3	2	5	第III群1類		
縄文時代中期末葉	6		6	第III群3類	中期末葉	大木10
縄文時代晩期	1		1	第V群		
縄文時代時期不明		2	2			
小 計	91	71	162			
平 安 時 代	4		4			
計	95	71	166			

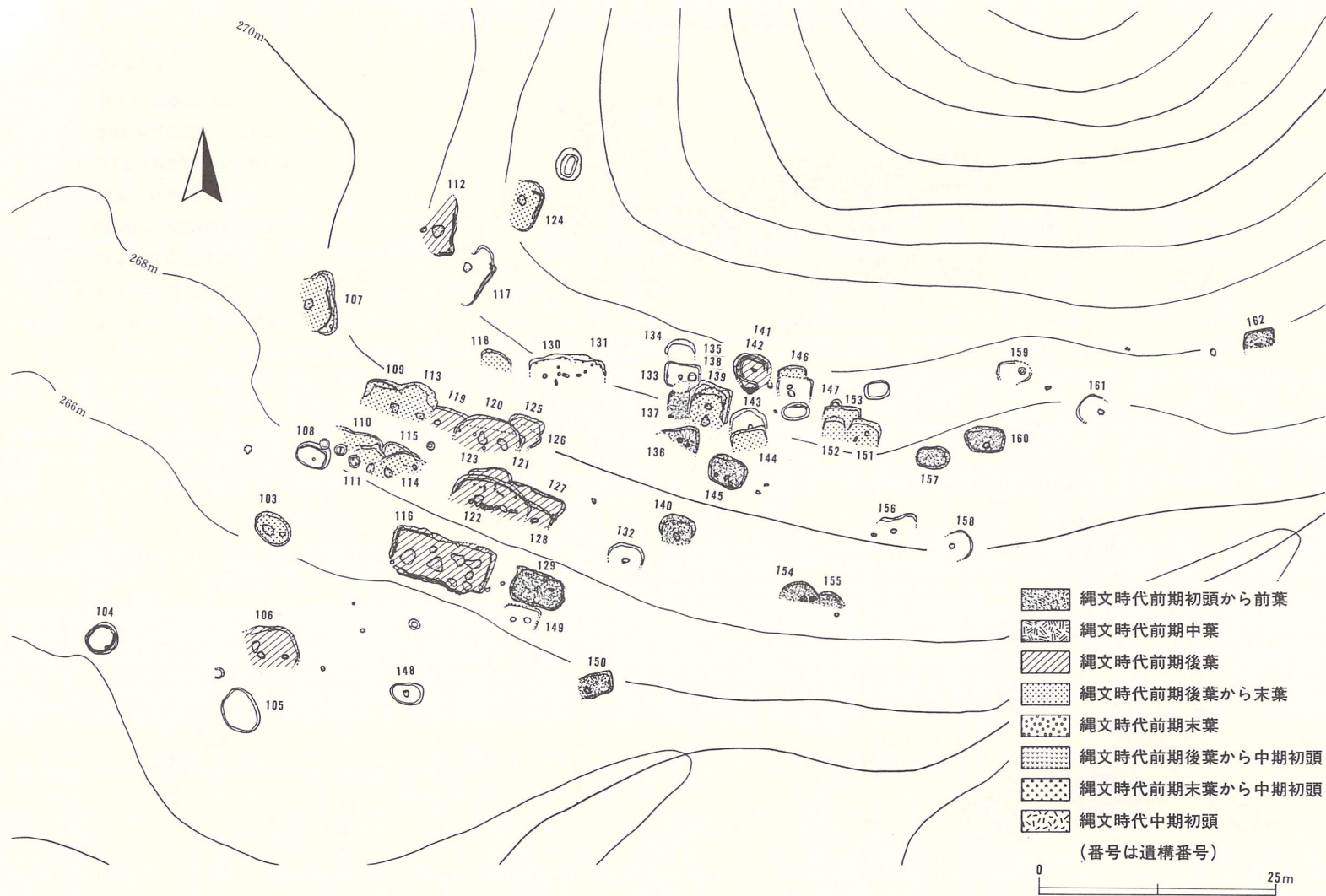
第20表 時期別住居検出



第478図 住居跡平面形名称概念図



第479図 A区南東斜面とB区西尾根地区の遺構分布



第480図 B区東尾根地区の遺構分布



第481図 縄文時代前期から中期初頭の住居跡集成図

※()内は遺構番号

ぞれの遺構の全体像を把握できるものは極めて少ない。傾向性・特徴を把握するために、資料として価値は低いものの、完全遺存ではないものも、必要に応じて取り扱った。

床面積 プラニメーターを用いて壁面下端を3回測定し、その平均値を求めた。残存状況によって推定可能なものは〔 〕で、推定できないものは残存値を（ ）で示した。

ア、縄文時代前期から中期初頭の住居跡について

本遺跡の主体を占めるのが、この時期のものである。第481図にその一部を示したが、これは比較的形状のわかるものを任意に集成したものであって、その全てではない。以下に用いる番号は、ゴシック体が第481図の番号で、明朝体は第481図にとりあげなかった遺構の遺構番号である。

(ア) 時期毎の傾向性・特徴

a、前期初頭から前葉

本時期に所属すると考えられる住居跡は3棟、特定する資料を欠くが本時期に所属すると推定される住居跡は11棟である。出土土器は、繊維を比較的多く含む組縄縄文・単節斜縄文などの地文のみの破片であり、時期幅をさらに絞り込むことは困難である。

削剥等がなく概ね旧状のわかるものと、遺存状況から規模・平面形等をほぼ推定できる、8棟(1～8)を対象として推定値も含めて記述することとする。

平面形 円形と推定されるものはⅨD 8 g-2住居跡(8)の1棟のみで、推定も含めてその殆どは長方形・楕円形・長円形を基調とし、長軸方向は等高線にほぼ平行している。

規模 短軸2～3 m、長軸3～4 m前後に集中する。床面積は5～8㎡に5棟が入る。12.9㎡を有するⅨD 5 j住居跡(7)は、本遺跡では本時期に限れば、比較的大きな住居跡といえることができる。

柱穴 検出されないものがほとんどを占める。ⅨD 9 h住居跡(4)の南西部で1個検出されたが、対応するものはみられない。ⅨD 5 j住居跡(7)はこの中では例外的である。8個の柱穴が4隅とその中間の位置に等間隔に並ぶ。柱穴は径13～15cm程度とほぼ等しく、住居規模に比べ小規模である。

周溝 どの住居跡からも検出されない。

炉 検出されないものが3棟ある。検出されたものでは、1基を有するもの2棟、2基を有するもの3棟で、いずれも地床炉である。2基を有するものうち、ⅥC 2 g-2住居跡(5)およびⅥC 3 h住居跡(1)ではその長軸方向に直列的に位置しているが、すべてにあてはまるわけではない。炉の有無およびその位置について、規則性を見出すことはできない。

8棟に限定して項目毎に見てきたが、残る6棟についても遺存状況は悪いものの、上記の状況は概ね看取でき、本遺跡における傾向性として把握することができる。

分布 A区南東斜面を3棟が占地するが、うち2棟は重複関係にあり、建替えによると思われる。他の1棟とともに斜面に階段状に並ぶ。B区東尾根南斜面には11棟が位置する。尾根筋から延長させた直線の東半部に集中する。周囲には時期を明らかにできない住居跡が数棟存在するが、規模・形状は本時期のものと同様性が高く、あるいは同一時期となるものかも知れない。

b、前期中葉

本時期に該当するのはVI D 5 f 住居跡(9)の1棟のみである。S字状連鎖沈文土器が床面から一括出土したことを根拠に本時期に位置づけた。平面形は長円形で、床面積は10.66㎡である。柱穴は北東隅に1個検出された。南西隅には浅い土坑が位置する。

c、前期後葉

本時期に所属すると考えられる住居跡は13棟である。床面から、第II群6類土器のうちa～bイまでの鋸歯状装飾体他の特徴ある土器を出土していることに基づいて位置づけたものである。また、特定する資料を欠くが重複関係他から、本時期に所属すると推定される住居跡は22棟である。

これらのうち形状・規模等が分かる又は推定できる9棟 [VII D 0 b 住居跡(11)・VII D 1 g 住居跡(12)・VII D 1 g - 2 住居跡(43)・VII D 8 e 住居跡(15)・VII D 5 i 住居跡(16)・IX D 9 f 住居跡(18)・IX D 9 f - 2 住居跡(142)・VII D 5 i - 3 住居跡(19)・IX D 3 j 住居跡(26)] を中心とし、必要に応じて他の住居跡も取り上げ、本遺跡の傾向を検討する。

平面形 長方形基調が4棟、方形基調が3棟、楕円形・円形基調が各1棟である。長方形を基調とする住居跡の長軸方向と斜面との関係では、等高線にほぼ平行する住居跡が3棟、斜交するものが1棟である。

規模 規模が推定可能な9棟の殆どは、短軸が2～3m、長軸が2.5～5mのなかに収まる計測値を示す。遺存状態が悪いために集計に加えなかった住居跡でも、長軸方向が推定できるものがある。それによっても、長軸2.5～5mに集中することは見て取れる。一方、6～8mの範囲にも一定の集中がみられる。しかしながら、長軸10m以上というIX D 3 j 住居跡(26)は、これらの中では群を抜いており、例外的な存在ということが出来る。床面積をみると、示す値は分散的であり集中する範囲を把握することは困難である。しかし、残存値を加えても10㎡以下におよそ3分の2が入り、15㎡以下まで広げれば8割以上がその範囲に入る。床面積の点でも、36.1㎡を測るIX D 3 j 住居跡は飛び抜けて大きな値を示している。

また、下半が流失していて遺存状態が悪いものの、IX D 4 g - 2 住居跡(20)・IX D 4 h 住居跡(22)・IX D 4 g - 3 住居跡(24)の3棟については、床面積の残存値で15㎡程度あるいはそれ

以上を示しており、規模はⅨD 3 j 住居跡におよばぬが、それに近似する性格を有する住居である可能性も考えられよう。また、ⅨD 4 h 住居跡と重複するⅨD 5 h 住居跡(23)・ⅨD 5 i 住居跡(128)は削剥されていて不明ではあるが、残存形状・位置から同住居と強い関連性を推定することができる。

柱 穴 9棟のうち、柱穴を持たない住居跡が4棟あり、他は1・2・3・5・11個有するものがそれぞれ1棟である。規模の点で例外的としたⅨD 3 j 住居跡を除くと、数および位置において規則的な対応関係を有する住居跡は見出し難い。

周 溝 9棟のうち周溝を有するものは2棟であるが、本時期に所属すると推定される全住居跡34棟に対象を広げると7棟を数える。そのうちⅨD 9 f 住居跡(18)とⅨD 9 f-2 住居跡(142)は同心円状の重複で拡張建替えと考えられる。残る5棟については、ⅨD 3 j 住居跡を初め比較的大形の住居跡であるということが出来る。周溝の規模は一様ではないが、幅10～30cm、深さ15cm内外であり、壁の下端に断続的に巡るものが多い。床面を全周するものか、部分的なものかどうかは、遺存状態の制限がありにわかに判断はできないが、ⅨD 5 h 住居跡(23)の如く斜面上方側の壁際のみのもものと、ⅨD 3 j 住居跡の如く全周するものと両者がありそうである。

炉 炉を有する住居跡は9棟中8棟を数え、それらはすべて地床炉である。1基のみのもものが4棟あるが、ほぼ床面中央部に位置する。複数基有するものは4棟である。その中に地床炉の位置について規則性がみられるのはⅥD 8 e 住居跡(15)とⅨD 3 j 住居跡の2棟である。前者は住居の長軸線上に直列的に、後者は長軸方向に3列に並列する。対象を35棟に広げても、炉の数・位置とも多様性がうかがえる。ⅨD 4 h 住居跡(22)において8基が長軸方向に直列的に位置するものが規則的配置の数少ない例ということが出来る。

分 布 B区西尾根の南斜面と麓部、東尾根南斜面を中心に分布する。東尾根を占地する住居跡は比較的大形で、楕円形または長方形を基調とするものが多い。西尾根を占地する住居跡は平面形・規模とも多様である。鞍部から西斜面には小形の住居跡が2棟、東斜面中腹部には5棟が分布する。

d、前期後葉から末葉

出土遺物が木目状燃糸文や網目状燃糸文など第Ⅱ群6類bウから同カに属するものである。同土器の時期については、地文のみで他に特徴が少ないことから時期を限定的に捉えることが困難である。少なくとも前期後葉よりは遡らず前期末葉よりは下らないと考えられる。竹管文土器の出土を見ない遺構は、あるいは後葉のなかで収まるもので前項のなかで取り扱うべきかも知れない。

重複関係から同時期と推定される11棟を加え、計59棟が本時期に該当すると考えられる。しかし、削剝や重複などにより遺存状況が悪いものが多く、規模・形状が分かる遺構はわずか5棟(33～35、42・43)に過ぎない。しかも、この5棟は本時期の住居跡の形質を代表するものではない。ここでは、統計的処理にはなじまない資料であることを承知の上で、適宜59棟全体をも対象にして記述する。

平面形 5棟のうちわけは、楕円形が3棟、円形が2棟である。推定によるものを加えた59棟全体を対象にすると、多い順に長方形基調17棟、楕円形9棟、方形または長方形基調6棟、方形基調5棟、長円形4棟、円形2棟となる。主体は長方形・楕円形・長円形など長軸を有するものであり、方形がそれに次ぎ、円形は希である。

規模 5棟の集計では、短軸が2～3m、長軸が3～4mに集中している。床面積は4～6㎡に多い。残存状況がよかったのは比較的小形の住居跡であったということになるだろう。

それ以外の住居跡は残存値の集計になるが、長軸3～5mに最も集中しており、6棟の集計よりはやや大きめである。また、また6m以上の住居跡も5棟を数える。床面積残存値は6㎡までの中に多くの住居跡が入る。実際はそれ以上の値をとるということになるだろう。また、20㎡程度またはそれ以上のものもあり、小形のものと異なる性質の住居跡である可能性がある。ⅦD 2h-2住居跡(39)・ⅦD 6h-2住居跡(48)などがそれに当たる。

柱穴 5棟のうち、柱穴が検出されない住居跡が2棟、検出されたものでは1個が2棟、2個が1棟である。これだけでは柱穴の有無、数、配置等における共通性は見出だしがたい。59棟を対象とすると、全体像が不明であることから正確性は欠くが、柱穴をもたないものが36棟あり、持ったとしても配置上の規則性は観察できない。このことから結論づけることは危険であるが、傾向としては柱穴を持たない住居跡が一般的であるといえよう。

周溝 59棟のうち周溝を有するものは8棟である。規模は幅10～20cm程度のものである。これらは、斜面上方の壁際を中心に住居の一部に存在するものが殆どである。下半部流失により詳細不明のものもあるが、本遺跡に於いてはこの時期の周溝の特徴として把握することが可能と思われる。

炉 5棟のうち炉を有するものは2棟のみである。59棟を対象とすると26棟が炉を持たず、炉のない住居跡がかなり多いという点は変わらない。炉はすべて地床炉で、1基のみを有するものが大半であり、ⅦD 4h-4住居跡(46)のように6基も持つものは他にはない。同住居跡の炉の配置は長軸方向に5基が直列してなること、および規模・形状なども勘案すれば、前項のⅨD 4h住居跡(22)やⅨD 3j住居跡(26)などと同性格を有する住居跡と考えることが可能と考えられる。

分布 B区の全域に分布するが、特に西尾根南斜面と東斜面北側、東尾根南西斜面と南斜面に

密に分布する。西尾根南斜面では、標高262～268 mの等高線にそって東西に大小の住居跡が際だつて複雑に重複しあつて分布し、長期の使用または度重なる建替えがうかがえる。この区域では、ⅦD 2 h 住居跡(44)・ⅦD 4 h - 4 住居跡(46)・ⅦD 6 h - 2 住居跡(48)のように長軸が6 m以上という、本遺跡では比較的大形の住居跡が集中する。それと重複し削剝されていて不明ではあるが、ⅦD 3 h 住居跡(36)やⅦD 2 h - 2 住居跡(39)なども同程度の規模を推定することが可能であり、比較的大形の住居跡が数回の建替えをした可能性が考えられる。

東尾根西斜面には、ⅨD 1 e 住居跡(107)・ⅨD 5 c 住居跡(124)の2棟が位置するが、出土土器から前期後葉に限定したⅨD 3 c 住居跡(14)、および出土土器がなく時期不明としたⅨD 4 d 住居跡(117)と、占地・規模・形状・周溝・柱穴・炉の位置など類似する部分が多い。この4棟については、直接的に根拠となる資料はないものの、近接する時期に存在した可能性が高いと考えられる。

東尾根南斜面の東半部にも集中区がある。ここに分布する住居跡も重複が多く、詳細は明らかではないものの、平面形は方形基調、規模は1辺3 m前後と推定され、やや小形のものが多い。小形の規模の住居跡は他の分布域にも存在するが、東半部には比較的大形の住居跡は見られない点が、様相に異をする点である。

e、前期末葉

第Ⅱ群7類・8類土器を伴出する住居跡で、第481図27～29とⅦD 8 c 住居跡(80)・ⅦD 2 g - 2 住居跡(101)・ⅦD 2 g - 3 住居跡(102)の6棟が該当する。このうちⅦD 2 g - 2 住居跡・ⅦD 2 g - 3 住居跡は、ⅦD 2 g 住居跡(27)と同一面で壁・床を共有するものであることから建替えを想定して同時期としたものであり、実質は4棟での比較検討となる。

平面形 遺存状況の比較的良好なものはⅦD 2 g 住居跡(27)とⅦD 9 c - 2 住居跡(28)の2棟に限られるが、いずれも方形を基調とする。残る2棟もそれに類似する形状となるかも知れない。

規模 床面積は約7 m²(推定値)と9 m²で、4棟に大きな相違は無いと思われる。

柱穴 ⅦD 2 g 住居跡(27)とⅦD 9 c - 2 住居跡(28)で柱穴を検出しているが、その配置間隔や規模に統一性は見られない。

周溝 ⅦD 2 g 住居跡とそれに重複する2棟に見られるのみである。住居の下半の壁が流失しているので詳細は明らかではないが、斜面上方の壁際に巡る状況で検出されている。

炉 4棟すべての住居跡に地床炉1基が伴う。この時期に至って炉を有することが一般的であるという指摘が可能であろう。

分布 いずれもB区西尾根に限定されるが、ⅦC 8 f 住居跡(29)が西斜面に位置することを除けば東斜面に分布する。ⅦC 8 f 住居跡は第Ⅱ群8類土器を出土したもので、同7類土器を伴

う他の住居とは系列を異にするかも知れない。

f、中期初頭

第481図30～32とⅦC9 i - 3 b住居跡(29)・ⅦC9 j - 2住居跡(32)の5棟が該当する。

このうち比較的遺存状況の良いものは、ⅦC9 f住居跡(31)とⅦC8 g住居跡(32)である。

平面形 不整形円形と方形である。

規模 床面積は5.7㎡を最小値とし、残存値約17㎡までと一様ではない。前期と比較してやや大形化の傾向がうかがえる。

柱穴 柱穴の有無・規模・配置などに規則性や統一性は見られない。

周溝 ⅦC9 i - 3 a住居跡(30)と同b住居跡でのみ検出された。下半に不明な部分があるが、斜面上方の壁際に巡るものであろう。

炉 すべての住居跡が炉を有する。1基～2基の地床炉が殆どであるが、ⅦC9 f住居跡(31)の場合は石囲炉であり、特殊な例といえる。同住居は、本時期の中では最小の規模であることと合わせて、特別な正確を有するものであろうか。

また、ⅦC9 i - 3 a住居跡(30)とⅦC8 g住居跡(32)とにおいて、床面を掘込んだ炉が検出されている。その上から地床炉が検出されていることから、先行炉として報告してある。同様の例は、ⅦC6 h住居跡(54)においても見られた。同住居は、出土遺物から本時期に該当する可能性が高く、掘り込みを伴う炉は、あるいは本時期の住居跡に特徴的なものといえるかも知れない。

分布 B区西尾根の鞍部とそれに近接する東斜面に限定される。

(イ) 傾向・特徴のまとめ

時期毎に概観してきたが、その要点について簡略に表示した(第21表)。

本遺跡における縄文時代前期初頭から中期初頭にいたる住居跡の変遷を、表からたどってみたい。

平面形は、前期初頭から中葉にかけて長方形・楕円形など横に長い形状が主流である。その長軸方向は、等高線にほぼ平行するものが多い。後葉から方形や円形のものも現れるが、比較的小形のものに多い。中期初頭の住居跡では、方形のものもやや大形である。

規模は、前期初頭では、8㎡以下の小形のものが卓越する。後葉になると30㎡以上の住居が出現している。末葉では、再び10㎡に満たない小形のものが多くなるが、中期初頭に至るとやや大形化する傾向がみえる。

柱穴は、前期初頭から中期初頭に属する全住居跡の6割強にあたる79棟において検出されて

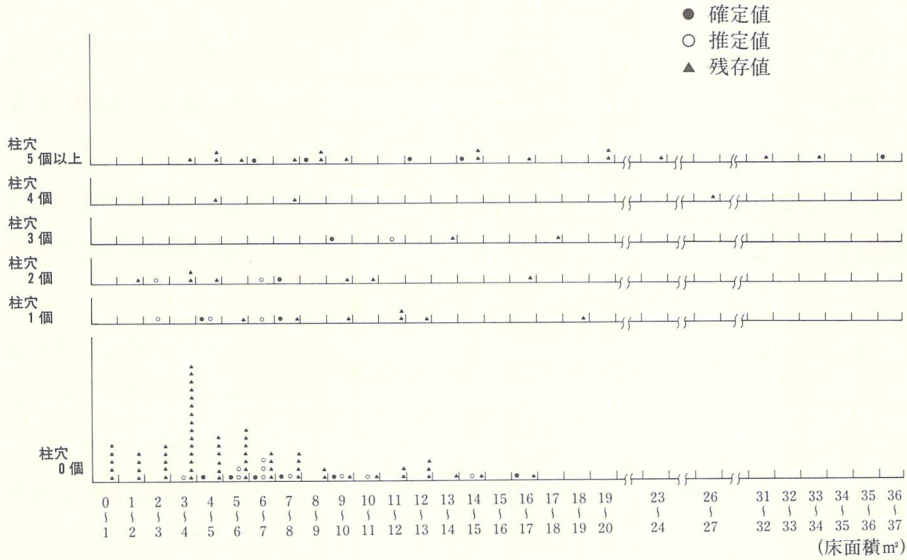
いない。例外はあるものの、比較的大きめの住居跡には柱穴を伴い、小形のものには伴わないということが傾向としては言えそうである。また、検出されたものでも、位置・規模・間隔などに規則性が見出だせないものが殆どである。

周溝は、前期初頭から中葉の住居ではみられない。後葉に属する比較的大形の住居を主体に、中期初頭まで一部の住居にみられる。その際、斜面上方の壁際に部分的に巡ることを特徴とする。

炉は、前期初頭の住居には無いものもあるが、地床炉を持つものが一般的である。その数や配置については多様であるが、横に長い住居の長軸方向に直列して2基、またはそれ以上が配置される例も少なくはない。石囲炉を有するものは2棟のみであり、やや例外的である。床面積は1棟は約4㎡、他の1棟は約6㎡と比較的小形の住居跡であること、前期の新しい時期か

	前期初頭から前葉	前期中葉	前期後葉	前期後葉から末葉	前期末葉	中期初頭
棟数	14	1	35	61	6	5
平面形	長方形・楕円形・長円形（長軸は等高線に平行）	長円形	長方形・方形が多い（長軸は等高線に平行）	長方形基調・楕円形が多い（長軸は等高線に平行）	方形基調	様でない（円形・方形）
規模	5～8㎡ （約13㎡もあり）	約11㎡	多様である。3～15㎡多い。30㎡以上もあり。	多様である。4～8㎡程度が多いか。20㎡以上もあり。	7～9㎡	約6～17㎡
柱穴	無し （1棟除く）	1個	有るもの・無いもの半数（有るものも規則性はなし）	無いもの半数以上 （有るものも規則性はなし）	有るもの・無いもの半数（有るものも規則性はなし）	有るもの・無いもの半数（有るものも規則性はなし）
周溝	無し	無し	無いものが一般的。比較的大形の住居に有り。（部分と全周と有り）	一部の住居に有り。（斜面上方の壁際）	一部の住居に有り。（斜面上方の壁際）	一部の住居に有り。（斜面上方の壁際）
炉	多様（無いもの、地床炉1基、同2基）	地床炉1基	地床炉多い。（数は多様）。規則性を有するもの3棟）	無いもの半数、地床炉1基も多い。大型では直列。	すべて地床炉1基を有する。	1棟は石囲炉。他は全て地床炉を有する。（掘込みある焼土3棟）
分布	A区東斜面。B区東尾根南斜面東半部	B区西尾根南山麓部	B区全域。東尾根は比較的大形の住居多し。西尾根は規模形状多様。	B区全域。東尾根は西半部に比較的大形の住居。東半部は小形。西尾根は規模多様。	B区西尾根東斜面。	B区西尾根鞍部から東斜面。

第21表 縄文時代前期から中期初頭の住居跡の傾向



第482図 縄文時代前期から中期初頭の住居跡柱穴数と床面積の関係

ら中期初頭の時期であるという点が特徴的である。

(ウ) その他

偏平礫を伴う住居跡 次の5棟に於いて、床面ないしはその直上から偏平な礫が検出された。加工痕や使用痕はみられないが、周囲に同様の礫は存在しないことから、なんらかの意図をもって住居内に持ち込まれたと考えるのが自然である。大きさはひとかかえほど（35～52cm×45～65cm）で厚さは5～9cm程度、形状が楕円形をしている点が共通する。また、この種の礫を伴う住居跡が、前期後葉または後葉から末葉に属する住居跡に限られる点も特徴の一つである。しかし、住居の形状や規模・占地等に於いて、有意な共通性や特質は見い出せず、これらの礫が、住居内に持ち込まれた意味やその用途については不明である。

	遺 構 名	時 期	床 面 積	礫の計測値	検 出 状 況
16	VII D 0 g 住居跡	前 期 後 葉	(3.4 m ²)	35×55cm	床面直上 中央？
59	VII D 4 h -3住居跡	後葉から末葉	(3.9 m ²)	35×45×5cm	床面 南半部
87	VII D 9 f 住居跡	後葉から末葉	(7.2 m ²)	52×55×5cm	床面直上 (4cm)
89	VII D 0 b 住居跡	前 期 後 葉	(14.1 m ²)	38×65cm	床面直上 南半部
107	IX D 1 e 住居跡	後葉から末葉	(14.9 m ²)	39×55×9cm	床面 中央？

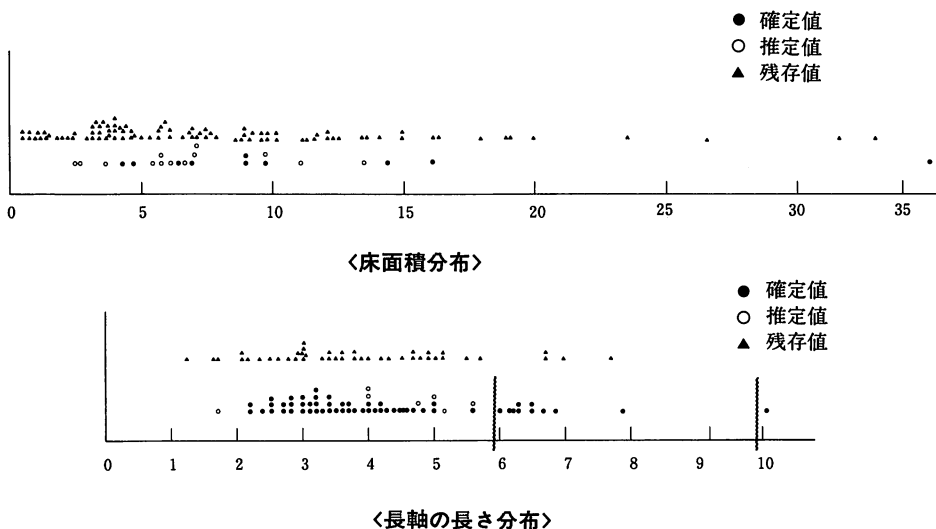
第22表 偏平な自然礫を伴う住居跡

掘り方(?)を有する住居跡 住居跡内での地床炉が検出された場合、通常はその面が床面であって、重複がない限りはその面は地山によって構成されると考えられる。しかし、本遺跡では地床炉の面より更に下位に掘り込みのある住居跡が確認されている。ⅧD0i住居跡(103)・ⅨD0f-2住居跡(147)・XD4g住居跡(160)の3棟である。このことが、重複によるものである可能性もないではないが、ⅨD0f-2住居跡のように掘り込みの平面形が不整形であって住居跡とは考えにくいことや、ⅧD0i住居跡・XD4g住居跡のように平面形が完全に一致することなどからは、重複と考えるにはやや不自然な印象がある。むしろ、古代の住居跡にみられる掘り方を連想させるものがある。しかしながら、縄文時代前期の住居跡で同様の例の報告はなく、現段階では不明としておく。

イ、大形・中形住居について

縄文時代の集落にあって、通常の住居と異なる特殊な遺構としての「大形住居」の検出例があるが、この「大形住居」という用語の概念規定は、かならずしも確立されているとは言えない。本遺跡にも、相対的に規模の大きい住居跡は存在する。が、それがいわゆる「大形住居」に該当するか否かという点で明白ではない。現時点においては、遺跡内における床面積の相対的な比較によって識別する考え方(三浦謙一 1990)が妥当と考えられる。

しかしながら、再三述べてきたように本遺跡の場合住居跡の検出数は多いものの、斜面に構築された住居跡の遺存状況は思わしくなく、また重複による削減もあって規模の比較は床面積だけでは困難であることから、長軸の計測値とあわせて考えることにした(第483図)。よって基準としては厳密性に欠けるが、おおよその傾向を把握する手掛かりとしたい。



第483図 縄文時代前期後葉から中期初頭の住居跡計測値分布

まず、床面積の確定値・推定値・残存値は、15.5㎡まで途切れることなく連続分布している。このことから、確定値で15.5㎡以下のものは通常のものとしてここから除外する。次に、長軸の測値分布では、5～6m前後にやや稀薄域、8～10mに明白な空白域をそれぞれ有することが分かる。それを境界として、本遺跡においては長軸が10mを越える住居を大形住居、6mを越え10m以下の住居を中形住居とする。長軸方向の壁を欠損しているものについては、残存値をもって前述の基準を準用する。この結果、大形住居が1棟、中形住居が12棟抽出される。

しかし、中形住居としたものでも、残存値に基づいて区分けしたものは、大形住居である可能性なしとはしないし、また逆に、面積が15.5㎡以下の通常の住居である可能性もありうるわけで、曖昧性が解消されないことは前述の通りである。

ここに抽出した13棟の特徴・傾向等については、個々の遺構が詳細不明なものも多く、推定に頼らざるを得ないものもある。時期では、前期初頭から中葉に属するものはない。これらが登場するのは本遺跡では後葉以降である。平面形は、概ね長方形・長円形・楕円形である。IX D 4 g - 2 住居跡（第481図20、以下同図の番号）・VI D 0 h 住居跡（25）がやや円形に近いかも知れない。周構は7棟に存在し、主に斜面上方に当たる北壁際に位置するものが殆どである。柱穴を有するものが多いが、明瞭な規則性を見い出せるのは、IX D 4 h 住居跡（22）・IX D 4 g

	遺構番号	遺 構 名	長 軸	床面積	時 期	平 面 形
大形	116	IX D 3 j 住居跡	1010cm	36.1㎡	前 期 後 葉	長 方 形
中 形 住 居	17	IV D 0 h 住居跡	620	(31.7)	前 期 後 葉 (推 定)	方形～長方形
	35	VII C 0 g - 3 住居跡	(693)	(33.0)	前期後葉から中期初頭	隅丸長方形?
	38	VII D 1 d 住居跡	625	(5.4)	前期後葉から末葉	長方形基調?
	45	VII D 2 h 住居跡	(670)	(10.1)	前期後葉から末葉	楕 円 形 ?
	53	VII D 3 h - 2 住居跡	(670)	(4.6)	前期後葉から末葉(推定)	楕 円 形 ?
	60	VII D 4 h - 4 住居跡	630	(13.4)	前期後葉から末葉	長 方 形 ?
	74	VII D 6 h - 2 住居跡	690	(23.5)	前期後葉から末葉	隅丸長方形?
	89	VII D 0 b - 2 住居跡	650	(14.1)	前 期 後 葉 (推 定)	長 方 形 ?
	120	IX D 4 g - 2 住居跡	650	(16.2)	前 期 後 葉 (推 定)	楕 円 形 ?
	121	IX D 4 g - 3 住居跡	670	(14.9)	前 期 後 葉 (推 定)	長 方 形 ?
	122	IX D 4 h 住居跡	790	19.9	前 期 後 葉 (推 定)	楕 円 形 ?
	127	IX D 5 h 住居跡	(770)	(6.2)	前 期 後 葉	長 方 形 ?

D 4 g - 3 住居跡(24)・IX D 3 j 住居跡(26)である。炉は、9棟に存在するが、全て地床炉である。住居内の位置関係に規則性がみられる。長軸方向に3基以上の炉が一直線上に直列的に配置されるものが、5棟ある。IX D 4 g - 2 住居跡(20)・VII D 6 h - 2 住居跡(48)も2基は長軸方向に位置する。間仕切りの痕跡はいずれからも認められなかった。重複は、部分・完全を含めて2棟を除く全てにおいて認められた。占地については、5棟が東尾根南斜面のほぼ同じブロック、同様に4棟が西尾根南斜面のほぼ同じブロックに位置しており、限定的な傾向がうかがえる。

いわゆる「大形住居」の性格や機能については、共同作業施設説・共同居住施設説・集会所説・祭祀遺構説などが唱えられている。本遺跡の中形・大形住居を、なお検討の余地があるとしても、いわゆる「大形住居」の範疇で把握した場合に、これらの説のうちのひとつを強く支持するような資料は得られていない。

集落構成としては、大形住居のみで構成され環状に配される遺跡や、大形住居と小形住居が共存する遺跡などが知られている。本遺跡例の特徴としては、重複が著しく反復的に形成された最終の形状としての把握ではあるが、大形住居に小形住居が近接して構築され併存しており、その位置関係において規格性は見られない。大形住居はその長軸方向を等高線に平行させ、ある一定の区域に集中している。出現時期は前期後葉であるということが出来る。

ウ、縄文時代中期末葉の住居跡について

A区で検出された縄文中期末葉の住居群は、特異な性格を有するように考えられた。住居跡は6棟検出されているが、1棟は遺存状態が悪く詳細不明である。他の5棟について住居相互の共通点や相違点、位置関係などの面から、その特徴点をまとめると次のようになる。

共通点

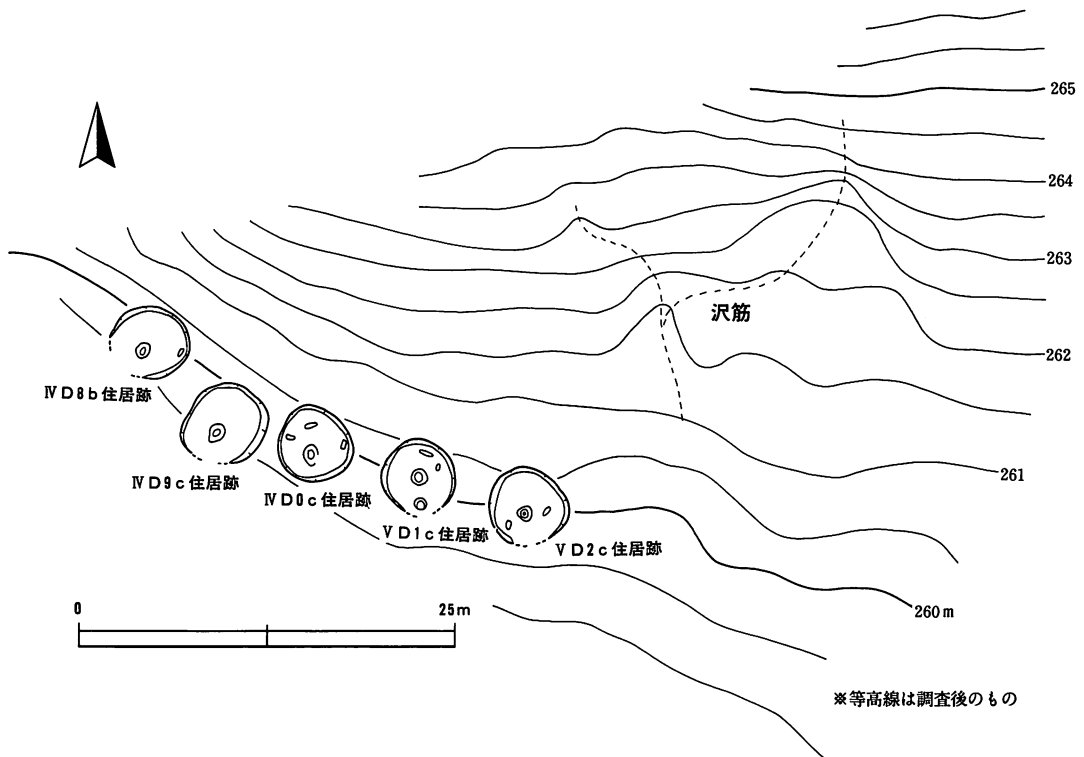
- ① 南斜面の等高線にそってほぼ一直線に概ね等間隔で並ぶ。
- ② 径4 m前後の規模をもち、平面形は円形ないしやや歪な円形であるという共通性がある。
- ③ 5棟とも炭化材や異地性焼土が床面上に分布しており、焼失住居と考えられる。
- ④ 炉は床面のほぼ中央部ないしはそのやや南側に位置する。構造は、全て土器を埋設させた後に周囲に粘土を貼りつけた土器埋設周堤炉とでも言うべきものである。土器埋設の角度は若干異なり、正立2、斜位3である。
- ⑤ 5棟のうちIV D 9 c 住居跡(2)を除く4棟で、床面から石棒が検出された。そのうちIV D 8 b 住居跡(1)とIV D 0 c 住居跡(3)から出土した、折損した石棒は互いに接合した。

時期差 これらの住居は、土器型式上の時期差はみられない。が、5～6棟が同時存在したかどうかを明らかにする直接的資料はない。埋土観察からはIV D 8 b 住居跡とIV D 0 c 住居跡は

黄褐色土を主体とする人為的埋め戻し、VD1c住居跡とVD2c住居跡は自然堆積と考えられた。前者は隣接する住居を構築する際の土捨ての一例として把握することが可能かも知れない。さらに、住居同士があまりに近接した位置に構築されていることから5棟全てが同時に存在したとは考えにくい。しかし、単一で6回営まれたものか、複数棟が同時に存在したものは明らかではない。

石棒 IV D 0 c住居跡の1点(遺物番号45)は直立、1点は床面直上に横位、他は全て床面に横倒しの状態で検出された。IV D 8 b住居跡とIV D 0 c住居跡の接合した石棒は、いずれも確実に床面からの出土であり、それぞれの住居跡に伴うものと考えられるが、この2棟が人為的に埋め戻されたものと考えられることと関連があるのかも知れない。

検出位置・方位は一定ではないが、少なくとも住居東壁寄りの位置からは出土している。また、IV D 0 c住居跡・VD 1 c住居跡・VD 2 c住居跡の3棟においては、明らかに敲打によって整形した石棒と、加工痕のない自然石と思われる石棒とが、出土位置は異なるもののセットで出土している点が注目される。



第484図 縄文時代中期末葉の住居跡群

石材は、流紋岩・デイサイト・砂岩で奥羽山地産と北上山地産とが混在しているが、ⅣD0c住居跡では奥羽山地産のみ、ⅤD1c住居跡では北上山地産のみが出土している。地域は離れるが、中期の集落として知られる長野県八ヶ岳山麓の遺跡では、石棒が多数検出されている。それらは炉の一角や、焚口の奥に直立して埋設されたり、入口と炉を結ぶ直線の延長線上に埋置されたりする。これらは、炉と石棒との関係の強さを示すものであろう。県内の縄文中期の遺跡に於いて石棒が住居内から出土した例はそう多くはないが、その出土位置において特に規則性は見られないようである（北上市柳上遺跡、盛岡市上米内遺跡）。近年調査された湯田町本内Ⅱ遺跡において、大木9式期の複式炉の前庭部に検出されたものが稀有な例と言えよう。本遺跡の出土状況からは、炉との関連は把握できない。

焼失 5棟の住居跡から炭化材が検出され、全て焼失住居と考えられる。長野県穴場遺跡において、石棒を伴う住居が人為的に焼失させられたと考えられる例があるが、本遺跡の場合も、石棒が横倒してあったこと、5棟が同時存在とは考えにくいこと等は、役割を終えた住居跡に対する意図的な廃棄・着火を想定させる材料となろう。

炉 5棟の炉について相違点に着目すれば、土器埋設には斜位と正立があること、周堤の下に石囲いを伴うもの・埋設土器に平板な礫を伴うものがそれぞれ1棟あることである。しかし、土器埋設後に粘土を盛り上げて囲むという点では全て同じ構造であった。同時期の都南村湯沢遺跡（現在は盛岡市）では黄褐色細礫を炉の周縁に貼り付けた土器埋設炉が検出されており、同じ系譜をひくものと思われる。

炉の周囲に貼り付けられた粘土は、明白に基盤層の黄褐色ロームとは区別されることから、炉の構築に当たって持ち込まれたものであると考えられる。常識的には南接する八木田沢にかかわる粘土が想定されるが、化学的分析は行っていない。住居内から出土した土器の素材となった粘土で構築されたのではないかとの仮説のもとに、化学分析を依頼した。その結果は付篇2において報告されるが、土器素材粘土と炉の構築土とは異なることが判明した。しかし、それぞれの産地については不明である。

さらに、炉の構築土と土器の胎土の化学特性において、住居のグルーピングが可能であることがわかった。ⅣD8b住居跡とⅣD0c住居跡、ⅣD9c住居跡とⅤD1c住居跡がそれぞれ近似する値を示す。このことは、埋土の状況においてⅣD8b住居跡とⅣD0c住居跡とが人為堆積であったという事実とも対応する。遺構の同時存在を証明する直接証拠はないが、これらの事実からは、ⅣD8b住居跡とⅣD0c住居跡、ⅣD9c住居跡とⅤD1c住居跡の同時存在を考えることが自然であろう。

占地 本遺跡に於いて、中期末葉に属する住居跡の分布区域はごく限られている。調査後の等高線と住居の配置を図示した（第484図）。この住居群の東側には小規模ではあるが谷頭凹型斜

面が存在することが分かった。沢の流路は南半に不明部分があるが、住居の分布域はそれに強く規制されているものと思われる。すなわち、南を比高差のある八木田沢、東をそれに注ぐ小支谷によって区画され、北側に勾配のある山体を控えた南向きの緩斜面を好条件として占有したものである。

エ、縄文時代晩期の住居跡について

VID 8 h 住居跡(15) 1棟のみの検出である。出土遺物は粗製の深鉢であり時期を限定的に把握することが困難であるが、底部の特徴と器形から大洞BCからC 1 式期の範囲に収まるものと思われる。径が3.5 m前後の円形で、石囲炉を持つ。南東9 mには本住居と同様石囲炉であるVID 0 i 炉跡が存在する。他に確実に晩期に属すると考えられる遺構は存在せず、調査面積に比し、極めて稀薄である。

オ、平安時代の住居跡について

B区東端の谷頭凹型斜面に於いて2棟、C区(西斜面)に於いて2棟、計4棟を検出した。出土遺物からいずれも平安時代前半期に属する遺構と考えられる。うち2棟は一部または大半を削剝・流失により詳細は不明である。

平面形と規模 遺存状況の比較的2棟は、隅丸方形を呈し床面積は11㎡前後である。下半を流失した1棟も、ほぼ同形状・同規模と推定される。

柱穴・周溝 いずれの住居跡からも検出されていない。

埋土 3棟は、黒色土を主体とし埋土下位または壁際を中心に十和田a 降下火山灰の微細粒を含む。埋土堆積状況の類似性から、住居の廃棄時期は近接しているものと考えられる。

カマド 谷頭凹型斜面の2棟は北壁東寄りに構築され、斜面上方に向かって掘り込み式の煙道を有する。C区の2棟は東壁南寄りに構築され、同じく斜面上方に向かって掘りぬき式の沿道部を有する。占地のみならず、カマド構築の類似性からも2棟ずつのセットが考えられる。また、本遺跡に於けるカマド・煙道の構築は、方位よりも斜面に対する方向と位置という規制が働いていると考えられる。

敷板 XC 6 b 住居跡(163)に於いて、幅20cm・厚さ3～5 cm程度の炭化した板材が検出された。カマド位置の反対方向に数列ずつL字状に配したものである。壁板の可能性も考えられるが、板材のない床面は、黄褐色土を混在して固く締まっていた焼成を受けているのに対し、炭化板材の下は締まりのない黒褐色土であったこと、板材の下からは遺物の出土はなかったことなどから、敷板と考えた方が妥当と思われる。

敷板を有する住居跡は、県内では浄法寺町五庵I・同町飛鳥台地I・同町桂平・上平沢新田

の各遺跡で検出されている。それらについては五庵 I 遺跡報告書において集成と考察が試みられている。本遺跡の場合と比較すると、カマド位置の反対方向にあることや、1単位の板の法量などは他遺跡例に類似する。一方、転根太の存在が不明瞭であること、板敷がL字状の2方向であることは、相違点として把握できよう。また、本遺跡の場合、敷板の下から土坑が2基検出されている。類似する例は飛鳥台地 I 遺跡にもあり、これを五庵 I 遺跡報告者は床下貯蔵庫とする見解を述べているが、本遺跡も同様の性格と考えられる。

(2) 土坑

ア、全体的なこと

時期 93基検出された。所属時期の記載は出土遺物や重複関係などに基づいたが、根拠となる資料が少なく時期を明らかにできないものが多い。厳密には時期不明とすべきかも知れないが、検出面・形状・埋土からの推定で単に縄文時代としてあるものが殆どである。しかし、住居跡の時期や遺構外出土遺物などは縄文時代前期から中期初頭に属するものを主体とすること、土坑の検出面は住居跡と同じ面であること等から、多くの土坑もその時期に該当するものと考えてほぼ間違いないものと思われる。

規模と分布 便宜的に平面形および断面形によって次のタイプに分類し、それぞれの規模・分布の特徴をみていくことにする。

- a、平面形が円形かそれに近似し、断面形がフラスコ状のもの …17基
- b、平面形が円形かそれに近似し、断面形がフラスコ状でないもの …41基
- c、平面形が小判形か楕円形状のもの …27基
- d、平面形が隅丸方形のもの …4基
- e、その他 …4基

aタイプは、開口部径1m前後、深さは50～150cmの規模を示すものが殆どで、数値上の分布は、他の土坑に比し集中的である。開口部径2m程度のものが1基あるが、崩落によるものと思われる。分布は、B区西尾根南斜面と東斜面に集中し、東尾根にはみられない。

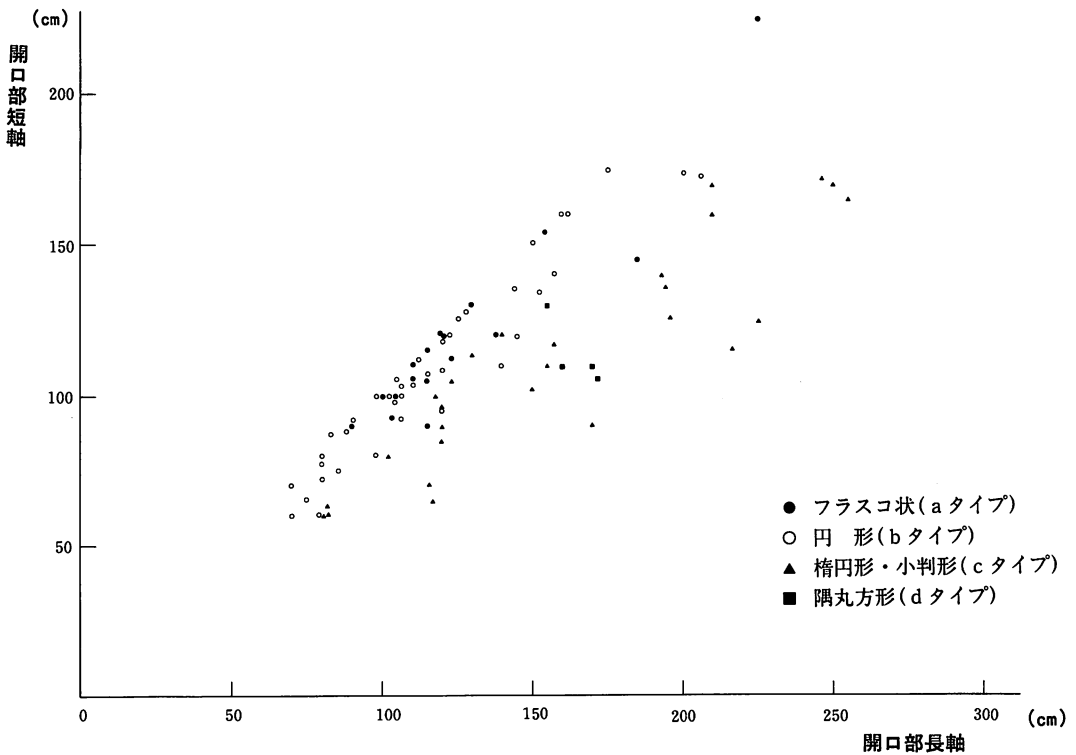
bタイプの開口部径は70～210cmの範囲にあり多様である。深さも10～100cmとバラツキが大きい。70cm以下のものが多く、aタイプよりはおおむね浅いのが特徴の一つといえよう。位置的には、aタイプと同様西尾根の南斜面・東斜面に集中するが、東尾根の東半部にも若干広がる。

cタイプは、平面形の長軸方向が彎曲するものを楕円形、直線的なものを小判形としたが、主観的・直観的なものであり、同一に扱う。開口部長軸は70～250cmとバラエティーに富む。深さは10～90cmまで分布するが、50cm以下の浅いものが多い。長軸が2m程度あるいはそれ以

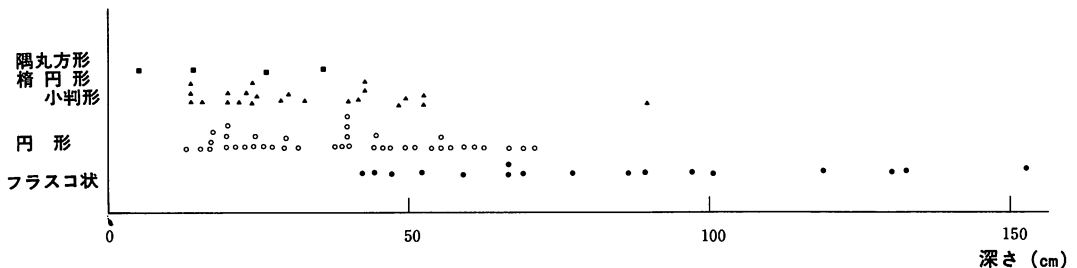
上のものの中には、住居跡である可能性が考えられるものがあり、それについては後に扱う。位置的には西尾根南斜面・東斜面がやはり多いものの、aタイプ・bタイプとは分布域をやや異にしているようにも思われる。

dタイプは詳細不明な部分も多いが、計測値は集中していて長軸150~170cm・深さ30cm以下である。西尾根南斜面に限定される。

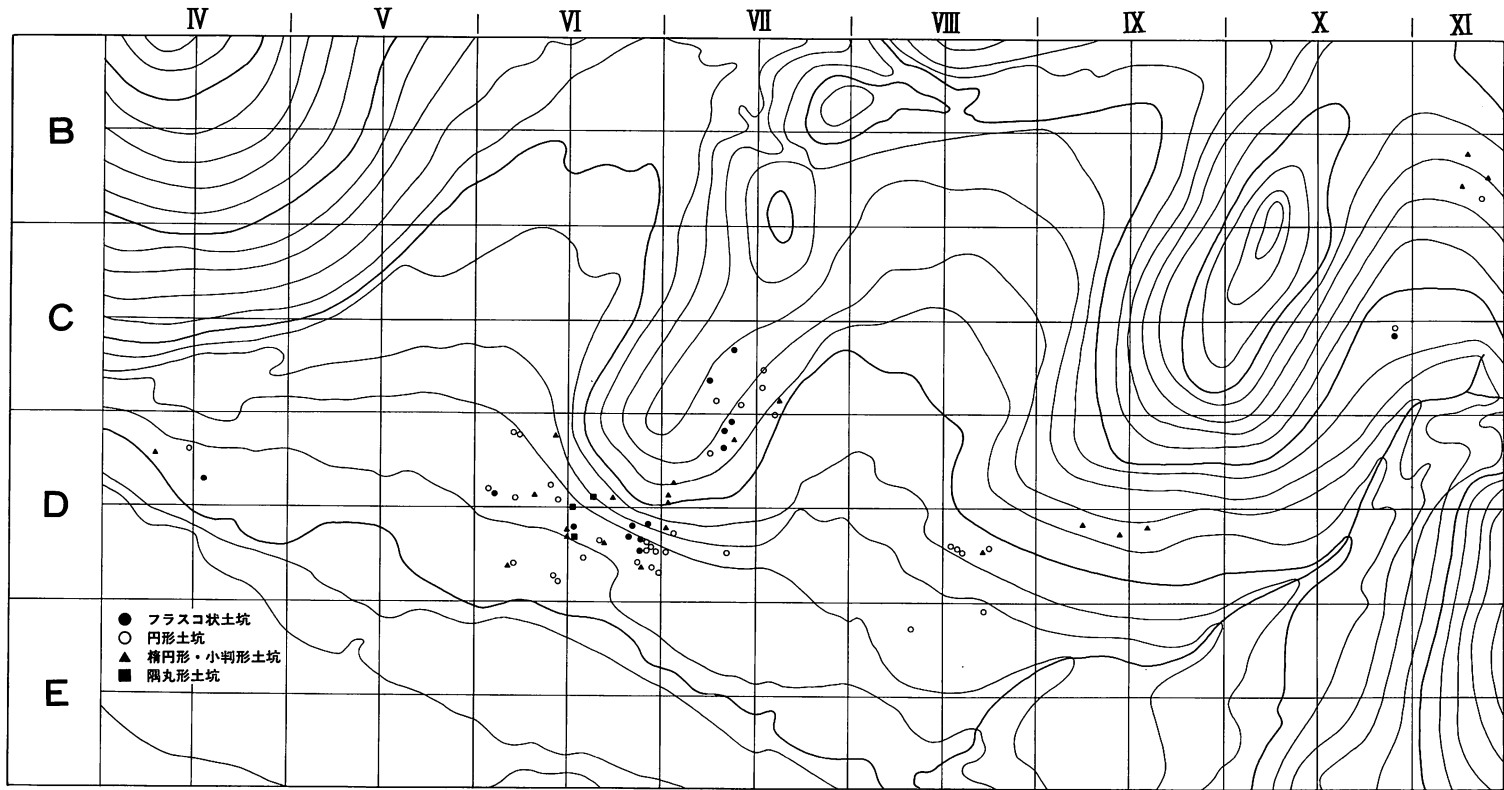
さて、aタイプの土坑が貯蔵穴として用いられたとすれば、住居跡の重複の著しい西尾根南斜面と東斜面に集中する理由も首肯できる。しかし、住居跡との重複を含めて東斜面で5基、南斜面で7基というのは、住居跡の検出数と比しあまりに少ない。フラスコ状の土坑が、ある



第485図 土坑開口部計測値分布



第486図 土坑深さ計測値分布



第487図 形状別土坑分布図

特定の時期の所産であって、その時期に該当する限られた住居に伴うものと考えた方がよいかと思われる。

bタイプには、aタイプを除いた平面形が円形のを全て入れたため、単一の用途を想定することはできない。貯蔵あるいは保管・廃棄など、それぞれの目的に応じて構築されたものと考えられ、計測値がバラエティーに富むのも当然といえよう。

cタイプの土坑については、特に傾向を見出だし難いが、住居跡の床面の下から検出されたものが数基あり、偶然的な事象としていいものかどうか不明である。

土坑について全体的な本遺跡の特徴として、第一にその検出数がフラスコ状土坑のみならず相対的に少ないこと、第二に東尾根には分布が極めて稀薄であることがあげられよう。

イ、大形の土坑について

住居跡・土坑など遺構の種別の認定は、規模・形状・施設・占地などから総合的に判断されるものと考えるが、整理の進行上、一部例外はあるが便宜的に床面積3㎡程度を目安として、それより広い竪穴遺構を住居跡、逆に狭いものを土坑として進めてきた。

しかし、次に提示する土坑は床面積こそ狭いものの住居跡である可能性も考えられ、あるいは住居跡状の竪穴遺構とすべきかも知れない。

IX D 0 g 土坑と X D 2 f 土坑は、東尾根南斜面の東半部を占地する。この区域は、前期初頭から前葉にかけての住居跡が集中しており、平面形や深さもそれらの遺構と類似している。

VIII C 2 j 土坑と VIII C 2 j - 2 土坑は、VIII C 2 j 住居跡の床面下から検出されたものであり、縄文前期後葉かそれ以前に属する遺構と考えられる。

これらの遺構を住居跡とするには底面積がネックになるが、3㎡以下の超小形住居を月経小屋のような特殊な用途の施設とする見解（武藤康弘 1993）や、住居を構える契機が配偶者の獲得に無い場合とする見解（林謙作 1981）もあり、そのような吟味も必要かと思われる。

遺構番号	遺 構 名	開口部径	深さ	底部面積	平面形	備 考
272	VIII C 2 j 土坑	173×206	25	[2.0]	歪な円形	周溝・柱穴あり
273	VIII C 2 j - 2 土坑	172×246	22	2.4	小判形	周溝・柱穴あり
282	IX D 0 g 土坑	165×255	53	2.0	楕円形	周溝・柱穴あり
285	X D 2 f 土坑	170×250	53		楕円形	

第24表 大形の土坑

ウ、底部に施設等を有する土坑（第488図）

本遺跡の土坑の中には、底面に柱穴状の小土坑や、周溝などを伴うものがあった。それらの土坑を取り上げる。

底部に柱穴状の小土坑を有する土坑は11基である。平面形が円形であるbタイプの土坑に多い。1個のみを有するものは5基であるが、深さは8cmのものが多いが16cmというものもある。2個を有するものが2基ある。ほぼ中心線上に位置するという特徴がある。しかし、この両者の小土坑の深さは差が大きく、同じ性格のものかどうか疑わしい。他に北壁際に浅く小さな土坑が巡るものが1基あった。

周溝を有する土坑は5基である。前項で述べたものおよび上記のものの一部重複がある。平面形は楕円形または小判形のcタイプに多い。壁の下端を全周するものと、部分的にとぎれるもの、一部のみのものがあり一様ではない。

中央に溝を有するものは2基である。平面形は円形で同規模である。溝はいずれも等高線に直交する中心線上に構築されており、その計測値も大差はないことから、この2基は同一の性格を有する遺構と考えられる。ただ、占地上は西尾根東斜面と東尾根南西斜面と大きくはなれている。

施設とは異なるが、底面から粉炭または焼土が検出された土坑が2基ある。西尾根の鞍部を挟んだ両側に位置し、いずれも住居跡の床面下から検出された。

また、石棒状の礫が出土した土坑が1基ある。西尾根東斜面を占地する土坑である。

これらの土坑の用途・使用目的を推定することは困難であるが、柱穴状小土坑を有する土坑にはあるいは陥し穴も含まれているかも知れない。また、周溝を伴う土坑は前項で述べた特殊な住居跡の可能性も考える必要があるだろう。

（3）陥し穴

本遺跡で検出された陥し穴は9基である。これらの遺構の時期を明らかにする資料は得られず、時期不明としてある。

田村氏の基準（田村壯一 1987）に従って本遺跡の陥し穴を分類するとおおむね次のようになる。

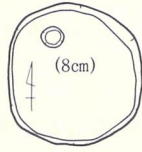
C型と円形の土坑としたものの区分については、氏の集成を参考にして、開口部径が0.8～1.8m・深さ0.5～1.5mで、断面が円筒形や摺鉢型のものをそれに当てた。

遺構の時期は、氏の研究によれば、A型は縄文時代中期末から後期前葉、B1型は縄文時代晩期中葉から平安時代前期、C型は縄文時代前期初頭以前としており、本遺跡の場合もそれにあてはめて考えておく。氏がB1型の時期の考察資料とした火山灰の堆積状況は、VI D 7 e 陥

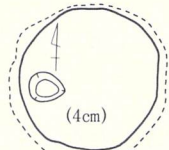
※ () は柱穴状小土坑・周溝の深さ



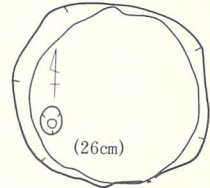
VII D 2 h 土坑



VII D 5 g -2 土坑



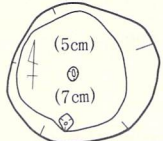
VII 4 g -2 土坑



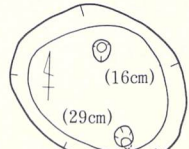
VII D 5 g -6 土坑



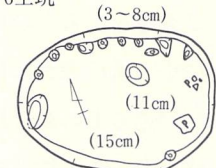
VII 9 h -2 土坑



VII D 5 i -2 土坑

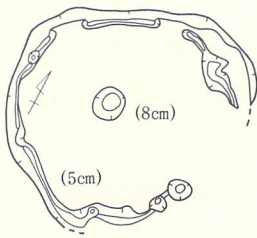


IX D 2 h 土坑

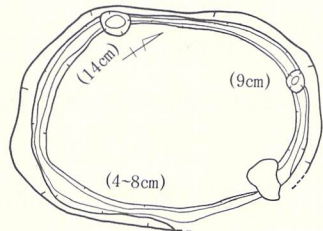


IX D 3 h 土坑

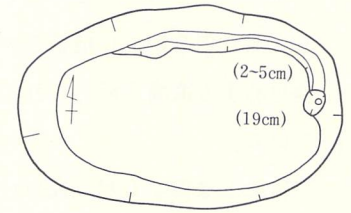
柱穴状小土坑を有する土坑



VIII C 2 j 土坑

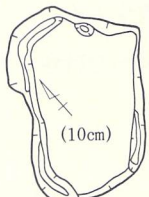


VIII C 2 j -2 土坑

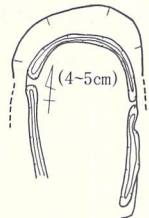


IX D 0 g 土坑

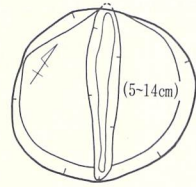
周溝と柱穴状小土坑を有する土坑



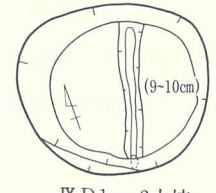
VII D 5 i -3 土坑



X D 1 g 土坑



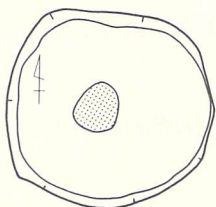
VII C 0 i 土坑



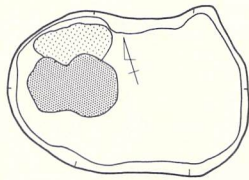
IX D 1 g -2 土坑

周溝を有する土坑

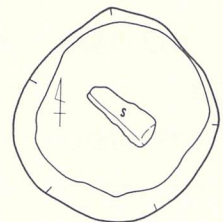
中央に溝を有する土坑



VII C 6 g 土坑



VII C 9 i 土坑



VIII C 1 i 土坑

粉炭・焼土を伴う土坑

礫を伴う土坑

第488図 底面に施設等を有する土坑

型	平面形	遺構名 (遺構番号)
A	細長い溝状	V C 8 j 陥し穴(301)・VIII C 1 f 陥し穴(307)
B1	楕円形もしくは長方形	VI D 7 e 陥し穴(302)・VII C 8 g 陥し穴(304) VIII D 2 c 陥し穴(308)・IX D 6 b 陥し穴(309)
C	円形もしくは方形	VI D 8 b 陥し穴(303)・VII D 1 j 陥し穴(305) VII D 7 j 陥し穴(306)

第25表 陥し穴分類表

し穴・IX D 6 b 陥し穴において見られ、氏の見解を支持している。A型のV C 8 j 陥し穴の埋土上位からも同様の火山灰が検出されているが、埋没速度に関わるものと考えられる。

構築時期を上記のように把握した場合に、占地の上での住居跡との関係のみをみる。C型の陥し穴は3基のみであるが、西尾根の南麓部を囲むように分布する。一方、前期初頭から前葉の住居跡は西尾根には皆無であり、それを挟む両側すなわちA区南東斜面と東尾根南斜面の東半部を占地していた。仮にC型の陥し穴とこの住居跡が同時期とすると、居住域と狩猟域の使い分けをしていたと考えられるが、推測の域を出るものではない。

A型はA区と西尾根鞍部付近に位置する。中期末葉の住居跡はA区西半部を占地するが、住居跡の東に小規模の埋没谷があり、それを境界として西側を狩り場とした可能性はあり得る。

B1型は、比定された時期幅が広すぎるが、1基を除き該当する時期の住居跡からは離れている点は指摘できる。

陥し穴の検出数が少なく、場の使い分け論まで踏み込むことは危険であるが、少なくとも比定された時期において、住居跡と陥し穴の占地は重ならないということが出来る。

(4) 土器埋設遺構

確認された遺構は1基のみである。倒立して埋設された土器がほぼ完形で検出された。同土器は大木6から～7 a式に併行すると考えられ、本遺構は同時期の所産と考えられる。

県内の縄文時代前期から中期初頭の埋設土器は、大木2式に比定される盛岡市堂ヶ沢I遺跡(岩埋文 1980)が初現である。その後は、県北部を中心に円筒下層b～d式期のものが数遺跡で検出されているのに対し、県南部では大木6式に該当する湯田町白木野I遺跡の1基のみである。前期の特徴として現段階では次の点が言える^(注)という。①器高が50cm、胴部径が30cmを越える大形のものはない。②掘り方はほぼ土器が埋め込める程度の土坑である。③円筒文化圏においては特定の地区を占地する。

大木7 a式では、雫石町塩ヶ森I遺跡や北上市高畑遺跡など住居内からの出土例が多い。

本遺跡の場合は、器高は25cm、開口部径が³15cm弱で上記の①には該当するが、掘り方は径が大きいばかりでなく深さも土器の2倍弱である。また、住居跡に接近する場所を占地している点などは、類例とは異なる。大きな掘り方を持つものは松尾村長者屋敷遺跡に1例あるのみで数少ない例と言えよう。

(注) 斎藤邦雄・酒井宗孝(1994)：岩手県の縄文期葬制遺構について「北奥古代文化」第23号
尚、両氏から直接教示を得た。

(5) 焼土遺構

39基が検出された。遺構の性格上検出状況から時期を特定することはきわめて難しく、個々の遺構については厳密にはその多くを時期不明とせざるを得ない。しかし、同遺構の分布が住居跡に近接することや、検出面で縄文時代前期から中期初頭を中心とする土器片が出土することなどから、その多くは、住居跡と同様に縄文時代前期から中期初頭に属するものが多いと考えられる。特に、周辺から縄文前期の土器が多く出土し、焼土そのものも厚く形成され固く締まっているものについては、住居の炉であった可能性が高いものと思われる。例えば、VI D 9 b 焼土(604)・VI D 9 d 焼土(605)・VII C 5 h 焼土(608)・VII C 9 e 焼土(609)・VII D 3 g 焼土(612)・VII D 5 h 焼土(614)・VII D 5 h - 2 焼土(615)などがそれに該当する。

明らかに平安時代の遺構と考えられるのは、IX D 7 e 焼土(639)である。発色・固さにむらがあり、土師器片を多く含むことから、廃棄された焼土と考えられる。斜面上方約10mには、本遺構共伴遺物と同時期と考えられる平安時代の住居跡が2棟検出されている。特にXI C 9 a 住居跡(164)のカマドが破壊された状態と考えられることから、それとの関連が想定されたが、遺物の接合など直接的証拠は見出だせなかった。

また、性格・時期とも不明な遺構がある。VII B 8 h 焼土はその一部に焼土が形成されることから焼土遺構として扱ったが、他のものとは明確に異なる。斜面に細長く2条のベルト状に形成され、その下位には溝状の掘り込みがある。紹介にとどめる。

2. 上八木田 I 遺跡の集落の変遷

ここで、時期別に遺跡内の住居跡の占地を中心に、その変遷を概観しておく。

本遺跡に於いて住居跡が確認されるのは、縄文前期初頭からである。その後やや疎密はあるものの、前期全般から中期初頭まで継続的・高密度に集落が形成される。

前期初頭から前葉に属する住居跡は14棟確認されている。長軸方向が等高線に平行な長方形・楕円形を基調とする平面形を有するやや小形のものが多い。遺跡の中央部の西尾根南斜面や東尾根の南斜面西半部は避け、東端と西端の緩やかな南斜面を占地する。該期に属すると想定さ

れる陥し穴は、住居の空白部にあり狩り場と居住域と区別できるかも知れない。

中葉では、西尾根南西麓に1棟があるのみだが、近接して同規模・同形状の住居跡があり、2棟がセットになるものかも知れない。

前期の後葉から中期初頭、大木5式期から7a式期において住居数は急激に増大し、本遺跡の中心的な内容を構成することになる。

前期後葉の住居跡は、西尾根南麓と東斜面と東尾根南斜面に多く分布する。前期後葉から末葉とした住居跡は、網目・木目状燃糸文の地文のみの土器が出土したものであり、大木6式期に網目状燃糸文がないとすれば、後葉とした住居と同一に把握できる可能性が高い。これらを含めれば100余棟を数え、重複が著しい。住居の規模・平面形には多様性がある。斜面の等高線に平行な長軸を有する長方形・楕円形が多いが、方形や円形の住居跡もある。比較的小形の住居が多い中で、長軸6mを越す中形・大形住居としたものが、東西両方の尾根の麓部に重複を繰り返して構築されている。それらの中には長軸方向に地床炉が複数個直列的に配置される例があり、規模は小さいもののいわゆる「大形住居」と同様の用に供する施設と考えられる。これらの中形・大形住居と小形住居の配置関係は、同時存在の遺構を明らかにできないので不明という他ない。しかし、中形・大形住居の位置はほぼ限定的である。すなわち、西尾根南斜面に於いては標高262mのライン上に多く、東尾根に於いては266～280mの斜面中央の1ブロックに集中する。しかし、小形住居がこれらの遺構とも複雑に重複していることから、占地上の使い分けはなく互いに隣接して構築されていたのではないと思われる。

前期末葉ないし中期初頭には、東尾根斜面からは住居は姿を消す。西尾根の東半部に遺構が集中する傾向があり、尾根鞍部にも進出する点が特徴である。フラスコ状土坑が東斜面傾斜変換点部にあるが、近隣に規模・形状が類似する土坑が数基あり、また南斜面に同じ形状の土坑が集中するブロックがある。分布域がそれ程広がらないことから、これらはあまり離れない時期の所産であって、該期のものという想定も成り立つ。

西尾根の西斜面からは、前期後葉から末葉にかけての土器が相当数出土したことから、土器捨て場と考えられるが、後葉の住居が麓部を中心に分布していたことと齟齬をきたす。東斜面に位置する住居の捨て場であろうか。麓部の土器がどこに捨てられたかを判明させる資料は得られなかった。

中期の前葉ないし中葉には、本遺跡から住居は一旦消滅する。再び集落が現れるには、末葉まで待たなければならない。しかもそれ以降、前期のような高密度の集落は営まれなかった。中期末葉の住居は、前期の集落が形成された場所とはまったく異なる占地をしている。これらの住居跡は位置関係・土器・石棒・炉・焼失など共通点が多い。土器形式上の差異はないが、同時存在ではなく2～3棟の集落の建替えと考えられる。

後期には集落は営まれない。晩期には前葉と中葉において各1棟の住居が、ともに西尾根南西麓部に構築された。

弥生時代のものとしては、後葉の土器片が遺跡全体から疎らに出土したが、遺構は確認されていない。

平安時代になって遺跡の東端に計4棟の住居が営まれる。これらは2棟ずつ近接した位置にありセット関係にあると考えられるが、同時に存在したか否かは明らかではない。

3. 遺物

(1) 土器

本遺跡から出土した土器は、縄文時代早期から平安時代に至るまでと時期幅が広い。ここでは縄文時代の土器を中心に、編年研究の成果を踏まえ、型式や時期の比定を試みたい。本遺跡の遺物は層位的裏付けによって時期を明瞭に区分できる出土状況にはなく、任意の基準を設けて分類せざるを得なかった。そのため時期・型式の比定は、他遺跡の類例との型式学的な比較に立脚したものである。

<縄文時代早期の土器>

第I群1類 貝殻腹縁による斜位刺突と条痕を特徴とする土器で、横位の沈線を有するものもここに含めた。完全に一致する例は見出だし難いが、口唇部断面が外削ぎである点、口縁が不均整波状となるらしい点、横位沈線を有する点などの特徴から、寺の沢式の前後に位置付くものであろう。

第I群2類 器形はキャリパー状で、沈線と貝殻腹縁圧痕による幾何学的模様などの特徴から、物見台式系統の土器といえる。

<縄文時代前期の土器>

第II群1類 aは組縄縄文を地文とし丸底に近い器形を有する土器で、高橋氏によれば、早稲田6類cの時期に認められ、仙台湾周辺では宮田Ⅲ群～大木1式期に類似性を求められるという(高橋亜貴子 1992)。本遺跡でもそれに従いたい。

bは胎土・焼成などの質感がaに酷似するもので、時期も同時かそれに近似する可能性が高いと考えられる。

cのうち、厚手の非結束羽状縄文(A)は、0段多条による2種の原体を交互に横位回転させる点、口唇部が平らに整形される点などが長七谷地Ⅲ群B種に類似する。結束羽状縄文のイの類は長七谷地Ⅲ群の中には殆ど無い。仙台湾周辺では名取市宇賀崎貝塚(宮城県教委 1980)

B V類bに結束羽状縄文、B V類cに非結束羽状縄文があり、両方とも上川名Ⅱ式として位置付けている。本遺跡の結束羽状縄文は、同遺跡例に酷似する。このことから、アおよびイは長七谷地Ⅲ群、上川名Ⅱ式に併行するものと考えられる。ウも羽状縄文はあるが、ア・イより相対的に薄手で硬質であることから別個に取り上げたもので、やや新しくなるものかも知れない。大木1式には結束羽状縄文はみられず大木2式になって現れる(興野義一 1968)という指摘をふまれば、その時期に該当するものか。

dは沈線のみを施文した土器であるが、早期の例えばムシリ1式にみられるような明瞭な沈線とは異なる浅い凹線であり、繊維を多量に含み厚手であることから前期初頭の所産と考えたが詳細は不明である。

第Ⅱ群2類 本類は繊維を含むもののうち、1類より装飾性の高いものを集めたもので、異時期・異型式のものを含んでいる可能性がある。aとbの口唇端に施文する土器は、胎土・焼成が類似し、互いに近似する時期と思われる。aの組紐を地文とし、篋状工具で口唇端施文するものは鳴瀬町金山貝塚(宮城県教委 1977) A V類中にみられ、上川名Ⅱ式に比定されている。しかし同時に、早期末から大木2式までみられる類の中に組紐回転文も含まれている。本遺跡の場合は、口唇端施文という点で、次に掲げる第Ⅱ群3類aと類似し、同類に組紐の地文もあることから、それに近い時期を想定することが許されるものと思われる。

cは、本遺跡としては数少ない横位に回転押圧された撚糸文土器である。胎土に繊維を少量含む薄手の土器で、後述する第Ⅱ群6類の撚糸文土器とは明白に異なる。これに類似する土器は仙台市三神峰遺跡(仙台市教委 1980)や七ヶ浜町大木田貝塚(興野義一 1968)にあり、地域的に離れるが、それらと同類とみて大木2 a式としたい。

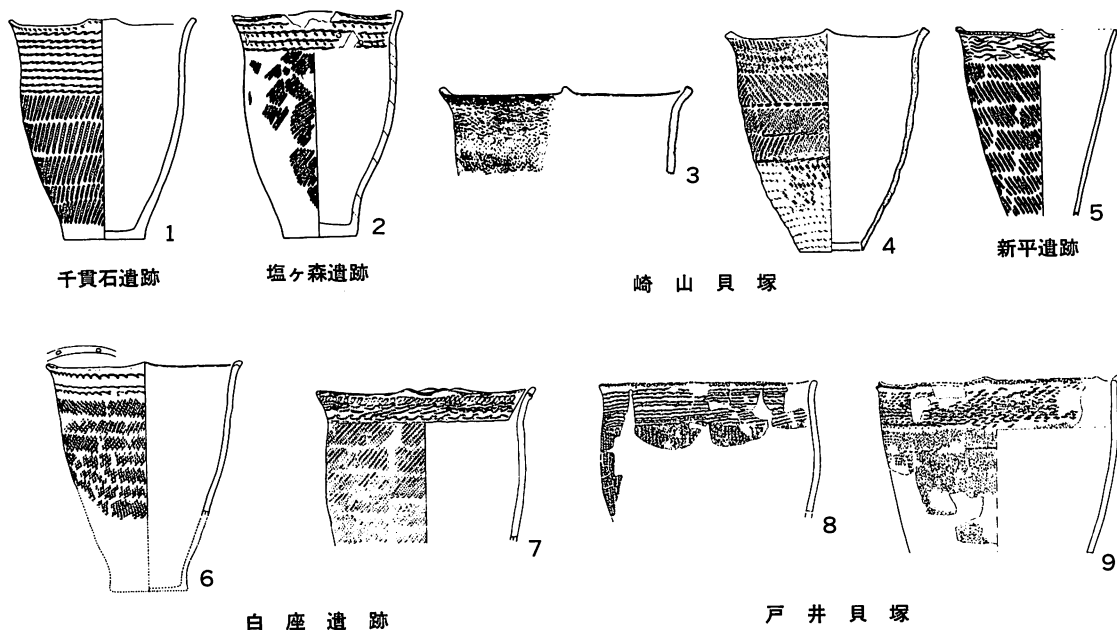
第Ⅱ群3類 aに類似する資料は、県内では金ヶ崎町千貫石遺跡(第489図1、金ヶ崎町教委 1973)・雫石町塩ヶ森遺跡(同2、岩埋文 1982)・宮古市崎山貝塚(同3・4、宮古市教委 1987)、県外では青森県階上町白座遺跡(同6・7、階上町教委 1989)・北海道戸井町戸井貝塚(同8・9、戸井町教委 1992)において見ることができる。

時期の位置付けであるが、熊谷氏は千貫石遺跡例の口唇部の刻みに注目して大木2式を想定(熊谷常正 1982)し、その後塩ヶ森遺跡例について遺構共伴土器から大木3式に比定し、円筒下層a式と併行する可能性を指摘している(熊谷常正 1983)。崎山貝塚では第489図3は口縁部の不整撚糸文に着目し大木1式に、同6はS字状連鎖沈文的な撚りのない不整撚糸文を施すもので大木2式に当てている(高橋憲太郎 1987)。白座遺跡においては、円筒と大木系の両方の土器文化の影響を強く受けて成立したのものとして「白座式」を設定したが、その一部に類似資料があり、大木2 a式と円筒下層a式に併行するものとしている(杉山 武 1989)。また、戸井貝塚では円筒下層a式の古いタイプと位置付けた一群に含めている(佐藤智雄 1992)。

このように類例はまだ少なく、時期的位置付けについては円筒土器と大木系土器の併行関係の問題も内包して必ずしも定まっているとは言えない状況にある。

本遺跡の場合、層位的裏付けはなく型式学的類推を試みる他ないが、次の第4類に入れた土器に口縁部文様帯にS字状連鎖沈文を施し口唇端に刻みを入れたもの（第497図1395）がある。やや器形が縦に長い印象がある点と、口唇端の刻みが篋状工具ではなく棒状工具によるものである点、突起の有無が不明な点などは異なる要素ではあるが、文様構成上の類似性が感じられる。口縁部にS字状連鎖沈文を施す同種の土器は、江釣子村（現在は北上市）新平遺跡にあり（第489図5、岩手県立博物館 1982）、実測図からは口唇端の刻みが篋状工具によるものと見られること、4単位の突起を有することは、本類aとの類似性をより高めている。しかし、本遺跡例よりも胴部の膨らみは少ない。器形がより本類aに近いのは崎山貝塚出土の土器（同4）である。同土器がS字状連鎖沈文への過渡的様相を示すものと考えれば、本類aと第4類をつなぐものという見方が可能であろう。このことから、本類aは、大木2a式の所産と考えておく。

bは、不整然糸文の特徴から大木2式であろう。



第489図 第II群3類土器に類似する資料

第II群4類 S字状連鎖沈文を有することから、大木2b式に比定される。

第II群5類 鋸歯状の沈線を有するものとして器形の異なるものをも一括したため、異なる時期のものも含めている可能性がある。

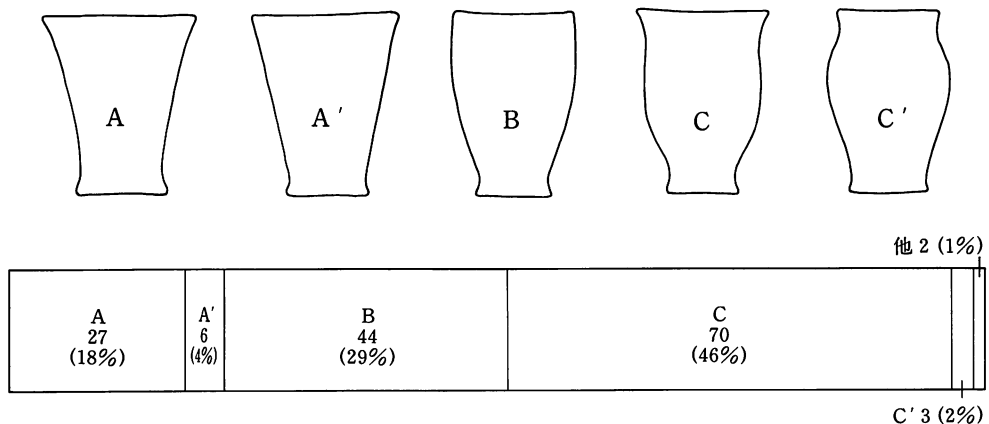
口頸部を中心に鋸歯状沈線が施されるものは、大船渡市清水貝塚（西村正衛他 1958）の第四類土器、秋田県協和町上の山II遺跡（秋田県教委 1988）の第7類土器にあり、両者とも大木4式に比定されている。また横位鋸歯状沈線に縦位短沈線が2条垂下する土器は、宇賀崎貝塚の大木3式と大木罎貝塚（七ヶ浜町教委 1972）の大木3式・4式の土器の中にある。大木罎貝塚では大木4式の沈線は断面凹形で、沈線底部には棒の維管束の跡とみられる細いすじがみられるという。また、モチーフは大木3式の文様からきたものとしている。本遺跡の沈線施文法は、大木罎貝塚のそれに類似する。このことから、本類を大木4式に位置付けておく。

第II群6類 本遺跡においてもっとも多く出土した土器群である。遺構の共伴関係からおおむね同時期のものとして把握することが可能である。

焼成・胎土・色調 焼成は全体的に良好で硬質で、胎土には粗砂を含むものが多い。色調は黄褐色から暗褐色でやや赤味を帯びるものもある。

器形（第490図） 底部から直線的に外傾するAタイプ、口縁部に最大径を有し胴部でやや膨らむBタイプ、胴上半部でやや膨らむが口縁部が外反するCタイプに大別される。数は少ないが、Aタイプより外反するA'タイプや、最大径が胴部にあるC'タイプもある。多少の相違があり、またこれらの中間形もあって判然としないものもあるが、大まかに分別すればこれらのうちのいずれかに含まれる。いずれのタイプに属するものも、底部が外側にやや張り出すものが殆どである。また、数は少ないが、上面観が楕円形となる土器もある。

タイプ別の点数とその割合を図に示した。遺構内と遺構外から出土した土器のうち、器形の



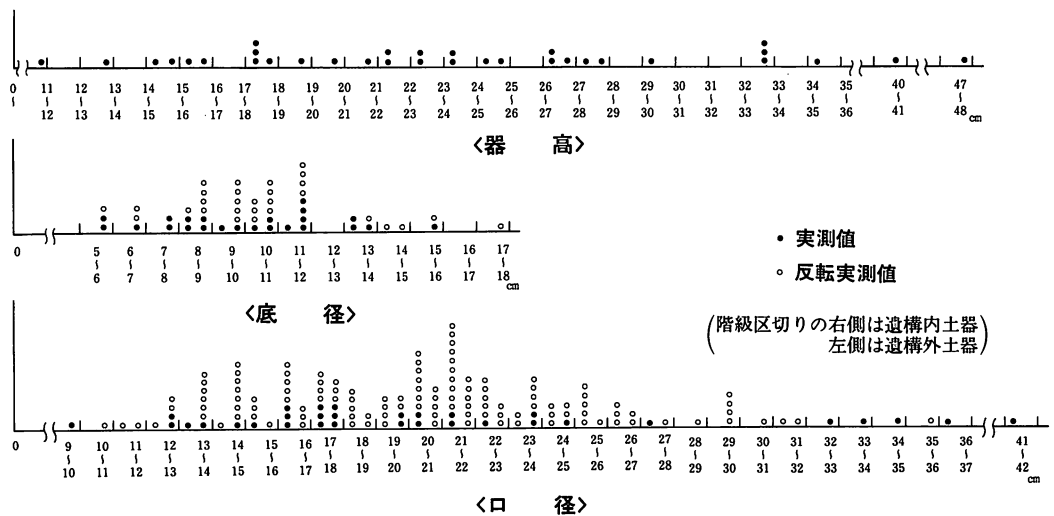
第490図 第II群6類土器器形タイプとその割合

わかる 152 点を対象としたものである。Cタイプが最も多く約半数を占め、Bタイプがそれに次ぐ。しかし、同じCタイプでも、Bに近いもの、C'に近いものもあり、同列に扱うことに危険性を感じるものもあるが、おおよその傾向はつかめるものと思う。遺構内の土器に限れば、Aタイプ18点、A'タイプ2点、Bタイプ25点、Cタイプ24点、C'タイプ1点、その他2点と、全体傾向よりA・Bタイプの割合が高い。このことが、資料の制約によるものか有意性のあることなのかは、にわかには判断できない。

計測値 (第491図) 最小の値を示すのは、768 (器高11.6cm・口径9.5cm・底部径6.0cm)で、1090 (器高13.6cm・口径10.2cm・底部径7.0cm) がそれに次ぐ。最大値を示すものは欠損もあって明確ではないが、実測できた土器の中では口径41.5cmのものが最大である。全体的な傾向としては、口径20cmをピークとしてその前後5cm内外に集中している。底径では10cm前後が標準的である。器高はバラエティーがあるが、20~30cmが最も多い。

地文 (第492図) 実測できた200点のうち133点 (約3分の2に相当) が、絡条体によるものである。特に網目状燃糸文が多く、全体の約半数を占める。縄文の回転またはその組み合わせによる回転によるものの中では綾絡文が最も多いが、このなかには文様としての装飾性を有するものの他に縄文原体の末端処理によるものも含めている。あるいは、斜縄文に含めるべきかも知れない。

北上市滝ノ沢遺跡 (北上市教育委員会 1983) と金ヶ崎町和光6区遺跡 (岩埋文 1987) の、本類に時期的に近似する土器の地文と比較してみた。対象を実測した土器に限ったため、全体



第491図 第II群6類土器の計測値

上八木田 I 遺跡

第II群6類 200点

多軸 4 (2%)

附加条 1 (0.5%)

網目状撚糸文 61 (31%)	木目状撚糸文 29 (15%)	撚糸文 39 (20%)	羽状 10 (5%)	綾絡文 31 (16%)	斜縄文 20 (10%)	その他 3 (3%)
-----------------------	-----------------------	--------------------	------------------	--------------------	--------------------	------------------

第II群7類 20点

木目状撚糸文 6 (30%)	羽状縄文 2 (10%)	綾絡文 4 (20%)	斜縄文 6 (30%)	その他 2 (10%)
----------------------	--------------------	-------------------	-------------------	-------------------

和光 6 区遺跡

大木 5 式 20点

網目 1 (5%)	撚糸文 11 (55%)	斜縄文 6 (30%)	その他 2 (10%)
-----------------	--------------------	-------------------	-------------------

大木 5 ~ 6 式 10点

撚糸文 3 (30%)	羽状縄文 2 (20%)	綾絡文 1 (10%)	斜縄文 2 (20%)	その他 2 (20%)
-------------------	--------------------	-------------------	-------------------	-------------------

大木 6 式 6点

撚糸文 2 (6%)	羽状 1 (3%)	斜縄文 24 (75%)	附加条 1 1 (3%)	その他 6 (19%)
------------------	-----------------	--------------------	--------------------	-------------------

滝ノ沢遺跡

深鉢 A₁ 大木 5 式 18点

網目 1 (6%)	木目 1 (6%)	撚糸文 6 (33%)	斜縄文 9 (50%)	その他 1 (6%)
-----------------	-----------------	-------------------	-------------------	------------------

深鉢 A₁・A₂ 大木 5 ~ 6 式 27点

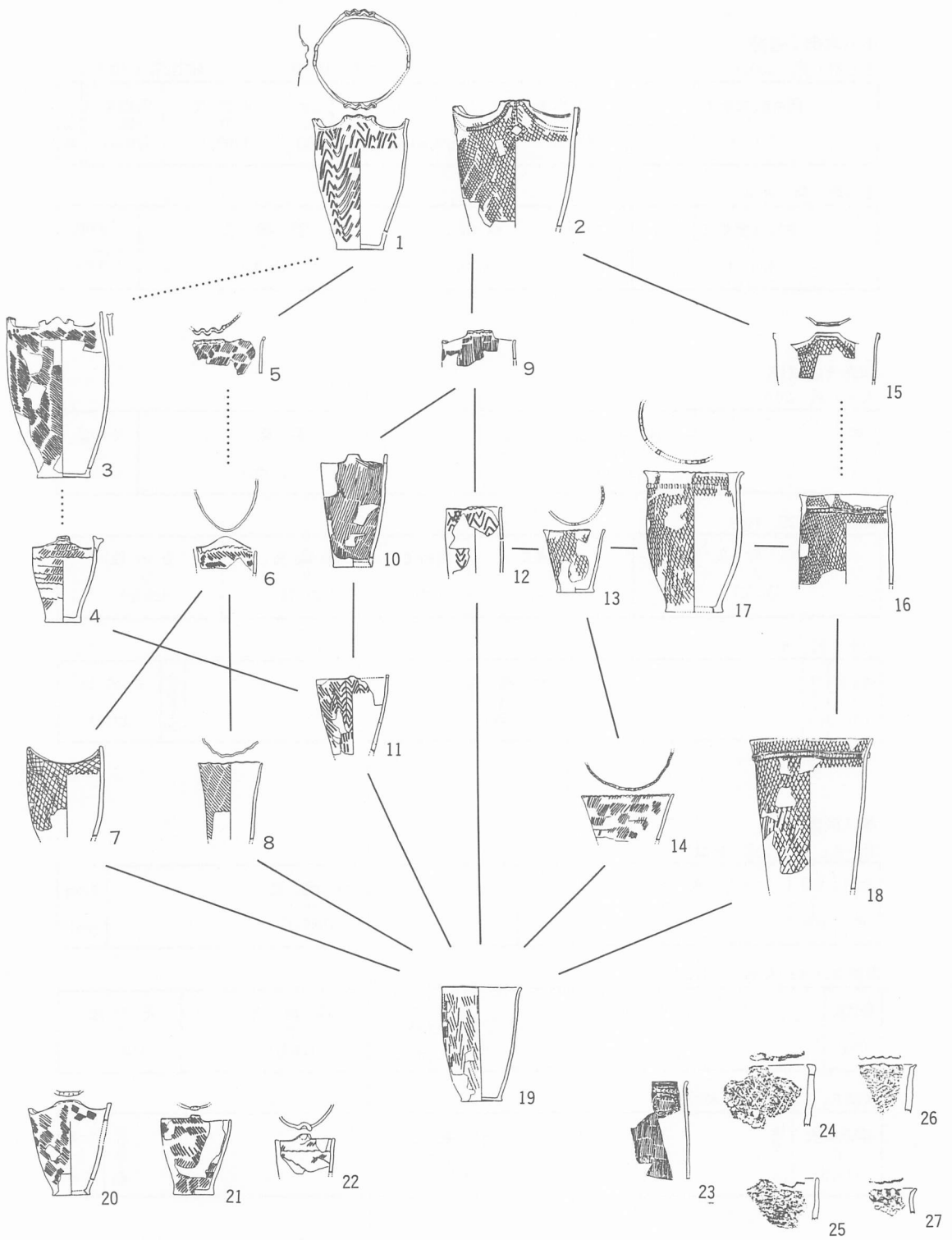
網目状 2 (7%)	撚糸文 13 (48%)	多軸 1 (4%)	斜縄文 7 (26%)	その他 4 (15%)
------------------	--------------------	-----------------	-------------------	-------------------

深鉢 A₁ 大木 6 式 62点

羽状縄文 6 (11%)	綾絡文 2 (4%)	斜縄文 40 (75%)	附加条 2 2 (4%)	その他 3 (6%)
--------------------	------------------	--------------------	--------------------	------------------

※スクリーントーンは絡糸体

第492図 第II群6・7類土器の地文と他遺跡との比較



第493図 第II群6類土器相互の関係

の分布構成を直接反映する資料にはなり得ないが、おおよその傾向は把握できるものと思う。3遺跡とも原体に単軸絡条体を用いたものが多いことがわかるが、本遺跡において網目状撚糸文が抜きんでていることが、比較の上からも特徴点といえよう。

類内相互の関連性 (第493図) 本類は装飾性の低い土器で特に特徴を有しないものも多く、類として一括することには危惧もあったが、遺構の共伴関係という観点と共に、型式学的にも強い関連性を持つと考えられた。それを模式的に線でつないでみたのが第493図である。この線は時間的前後関係を意味するものではなく、従って変化という観点で把握しようというものではない。しかし、土器製作主体者が製作にあたっての前提や完成イメージの中に意識したものとして、この関連性を推測することは許されるであろう。

まず全体的傾向では、口縁部や口頸部隆帯に着目すると、互いに対向する位置に一对の装飾体や突起・沈線が施されるものが多いことに気づく。それは1単位の場合もあるしまた2単位の場合もある。さらにその装飾体や突起・沈線の形状や施文法には、相互に類似性があると言える。次に個々に見ていく。

<1・2…3…4-11-19> 3の山形突起は1の鋸歯状装飾体を縦方向に深く刻むことから派生するであろう。4の円文は3の他の一对に観察される。4と11の間に21を置くと関係が明白になる。

<1・2-5…6-7-19、6-8-19> 1の装飾体が鋸歯状であるのに対し5のそれはむしろ波状というべきものである。5と6では波状となる位置が異なり、この間には飛躍がある。24・25は6と10の中間に位置すると考えられる。

<1・2-9-10-11-19、9-12-13-19> 9と10の間には弁状突起上の圧痕が浅く爪跡のみが残る20を置くことができる。10の突起上は無施文である。12は9の弁状突起と指頭状圧痕が低平化した印象がある。13は12の弁状突起が全く無くなり指頭状圧痕のみが残ったようにもみえる。

<1・2-15…16-18-19> 15は口唇部に沈線を施文し、隆帯は口縁に沿って波状である。16との間には飛躍があるが、平縁に平行する隆帯の一部に沈線を施す。

<その他> 22の隆帯のモチーフは、2のそれと関連するであろう。また8と14とは、指頭状圧痕の方向が上からか横からかという違いとして把握できるが、その中間形ともいえるべきものが26・27である。口縁部の内側上方向からの圧痕により、口縁部は前後に波状となっている。この他にも観点を定めることによって、これとは異なった関連性を把握することも容易である。

類例との比較 本類の中で特徴的な土器は、口縁部に鋸歯状の装飾体を有するものである。類似する土器は滝ノ沢遺跡(前掲)の深鉢A1第I群1~4類、・和光6区遺跡(前掲)の深

鉢A第1類の中にあり、両遺跡とも大木5式に位置付けている。

まず滝ノ沢遺跡との比較を試みたい。滝ノ沢遺跡では「山形の貼り付け」を有するものをI群2類、「波形の突起」を有するものをI群4類としている。これらは、本遺跡の第II群6類aアに相当する。器形も本遺跡のCタイプとしたものに等しく、類似性を高めている。また、滝ノ沢遺跡I群5類は本遺跡の第II群6類bエに等しい。相違点としては、滝ノ沢遺跡ではI群6・7類を含め縦位のイナズマ状の隆帯・沈線が顕著であるが、本遺跡ではやや類似するものが1点ある(第498図42)だけで他には見当たらないことがまず上げられる。また、滝ノ沢遺跡に多い装飾体上の竹管円形刺突が本遺跡においては主体的ではないこと、滝ノ沢遺跡I群1類の「円形の貼り付け」は本遺跡本類ウの中に若干はあるものの滝ノ沢遺跡ほど多くはないことも異なる点といえよう。

次に和光6区遺跡と比較をする。同遺跡で大木5式としているのは深鉢A1～3類・15類、深鉢B1類である。これらのうち、本遺跡と類似するのは、深鉢A2類の一部と3類・15類である。深鉢A2類の一部とは「山形の貼り付け」「台状の波頂部」を有するもので、本遺跡の本類aア・イに当たる。深鉢A1類の「有孔円盤状の貼り付け」も本遺跡にわずかではあるが存在する。器形は深鉢A15類は本遺跡のAタイプとCタイプに相当する。しかし、深鉢A2類・3類は、本遺跡ではごくまれなA'タイプのものが多い点が異なる印象を受ける。他に大きく相違する点は、和光6区遺跡の「鋸歯状の沈線」「鋸歯状の粘土紐」「肥厚した台状の口縁部」である。本遺跡では、鋸歯状の沈線を有する土器は第II群5類にあるが、本類とは時期を異にするのではないかと考えられた。また、鋸歯状の粘土紐はやや類似するものが1点(第339図1416)あるだけで他にはない。肥厚した台状の口縁部は全くみられない。これらのことから、本遺跡との近似性はみられるものの、滝ノ沢遺跡と比較すれば相対的に異なる点が多い。

時期 さて、県内で大木5式土器が出土した遺跡は、他に水沢市中島遺跡(草間俊一他 1965)・陸前高田市牧田貝塚(陸前高田市教委 1971)・大船渡市清水貝塚(岩手県文化愛護協会 1976)・一関市庄司合遺跡(一関市教委 1977)・陸前高田市大陽台貝塚(陸前高田市教委 1979)などがある。これらの遺跡の大木5式の内容は、細い粘土紐をちぎって鋸歯状に貼り付けたもの、縦位の鋸歯状沈線を有するもの、切り込みの深い鋸歯状装飾体を有するものなどがある。その特徴は、大木囲貝塚(興野義一 1969、七ヶ浜町教委 1979)・宮城県南方町長者原遺跡(興野義一 1970)などの仙台湾周辺のものと同様と見ていいほど類似する。

一方、滝ノ沢遺跡・和光6区遺跡の大木5式の内容は、仙台湾周辺のものと同様部分も多いが、それとやや趣きや施文法を異にするものも含まれている。すなわち、地文として縦位の撚糸文を多用する点、鋸歯状装飾体というよりはむしろ波状とでもいべき弁状の突起を有する点、口頸部への隆帯の貼り付けなどである。本遺跡の本類土器は、両遺跡が仙台湾周辺と

異なる部分において両遺跡に類似するということが可能であろう。さらには、和光6区遺跡よりは滝ノ沢遺跡の土器により近い内容をもっているといえる。逆に言うと、和光6区遺跡の方がより仙台湾周辺のものに近いということになる。

これらのことから、本遺跡第II群6類土器は、本遺跡と仙台湾周辺の間に滝ノ沢遺跡・和光6区遺跡を挟むことによって、そのほとんどが大木5式に併行すると考えることができる。

しかし、本類土器全てが大木5式に限定されるかどうかは、まだ考慮の余地がある。太い粘土紐による波状の貼り付けが伴う土器（例えば第497図15や第495図23、第362図1631・1632など）は大木4式に相当するものかも知れない。また、次の7類土器や8類土器のなかに、本類と同様の木目状撚糸文・縦位または横位の綾絡文・羽状縄文・斜縄文などを地文とする土器がある。この事は、本類の地文のみの土器が、大木6式期まで用いられた可能性も考えなければならぬことを示していよう。網目状撚糸文に限っては、本類の中で完結するようである。

ただ、本類に含めた土器が同じ時期に確実に共存していることは、遺構の共存関係などから明らかであり、それは大木5式期（一部は大木4式まで遡るか）であったと考えられる。

第II群7類 器形からaとbに分類した。aは全体として長胴形を呈するが、6類土器のCタイプと比較して、胴部の最大径がそれより低い位置にあるのが特徴といえる。bは球胴形深鉢・脚付鉢形土器とも呼ばれる。a・bとも凹線や半截竹管による平行沈線および刺突文を多用する。この特徴は宮城県長根貝塚（宮城県教委 1969）第二群にあり、それとの対比において本類土器は大木6式に比定される。

県内で大木6式土器が出土しているのは水沢市中島遺跡（前掲）・一関市庄司合遺跡（前掲）・大迫町天神ヶ丘遺跡（大迫町教委 1974）・大船渡市清水貝塚（前掲）・盛岡市大館町遺跡（盛岡市教委 1978）・江釣子村鳩岡崎遺跡（岩手県教委 1982）・北上市滝ノ沢遺跡（前掲）・金ヶ崎町和光6区遺跡（前掲）・北上市煤孫遺跡（岩埋文 1993）などである。

本類aとそれらを比較すると、口縁部が肥厚して文様が胴部にまで及ぶような典型的な大木6式土器は、本遺跡では極めて少ない。口縁部に弧線や刺突文が集約され、胴部は地文のみで構成される点が本遺跡の特徴といえる。口縁部文様では庄司合遺跡第II群、大館町遺跡第II群8類によく類似した土器を見出すことができる。

本類bは、球胴形深鉢とも呼ばれるもので、稲野氏は北上市周辺の同種の土器を大木系（A種）・他系統（B種）に分けその関係と推移について明らかにした（稲野彰子 1991）。本遺跡には特有の土器もあり単純な比較はできないが、胴部形状・口縁部形状・地文などの氏の分析にもとづきB種第2段階から第3段階（一部は第1段階か）に位置づくもので、大木6式に相当するものと考えられる。

第496図34・第501図117のように上面観が波形となる変形の花弁状口縁としたものは滝ノ沢遺

跡に1点みられるのみであるが、それが6類bエに分類した花卉状口縁の系譜をひくものかどうかは確証はないものの、波形が6単位より多く細かいものもあることから、現時点では関連のあるものとしておく。

本類の地文は、絡条体を原体とする比率が6類より下がり、縄の回転によるものが多くなる。絡条体も木目状撚糸文が圧倒する点が6類と大きく相違する。滝ノ沢遺跡・和光6区遺跡と比較すると、両遺跡とも大木6式ではやはり絡条体は大きく減少するが、その比は本遺跡を大きく凌ぐ。また本遺跡で後まで残る木目状撚糸文は、両遺跡では全く見られなくなる。このことは地域差として把握することが可能であろうし、それがおそらくは円筒土器の影響の濃淡による差であろうと考えられる。

しかし第501図111・112をはじめとして破片資料の中にも、大木6式に比定していいものかどうか疑問が残るものもある。あるいは大木7a式に属するものもふくまれているかも知れない。ここでは、次の理由により大木6式の範疇で把握した。

中期最古時期の土器として、宮城県糠塚貝塚（加藤 孝 1956）第二類、長根貝塚第三群土器をおくことについては、いわゆる「糠塚式」を認めるか否かの立場を越えて、大方の支持するところであろう。長根貝塚第三群土器に類似する土器は、本遺跡に近接する上八木田V遺跡において多く出土し、第三群1類に分類され大木7a式として報告されている（平井進 1992）。しかし、本遺跡においては同類の土器はごくわずかしか出土していない。逆に本遺跡に類似する土器は、上八木田V遺跡では稀有である。この相違は、遺跡位置が近接していることからすれば時期差として理解することが妥当と考えられる。

第II群8類 口縁部への撚紐圧痕と絡条体の圧痕が施されたもので、松尾村長者屋敷遺跡（岩埋文 1983）Ⅲ群2類と類似し、円筒下層d式の影響下の所産と考えられる。器形は、胴部最大径が下半部にあり口縁部がやや外反する点で本遺跡7類aに類似し、大木6式との関連性も強い。8類aイとした撚紐圧痕が幾何学的に施された土器は、口縁部形状から大木6式の方により近いと考えられる。口縁部に撚紐圧痕が施された大木6式土器は、山形県吹浦遺跡（荘内文化研究会 1955、山形県教委 1988）、県内では煤孫遺跡にもありそれらと類似するものである。しかし、原体の側面圧痕については大木7a式・円筒上層式にもみられるものであり、それに該当するものも含めている可能性がある。

第II群9類 aの櫛歯状沈線土器は、共伴関係や施文の類縁性などからは6類・7類のいずれにも位置付けることが困難だったものであるが、器形・出土地点などから大木5式または6式に併行するものと考えられる。

bの竹管文土器は、モチーフおよび施文が浅い特徴から7類とは異なるものと考えられる。大木3式の所産か。

c・dには時期の異なるものも一括している。第501図130・131は、住居跡の床面出土土器である。土器の時期を明らかにできなかったことから、住居跡の時期についても不明とした。131は地文は6類に共通するが器形は口縁部が大きく外反する点が異なる。また、130は器形・地文は6類にほぼ共通するが、口縁形状（波状の形状と口唇部への篋状工具による施文）と底部網代痕が異なった印象を与える。第501図128・129も器形・口縁形状・口唇部施文などの点で6類とはやや趣を異にする。1844・1846・1847（第374図）は円筒下層式土器である。

〈縄文時代中期の土器〉

第Ⅲ群1類 大木7 a式と一部7 b式に該当すると考えられる土器群である。隣接する上八木田V遺跡の第Ⅲ群1類に相当する。三角形彫刻文・波状沈線・横位沈線と縦位短沈線を組み合わせる特徴などは同遺跡に類似する。

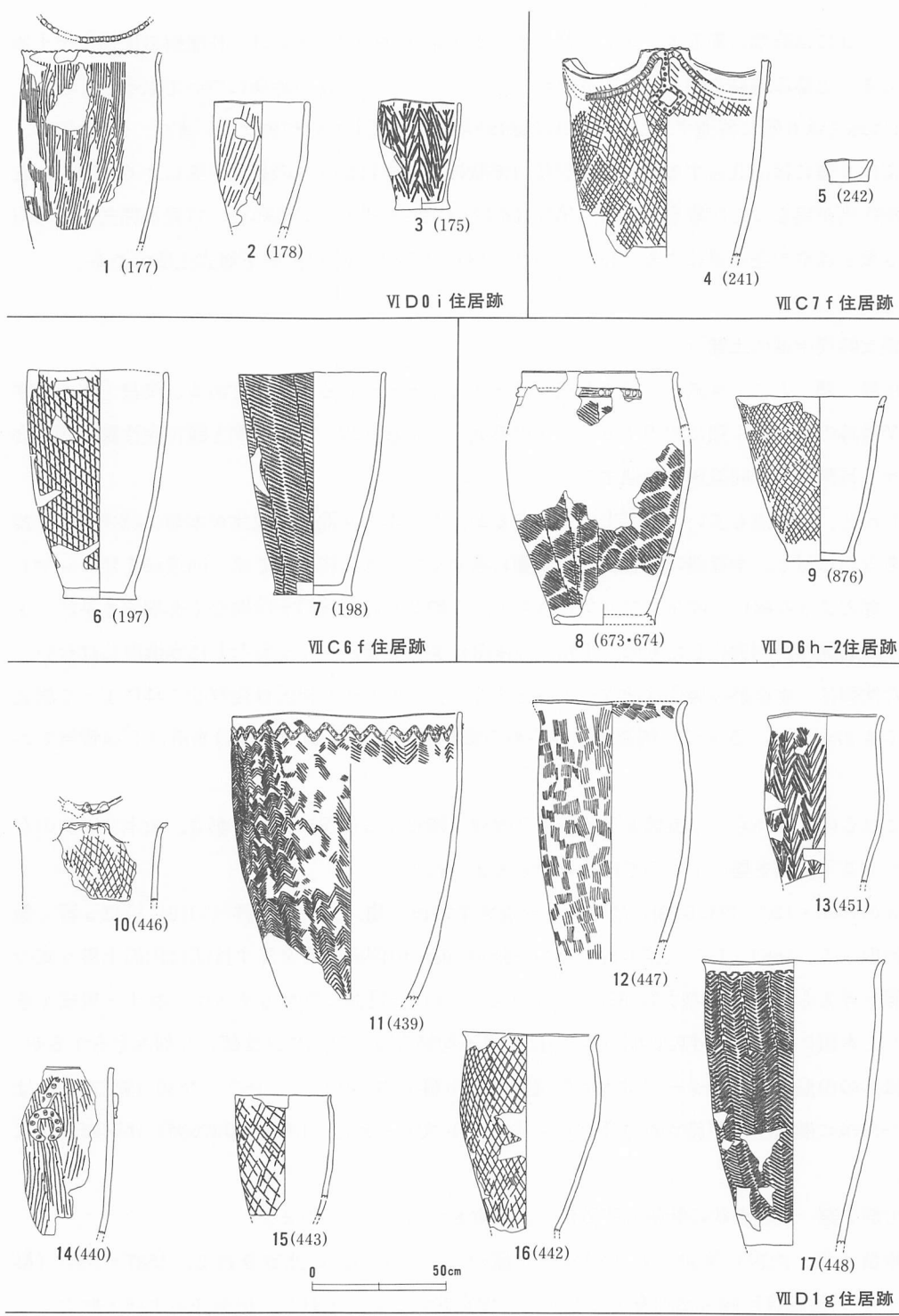
しかし、相違点も多い。まず出土量であるが、上八木田V遺跡の主体が本類に該当する土器であるのに対し、本遺跡の場合はごく少量に過ぎない。次に施文法では、同遺跡I類1 aやbの一部のような縦位に隆帯を貼り付けるもの、I類2 cの短沈線を隙間なく充填する手法、I類4の短沈線が刺突化したもの、I類5の隆帯が文様を構成する土器などは本遺跡にはない。また沈線は、本遺跡の場合は凹線を主体とするが、上八木田V遺跡は鋭利な工具によって施文するものが多い。さらに、同遺跡にみられる装飾性の高い突起や把手は本遺跡では皆無である。

これらのことから、本遺跡と上八木田V遺跡は隣接する位置にありながら、大木7 a式のなかでも若干時期を異にするのではないかと考えられる。

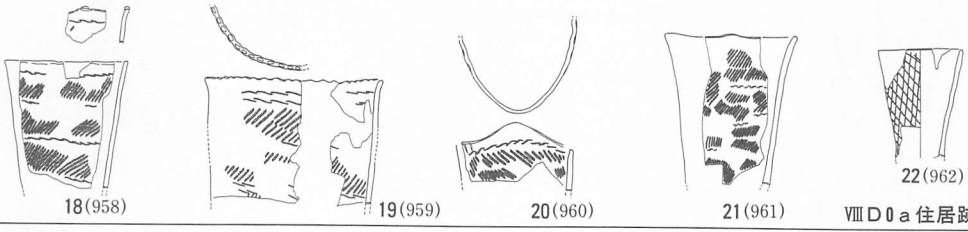
bの1506・1507（第354図）は天神ヶ丘遺跡第Ⅲ群2類、大館町遺跡（1976）第Ⅲ a群3類に類似する。1863～1867（第375図）の口縁部に縦位の側面圧痕を施す技法は円筒上層 a 式の影響と考えられる。cのうち1872～1878（第376図）は疑問な部分もあるが、胎土・焼成を考慮して本類に入れた。dの1508（第354図）は不均整な波状口縁で口唇部にも刻みを有するが、口縁部の山形の沈線モチーフは大館町遺跡第Ⅲ b群5類に通じる。1879・1880（第376図）は複合口縁に側面圧痕が施される手法から大木7 b式と考えた。1882（第376図）は円筒上層式か。

第Ⅲ群2類 渦巻き状の隆帯の特徴から、大木8 b式に比定される。

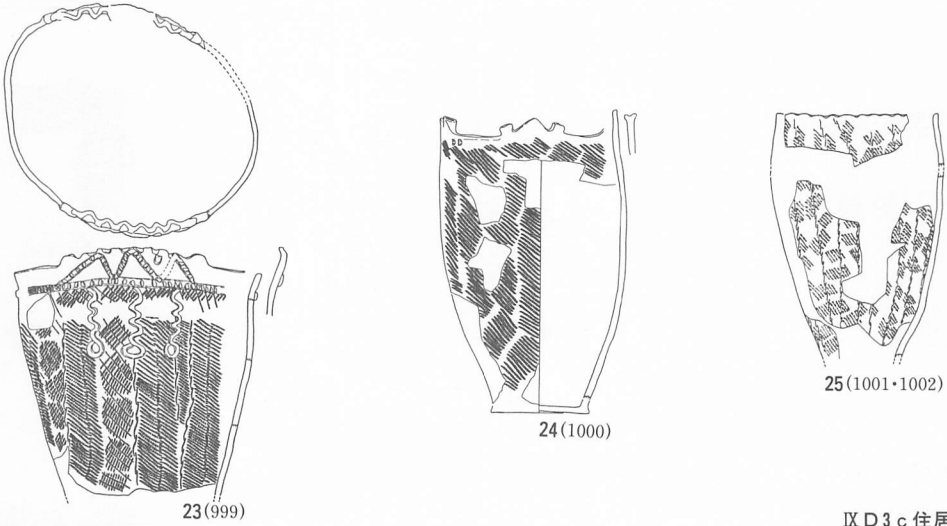
第Ⅲ群3類 沈線に区画された曲線的な文様から、大木10式に比定される。1887・1888（第377図）の沈線は区画の意味をもたないが、便宜的にここに入れた。撚糸文の手法・胎土などからは同時期と思われる。



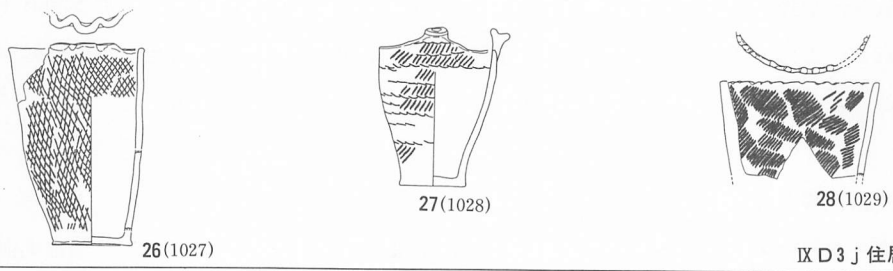
第494図 遺構内共伴土器(1)



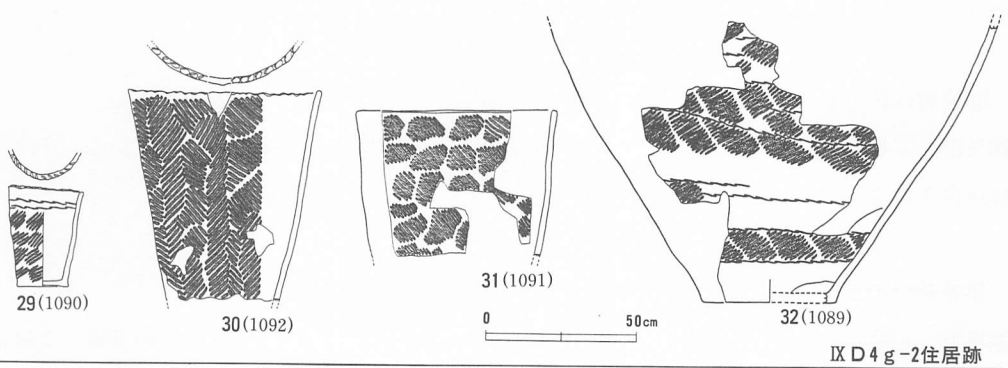
VIII D 0 a 住居跡



IX D 3 c 住居跡



IX D 3 j 住居跡



IX D 4 g-2 住居跡

第495図 遺構内共伴土器(2)



第496図 遺構内共伴土器(3)

<縄文時代後期の土器>

第Ⅳ群 1類は比定できる型式はないが、大木10式に後続する土器である。2類は、平行沈線の特徴から十腰内Ⅰ式に比定される。3類は、器形・沈線・刺突の特徴から加曾利B1式に比定される。この土器は、近接する上八木田Ⅲ第Ⅳ群1類の刺突を有する土器に類似し、口縁形状からそれに後続するものと考えられる。

<縄文時代晩期の土器>

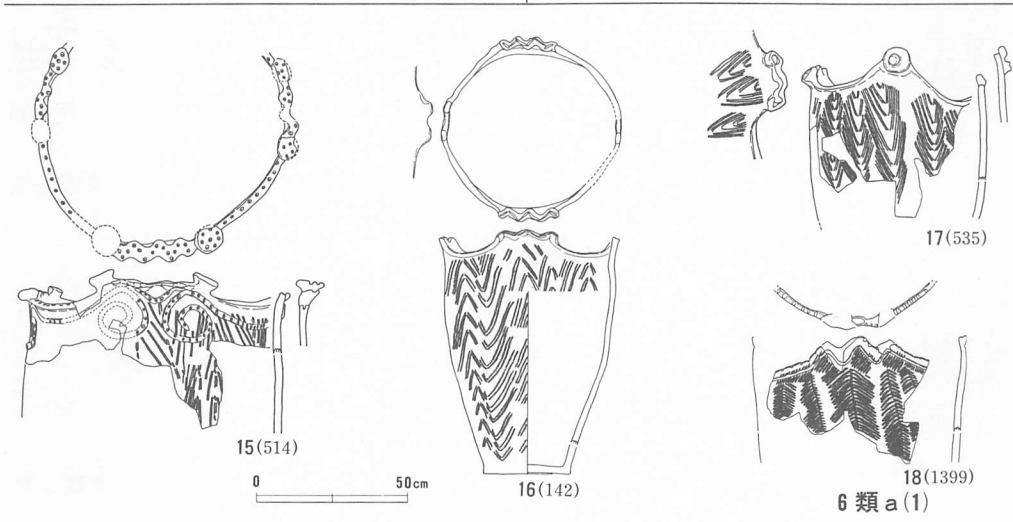
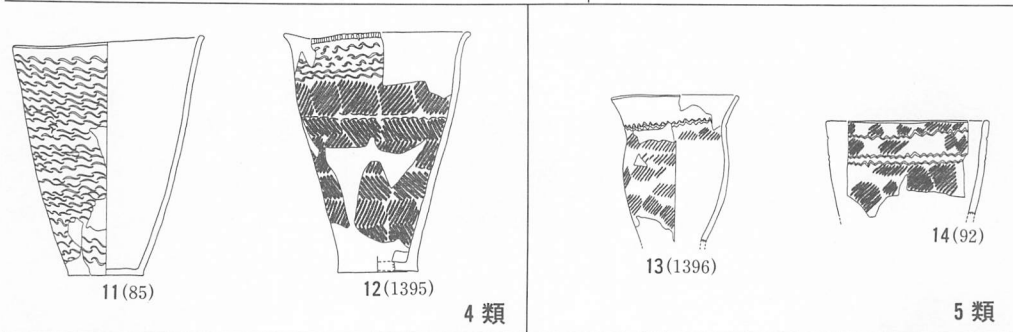
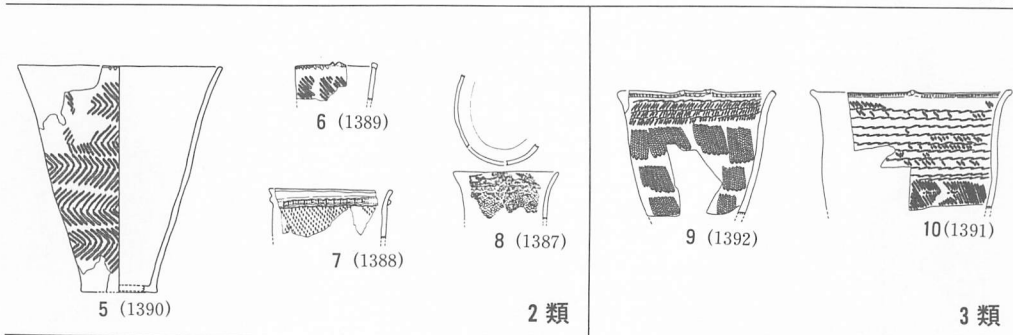
第Ⅴ群 1類は入組文の特徴から大洞B1式、2類は大洞B2からBC式、3類は大洞C2式にそれぞれ比定される。

<弥生時代の土器>

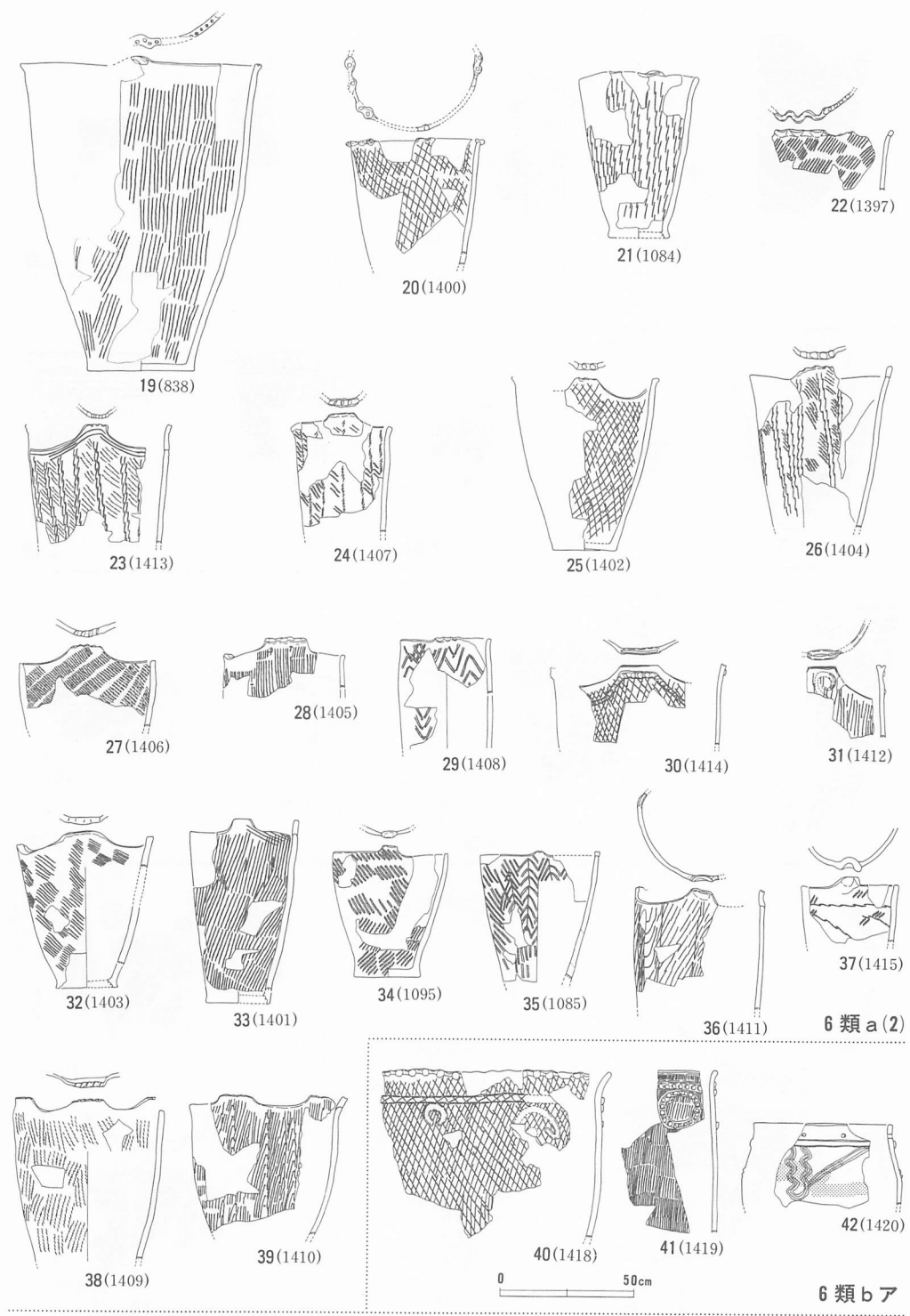
第Ⅵ群 不整捺糸文・集合沈線・交互刺突およびそれに類似する刺突などの特徴から、赤穴式に比定される。

<平安時代の土器>

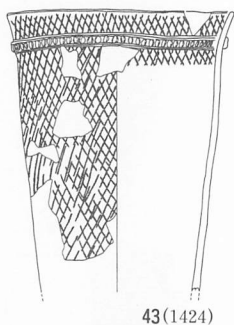
第Ⅶ群 相原編年(相原康二 1981)の第Ⅷ群、高橋編年(高橋信雄 1982)の第Ⅲ-2群に相当し、平安時代前半期の土器と考えられる。



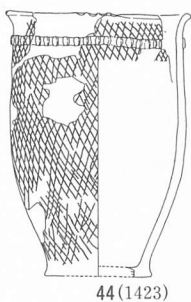
第497図 第II群土器集成図(1)



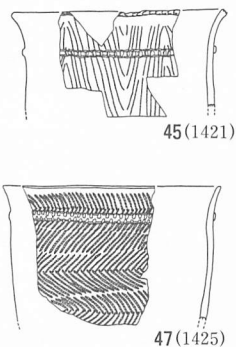
第498図 第II群土器集成図(2)



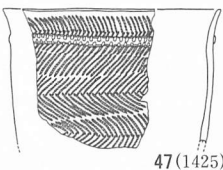
43(1424)



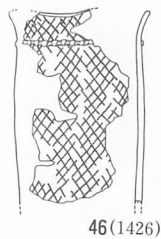
44(1423)



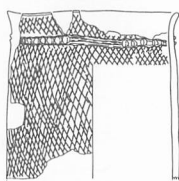
45(1421)



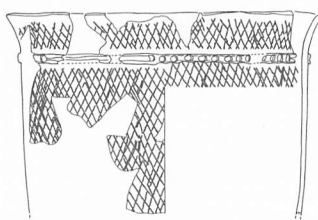
47(1425)



46(1426)



48(1426)

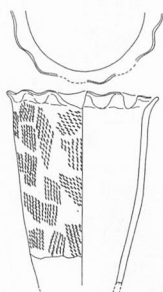


49(1427)



50(1429)

6類 bイ



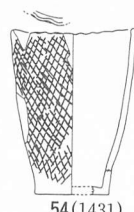
51(208)



52(437)



53(776)

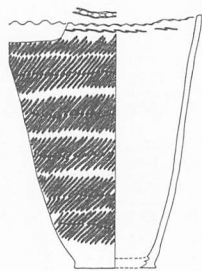


54(1431)



55(1430)

6類 bエ



56(1208)



57(904)

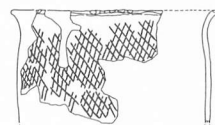
6類 bウ



58(776)



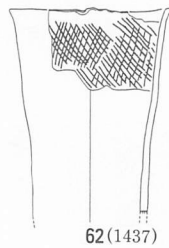
59(1438)



60(1375)



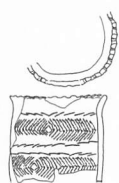
61(1439)



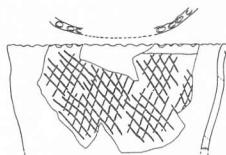
62(1437)



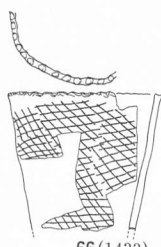
63(1435)



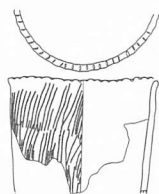
64(1032)



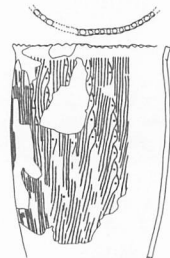
65(1432)



66(1433)



67(1434)

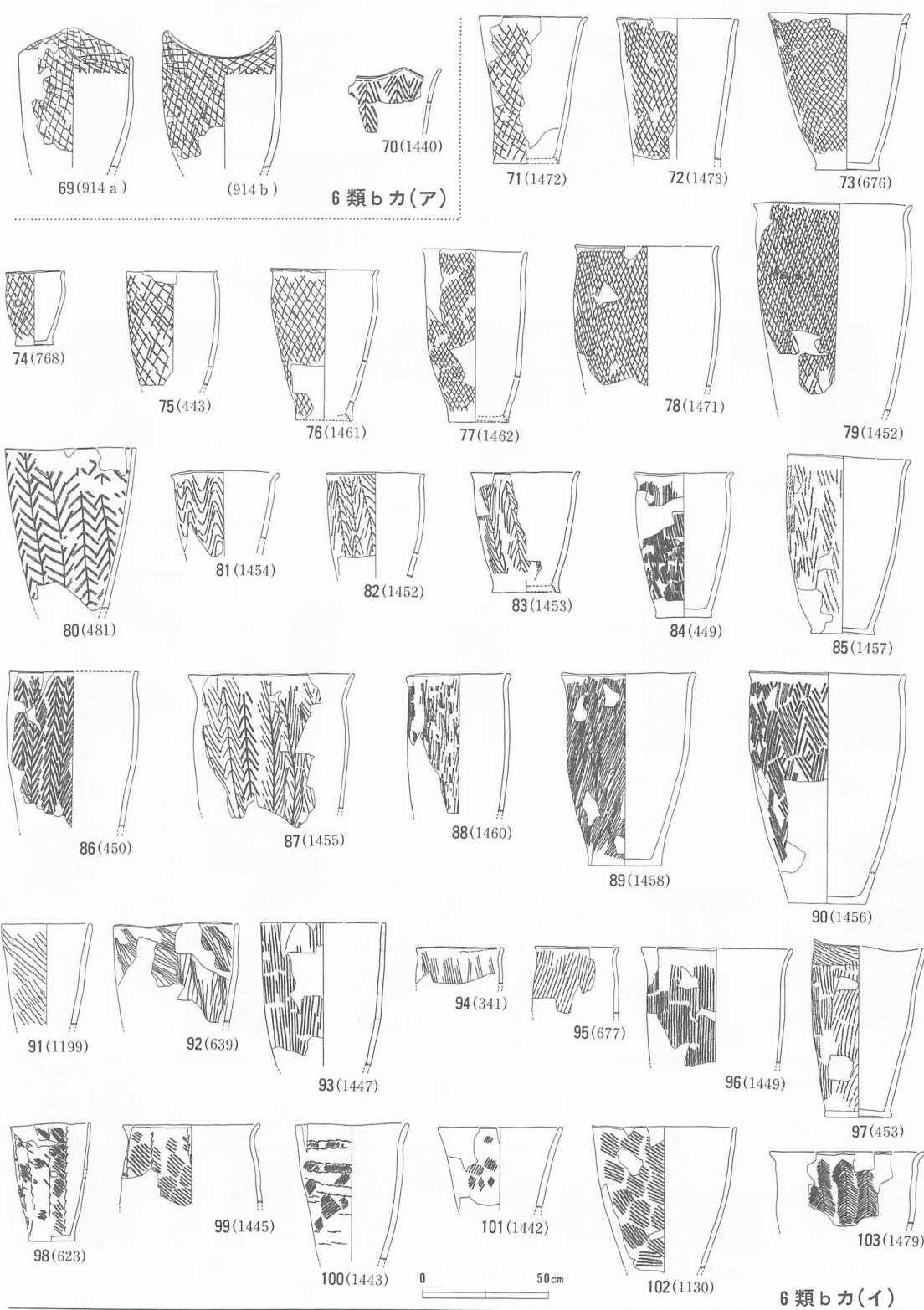


68(177)

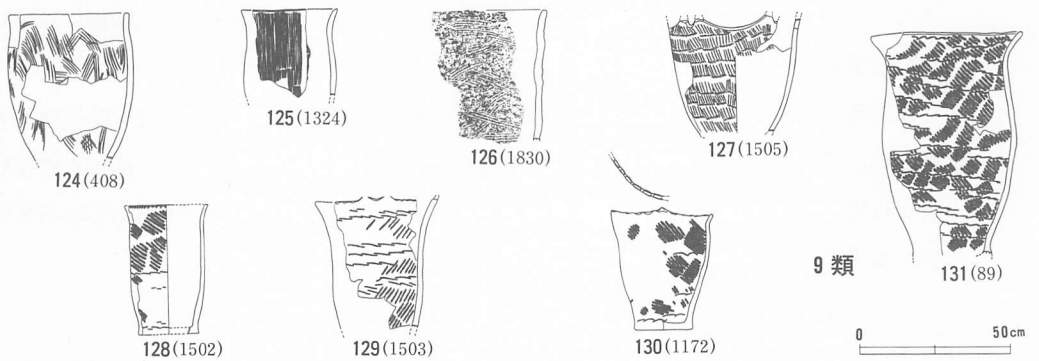
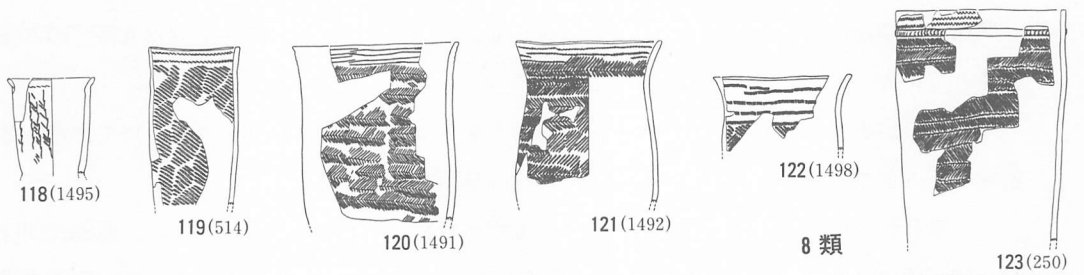
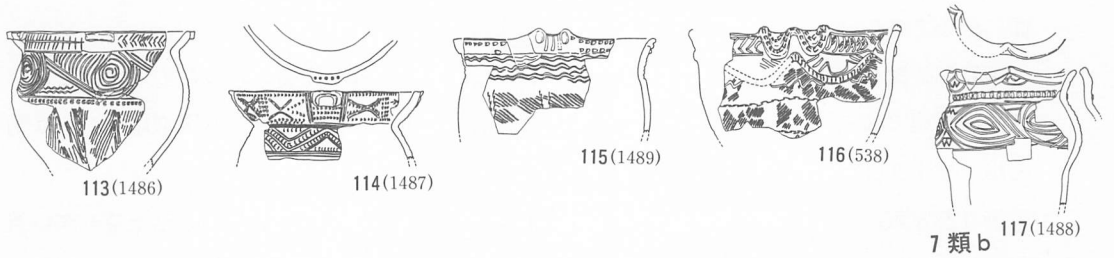
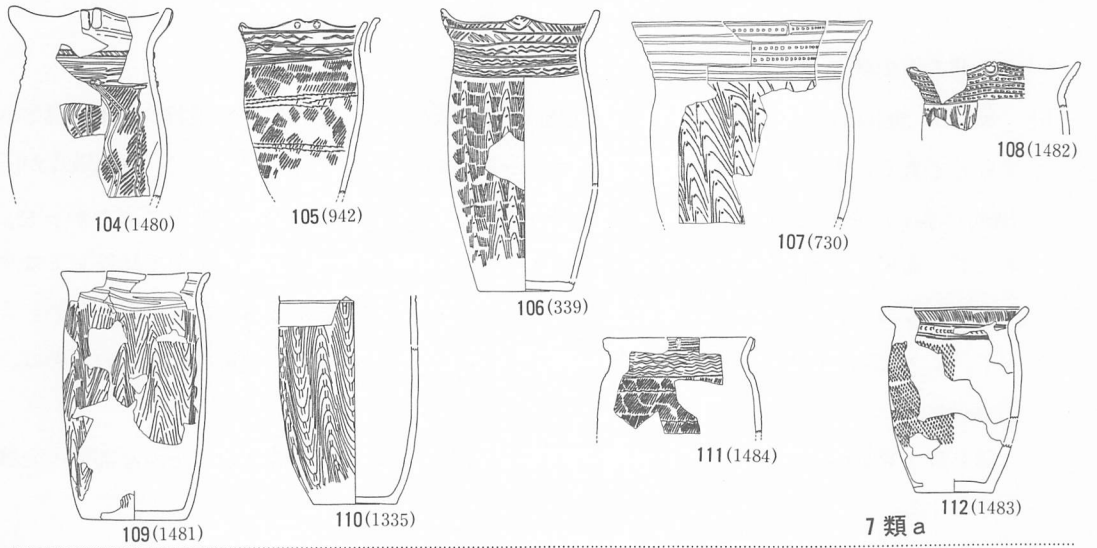
6類 bオ



第499図 第II群土器集成図(3)



第500図 第II群土器集成図(4)



第501図 第II群土器集成図(5)

<土器の出土状況>

第502・503図は、復元し実測した土器を除いた遺構外出土土器破片の分類別の分布状況を示すものである。本来は、可能な限り個体数が反映されることが望ましい訳だが、胴部破片が圧倒的に多く、それらが同一個体か否かの判断を逐一行うことは整理の進行上できなかった。そこで、先ず口縁部破片のみを抽出し、そのうち同一個体と思われるものを全て除外してカウントしたものである。明らかに別個体であっても、胴部破片や底部破片は含まれていない。よって、ここに示された点数は、出土個体数の最小値を表すものとして理解されるものである。個別に見る。

第II群1類aの組縄縄文とそれに類似する土器は、尾根の鞍部を除き麓の平坦な部分の全域に分布する。

第II群6類はA区からの出土はない。B区西尾根の鞍部にも分布域が拡大し、特にその西斜面に分布する。

第II群7類(一部は第III群1類も含む)は、容易に区別できない場合があったので一括した。B区西尾根の鞍部とその斜面に厚いが、特に西斜面に集中的に分布する。B区東尾根からは殆ど出土せずA区は皆無である。

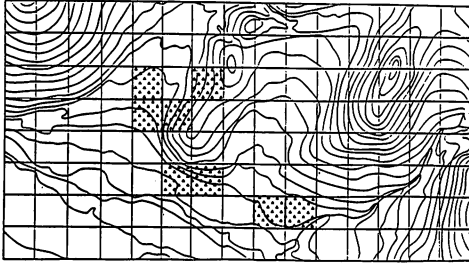
第II群8類は、ほぼ第II群7類と分布域が重複する。特にB区西斜面からの出土量が多い点が着目される。




第III群3類はほぼA区に限定されると言ってもいいだろう。同時期の住居跡はA区でのみ検出されている。

これらの出土状況は、住居跡の存在・土器捨て場・土壌匍行等との関わりにおいて厳密に分析されるべきではあるが、おおまかに言って次の事柄を推定させる。

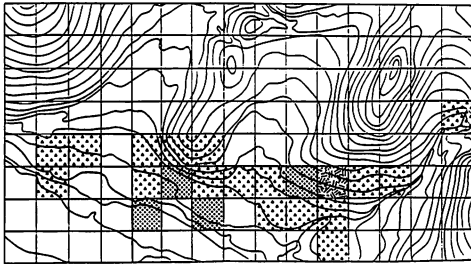
- ・ 第II群6類から8類にいたるまで、西尾根西斜面の出土量が際立って多い。遺構は同区域が稀薄であったことを考えれば、同区域が大木5式から6式期に至るまでの土器捨て場として活用されたと把握することが妥当であろう。ただし出土状況は、急斜面のためか層位的に分離することはできず渾然としていた。
- ・ 第II群7類と第II群8類の分布域の重複は、それらが互いに時期的に併行関係にあるかあるいは近接することを想定させる。本遺跡では、遺構内での確実な共伴関係や層位的裏付けは確認できなかったが、大木6式と円筒下層d式との併行関係を消極的ではあるが支持する出土状況と言える。

〈第1群〉貝殻文

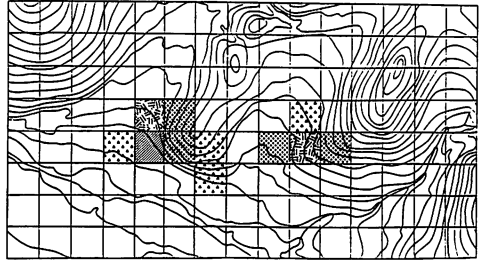


-  1～5点
-  6～10点
-  11～20点
-  21点以上

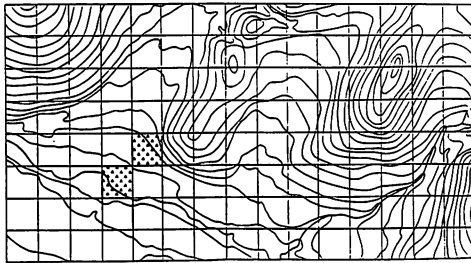
〈第II群1類a〉組繩縄文



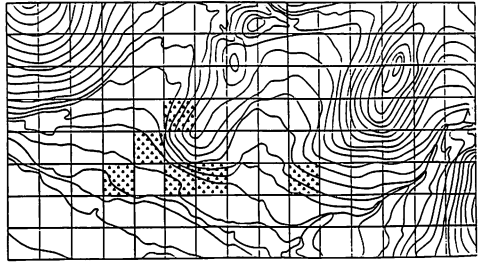
〈第II群3類〉重層する横位綾絡文



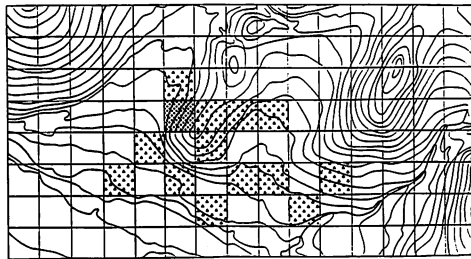
〈第II群4類〉S字状連鎖沈文



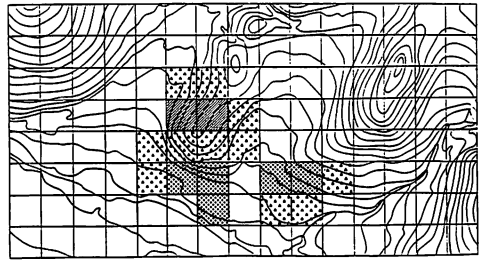
〈第II群5類〉鋸齒状沈線



〈第II群6類a-ア〉鋸齒状飾体

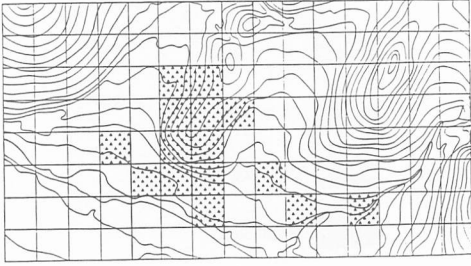


〈第II群6類a-イ・ウ〉弁状突起・円形突起他

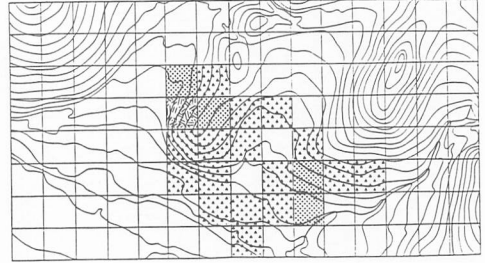


第502図 土器出土状況(1)

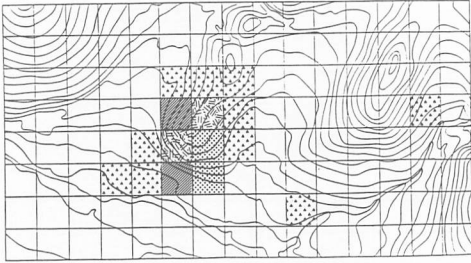
〈第II群6類b-ア〉 鋸齒状隆帯・曲線の隆帯



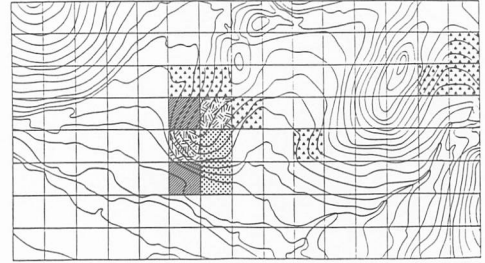
〈第II群6類b-エ〉 花卉状口縁



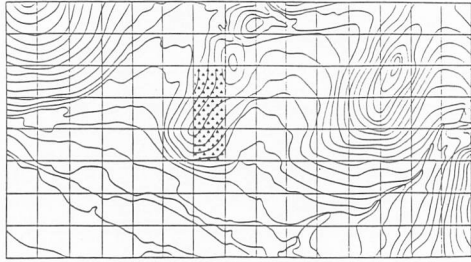
〈第II群7類・第III群1類〉 竹管文



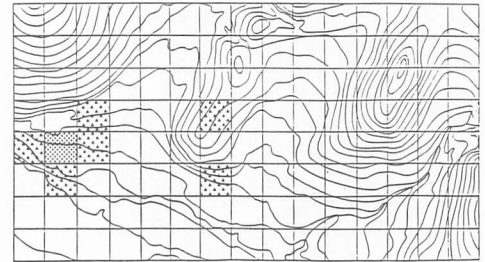
〈第II群8類〉 側面圧痕



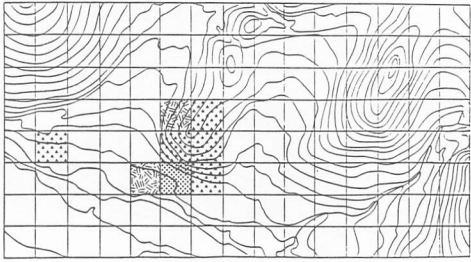
〈第III群2類〉 縄文中期中葉



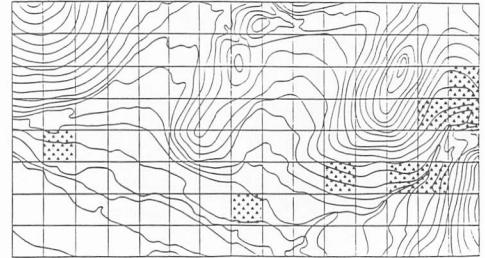
〈第III群3類〉 縄文中期末葉



〈第IV群・V群〉 縄文後・晩期



〈第VI群〉 弥生



第503図 土器出土状況(2)

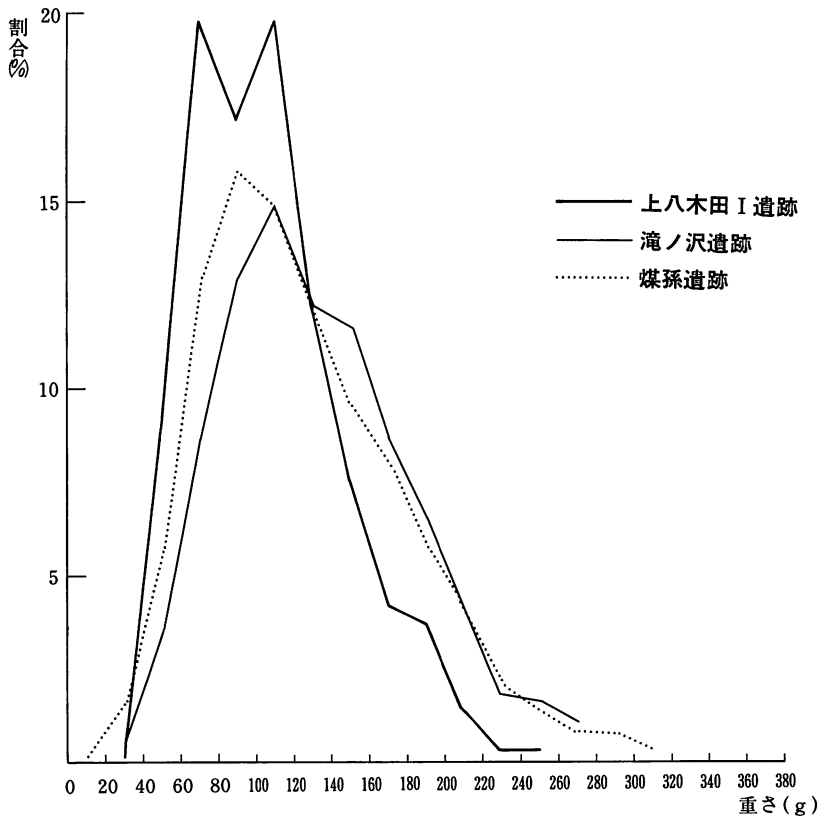
(2) 石器

出土量・石材・計測値・分類等について、割合や分布・傾向のまとめは、既に個々の器種の説明で行っているのので、ここでは本遺跡で大きな出土割合を示している石錘と敲磨器類A群、および全体的な石器組成割合について取り上げることとする。

ア、石錘

本遺跡で出土した石錘は353点である。本遺跡と時期的に近似する遺跡で、多量の出土を見た遺跡との統計的な比較を試みた。比較対象遺跡は、北上市滝ノ沢遺跡(2599点出土)、北上市煤孫遺跡(2393点)である。重量の分布を、全体に占める百分率で表した(第504図)。3遺跡とも60~160gが主体をなしほぼ同様の分布を示すが、本遺跡の場合若干軽い方に寄っていること、分布集中度が高いことが特徴と言えよう。

次に長軸方向に打ち欠きのある長軸型と、その逆の短軸型の出土点数をしてみる。いずれにもふくまれないものは除外した。煤孫遺跡の場合はその形状分類においてa・b・e~gを長



第504図 石錘重量分布割合

軸型、h・iを短軸型とした。上八木田I遺跡の場合は長軸型204点(58%)・短軸型114点(32%)、滝ノ沢遺跡は長軸型1218点(47%)・短軸型905点(35%)、煤孫遺跡は長軸型1685点(70%)・短軸型266点(11%)と、3遺跡とも長軸型が多い点は同様であるが、全体に占める割合は、煤孫遺跡において長軸型が際立って高く、本遺跡と滝ノ沢遺跡の差異は相対的に小さい。

また長軸型と短軸型の重量分布では、本遺跡と滝ノ沢遺跡の場合、長軸型に比べ短軸型の方が10～20g程度小さい値の方に偏る傾向がうかがえる。

さて、藤村氏は東北地方の58遺跡の石錘を集成して検討を加えている(藤村東男 198)。それによると、重量は60～200gにピークがあることを指摘しているが、前掲3遺跡ともその指摘に合致する。また、長軸型と短軸型では時期差・地域差・重量差が認められないという。縄文前期後葉から中期初頭までの範囲にある3遺跡では、長軸型が数的に卓越する傾向が見られ、本遺跡と滝ノ沢遺跡においては短軸型が長軸型に比べやや軽量である傾向を示した。しかし、限られた資料でありなお検討する必要があるであろう。石錘の用途については漁網用の錘・編物製作用の錘などが考えられているが、同氏は編物製作用の錘と考えることの方がふさわしいとしている。ここでは用途にふれることはできないが、同氏が指摘するように一遺跡当たりの出土点数が大きく偏る点が、本遺跡と他遺跡との比較においても問題として浮かび上がる。例えば、盛岡市大館町遺跡(1978)で3点、雫石町塩ヶ森I遺跡(岩埋文1982)で175点出土しているが、水沢市中島遺跡・一関市庄司合遺跡・陸前高田市太陽台遺跡・同市牧田貝塚・大船渡市清水貝塚ではいずれも出土していない。近似する時期の遺跡のこのような端的な相違は、調査面積・調査地点・遺跡の性格などとともに、地形・環境・生業などの面からも総合的に分析する余地があると思われるが、問題点の指摘にとどめておく。

イ、敲磨器類A群

本遺跡で敲磨器類A群としたものは、従来「特殊磨石」・「棒状擦石」等と呼ばれてきたものと、「半円状偏平打製石器」・「横刃型石斧」等と呼ばれてきたものの両者を含んでいる。機能的に重複する部分を有すること、形態的に両者の中間形があつて容易に分離できなかったことから、一括して扱ったものであるが、それは同時に、それらの分類や集計分析から機能を究明する手掛かりが得られるのではないかという想定にも基づくものでもあつた。

断面形によってI類(三角形)・II類(楕円形)・III類(偏平)に分類したが、それぞれの傾向から次のような事柄を推定できる。

機能面(磨面)の形状では、磨面が顕著なものをa、剝離が顕著で磨面が不定形なものをb、磨面がなく剝離のみで明瞭な稜(刃部)を有するものをcとした。I類にはb・cタイプのも

のはごく僅かである事を考えると、本類にはその稜を鋭角に尖らせる必要がなく、通常の河原石に見られる程度の稜があれば事足りたものであろう。とすれば、磨面の周囲に観察される小剥離は使用時の敲打痕と考えるのが妥当であろう。Ⅲ類にcタイプが相当数あることは、鋭利な稜(刃部)が求められた結果と考えられる。そのことは「切る」という用途を想定させる。bタイプは、cタイプの刃部を用いて「磨る」という行為によって形成されたものであろう。aタイプは、磨面の周辺に小剥離が観察され、現象面としてはⅠ類のそれと大きな相違はないが、bタイプを更に「磨る」行為に用いた結果と考えら、形成過程は大きく異なるものではないかと思われる。また、擦痕は長軸方向に走っていると観察される。

周縁加工の観点からは、Ⅰ類には機能面以外に全体に加工された痕跡はほとんどない。端部に剥離を伴うものもあるが一般的ではないことを考えれば、機能として必要とされたものではなく、偶然的なものと考えることができよう。一方、Ⅲ類は機能面以外に加工されているものの方が多い。それは端部の場合もあり(時にそれは抉りにも至る)、機能面の対辺の場合もあり、また全周に及ぶものもある。このことは、Ⅰ類は素材とした自然石の形状をそのまま利用することで十分であったこと、Ⅲ類は偏平な素材を選択したことの他に、一定の平面形状を必要としたことを表すものであろう。

磨面の幅が、Ⅰ類は0.6~2.6cm程度、Ⅲ類は0.4~1.4cm程度が多く、一部重複する範囲はあるものの分布域を異にすることは、「磨る」対象物あるいは用いる工程場面が相違する事を示すものであろう。磨面幅の最大値が、「磨る」道具としての役割を終える段階の数値を示すものという仮定に立てば、Ⅰ類は4.2cmに対してⅢ類は2.6cmであることは、用途の相違を想定させるものである。

重量では、Ⅰ類が500~1000g、Ⅲ類が300~500gに多く分布したが、この分布域の相違も、機能・用途の相違を反映するものとみることができよう。

推定の上に推定を重ねた結果ではあるが、これらのことからⅠ類とⅢ類は、機能または用途との関わりにおいて次のようにまとめることができる。

Ⅰ類は主に、断面形が三角形を基本とする形状の自然石の稜を使って、500~1000gの重さを利用して「磨る・敲く」行為に用いられた。対象物とは幅0.6~2.6cm程度で接することが多く、長軸方向に動かしたものである。

Ⅲ類は主に、偏平な自然石を選択した後に平面形を整え、鋭利な稜(刃部)をつけ、「切る・磨る」行為に用いられた。鋭利な稜(刃部)は「切る・磨る」行為によって磨耗し、磨面の方が顕著になるとその役割を終える。

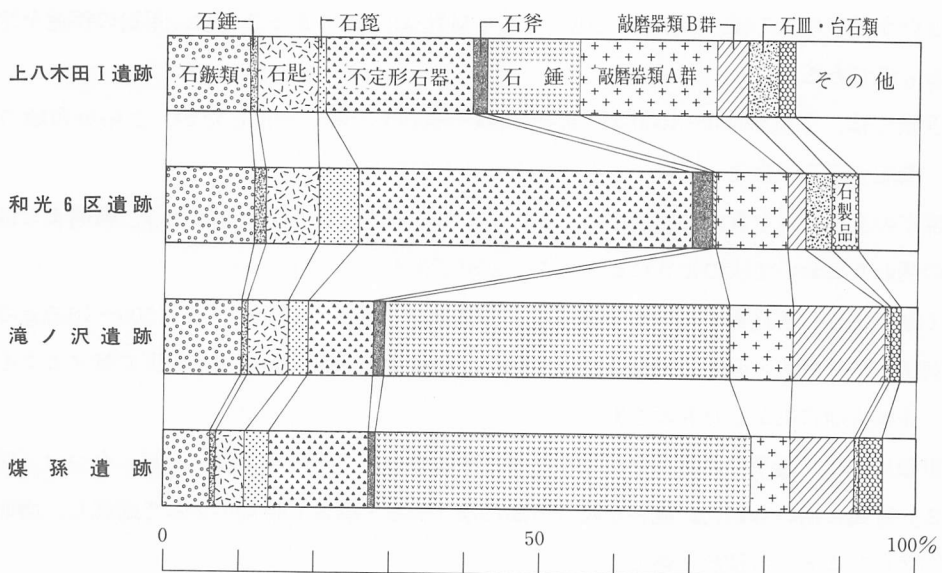
以上のような推定に立脚すると、Ⅰ類の典型は本遺跡の分類ではⅠ類a1に求められ、Ⅲ類a・b・cは道具としての使用の経過を表現するものといえよう。さて、通常の名称では、Ⅰ

類 a 1 はいわゆる「特殊磨石」であり、Ⅲ類はいわゆる「半円状偏平打製石器」ということができる。その中間形はⅠ類 b と c およびⅡ類である。これらの存在は、この「特殊磨石」と「半円状偏平打製石器」が用途としてオーバーラップしている部分があること、および道具としての形状や重量などの許容範囲を示しているといえないだろうか。

ウ、器種構成割合

本遺跡と時期的に近似する、和光 6 区遺跡・滝ノ沢遺跡・煤孫遺跡の 3 遺跡と器種構成の割合を比較し、本遺跡の特徴を浮かび上がらせたい。調査面積や調査地点および遺跡の性格がそれぞれ異なり、またサンプリング エラーやどんなものまでを石器として認知したかによっても構成比は変わってくるものであり、単純に同一視することはできないことはもちろんである。ここではそれらをすべて捨象してある。若干器種名や分類方法が異なるが、各遺跡が共通化できるように同類と思われるものを、可能な限り本遺跡の名称に合わせてカウントした。

それによると、石鏃類（尖頭器類を含む）・石錐・石匙・石筥・石斧（打製と磨製を含む）については本遺跡と 3 遺跡の構成比にそれ程大きな相違はない。特徴的なのは、和光 6 区については不定形石器が極端に大きな割合を占めることである。このなかには、本遺跡・滝ノ沢遺跡でリタッチドフレークとしたものも一部含まれてはいるが、それを除いたとしても傾向は変わらないだろう。また、滝ノ沢・煤孫の両遺跡では石錘がとくに大きな割合を占めている。本



第505図 石器の器種構成割合

遺跡の場合、それらの遺跡のように極端な構成割合を示すものはない。敲磨器類A群（横長または扁平な礫を用いたもの）とB群（円または楕円形の礫を用いたもの）の割合では、本遺跡の場合前者が後者より大きく上回っている。これは和光6区では同様の傾向を示すが、滝ノ沢・煤孫遺跡では逆転していてB群の方が多くなっている。これを時期差あるいは地域差とみることには4遺跡の比較では不可能であり、なお類例の検討が必要である。

さて、本遺跡は集落を面的に調査したものであり、その組成はサンプリングエラーと時期の問題はあるものの、縄文前期後葉から末葉を主体とする本遺跡の集落が保有した石器の組成をある程度反映しているものと思われる。本遺跡の場合、他の3遺跡と比較して顕著に偏った割合を示す器種がないこと、そのなかでは不定形石器・石錘・敲磨器類A群が比較的多いこと、石製品がやや少なめであることなど特徴として指摘できる。これは、地理的な環境や時代性に規制された当時の生業と精神生活を反映するものであると思われる。

4. 上八木田遺跡群について

上八木田遺跡群の名称は、本遺跡とII～V遺跡の総称として用いている。本遺跡群は巨視的には北上山地の西縁、盛岡低地との境界部に位置する。同低地までは直線距離で5 kmほどであるが、現在でこそ道路網の整備により交通の利便性は高まっているものの、架橋・隧道がありなお急勾配の箇所もある。また、現地からの眺望は群立する山体によって遮断され、位置によってかろうじて岩手山の山頂部を遠望することが可能であるという程度であり、基本的には本遺跡群は山間に位置するということができる。盛岡周辺において北上山地西部山間地に位置する遺跡の調査が、これほど広範囲に亘って実施される例はこれまでになく、その意味では空白地帯であったと言っても過言ではない。

本遺跡群の発掘調査に当たっては約70,000 m²を念頭に入れて試掘調査が行われ、その結果約42,500 m²が本調査の対象面積とされた。これは、集落全体を丸ごと掘り起こすことにもなり、また近接して点在する遺跡同士の関係も把握できる可能性を内包していた。調査結果は、当初から予想された通りあるいはそれ以上に、多くの遺構・遺物が検出・発見された。ここでは、遺跡同士の関係や遺跡群としての集落構成などにまでは言及できないが、時期毎にI～V遺跡全体の調査結果を概括したい。

本遺跡群内で人類の生活の痕跡をみることは、縄文時代早期からである。上八木田I・II遺跡において寺の沢式または吹切沢式類似、I・II・V遺跡において物見台式系統、V遺跡において早稲田3類式併行の土器が出土している。物見台式系統の土器は、II遺跡でほぼ器形のわかるものが出土しているが、3遺跡とも胎土・焼成などがほぼ等しく、同一時期とみてよいものである。しかし、早期の遺構はいずれにおいても確認されておらず、遺物量も多く

はない。

前期になると、I遺跡において集落が営まれる。時期によってやや疎密はあるものの、全体としては継続的・高密度と言ってよい。一部中期初頭の遺構も含めると148棟を数え、中心的集落であったと言える。2つの尾根の南斜面を主体に、一部は鞍部・東西斜面をも占地する。それらは重複が著しく、建替えが繰り返されたことが分かる。また、いわゆる「大形住居」も構築される。I遺跡でそのような大集落が形成されていた時期において、II遺跡では前期後葉の土器が散見する程度である。V遺跡では繊維土器・大木6式・円筒下層d式の土器が少量出土した他に、前期末葉から中期初頭に属する住居が2棟存在する。1棟は平面形が円形で石囲炉を有するものであり、I遺跡の石囲炉を有する2棟の住居と、規模・形状に大きな相違はない。もう1棟もほぼ円形を呈するものである。後葉まではI遺跡に止どまっていた集落が、V遺跡に進出していったことが分かる。

中期には、V遺跡において大木7a式期の土器が多く出土する。I遺跡からも出土するが絶対量において比較にならない。前期末葉から中期初頭に属する住居中葉では大木8b式の土器がI遺跡とV遺跡でごく少量出土しているのみである。円筒式土器は、II遺跡で上層a式・c式に相当するものが若干出土している。他には遺跡群内において円筒式土器の出土は殆ど見られない。末葉になると、I遺跡に同規格の住居が5棟、詳細不明な1棟を加え計6棟が構築される。これらは同時存在とは考えにくく、とすれば該期の集落としては小規模のものと言えよう。IV・V遺跡でも土器は出土しているが、遺構は確認されていない。

後期の住居としては、III遺跡で中葉のもの、V遺跡で後葉のものが各1棟検出されているのみである。孤立的な存在と言うべきか。土器はそれらの遺跡において比較的多く、しかも前葉から後葉まで通じて出土している。I・IV遺跡からも出土はしているが、ごく微量である。

晩期は、前葉の住居がI・V遺跡において各1棟、中葉の炉がI遺跡で1基確認されている。いずれも石囲炉で、V遺跡の場合はさらに土器を埋設させており3回の作り替えが行われている。同住居の近隣には前葉の土坑が2基検出されている。土器は、初頭のもものがI遺跡、前葉のもものがI・V遺跡、中葉のもものがI～V遺跡、後葉のもものがV遺跡で出土している。量的にはV遺跡が最も多く、三叉文・羊歯状文・歯列状文などがその主体を占め、それらは遺構の周囲からの出土である。集落としては、晩期においても後期同様に1棟が単独で営まれた可能性が高い。

弥生時代のものとしては、土器がI・III・V遺跡で出土している。いずれも後葉のもものが卓越する。III・V遺跡には器形のわかる好資料があるが、遺構は確認されなかった。

古代の遺構としては、平安時代の住居跡と焼土遺構が検出されている。住居跡はI遺跡4棟、II遺跡2棟・III遺跡1棟・IV遺跡4棟・V遺跡1棟である。IV遺跡の4棟については同時存在

はないとされている。I遺跡においては同時存在か否か明らかではないが、2棟ずつ離れた位置にある。これらのことから少なくとも、「平安時代には1棟ないし2棟の家が山間に点在していた」という先の報告の指摘(平井進 1992)は、遺跡群全体においても確認することができる。これらの住居は、沢筋の小支谷に面した斜面を積極的に用いる。煙出し方向は斜面上方とすることが多く、全体に方位よりも地形に規制されている。平安時代の集落のあり方として丘陵地に散在的に進出する例として「離れ国分」などの名称が類型的に用いられることもあった。それに対し、それらが単独的・孤立的な存在ではなく「数軒程度が散在して山村を形成し」、山地住居出現は「奈良時代後半からの陸田雑穀栽培奨励の強化・促進という過程で具体化したもの」とする説(伊藤玄三他 1986)が唱えられている。本遺跡群においては畑地など生業に関わる資料は得られず、成因にまでは立ち入ることはできないが、遺構配置は、山村に散在する集落とする前説を支持する。

次に陥し穴についてみる。いわゆる溝状の陥し穴は、I遺跡2基・II遺跡1基・IV遺跡3基・V遺跡3基がそれぞれ検出されている。このタイプの陥し穴は中期末から後期に属するとされる(田村壮一 1987)が、本遺跡群の中では遺構の稀薄な時期である。I遺跡の大木10時期の集落との関連を考えるとできるかも知れない。また、開口部が楕円形または長方形を呈するものは、I遺跡4基・II遺跡4基である。田村氏の前掲論文ではB1型に当たるもので、氏は縄文時代晩期中葉から平安時代前期を想定している。該当する時期の住居跡は、I遺跡の晩期中葉の1棟(炉跡)とI～V遺跡の平安時代に属する12棟である。II遺跡では、陥し穴と住居が近接しており、これが同時に機能していたとは考えにくい。他遺跡の平安時代の住居との関連はあり得る。田村氏のC型に類似する陥し穴はI遺跡で3基検出されているが、氏は縄文時代前期初頭以前としている。該当する時期の遺構はI遺跡にのみ存在することから、I遺跡内での場の使い分けを考えるのが妥当であろう。

以上、時期を追って遺跡群としてのその内容の変遷を概観してきた。これらの時期毎のそれぞれの様相が、いかなる条件に規制された結果として表れたものであるのか、また他遺跡との関連など究明すべき課題は大きく、住居論・集落論の深化に好資料を提供することができたと考える。

引用・参考文献

記載にあたっては、教育委員会は「教委」、文化財愛護協会は「文愛協」、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは「岩埋文」、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書は「岩埋文報」とそれぞれ略すこととする。

- 相原 康二 (1981) : 岩手県南部における古代の土器群編年試案 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅹ」
- 秋田県教委 (1988) : 上ノ山Ⅱ遺跡 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ」 秋田県文化財調査報告書第 166集
- 一関市教委 (1977) : 「岩手県一関市厳美町庄司合遺跡発掘調査概要(第二次調査)」 一関市文化財調査報告書第10集
- 伊藤玄三他 (1986) : 第Ⅳ章 考察 「法政大学多摩校地遺跡群Ⅱ-G地区-」
- 稲野 彰子 (1991) : 大木式土器にみられる球胴形深鉢について-文様の多系統性に注目して- 「北上市立博物館研究報告第8号」
- 岩文愛協 (1976) : 「大船渡市清水貝塚発掘調査概報」
- 岩手県教委 (1982) : 江釣子村鳩岡崎遺跡 遺物・要約・分析鑑定結果編 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩV-2」 岩手県文化財調査報告書第70集
- 岩手県立博物館 (1982) : 「岩手の土器-県内出土資料の集成-」
- 岩埋文 (1982) : 塩ヶ森Ⅰ遺跡 「雫石町塩ヶ森Ⅰ遺跡・塩ヶ森Ⅰ遺跡発掘調査報告書」 岩埋文報第31集
- 岩埋文 (1983) : 「松尾村長者屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 岩埋文報第77集
- 岩埋文 (1987) : 「和光6区遺跡発掘調査報告書」 岩埋文報第 114集
- 岩埋文 (1992) : 「上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書」 岩埋文報第 177集
- 岩埋文 (1993) : 「上八木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩埋文報第 194集
- 岩埋文 (1993) : 「煤孫遺跡発掘調査報告書」 岩埋文報 第196集
- 大迫町教委 (1974) : 「岩手県稗貫郡大迫町天神ヶ丘遺跡」
- 岡村 道雄 (1979) : 縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例-その1- 「東北歴史資料館研究紀要 No.5」
- 加藤 孝 (1951) : 宮城県上川名貝塚の研究 「宮城女子学院研究論文集1」
- 加藤 孝 (1956) : 宮城県登米郡新田村糠塚貝塚について 「地域社会研究会資料7」
- 金ヶ崎町教委 (1973) : 「胆沢郡金ヶ崎町千貫石・長根前遺跡」

- 北上市教委 (1983) : 「滝ノ沢遺跡」北上市文化財調査報告第33集
- 興野 義一 (1968) : 大木式土器理解のために (II) 「考古学ジャーナル No16」
- 興野 義一 (1969) : 大木式土器理解のために (V) 「考古学ジャーナル No32」
- 興野 義一 (1970) : 大木5 b 式の提唱—宮城県長者原遺跡出土資料による— 「古代文化 第22巻第4号」
- 草間俊一他 (1965) : 中島遺跡 「水沢の原始・古代遺跡」
- 熊谷 常正 (1982) : (2) 前期 「岩手の土器」岩手県立博物館
- 熊谷 常正 (1983) : 岩手県における縄文時代前期土器群の成立—条痕文系土器群から羽状縄文土器群へ— 「岩手県立博物館研究報告第1号」
- 斎藤邦雄・酒井宗孝 (1994) : 岩手県の縄文時代前期土器群について「北奥古代文化」23
- 佐藤 智雄 (1992) : 土器 「戸井貝塚」北海道亀田郡戸井町教委
- 七ヶ浜町教委 (1973) : 「大木囲貝塚 昭和57年度環境整備調査報告」
- 庄内文化研究会 (1955) : 「吹浦遺跡」
- 杉山 武 (1989) : 白座遺跡 「白座遺跡 野場遺跡 (3) 発掘調査報告書」青森県階上町教委
- 仙台市教委 (1980) : 「三神峰遺跡」仙台市文化財調査報告書第25集
- 高橋亜貴子 (1992) : 東北地方縄文時代前期前葉組縄文について 「加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集」
- 高橋憲太郎 (1987) : (4) 出土遺物 「崎山遺跡群 I —昭和61年度発掘調査概報—」宮古市埋蔵文化財調査報告書13
- 高橋 信雄 (1982) : 3. 古代 「岩手の土器」
- 田村 壯一 (1987) : 陥し穴状遺構の形態と時期について—岩手県北地方を中心として— 「岩埋文紀要Ⅶ」
- 戸井町教委 (1992) : 「戸井貝塚 貝層部周辺の前期包含層を中心とした発掘調査報告 I」
- 西村正衛他 (1958) : 岩手県大船渡市清水貝塚—大船渡湾沿岸地域の石器時代文化研究 その1— 「古代 第29・30合併号」
- 階上町教委 (1989) : 「白座遺跡 野場遺跡 (3) 発掘調査報告書」
- 林 謙作 (1981) : 住居面積から判ること 「信濃 第33巻第4号」
- 平井 進 (1992) : 「上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書」岩埋文報第177集
- 藤村 東男 (1985) : 岩手県九年橋遺跡出土の礫石錘について 「日高見の国」
- 三浦 謙一 (1990) : 住まいの大きさ—大型住居跡の場合— 「季刊考古学 第32号」
- 宮城県教委 (1969) : 「埋蔵文化財緊急発掘調査概報—長根貝塚—」宮城県文化財調査報

告書第19集

- 宮城県教委 (1977) : 「金山貝塚」鳴瀬町文化財調査報告 1
- 宮城県教委 (1980) : 宇賀崎貝塚 「金剛寺貝塚 宇賀崎貝塚 宇賀崎 1 号古墳他」宮城県文化財調査報告書第67集
- 宮城県教委 (1986) : 「田柄貝塚Ⅱ 土製品 石器・石製品編」宮城県文化財調査報告書第 111集
- 宮城県教委 (1988) : 小梁川遺跡 「七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ 大梁川遺跡 小梁川遺跡(石器編)」宮城県文化財調査報告書第 126集
- 宮古市教委 (1987) : 「崎山遺跡群Ⅰ－昭和61年度発掘調査概報－」宮古市埋蔵文化財調査報告書13
- 武藤 康弘 (1993) : 竪穴住居の面積 「季刊考古学 第44号」
- 盛岡市教委 (1978) : 「岩手県盛岡市大館町遺跡－昭和51年度発掘調査報告－」盛岡市文化財調査報告第20集
- 山形県教委他 (1988) : 「吹浦遺跡 第3・4次緊急発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 120集
- 陸前高田市教委 (1971) : 「岩手県陸前高田市牧田貝塚発掘調査概要」
- 陸前高田市教委 (1979) : 「大陽台貝塚」

上八木田 I 遺跡出土種子同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上八木田 I 遺跡は、北上川の支流である中津川にそそぐ八木田沢が開析した狭小な谷底平野に張り出す 2 つの尾根とその裾野にかけて立地する。これまでの発掘調査により、縄文時代前期・中期の集落が確認され、該時代時期を主体とした遺跡であることが明らかとされた。

縄文時代前期の住居跡および中期の住居跡から種実遺体が検出された。検出された遺体の種類を明らかにすることにより、当時の可食植物について知ることができると期待された。したがって、今回は各住居跡から検出された種実遺体の同定を行うこととした。

1. 試料

試料は、縄文時代前期と中期の住居跡から出土した種実遺体と思われる炭化物である。試料については、結果と合わせて表 1 に示す。

2. 方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定した。

3. 結果

結果を表 1 に示す。同定の結果、コナラ属、クリおよびオニグルミに同定された。以下に形態的特徴を記す。

・コナラ属 *Quercus* sp. ブナ科

子葉が検出された。側面観は極方向に長い楕円形、上面観は半月形で、大きさは縦軸 1.3cm、横軸 1.0cm 程度。炭化している。極方向に二つに割れ半分が破損している。表面には、極方向に維管束が通った跡が筋状に窪んでいる。

・クリ *Castanea crenata* ブナ科

子葉が検出された。大きさは 1 × 1.6cm 程度。炭化し、約 2/3 の部分は破損している。表面には、荒いしわ状のくぼみがある。

・オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. *susup. sieboldiana* (Maxim) Kitamura

クルミ科 核の破片が検出された。褐灰色。大きさは 1 cm 程度。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。表面は厚く堅い。

表 1

番号	遺構名	出土状況	時代	同定結果
1	Ⅸ D 1 e 住居跡	炉内	縄文時代前期	コナラ属(1点)
2	Ⅵ D 8 e 住居跡	埋土下位	縄文時代前期	ク　　リ(4点)
3	Ⅶ D 1 g - 2 住居跡	床面出土深鉢内	縄文時代前期	オニグルミ(1点)
4	V D 1 c 住居跡	床面埋設土器内	縄文時代前期	オニグルミ(1点)

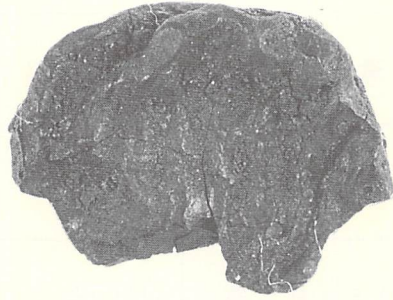
4. 考察

クリやコナラ属は、古くから食用とされてきた種類である。両者とも今回検出された部位である子葉を食用とする。コナラ属を食用とするためには、「あくぬき」と呼ばれる作業が必要となる。コナラ属の「あくぬき」を行う作業は比較的複雑であることから、当時の植物利用を考える上で興味深い。

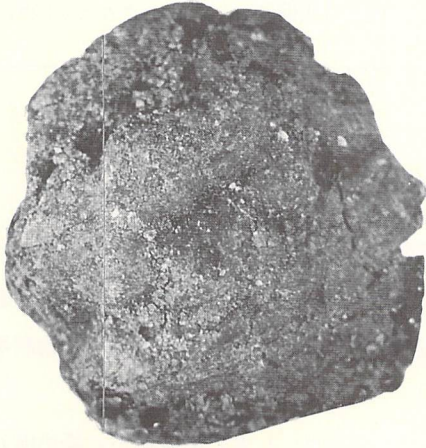
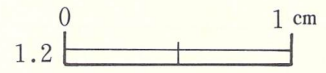
オニグルミも縄文時代の食用植物として利用され、これまでも多くの遺跡から検出例がある。本遺跡でも縄文時代前期・中期には、オニグルミが当時の食糧の一部とされていたと思われる。



1. コナラ属 (子葉)



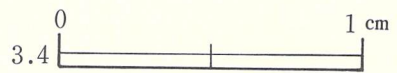
2. クリ (子葉)



3. オニグルミ



4. オニグルミ



題号	遺構名	時期	平面形	短軸	長軸	床面積	炉	柱穴	周溝	図版番号	写真図版番号
1	ⅣD8b住居跡	縄文中期末葉	円形	[395] cm	400 cm	[12.1] m ²	土器埋設炉	3個	無	14	7
2	ⅣD9c住居跡	縄文中期末葉	円形	410 cm	420 cm	[13.4] m ²	土器埋設炉	4個	無	18	8
3	ⅣD0c住居跡	縄文中期末葉	円形	380 cm	400 cm	11.7 m ²	土器埋設炉	0個	無	22	9
4	ⅤC0f住居跡	縄文時期不詳	楕円形?	(270) cm	650 cm	[12.5] m ²	地床炉 2基	5個	無	26	10
5	ⅤD1c住居跡	縄文中期末葉	円形	380 cm	(400) cm	[10.6] m ²	土器埋設炉	4個	無	27	11
6	ⅤD2c住居跡	縄文中期末葉	円形	[325] cm	[335] cm	[11.4] m ²	土器埋設炉	0個	無	30	12
7	ⅤD2d住居跡	縄文中期末葉	不明	不明	不明	(3.6) m ²	0 基	0個	無	33	13
8	ⅤC2g住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	長方形	290 cm	420 cm	[10.2] m ²	地床炉 1基	0個	無	34	14
9	ⅤC2-2住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	長方形	340 cm	[480] cm	[14.7] m ²	地床炉 2基	0個	無	36	
10	ⅤC3h住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	楕円形	[180] cm	325 cm	[6.6] m ²	地床炉 2基	0個	無	37	15
11	ⅤC0g住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形?	[260] cm	[560] cm	(12.0) m ²	地床炉 1基	0個	無	39	16
12	ⅤD5f住居跡	縄文前期中葉	長方形	260 cm	490 cm	10.6 m ²	地床炉 1基	1個	無	40	17
13	ⅤD7g住居跡	縄文前期	隅丸長方形	310 cm	510 cm	13.1 m ²	地床炉 2基	0個	無	42	18
14	ⅤD8e住居跡	縄文前期後葉	隅丸長方形	345 cm	500 cm	[13.4] m ²	地床炉 2基	0個	無	46	19
15	ⅤD8h住居跡	縄文晩期前葉	円形	[310] cm	390 cm	[8.0] m ²	石囲炉 1基	4個	無	50	20
16	ⅤD0g住居跡	縄文前期後葉	楕円形?	(160) cm	340 cm	(3.4) m ²	地床炉 1基	0個	無	52	21
17	ⅤD0h住居跡	縄文前期後葉 (推定)	方形~長方形基調	(500) cm	620 cm	(31.7) m ²	地床炉 3基	5個	無	54,55	22
18	ⅤD0i住居跡	縄文前期後葉から末葉	方形~長方形基調	[400] cm	[480] cm	(26.6) m ²	地床炉 1基	4個	無	57	23
19	ⅤC3g住居跡	縄文前期末葉から中期初頭 (推定)	不明	(120) cm	220 cm	(2.0) m ²	0 基	0個	無	60	24
20	ⅤC6f住居跡	縄文前期後葉から末葉	隅丸長方形?	(260) cm	(385) cm	(7.3) m ²	地床炉 1基	0個	無	61	24
21	ⅤC6g住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	楕円形?	225 cm	[170] cm	[2.7] m ²	0 基	2個	無	63	25
22	ⅤC6h住居跡	縄文前期後葉から中期初頭	長円形	340 cm	630 cm	16.1 m ²	地床炉 2基	0個	無	65	25
23	ⅤC7f住居跡	縄文前期後葉	不明	(200) cm	(210) cm	(2.9) m ²	地床炉 1基	0個	無	69	26
24	ⅤC8f住居跡	縄文前期末葉	不明	(190) cm	(360) cm	(6.1) m ²	地床炉 1基	0個	無	71	26
25	ⅤC8g住居跡	縄文中期初頭	不整形円形	420 cm	500 cm	14.4 m ²	地床炉 2基	5個	無	73	27
26	ⅤC8j住居跡	縄文前期末葉から中期初頭	長方形基調?	(156) cm	(300) cm	(3.4) m ²	地床炉 1基	0個	無	75	28
27	ⅤC9f住居跡	縄文中期初頭 (推定)	不整形円形	(252) cm	300 cm	(5.7) m ²	地床炉 1基	0個	無	77	28
28	ⅤC9i-3a住居跡	縄文中期初頭	方形~長方形基調	(430) cm	(490) cm	(16.9) m ²	地床炉 1基	8個	有	79	29
29	ⅤC9i-3b住居跡	縄文中期初頭 (推定)	方形~長方形基調				地床炉 1基	3個	有	79	29
30	ⅤC9i-4住居跡	縄文前期末葉から中期初頭	方形~長方形基調	510 cm	(510) cm	(7.3) m ²	0 基	1個	有	79	29
31	ⅤC9j住居跡	縄文前期後葉から中期初頭 (推定)	方形~長方形基調	(207) cm	250 cm	(3.7) m ²	地床炉 1基	0個	無	75	30
32	ⅤC9j-2住居跡	縄文中期初頭	不明	(240) cm	(400) cm	(10.6) m ²	地床炉 1基	0個	無	87	
33	ⅤC0g住居跡	縄文前期後葉から中期初頭	隅丸長方形?	(222) cm	(360) cm	[6.5] m ²	地床炉 2基	0個	無	90	
34	ⅤC0g-2住居跡	縄文前期後葉から中期初頭	長方形基調	270 cm	393 cm	9.0 m ²	地床炉 2基	0個	無	93	30
35	ⅤC0g-3住居跡	縄文前期後葉から中期初頭	隅丸長方形?	(450) cm	(693) cm	(33.0) m ²	0 基	7個	無	94,95	
36	ⅤC0h住居跡	縄文前期後葉から中期初頭	方形~長方形基調	(130) cm	(287) cm	(3.2) m ²	0 基	2個	無	98	
37	ⅤC0h-2住居跡	縄文前期後葉から中期初頭	方形~長方形基調	[310] cm	[320] cm	(1.4) m ²	地床炉 1基	2個	無		
38	ⅤD1d住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形基調?	(170) cm	625 cm	(5.4) m ²	地床炉 1基	0個	無	100	32
39	ⅤD1d-2住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形基調?	180 cm	(215) cm	(3.0) m ²	0 基	0個	無	100	31
40	ⅤD1d-3住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形基調?	(145) cm	(170) cm	(1.9) m ²	地床炉 1基	0個	無	100	31
41	ⅤD1e住居跡	縄文前期	長方形基調?	(308) cm	(425) cm	(7.1) m ²	地床炉 1基	0個	無	102	32
42	ⅤD1g住居跡	縄文前期後葉	隅丸長方形?	[310] cm	[400] cm	[11.1] m ²	地床炉 1基	3個	無	103	32
43	ⅤD1g-2住居跡	縄文前期後葉 (推定)	隅丸長方形	285 cm	420 cm	8.7 m ²	地床炉 1基	5個	無	103	34
44	ⅤD2f住居跡	縄文前期後葉から中期初頭	長方形?	(240) cm	430 cm	(8.6) m ²	地床炉 1基	0個	無	110	34
45	ⅤD2h住居跡	縄文前期後葉から末葉	楕円形?	(350) cm	(670) cm	(10.1) m ²	0 基	2個	有	112	35
46	ⅤD2h-2住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	長方形基調?	(320) cm	(570) cm	(19.0) m ²	地床炉 2基	10個	有	114	35
47	ⅤD2h-3住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	不明	(45) cm	(302) cm	(0.9) m ²	0 基	0個	有	112	35
48	ⅤD3g住居跡	縄文前期後葉から末葉	隅丸長方形?	(120) cm	(280) cm	(3.6) m ²	地床炉 2基	0個	無	115	36
49	ⅤD3g-2住居跡	縄文前期後葉 (推定)	方形~長方形基調	(98) cm	(125) cm	(0.7) m ²	0 基	0個	無	116	37
50	ⅤD3g-3住居跡	縄文前期後葉から末葉	隅丸長方形?	(140) cm	340 cm	(3.4) m ²	0 基	0個	無	117	37
51	ⅤD3g-4住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形基調?	(125) cm	375 cm	(4.1) m ²	0 基	0個	無	119	
52	ⅤD3h住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形	(230) cm	485 cm	(8.5) m ²	0 基	7個	無	120	38
53	ⅤD3h-2住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	楕円形?	(150) cm	(670) cm	(4.6) m ²	0 基	7個	無	122	38
54	ⅤD4f住居跡	縄文前期後葉	方形?	(260) cm	400 cm	(8.8) m ²	地床炉 1基	7個	無	123	39
55	ⅤD4f-2住居跡	縄文前期後葉 (推定)	方形~長方形?	(200) cm	415 cm	(7.4) m ²	0 基	9個	無	127	40
56	ⅤD4f-3住居跡	縄文前期後葉 (推定)	方形~長方形?	(250) cm	440 cm	(11.1) m ²	0 基	1個	無	128	
57	ⅤD4h住居跡	縄文前期後葉から末葉	楕円形?	(198) cm	284 cm	(3.9) m ²	0 基	5個	無	129	41,42
58	ⅤD4h-2住居跡	縄文前期後葉から末葉	長円形?	210 cm	(233) cm	(4.8) m ²	地床炉 1基	0個	無	131	41
59	ⅤD4h-3住居跡	縄文前期後葉から末葉	不明	(210) cm	220 cm	(3.9) m ²	0 基	0個	無	131	42
60	ⅤD4h-4住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形?	(260) cm	630 cm	(13.4) m ²	地床炉 6基	3個	無	133	43

第26表 竪穴住居跡一覽表(1)

題号	遺構名	時期	平面形	短軸	長軸	床面積	炉	柱穴	周溝	図版番号	写真図版番号
61	ⅦD 4 i 住居跡	縄文前期	不明	(100) cm	200 cm	(1.6) m ²	0 基	2個	無	134	44
62	ⅦD 5 g-2 住居跡	縄文前期後葉から末葉	楕円形?	(135) cm	(420) cm	(4.0) m ²	地床炉 1基	0個	無	135	44
63	ⅦD 5 g-3 住居跡	縄文前期後葉から末葉	楕円形?	(150) cm	(165) cm	(3.1) m ²	0 基	2個	無	137	45
64	ⅦD 5 h 住居跡	縄文前期後葉から末葉	楕円形?	(116) cm	(296) cm	(2.4) m ²	地床炉 1基	0個	無	138	45
65	ⅦD 5 i 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	方形	230 cm	250 cm	4.3 m ²	地床炉 1基	1個	無	139	46
66	ⅦD 5 i-2 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	不整形円形?	(320) cm	(425) cm	(10.0) m ²	地床炉 1基	0個	無	142	47
67	ⅦD 5 i-3 住居跡	縄文前期後葉	不整形円形	280 cm	320 cm	6.4 m ²	地床炉 2基	2個	無	143	47
68	ⅦD 6 f 住居跡	縄文前期後葉から中期初頭	不明	(250) cm	(330) cm	(5.1) m ²	地床炉 1基	1個	無	144	48
69	ⅦD 6 g 住居跡	縄文前期後葉から中期初頭	不整形台形	190 cm	320 cm	[2.6] m ²	0 基	1個	無	146	49
70	ⅦD 6 g-2 住居跡	縄文前期後葉から末葉	楕円形	220 cm	370 cm	[5.4] m ²	地床炉 1基	0個	無	148	49
71	ⅦD 6 g-3 住居跡	縄文前期後葉から末葉	不明	(200) cm	(300) cm	(2.2) m ²	地床炉 1基	0個	無	149	50
72	ⅦD 6 g-4 住居跡	縄文前期後葉から末葉	楕円形?	(200) cm	(350) cm	(4.3) m ²	地床炉 3基	5個	無	150	50
73	ⅦD 6 h 住居跡	縄文前期後葉から末葉	不明	不明	不明	(1.5) m ²	地床炉 1基	0個	無	151	
74	ⅦD 6 h-2 住居跡	縄文前期後葉から末葉	隅丸長方形	(400) cm	690 cm	(23.5) m ²	地床炉 3基	17個	有	152	51
75	ⅦD 6 i 住居跡	縄文前期後葉から末葉	不明	(120) cm	(290) cm	(1.1) m ²	0 基	0個	無	156	52
76	ⅦD 7 g 住居跡	縄文前期後葉から末葉	円形?	[400] cm	[400] cm	(7.0) m ²	地床炉 1基	0個	無	157	52
77	ⅦD 7 g-2 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	不整形長方形?	(400) cm	(470) cm	(11.5) m ²	地床炉 1基	0個	無	158	53
78	ⅦD 7 h 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	長円形?	(220) cm	320 cm	(4.7) m ²	地床炉 1基	0個	無	160	53,54
79	ⅦD 7 i 住居跡	縄文前期後葉から末葉	不明	不明	不明	(0.5) m ²	0 基	0個	無	152	51
80	ⅦD 8 c 住居跡	縄文前期末葉	円形?	[500] cm	[500] cm	(9.0) m ²	地床炉 1基	0個	無	162	54
81	ⅦD 8 h 住居跡	縄文前期後葉から中期初頭	不整形円形	250 cm	250 cm	4.1 m ²	石囲炉 1基	0個	無	165	55
82	ⅦD 8 i 住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	方形?	(260) cm	(380) cm	(5.7) m ²	地床炉 1基	5個	無	166	56
83	ⅦD 8 i-2 住居跡	縄文前期後葉から末葉	方形?	340 cm	(340) cm	(4.4) m ²	0 基	4個	有	166	56
84	ⅦD 8 i-3 住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	不明	不明	不明	不明	地床炉 1基	2個	無	168	56
85	ⅦD 9 c 住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形	(450) cm	(490) cm	(18.9) m ²	地床炉 4基	1個	無	169	57
86	ⅦD 9 c-2 住居跡	縄文前期末葉	長方形	330 cm	420 cm	9.0 m ²	地床炉 1基	3個	無	169	57
87	ⅦD 9 f 住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形?	(180) cm	(500) cm	(7.2) m ²	0 基	0個	無	175	58
88	ⅦD 0 b 住居跡	縄文前期後葉	楕円形	340 cm	400 cm	[9.7] m ²	地床炉 2基	0個	無	176	58
89	ⅦD 0 b-2 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	長方形?	(275) cm	650 cm	(14.1) m ²	地床炉 2基	0個	無	180	59
90	ⅦD 0 b-3 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	方形基調?	(260) cm	270 cm	(7.8) m ²	0 基	4個	無	180	59
91	ⅦD 0 b-4 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	長方形?	(100) cm	[520] cm	(1.1) m ²	0 基	0個	無	180	59
92	ⅦD 0 h 住居跡	縄文前期後葉から末葉	隅丸方形?	(290) cm	450 cm	(12.5) m ²	地床炉 2基	0個	無	182	60
93	ⅦD 1 g 住居跡	縄文前期後葉から末葉	方形?	(440) cm	(510) cm	(17.8) m ²	地床炉 2基	3個	有	184	60
94	ⅦC 1 g-2 住居跡	縄文前期後葉から末葉	円形	290 cm	320 cm	[5.8] m ²	0 基	2個	無	185	61
95	ⅦC 1 h 住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形基調?	(320) cm	470 cm	(9.8) m ²	地床炉 1基	2個	有	186	61,62
96	ⅦC 1 h-2 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	長方形?	(240) cm	(470) cm	(11.2) m ²	地床炉 1基	1個	無	98	62
97	ⅦC 2 h 住居跡	縄文前期	重なる長方形	260 cm	290 cm	5.8 m ²	0 基	6個	無	188	63
98	ⅦC 2 j 住居跡	縄文前期後葉から末葉	隅丸長方形?	(300) cm	560 cm	(13.6) m ²	0 基	0個	無	189	
99	ⅦC 3 f 住居跡	縄文前期後葉から末葉	不整形円形	250 cm	270 cm	4.7 m ²	0 基	1個	無	192	63
100	ⅦD 2 g 住居跡	縄文前期末葉	方形	270 cm	300 cm	[6.9] m ²	地床炉 1基	9個	有	193	64
101	ⅦD 2 g-2 住居跡	縄文前期末葉 (推定)	方形	不明	不明	不明	0 基	3個	有	193	64
102	ⅦD 2 g-3 住居跡	縄文前期末葉 (推定)	方形	不明	不明	不明	0 基	3個	有	193	64
103	ⅦD 0 i 住居跡	縄文前期後葉から末葉	楕円形	260 cm	380 cm	7.0 m ²	地床炉 2基	0個	無	195	65
104	ⅦD 7 a 住居跡	縄文前期	円形	300 cm	300 cm	5.3 m ²	0 基	4個	有	196	66
105	ⅦE 9 b 住居跡	縄文前期	楕円形	340 cm	450 cm	10.8 m ²	0 基	0個	無	197	66
106	ⅦE 0 a 住居跡	縄文前期後葉	不明	(350) cm	(480) cm	(16.1) m ²	地床炉 3基	0個	無	198	67
107	ⅠD 1 e 住居跡	縄文前期後葉から末葉	長円形?	(310) cm	600 cm	(14.9) m ²	地床炉 1基	3個	無	201	68
108	ⅠD 1 h 住居跡	縄文前期	長円形	220 cm	330 cm	4.4 m ²	0 基	1個	有	204	69
109	ⅠD 2 g 住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形基調?	不明	(250) cm	(4.3) m ²	地床炉 1基	2個	無	205	69
110	ⅠD 2 g-2 住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形基調?	(130) cm	455 cm	(3.5) m ²	0 基	0個	無	207	70
111	ⅠD 2 h 住居跡	縄文前期後葉から末葉	不明	不明	不明	(4.8) m ²	地床炉 1基	0個	無	207	70
112	ⅠD 3 c 住居跡	縄文前期後葉	長方形?	(320) cm	(550) cm	(12.1) m ²	地床炉 2基	1個	有	209	71
113	ⅠD 3 g 住居跡	縄文前期後葉から末葉	不明	不明	(340) cm	(11.7) m ²	地床炉 1基	0個	無	205	72
114	ⅠD 3 h 住居跡	縄文前期後葉から末葉	不明	不明	(210) cm	(8.9) m ²	地床炉 2基	0個	無	207	73
115	ⅠD 3 h-2 住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	不明	(140) cm	(380) cm	(1.3) m ²	0 基	0個	無	207	73
116	ⅠD 3 j 住居跡	縄文前期後葉	長方形	470 cm	1010 cm	36.1 m ²	地床炉 8基	11個	有	216,217	74
117	ⅠD 4 d 住居跡	縄文前期	長円形?	(290) cm	550 cm	(12.0) m ²	地床炉 1基	1個	有	224	75
118	ⅠD 4 f 住居跡	縄文前期後葉から末葉	不明	(120) cm	310 cm	(7.6) m ²	0 基	0個	無	225	76
119	ⅠD 4 g 住居跡	縄文前期後葉	不明	(260) cm	280 cm	(6.7) m ²	地床炉 2基	0個	無	205	76
120	ⅠD 4 g-2 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	楕円形?	(410) cm	650 cm	(16.2) m ²	地床炉 4基	2個	無	227	77

第27表 竪穴住居跡一覽表(2)

遺跡番号	遺構名	時期	平面形	短軸	長軸	床面積	炉	柱穴	周溝	図版番号	写真図版番号
121	ⅩD 4 g-3 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	長方形?	(220) cm	670 cm	(14.9) m ²	地床炉 3基	7個	無	232	78
122	ⅩD 4 h 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	楕円形?	(450) cm	790 cm	(19.9) m ²	地床炉 8基	15個	有	234	79
123	ⅩD 4 h-2 住居跡	縄文前期後葉	不明	110 cm	(430) cm	(2.5) m ²	0 基	0個	有	234	79
124	ⅩD 5 c 住居跡	縄文前期後葉から末葉	長円形?	270 cm	460 cm	(9.5) m ²	地床炉 1基	1個	有	237	80
125	ⅩD 5 g 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	楕円形?	(180) cm	340 cm	(3.8) m ²	0 基	0個	無	238	81
126	ⅩD 5 g-2 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	楕円形?	(250) cm	300 cm	(3.1) m ²	0 基	0個	無	238	81
127	ⅩD 5 h 住居跡	縄文前期後葉	長方形?	200 cm	(770) cm	(6.2) m ²	0 基	0個	有	234	79
128	ⅩD 5 i 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	長円形?	200 cm	(260) cm	(3.2) m ²	地床炉 1基	0個	無	234	79
129	ⅩD 5 j 住居跡	縄文前期初頭から前葉	長円形	350 cm	530 cm	12.9 m ²	0 基	8個	無	241	82
130	ⅩD 6 f 住居跡	縄文前期	楕円形?	(310) cm	[420] cm	(10.1) m ²	地床炉 2基	7個	無	243	82,83
131	ⅩD 6 f-2 住居跡	縄文前期	楕円形?	(250) cm	不明	(6.7) m ²	地床炉 1基	10個	無	243	82,83
132	ⅩD 7 j 住居跡	縄文前期	楕円形?	(180) cm	360 cm	(5.3) m ²	地床炉 1基	0個	無	245	83
133	ⅩD 8 f 住居跡	縄文前期	長方形	230 cm	360 cm	[6.1] m ²	0 基	1個	無	246	84
134	ⅩD 8 f-2 住居跡	縄文詳細不明	不明	(170) cm	310 cm	(2.9) m ²	0 基	0個	無	247	85
135	ⅩD 8 g 住居跡	縄文前期後葉から末葉	長方形?	340 cm	(450) cm	(9.1) m ²	地床炉 2基	5個	無	248	85,86
136	ⅩD 8 g-2 住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	長方形	(220) cm	[370] cm	(6.7) m ²	地床炉 1基	0個	無	250	87
137	ⅩD 8 g-3 住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	不整の円形	[300] cm	[300] cm	[6.8] m ²	0 基	0個	無	251	87
138	ⅩD 8 g-4 住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	不明	不明	不明	(0.5) m ²	0 基	0個	無	248	86
139	ⅩD 8 g-5 住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	不明	不明	不明	(0.9) m ²	0 基	0個	無	248	86
140	ⅩD 8 i 住居跡	縄文前期初頭から前葉	長方形?	(260) cm	360 cm	(5.3) m ²	地床炉 1基	0個	無	252	88
141	ⅩD 9 f 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	隅丸方形	[300] cm	370 cm	[7.1] m ²	地床炉 1基	0個	有	254	89
142	ⅩD 9 f-2 住居跡	縄文前期後葉 (推定)	隅丸方形	200 cm	240 cm	[3.7] m ²	0 基	0個	有	254	89
143	ⅩD 9 g 住居跡	縄文前期	円形?	[360] cm	[360] cm	(5.7) m ²	地床炉 1基	0個	無	255	90
144	ⅩD 9 g-2 住居跡	縄文前期後葉から末葉	方形~長方形基調	(180) cm	350 cm	(4.1) m ²	0 基	0個	無	256	90
145	ⅩD 9 h 住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	長円形	280 cm	370 cm	7.3 m ²	地床炉 2基	1個	無	257	88
146	ⅩD 0 f 住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	方形~長方形基調	(230) cm	280 cm	(3.8) m ²	地床炉 1基	0個	無	258	91
147	ⅩD 0 f-2 住居跡	縄文前期	方形~長方形基調	(200) cm	330 cm	(5.3) m ²	地床炉 1基	0個	無	258	91,92
148	ⅩE 2 b 住居跡	縄文前期	楕円形	200 cm	310 cm	4.1 m ²	地床炉 1基	0個	無	259	93
149	ⅩE 5 a 住居跡	縄文前期	長方形?	[200] cm	[300] cm	(6.0) m ²	地床炉 2基	0個	無	260	94
150	ⅩE 6 b 住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	長方形?	220 cm	(300) cm	(5.3) m ²	地床炉 1基	0個	無	261	
151	ⅩD 1 g 住居跡	縄文前期後葉から末葉	方形?	(300) cm	310 cm	(5.1) m ²	地床炉 2基	0個	無	262	95
152	ⅩD 1 g-2 住居跡	縄文前期後葉から末葉	方形~長方形?	200 cm	(300) cm	(3.7) m ²	0 基	0個	無	262	95
153	ⅩD 1 g-3 住居跡	縄文前期後葉から末葉 (推定)	方形~長方形?	(200) cm	360 cm	(5.9) m ²	0 基	0個	無	262	95
154	ⅩD 1 j 住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	円形~楕円形?	(240) cm	[350] cm	(5.8) m ²	地床炉 2基	0個	無	264	96
155	ⅩD 1 j-2 住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	円形~楕円形?	(240) cm	[350] cm	(3.3) m ²	地床炉 1基	0個	無	264	97
156	ⅩD 2 i 住居跡	縄文前期	長方形基調?	(200) cm	(400) cm	(6.8) m ²	地床炉 2基	0個	無	265	97
157	ⅩD 3 h 住居跡	縄文前期初頭から前葉	長円形	210 cm	320 cm	5.0 m ²	0 基	0個	無	266	
158	ⅩD 3 i 住居跡	縄文前期	円形~楕円形?	[300] cm	[300] cm	(7.7) m ²	地床炉 1基	0個	無	267	98
159	ⅩD 4 f 住居跡	縄文前期	長方形?	[200] cm	340 cm	(3.9) m ²	0 基	0個	無	268	99
160	ⅩD 4 g 住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	長円形	230 cm	380 cm	6.5 m ²	地床炉 1基	0個	無	269	99,100
161	ⅩD 6 g 住居跡	縄文前期	長方形基調	(250) cm	280 cm	(6.3) m ²	地床炉 1基	0個	無	271	101
162	ⅩD 9 e 住居跡	縄文前期初頭から前葉 (推定)	長方形基調	(200) cm	290 cm	(4.6) m ²	地床炉 2基	0個	無	272	101
163	ⅩC 6 b 住居跡	平安時代前期	隅丸方形	340 cm	360 cm	11.3 m ²	基	0個	無	273~277	102~104
164	ⅩC 9 a 住居跡	平安時代前期	方形	(200) cm	320 cm	(6.2) m ²	基	0個	無	282,283	104,105
165	ⅩE 2 b 住居跡	平安時代前期	隅丸方形	340 cm	400 cm	(10.7) m ²	基	0個	無	285~287	106
166	ⅩE 2 c 住居跡	平安時代前期	不明	300 cm	300 cm	不明	基	0個	無	289	

第28表 竪穴住居跡一覽表(3)

番号	遺構名	時期	平面形	壁・断面形	開口部径	底部径	深さ	図版番号	写真図版番号	タイプ
201	ⅣD8c土坑	縄文時代	小判形	ほぼ直立	120×140 cm	70×115 cm	65 cm	290	107	c
202	ⅣD0c土坑	縄文時代	円形	直立後外反	100×102 cm	80×86 cm	72 cm	290	107	b
203	ⅤD1d土坑	縄文時代	円形	フラスコ状	115 cm	115 cm	60 cm	290	107	a
204	ⅤD6d土坑	縄文時代	歪な円形	ほぼ直立	60×80 cm	57×70 cm	20 cm	290	108	b
205	ⅤD7e土坑	縄文時代	歪な円形	フラスコ状	110 cm	124×130 cm	70 cm	291	108	a
206	ⅤD7i土坑	縄文時代	円形	直立・外傾	65×117 cm	33×70 cm	26 cm	291	108	c
207	ⅤD8a土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	70 cm	55 cm	22 cm	291	108	b
208	ⅤD8a-2土坑	縄文時代	円形	やや外傾	80 cm	70 cm	14 cm	291	109	b
209	ⅤD8e土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	75×85 cm	65×77 cm	16 cm	291	109	b
210	ⅤD8h土坑	縄文時代	円形	直立・内傾	107×115 cm	90×100 cm	38 cm	292	109	b
211	ⅤD9e土坑	縄文前期	小判形	内傾・直立	125×220 cm	115×220 cm	33 cm	292	109	c
212	ⅤD0b土坑	縄文時代	楕円形	やや外傾	102×150 cm	78×124 cm	24 cm	292	110	c
213	ⅤD0d土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	105 cm	95 cm	50 cm	292	110	b
214	ⅤD0e土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	90 cm	85 cm	17 cm	293	110	b
215	ⅤD0g土坑	縄文前期	楕円形	外傾・直立	110×155 cm	90×130 cm	20 cm	293	110	c
216	ⅤD0g-2土坑	縄文前期	不整な楕円形	外傾・直立	90×170 cm	70×135 cm	15 cm	293	111	c
217	ⅤD0i土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	135 cm	120 cm	24 cm	293	111	b
218	ⅤD0i-2土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	125 cm	120 cm	30 cm	293	111	b
219	ⅤC6g土坑	縄文前期	円形	ほぼ直立	160 cm	150 cm	17 cm	294	111	b
220	ⅤC6g-2土坑	縄文前期	不明	外傾・直立	84 cm	70 cm	40 cm	294	112	e
221	ⅤC8i土坑	縄文前期	円形	フラスコ状	90 cm	60 cm	120 cm	294	112	a
222	ⅤC9g土坑	縄文前期	円形	フラスコ状	[100] cm	[120] cm	90 cm	295	112	a
223	ⅤC9i土坑	縄文前期	不整な楕円形		140×193 cm	115×180 cm	14 cm	295		c
224	ⅤC9j土坑	縄文前期	円形	外傾	140×110 cm	85×94 cm	30 cm	295	112	b
225	ⅤC0i土坑	縄文前期	円形	ほぼ直立	128 cm	125 cm	24 cm	295	112	b
226	ⅤC0j土坑	縄文前期	円形	やや外反	175 cm	150 cm	32 cm	295	113	b
227	ⅤD1e土坑	縄文前期	隅丸方形	やや外傾	(130)×155 cm	(120)×144 cm	14 cm	296	113	d
228	ⅤD1f土坑	縄文時代	歪な円形	フラスコ状	105×115 cm	97×117 cm	67 cm	296	113	a
229	ⅤD1g-2土坑	縄文前期	隅丸方形	やや外傾	106×172 cm	84×144 cm	26 cm	296	113	d
230	ⅤD2e土坑	縄文前期	隅丸方形	やや外傾	110×(170) cm	78 cm	36 cm	296	114	d
231	ⅤD2g土坑	縄文前期	やや歪な円形	ほぼ直立	174×200 cm	156×170 cm	40 cm	297	114	b
232	ⅤD2h土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	72×80 cm	58×66 cm	70 cm	297		b
233	ⅤD3e土坑	縄文時代	小判形	やや外傾	63×82 cm	32×57 cm	29 cm	297	114	c
234	ⅤD3g土坑	縄文前期	不整形	外傾	158 cm	96 cm	36 cm	297	114	e
235	ⅤD3g-2土坑	縄文前期	不明	外傾	(80)×140 cm	100 cm	15 cm	297		e
236	ⅤD3g-3土坑	縄文前期	楕円形	外傾	126×196 cm	100×180 cm	14 cm	297	115	c
237	ⅤD3h土坑	縄文時代	円形または小判形	ほぼ直立	(70)×116 cm	100 cm	20 cm	298	114	c
238	ⅤD4g土坑	縄文時代	歪な円形	フラスコ状	145×185 cm	124×148 cm	154 cm	298	115	a
239	ⅤD4g-2土坑	縄文時代	円形	フラスコ状	120 cm	134 cm	98 cm	298	115	a
240	ⅤD4g-3土坑	縄文時代	やや歪な円形	ほぼ直立	120×138 cm	105×115 cm	45 cm	299	115	a
241	ⅤD4h-2土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	103×106 cm	95×104 cm	23 cm	299	116	b
242	ⅤD5f土坑	縄文時代	ほぼ円形	内傾・直立	154 cm	162×190 cm	102 cm	299	116	a
243	ⅤD5g土坑	縄文時代	円形	フラスコ状	130 cm	130 cm	88 cm	299	116	a
244	ⅤD5g-2土坑	縄文時代	円形	直立・外傾	112 cm	102 cm	52 cm	300	116	b
245	ⅤD5g-3土坑	縄文時代	歪な円形	フラスコ状	112×123 cm	136×140 cm	47 cm	300	117	a
246	ⅤD5g-4土坑	縄文時代	歪な円形	フラスコ状	225 cm	145×155 cm	132 cm	300	117	a
247	ⅤD5g-5土坑	縄文前期	円形	ほぼ直立	135×144 cm	132×135 cm	46 cm	300	117	b
248	ⅤD5g-6土坑	縄文後期から晩期	歪な円形	ほぼ直立	145×160 cm	134×145 cm	68 cm	306	117	b
249	ⅤD5h土坑	縄文時代	歪な円形	ほぼ直立	108×120 cm	104 cm	40 cm	301	118	b
250	ⅤD5h-2土坑	縄文時代	円形	フラスコ状	120 cm	125 cm	67 cm	301	118	a
251	ⅤD5i土坑	縄文時代	楕円形	やや外傾	136×194 cm	116×160 cm	14 cm	301	118	c
252	ⅤD5i-2土坑	縄文前期	円形	やや外傾	118×120 cm	94×98 cm	64 cm	302	118	b
253	ⅤD5i-3土坑	縄文前期	楕円形	ほぼ直立	110×160 cm	86×140 cm	5 cm	302		d
254	ⅤD5i-4土坑	縄文前期	円形	外傾・直立	104×110 cm	74×84 cm	56 cm	302	119	b
255	ⅤD6d土坑	縄文時代	小判形	ほぼ直立	116×216 cm	100×200 cm	41 cm	302	119	c
256	ⅤD6e土坑	縄文時代	楕円形	ほぼ直立	[170]×210 cm	175 cm	58 cm	303	119	c
257	ⅤD6e-2土坑	縄文時代	小判形	外傾	114×[130] cm	88 cm	50 cm	303	119	c
258	ⅤD6f土坑	縄文時代	楕円形	やや外傾	90×120 cm	70×105 cm	30 cm	303	120	c
259	ⅤD6f-2土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	60×70 cm	55×70 cm	55 cm	303	120	b
260	ⅤD6g土坑	縄文時代	楕円形	外傾	60×80 cm	37×80 cm	49 cm	304	120	c

第29表 土坑一覧表(1)

番号	遺構名	時期	平面形	壁・断面形	開口部径	底部径	深さ	図版番号	写真図版番号	タイプ
261	ⅦD 6 h 土坑	縄文時代	円形	外傾	100×105 cm	80×70 cm	16 cm	304	120	b
262	ⅦD 8 c 土坑	縄文前期	円形	ほぼ直立	140×157 cm	125×135 cm	56 cm	304	120	b
263	ⅦD 9 a 土坑	縄文前期	歪な円形	フラスコ状	105×110 cm	117×130 cm	43 cm	304	121	a
264	ⅦD 9 b 土坑	縄文前期末葉	円形	フラスコ状	100×105 cm	157×174 cm	134 cm	305	121	a
265	ⅦD 9 b - 2 土坑	縄文時代	歪な円形	フラスコ状	90×115 cm	165×180 cm	78 cm	305	121	a
266	ⅦD 9 b - 3 土坑	縄文時代	楕円形	ほぼ直立	105×123 cm	83×106 cm	90 cm	305	121	c
267	ⅦD 9 b - 4 土坑	縄文時代	小判形	ほぼ直立	60×80 cm	45×70 cm	40 cm	305	121	c
268	ⅦD 9 h 土坑	縄文時代	小判形	外傾	100×118 cm	90×118 cm	24 cm	306	122	c
269	ⅦD 9 h - 2 土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	65×75 cm	64×67 cm	27 cm	306	122	b
270	ⅦC 1 h 土坑	縄文前期	歪な円形	ほぼ直立	150 cm	132 cm	40 cm	306	122	b
271	ⅦC 1 i 土坑	縄文時代	円形	やや外傾	160 cm	130 cm	45 cm	306	122	b
272	ⅦC 2 j 土坑	縄文前期	歪な円形	ほぼ直立	173×206 cm	156×190 cm	25 cm	307		b
273	ⅦC 2 j - 2 土坑	縄文前期	小判形	ほぼ直立	172×246 cm	152×220 cm	22 cm	307	123	c
274	ⅦD 2 g 土坑	縄文前期	円形	外傾	(120) cm	(85) cm	47 cm	307	123	b
275	ⅦE 9 b 土坑	縄文前期	円形	やや外傾	[88] cm	[60] cm	20 cm	307	123	b
276	ⅠKD 1 g 土坑	縄文前期	歪な円形	ほぼ直立	92×106 cm	74×80 cm	40 cm	308	123	b
277	ⅠKD 1 g - 2 土坑	縄文時代	歪な円形	外傾・直立	134×152 cm	104×114 cm	62 cm	308	124	b
278	ⅠKD 2 h 土坑	縄文時代	歪な円形	外傾	120×145 cm	100×117 cm	45 cm	308	124	b
279	ⅠKD 3 g 土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	83×87 cm	64×70 cm	39 cm	308	125	b
280	ⅠKD 3 h 土坑	縄文前期	楕円形	外傾	117×157 cm	100×145 cm	43 cm	309	125	c
281	ⅠKD 8 f 土坑	縄文前期	楕円形	外傾	210 cm	160 cm	25 cm	309	124	c
282	ⅠKD 0 g 土坑	縄文前期	楕円形	ほぼ直立	165×255 cm	120×210 cm	53 cm	309		c
283	ⅠKE 3 a 土坑	縄文時代	歪な円形	外傾	95×120 cm	60×70 cm	17 cm	309	125	b
284	ⅠXD 1 g 土坑	縄文前期	小判形	フラスコ状	105× cm	80×[180] cm	53 cm	310		e
285	ⅠXD 2 f 土坑	縄文時代	楕円形	直立・外傾	170×250 cm	160×220 cm	53 cm	310	126	c
286	ⅠXB 9 f 土坑	不明	不整な楕円形	外傾	85×120 cm	40×65 cm	42 cm	310	126	c
287	ⅠXB 9 h 土坑	不明	不整な楕円形	直立・外傾	80×102 cm	50×80 cm	16 cm	310	126	c
288	ⅠXB 0 h 土坑	不明	不整な楕円形	外傾	96×120 cm	68×90 cm	23 cm	311	126	c
289	ⅠXB 0 i 土坑	不明	不整な円形	外傾・直立	80×98 cm	42×58 cm	40 cm	311	127	b
290	ⅠXC 5 f 土坑	縄文時代	円形	ほぼ直立	77×80 cm	64×75 cm	20 cm	311	127	b
291	ⅠXC 5 f - 2 土坑	縄文時代	円形	フラスコ状	93×103 cm	110 cm	37 cm	311	127	a
292	ⅠXE 1 c 土坑	縄文時代	円形	やや外傾	98×104 cm	67×74 cm	57 cm	311	127	b
293	ⅠXE 2 c 土坑	平安時代	円形	ほぼ直立	100 cm	80 cm	60 cm	311	128	b

第30表 土坑一覧表(2)

(1) 石鍬

番号	出土地・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
1894	VI D 8 c I 層	硬質泥岩	礫石西部	(3.2)	1.7	0.5	(2.64)	平基はやや凸状を呈する。尖頭部のごく一部が欠損。	II
1896	V C 0 g I 層	珪質泥岩	礫石西部	(2.4)	(1.3)	(0.2)	(0.91)	基部の片側を欠損している。	I 1
1897	V D 7 f II 層	硬質泥岩	礫石西部	2.8	1.5	1.3	1.12	尖頭部は丁寧。基部側は素材面を残し、扁平。	I 1
1899	VI D 8 c I 層	硬質泥岩	礫石西部	(2.1)	(1.9)	(0.4)	(1.76)	尖頭部欠損。横折れ。	I
1900	VI D 1 g I 層	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	2.3	1.2	0.3	1.24	二次加工がやや粗い。基部側の片面に素材面を残す。	III 1
1902	VI D 9 e	粘板岩	北上山地	3.0	1.8	0.4	2.07	やや幅広の感あり。	I 2
1903	VI D 0 b II 層	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	(2.5)	(0.9)	(0.3)	(0.64)	基部側の大平欠損。横折れ。	
1904	VI D 0 a	珪質泥岩	礫石西部	2.8	1.7	0.5	2.01	基部はやや凸状の感もあり。表・裏とも素材面を残す。	I 2
1905	VI D 9 d 表土直下	粘板岩	北上山地	(2.3)	1.8	0.2	(0.98)	極めて扁平。尖頭部のごく一部が欠損	II a 2
1906	VI D 0 h	硬質泥岩	礫石西部	3.0	1.5	0.4	1.35	幅に対し、長めの感あり。	II b 2
1907	VI D 9 i 黒色土	硬質泥岩	礫石西部	2.0	1.3	0.3	0.65	側辺は、外湾後にややくびれて尖頭部につながる。	II a 2
1909	VI E 9 a 黒色土	粘板岩	北上山地	(3.0)	(1.1)	(0.3)	(1.19)	尖頭部先端と、基部の一部が欠損。	
1910	VI E 7 b 表土	珪質泥岩	礫石西部	2.6	1.7	0.2	1.20	基部には2単位の剝離が施される。	II a 2
1911	VI E 7 j 表土	珪質泥岩	礫石西部	3.1	1.7	0.3	2.01	両面とも周縁のみの加工である。	I 2
1914	VI E 6 a ~ b I 層	珪質泥岩	礫石西部	2.8	1.7	0.6	2.4		
1916	VI C 2 g 再堆積層	粘板岩	北上山地	2.8	1.5	0.6	1.88	中央部に小さな窟(バルブではない)が残る。	II a 2
1918	VI C 5 g	珪質泥岩	礫石西部	(3.6)	1.6	0.5	(2.64)	尖頭部先端が欠損。	II b 1
1924	VI C 7 h I 層	硬質泥岩	礫石西部	(3.3)	(1.7)	0.3	(1.85)	脚部の一方の一部が欠損。	II a 2
1927	VI C 4 d 再堆積層	粘板岩	北上山地	(2.8)	(1.1)	(0.3)	(0.81)	尖頭部の先端部と基部の一方を大きく欠損。	
1930	VI C 6 f 再堆積層下位	珪質泥岩	礫石西部	2.1	1.0	0.3	0.55	長さに対し幅狭く小振り。裏面に一部素材面を残す。	II a 2
1931	VI C 7 f 表土トレンチ	硬質泥岩	礫石西部	3.5	1.7	0.3	2.35		I 2
1932	VI C 9 i 床面	珪質極細凝灰岩	礫石西部	(2.0)	(1.7)	(0.4)	(1.09)	尖頭部および基部の一方の一部が欠損。	I
1935	VI C 7 g II 層	粘板岩	北上山地	(3.0)	(1.6)	(0.4)	(1.76)	尖頭部が欠損。横折れ。長さは推定値。	II b 4
1937	VI C 5 h I 層	珪質泥岩	礫石西部	(3.0)	1.6	0.4	(1.82)	尖頭部先端が欠損。	I 2
1939	VI C 5 g	珪質泥岩	礫石西部	3.5	1.4	0.5	2.39		I 2
1940	VI C 8 f 再堆積層	粘板岩	北上山地	(2.7)	(1.2)	(0.5)	(1.26)	尖頭部先端と、脚部の一部が欠損。長さは推定値。	II b 1
1941	VI C 2 f 再堆積層	硬質泥岩	礫石西部	(2.6)	(1.7)	(0.4)	(1.57)	尖頭部先端が欠損。使用によるものかと思われる。	II b 2
1942	VI C 4 g 再堆積層	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	(2.8)	(1.3)	0.3	(1.27)	長さに対し、幅が狭い。基部の一部が欠損。	I
1944	VI C 2 h 褐色土上位	硬質泥岩	礫石西部	2.6	0.9	0.4	1.00		I 2
1945	VI C 4 g 再堆積層	粘板岩	北上山地	3.7	2.1	0.3	2.46		II a 2
1946	VI D 4 g 検出面	粘板岩	北上山地	2.1	1.5	0.3	0.63		II a 2
1949	VI D 1 g	硬質泥岩	礫石西部	3.0	1.6	0.6	2.58	肉厚である。	II b 2
1951	VI D 3 h 再堆積層	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	2.6	1.5	0.3	0.96	やや対称性に欠ける。	I 1
1952	VI D 2 g 再堆積層	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	3.1	2.0	0.4	2.57	基部の平面観はやや凹凸があり、2単位の剝離があった。	V 2
1956	VI D 3 f	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	3.0	2.1	0.5	2.55		II b 2
1957	VI D 2 g	硬質泥岩	礫石西部	(1.8)	(1.1)	(0.5)	(0.64)	基部側が大きく欠損。(横折れ)。	
1958	VI D 4 g 検出面	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	(2.1)	1.5	0.3	(1.09)	尖頭部先端が欠損。使用による欠損かと思われる。	II a 2
1959	VI D 3 i I 層	硬質泥岩	礫石西部	1.8	1.5	0.3	0.56	半製品。または欠損品の再利用。側辺の一部に二次加工。	I 2
1960	VI D 2 h 地山上	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	(2.5)	(1.8)	(0.4)	(1.39)	尖頭部先端が欠損。基部側もまた欠損。	
1964	VI D 1 f I 層	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	(3.2)	(1.6)	(0.4)	(2.70)		II b 2
1965	VI D 3 j	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	(3.5)	(1.9)	(0.3)	(2.26)	尖頭部先端のごく一部が欠損。使用による欠損か。	I 2
1966	VI D 5 f II 層	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	(2.9)	(1.7)	(0.2)	(1.99)	二次加工後に、尖頭部方向からの打撃による欠損。	I 2
1968	VI D 3 h 再堆積層	珪質泥岩	礫石西部	(2.4)	1.4	0.4	(1.35)	尖頭部先端の一部が欠損。使用による欠損かと思われる。	I 2
1969	VI D 3 g 黒褐色土	珪質泥岩	礫石西部	(3.8)	(1.9)	(0.6)	(3.45)	脚部の一方と、尖頭部先端が欠損する。	II b 2
1970	VI D 3 i	粘板岩	北上山地	2.2	1.2	0.3	0.91	横の断面形は蒲鉾形に似る。小振り。	II b 2
1975	VI D 8 i	硬質泥岩	礫石西部	2.7	2.0	0.4	2.86		II a 1
1976	VI D 4 g 検出面	硬質泥岩	礫石西部	(2.2)	1.5	0.2	(0.70)	尖頭部から左側側面方向に欠損。	II b 1
1978	VI D 4 i 表土直下	硬質泥岩	礫石西部	3.3	(1.5)	0.3	(1.38)	基部側の一部に打痕による欠損。	II b 3
1982	VI D 5 h 検出面	粘板岩	北上山地	(1.7)	1.4	0.3	(0.69)	尖頭部先端が一部欠損。使用による欠損か。	II b 2
1983	VI D 2 g 表土直下	珪質泥岩	礫石西部	2.9	(1.7)	0.3	(0.80)	脚部の一部が欠損。	II b 1
1984	VI D 0 g	粘板岩	北上山地	2.3	1.5	0.6	1.88	やや肉厚。	II a 2
1985	VI D 3 f	粘板岩	北上山地	3.1	1.6	0.4	1.61		I 1
1986	VI D 2 g	粘板岩	北上山地	3.0	1.4	0.3	1.08	やや作りが粗い。幅狭の感あり。	II b 1
1987	VI C 3 f I 層茶褐色土	硬質泥岩	礫石西部	3.2	1.9	0.3	1.97		II a 1
1988	VI C 2 i 再堆積層	珪質泥岩	礫石西部	(3.2)	(1.7)	(0.4)	(1.56)	幅狭で縦に長い。	I 2
1990	VI C 3 f 暗褐色土	粘板岩	北上山地	2.9	1.4	0.5	1.69	基部の調整剝離は大きく、やや鋸歯状となる。	I 2
1991	VI D 0 ライン相掘黄褐色土	硬質泥岩	礫石西部	3.8	0.7	0.3	2.6		II a 2
1994	VI C 2 g 表土	硬質泥岩	礫石西部	(1.5)	(2.5)	(0.6)	(1.77)	基部の挟りが大きい。脚部と尖頭部先端は一部欠損。	II c 2
1996	VI C 2 g I 層	粘板岩	北上山地	(2.4)	(2.2)	(0.5)	(1.86)		II d 4
1997	VI D 1 a II 層	粘板岩	北上山地	(2.3)	(1.4)	(0.6)	(1.64)	尖頭部欠損。	II a 2

第31表 不登載石器一覧表(1)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
2001	IXD9hII層	硬質泥質凝灰岩	磐石西部	(2.9)	(1.4)	(0.6)	(2.13)		
2002	IXD3gI層	粘板岩	北上山地	(2.5)	(1.4)	(0.2)	(0.93)	偏平で粗い作り。	IIb1
2004	IXD5hI層	硬質泥岩	磐石西部	2.5	1.2	0.3	1.30		
2005	IXD0g	珪質泥岩	磐石西部	2.6	1.2	0.2	2.34	小振り。	IIb2
2007	IXD4hI層	硬質泥岩	磐石西部	(1.6)	(1.6)	(0.4)	(1.08)		I
2008	IXD5gI層	硬質泥質凝灰岩	磐石西部	2.6	1.5	0.3	1.10		IIb2
2009	IXD0i	珪質泥岩	磐石西部	3.5	1.9	0.5	2.34	凹基の挟り部分が大きい。	IIb1
2010	IXD4hII層	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	2.8	1.7	0.4	1.84		IIa2
2015	IXD1eI層	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	2.5	1.5	0.4	1.48		IIb3
2017	IXD7gI層	珪質極細粒凝灰岩	磐石西部	2.1	1.9	0.4	1.28	尖頭部が平い形状のタイプ。幅広の感あり。	IIa2
2018	IXD8fII層	硬質泥岩	磐石西部	(2.4)	(1.8)	(0.3)	(2.07)	尖頭部側の大半を欠損。	IIa2
2019	IXD4d	粘板岩	北上山地	2.1	1.9	0.4	0.97	小振り。	IIa2
2023	IXE8a	硬質泥岩	磐石西部	(1.9)	(1.6)	(0.4)	(1.31)	身部欠損。	I4
2025	IXE5a表土	珪質泥岩	磐石西部	(3.0)	(1.4)	(0.2)	(1.00)	基部側の一方が欠損。	
2028	X D 4 f II層	珪質泥岩	磐石西部	2.0	1.4	0.2	0.53	偏平。小振り。	IIb2
2029	X D 4 f II層	粘板岩	北上山地	2.2	1.5	0.2	0.66		IIa2
2031	X D 7 g 黒色土	粘板岩	北上山地	2.9	1.2	0.6	1.74	表面に素材の瘤を残す。	IIb2
2035	表採	珪質極細粒凝灰岩	磐石西部	2.8	1.4	0.5	1.98	石鏝にするか石鏝にするか迷う資料。	I2
2038	表採	硬質泥岩	磐石西部	(1.9)	(1.6)	(0.2)	(0.78)	尖頭部側の大半を欠損。	IIb
2040	不明	硬質泥岩	磐石西部	2.6	1.3	0.3	1.03		IIb2
2242	VIII D 1 a II層	粘板岩	北上山地	2.2	1.1	0.6	1.69	未製品。	I2
2377	VIII E 9 a I層	珪質泥岩	磐石西部	2.2	1.3	0.2	1.22		I2
2424	IXD3j住埋土	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	(1.8)	(1.8)	(0.5)	(1.45)		I
2426	IXD3j住埋土	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	(3.1)	(1.3)	(0.2)	(0.85)		
2428	IXD5i住埋土	珪質泥岩	磐石西部	(2.5)	(1.6)	(0.5)	(2.20)		
2585	VID9f	硬質泥岩	磐石西部	(1.2)	(1.9)	(0.5)	(1.9)		I2
2588	VII D 4 h 表土	粘板岩	北上山地	(1.0)	(2.4)	(0.7)	(0.95)	大半欠損。	I
2590	VII D 0 ライトレンヂ	流紋岩	磐石西部	3.7	2.7	0.6	2.78		IIb4
2594	VII D 0 ライトレンヂ	粘板岩	北上山地	(2.7)	(1.6)	(0.3)	(1.62)		IIe2
2595	VIII C 1 g 表土	珪質泥岩	磐石西部	(3.4)	(1.8)	(0.8)	(4.5)		I3
2598	IXD3hI層	珪質泥岩	磐石西部	(2.2)	(1.5)	(0.4)	(1.07)	大半欠損。	
2599	IXD3fI層	硬質泥岩	磐石西部	(2.8)	(1.7)	(0.4)	(1.88)		I2
2600	VII D 5 i 再堆積層	流紋岩	磐石西部	(2.8)	(2.0)	(0.3)	(1.56)		IIa2
2601	VII C 6 e 再堆積層	硬質泥岩	磐石西部	(3.1)	(1.7)	(0.4)	(1.84)		IIb3
2604	VII C 4 g 再堆積層	硬質泥岩	磐石西部	(2.5)	(1.8)	(0.4)	(1.54)		III1
2614	VIC3hII層	硬質泥岩	磐石西部	(1.9)	(1.4)	(0.4)	(0.92)		I
2665	VIC3h暗褐色土	粘板岩	北上山地	(2.2)	(1.6)	(0.3)	(1.11)	基部側欠損。	
3819	IXD5eI層	硬質泥岩	磐石盆地西部	2.9	1.8	0.4	2.10		IIb2
3823	X D 4 g II層	珪質泥岩	磐石西部	1.6	1.4	0.2	0.35		IIa2
4292	VID0f褐色土	チャート質凝灰岩	北上山地	3.8	1.8	0.6	3.12		I4

(2) 石鏝

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
1440	VIII D 0 1 住	粘板岩	北上山地	3.4	1.4	0.5	1.88	身部をつくり出してはいるが、偏平な素材の状況を残す。	
1891	IV D 0 d III層	珪質泥岩	磐石西部	2.0	1.6	0.5	1.09	形態は石鏝に似るが、二次加工が部分的。	
2606	VID7bII層	硬質泥岩	磐石西部	(4.6)	(3.8)	1.0	(13.60)		

(3) 石匙

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
1131	VII C 9 f 住床面	珪質泥岩	磐石西部	(4.4)	(2.8)	(0.8)	(7.32)		未製品
1138	VII D 4 g I層	泥質凝灰岩	磐石西部	(3.0)	(2.4)	(0.9)	(6.82)		I
1399	IXD4h住埋土上位	硬質泥岩	磐石西部	(2.3)	(2.8)	(0.8)	(5.14)	つまみ部のみ残存。	
2108	VII C 7 f I層	硬質泥岩	磐石西部	(1.5)	(1.6)	(0.5)	(1.55)	つまみ部のみ残存。	IV
2380	VII C 0 f I層	硬質泥岩	磐石西部	(2.9)	(3.0)	(0.7)	(4.43)	つまみ部のみ残存。	IV
2417	VII C 6 h 住埋土	珪質泥岩	磐石西部	(2.6)	(2.4)	(0.4)	(3.09)	つまみ部のみ残存。	I
2440	V D 2 c II層	珪質泥岩	磐石西部	(5.5)	(2.3)	(0.7)	(9.50)		Ib2
2441	V D 2 c II層	硬質泥岩	磐石西部	(4.8)	(2.5)	(0.6)	(6.27)		Ib2
2442	VIC0h表採	硬質泥岩	磐石西部	(2.0)	(2.9)	(1.0)	(4.30)	つまみ部のみ残存。	IV

第32表 不登載石器一覧表(2)

整理番号	出土地点・層位	石 質	産 地	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	分類
2443	ⅦC 4 f I層	硬質泥岩	隼石西部	(5.9)	(1.4)	(0.7)	(5.09)	つまみ部欠損。	I a 1
2444	ⅦC 2 e	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(5.8)	(1.8)	(0.8)	(8.08)		I a 2
2447	ⅦD 5 i	珪質極細粒凝灰岩	隼石西部	(7.4)	(2.3)	(0.6)	(9.62)		I b 1
2448	ⅦC 5 i I層	珪質泥岩	隼石西部	(7.1)	(3.1)	(1.0)	(21.55)		I b 2
2449	ⅦC 5 i 再堆積層	チャート	北上山地	(3.9)	(2.3)	(0.7)	(6.57)		I b 1
2450	ⅦC 3 g I層	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(6.7)	(2.9)	(0.9)	(16.44)		I b 1
2453	ⅦC 0 j	珪質泥岩	隼石西部	(6.3)	(1.8)	(0.7)	(7.67)		I b 1
2454	ⅦC 4 h再堆積層	粘板岩	北上山地	(4.5)	(1.7)	(0.6)	(5.32)	尖頭部2ヶ所全周加工。	I b 1
2456	ⅦC 7 f I層	珪質極細粒凝灰岩	隼石西部	(4.5)	(6.0)	(0.9)	(13.99)		II
2457	ⅦC 5 g再堆積層	硬質泥岩	隼石西部	(5.3)	(2.3)	(0.7)	(8.92)		I b 1
2458	ⅦC 0 j再堆積層	珪質泥岩	隼石西部	5.2	2.8	0.7	10.81		I b 2
2459	ⅦC 2 g表土	珪質泥岩	隼石西部	8.0	3.8	1.0	35.71		I b 3
2460	ⅦC 3 h	珪質泥岩	隼石西部	(5.2)	(2.4)	(1.0)	(10.56)		I b 2
2463	ⅦC 3 j再堆積層下位	硬質泥岩	隼石西部	6.6	3.1	0.9	19.88		I b 3
2464	ⅦC 6 d再堆積層	珪質泥岩	隼石西部	(2.6)	(2.9)	(0.6)	(4.41)		IV
2465	ⅦC 4 h再堆積層下位	硬質泥岩	隼石西部	3.8	4.5	0.7	8.34	全周加工。	II b 3
2466	ⅦC 8 g I層	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	3.6	3.9	0.7	7.01		II a
2467	ⅦC 3 h I層	珪質泥岩	隼石西部	3.6	3.9	0.6	8.47	二辺加工。つまみ部と一辺は素材面を残す。	II b
2468	ⅦC 4 h再堆積層下位	珪質泥岩	隼石西部	(6.0)	3.0	0.7	(19.47)	つまみ部欠損。	I b 1
2472	ⅦC 5 h再堆積層下位	チャート	北上山地	4.1	3.7	1.0	10.59		III
2473	ⅦC 7 e再堆積層	硬質泥岩	隼石西部	(3.6)	(4.6)	(0.7)	(9.43)	素材面を残す。	II b
2474	ⅦC 4 h再堆積層下位	珪質泥岩	隼石西部	(4.6)	(2.5)	(0.8)	(8.86)		I b 1
2476	ⅦC 7 g I層下位	硬質泥岩	隼石西部	(6.6)	(3.4)	(0.6)	(12.35)		I b 1
2478	ⅦC 3 g再堆積層下位	珪質泥岩	隼石西部	5.1	1.9	0.7	7.62		I b 1
2479	ⅦC 5 h II層	硬質泥岩	隼石西部	6.6	2.3	0.5	9.98		I b 3
2480	ⅦC 8 d再堆積層	珪質極細粒凝灰岩	隼石西部	(5.3)	(3.5)	(0.7)	(10.71)		I b 2
2481	ⅦC 5 e再堆積層	粘板岩	北上山地	(7.2)	(3.9)	(1.0)	(30.36)		I b 3
2482	ⅦC 7 f	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(6.8)	(2.9)	(0.5)	(16.51)		I b 2
2483	ⅦD 4 f再堆積層	チャート	北上山地	(4.2)	(2.8)	(1.0)	(11.34)	使用痕があるが二次加工なし。	III
2484	ⅦD 1 f I層	珪質泥岩	隼石西部	(4.7)	(2.3)	(0.8)	(8.35)		I b 2
2485	ⅦD 4 g再堆積層	硬質泥岩	隼石西部	(5.3)	(2.4)	(0.5)	(8.18)		I a 2
2487	ⅦD 4 h再堆積層	硬質泥岩	隼石西部	(4.7)	(1.9)	(0.6)	(5.61)		I a 2
2488	ⅦD 3 j	珪質極細粒凝灰岩	隼石西部	(2.8)	(2.3)	(0.3)	(2.73)		I
2489	ⅦD 3 h再堆積層	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(1.4)	(3.3)	(1.2)	(26.51)		I b 1
2491	ⅦD 3 b検出面	珪質泥岩	隼石西部	(5.4)	(2.4)	(0.6)	(9.15)		I a 2
2494	ⅦD 9 j II層黒色土	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(4.1)	(3.7)	(0.7)	(11.71)		I
2495	ⅦD 0 a褐色土中	硬質泥岩	隼石西部	(5.9)	(3.5)	(0.4)	(13.78)		I b 2
2496	ⅦD 2 g表土直下	珪質泥岩	隼石西部	(4.6)	(2.4)	(0.6)	(7.95)		I b 3
2498	ⅦD 0 c	珪質泥岩	隼石西部	(6.3)	(2.6)	(0.7)	(9.93)		I a 2
2499	ⅦD 5 h埋土上位	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(4.9)	(2.8)	(0.6)	(8.64)		I b
2501	ⅦD 6 g黄褐色土上	珪質泥岩	隼石西部	(5.9)	(3.0)	(0.9)	(18.39)		I b 1
2502	ⅦD 2 e	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(4.0)	(6.1)	(0.7)	(16.58)		II b
2505	ⅦD 7 c表土直下	珪質泥岩	隼石西部	(3.3)	(4.0)	(0.4)	(4.80)	全周加工。	II b
2507	ⅦD 6 h暗褐色土	硬質泥岩	隼石西部	(8.7)	(4.5)	(0.4)	(44.43)		I b 1
2508	ⅦD 2 g表探	珪質泥岩	隼石西部	(3.0)	(3.9)	(0.7)	(8.03)	刃部に対すつまみ部が大きい。欠損部有り。	II b
2510	ⅦD 2 g再堆積層	硬質泥岩	隼石西部	4.0	5.3	0.9	21.42	部分的。	II b
2511	ⅦD 6 g	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(4.2)	(3.4)	(1.0)	(10.71)		I
2515	ⅦE 0 a表土	硬質泥岩	隼石西部	(3.5)	(5.1)	(0.7)	(8.93)	素材面と加工面で尖頭部を1ヶ所作る。欠損部有り。	II a
2516	ⅦE 6 a	珪質泥岩	隼石西部	5.5	2.3	0.9	10.78		I b 2
2518	ⅦE 9 c表探	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(6.3)	(2.8)	(0.6)	(8.43)	使用痕があるが、二次加工はない。	I b 1
2519	ⅦE 5 a黒色土	珪質極細粒凝灰岩	隼石西部	(5.8)	(1.9)	(0.7)	(7.87)		I b 1
2521	ⅦC 1 g表土	珪質極細粒凝灰岩	隼石西部	(4.3)	(5.4)	(0.7)	(13.34)	二辺加工欠損部有り。	II b
2522	ⅦC 3 a表土	珪質泥岩	隼石西部	(4.0)	(2.3)	(0.4)	(3.30)		IV
2523	ⅦC 5 f暗褐色土	珪質泥岩	隼石西部	(4.0)	(1.7)	(0.7)	(5.66)		I
2524	ⅦC 2 h I層茶褐色土	珪質泥岩	隼石西部	(4.5)	(2.3)	(0.5)	(7.60)		I a 2
2525	ⅦC 2 j整地層下位	珪質泥岩	隼石西部	4.5	5.4	1.1	7.74	未製品。	II b
2526	ⅦD 9 h	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(6.3)	(3.3)	(0.7)	(14.22)		I a 1
2527	IX E区表土	珪質極細粒凝灰岩	隼石西部	(3.7)	(2.6)	(0.6)	(5.34)		I
2529	IX E 2 d	硬質泥岩	隼石西部	(6.8)	(1.8)	(1.0)	(12.09)		I b 1
2530	IX E 3 c	硬質泥岩	隼石西部	(6.4)	(2.0)	(0.8)	(10.39)		I a 2
2531	IX E 8 a	赤色凝灰岩	北上山地	(5.1)	(4.4)	(0.8)	(18.94)		I b

第33表 不登載石器一覧表(3)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
2534	IX C 1 j I 層	硬質泥岩	雫石西部	(5.8)	(2.8)	(0.7)	(12.46)	やや尖頭部に丸味がある。	I a 2
2536	IX D 8 h II 層	珪質泥岩	雫石西部	(5.3)	(4.0)	(0.9)	(17.07)		I b 1
2538	IX D 6 g II 層	硬質泥岩	雫石西部	(5.4)	(2.8)	(0.7)	(8.94)		I b 2
2539	IX D 0 j 表土	硬質泥岩	雫石西部	(6.8)	(2.3)	(0.6)	(12.90)		I b 2
2540	IX D 9 g II 層	粘板岩	北上山地	(4.9)	(2.0)	(0.5)	(4.77)		I b
2542	IX D 7 i I 層	硬質泥岩	雫石西部	(5.5)	(2.7)	(0.5)	(6.61)		I b
2544	IX D 2 d I 層	珪質泥岩	雫石西部	(6.0)	(2.0)	(0.7)	(9.30)		I b 3
2545	IX D 9 i I 層	粘板岩	北上山地	(6.3)	(2.7)	(0.7)	(12.37)		I b 2
2547	IX D 0 i	硬質泥岩	雫石西部	5.7	2.4	0.7	9.57		I b 1
2550	IX D 2 h II 層	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	(2.8)	(2.7)	(0.8)	(3.52)	つまみ部のみ残存。	IV
2551	IX D 4 i I 層	珪質泥岩	雫石西部	(7.2)	(3.5)	(0.9)	(19.45)		II b
2552	IX D 9 i II 層	珪質極細粒凝灰岩	雫石西部	(5.2)	(2.0)	(0.8)	(6.34)		I a 2
2555	X D 1 f 表探	硬質泥岩	雫石西部	(3.0)	(2.4)	(0.3)	(2.83)		I
2559	X D 1 j III 層	珪質極細粒凝灰岩	雫石西部	(6.6)	(4.4)	(0.6)	(13.96)	一辺のみ加工。	III
2560	X D 8 f III 層	珪質泥岩	雫石西部	(3.9)	(6.1)	(0.5)	(11.89)	二辺加工。	II b
2561	X D 2 g 再堆積層	硬質泥岩	雫石西部	(4.8)	(1.9)	(0.6)	(5.05)		I a 2
2562	X D 5 f 再堆積層	粘板岩	北上山地	(5.8)	(4.6)	(1.0)	(22.34)		III
2563	X D 0 i	珪質泥岩	雫石西部	(4.2)	(2.8)	(0.5)	(5.28)		I b 1
2565	X D 2 g 再堆積層	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	(1.8)	(2.3)	(0.7)	(2.86)	つまみ部のみ欠損。	IV
2566	X D 2 i	硬質泥岩	雫石西部	(5.8)	(1.5)	(0.5)	(6.35)		I b 2
2568	X D 2 g	硬質泥岩	雫石西部	(5.9)	(1.7)	(0.8)	(10.33)		I a 2
2569	X D 1 h III 層	珪質泥岩	雫石西部	(4.9)	(2.8)	(0.6)	(8.21)		I b 1
2572	XI 区 3 7 トレンチ	珪質泥岩	雫石西部	(6.4)	(2.4)	(0.8)	(10.09)		I a 2
2574	XI 1 a I 層	珪質泥岩	雫石西部	(6.0)	(1.8)	(0.5)	(4.85)		I a 2
2578	表探	珪質泥岩	雫石西部	(4.9)	(2.5)	(0.8)	(12.67)		I b 1
2580	No. 1 4 トレンチ	珪質極細粒凝灰岩	雫石西部	(5.4)	(2.4)	(0.5)	(7.37)		I b 2
2581	不明	珪質泥岩	雫石西部	(2.4)	(5.6)	(1.1)	(12.52)		IV
2582	不明	珪質泥岩	雫石西部	(7.0)	(2.9)	(0.7)	(13.07)		I b 1
2583	VII D 3 e 再堆積層	珪質泥岩	雫石西部	(3.3)	(1.9)	(0.8)	(3.58)		I
3835	VII C 4 j	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	5.5	2.3	1.0	15		I b 1
3836	VII C 4 j	珪質泥岩	雫石西部	7.0	2.6	0.8	20		I b 2
3843	VIII C 2 g 暗褐色土	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	(7.6)	(3.8)	(0.9)	(30)		I b 2
3991	VI C 9 h 表土	珪質凝灰質泥岩	雫石西部	(6.0)	(4.8)	(1.3)	(21.09)		III
4034	VII C 4 f 再堆積層	硬質泥岩	雫石盆地西部	3.5	6.1	1.1	20.58		II a 2
4276	VIII C 1 h - 2 住床面	凝灰質泥岩	雫石西部	(2.4)	(1.9)	(0.5)	(3.27)		I

(4) 石筥

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
3830	VI C 1 g III 層	硬質泥岩	雫石盆地西部	(5.6)	(4.8)	(1.4)	(55)		I
3838	VII D 5 i	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.6	4.6	1.8	80		

(5) 不定形石器

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
1273	IX D 8 j - 2 住ベルト	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	3.2	2.0	0.7	2.08		VI
1274	IX D 5 g 住	粘板岩	北上山地	2.5	3.6	0.7	6.12		I a 2
1303	VII D 4 g I 層	硬質泥岩	雫石西部	3.7	2.7	0.6	4.94	折断面あり。三角形状となる。Uフレの可能性もあり。	VI
1387	IX E	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	2.9	3.2	0.6	4.21		I b
1407	VII C 7 f 住埋土	流紋岩	雫石西部	3.6	2.3	1.0	4.41	摩耗タール付着。	VI
2042	V D 2 c I 層	硬質泥岩	雫石西部	3.8	5.2	0.9	12.98	素材の縁辺の角度を利用して急角度に加工。	I a 1
2049	VI D 8 d	硬質泥岩	雫石西部	3.0	3.5	0.6	7.65	交互剝離状の部分と、急角度の部分あり。	IV a
2051	VI D 0 h 暗褐色土	粘板岩	北上山地	4.4	3.0	0.7	11.21		II
2054	VI D 0 i 検出面	珪質泥岩	雫石西部	6.2	3.8	1.0	23.53	粗加工部には、使用のためと思われる微小剝離あり。	IV
2055	VI D 8 c	硬質泥岩	雫石西部	3.5	2.1	0.7	4.21		I a 1
2062	VI D 0 i II 層	珪質泥岩	雫石西部	3.7	4.4	0.8	13.11		I a 1
2070	VIII C 区表探	粘板岩	北上山地	3.7	2.6	0.9	7.50		I d 2
2071	VII C 4 g	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	4.4	2.4	0.4	6.24		I c 1
2072	VII C 7 f 再堆積層	硬質泥岩	雫石西部	3.7	5.0	1.3	19.75		I a 1
2074	VII C 7 f 再堆積層下位	珪質泥岩	雫石西部	3.3	5.0	1.3	19.75	交互剝離。階段状剝離も観察される。	III
2080	VII C 8 f 表探	粘板岩	北上山地	2.1	1.9	0.7	2.40		I a 1

第34表 不登載石器一覧表(4)

番号	出土地・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
2082	ⅦC 4 h 再堆積層下位	硬質泥質凝灰岩	磐石西部	2.5	3.7	0.6	5.45		I a 1
2083	ⅦC 4 h 再堆積層下位	硬質泥質凝灰岩	磐石西部	4.5	4.1	0.8	12.63		I a 2
2087	ⅦC 5 h 再堆積層下位	珉質泥岩	磐石西部	3.3	5.0	0.7	12.03	形態的には石匙に似るが、ノッチの作りだけ無い。	I d 1
2090	ⅦC 1 h 再堆積層下位	珉質泥岩	磐石西部	4.3	3.2	0.8	11.43	いわゆるエンドスクレーパー状。	I b 4
2092	ⅦC 5 h II層	珉質泥岩	磐石西部	3.0	3.5	0.7	10.41		I b 1
2094	ⅦC 6 h 再堆積層下位	硬質泥質凝灰岩	磐石西部	3.3	3.5	0.6	9.85		I c 2
2096	ⅦC 5 h 再堆積層	硬質泥質凝灰岩	磐石西部	3.9	2.7	0.8	7.17		I b 1
2097	ⅦC 3 h 再堆積層下位	珉質泥岩	磐石西部	3.6	2.1	0.5	4.70	石匙のつまみ部側が欠損したものと考えられる。	I d 2
2102	ⅦC 8 f 再堆積層下位	珉質泥岩	磐石西部	6.7	3.4	1.2	31.15		I b 1
2104	ⅦC 6 g 再堆積層下位	硬質泥質凝灰岩	磐石西部	2.3	3.7	0.6	6.00		I a 2
2109	ⅦC 8 f 再堆積層下位	硬質泥質凝灰岩	磐石西部	4.9	7.8	0.5	20.98	1辺は明らかに刃部。もう1辺は使用による小剥離。	I b 2
2110	ⅦC 7 f 再堆積層下位	粘板岩	北上山地	3.0	2.1	0.5	2.86	刃部の部分が狭い範囲。	I a 2
2111	ⅦC 1 h 表採	硬質泥岩	磐石西部	2.4	2.5	0.5	3.51		I c 1
2112	ⅦC 6 g 再堆積層	粘板岩	北上山地	3.5	3.4	0.8	9.82	側面観は直線状。	II
2117	ⅦC 4 f 再堆積層下位	硬質泥質凝灰岩	磐石西部	5.9	4.2	0.6	21.16		I a 2
2122	ⅦC 4 h 再堆積層下位	硬質泥岩	磐石西部	3.6	2.8	0.8	9.23	いわゆるエンドスクレーパー。	I b 4
2123	ⅦC 5 e 再堆積層	珉質泥岩	磐石西部	3.0	2.8	0.6	7.93		I d
2124	ⅦC 0 j 再堆積層	珉質泥岩	磐石西部	4.6	3.0	0.5	5.75		II
2125	ⅦC 4 h	珉質泥岩	磐石西部	5.7	4.0	1.3	29.11		IV
2128	ⅦC 1 8 トレンチ盛土	珉質泥岩	磐石西部	5.0	2.6	0.4	7.95		I c 2
2129	ⅦC 5 g 再堆積層	珉質泥岩	磐石西部	5.4	4.5	1.0	30.82		I a 2
2130	ⅦC 7 d 再堆積層下位	硬質泥岩	磐石西部	3.4	2.7	0.4	3.23	形にまとまりあり。	I e
2132	ⅦC 4 h II層	玉髓	北上山地	4.3	2.5	0.9	10.46		II
2133	ⅦC 6 f	硬質泥岩	新第三系中新統	1.8	1.8	0.4	2.47		I a 2
2135	ⅦC 4 g 再堆積層	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	5.7	2.7	0.6	0.93		II
2136	ⅦC 7 c 再堆積層下位	珉質泥岩	磐石西部	2.8	1.9	0.5	3.41		I b 4
2137	ⅦC 5 f 再堆積層下位	粘板岩	北上山地	3.7	2.8	1.0	9.09	粗雑な作り。	I c 1
2139	ⅦC 6 g 再堆積層	粘板岩	北上山地	5.1	3.0	1.7	23.73		II
2140	ⅦC 4 h 再堆積層下位	粘板岩	北上山地	4.5	3.8	0.7	14.06	側面観は鋸歯状。	III
2142	ⅦC 7 f 再堆積層	硬質泥岩	磐石西部	3.1	3.9	1.8	17.80		I a 2
2143	ⅦC 4 f 再堆積層	硬質泥岩	磐石西部	2.1	3.2	0.9	5.96	折断面あり。	I e
2144	ⅦC 区表採	硬質泥岩	磐石西部	4.5	2.5	0.4	7.29		I c 1
2145	ⅦC 7 f 再堆積層下位	粘板岩	北上山地	4.2	1.4	0.4	3.39		I d 2
2147	ⅦC 2 j I層	硬質泥岩	磐石西部	9.8	5.5	1.5	54.17		I a 2
2150	ⅦD 3 g	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	3.9	3.4	0.8	9.70		I b 4
2151	ⅦD 5 f 風倒木	粘板岩	北上山地	7.2	5.5	1.8	57.13		I b 1
2152	ⅦD 3 f II層	粘板岩	北上山地	3.9	3.3	0.3	6.19		I a 1
2154	ⅦD 2 g	硬質泥岩	磐石西部	5.8	4.8	0.7	20.87	平面観が波状となる。	I a 1
2159	ⅦD 2 i 表土直下	粘板岩	北上山地西縁	3.4	3.1	1.0	10.89		II
2160	ⅦD 4 e 表土直下	粘板岩	北上山地	4.0	6.0	1.1	24.46		I a 2
2161	ⅦD 6 f 再堆積層下位	粘板岩	北上山地	3.0	3.0	0.7	8.46		I d 1
2162	ⅦD 5 i 表土下	硬質泥岩	新第三系中新統	5.3	2.2	1.1	8.89		I a 2
2163	ⅦD 8 i	珉質泥岩	磐石西部	6.8	2.2	1.1	16.29	石匙の未成品とも考えられる平面形をしている。	I e
2165	ⅦD 4 h	硬質泥岩	新第三系中新統	5.9	2.9	0.5	10.07		I b 4
2167	ⅦD 1 a II層	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	2.7	2.4	0.7	5.83	折断面あり、全体として三角形。	I a 2
2169	ⅦD 4 h 表土直下	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	3.4	3.1	0.4	5.08		I a 2
2172	ⅦD 2 e 再堆積層	粘板岩	北上山地	2.6	2.1	1.1	8.28		I a 1
2175	ⅦD 5 i 表土直下	珉質泥岩	磐石西部	4.0	3.1	0.4	5.92	スクレーパーエッジだが、二次加工部分は一部。	I a 1
2176	ⅦD 2 e	珉質泥岩	磐石西部	4.6	2.5	1.0	13.91		II
2177	ⅦD 7 h	硬質泥質凝灰岩	磐石西部	4.0	2.9	0.9	10.59	ピエス・エスキュー又は、スクレーパーの可能性もあり。	III
2179	ⅦD 4 g 検出面	硬質泥岩	磐石西部	3.4	2.4	0.7	5.08	不連続。	I a 2
2182	ⅦD 5 i 表土直下	硬質泥岩	磐石西部	2.8	2.8	0.8	5.74	刃部と想定される部分は小剥離。	I d 1
2183	ⅦD 7 h	硬質泥岩	磐石西部	2.9	3.2	0.3	4.84	やや粗雑。	I a 2
2184	ⅦD 4 h 検出面	珉質泥岩	磐石西部	1.2	2.0	0.2	0.64		I b 2
2185	ⅦD 1 d 再堆積層	硬質泥岩	磐石西部	3.3	3.7	0.7	7.34		II
2186	ⅦD 2 g 再堆積層	粘板岩	北上山地	3.9	2.6	0.7	7.43	二次加工は一部。	I a 1
2187	ⅦD 4 h 表土直下	硬質泥岩	磐石西部	2.8	4.5	0.6	7.15	二次加工は素材縁辺の中央部に4単位ある。	VI
2190	ⅦD 1 g	硬質泥岩	磐石西部	4.8	2.6	0.9	8.86		III
2191	ⅦD 9 f	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	3.7	5.5	1.2	27.46		I a 2
2193	ⅦD 5 h 検出面	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	3.6	1.8	0.3	3.30		I d 1
2197	ⅦD 3 i 暗褐色土	硬質泥岩	磐石西部	2.2	2.9	0.8	3.89	平面観は凹刃。	III

第35表 不登載石器一覧表(5)

登録番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
2198	ⅦD 0 g	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	2.4	1.5	0.3	2.29		I a 1
2204	ⅦD 4 g	硬質泥岩	雫石西部	4.0	1.3	0.3	2.21	尖頭部を作り出す。	I a 1
2205	ⅦD 4 g 検出面	粘板岩	北上山地	3.7	1.8	0.5	3.16		I a 2
2206	ⅦD 9 c II層	粘板岩	北上山地	3.4	4.1	6.0	13.72	二次加工は部分的。	I a 2
2207	ⅦD 1 j	硬質泥岩	雫石西部	1.9	1.5	0.2	0.84	欠損又は、折断により偏平な三角形状を呈する。	I b 2
2210	ⅦD 7 c II層	硬質泥岩	雫石西部	3.3	1.7	0.3	1.57	刃の部分はやや不整である。	I a 2
2211	ⅦE 5 f 黒色土直上	硬質泥岩	雫石西部	6.3	5.9	1.9	61.49	スクレーパーエッジの部分はごく一部である。	I a 1
2214	ⅦE 4 a	硬質泥岩	雫石西部	3.3	1.3	0.8	3.50	棒状の石器である。	I a 1
2215	ⅦE 7 b 表土	硬質泥岩	雫石西部	5.3	3.4	1.3	28.98		IV
2216	ⅧC 1 i I層	硬質泥岩	雫石西部	3.5	2.6	1.1	8.66	刃部に打減痕がある。	IV
2219	ⅧC 2 g 再堆積層	硬質泥岩	雫石西部	2.0	1.8	0.6	3.22	二次加工は丁寧である。	I d 2
2222	Ⅷ 1 f	硬質泥岩	雫石西部	7.4	4.3	1.4	41.44		IV
2223	ⅧC 4 f 暗褐色土	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	1.7	1.6	0.7	1.46	折断面とかかわって三角形状を呈するタイプ。	I a 1
2224	ⅧC 1 j 再堆積層	珪質泥岩	雫石西部	2.8	3.0	0.4	4.13		I b 2
2227	ⅧC 3 f	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	3.9	2.0	0.6	5.41	典型的な尖頭部状石器である。	I e
2228	ⅧC 4 f 暗褐色土	硬質泥岩	雫石西部	5.6	3.4	0.9	15.42		IV
2234	ⅧC 1 i I層	粘板岩	北上山地	3.0	1.9	0.5	3.45	形態的には石匙のつまみ部側が大きく欠損したよう。	I d 2
2236	ⅧC区粗	珪質極細粒凝灰岩	雫石西部	4.2	3.4	1.2	11.49		II
2238	ⅧC 4 f 暗褐色土	硬質泥岩	雫石西部	3.2	2.0	0.8	5.51	刃部は一部分で、折断面が関わる。	I a 1
2241	ⅧC 1 j 整地層	硬質泥岩	雫石西部	3.6	2.6	0.5	6.73		I b 2
2245	ⅧD 8 i II層	粘板岩	北上山地	3.1	1.7	0.5	3.52	折断面または欠損辺が2つあり、全体としては三角形状。	I a 2
2248	ⅧD 0 i I層	珪質泥岩	雫石西部	6.8	3.4	1.1	25.64	石匙のつまみ部を作り出すためのノッチか。	V
2250	ⅧD 2 c	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	2.9	3.7	1.0	15.70	折断面あり、欠損品とも考えられる。	I a 3
2255	ⅦE 0 a 表土	玉髓	北上山地	3.8	1.8	0.7	6.36		I a 2
2257	ⅦE 0 b 表土	粘板岩	北上山地	4.8	2.9	0.6	9.87		I c 1
2259	ⅦE区	珪質泥岩	雫石西部	6.7	4.8	1.1	33.09		I c 2
2260	IX E 7 a	硬質泥岩	雫石西部	3.0	2.1	0.3	2.15	素材の形をそのまま残し、やや粗雑。	I b 2
2266	IX D 1 e I層	硬質泥岩	雫石西部	3.3	2.7	0.9	7.99		I b 2
2267	IX D 1 j I層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.6	3.3	0.9	12.73	典型的な播器。	I a 1
2270	IX D 0 i	硬質泥岩	雫石西部	4.8	3.8	0.9	1.56		I a 2
2273	IX D 2 g I層	硬質泥岩	雫石西部	6.1	4.1	1.1	25.18		I a 1
2276	IX D 4 h	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	4.4	5.4	1.1	22.87	不整なスクレーパーエッジ。	I a 1
2285	IX D 7 h I層	硬質泥岩	雫石西部	6.5	4.9	0.8	21.83		I c 2
2287	IX D 5 g I層	流紋岩	雫石西部	2.7	3.6	0.7	7.56		I a 2
2288	IX E 5 b	硬質泥岩	雫石西部	4.0	3.9	1.6	17.07		I a 2
2291	IX E 1 a	硬質泥岩	雫石西部	4.3	4.3	0.4	3.57	偏平で細長い形態をしている。	I a 1
2292	IX E 5 a	硬質泥岩	雫石西部	3.6	2.3	0.9	7.49	二次加工の剥離は4単位程度。	I a 1
2294	IX E 2 a I層	凝灰岩	雫石西部	4.3	2.8	0.6	9.05		VI
2300	IX D 3 h II層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	5.3	3.2	1.3	19.81		I a 2
2301	IX D 1 d I層	凝灰岩	雫石西部	3.5	1.6	0.6	3.34	細長い素材。両端に尖頭部があり、あるいは石錐となる。	I a 2
2305	IX D 0 g	硬質泥岩	雫石西部	4.3	3.9	0.7	25.75		I b 2
2308	IX D 1 h I層	粘板岩	北上山地	4.3	2.9	0.5	6.60	欠損品の可能性。	I d 2
2310	IX D 9 g I層	珪質極細粒凝灰岩	雫石西部	2.2	2.6	0.7	3.06	部分両面加工石器ともいべきもの。	I a 4
2311	IX D 3 f I層	珪質泥岩	雫石西部	6.4	5.7	1.4	27.61		IV
2312	IX D 3 h I層	硬質泥岩	雫石西部	3.0	2.5	0.5	3.48	粗雑な作り。	I a 2
2313	IX D 4 d II層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.8	2.4	1.0	10.48		IV
2318	IX C 2 g I層	硬質泥質凝灰岩	雫石西部	2.7	2.6	0.9	6.37	2つの刃部で尖頭部となる。	I d 4
2319	IX D 8 j I層	流紋岩	雫石西部	2.8	2.7	0.7	3.25	2つの刃部で尖頭部となる。	I b 2
2323	IX D 5 i	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	2.5	2.5	0.6	3.37	裏面からの剥離はネガティブが発達している。	I b 2
2325	IX D 1 h III層	硬質泥岩	雫石西部	3.7	2.7	0.8	7.53		I a 2
2332	IX D 3 h 再堆積層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.3	3.1	1.4	15.32	形態的には打製石斧の基部側のようにも見える。	IV
2333	IX D 8 d 表土	粘板岩	北上山地	4.0	2.4	0.7	10.25		I c 2
2336	IX D 3 h II層	珪質泥岩	雫石西部	4.6	2.6	0.6	6.32		I a 2
2342	2 0 トレンチ盛土	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	4.1	4.2	0.8	17.87		I a 2
2345	表探	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	2.9	4.8	0.9	15.12	幅の広い剥離に微小剥離が伴う。	I a 2
2347	不明	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.5	1.9	0.7	4.93	2つの刃部で尖頭部を形成する。横断面形はやや偏平。	I b 2
2348	不明	硬質泥岩	雫石西部	5.0	3.7	0.9	18.39	鋸歯縁がやや不整。	II
2349	不明	珪質泥岩	雫石西部	2.3	2.5	0.4	3.25	薄く偏平。折断面がかかわる。	I c 2
2351	不明	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	4.6	5.9	1.4	32.36	粗雑な作り。	I a 2
2352	不明	硬質泥岩	雫石西部	5.1	2.4	0.7	7.46		I b 1
2353	不明	粘板岩	北上山地	2.8	2.0	0.6	3.76	小型の播器という印象だが、粗雑な作り。	I b 4

第36表 不登載石器一覧表(6)

探番号	出土地点・層位	石 質	産 地	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	分類
2364	ⅦD 3 e 再堆積層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	4.8	2.4	0.6	7.99	1 辺は折断面。対向する刃部は両面加工。	I d 2
2365	ⅦD 5 a I 層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	6.9	4.8	1.0	34.90		I a 2
2367	ⅦD 5 g 再堆積層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	4.2	1.6	0.6	5.62	丁寧な作りであるが、石匙の欠損品とも考えられる。	I d 2
2369	ⅦD 5 h	硬質泥岩	雫石西部	3.6	4.8	0.9	13.05	横断面形は鈍角三角形状。	I a 2
2371	ⅦD 3 g 再堆積層	硬質泥岩	雫石西部	6.4	6.4	1.4	50.10		I b 2
2372	ⅦD 5 h	硬質泥岩	雫石西部	2.9	1.6	0.3	1.19	2 つの刃部で尖頭部を形成する。	I a 2
2373	ⅦC 0 c 黄褐色土	硬質泥岩	雫石西部	2.0	1.2	0.2	0.62	欠損品の可能性。	I a 2
2374	ⅦD 4 h 表土直下	硬質泥岩	雫石西部	4.0	2.2	0.6	6.10		I c 1
2376	ⅦC 2 g I 層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.9	3.2	1.0	11.07	欠損品の可能性。	I e
2381	ⅦC 5 h 再堆積層下位	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.5	4.4	1.0	15.85		I a 2
2384	ⅦC 5 i I 層下位	凝灰岩	雫石西部	9.0	4.1	1.3	30.04		Ⅲ
2385	ⅨD 5 g II 層	硬質泥岩	雫石西部	4.6	4.0	0.9	13.62		I a 3
2390	ⅨD 5 g I 層	凝灰岩	雫石西部	2.9	2.8	0.4	3.62		I e
2392	ⅨD 3 h I 層	珪質泥岩	雫石西部	5.4	3.1	0.8	12.26		I a 4
2393	X D 5 f II 層	珪質泥岩	雫石西部	2.9	2.5	0.9	8.27		I c 1
2394	X D 2 i	硬質泥岩	雫石西部	4.1	3.4	0.7	9.59		I c 1
2395	X D 2 h	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.9	3.2	0.6	8.70		I a 1
2412	ⅨD 5 i 住埋土	硬質泥岩	雫石西部	2.3	1.3	0.4	1.31		I a 1
2615	ⅦD 0 i	粘板岩	北上山地	3.0	1.5	0.3	1.88		I c 1
2616	ⅦD 9 d 暗褐色土	硬質泥岩	雫石西部	3.6	2.0	0.4	2.96		I b 2
2317	ⅦD 9 c 再堆積層	硬質泥岩	雫石西部	4.7	2.6	0.8	11.13	石匙の未製品?。スクレーパー?。	V
2623	ⅦD 0 ライトレンヂ	硬質泥岩凝灰岩	雫石西部	3.3	4.5	0.9	11.52		I c 2
2625	ⅦD 3 e 再堆積層	砂質粘板岩	北上山地	4.1	2.8	0.9	8.85		I a 2
2627	ⅦD 9 h 暗褐色土	硬質泥岩	雫石西部	2.3	1.7	0.3	1.40		I b 2
2631	ⅦD 4 g 再堆積層	砂質粘板岩	北上山地	2.1	1.7	0.5	1.63		I b 2
2632	ⅦD 7 d II 層	砂質粘板岩	北上山地	6.8	3.6	1.3	32.65		I a 2
2638	ⅦD 8 h II 層	硬質泥岩凝灰岩	雫石西部	4.3	2.4	0.5	5.60		I c 1
2640	ⅦD 3 h II 層暗褐色土	粘板岩	北上山地	1.8	2.3	0.6	2.19		I c 1
2644	ⅦC 1 g 表土	硬質泥岩凝灰岩	雫石西部	3.2	5.3	0.6	9.56		I b 4
2646	ⅦC 2 g 暗褐色土	硬質泥岩	雫石西部	3.3	3.6	0.9	10.56		I a 2
2648	ⅦD 9 j II 層	硬質泥岩	雫石西部	2.8	1.1	0.2	0.92	石錐?	Ⅶ
2651	ⅨD 3 j II 層	粘板岩	北上山地	5.1	3.0	0.9	13.10		I b 2
2653	ⅨD 3 b II 層	珪質泥岩	雫石西部	2.9	3.4	0.5	6.00		I a 2
2657	ⅨD 9 g I 層	粘板岩	北上山地	5.3	3.2	0.7	15.85		I c 1
2666	Na. 2 2 トレンヂ	粘板岩	北上山地	2.6	1.7	0.3	1.78		I b 2
2667	ⅦC 3 h 暗褐色土	珪質泥岩	雫石西部	2.6	3.9	0.7	7.14		I b 1
2680	ⅦC 5 j I 層	砂質粘板岩	北上山地	2.6	1.8	0.4	1.53		I b 2
2681	ⅨC 2 g I 層	粘板岩	北上山地	2.5	2.3	0.5	2.43		I b 2
2682	ⅨD 8 f II 層	硬質泥岩凝灰岩	雫石西部	3.0	3.1	0.9	8.70		I C 1
2685	不明	流紋岩	雫石西部	4.7	3.5	0.7	8.15		I a 2
2773	Na. 2 4	赤色凝灰岩	北上山地	9.1	6.2	1.4	11.29		Ⅳ
3979	V C 0 h I 層	珪質泥岩	雫石西部	7.3	3.2	1.2	30.20		I b 2
3980	V C 9 g	珪質凝灰質泥岩	雫石西部	7.3	2.8	0.8	16.69		I c 1
3981	V C 0 g I 層	珪質泥岩	雫石西部	7.3	4.6	0.8	28.12		Ⅱ
3982	V D 8 d 表土	硬質泥岩	雫石盆地西部	5.1	4.4	1.2	20.85		I a 1
3985	V D 1 d I 層	硬質泥岩	雫石盆地西部	5.0	3.0	0.9	13.22		I a 2
3986	V D 1 d II 層	珪質凝灰質泥岩	雫石西部	3.3	1.6	0.5	2.60		I b 2
3987	ⅦC 区	粘板岩	北上山地	3.7	3.6	1.1	11.56		I a 2
3988	ⅦC 0 j I 層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.6	2.7	0.5	6.08		I c 2
3989	ⅦC 3 h II 層	硬質泥岩	雫石盆地西部	6.3	3.8	1.2	18.86		I a 2
3990	ⅦC 区粗	硬質泥岩	雫石盆地西部	7.3	4.4	1.3	34.31		Ⅳ
3992	ⅦC 4 f トレンヂ盛土	珪質泥岩	雫石西部	7.0	3.5	1.4	28.05		Ⅳ
3994	ⅦD 0 h 暗褐色土	硬質泥岩	雫石盆地西部	3.2	2.4	0.6	3.67		I b 2
3995	ⅦD 7 c III 層	粘板岩	北上山地	4.8	2.8	0.6	12.71		I c 2
3996	ⅦC 2 e II 層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	5.4	3.7	1.2	20.40		I c 1
3998	ⅦD 9 c 表土直下	粘板岩	北上山地	4.1	2.1	0.7	8.01		Ⅳ
4000	ⅦD 9 c 表土直下	硬質泥岩	雫石西部	3.7	2.9	0.8	11.39		Ⅳ
4001	ⅦD 0 h 暗褐色土	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	3.9	2.9	0.7	7.78		I a 2
4002	ⅦD 2 e II 層	珪質泥岩	雫石西部	2.2	1.8	0.4	2.32		I b 1
4003	ⅦD 8 d 暗褐色土	珪質凝灰質泥岩	雫石西部	4.9	3.6	0.7	13.64		I a 2
4006	ⅦD 0 b I 層	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	2.8	2.7	1.1	3.09		I b 2

第37表 不登載石器一覧表(7)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
4008	ⅦD 0 g	珪長質細粒凝灰岩	磐石西部	3.4	1.9	0.5	3.37		I d 5
4010	ⅦD 7 a 表土	硬質泥岩	磐石盆地西部	2.8	2.9	0.5	5.24		I b 2
4011	ⅦD 8 c I 層	硬質泥岩	磐石盆地西部	3.5	2.0	0.5	4.54		I d 5
4012	ⅦC 5 g	珪質泥岩	磐石西部	4.0	2.6	0.4	6.72		I b 2
4013	ⅦC 6 g II 層	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	2.6	2.5	1.1	5.19		II
4015	ⅦC 3 h II 層	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	5.8	2.0	0.6	8.41		I c 2
4016	ⅦC 0 g 再堆積層	粘板岩	北上山地	6.5	3.4	0.7	24.06		I c 1
4017	ⅦC 4 h II 層	珪質凝灰質泥岩	磐石西部	3.7	1.8	0.4	2.84		II
4018	ⅦC 4 c II 層	硬質泥岩	磐石盆地西部	6.2	4.8	1.3	39.66		I d 2
4019	ⅦC 6 e	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	5.3	3.6	0.6	11.73		I a 2
4022	ⅦC 7 f 再堆積層	硬質泥岩	磐石盆地西部	3.4	3.1	0.5	5.34		I c 2
4024	ⅦC 区表探	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	10.1	7.3	1.2	75.51		I a 3
4025	ⅦC 4 d 表探	硬質泥岩	磐石盆地西部	9.2	4.6	1.3	63.63		I c 3
4029	ⅦC 5 g 再堆積層	珪長質細粒凝灰岩	磐石西部	2.7	2.5	0.8	6.91		I a 1
4031	ⅦC 7 f 再堆積層	珪長質細粒凝灰岩	磐石西部	3.5	2.4	0.8	6.67		I c 1
4036	ⅦC 4 g 再堆積層	珪質泥岩	磐石西部	4.7	3.5	1.5	23.77		I a 2
4039	ⅦC 6 f 再堆積層	粘板岩	北上山地	4.5	2.8	0.6	8.51		I d 5
4040	ⅦC 6 g 再堆積層	硬質泥岩	磐石盆地西部	4.5	2.7	0.7	8.50		I c 5
4042	ⅦC 6 f	硬質泥岩	磐石盆地西部	2.2	0.9	0.3	0.74		I a 1
4043	ⅦC 5 j I 層	粘板岩	北上山地	3.0	2.5	0.5	3.52		I b 2
4045	ⅦC 7 f 再堆積層	珪長質細粒凝灰岩	磐石西部	3.3	2.3	0.6	3.81		I b 2
4046	ⅦC 6 f 再堆積層	珪長質細粒凝灰岩	磐石西部	4.1	3.7	0.9	11.87		VI
4047	ⅦC 5 g	硬質泥岩	磐石盆地西部	5.0	3.4	0.8	14.01		I a 1
4049	ⅦC 4 i 再堆積層	チャート質粘板岩	北上山地	2.3	2.4	0.5	2.84		I b 2
4052	ⅦC 5 h II 層	珪質凝灰質泥岩	磐石西部	3.4	2.2	1.1	7.74		I a 2
4053	ⅦC 3 g 再堆積層	珪質凝灰質泥岩	磐石西部	5.3	3.0	1.3	19.08		VI
4055	ⅦD 0 c II 層	珪質泥岩	磐石西部	1.2	3.5	1.2	6.38		I a 1
4056	ⅦD 0 c II 層	硬質泥岩	磐石盆地西部	3.0	1.8	0.7	1.86		I b 2
4060	ⅦD 3 i II 層	珪質泥岩	磐石西部	4.0	2.7	0.8	11.76		I b 2
4061	ⅦD 1 g 表土	珪質泥岩	磐石西部	5.4	3.4	0.6	10.00		I b 2
4062	ⅦD 6 h 表土直下	珪質凝灰質泥岩	磐石西部	5.5	1.5	0.7	5.91		I b 2
4064	ⅦD 3 h 再堆積層	粘板岩	北上山地	4.3	1.7	0.6	5.04		I c 5
4065	ⅦD 6 a 表土直下	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	6.0	3.0	0.8	14.47		I c 4
4066	ⅦD 8 i	粘板岩	北上山地	4.1	3.3	0.8	8.30		I b 2
4067	ⅦD 1 g II 層	硬質泥岩	磐石盆地西部	4.7	2.4	0.7	10.43		I c 2
4068	ⅦD 3 e 再堆積層	硬質泥岩	磐石盆地西部	3.1	2.0	0.6	3.71		I c 5
4069	ⅦD 0 c	粘板岩	北上山地	4.5	3.3	1.0	15.83		I c 1
4070	ⅦD 0 g	硬質泥岩	磐石盆地西部	3.9	3.6	1.1	14.80		III
4071	ⅦD 0 g	硬質泥岩	磐石盆地西部	4.3	2.5	0.7	11.08		I d 1
4072	ⅦD 0 g	珪長質細粒凝灰岩	磐石西部	3.3	3.2	0.7	7.76		I a 1
4073	ⅦD 3 g 表土直下	粘板岩	北上山地	3.9	1.7	0.6	5.28		I c 5
4074	ⅦD 0 b 表土直下	珪長質細粒凝灰岩	磐石西部	3.7	2.5	1.0	8.13		I a 2
4076	ⅦD 1 g 表土直下	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	4.0	1.9	1.2	9.80		I c 2
7077	ⅦD 6 h 表土直下	硬質泥岩	磐石盆地西部	4.7	3.3	0.9	9.75		VI
4078	ⅦD 8 i	硬質泥岩	磐石盆地西部	4.5	2.5	0.6	7.87		I c 1
4079	ⅦD 3 h 表土直下	硬質泥岩	磐石盆地西部	3.2	2.5	0.4	3.98		I b 2
4082	ⅦD 1 g	硬質泥岩	磐石盆地西部	5.5	3.4	0.6	10.99		I c 1
4083	ⅦD 1 g	硬質泥岩	磐石盆地西部	5.4	2.9	0.6	11.22		I b 5
4085	ⅦD 4 g 検出面	硬質泥岩	磐石盆地西部	2.9	3.3	0.8	5.88		I b 2
4087	ⅦD 2 g 表土直下	粘板岩	北上山地	5.5	2.0	1.3	12.18		I a 3
4088	ⅦD 6 c 斜面トレンチ	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	5.3	2.6	1.0	17.57		I d 1
4089	ⅦD 1 j 表土直下	粘板岩	北上山地	3.1	3.0	0.5	5.06		I c 1
4091	ⅦD 3 h II 層	珪質泥岩	磐石西部	3.9	2.7	0.7	7.77		I c 5
4093	ⅦD 4 j	珪質泥岩	磐石西部	4.7	3.5	1.4	29.44		I a 2
4094	ⅦD 5 a I 層	珪長質細粒凝灰岩	磐石西部	4.0	3.7	0.5	8.64		I a 2
4095	ⅦD 2 g 表土	硬質泥岩	磐石西部	4.7	4.0	1.0	18.25		I a 2
4096	ⅦD 2 g I 層	珪質泥岩	磐石西部	3.7	3.0	0.8	10.05		I a 1
4097	ⅦD 2 j 表土直下	硬質泥岩	磐石西部	2.7	1.7	0.6	2.78		I a 1
4100	ⅦD 1 f 表土	硬質泥岩	磐石西部	5.6	2.7	0.8	11.88		IV
4101	ⅦD 2 g	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	6.5	5.3	1.5	41.90		I a 2
4102	ⅦD 0 c II 層	粘板岩	北上山地	5.3	4.2	1.6	36.76		I a 2

第38表 不登載石器一覽表(8)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
4106	VII D 4 h 表土	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	5.3	3.3	1.2	20.77		I c 4
4110	VII D 7 j 表探	硬質泥岩	礮石西部	8.2	4.0	1.0	31.79		I c 1
4111	VII D 5 i	硬質泥岩	礮石西部	4.9	4.1	1.4	24.75		I d 5
4113	VII D 0 c	硬質泥岩	礮石西部	8.3	3.4	0.9	30.87		I c 2
4115	VII E 5 f 黒色土直下	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	4.5	2.6	0.6	9.77		I b 2
4116	VII E 9 c 表探	硬質泥岩	礮石盆地西部	4.5	2.8	0.9	16.08		I c 1
4121	VIII C 4 e	珪質泥岩	礮石西部	3.1	2.4	0.7	2.25		I c 2
4125	VIII C 1 f 表土	珪長質細粒凝灰岩	礮石西部	8.9	4.9	1.2	33.87		I a 2
4127	VIII D 9 i II層	珪質泥岩	礮石西部	3.6	2.3	0.6	4.07		I b 2
4128	VIII D 3 j	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	3.8	2.6	0.7	7.40		I d 4
4130	VIII D 1 a II層	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	4.3	2.8	1.0	10.03		IV
4136	IX D 5 g II層	珪長質細粒凝灰岩	礮石西部	4.8	3.1	0.8	10.94		I d 4
4137	IX D 2 g I層	チャート質粘板岩	北上山地	3.7	2.0	0.7	4.68		I a 2
4141	IX D 4 i II層	硬質泥岩	礮石西部	2.1	2.1	0.4	2.33		I b 2
4143	IX D 2 h	硬質泥岩	礮石西部	4.5	4.0	1.0	14.27		I a 2
4145	IX D 5 i II層	硬質泥岩	礮石西部	2.9	2.8	0.7	4.44		I d 1
4147	IX D 3 h II層	硬質泥岩	礮石西部	3.8	3.9	0.9	14.39		IV
4152	X D 4 g II層	珪質凝灰質泥岩	礮石西部	2.8	1.4	0.5	1.87		I c 2
4153	X D 5 g	粘板岩	北上山地	3.7	2.3	0.6	5.39		I e
4156	X D 5 g II層	硬質泥岩	礮石盆地西部	2.8	4.3	0.7	9.16		I d 5
4160	不明	硬質泥岩	礮石盆地西部	7.7	5.3	0.8	32.05		I b 2
4161	X D 5 g	硬質泥岩	礮石盆地西部	2.8	2.0	0.6	3.18		I e
4164	X D 4 h 表土	硬質泥岩	礮石盆地西部	3.5	3.3	0.7	7.68		I a 1
4166	X I C 4 e II層	チャート質粘板岩	北上山地	2.2	2.7	0.7	6.34		IV
4169	No. 1 3 トレンチ盛土	硬質泥岩	礮石盆地西部	3.7	4.8	0.8	12.85		I c 1
4170	表探	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	2.8	4.5	1.3	11.85		I a 2
4171	No. 1 5 トレンチ	珪質泥岩	礮石西部	3.4	2.8	0.8	7.77		IV
4172	表探	珪質凝灰質泥岩	礮石西部	2.8	2.1	0.4	2.70		I c 1
4173	表探	珪質泥岩	礮石西部	3.5	1.7	0.4	3.39		I d 4
4174	No. 1 3 トレンチ盛土	硬質泥岩	礮石盆地西部	6.3	2.9	0.9	21.44		I c 2
4176	表探	珪質凝灰質泥岩	礮石西部	6.4	5.0	1.2	31.82		I b 2
4178	No. 1 3 トレンチ盛土	硬質泥岩	礮石盆地西部	3.0	2.0	0.5	4.16		I a 2
4278	C 8 h II層	硬質泥岩	礮石西部	2.8	2.1	0.4	4.32		I b 1

(6) 磨製石斧

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
2418	VII D 6 g 土坑埋土	硬質泥岩凝灰岩	礮石西部	(1.7)	(1.8)	(1.0)	(4)		
3605	VE 6 a	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(10.3)	(4.7)	(2.7)	(222)		I
3606	VII C 6 a I層	粘板岩	北上山地	(10.2)	(2.3)	(1.2)	(33)		
3607	VII D 9 d 表土直下	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(8.9)	(2.6)	(1.3)	(41)		
3608	VII D 0 h 暗褐色土	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(4.4)	(3.4)	(1.1)	(26)		
3611	VII D 4 j	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(4.6)	(5.2)	(2.6)	(76)		
3614	VII D 6 g 再堆積層上位	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	8.8	4.4	2.5	153	刃部欠損。	I
3617	VII D 1 g	粘板岩	北上山地	(6.3)	(5.3)	(3.0)	(135)		
3620	VII D 2 e 再堆積層	珪質凝灰岩質硬砂岩	北上山地	8.8	5.2	2.9	190	刃部欠損。	I
3621	VII D 1 g II層	珪質凝灰岩質硬砂岩	北上山地	(4.6)	(3.1)	(2.4)	(40)		
3622	VII E 7 c	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	11.3	4.5	2.6	207	擦り切り手法。	I
3623	VII E 6 b	安山岩	北上山地	(7.5)	(4.6)	(2.5)	(148)	基部側欠損。	I
3625	VII D 9 i II層	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(2.5)	(3.1)	(1.8)	(15)		
3628	IX D 8 j I層	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(7.4)	(4.5)	(1.8)	(98)	刃部欠損。	I
3631	IX E 2 a	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(4.7)	(4.4)	(1.8)	(68)	基部残存。	
3632	IX E 1 b 表土	珪質凝灰岩質硬砂岩	北上山地	7.1	4.0	2.0	91	基部側欠損。	II
3633	X I C 7 f II層	粘板岩	北上山地	(4.2)	(2.7)	(1.6)	(30)		
3635	No. 1 4 トレンチ盛土	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(4.2)	(2.6)	(0.7)	(16)		
3640	IX E 0 h	凝灰岩	北上山地	(4.4)	(3.8)	(2.2)	(46)		
3636	V C 0 g I層	凝灰岩	北上山地	(6.0)	(3.7)	(1.5)	(43)		
3616	VII C 5 j I層	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(7.8)	(4.9)	(2.4)	(86)		

第39表 不登載石器一覽表(9)

(7) 石鍾

整理番号	出土地点・層位	石 質	産 地	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	分類
1546	VII D 5 i	凝灰岩	北上山地	7.7	5.4	1.8	110		I
1550	VII D 4 g I層	輝石岩	北上山地	8.0	8.1	2.9	260		I
1554	VII D 5 g	凝灰岩	北上山地	6.0	5.3	1.0	50		I
1563	VII D 5 g	凝灰岩	北上山地	7.1	9.7	1.3	120		II
1564	VIII C 2 j I層	凝灰岩	北上山地	6.1	4.9	1.7	85		I
1566	VII D 0 h	粘板岩	北上山地	6.9	5.2	1.5	80		I
1575	VII C 2 j I層	凝灰岩	北上山地	6.2	4.7	1.2	50		I
1586	VII D 4 g I層	凝灰岩	北上山地	7.6	6.4	2.4	180		I
3130	VI C 8 i	硬砂岩	北上山地	5.2	6.5	2.1	100		II
3131	VI C 8 i	凝灰質千枚岩	北上山地	6.4	6.1	1.7	60		II
3134	VI D 6 i 黒色土	凝灰岩千枚岩	北上山地	7.8	7.7	2.1	170		I
3135	VI D 8 a 表土直下	凝灰岩千枚岩	北上山地	4.6	5.7	1.5	60		II
3136	VI D 9 c 表土直下	凝灰岩千枚岩	北上山地	6.9	5.2	1.3	70		I
3137	VI D 6 i	凝灰岩千枚岩	北上山地	6.5	4.7	1.6	75		I
3138	VI D 0 b I層	凝灰岩千枚岩	北上山地	6.5	6.1	1.2	70		II
3139	VI D 9 d	凝灰岩千枚岩	北上山地	5.7	7.1	1.7	95		II
3140	VI D 0 b	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.2	4.7	1.8	65		I
3143	VI D 7 i	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.5	7.8	2.1	145		II
3144	VI D 7 i	凝灰質千枚岩	北上山地	6.9	7.0	2.0	160		I
3145	VI D 0 d	粘板岩質千枚岩	北上山地	5.2	6.3	1.2	50		II
3148	VI D 6 i	凝灰質千枚岩	北上山地	6.6	5.3	1.2	60		I
3149	VI D 8 c 表土直下	凝灰質千枚岩	北上山地	7.5	5.5	1.5	95		I
3150	VI C 6 g	硬砂岩	北上山地	7.0	7.4	2.3	110		I
3152	VI C 7 e 再堆積層	硬砂岩	北上山地	8.5	13.0	2.3	450		II
3153	VI C 8 h 表採	チャート質千枚岩	北上山地	5.9	4.0	1.2	40		I
3154	VI C 6 g 表採	チャート質千枚岩	北上山地	4.4	7.9	1.4	75		II
3156	VII D 5 f 再堆積層	凝灰質千枚岩	北上山地	7.4	5.4	1.6	100		I
3157	VI C 5 f I層	ホルンフェルス	北上山地	6.5	7.8	1.8	140		II
3158	VI C 7 f	凝灰質千枚岩	北上山地	5.8	7.3	1.8	85		II
3159	VI C 8 g	凝灰質千枚岩	北上山地	5.5	6.9	1.9	110		I
3160	VI C 8 d 再堆積層	粘板岩質千枚岩	北上山地	4.5	6.8	1.7	75		II
3162	VI C 7 f I層下位	凝灰質千枚岩	北上山地	7.0	6.4	1.7	105		I
3163	VI C 3 f 表土	チャート質千枚岩	北上山地	6.7	6.0	1.8	130		I
3166	VI C 9 e I層	凝灰質千枚岩	北上山地	5.9	5.4	1.7	90		II
3170	VI C 8 c 再堆積層下位	緑色凝灰岩	奥羽山脈	7.0	6.4	2.7	105		II
3172	VI C 8 d 再堆積層	凝灰質千枚岩	北上山地	5.3	5.2	1.4	40		I
3173	VI C 9 e I層	凝灰質千枚岩	北上山地	6.9	9.1	1.5	145		II
3175	VI C 0 i 再堆積層	粘板岩質千枚岩	北上山地	5.3	6.0	1.4	60		II
3176	VI C 0 g 表土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.1	4.9	1.6	65		I
3177	VI C 6 d 再堆積層	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.9	4.7	1.6	75		III
3179	VI C 9 e I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.4	6.3	1.1	110		II
3181	VI C 6 f	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.4	6.5	1.2	90		I
3182	VI C 0 j 再堆積層上面	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.2	4.7	1.4	60		I
3183	VI C 3 f 表土	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.8	5.3	1.5	80		I
3184	VI C 3 h 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	(5.4)	8.5	1.6	(95)		II
3185	VI C 7 f I層下位	砂質凝灰岩	磐石西部	4.4	5.3	1.0	40		I
3186	VI C 4 g 表土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	4.7	7.1	1.4	65		II
3187	VI C 1 i I層茶褐色土	硬砂岩	北上山地	5.3	6.0	1.5	65		II
3189	VI C 5 f 再堆積層下位	粘板岩質千枚岩	北上山地	5.5	4.9	1.4	60		II
3190	VI C区表採	粘板岩質千枚岩	北上山地	4.5	7.0	1.5	55		I
3191	VI C 5 h II層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	4.7	6.6	1.2	60		II
3193	VI C 5 g 再堆積層	硬砂岩	北上山地	7.8	5.3	1.1	135		I
3195	VI C 4 f 再堆積層	硬砂岩	北上山地	5.3	8.0	1.9	90		II
3196	VI C 4 g	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.0	6.0	2.1	115		I
3197	VI C 6 f 再堆積層下位	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.1	5.0	2.1	95		I
3198	VI C 5 h 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	9.9	5.2	1.3	100		III
3199	VI C 5 i I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.3	4.8	2.0	105		I
3201	VI D 5 g	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.8	8.1	1.8	105		II
3203	VI C 3 f 暗褐色土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.3	5.5	1.4	55		II
3204	VI D 2 g 検出面	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.4	6.2	2.3	150		I

第40表 不登載石器一覽表(10)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
3205	ⅦD 7 c II層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.8	8.5	1.8	165		II
3206	ⅦD 3 f II層	粘板岩質千枚岩	北上山地	9.0	5.4	1.7	130		III
3207	ⅦD 7 f 再堆積層	粘板岩質千枚岩	北上山地	8.3	5.6	1.9	100		I
3208	ⅦD 7 f 再堆積層	粘板岩質千枚岩	北上山地	5.5	5.8	1.1	55		II
3209	ⅦD 7 f 再堆積層	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.3	5.0	1.5	100		I
3212	ⅦD 7 i 暗褐色土	凝灰質千枚岩	北上山地	5.2	6.5	1.7	65		II
3213	ⅦD 7 j 表土直下	赤色凝灰岩	北上山地	7.0	5.5	1.0	65		I
3214	ⅦD 4 f 再堆積層	凝灰質千枚岩	北上山地	6.2	5.3	1.6	65		I
3215	ⅦD ライトレンヂ	凝灰質千枚岩	北上山地	7.2	5.0	1.3	80		I
3216	ⅦD 5 f 再堆積層	凝灰質千枚岩	北上山地	6.0	6.1	1.7	100		I
3217	ⅦD 6 i 再堆積層	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.4	6.3	1.9	120		II
3218	ⅦD 6 h 表土	粘板岩質千枚岩	北上山地	8.6	6.4	2.0	145		I
3219	ⅦD 1 a 赤色土上面	凝灰質千枚岩	北上山地	5.7	5.6	1.6	70		II
3220	ⅦD 0 g 表土直下	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.9	4.7	2.3	100		I
3224	ⅦD 区	凝灰質千枚岩	北上山地	6.3	6.4	1.8	75		I
3225	ⅦD 3 e 再堆積層	凝灰質千枚岩	北上山地	4.9	7.9	1.2	65		II
3226	ⅦD 4 f 再堆積層	凝灰質千枚岩	北上山地	4.4	7.2	1.8	60		II
3227	ⅦD 3 f II層	凝灰質千枚岩	北上山地	6.1	4.6	1.4	50		I
3229	ⅦD 8 e II層	輝石安山岩	北上山地	7.8	7.4	2.0	200		I
3230	ⅦD 2 e	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.4	4.8	1.0	45		I
3231	ⅦD 2 g I層	凝灰質千枚岩	北上山地	6.5	6.2	1.2	63		II
3232	ⅦD 0 i	凝灰質千枚岩	北上山地	7.4	5.9	1.7	75		I
3233	ⅦD 1 h	凝灰質千枚岩	北上山地	7.0	5.5	1.8	110		I
3234	ⅦD 1 g I層	硬砂岩	北上山地	5.5	6.0	1.3	60		II
3238	ⅦD 6 g II層	凝灰質千枚岩	北上山地	5.7	7.2	1.7	85		II
3239	ⅦD 5 h 検出面	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.7	5.1	1.3	60		I
3240	ⅦD 8 i	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.8	7.0	2.0	75		II
3242	ⅦD 5 f 風倒木	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.4	5.8	1.2	90		I
3244	ⅦD 0 c	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.3	6.0	1.6	110		I
3245	ⅦD 3 e 再堆積層	硬砂岩	北上山地	6.3	6.1	1.5	70		II
3246	ⅦD 7 c 風倒木埋土	珪長質凝灰岩	北上山地	8.8	6.4	1.5	120		III
3247	ⅦD 7 f 再堆積層	両輝石安山石	岩手火山	7.4	6.3	2.1	90		I
3248	ⅦD 8 a 黒色土	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.7	4.9	1.4	65		I
3249	ⅦD 0 a	硬砂岩	北上山地	8.4	7.4	2.4	160		I
3250	No. 2 0 トレンチ盛土	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.5	5.7	1.7	85		I
3251	ⅦD 6 b I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.1	7.4	1.7	105		I
3253	ⅦD 0 ライン	粘板岩質千枚岩	北上山地	5.0	7.4	1.3	70		II
3254	ⅦD 6 b 表土直下	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.3	6.0	1.8	110		II
3257	ⅦD 6 a 表土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.8	8.2	2.0	130		II
3258	ⅦE 5 a 黒色土	硬砂岩	北上山地	6.8	7.4	1.8	130		II
3260	ⅦE 5 b 表土直下	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.8	5.8	1.2	70		I
3261	ⅦC 3 f 暗褐色土	粘板岩質千枚岩	北上山地	5.4	6.5	1.4	55		I
3262	ⅦC 3 a 表土	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.0	6.2	2.1	120		I
3263	ⅦC 3 f 暗褐色土	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.3	5.9	1.9	100		II
3264	ⅦC 3 f 再堆積層	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.7	4.7	1.7	85		I
3265	ⅦC 4 f 暗褐色土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.1	5.9	1.7	90		I
3266	ⅦC 4 c 埋土	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.2	5.9	1.7	85		I
3268	ⅦD 9 i I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.3	4.9	1.7	80		I
3270	ⅦE 5 f 表探	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.9	5.7	1.5	50		I
3271	ⅦC 1 d 表土	表土凝灰質千枚岩	北上山地	6.6	9.0	2.0	71		II
3275	ⅦD 9 i I層	硬砂岩	北上山地	6.5	5.7	1.6	80		I
3276	ⅦD 9 h I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.8	6.5	1.7	100		II
3277	ⅦD 2 c 黒色土	硬砂岩	北上山地	6.6	5.9	1.4	90		III
3280	ⅦD 9 g I層	粘板岩質千枚岩	北上山地	8.4	6.5	2.0	180		I
3281	ⅦD 9 f I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.8	5.3	2.1	105		I
3282	ⅦD 2 c 黒色土	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.0	5.5	1.8	90		I
3285	ⅨC 0 i I層	硬砂岩	北上山地	7.9	6.9	1.6	115		I
3286	ⅨC 0 j I層	珪長質凝灰岩	北上山地	7.2	4.6	1.4	70		I
3288	ⅨD 5 f I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.5	6.0	1.4	120		I
3294	ⅨD 3 d II層	硬砂岩	北上山地	5.3	5.0	2.0	100		I
3295	ⅨD 区II層	赤色凝灰質千枚岩	北上山地	7.2	5.0	1.3	65		I

第41表 不登載石器一覽表(11)

層番号	出土地点・層位	石 質	産 地	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	分類
3296	IX D 5 g III層上面	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.4	4.4	2.0	75		I
3302	IX D 5 i II層	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.4	7.6	2.2	170		II
3303	IX D 6 j II層	珪長質凝灰岩	北上山地	5.7	5.4	2.1	85		II
3305	IX E 2 b 表土	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.3	5.8	2.3	105		I
3306	X D 3 f	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.9	4.5	1.5	70		I
3307	IX E 1 a	凝灰質千枚岩	北上山地	8.4	8.1	2.5	205		II
3308	IX E 3 a	凝灰質千枚岩	北上山地	7.5	6.0	1.4	100		I
3311	No. 2 0 トレンチ	凝灰質千枚岩	北上山地	6.5	5.0	1.3	70		I
3313	表探	チャート質千枚岩	北上山地	8.7	6.3	1.9	145		I
3314	表探	凝灰質千枚岩	北上山地	6.8	6.7	1.7	100		II
3460	VI D 7 h 表土直下	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.7	6.6	2.5	145		I
3261	VII C 5 f 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.6	7.1	1.7	60		I
3462	VII C 5 e 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.3	6.8	1.8	105		II
3463	VII C 5 g I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.8	5.3	1.7	65		I
3464	VII C 6 i II層	赤色凝灰岩質千枚岩	北上山地	4.7	8.5	1.5	100		II
3465	VII D 7 i 暗褐色土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.7	4.6	1.3	40		I
3466	VII D 3 g 表土直下	硬砂岩質千枚岩	北上山地	5.7	6.9	1.5	85		II
3467	VII D 5 i 表土直下	硬砂岩質千枚岩	北上山地	9.2	5.2	1.3	85		I
3469	VII D 2 e	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.8	5.5	2.2	115		I
3471	VII D 3 h 検出面	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.9	6.5	1.9	135		I
3472	VII D 9 g I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.4	6.4	2.0	130		I
3473	VII D 9 g I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.6	6.3	2.0	135		I
3474	VII D 9 f I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.8	7.1	2.3	150		I
3476	IX D 5 h II層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.7	6.4	2.0	150		I
3478	IX D 2 i I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.6	6.0	2.1	115		I
3479	IX D 5 h I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.2	8.3	2.0	170		II
3528	No. 1 9 トレンチ盛土	苦鉄質凝灰岩	北上山地	8.0	5.2	1.7	120		I
3529	VI D 4 h 表土直下	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	4.7	5.9	1.6	80		II
3530	VII C 3 h	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.4	4.3	1.7	85		I
3531	VI D 6 i	チャート質千枚岩	北上山地	5.6	8.6	1.7	120		II
3532	VI D 6 e 表土直下	チャート質千枚岩	北上山地	6.7	6.9	1.4	100		I
3533	VI D 9 d 表土直下	珪長凝灰岩質千枚岩	北上山地	4.8	7.1	1.3	55		II
3534	VII C 3 h 再堆積層下位	珪長凝灰岩質千枚岩	北上山地	5.0	4.3	1.4	40		I
3535	VII C 6 f	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.0	5.0	1.3	50		I
3536	VII C 3 h 再堆積層下位	粘板岩質千枚岩	北上山地	5.3	4.6	1.5	50		I
3537	VII C 4 g 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.0	6.2	2.1	110		I
3538	VII C 4 g 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.8	5.8	1.7	120		I
3539	VII C 2 g 表探	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.6	5.5	2.0	115		I
3540	X I B 9 j I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.2	8.0	2.3	190		I
3541	VII C 6 f	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	4.6	7.0	1.2	55		II
3542	VII C 9 e I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.8	6.7	1.7	135		I
3543	VII C 3 e 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	4.7	5.8	1.4	55		II
3544	VII C 2 f 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.5	4.5	1.3	65		I
3545	VII C 5 f 再堆積層下位	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.5	8.3	1.9	120		II
3546	VII C 7 f I層下位	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.3	5.6	1.7	115		I
3547	VII C 4 f 再堆積層	珪長質細粒凝灰質	礫石西部	(3.9)	(5.3)	(1.1)	(25)		I
3548	VII C 3 f 表土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.1	5.2	1.7	80		I
3549	VII C 8 e I層下位	硬砂岩質千枚岩	北上山地	5.7	7.8	1.5	85		II
3550	VII C 4 h 再堆積層下位	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.8	7.4	2.2	100		II
3551	VII C 4 g 表土	赤色凝灰質千枚岩	北上山地	6.8	4.6	1.4	75		I
3552	VII C 6 d 表探	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.3	5.6	1.7	95		I
3553	VII C 6 d 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.4	5.3	1.4	65		I
3554	VII C 0 g	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.7	5.5	1.3	70		II
3555	VII C 6 g 表探	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.2	5.3	1.2	80		I
3556	VII C 6 h 表土直下	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.5	8.1	2.1	130		II
3557	VII C 5 f II層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.1	8.0	1.7	110		II
3558	VII C 0 c	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.7	5.2	1.7	75		I
3559	VII C 6 i 表土	チャート質千枚岩	北上山地	5.0	5.0	1.2	50		II
3560	VII C 1 g 表土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.5	6.0	2.0	120		I
3561	VII C 4 f 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.0	6.0	1.9	110		I
3562	VII C 6 a I層	赤色凝灰岩質千枚岩	北上山地	7.2	7.0	2.0	145		I

第42表 不登載石器一覧表(12)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
3563	VII C 4 f 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.8	6.0	1.4	80		I
3564	VII C 6 c 表土直下	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.0	6.5	2.2	150		I
3565	VII C 4 f 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.4	6.0	1.8	130		I
3566	VII C 7 i	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.0	7.2	1.6	140		I
3567	VII D 1 d 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.5	5.2	1.5	60		II
3568	VII D 8 d II層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.3	6.0	1.7	120		I
3569	VII D 7 c II層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.8	6.0	1.3	100		I
3570	VII D 1 d 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.2	6.1	1.3	90		I
3571	VII D 0 c	珪長凝灰質千枚岩	北上山地	4.9	7.2	2.2	115		II
3572	VII D 7 f 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.5	5.2	0.8	25		I
3573	VII D 2 g	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.2	8.2	1.8	125		II
3574	VII D 7 i	粘板岩質千枚岩	北上山地	7.7	6.3	1.3	95		I
3575	VII D 8 a	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.5	6.2	1.2	110		I
3576	VII E 7 j 表土	両輝石安山岩	岩手山	5.3	6.1	1.3	60		II
3577	VII E 5 a 黒色土直上	赤色凝灰質千枚岩	北上山地	4.6	6.5	1.1	55		II
3578	VIII C 1 j 表土	硬砂岩質千枚岩	北上山地	5.0	8.1	1.8	100		II
3579	VIII C 2 h 褐色土上位	赤色凝灰質千枚岩	北上山地	5.2	6.7	1.2	55		II
3580	VIII C 3 j 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.0	6.7	1.2	60		II
3581	VIII C 3 i	緑色凝灰岩	奥羽山地	5.6	6.9	2.2	125		II
3582	VIII D 2 c 黒色土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	4.9	6.8	1.5	55		II
3583	VIII D 3 c	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.6	4.9	1.6	85		I
3584	VIII D 3 c 黒色土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	5.8	8.2	1.5	95		II
3585	VIII D 8 g II層	粘板岩質千枚岩	北上山地	6.4	7.7	1.7	85		II
3586	VIII D 1 a II層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.0	6.9	2.4	86		I
3587	VIII D 1 g II層	珪長凝灰質千枚岩	北上山地	5.1	7.3	1.6	90		II
3588	VIII D 3 c	粘板岩質千枚岩	北上山地	4.4	7.5	1.3	65		II
3589	VIII E 区	珪長質細粒凝灰岩	雫石西部	3.4	4.7	1.7	35		II
3590	IX C 0 i I層	珪長凝灰質千枚岩	北上山地	7.5	5.0	2.0	100		I
3591	IX C 0 i I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.3	5.9	1.7	80		I
3592	IX C 0 i I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.5	4.2	2.3	95		I
3593	IX D 1 i II層	珪長凝灰質千枚岩	北上山地	5.7	4.9	1.1	45		I
3594	IX D 5 c I層	珪長凝灰質千枚岩	北上山地	6.4	4.7	1.5	70		I
3595	IX D 4 b I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.6	5.0	1.4	75		I
3596	IX D 2 d I層	珪長凝灰質千枚岩	北上山地	9.2	7.0	2.0	195		I
3597	IX D 5 h I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.6	6.3	1.6	125		I
3598	IX D 2 d I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.2	7.6	1.7	135		II
3599	IX D 3 h II層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.0	5.9	2.0	140		I
3600	IX E 3 c	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	6.4	7.5	1.8	110		II
3601	IX E 4 a 表探	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.9	6.8	2.2	145		I
3603	IX D 3 f II層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	7.6	4.8	1.9	95		I
3604	IX C 0 i I層	赤色凝灰質千枚岩	北上山地	7.4	5.6	2.4	140		I
3633	VII C 7 f 再堆積層	珪長凝灰質千枚岩	北上山地	6.7	4.7	1.5	90		II

(8) 敲磨器類A群

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
1646	VII D 7 j I層	両輝石安山岩	奥羽山地	15.2	8.4	4.6	600	平滑面2面。	I a 1
1650	VII C 9 i - 3 住検出面	珪長質凝灰岩	北上山地	(7.9)	(7.3)	(4.3)	(400)		II a 1
1685	VIII C 1 h 住ベルト埋土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(7.0)	(4.9)	(1.6)	(85)		
1693	VII D 4 g I層	凝灰質千枚岩	北上山地	15.1	6.6	2.5	420		III b 3
1703	VII D 4 g I層	凝灰岩	北上山地	14.3	8.1	2.1	340	挟り有り。	III b 2
1720	VII D 4 g I層	硬砂岩	北上山地	11.5	10.6	6.3	1120	剝離無し。	II a 1
1724	VII D 4 g I層	両輝石安山岩	奥羽山地	(7.8)	(5.9)	(2.9)	(250)		II b
1739	IX D 4 g - 2 住埋土	凝灰岩	北上山地	(4.1)	(5.1)	(3.8)	(70)		I a
1760	VII C 9 i - 3 住Na 1 2	両輝石安山岩	奥羽山地	(11.0)	(4.8)	(2.0)	(110)		
1762	VII C 9 i - 2 住埋土	硬砂岩	北上山地	(11.4)	(8.1)	(2.7)	(320)	欠損著しい。	
1767	VII C 9 i 住	硬砂岩	北上山地	(7.8)	(5.8)	(2.4)	(100)		
1772	IX D 3 j 住Na 9 埋土	赤色凝灰岩	北上山地	(20.3)	(11.4)	(2.3)	(740)		III c 3
1776	IX D 4 h 住埋土	両輝石安山岩	奥羽山地	(10.1)	(5.5)	(1.8)	(140)		III b 3
2776	VII D 1 g 表土	珪長質凝灰岩	北上山地	14.4	9.0	4.2	740	剝離無し。	II a 1
2777	VII D 9 j II層黒色土	凝灰質硬砂岩	北上山地	12.3	7.8	4.3	575	平滑面1面。	I a 1

第43表 不登載石器一覽表(13)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
2778	不明	粘板岩	北上山地	18.0	5.5	4.5	670	剝離無し。	II a 1
2779	VII D 8 i II層黒色土	両輝石安山岩	奥羽山地	13.0	8.3	5.0	720		I a 1
2781	IX D 9 j I層	両輝石安山岩	奥羽山地	13.2	5.8	3.0	350		I a 2
2782	X D 0 f II層	珪長質凝灰岩	北上山地	12.4	7.5	4.5	630	剝離無し。平滑面1面。	II a 1
2786	IX D 1 i III層上位	凝灰質硬砂岩	北上山地	14.5	8.3	4.9	840		II a 1
2787	VII D 2 f 表土	珪長質凝灰岩	北上山地	9.9	6.5	4.8	390		I a 1
2788	IX D 8 j II層	輝石安山岩	奥羽山地	(8.3)	(7.2)	(3.8)	(350)		I a
2789	VII E 7 j 表土	輝石安山岩	奥羽山地	(10.2)	7.3	5.7	(640)		I a
2790	X D 9 f II層	凝灰岩	北上山地	10.2	9.0	5.7	970		I a 1
2791	IX D 5 a 再堆積層	凝灰岩	北上山地	(14.2)	7.1	6.1	(980)		I a
2792	VI D 0 g 検出面	輝石安山岩	奥羽山地	14.5	8.8	5.0	780	平滑面1面。	II a 2
2793	VIII D 9 i I層	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.8	6.5	4.1	500		II a 1
2796	VII C 0 g 表土	珪長質凝灰岩	北上山地	(7.4)	(8.0)	(3.8)	(360)	平滑面1面。+凹石。	II a
2797	VI D 7 a 表土直下	チャート粘板岩互層	北上山地	10.7	5.9	4.7	400		I a 1
2798	VII D 7 c II層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(7.6)	(5.6)	(4.1)	(260)		I a 2
2800	VII D 5 h	輝石安山岩	奥羽山地	12.5	7.0	3.8	480	平滑面1面。	I a 1
2801	IX D 1 g II層	輝石安山岩	奥羽山地	(10.7)	(7.4)	(4.3)	(450)	平滑面1面。	I a
2802	VI D 7 j	輝石安山岩	北上山地	(8.3)	(7.0)	(4.7)	(450)		I a
2803	VI D 7 i 黒色土直上	珪長質凝灰岩	北上山地	(8.9)	(7.4)	(5.0)	(390)		I a
2804	VI D 8 i 表土	輝石安山岩	北上山地	(8.3)	(6.4)	(4.2)	(220)		I b
2805	X D 0 g II層	花崗閃緑岩	北上山地	(10.3)	(5.2)	(4.9)	(320)		I a
2806	VII E 5 a 表土	半花崗岩	北上山地	15.3	8.8	5.1	760		I b 2
2807	VI D 7 a	硬砂岩	北上山地	13.6	7.7	5.1	790		I a 1
2808	IX D 5 j 表土	凝灰質硬砂岩	北上山地	10.7	6.0	6.2	900		I a 1
2809	不明	珪長質凝灰岩	北上山地	(16.5)	(7.1)	(5.6)	(885)		I a
2810	VII D 6 c 再堆積層	淡緑質凝灰岩	北上山地	17.2	6.6	4.6	740		不明
2812	X E 6 h II層	珪長質凝灰岩	北上山地	19.5	7.8	5.5	1290		II a 1
2813	VII D 1 j	珪長質凝灰岩	北上山地	19.2	9.5	5.3	1400	磨面2面。	II a 1
2814	VII D 8 c II層トレンチ	珪長質凝灰岩	北上山地	20.0	6.8	6.2	1200		I a 1
2815	VI D 0 f 表土	珪長質凝灰岩	北上山地	(6.7)	(8.0)	(3.6)	(325)		II a
2816	VII C 6 g 再堆積層	チャート	北上山地	(8.3)	(7.3)	(5.0)	(390)		I b
2817	VII E 7 b 黒色土	両輝石安山岩	岩手火山	(10.3)	(8.0)	(4.3)	(540)		I a
2819	IX D 6 f I層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(10.2)	(7.8)	(4.7)	(540)	+凹石。	I a
2820	VII D 1 g 表土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.1)	(7.4)	(3.7)	(330)		II b
2821	VIII D 0 h I層	緑色凝灰岩	北上山地	12.2	8.2	6.5	1110		I a 1
2822	VII C 6 g 再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(9.0)	(5.5)	(3.3)	(270)	+凹石。	II a
2823	IX D 2 h II層	緑色凝灰岩	北上山地	(12.7)	(6.3)	(5.3)	(560)		I a
2824	VII E 6 b	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.2)	(6.1)	(4.2)	(340)		I a
2825	IX D 3 h II層	緑色凝灰岩	北上山地	14.8	8.4	5.3	915		I a 1
2827	不明	緑色凝灰岩	北上山地	(9.3)	(8.1)	(7.1)	(760)		I a
2828	VII D 3 h 検出面	緑色凝灰岩	北上山地	(15.2)	(8.4)	(5.5)	(680)		I b
2829	VII D 4 i 表土直下	両輝石安山岩	岩手火山	(7.7)	(6.8)	(4.1)	(180)		I a
2830	IX D 5 h II層	赤色凝灰質角礫岩	北上山地	(11.8)	(6.4)	(4.7)	(410)		I a
2831	VII D 5 h 黒褐色土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(6.4)	(7.4)	(4.3)	(295)		I a
2832	不明	珪長質凝灰岩	北上山地	(5.3)	(9.8)	(3.1)	(210)		I a
2834	VII D 3 i 褐色土直上	凝灰質硬砂岩	北上山地	(13.0)	(8.5)	(5.3)	(880)		I a
2835	IX D 6 g II層	ホルンフェルス	北上山地	(17.3)	(8.7)	(3.3)	(810)		III a 1
2836	トレンチ盛土	半花崗岩	北上山地	15.8	8.3	4.9	960		I a 1
2837	II E 9 c 表土	珪長質凝灰岩	北上山地	18.3	7.3	5.1	910		I a 1
2838	IX D 1 j III層上面	凝灰質硬砂岩	北上山地	10.4	10.4	6.4	1160		I a 1
2841	IX D 9 h II層	硬砂岩	北上山地	12.7	7.8	4.0	670	平滑面1面。	II a 1
2842	VII C 0 b 再堆積層	珪長質凝灰質	北上山地	(10.8)	(6.5)	(5.2)	(520)	磨面2面。	I a
2844	VII E 5 a 表土直下	粘板岩	北上山地	(10.8)	(6.5)	(4.7)	(510)		II a
2845	VII D 3 g 表土直下	珪長質凝灰岩	北上山地	10.9	4.7	4.0	310	磨面2面。剝離無し。	I a 1
2846	VII C 4 g 再堆積層下位	凝灰質硬砂岩	北上山地	(6.8)	(7.7)	(3.3)	(335)		III a
2847	VII D 1 f 表土直下	輝石安山岩	北上山地	(10.5)	(6.0)	(5.6)	(450)	平滑面1面。	I a
2848	VIII C 2 h	赤色凝灰角礫岩	北上山地	13.4	7.6	4.7	730	平滑面1面。	I a 1
2849	VIII D 9 h II層	輝石安山岩	北上山地	(6.3)	(6.0)	(6.6)	(380)	平滑面1面。	I a
2850	IX D 1 j II層	軽石凝灰岩	北上山地	10.7	8.0	3.7	765		III a 1
2852	IX D 3 h II層	輝石安山岩	北上山地	14.9	9.8	7.0	1080	平滑面1面。	I a 1
2854	X D 2 i	緑色凝灰岩	北上山地	13.4	8.9	5.0	830	剝離無し。	II a 1

第44表 不登載石器一覧表(14)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
2855	X D 5 f 再堆積層	凝灰質硬灰岩	北上山地	(9.4)	(6.7)	(4.3)	(330)	平滑面 1面。	I a
2856	No. 3 トレンチ盛土	緑色凝灰岩	北上山地	(11.6)	(9.5)	(6.3)	(1000)		I a
2857	No. 2 3 トレンチ内	緑色凝灰岩	北上山地	14.2	5.6	3.2	415	剝離無し。	I a 1
2858	VII C 4 h 再堆積層	凝灰質千枚岩	北上山地	12.4	7.3	3.6	430		II a 1
2861	VIII E 8 e	凝灰質硬砂岩	北上山地	17.5	7.8	3.9	890	平滑面 1面。	II a 1
2863	IX D 3 f	輝石安山岩	北上山地	16.0	5.7	5.1	690	剝離無し。平滑面 1面。	I a 1
2864	IX D 2 i III層	緑色凝灰岩	北上山地	15.3	6.8	5.1	770	平滑面 1面。	I a 1
2865	X D 2 i	緑色凝灰岩	北上山地	17.4	6.3	4.7	925	磨面 2面。平滑面 1面。	II a 1
2866	IX D 1 e I層	凝灰質千枚岩	北上山地	12.7	8.4	5.4	780	剝離無し。	I a 1
2868	X D 6 g II層下位	凝灰質硬砂岩	北上山地	(10.1)	(9.0)	(3.7)	(650)	平滑面 1面。	III a
2870	VII C 6 g 再堆積層下位	輝石安山岩	奥羽山脈	12.5	7.4	4.6	545	平滑面 1面。	I a 1
2872	VIII D 9 f I層	硬砂岩	北上山地	13.0	6.4	4.7	550	剝離無し。	I a 1
2873	VIII E 8 c	緑色凝灰岩	北上山地	(11.8)	(5.9)	(4.7)	(485)		I a 1
2874	IX D 0 i III層	輝石安山岩	奥羽山脈	(11.3)	(7.8)	(6.4)	(960)	磨面 2面。	I a
2876	IX D 1 g I層	輝石安山岩	奥羽山脈	16.0	7.2	4.4	820	平滑面 1面。	I a 1
2878	X D 5 i III層	硬砂岩	北上山地	14.0	8.3	5.7	870	平滑面 1面。	I a 1
2879	X D 3 h	赤色凝灰質千枚岩	北上山地	11.7	7.8	5.6	760		I a 1
2880	X D 0 a I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	13.5	6.4	3.1	420	剝離無し。	II a 1
2881	VI D 2 b 褐色土上部	両輝石安山岩	奥羽山脈	(12.8)	(7.7)	(5.5)	(810)		I a
2882	VI D 8 c	緑色凝灰岩	北上山地	13.5	7.8	3.8	500		I a 1
2883	VII C 7 e 再堆積層下位	粘板岩	北上山地	(11.6)	(5.8)	(3.0)	(300)		II b 2
2884	VIII C 4 g 再堆積層下位	輝石安山岩	北上山地	(7.0)	(6.0)	(5.8)	(190)	平滑面 1面。	I a
2885	VII D 3 f II層	両輝石安山岩	奥羽山脈	(7.0)	(7.7)	(3.9)	(260)		I b
2886	VII D 7 i	両輝石安山岩	奥羽山脈	(6.7)	(7.1)	(4.0)	(195)		I a
2887	VII D 1 j	両輝石安山岩	奥羽山脈	(11.3)	(7.3)	(5.3)	(580)	平滑面 1面。	I a
2888	VII D 0 j 再堆積層上面	両輝石安山岩	奥羽山脈	(7.3)	(5.8)	(4.4)	(210)	平滑面 1面。	I a
2889	VII C 3 d 再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(14.0)	(7.6)	(5.7)	(665)	平滑面 1面。	I a 1
2890	VII D 8 b 表土直下	両輝石安山岩	奥羽山脈	15.5	6.1	4.3	620	平滑面 1面。	I a 1
2891	VII C 6 f 再堆積層下位	両輝石安山岩	奥羽山脈	(10.0)	(7.7)	(3.7)	(520)		II a 2
2893	VII D 4 i 表土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(10.7)	(5.3)	(4.0)	(285)		I a
2896	VII C 4 f 暗褐色土	緑色凝灰岩	北上山地	(10.6)	(6.7)	(5.5)	(435)	平滑面 1面。	I a
2897	VII C 3 j 整地層	緑色凝灰岩	北上山地	(12.3)	(8.6)	(4.2)	(590)		II a
2898	VIII D 8 j II層	両輝石安山岩	奥羽山脈	(9.8)	(7.7)	(5.7)	(550)	平滑面 1面。	I a
2899	VIII E 9 a	両輝石安山岩	奥羽山脈	12.0	7.0	5.1	680	平滑面 1面。	I a 1
2900	IX D 0 i	アルコース砂岩	北上山地	11.8	7.3	4.8	555		I a 1
2901	IX D 8 g II層	凝灰質硬砂岩	北上山地	11.0	7.8	3.7	475		II a 1
2902	IX D 8 g II層	両輝石安山岩	奥羽山脈	13.3	7.2	6.7	890	平滑面 1面。	I a 1
2903	IX D 1 h II層	両輝石安山岩	奥羽山脈	20.5	10.8	6.6	1900	平滑面 1面。	I a 1
2904	IX D 0 i	凝灰質硬砂岩	北上山地	(11.7)	(9.0)	(6.5)	(780)		I a
2905	IX D 5 g II層	凝灰質硬砂岩	北上山地	15.3	10.2	7.1	1480	剝離無し。	I a 1
2906	IX D 9 g II層	両輝石安山岩	奥羽山脈	(14.5)	(6.3)	(5.7)	(750)	平滑面 2面。+凹石。	I a 1
2907	IX D 7 f I層	硬砂岩	北上山地	9.0	6.6	3.6	300		I a 1
2908	IX D 0 g	硬砂岩	北上山地	6.7	7.8	4.6	305	剝離無し。	I a 1
2909	IX D 0 i	アルコース砂岩	北上山地	10.3	6.6	5.9	460		I b 1
2910	IX E 3 a II層	凝灰岩	北上山地	14.3	4.2	4.6	400		I a 1
2911	IX E 3 a II層	凝灰岩	北上山地	14.2	5.7	3.1	430	剝離無し。	II a 1
2912	IX E 4 a	両輝石安山岩	奥羽山脈	15.5	7.9	4.7	650	平滑面 1面。	I a 1
2913	IX E 1 c 表土	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.2	7.3	3.4	530	平滑面 1面。	III a 2
2914	X D 6 g 再堆積層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(8.7)	(8.5)	(3.2)	(410)	平滑面 1面。	II a
2915	不明	凝灰質硬砂岩	北上山地	9.7	4.7	5.3	305	剝離無し。	I a 1
2916	VI D 5 h 黒色土	両輝石安山岩	奥羽山脈	15.3	7.0	5.7	990	磨面 2面。平滑面 2面。	I a 1
2917	VII C 4 h	凝灰質硬砂岩	北上山地	(8.5)	(7.5)	(3.2)	(400)		III a
2918	VII C 3 e 再堆積層	緑簾石千枚岩	北上山地	13.7	9.2	7.0	1250	平滑面 1面。	II a 1
2919	VII C 5 i 再堆積層	凝灰質硬砂岩	北上山地	14.9	7.9	3.5	580		I a 1
2920	VII C 5 f 再堆積層下位	凝灰質硬砂岩	北上山地	16.0	7.3	3.5	520		III b 2
2922	VII D 9 d II層	緑簾石千枚岩	北上山地	16.5	6.5	3.0	450		III b 2
2923	VIII D 8 g II層	安山岩	北上山地	14.0	7.8	6.0	1020		I a 1
2924	IX D 1 i II層	両輝石安山岩	奥羽山脈	15.0	7.8	4.5	695		I a 1
2925	IX D 3 e I層	凝灰質硬砂岩	北上山地	16.5	9.4	4.5	830		I b 1
2926	IX D 9 j I層	両輝石安山岩	奥羽山脈	11.9	8.4	5.8	680		I a 1
2927	IX D 8 j I層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	9.7	6.0	3.1	230		I b 1

第45表 不登載石器一覽表(15)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
2928	IX D 8 j I 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	14.3	6.0	2.3	350		III a 1
2929	IX E 区表土	珪長質凝灰岩	北上山地	(13.5)	(6.9)	(4.7)	(750)	磨石 2 面。	I a
2931	VI D 9 b 褐色土下部	凝灰質硬砂岩	北上山地	(7.8)	(7.2)	(5.6)	(400)	平滑面 1 面。剝離無し。	I a
2932	VII C 5 h II 層	輝石安山岩	奥羽山脈	(6.9)	(5.5)	(4.0)	(215)	剝離無し。	I a
2933	IX D 5 h II 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(7.4)	(6.4)	(3.7)	(250)	平滑面 1 面。	II a
2934	IX D 8 j I 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(13.7)	(8.9)	(5.4)	(970)	平滑面 1 面。	I a
2935	IX D 9 i I 層	珪長質凝灰岩	北上山地	10.7	8.0	5.3	570	剝離無し。	I a 1
2936	IV D 2 d	両輝石安山岩	奥羽山脈	(12.6)	(6.4)	(2.3)	(250)	+磨石+凹石。	
2953	VII C 6 h I 層	輝石安山岩	奥羽山脈	12.0	7.8	6.2	710		I a 1
2954	VII C 5 g 再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	14.5	5.3	2.9	330	+凹石。	II a 1
2959	IX D 2 h II 層	珪長質凝灰岩	北上山地	12.6	9.1	5.8	805		II a 1
2960	IX E 3 a 表土	両輝石安山岩	奥羽山脈	(10.5)	(6.3)	(2.5)	(245)		
2963	X I C 4 i II 層	両輝石安山岩	奥羽山脈	(7.5)	(8.1)	(5.7)	(400)		II a
2980	VI D 5 i I 層	緑色凝灰岩	北上山地	(8.9)	(7.4)	(2.4)	(220)	抉り有り。	II b
2981	VI D 8 c 表土直下	粘板岩	北上山地	(7.6)	(7.8)	(2.3)	(160)		III b 1
2982	VI D 8 a 表土直下	緑色凝灰岩	北上山地	14.5	9.5	3.5	510		II c 2
2983	VI D 5 i 表土直下	両輝石安山岩	奥羽山脈	(8.5)	(9.7)	(3.9)	(500)	抉り有り。	II b 2
2984	VI D 7 d 暗褐色土	両輝石安山岩	奥羽山脈	13.1	8.4	3.2	495		I b 1
2985	VII C 5 i I 層	両輝石安山岩	岩手山	18.0	8.3	2.5	450		III b 1
2986	VII C 6 d 再堆積層下位	粘板岩	北上山地	13.3	6.1	3.1	340	抉り有り。	II b 2
2987	VII C 6 f 再堆積層下位	珪長質凝灰岩	北上山地	(9.1)	(8.0)	(2.8)	(310)		III a 2
2988	VII C 4 h 再堆積層	輝石安山岩	北上山地	17.2	9.9	3.4	640		III c 2
2989	VII C 5 f 再堆積層下位	緑色凝灰岩	北上山地	15.0	7.0	2.6	450	抉り有り。	III b 2
2990	VII C 5 g 再堆積層	緑色凝灰岩	北上山地	19.0	5.7	2.7	390		II b 2
2991	VII C 3 h 再堆積層	両輝石安山岩	奥羽山脈	16.0	11.3	2.5	800		III a
2992	VII C 5 h 再堆積層下位	凝灰質硬砂岩	北上山地	15.2	7.6	1.9	335	抉り有り。	III b 2
2993	VII C 9 c I 層	流紋岩質細粒凝灰岩	磐石西部	(8.3)	(9.4)	(2.0)	(220)		III
2996	VII C 0 g 表採	両輝石安山岩	奥羽山脈	(8.8)	(8.0)	(2.5)	(290)	抉り有り。	III a
2998	VII C 5 j I 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(6.4)	(7.3)	(2.3)	(150)		II b
3000	VII C 5 g 再堆積層	緑簾石千枚岩	北上山地	13.7	5.3	1.7	160		III b 2
3001	VII C 8 h 表土	珪長質凝灰岩	北上山地	(9.1)	(7.4)	(2.5)	(215)	抉り有り。	III b
3002	VII C 5 i I 層	緑簾石千枚岩	北上山地	(7.6)	(7.3)	(2.0)	(140)	抉り有り。	
3003	VII C 4 f 再堆積層	両輝石安山岩	奥羽山脈	(12.0)	(8.7)	(2.5)	(400)		III a 2
3005	VII D 7 i	両輝石安山岩	奥羽山脈	14.0	8.0	2.8	520	抉り有り。	III a 2
3007	VII D 7 f 再堆積層	粘板岩	北上山地	(8.7)	(5.5)	(2.4)	(135)		III b 2
3008	VII D 3 g 暗褐色土	凝灰質硬砂岩	北上山地	15.0	4.6	2.4	250		III b 2
3009	VII D 5 f 再堆積層	凝灰質硬砂岩	北上山地	15.0	7.2	2.5	410		III a 1
3011	VII D 4 f 再堆積層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(4.8)	(7.3)	(2.9)	(135)		III b
3013	VII D 4 f 再堆積層	両輝石安山岩	奥羽山脈	(6.6)	(8.5)	(3.8)	(260)		II
3014	VII D 8 d II 層	輝石安山岩	北上山地	(9.4)	(6.5)	(3.2)	(280)	抉り有り。	III a 2
3015	VII D 8 i II 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	9.2	4.1	2.3	110		II b 1
3018	VII C 5 g 再堆積層下位	両輝石安山岩	奥羽山脈	(7.8)	(10.4)	(2.2)	(315)		III b
3019	VII D 4 f 再堆積層	粘板岩質千枚岩	北上山地	(14.0)	(7.1)	(2.9)	(390)		III b 2
3020	VII D 4 f 再堆積層	赤色凝灰岩質千枚岩	北上山地	17.8	7.4	2.4	490		III b 1
3022	VII D 6 a I 層	凝灰岩	北上山地	18.5	8.4	3.7	760		III a 3
3023	VII D 6 h 表土直下	凝灰岩質千枚岩	北上山地	14.6	6.5	1.9	280		III b 2
3025	VII D 9 j 表土	凝灰岩	北上山地	(15.5)	(6.0)	(1.3)	(195)		III b 2
3026	VII D 6 g II 層	両輝石安山岩	奥羽山脈	12.0	7.4	1.7	245		III c 2
3027	VII E 8 a	緑簾石片岩	北上山地	11.8	9.2	1.7	310		III c 3
3029	VII C 1 g 褐色土上面	砂質粘板岩	北上山地	(7.6)	(6.4)	(3.1)	(260)	磨面 2。	II b 2
3030	IX D 1 i III 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(13.0)	(6.4)	(2.3)	(310)	抉り有り。	III b 2
3032	IX D 4 j II 層	緑簾石片岩	北上山地	16.5	6.0	2.5	405		III b 1
3033	IX D 1 h I 層	緑簾石片岩	北上山地	15.5	6.1	2.7	340		II b 1
3034	IX D 3 j II 層	両輝石安山岩	奥羽山脈	(8.0)	(6.7)	(2.6)	(220)	抉り有り。	III b 2
3035	IX D 4 c I 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	12.7	8.0	2.1	340	抉り有り。	III a 2
3036	IX D 1 h II 層	凝灰岩	北上山地	(11.3)	(10.2)	(4.0)	(570)		II
3037	IX D 3 i II 層	緑簾石片岩	北上山地	(9.3)	(7.3)	(2.5)	(285)	抉り有り。	III b
3038	IX D 2 j I 層	緑簾石片岩	北上山地	14.7	5.2	2.4	220	抉り有り。	III b 3
3039	IX D 9 i I 層	両輝石安山岩	奥羽山脈	7.5	5.3	2.5	140		II b 1
3041	IX D 8 h 表土直下	両輝石安山岩	岩手火山	(4.9)	(5.6)	(1.7)	(60)		III b 2
3047	IX E 1 a	緑簾石片岩	北上山地	17.3	8.0	1.7	390		III c 3

第46表 不登載石器一覽表(16)

整理番号	出土地点・層位	石 質	産 地	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	分類
3050	ⅩD3fⅡ層	緑簾石片岩	北上山地	(12.5)	(8.0)	(3.5)	(540)	挟り有り。	Ⅱa
3052	ⅦC0eⅠ層	凝灰質硬砂岩	北上山地	16.8	6.7	2.7	465		Ⅲb1
3053	ⅦC2eⅠ層	凝灰質硬砂岩	北上山地	14.4	7.3	2.3	350	未使用。	
3054	ⅦD7i	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.0)	(7.0)	(2.4)	(180)	挟り有り。	Ⅲa
3055	ⅦD5i再堆積層	両輝石安山岩	奥羽山脈	(12.5)	(6.6)	(2.4)	(310)	挟り有り。	Ⅲb2
3056	ⅦD4g検出面	緑簾石千枚岩	北上山地	12.6	9.5	3.7	530		Ⅱb2
3057	ⅦD0c	流紋岩質細粒凝灰岩	磐石西部	(6.7)	(7.1)	(2.2)	(135)		Ⅱa
3058	ⅦD8iⅡ層黒色土	緑簾石千枚岩	北上山地	(15.0)	(6.2)	(2.4)	(300)		Ⅲb3
3059	ⅦD8iⅡ層黒色土	緑簾石千枚岩	北上山地	14.4	6.6	1.1	160		Ⅲc3
3063	No.20トレンチ盛土	両輝石安山岩	奥羽山脈	(6.7)	(6.7)	(2.7)	(160)		Ⅲb
3064	ⅤC9gⅠ層	緑色凝灰岩	北上山地	(5.7)	(6.4)	(4.0)	(160)		Ⅱa
3065	ⅤC9gⅠ層	緑色凝灰岩	北上山地	(10.4)	(6.4)	(3.6)	(350)		Ⅰa
3067	ⅦD0h再堆積層	凝灰質硬砂岩	北上山地	18.2	8.5	4.9	1020		Ⅰa2
3069	ⅦD8c表土直下	凝灰質硬千枚岩	北上山地	(13.9)	(5.7)	(3.2)	(390)		Ⅱa
3070	ⅦC7e	珪長質凝灰岩	北上山地	(8.9)	(5.6)	(5.0)	(280)	平滑面1面。	Ⅰa
3071	ⅦC6f再堆積層下位	凝灰質硬砂岩	北上山地	12.5	9.3	2.7	525		Ⅲa1
3073	ⅦC6g再堆積層下位	凝灰岩質千枚岩	北上山地	(5.0)	(5.1)	(3.3)	(120)		
3074	ⅦC4iⅡ層	輝石安山岩	北上山地	14.2	7.1	2.7	350		Ⅲb2
3075	ⅦC4g再堆積層	輝石安山岩	北上山地	(8.9)	(6.8)	(3.6)	(400)	平滑面1面。	Ⅰa
3077	ⅦD6gⅡ層	花崗閃緑岩	北上山地	13.0	6.7	8.4	960		Ⅰa1
3078	ⅦD1d再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(8.6)	(5.7)	(4.4)	(220)		Ⅰa
3079	ⅦD2jⅡ層	斑稜岩	北上山地	(11.0)	(7.3)	(3.8)	(400)	平滑面1面。	Ⅰa
3081	ⅦD4f再堆積層	輝石安山岩	北上山地	(7.8)	(7.0)	(4.9)	(320)		Ⅱa
3086	ⅦC0jⅠ層	珪長質凝灰岩	北上山地	(10.4)	(11.1)	(3.5)	(620)		Ⅲa
3087	ⅦD0jⅠ層	輝石安山岩	北上山地	(7.1)	(7.2)	(4.1)	(280)		Ⅰa
3088	ⅦD5g表土直下	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.3	9.2	6.8	1040		Ⅰa1
3089	ⅦC8jⅠ層	緑色凝灰岩	北上山地	13.9	8.4	3.7	735		Ⅲa1
3090	ⅦC3e再堆積層	流紋岩	北上山地	(16.5)	(6.0)	(3.5)	(540)	平滑面1面。	Ⅱa
3091	ⅦC5g	緑色凝灰岩	北上山地	(11.0)	(7.6)	(2.9)	(410)		
3092	ⅦC6f再堆積層下位	輝石安山岩	北上山地	(12.2)	(9.0)	(2.8)	(460)	平滑面1面。	Ⅲa
3093	ⅦD1fⅠ層	緑色凝灰岩	北上山地	13.1	5.7	3.5	370		Ⅱa1
3094	ⅦD0c再堆積層	凝灰岩質千枚岩	北上山地	(11.5)	(6.5)	(3.9)	(450)		Ⅰa
3095	ⅦD2g	凝灰岩質千枚岩	北上山地	(6.1)	(7.5)	(5.1)	(250)		Ⅰa
3096	ⅦD3h表土	緑色凝灰岩	北上山地	13.2	9.0	5.5	930		Ⅰa1
3098	ⅦD7i	凝灰質硬砂岩	北上山地	16.5	6.2	4.1	575	平滑面1面。	Ⅰa1
3099	ⅦE9bⅠ層	凝灰岩質千枚岩	北上山地	17.0	5.2	5.6	690	剝離無し。	Ⅰa1
3100	ⅦE4a暗褐色土	緑色凝灰岩	北上山地	13.9	6.0	5.6	745	平滑面1面。	Ⅰa1
3101	ⅠKD9iⅠ層	緑色凝灰岩	北上山地	15.2	6.8	3.9	570	平滑面1面。	Ⅰa1
3102	ⅦD7iⅠ層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(12.8)	(5.8)	(5.6)	(610)		Ⅰa1
3103	ⅦD7iⅠ層	輝石安山岩	北上山地	(6.5)	(5.9)	(3.7)	(180)	平滑面1面。	Ⅰa
3104	ⅩD1g	凝灰岩質千枚岩	北上山地	19.8	6.0	3.5	550		Ⅰb1
3106	No.17トレンチ盛土	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.3	5.7	3.7	425		Ⅱa2
3108	ⅠKD4iⅠ層	珪長質凝灰岩	北上山地	(11.4)	(8.6)	(6.7)	(580)	平滑面1面。	Ⅰa1
3109	ⅠKD2cⅠ層	アルコース砂岩	北上山地	(14.9)	(6.9)	(4.3)	(600)		Ⅱb
3110	ⅠKD2hⅢ層	輝石安山岩	北上山地	12.8	6.7	5.3	575	平滑面1面。	Ⅰa1
3111	ⅠKD9iⅡ層	緑色凝灰岩	北上山地	(6.5)	(4.9)	(5.2)	(180)		Ⅰa
3112	ⅠKD4gⅡ層	緑色凝灰岩	磐石西部	17.5	7.6	3.3	650	平滑面1面。	Ⅱa1
3113	ⅠKD6cⅠ層	輝石安山岩	北上山地	17.7	7.1	5.5	940	層面2面。平滑面1面。	Ⅰa1
3116	ⅠKD7iⅠ層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(13.3)	(7.4)	(7.3)	(660)	剝離無し。平滑面1面。	Ⅰa1
3117	ⅠKD4fⅡ層	緑色凝灰岩	磐石西部	16.5	8.0	3.3	690		Ⅱa2
3118	ⅠKD8fⅡ層	半花崗岩	北上山地	(13.0)	(7.1)	(5.9)	(730)		Ⅰa
3119	ⅠKD0j	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.6)	(7.7)	(3.7)	(450)		Ⅰa
3120	ⅠKD8gⅡ層	凝灰岩	北上山地	14.3	8.3	5.8	860		Ⅰa1
3122	ⅠKE3c	凝灰質硬砂岩	北上山地	12.7	6.6	3.7	500	平滑面1面。	Ⅰa2
3123	ⅠKE3aⅡ層	アルコース砂岩	北上山地	(9.5)	(5.6)	(5.5)	(470)		Ⅰa
3124	ⅠKE6a表土	両輝石安山岩	奥羽山脈	(8.1)	(7.1)	(5.3)	(505)	平滑面1面。	Ⅰa
3126	No.15トレンチ盛土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(12.8)	(6.8)	(6.0)	(830)		Ⅰa
3127	不明	凝灰質硬砂岩	北上山地	8.4	8.8	6.4	1060		Ⅰa1
3128	No.4	チャート	北上山地	11.9	7.8	8.5	980	平滑面1面。	Ⅰa1
3129	ⅦD6b斜面トレンチ	ホルンフェルス粘板	北上山地	(17.8)	(12.0)	(3.3)	(790)		Ⅲc3
3358	ⅤC0gⅠ層	緑色凝灰岩	北上山地	(15.3)	(6.5)	(5.5)	(680)		Ⅰa

第47表 不登載石器一覧表(17)

発掘番号	出土地点・層位	石 質	産 地	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	分類
3359	VI C 0 j I 層	緑色凝灰岩	北上山地	(12.4)	(6.5)	(3.5)	(450)	磨面 2面。	III a
3360	VI C 3 h II 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(7.0)	(5.0)	(4.0)	(160)	磨面 1面。	I a
3361	VI C 3 h II 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	9.0	5.1	4.8	300	平滑面 1面。剝離無し。	I a 1
3362	VI D 6 i 表土直下	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	18.5	6.2	4.6	730		I a 1
3363	VI D 9 c	輝石安山岩	奥羽山脈	14.6	6.7	4.9	580		I a 1
3364	VI D 7 a 表土直下	輝石安山岩	奥羽山脈	(8.6)	(5.1)	(5.0)	(280)		I a
3365	VI C 7 j I 層	輝石安山岩	奥羽山脈	(4.4)	(6.6)	(4.8)	(230)		I a
3366	VI D 7 a 表土直下	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.5)	(7.4)	(4.7)	(430)		I a
3367	VI D 8 c 表土直下	凝灰質硬砂岩	北上山地	16.5	8.0	5.4	945		I a 1
3368	VI D 8 c 表土直下	凝灰質硬砂岩	北上山地	(10.6)	(8.0)	(4.9)	(510)		I a
3369	VI C 5 j II 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	15.2	6.1	4.7	530	平滑面 1面。	I a 1
3370	VI C 7 e 再堆積層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	(9.6)	(4.0)	(3.7)	(155)		I a
3373	VI D 8 c 表土直下	凝灰質硬砂岩	北上山地	14.9	8.6	5.0	750		I a 1
3374	VI D 2 j 表土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(13.9)	(6.0)	(3.9)	(330)		I a
3376	VI D 2 j 暗褐色土	輝石安山岩	北上山地	(4.8)	(6.3)	(3.4)	(140)	平滑面 1面。	I b
3381	VI D 8 i II 層	珪長質凝灰岩	北上山地	18.0	7.3	3.7	680		I a 1
3382	VI E 5 a 表土直下	粘板岩	北上山地	11.5	7.4	5.2	520		I a 1
3383	VI E 5 a 表土直下	輝石安山岩	北上山地	14.4	6.7	5.0	770	平滑面 1面。	I a
3384	VI E 5 a 表土	輝石安山岩	北上山地	(10.4)	(7.0)	(4.5)	(440)	平滑面 1面。	II a
3385	VI E 5 a 表土直下	閃緑岩	北上山地	13.1	7.4	4.6	820		I a 2
3386	IX D 6 c I 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	20.5	9.4	3.9	1220		II b 1
3387	IX D 3 h I 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	14.3	9.6	3.8	855		III a 1
3388	IX D 7 g I 層	珪長質凝灰岩	北上山地	(9.2)	(7.4)	(5.4)	(430)		I a
3390	IX E 2 d	赤色凝灰質チャート	北上山地	(8.5)	(6.3)	(5.5)	(400)		I a
3391	IX E 4 a II 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(7.3)	(6.8)	(5.9)	(405)		I a
3392	VI E 7 g 表土	緑色凝灰岩	北上山地	(12.8)	(8.3)	(6.8)	(670)	平滑面 1面。	I b
3393	XI D 1 e I 層	緑色凝灰岩	北上山地	13.7	7.7	9.0	600		I a 1
3395	No. 1 4 トレンチ	輝石安山岩	北上山地	(8.9)	(2.8)	(6.3)	(680)	平滑面 1面。	I a 2
3424	VI C 6 h I 層	緑簾石千枚岩	北上山地	13.4	5.2	1.9	250		III b 3
3425	VI D 9 e	緑簾石千枚岩	北上山地	14.1	7.2	2.2	315	抉り有り。	III c 3
3426	VI C 0 i I 層	両輝石安山岩	奥羽山脈	(12.4)	(10.4)	(5.0)	(950)		II c
3427	VI D 8 e 表土直下	緑簾石千枚岩	北上山地	(10.3)	(8.1)	(2.6)	(305)		
3429	VI C 0 g I 層	緑簾石千枚岩	北上山地	12.5	7.8	2.7	320		III b 3
3431	VI C 4 f 再堆積層	流紋岩質細粒凝灰岩	磐石西部	20.2	11.4	2.4	650		III b 2
3434	VI C 4 h	緑簾石千枚岩	北上山地	14.9	6.8	3.1	505	磨面 2面。	III a 2
3435	VI C 5 f 表採	流紋岩質凝灰岩	北上山地	18.9	6.4	3.3	500		II a 1
3437	VI C 区	凝灰質硬砂岩	北上山地	16.0	5.6	2.3	330	抉り有り。	III a 2
3438	VI C 7 e 再堆積層	流紋岩質細粒凝灰岩	磐石西部	(10.4)	(5.8)	(1.2)	(125)		
3439	VI D 5 f	緑簾石千枚岩	北上山地	14.7	6.7	2.5	410		III c 1
3440	VI D 7 a II 層	凝灰岩	北上山地	(16.3)	(7.0)	(2.2)	(420)	抉り有り。	III b 3
3441	VI D 1 e 表土	流紋岩質凝灰岩	北上山地	(15.5)	(10.7)	(3.8)	(990)		III c 2
3442	VI D 7 i 表土直下	緑簾石千枚岩	北上山地	12.8	10.2	2.9	600	抉り有り。	III b 3
3443	VI D 4 f 再堆積層	凝灰岩	北上山地	14.9	9.3	5.0	730		III b 3
3444	VI D 3 h	流紋岩質細粒凝灰岩	磐石西部	(10.5)	(9.0)	(1.9)	(330)		III a
3446	VI C 2 j 再堆積層	両輝石安山岩	奥羽山脈	(15.3)	(6.3)	(4.2)	(450)		
3447	VI C 3 f 暗褐色土	緑簾石千枚岩	北上山地	13.8	6.1	2.2	210	抉り有り。	III b 2
3448	IX D 1 i II 層	緑簾石千枚岩	北上山地	(6.7)	(7.3)	(2.3)	(175)	抉り有り。	III b 2
3449	VI E 区 黒色土	輝石安山岩	奥羽山脈	17.1	7.1	4.0	670		I a 2
3451	IX D 4 i	緑色片岩	北上山地西縁	(14.7)	(5.2)	(1.6)	(135)		III c
3453	IX E 2 d	輝石安山岩	奥羽山脈	(8.7)	(7.9)	(2.1)	(260)		III b
3454	IX E 区	凝灰質硬砂岩	北上山地	16.7	7.3	2.7	435	抉り有り。	III b 3
3455	No. 2 4 トレンチ 盛土	片麻岩	北上山地	14.5	7.2	2.8	570		III a 1
3456	No. 2 4 トレンチ 盛土	緑色凝灰岩	奥羽山脈	8.9	6.7	2.5	180		I b 1
3457	No. 2 5 トレンチ	凝灰質硬砂岩	北上山地	(11.3)	(6.6)	(1.9)	(245)	抉り有り。	III a
3502	IX E 9 a	凝灰質硬砂岩	北上山地	9.7	7.8	4.0	430	+凹石。	I a 1
3664	VI D 3 g 表土直下	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.3	8.6	7.9	1100		I a 1
3809	VI D 3 e	極細粒緑色凝灰岩	北上山地	(6.5)	(6.3)	(2.4)	(140)		II b
3811	VI C 0 h 表土	安山岩	北上山地	(8.3)	(5.4)	(3.4)	(185)		I a
3845	IX D 1 g I 層	両輝石安山岩	岩手山	(12.9)	(9.2)	(1.9)	(305)		I a
3846	No. 1 5 トレンチ 検出面	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.6)	(7.3)	(3.7)	(350)		III b 2
3856	VI D 0 a 表土	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	8.3	5.3	2.8	1380		II b 1

第48表 不登載石器一覧表(18)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
3862	ⅦD 0 h I 層	緑色凝灰質千枚岩	北上山地	(9.5)	(6.4)	(2.6)	(270)		Ⅲ a
3869	ⅧC 2 h 褐色土上位	輝石安山岩	奥羽山脈	(7.8)	(7.2)	(3.9)	(440)		Ⅱ a
3874	ⅠX D 1 i I 層	凝灰岩	北上山地	(5.3)	(3.7)	(1.7)	(44)		
4183	ⅤC 0 g I 層	珪長質凝灰岩	北上山地	10.9	7.7	8.8	800		I a 1
4219	ⅦC 7 f 住埋土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(5.2)	(3.1)	(1.9)	(20)		
4257	ⅠX D 2 g I 層	凝灰岩	北上山地	(7.8)	(6.7)	(6.2)	(460)		I a
4258	ⅠX D 1 e I 層	凝灰岩	北上山地	11.3	7.0	5.5	340		I a 1
4259	ⅠX D 3 h II 層	珪長質凝灰岩	北上山地	13.0	6.8	7.4	870		I a 1
4260	ⅦC 4 i 再堆積層	輝石安山岩	奥羽山脈	(7.0)	(9.5)	(1.8)	(131)		Ⅲ b
4261	ⅦC 9 g 再堆積層上位	輝石安山岩	奥羽山脈	(14.5)	(8.8)	(2.1)	(450)		Ⅲ b 2

(9) 敲磨器類 B 群

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
2937	ⅤD 4 f 再堆積層	凝灰質硬砂岩	北上山地	8.7	6.4	4.2	400	片面に磨面。ややざらつき。	I
2939	ⅦD 7 i	硬砂岩	北上山地	7.9	6.7	4.6	350	磨面はざらつき。	I
2941	ⅦD 7 a 表土直下	珪長質凝灰岩	北上山地	10.4	8.8	4.2	550		I
2942	ⅦD 3 g 暗褐色土	花崗閃緑岩	北上山地	10.5	9.1	5.5	730	磨面はざらつき。	I
2945	ⅦD 6 i 表土	両輝石安山岩	奥羽山脈	9.5	9.6	5.4	700	磨面は光沢あり。	I
2946	ⅦD 3 g 暗褐色土	輝石安山岩	北上山地	10.0	8.3	4.4	550	磨面はざらつき。	I
2949	ⅦD 7 i	硬砂岩	北上山地	(6.4)	(6.3)	(4.0)	(200)	端部に剝離を伴う敲打痕。	Ⅲ
2951	ⅦC 0 j 再堆積層上面	両輝石安山岩	岩手火山	9.6	8.0	5.4	550	側面に敲打痕。	Ⅲ
2952	ⅦE 4 a 暗褐色土	硬砂岩	北上山地	11.2	8.4	5.2	710	平坦部と側面に敲打痕。	Ⅲ
2955	ⅦC 5 i I 層下位	輝石安山岩	北上山地	9.9	7.7	6.8	800		I
2957	ⅠX D 0 g	凝灰質硬砂岩	北上山地	9.3	7.2	4.9	400		V
2961	ⅠX E 6 f I 層	珪長質凝灰岩	北上山地	8.7	8.0	5.1	510	平坦部台石様の敲打痕。	Ⅲ
2966	ⅦD 0 j I 層	斑れい岩	北上山地	12.0	10.5	5.5	1120	平坦部台石様の敲打痕。	Ⅲ
2967	ⅦD 8 g 表土	硬砂岩	北上山地	10.5	8.2	3.4	630	平坦部台石様の敲打痕。	Ⅲ
2968	ⅠX E 9 a	珪長質凝灰岩	北上山地	9.0	9.6	5.0	660	敲打痕は台石様。	V
2969	ⅠX D 5 g	硬砂岩	北上山地	8.7	7.6	4.6	445	敲打痕は台石様。	Ⅲ
2972	ⅠX E 2 h II 層	両輝石安山岩	奥羽山脈	5.7	6.8	5.0	250	敲打痕は浅いが集中する。	Ⅱ
3133	ⅦD 0 c	凝灰質千枚岩	北上山地	9.5	6.7	2.1	220		Ⅱ
3188	ⅦC 3 f 再堆積層	硬砂岩	北上山地	12.7	5.7	3.3	340		Ⅱ
3399	ⅦC 5 g	輝石安山岩	北上山地	(2.8)	(7.4)	(2.5)	(75)		I
3402	ⅦC 4 f 再堆積層下位	珪長質凝灰岩	北上山地	(7.8)	7.8	6.5	(590)	全面磨面。ざらつき。	I
3405	ⅦD 9 h II 層	輝石安山岩	北上山地	(5.8)	(7.6)	(4.6)	(250)	全面磨面。ざらつき。	I
3407	ⅦE 9 a 黒色土	赤色凝灰質角礫岩	北上山地	(4.3)	(3.6)	(4.6)	(95)	磨面光沢あり。	I
3410	ⅦE 5 b 黒色土中	両輝石安山岩	岩手火山	12.4	8.2	2.2	250	磨面はやや凹む。	I
3416	ⅠX E 区	凝灰質硬砂岩	北上山地	8.9	5.7	2.9	220	磨面は光沢あり。	I
3420	ⅠX D 1 h II 層	輝石安山岩	奥羽山脈	(3.1)	(7.8)	(4.7)	(170)	磨面はざらつき。	Ⅳ
3422	ⅦD 8 b I 層	輝石安山岩	奥羽山脈	11.3	9.7	3.9	660	磨面は光沢あり。	Ⅳ
3483	ⅤC 区表土	硬砂岩	北上山地	8.0	6.0	3.5	230	片面に凹部。片面に敲打痕。	Ⅵ
3484	ⅦD 6 h 黒色土直上	硬砂岩	北上山地	10.3	8.8	4.6	540	片面に台石様の敲打痕。	Ⅲ
3485	ⅦD 0 b 表土	珪質凝灰岩質硬砂岩	北上山地	10.5	4.6	2.8	235	片面に凹部。	Ⅱ
3487	ⅦC 5 f 再堆積層下位	凝灰岩	北上山地	7.4	6.7	3.4	250	片面は凹部。片面は台石様。	Ⅵ
3488	ⅦC 4 g	緑色凝灰質硬砂岩	北上山地	10.7	7.6	3.6	390	敲打痕は台石様。	Ⅲ
3489	ⅦC 5 f 再堆積層下位	緑色凝灰質硬砂岩	北上山地	8.5	7.8	5.2	460	両面に凹部。	Ⅱ
3490	ⅦC 2 g 表土	両輝石安山岩	奥羽山脈	9.7	8.5	4.2	480	両面に凹部。	Ⅱ
3491	ⅦC 6 f 再堆積層	緑色凝灰質硬砂岩	北上山地	10.3	7.1	3.4	440	片面に凹部。	Ⅱ
3492	ⅦD 区	粘板岩質千枚岩	北上山地	12.0	3.8	2.5	190	片面に凹部。	Ⅱ
3493	ⅦD 1 f II 層	硬砂岩	北上山地	11.8	5.6	2.9	330	両面台石様の敲打痕。	Ⅲ
3497	ⅦD 3 f 再堆積層	淡緑質凝灰岩	北上山地	12.7	5.2	3.0	300	片面に凹部。	Ⅱ
3498	ⅦD 0 j I 層	凝灰質千枚岩	北上山地	11.1	5.4	1.8	220	両面に凹部。	Ⅱ
3500	ⅠX D 1 j I 層	凝灰質千枚岩	北上山地	9.6	6.5	2.7	240	片面は凹部。片面は浅い敲打痕が集中。	Ⅱ
3503	ⅠX D 0 i	両輝石安山岩	奥羽山脈	8.0	9.0	4.9	510	片面に凹部。	Ⅱ
3504	ⅠX D 0 i	凝灰質硬砂岩	北上山地	10.7	9.8	4.0	620	片面に凹部。	Ⅵ
3505	ⅠX E 3 c	凝灰質硬砂岩	北上山地	(7.3)	(5.3)	(3.1)	(110)	片面に凹部。	Ⅱ
3506	ⅠX D 1 g 再堆積層	両輝石安山岩	奥羽山脈	7.9	6.7	3.5	280	片面に凹部。片面は台石様の敲打痕。	Ⅵ
3508	ⅠX D 区	凝灰質硬砂岩	北上山地	11.2	7.5	4.0	490	両面に台石様の敲打痕。	Ⅲ
3509	ⅠX D 4 d II 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	8.5	6.5	4.7	410	両面に凹部。	Ⅱ
3510	ⅦD 1 g II 層	両輝石安山岩	奥羽山脈	8.8	7.2	4.6	380	磨面はざらつき。	Ⅶ

第49表 不登載石器一覧表(19)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
3511	No. 1 3 トレンチ盛土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(7.0)	(7.3)	(4.5)	(320)	敲打痕は浅いが集中。	II
3512	VII E 5 a	凝灰質硬砂岩	北上山地	10.2	7.2	3.1	330	敲打痕は浅いが集中。	II
3643	VII C 8 g No. 6	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.1	5.7	4.0	480	片面に、浅いが敲打痕が集中。	II
3646	VII D 8 b I 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	8.4	3.7	3.5	210	両端部に敲打痕あり。	III
3648	VII D 3 g	緑色凝灰岩	北上山地	11.7	4.7	3.4	350	側辺部。	III
3649	IX D 9 g	珪長質凝灰岩	北上山地	9.6	6.2	3.4	280	ほぼ全面に敲打痕あり。	III
3650	IX D 8 j II 層	珪長質凝灰岩	北上山地	9.5	8.4	5.4	570	平坦部両面に台石様の敲打痕あり。	III
3652	IX E 2 b 表土	硬砂岩	北上山地	12.0	5.0	4.3	380	両面に凹部。	II
3654	X D 2 i	珪長質凝灰岩	北上山地	11.7	8.1	4.7	540	台石様の敲打痕。	III
4262	VIII D 1 a II 層	珪長質凝灰岩	北上山地	(2.8)	(6.9)	(2.8)	(66)	全面に磨面あり。	I
3857	VII C 5 g 再堆積層下位	珪長質凝灰岩	北上山地	(5.5)	(7.6)	(4.7)	(300)	端部に剝離を伴う敲打痕。	III
3858	VII C 5 i 層	硬砂岩	北上山地	11.0	6.0	3.3	410	端部に敲打痕。	III
3863	VII D 5 h 検出面	安山岩	北上山地	(6.2)	(9.0)	(8.6)	(650)	端部に敲打痕。	III
1785	VII C 0 g - 3 住埋土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.6)	(7.5)	(4.8)	(420)		VI
2430	VII D 9 b 埋土	流紋岩質凝灰岩	北上山地	(6.6)	(6.0)	(1.9)	(80)		I

(10) 石皿・台石類

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
1752	X D 1 g - 2 住	凝灰質硬砂岩	北上山地	22.3	17.5	4.2	2310		
1758	VII D 0 i 住	硬砂岩	北上山地	(9.3)	(6.6)	(4.3)	(280)		
1764	VII D 9 c 住埋土	硬砂岩	北上山地	(13.1)	(5.3)	(2.0)	(140)		
1789	VII D 7 g 住埋土	珪長質凝灰岩	北上山地	(10.0)	(5.2)	5.1	(500)		
1790	X D 4 f 住埋土	凝灰岩	北上山地	(6.2)	(3.4)	(2.0)	(65)		
1792	V C 0 f 住	凝灰質砂岩	北上山地	17.5	12.3	3.8	1420	使用痕は明瞭でない。	
3315	V D 2 c II 層	珪長質凝灰岩	北上山地	(10.6)	(5.2)	(1.9)	(85)		
3316	VII D 0 h	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.8)	(4.0)	(3.1)	(150)		
3317	VII D 0 i	凝灰質硬砂岩	北上山地	(8.8)	(5.8)	(4.4)	(210)		
3318	VII C 5 g	凝灰質硬砂岩	北上山地	(13.6)	(8.4)	(6.0)	(735)		
3319	VII D 3 f II 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	17.0	4.1	6.8	580		
3320	VII D 3 f II 層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(8.0)	(7.9)	(6.4)	(480)		
3321	VII E 6 a	苦鉄質凝灰岩	北上山地	17.7	15.0	3.0	1215		
3323	VII E 9 b 表土	凝灰質硬砂岩	北上山地	4.4	5.0	3.3	80		
3325	VII D 9 c 再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	21.1	15.7	4.2	2160		
3326	VII D 0 i	輝石安山岩	北上山地	(10.3)	(9.5)	5.4	(900)		
3327	VII D 8 i	粘板岩質千枚岩	北上山地	(9.0)	(3.9)	(1.7)	(45)		
3328	VII D 9 i 黒色土直上	珪長質凝灰岩	北上山地	(8.3)	(8.1)	(3.7)	(200)		
3330	VII D 8 h 表土直下	珪長質凝灰岩	北上山地	(11.0)	(3.4)	(4.7)	(190)		
3331	VII C 4 g 再堆積層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(8.5)	(5.1)	(5.7)	(200)		
3332	VII C 6 g	輝石安山岩	奥羽山脈	(8.5)	(5.3)	(2.1)	(110)		
3333	VII D 7 d	緑色凝灰岩	北上山地	(10.7)	(5.8)	(5.6)	(635)		
3334	VII C 6 h 再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(6.7)	(2.7)	(1.8)	(35)		
3335	VII C 7 f 再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(10.7)	(11.7)	(3.2)	(630)		
3336	VII C 3 e 再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(6.7)	(5.0)	(1.6)	(50)		
3338	VII C 7 e	珪長質凝灰岩	北上山地	(8.2)	(6.3)	(3.4)	(360)		
3339	VII C 6 f 再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(10.5)	(8.0)	(5.6)	(285)		
3340	VII C 3 h 再堆積層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(11.3)	(5.8)	3.3	(150)		
3341	VII D 6 g II 層	珪長質凝灰岩	北上山地	(11.7)	(8.4)	(3.9)	(520)		
3342	VII D 3 i II 層	珪長質凝灰岩	北上山地	(16.6)	(10.4)	(5.0)	(950)		
3343	VII C 7 e	珪長質凝灰岩	北上山地	(13.5)	(4.9)	(5.0)	(370)		
3344	VII C 7 f トレンチ盛土	珪長質凝灰岩	北上山地	(10.9)	(9.0)	(4.9)	(550)		
3345	VII C 7 e 再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(13.9)	(8.7)	(3.4)	(420)		
3346	VII C 4 c 表土	苦鉄質凝灰岩	北上山地	(11.8)	(17.5)	5.0	(1600)		
3347	VII D 0 c	珪長質凝灰岩	北上山地	(11.6)	(11.8)	(3.6)	(430)		
3348	VIII D 9 h II 層	珪長質凝灰岩	北上山地	(12.9)	(4.2)	(5.0)	(220)		
3351	IX D 3 e I 層	珪長質凝灰岩	北上山地	(4.1)	(5.8)	(2.1)	(70)		
3353	VII C 9 f I 層	珪長質凝灰岩	北上山地	(20.2)	(13.3)	(8.6)	(3560)		
3355	IX E 5 a 表土	緑色凝灰岩	北上山地	(15.1)	(10.1)	4.9	(1230)		
3357	IX E 4 a I 層	珪長質凝灰岩	北上山地	(6.9)	(4.4)	(3.0)	(75)		
3670	VII D 8 c	珪長質凝灰岩	北上山地	(21.6)	(18.2)	5.6	(2390)		
3671	VII C 9 i 表探	凝灰質硬砂岩	北上山地	(21.7)	(12.7)	6.6	(2520)		

第50表 不登載石器一覧表(20)

番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
3672	ⅦC9e1層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(14.9)	(6.0)	(3.0)	(250)		
3673	ⅦC0g表土	アイサイト	奥羽山脈	(14.7)	(9.6)	(5.4)	(730)		
3674	ⅦC6e再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(8.7)	(5.7)	(8.5)	(560)		
3675	ⅦC区表採	珪長質凝灰岩	北上山地	(20.9)	(4.6)	(7.7)	(715)		
3676	ⅦD9j表土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(7.4)	(7.6)	(6.3)	(640)		
3677	ⅦD8c表土直下	珪長質凝灰岩	北上山地	(16.2)	(8.2)	3.5	(500)		
3678	ⅦC1g表土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.6)	(7.8)	(5.4)	(730)		
3679	ⅦD3hII層	花崗閃緑岩	北上山地	(12.4)	(5.9)	(1.2)	(80)		
3801	ⅦC7fI層下位	凝灰岩	北上山地	12.3	5.9	2.8	250		
3802	ⅦC7fI層下位	淡緑色凝灰岩	北上山地	9.3	6.3	2.7	145		
3804	ⅦC7fI層下位	淡緑色凝灰岩	北上山地	5.7	4.6	2.0	30		
3806	ⅦC7fI層下位	凝灰岩	北上山地	13.5	3.5	1.4	60		
3807	ⅦC7fI層下位	淡緑色凝灰岩	北上山地	5.0	4.8	1.87	25		
3876	ⅩD0gII層	輝石安山岩	奥羽山脈	(12.1)	8.5	(5.7)	(850)		
4190	ⅦD8c風倒木	珪長質凝灰岩	北上山地	28.0	7.0	7.0	1550		
4191	ⅦD6dII層	両輝石安山岩	岩手山	23.5	17.3	9.0	2170		
4192	ⅦD2f表土	珪長質凝灰岩	北上山地	20.5	15.5	4.9	2380		
4193	ⅩD2h	珪長質凝灰岩	北上山地	21.1	8.5	4.5	2380		
4204	ⅦD8c	珪長質凝灰岩	北上山地	19.5	15.3	4.8	2430		
4205	ⅦD8c	凝灰質硬砂岩	北上山地	(26.0)	(16.8)	5.0	(3760)		
4206	ⅦD8d	珪長質凝灰岩	北上山地	22.5	19.5	8.2	4950		
4207	ⅩE1a	珪長質凝灰岩	北上山地	29.0	22.0	8.5	5600		
4214	ⅦC9i住	珪長質凝灰岩	北上山地	(9.4)	(9.3)	(10.8)	(940)		
4235	ⅦD7i黒色土直上	珪長質凝灰岩	北上山地	(8.4)	(6.4)	(3.1)	(230)		
4237	ⅦC9hI層	珪長質凝灰岩	北上山地	(9.6)	(8.6)	(6.0)	(685)		
4238	ⅦC7f再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(10.7)	(6.0)	(4.8)	(440)		
4239	ⅦC9g再堆積層上位	珪長質凝灰岩	北上山地	(10.8)	(12.5)	(7.4)	(1310)		
4240	ⅦC7fI層	珪長質凝灰岩	北上山地	(15.8)	9.1	(5.4)	(900)		
4241	ⅦC7f再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(7.1)	(4.1)	(1.2)	(35)		
4242	ⅦC7f再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(6.8)	(6.2)	(2.1)	(70)		
4243	ⅦC7f再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(6.8)	(5.5)	(2.8)	(135)		
4244	ⅦE8a表土直下	粘板岩	北上山地	(7.9)	(4.8)	(3.1)	(120)		
4245	No.15トレンチ盛土	珪長質凝灰岩	北上山地	(11.4)	(6.5)	(5.3)	(510)		
4246	ⅦC7f再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(10.8)	(5.1)	(4.2)	(440)		
4247	ⅦE8a表土直下	凝灰岩	北上山地	(15.3)	9.7	(5.2)	(1160)		
4248	ⅦC5g再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(20.3)	(8.4)	(7.1)	(900)		
4249	ⅩE2d	珪長質凝灰岩	北上山地	(36.5)	(8.0)	(8.3)	(4120)		
4250	ⅦC7f再堆積層	珪長質凝灰岩	北上山地	(4.3)	(6.0)	(3.7)	(120)		
4251	ⅩD1fI層	流紋岩	奥羽山脈	(11.4)	(3.5)	(1.8)	(100)		
4252	ⅦD区表土直下	珪長質凝灰岩	北上山地	(27.5)	(11.5)	(11.0)	(3030)		
4253	ⅦC6f再堆積層	凝灰質硬砂岩	北上山地	(25.0)	(10.9)	(7.8)	(2660)		
4254	ⅦD5g表土直下	珪長質凝灰岩	北上山地	23.5	21.5	5.0	5180		
4255	ⅦD7h表土直下黒色土	凝灰質硬砂岩	北上山地	(8.5)	(6.5)	(7.8)	(870)		
4256	ⅦD7i黒色土直上	凝灰質硬砂岩	北上山地	(8.9)	(6.8)	(2.5)	(150)		
4263	ⅦC5gI層	凝灰岩	北上山地	(10.8)	(9.0)	(4.9)	(670)		
4263	ⅦC5gI層	凝灰岩	北上山地	(10.8)	(9.0)	(4.9)	(670)		
4267	ⅦC9i-4住	珪長質凝灰岩	北上山地	(16.8)	(10.6)	(8.6)	(2420)		

(11) 砥石

番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
3655	ⅤD2cII層	凝灰岩	北上山地	(6.0)	(5.5)	(1.9)	(120)		
3656	ⅦD7d	アルコース砂岩	北上山地	(11.8)	(16.8)	(8.1)	(2000)		
3657	ⅦD6e暗褐色土	淡緑色凝灰岩	雫石西部	(7.5)	(7.9)	(2.0)	(130)		
3658	ⅦD5i	淡緑色凝灰岩	雫石西部	(7.8)	(4.5)	(1.7)	(90)		
3659	ⅦD区表土	淡緑色凝灰岩	雫石西部	(7.6)	(8.0)	(7.1)	(690)		
3660	ⅦC4h	淡緑色凝灰岩	雫石西部	13.9	4.7	2.1	250		
3661	ⅦC0b再堆積層	細粒凝灰岩	雫石西部	14.0	5.8	3.5	390		
3662	ⅦC1g表土	淡緑色凝灰岩	雫石西部	(3.8)	(7.0)	(2.3)	(120)		
3663	ⅦC4g表土	細粒凝灰岩	雫石西部	(8.8)	(4.3)	(2.0)	(160)		
3665	ⅦD0a黄褐色土	淡緑色凝灰岩	雫石西部	(5.0)	(2.9)	(1.4)	(32)		

第51表 不登載石器一覽表(21)

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
3666	VIII C 3 f I層茶褐色土	細粒凝灰岩	礫石西部	(7.6)	(4.3)	(1.3)	(46)		
3667	IX D 1 h II層	細粒凝灰岩	礫石西部	(10.2)	(4.3)	(2.7)	(180)		
3668	IX E 2 b	細粒凝灰岩	礫石西部	12.3	7.7	3.5	450		
3669	XI C 6 e II層	細粒凝灰岩	礫石西部	14.0	5.6	1.5	240		

(12) 礫器

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
3873	IX E 3 c 表土	凝灰岩	北上山地	8.5	7.2	2.4	200		

(13) 石核

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
2073	VII C 3 g 再堆積層下位	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	2.9	3.5	1.2	14.81		多方向
2118	VII C 7 f 再堆積層	珪質細粒凝灰岩	礫石西部	3.3	4.0	1.3	16.76		
2697	VII D 4 g II層	珪質泥岩	礫石西部	(4.1)	(2.6)	(0.9)	(39.38)		
2701	VII E 6 a	珪質泥岩	礫石西部	(7.6)	(5.2)	(4.0)	(126.74)		
2702	VIII 2 j 再堆積層	珪質泥岩	礫石西部	(5.1)	(4.0)	(2.4)	(51.41)		
2703	X D 7 g II層	硬質泥質凝灰岩	礫石西部	(6.8)	(3.7)	(3.5)	(98.96)		
2704	No. 2 0 トレンチ盛土	硬質泥岩	礫石西部	(5.1)	(4.8)	(1.7)	(42.03)		
3800	VI D 7 i 検出面	硬質泥岩	礫石西部	7.4	6.1	5.0	235		
3810	VII D 4 h 検出面	珪質泥岩	礫石盆地	8.9	7.8	5.3	460		
3820	IX D 6 f II層	珪質泥岩	礫石盆地	7.3	5.4	4.0	185		
3825	出土地不明	珪質泥岩	礫石盆地	8.3	5.9	4.5	290		

(14) 石製品

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
3805	VII C 7 e	白石細粒凝灰岩	礫石西部	4.5	5.3	1.3	25		

(15) 半円状花崗岩質岩

整理番号	出土地点・層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類
1836	VII C 1 h 住	花崗閃緑岩	北上山地	7.0	5.1	2.5	110		
1837	VII C 0 g - 3 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	13.9	9.4	2.7	590		
1838	VII C 9 i - 3 住	花崗閃緑岩	北上山地	10.5	7.8	2.0	230		
1839	VII C 9 i - 4 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	7.4	6.9	2.5	160		
1840	VII C 0 g - 3 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	17.0	8.0	4.0	685		
1841	VII C 9 i - 3 住	花崗閃緑岩	北上山地	12.4	7.4	4.0	430		
1842	VII C 6 h 住東西ベルト	花崗閃緑岩	北上山地	6.7	6.0	2.6	150		
1843	VII C 9 i - 3 住	花崗閃緑岩	北上山地	8.7	5.3	2.6	180		
1844	VII C 7 i 住床面	花崗閃緑岩	北上山地	14.8	9.4	3.0	550		
1845	VII C 9 i - 3 住	花崗閃緑岩	北上山地	6.4	5.4	2.4	90		
1846	VII C 6 h 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	8.5	5.8	3.2	180		
1847	VII C 6 h 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	4.4	3.7	1.5	35		
1848	VII C 0 g 住	花崗閃緑岩	北上山地	2.7	1.7	1.5	15		
1849	VII C 0 g 住	花崗閃緑岩	北上山地	10.9	5.2	2.4	80		
1850	VII D 0 b 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	9.6	7.6	2.6	210		
1851	VII D 0 b - 3 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	8.2	7.4	2.0	195		
1852	VII D 6 b - 2 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	7.3	6.2	2.0	120		
1853	VII D 0 b 住埋土下位	花崗閃緑岩	北上山地	9.1	7.4	3.9	350		
1854	VII C 0 b 住埋土下位	花崗閃緑岩	北上山地	5.4	2.0	7.8	85		
1855	VII D 0 h 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	7.8	6.8	2.6	190		
1856	VII D 9 i 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	4.8	2.8	1.9	25		
1857	VII D 5 i - 3 住埋土上位	花崗閃緑岩	北上山地	8.2	7.1	3.9	300		
1858	VIII C 1 g 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	8.4	5.8	2.0	150		
1859	VIII C 2 j 住埋土	花崗閃緑岩	北上山地	8.1	7.0	2.8	210		
1860	VIII C 9 i 住	花崗閃緑岩	北上山地	9.9	5.7	2.0	170		
1861	IX D 4 g - 2 住	花崗閃緑岩	北上山地	8.3	6.5	2.4	160		
1863	IX D 1 e 住No.7	花崗閃緑岩	北上山地	9.9	6.5	2.3	230		
3711	VI C 3 g II層	花崗閃緑岩	北上山地	(8.3)	(8.9)	5.1	(460)		

第52表 不登載石器一覧表(22)

管理番号	出土地点・層位	石 質	産 地	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	分類
3712	ⅦC 6 h I 層	花崗閃緑岩	北上山地	(12.0)	(7.7)	(1.2)	(235)		
3713	ⅦC 0 f 表採	花崗閃緑岩	北上山地	(9 .3)	(7.2)	(2.6)	(210)		
3714	ⅦC 6 h I 層	花崗閃緑岩	北上山地	(9 .3)	(5.7)	(1.9)	(160)		
3750	ⅦC 7 f 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	14.4	6.7	3.0	405		
3752	ⅦC 4 i I 層	花崗閃緑岩	北上山地	14.7	6.7	3.0	405		
3753	ⅦC 5 i I 層	花崗閃緑岩	北上山地	15.7	7.2	2.6	370		
3754	ⅦC 7 e 再堆積層上位	花崗閃緑岩	北上山地	10.7	6.3	3.0	285		
3756	ⅦC 5 i I 層	花崗閃緑岩	北上山地	15.3	6.7	2.0	285		
3757	ⅦC 6 i	花崗閃緑岩	北上山地	11.8	6.5	2.7	275		
3758	ⅦC 7 g I 層下位	花崗閃緑岩	北上山地	5.6	4.1	2.3	65		
3759	ⅦC 5 f	花崗閃緑岩	北上山地	6.3	4.4	1.8	70		
3760	ⅦC 3 h 再堆積層下位	花崗閃緑岩	北上山地	6.4	4.6	1.9	90		
3761	ⅦC 7 e 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	4.0	3.8	2.3	35		
3762	ⅦC 7 f I 層	花崗閃緑岩	北上山地	6.3	4.0	2.2	80		
3763	ⅦC 7 f 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	5.7	4.1	2.3	70		
3764	ⅦC 6 g トレンチ	花崗閃緑岩	北上山地	4.1	2.3	1.8	20		
3765	ⅦC 7 e 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	5.5	3.7	1.9	60		
3766	ⅦC 5 e 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	3.8	3.9	2.3	50		
3767	ⅦC 7 f 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	3.5	1.9	1.6	20		
3768	ⅦC 5 i	花崗閃緑岩	北上山地	10.6	7.0	1.8	185		
3769	ⅦD 6 f II 層	花崗閃緑岩	北上山地	7.1	26.3	2.2	150		
3771	ⅦD 6 d 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	5.7	4.4	2.0	80		
3772	ⅦD 0 c 黄褐色土	花崗閃緑岩	北上山地	8.3	4.9	2.4	130		
3773	ⅦD 0 f 表土	花崗閃緑岩	北上山地	10.5	7.6	2.1	240		
3774	ⅦD 0 f 表土	花崗閃緑岩	北上山地	9.4	6.6	2.2	180		
3775	ⅦD 7 a II 層	花崗閃緑岩	北上山地	7.6	7.6	2.8	215		
3776	ⅦD 6 e	花崗閃緑岩	北上山地	11.2	6.4	2.8	300		
3777	ⅦD 0 c	花崗閃緑岩	北上山地	(8.3)	6.0	3.7	(210)		
3778	ⅦD 0 f 表土	花崗閃緑岩	北上山地	6.4	4.8	1.6	70		
3780	ⅦD 区	花崗閃緑岩	北上山地	13.3	6.4	3.5	430		
3781	ⅦD 7 g II 層	花崗閃緑岩	北上山地	15.5	8.5	2.1	400		
3782	ⅦD 7 a II 層	花崗閃緑岩	北上山地	12.7	7.9	3.3	470		
3783	ⅦD 7 i	花崗閃緑岩	北上山地	4.5	3.7	1.5	40		
3784	ⅦC 1 j 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	11.1	6.6	2.3	230		
3715	ⅦD 8 c II 層	花崗閃緑岩	北上山地	(10.5)	(5.7)	(1.9)	(160)		
3716	ⅦC 4 e	花崗閃緑岩	北上山地	(4.3)	(3.7)	(2.4)	(35)		
3717	ⅦC 4 e	花崗閃緑岩	北上山地	(3.0)	(2.3)	(1.8)	(15)		
3718	ⅦC 4 h 再堆積層下位	花崗閃緑岩	北上山地	12.3	5.7	2.9	250		
3719	ⅦC 7 f 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	(9.4)	(6.7)	(2.3)	(205)		
3721	ⅦC 4 g 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	(8.6)	6.5	2.7	250		
3722	ⅦC 5 h 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	(9.9)	(6.3)	3.8	(420)		
3723	ⅦC 5 h 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	8.4	7.9	3.2	330		
3724	ⅦC 5 h 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	20.5	(19.0)	(4.6)	(2950)		
3725	ⅦC 5 h I 層	花崗閃緑岩	北上山地	12.6	4.4	1.4	120		
3727	ⅦC 5 h 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	9.3	5.7	2.6	190		
3728	ⅦC 6 f 再堆積層下位	花崗閃緑岩	北上山地	10.4	6.5	2.3	250		
3729	ⅦC 5 i I 層	花崗閃緑岩	北上山地	8.0	6.8	2.0	180		
3730	ⅦC 6 g 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	10.5	5.0	2.7	185		
3731	ⅦC 6 g	花崗閃緑岩	北上山地	6.7	5.2	3.4	130		
3732	ⅦC 3 h	花崗閃緑岩	北上山地	7.1	6.4	2.5	150		
3733	ⅦC 8 h I 層	花崗閃緑岩	北上山地	11.0	4.9	2.2	170		
3734	ⅦC 4 i II 層	花崗閃緑岩	北上山地	8.6	5.0	2.6	150		
3735	ⅦC 5 d I 層	花崗閃緑岩	北上山地	6.7	5.9	1.9	100		
3736	ⅦC 区 トレンチ盛土	花崗閃緑岩	北上山地	10.4	6.4	3.7	340		
3737	ⅦC 9 i I 層	花崗閃緑岩	北上山地	10.7	5.2	1.7	160		
3738	ⅦC 5 i I 層	花崗閃緑岩	北上山地	12.8	5.7	1.7	230		
3739	ⅦC 6 h 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	10.4	5.5	1.9	190		
3740	ⅦC 5 g	花崗閃緑岩	北上山地	9.2	6.7	3.1	290		
3741	ⅦC 8 f I 層	花崗閃緑岩	北上山地	10.0	7.0	3.2	365		
3742	ⅦC 1 f I 層	花崗閃緑岩	北上山地	12.9	6.7	2.8	320		
3744	ⅦC 0 g 表土	花崗閃緑岩	北上山地	8.7	5.4	2.8	180		

第53表 不登載石器一覽表(23)

整理番号	出土地点・層位	石 質	産 地	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	分類
3746	VII C 8 d 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	8.3	6.4	3.3	230		
3747	VII C 5 g 再堆積層下位	花崗閃緑岩	北上山地	9.4	6.8	2.0	250		
3748	VII C 5 g 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	10.4	5.9	2.4	210		
3749	VII C 7 f 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	(9.7)	7.5	3.5	(340)		
3785	VIII C 2 j 再堆積層	花崗閃緑岩	北上山地	4.7	3.4	2.2	60		
3786	VIII C 2 g 表土	花崗閃緑岩	北上山地	6.1	5.8	2.8	120		
3787	VIII C 1 g 表土	花崗閃緑岩	北上山地	8.8	4.4	1.4	80		
3788	VIII D 0 h II層	花崗閃緑岩	北上山地	8.3	5.8	2.1	140		
3789	VIII D 1 a II層	花崗閃緑岩	北上山地	2.7	2.4	1.8	20		
3790	VIII E 表探	花崗閃緑岩	北上山地	7.9	6.0	1.3	100		
3791	VIII D 8 g II層	花崗閃緑岩	北上山地	8.7	6.2	2.3	180		
3792	IX D 2 h II層	花崗閃緑岩	北上山地	9.4	5.4	1.5	120		
3793	IX D 1 h II層	花崗閃緑岩	北上山地	8.6	5.0	2.5	150		
3794	IX D 2 h II層	花崗閃緑岩	北上山地	12.1	6.0	2.8	320		
3795	IX D 2 h II層	花崗閃緑岩	北上山地	7.6	6.0	2.0	150		
3796	IX D 1 e I層	花崗閃緑岩	北上山地	7.8	3.7	2.3	90		
3797	IX E 1 a	花崗閃緑岩	北上山地	8.2	4.7	2.6	130		
3798	IX E 2 b	花崗閃緑岩	北上山地	5.7	3.8	1.6	50		
3799	X D 3 h	花崗閃緑岩	北上山地	7.2	6.7	2.9	170		

(16) 溶岩

整理番号	出土地点・層位	石 質	産 地	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	分類
1817	VII D 6 g - 4 住床面	両輝石安山岩	岩手火山	(14.7)	(12.0)	(7.6)	(510)		
1818	VII D 0 h 住埋土	両輝石安山岩	岩手火山	(6.4)	(7.5)	(5.0)	(200)		
1819	VIII E 0 a 住	両輝石安山岩	岩手火山	9.0	9.2	5.7	140		
1820	IX D 3 j 住埋土	両輝石安山岩	岩手火山	8.4	9.0	5.2	290		
1821	VII C 0 g - 3 住埋土	両輝石安山岩	岩手火山	(7.5)	4.9	3.7	(80)		
1822	VII C 9 i - 3 住	両輝石安山岩	岩手火山	8.5	6.4	2.9	90		
1823	VII D 0 g 住	両輝石安山岩	岩手火山	(7.4)	(5.0)	(4.3)	(105)		
1824	VII 6 h 住埋土	両輝石安山岩	岩手火山	6.3	3.6	3.4	55		
1825	VIII E 0 a 住	両輝石安山岩	岩手火山	10.8	7.7	3.5	280		
1826	VII C 9 i - 3 住床直上	両輝石安山岩	岩手火山	(7.9)	(4.2)	(3.5)	(70)		
1827	VII C 9 i - 3 住	両輝石安山岩	岩手火山	(7.0)	(5.7)	(4.3)	(120)		
1829	VII C 9 i - 3 住	両輝石安山岩	岩手火山	4.2	5.1	0.7	15		
1830	VII C 6 h 住Q 4埋土	両輝石安山岩	岩手火山	(4.6)	(3.8)	(1.6)	(20)		
1831	VII D 5 g 住埋土	両輝石安山岩	岩手火山	(5.3)	(8.1)	(6.3)	(200)		
1832	VII D 0 g 住	両輝石安山岩	岩手火山	(3.5)	(4.0)	2.8	(15)		
1833	VII D 9 c - 2 住	両輝石安山岩	岩手火山	(3.3)	(2.6)	0.8	(50)		
3680	VII C 8 g	両輝石安山岩	岩手火山	(9.4)	(6.8)	5.6	(230)		
3681	VII C 6 f 再堆積層下位	両輝石安山岩	岩手火山	(4.6)	(4.9)	(4.5)	(60)		
3682	VII C 6 e 再堆積層下位	両輝石安山岩	岩手火山	(9.6)	(6.0)	(2.8)	(46)		
3683	VII C 7 e	両輝石安山岩	岩手火山	(5.6)	(4.5)	(1.8)	(40)		
3684	VII C 5 h I層	両輝石安山岩	岩手火山	(13.3)	(8.0)	(6.4)	(230)		
3685	VII C 5 h I層下位	両輝石安山岩	岩手火山	(9.2)	(7.6)	(3.0)	(90)		
3686	VII C 7 f 再堆積層	両輝石安山岩	岩手火山	(5.5)	(5.1)	(2.0)	(30)		
3687	VII C 7 f 再堆積層	両輝石安山岩	岩手火山	(10.8)	(9.3)	(3.0)	(180)		
3688	VII C 5 e 再堆積層	両輝石安山岩	岩手火山	(12.6)	8.6	(3.1)	(180)		
3589	VII E 9 a 黑色土	両輝石安山岩	岩手火山	(8.3)	(8.6)	(2.4)	(120)		
3690	VII D 7 i	両輝石安山岩	岩手火山	(3.8)	(5.0)	(2.8)	(2900)		
3691	VII D 4 h 検出面	両輝石安山岩	岩手火山	(3.3)	(4.4)	(1.8)	(12)		
3692	VII D 9 b 坑	両輝石安山岩	岩手火山	(5.8)	(5.5)	2.5	(50)		
3693	VII D 1 g 表土直上	両輝石安山岩	岩手火山	(5.5)	(5.3)	(2.8)	(30)		
3694	VII D 5 g 埋土	両輝石安山岩	岩手火山	(4.9)	(3.3)	(1.7)	(19)		
3695	VII D 7 i	両輝石安山岩溶岩	岩手火山	(7.3)	(8.0)	(5.0)	(280)		
3696	VII D 0 g 表土直下	両輝石安山岩	岩手火山	(10.8)	(8.5)	(5.3)	(240)		
3697	VII D 6 g II層	両輝石安山岩	岩手火山	(14.6)	(10.8)	(4.8)	(340)		
3698	IX D 2 h II層	両輝石安山岩	岩手火山	(8.2)	(6.3)	(3.7)	(140)		
3699	IX D 3 h II層	両輝石安山岩	岩手火山	(7.8)	(3.8)	(3.0)	(60)		
3700	IX D 3 h II層	両輝石安山岩	岩手火山	(10.3)	(7.9)	(5.8)	(400)		
3701	IX D 5 i III層	両輝石安山岩	岩手火山	(13.1)	(8.6)	(5.7)	(440)		

第54表 不登載石器一覽表(24)

整理 番号	出土地点・層位	石 質	産 地	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	分類
3702	IX E 1 a	両輝石安山岩	岩手火山	(4.9)	(6.0)	(4.1)	(150)		
3703	IX D 3 f II層	両輝石安山岩	岩手火山	(10.0)	(6.7)	(4.6)	(150)		
3704	IX E 1 a	両輝石安山岩	岩手火山	(8.9)	(7.2)	(3.1)	(130)		
3705	IX W 2 a 表土	両輝石安山岩	岩手火山	(7.4)	(5.4)	(3.0)	(45)		
3706	IX D 9 e II層	両輝石安山岩	岩手火山	(6.4)	(5.5)	(4.2)	(85)		
3707	X I D 1 f I層	両輝石安山岩	岩手火山	(7.8)	(5.3)	(3.3)	(90)		
3708	No. 1 5 トレンチ	両輝石安山岩	岩手火山	(9.1)	(7.3)	(3.5)	(170)		
3709	No. 4 4 トレンチ	両輝石安山岩	岩手火山	(3.9)	(4.1)	(3.0)	(30)		
3710	不明	両輝石安山岩	岩手火山	(10.3)	(7.8)	3.8	(130)		
4222	IX D 4 h 住埋土	両輝石安山岩	岩手火山	(6.0)	(4.3)	(3.8)	(65)		
4223	IX D 3 g 住	両輝石安山岩	岩手火山	(5.5)	4.5	(3.3)	(90)		
4224	IX D 3 g 住埋土	両輝石安山岩	岩手火山	(5.8)	(3.2)	(2.0)	(20)		

第55表 不登載石器一覧表(25)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	高 橋 重 實		
副 所 長	千 葉 政 男		
〔管理課〕			
管 理 課 長	澤 田 寛	嘱 託	吉 田 十 次
主 事	佐 藤 理	〃	野 崎 他 夫
〃	久保田 幸 恵		
〔調査課〕			
調 査 課 長	鈴 木 恵 治	文 化 財	金 子 昭 彦
課 長 補 佐	三 浦 謙 一	文 化 財	木 戸 口 俊 子
〃	高 橋 與 右 衛 門	專 門 調 査 員	〃
		〃	大 道 篤 史
主 任 文 化 財	菊 池 強 一	〃	阿 部 勝 則
專 門 調 査 員	渡 辺 洋 一	〃	星 雅 之
〃	工 藤 利 幸	〃	羽 柴 直 人
〃	中 川 重 紀	〃	高 木 晃 拓
〃	佐々木 清 文	〃	村 上 拓
〃	高 橋 義 介	〃	高 橋 佐 知 子
〃	中 村 英 俊	〃	杉 沢 昭 太 郎
〃	酒 井 宗 孝	〃	溜 浩 二 郎
文 化 財	千 葉 孝 雄	期 限 付	高 橋 英 樹
專 門 調 査 員	菊 池 人 見	專 門 職 員	〃
〃	伊 東 格	〃	高 佐 藤 修 一
〃	吉 田 充	〃	稻 垣 雅 宏
〃	斎 藤 邦 雄	〃	元 吉 弘 明
〃	高 橋 一 浩	〃	熊 谷 和 明
〃	鎌 田 勉	〃	佐々木 裕 司
〃	小 山 内 透	〃	千 葉 貴 子
〃	松 本 建 速	〃	沼 田 和 宏
〃	笹 平 克 子		後 藤 〃 円
〃	花 坂 政 博		
〃	佐々木 務		
〔資料課〕			
資 料 課 長	駒 嶺 高 幸		
主 任 文 化 財	高 橋 正 之		
專 門 調 査 員			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集

上八木田 I 遺跡発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

分冊 2 (住居跡以外の遺構・遺構外出土遺物・まとめ)

印刷 平成 7 年 3 月 25 日

発行 平成 7 年 3 月 31 日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・2

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020 盛岡市上田一丁目6-49

電話 (0196) 53-4151